

中小路遺跡・羽場遺跡

—一般県道白上横田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2012年3月

島根県益田市教育委員会

『中小路遺跡・羽場遺跡』正誤表

頁等	項目	訂正 内容	誤	正
目次	第4章・第1節	節名	これまでの調査	既往の調査歴と調査の経過
目次	第4章・第3節	頁数	145頁	143頁
目次	第4章・第6節	頁数	337頁	335頁
9頁 ・参考文献	(7)	発行年	2007	2006
	(13)	発行年	1986	1987
	(14)	発行年	1986	1988
	(15)	発行年	1987	1989
	(18)	発行年	1983	1993
77頁 ・3-38図	遺物番号 177~178			縮尺 S=1/1
83頁 ・3-44図	遺物番号 227~228			縮尺 S=1/1
129頁 ・12行目	第2節	節名	1区の結果	1区の調査

中小路遺跡・羽場遺跡

－一般県道白上横田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2012年3月

島根県益田市教育委員会



中小路遺跡遠景（上空北西から）



中小路遺跡遠景（上空南から）



中小路遺跡 6 区 平安時代の遺構面（南西から）



中小路遺跡 6 区 弥生時代の遺構面（北東から）



中小路遺跡 6 区 堪穴建物群（北西から）



中小路遺跡 6 区 SI04（南西から）

序

本報告書は、益田市教育委員会が島根県益田県土整備事務所から委託を受け、平成17年度から平成20年度にかけて現地調査を実施した県道白土横田線建設予定地内の中小路遺跡、羽場遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

平成15年度から17年度にかけて行われた農業基盤整備事業による調査の成果と合わせ、安富地区に弥生時代前期から後期にかけて大規模な集落が営まれ、奈良時代は官衙と想定される建物跡が存在するなど、長い時期にわたって広範囲に人々が居住していることがわかりました。また、弥生土器には出雲や広島、山口の系譜を持つ土器も含まれており、当時も他地域との交流が盛んであったことが明らかになりました。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、ご協力いただきました島根県益田県土整備事務所をはじめ、地元の方々並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

益田市教育委員会

教育長 三浦正樹

例　言

1. 本書は島根県益田県上整備事務所から委託を受けて、益田市教育委員会が平成17～20年度に実施した県道白土横山線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査地は以下のとおりである。

中小路遺跡　益田市安富町　　羽場遺跡　益田市安富町

3. 調査主体　益田市教育委員会

○平成17年度　現地調査

〔事　務　局〕　益田市教育委員会文化振興課

　　安達正美（課長）、河野敏弘（課長補佐）、橋本浩一（課長補佐）、
　　木原　光（課長補佐）

〔調　査　員〕　松本美樹（副主任主事）

〔調査補助員〕　樋口英行（臨時職員）

○平成18年度　現地調査

〔事　務　局〕　益田市教育委員会文化振興課

　　安達正美（課長）、河野敏弘（課長補佐）、橋本浩一（課長補佐）、
　　木原　光（課長補佐）

〔調　査　員〕　松本美樹（副主任主事）、宇津栄一（主任主事）

〔調査補助員〕　寺戸淳二、樋口英行（嘱託職員）、世良 啓（臨時職員）

○平成19年度　現地調査

〔事　務　局〕　益田市教育委員会文化振興課

　　安達正美（課長）、河野敏弘（課長補佐）、野村正樹（課長補佐）、
　　木原　光（課長補佐）

〔調　査　員〕　大野芳典（副主任主事）、宇津栄一（主任主事）

〔調査補助員〕　世良 啓（嘱託職員）

○平成20年度　益田市教育委員会文化振興課

〔事　務　局〕　益田市教育委員会文化振興課

　　木原　光（課長）、河野敏弘（課長補佐）

〔調　査　員〕　長澤和幸（主任）

〔調査補助員〕　世良 啓、池本 篤（嘱託職員）

○平成21～22年度　資料整理

〔事務局〕 益田市教育委員会文化財課

木原 光（課長）、河野敏弘（課長補佐）

〔調査員〕 長澤和幸（主任）、松本美樹（主任主事）、大野芳典（主任主事）

〔調査補助員〕 世良 啓（嘱託職員）※平成21年度のみ

○平成23年度 報告書作成

〔事務局〕 益田市教育委員会文化財課

木原 光（課長）、河野敏弘（課長補佐）、山本浩之（主査）

〔調査員〕 長澤和幸（主任）、松本美樹（主任主事）、大野芳典（主任主事）

宇津栄一（主任）

4. 調査に係る経費は島根県益田県土整備事務所が負担した。

5. 挿図中の方位は測量法による第Ⅲ系座標X軸の方向を指す。また、平面直角座標系XY軸は世界測地系による。レベルは海拔高を示す。

6. 報告書の作成にあたり、次の各氏から全面的な協力を得た。

田中義昭（鳥根考古学会会長）、原 浩平（益田市教育委員会）

7. 調査の遂行にあたって下記の方々からご指導、助言をいただいた。（所属は当時）

村上 勇（広島県立美術館）、中村唯史（島根県立三瓶自然館指導員）、田中義昭、
柳原博英（浜田市教育委員会）、徳永 隆（松江市教育委員会）、大谷晃二（島根県立矢
上高校教諭）、丹羽野 裕、柳浦俊一、林 健亮、是田 敦、宮本正保、池淵俊一、
東山信治（以上島根県教育庁文化財課及び島根県埋蔵文化財調査センター）

8. 発掘調査及び整理作業には以下の方々に参加していただいた。（順不同）

麻生時夫、巖本 知、大賀信夫、大畑元義、角田 進、梶田伸伍、篠原典子、
田中千代子、島田義昭、西坂哲郎、牧原正明、椋 悟、椋 庄藏、椋 務、椋 龍子、
吉本利道、和崎 一夫、大谷浪江、岡崎敦子、中村康恵、横山秀美、長島幸恵、藤原 稔、
柳山泰廣、三浦フサ子、岡本敬子、河井悦子、大賀賢市、村上博一、可部秀治、
岡本昌幸、田中 登、金井邦博、宮野信和、武田為久、安野和男、田原光代子、
亀山武徳、梅津 茂、深井 一雄、西坂松子、山根定雄、岡崎陽子、寺井フミ子、
島田大造、坂本文江、村上 裕、石川信義、野村紀年、吉山恭子、椋木秀奈代、
石川伸枝、松木寛子、両見美鈴、三浦竜之介、領家 刚、仁島ゆかり

9. 現地及び遺物の実測図・写真は担当調査員、調査補助員が作成した。遺物の実測の一部はいなか舎（代表 田中義昭）、島根県埋蔵文化財調査センターに委託及び依頼した。
10. 本報告書の執筆・編集は、担当調査員が行った。石器については、丹羽野 裕が執筆・編集し、鉄器については、池淵俊一が執筆・編集した。
11. 自然科学的分野の分析などを次の方々に依頼し、玉稿をいただいた。
土壤分析・樹種鑑定：渡邊正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）
地質：中村唯史（島根県立三瓶自然館）
12. 本書に掲載した遺跡出土遺物及び実測図、写真などの資料は、益田市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 本書で使用した遺構の略号は次のとおりである。
SI—堅穴建物、SB—掘立柱建物、SD—溝、SK—土坑、P—ピット、SE—井戸、
SX—その他遺構
2. 本文・挿図・写真図版中の遺物番号は一致する。

目次

巻頭カラー図版

序文

例言

目次

第1章 調査に至る経緯	1 (宇津)
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 本調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3 (宇津)
第1節 遺跡の位置と益田市域の地勢	3
第2節 益田平野と周辺部の原始・古代	4
第3章 中小路遺跡	16
第1節 既往の調査歴	16 (宇津)
第2節 調査の経過	19 (大野)
第3節 1~4区の調査結果	21 (松本)
第4節 6区の調査結果	63 (大野)
第5節 まとめ	120 (松本・大野)
第4章 羽場遺跡の発掘調査	127
第1節 これまでの調査	127 (大野)
第2節 1区の調査	129 (大野)
第3節 2区の調査	145 (長澤)
第4節 安富羽場遺跡出土の石器・石製品	316 (丹羽野)
第5節 安富羽場遺跡出土の鉄器	332 (池淵)
第6節 まとめ	337 (長澤)
第5章 自然科学分析	343
中小路遺跡・羽場遺跡発掘調査に伴う自然科学分析	343 (渡邊)
安富平野の地形と遺跡の立地	355 (中村)

挿図目次

第1-1図 益田市の位置と遺跡の位置	1	第3-32図 道構外山上遺物実測図②	61
第2-1図 周辺の遺跡	11・12	第3-33図 道構外出土遺物実測図③	62
第2-2図 平野内の遺跡	13・14	第3-34図 6区道構配置図	71・72
第2-3図 調査区配置図	15	第3-35図 6区土層断面図	73・74
第3-1図 中小路遺跡既往の調査区配置図	17	第3-36図 SI01道構及び山上遺物実測図	75
第3-2図 既往の調査における出土遺物	18	第3-37図 SI02道構及び出土遺物実測図①	76
第3-3図 1～4区道構配置図	31・32	第3-38図 SI02出土遺物実測図②	77
第3-4図 1・2区道構配置図	33・34	第3-39図 SI03道構及び山上遺物実測図①	78
第3-5図 1区北壁土層断面図	35	第3-40図 SI03出土遺物実測図②	79
第3-6図 2区北壁土層断面図	36	第3-41図 SI03山上遺物実測図③	80
第3-7図 3・4区道構配置図	37・38	第3-42図 SI04道構及び山上遺物実測図①	81
第3-8図 3区北壁土層断面図	39	第3-43図 SI04山上遺物実測図②	82
第3-9図 4区北壁土層断面図	40	第3-44図 SI05道構及び山上遺物実測図	83
第3-10図 SB1実測図	41	第3-45図 SI06道構及び出土遺物実測図	84
第3-11図 SB2実測図	42	第3-46図 道構出土遺物実測図-SK05-	85
第3-12図 SB3実測図	43	第3-47図 道構出土遺物実測図-SK05・SK06・ SK12-	86
第3-13図 SB4実測図	44	第3-48図 道構出土遺物実測図 SK07・SK11・ SK14・SK17・SK18-	87
第3-14図 SB4間連道構実測図	45	第3-49図 SB02・SB03実測図	88
第3-15図 山上遺物実測図	45	第3-50図 SB01実測図	89
第3-16図 SE1・SE2実測図	46	第3-51図 SK02実測図	90
第3-17図 SE1・SE2山上遺物実測図	47	第3-52図 道構山上遺物実測図-SX01・SK02・ SK13-	91
第3-18図 SK1・SK2・SK3実測図	48	第3-53図 SK09実測図	92
第3-19図 SK1出土遺物実測図	49	第3-54図 道構出土遺物実測図-SK09-	93
第3-20図 SK2・SK3出土遺物実測図	50	第3-55図 道構外山上遺物実測図-弥生上器①	94
第3-21図 SK4・SK8実測図	51	第3-56図 道構外出土遺物実測図-弥生上器②-	95
第3-22図 SK4・SK8山上遺物実測図	51	第3-57図 道構外山上遺物実測図 弥生上器③-	96
第3-23図 道構出土遺物実測図	52	第3-58図 道構外山上遺物実測図 弥生上器④-	97
第3-24図 SD1・SD2実測図	53	第3-59図 道構外出土遺物実測図-弥生上器⑤-	98
第3-25図 SD1・SD2出土遺物実測図	54	第3-60図 道構外出土遺物実測図-弥生土器⑥-	99
第3-26図 大溝実測図	55	第3-61図 道構外出土遺物実測図-弥生上器⑦-	100
第3-27図 大溝出土遺物実測図①	56	第3-62図 道構外出土遺物実測図-石器-	101
第3-28図 大溝出土遺物実測図②	57	第3-63図 道構外山上遺物実測図-須恵器①-	102
第3-29図 大溝出土遺物実測図③	58		
第3-30図 大溝出土遺物実測図④	59		
第3-31図 道構外出土遺物実測図①	60		

第3-64図 遺構外出土遺物実測図・須恵器②- ······	103
第3-65図 遺構外出土遺物実測図・須恵器③- ······	104
第3-66図 遺構外出土遺物実測図・須恵器④- ······	105
第3-67図 遺構外出土遺物実測図・須恵器⑤- ······	106
第3-68図 遺構外出土遺物実測図 上部器①- ······	107
第3-69図 遺構外出土遺物実測図・下部器②- ······	
陶磁器- ······	108
第4-1図 羽場遺跡既往の調査における 検出遺構 ······	132
第4-2図 1区遺構配置図 ······	133
第4-3図 SK01遺構及び出土遺物実測図 ······	134
第4-4図 SK04遺構及び出土遺物実測図 ······	135
第4-5図 出土遺物実測図・弥生土器①- ······	136
第4-6図 土上遺物実測図・弥生土器②- ······	137
第4-7図 出土遺物実測図・弥生土器③- ······	138
第4-8図 出土遺物実測図・弥生土器④- ······	139
第4-9図 土山遺物実測図・須恵器- ······	140
第4-10図 土山遺物実測図・陶磁器①- ······	141
第4-11図 出土遺物実測図・陶磁器②・その他- ······	142
第4-12図 2区調査区配置及び 遺構配置図 ······	187・188
第4-13図 2A区遺構配置図 ······	189・190
第4-14図 2A区北壁土層断面図 ······	191・192
第4-15図 北西部の遺構群平面図 ······	193
第4-16図 遺構川土遺物実測図・SK152- ······	194
第4-17図 西部の遺構群平・断面図 ······	195
第4-18図 西部の遺構群断面図 ······	196
第4-19図 遺構出土遺物実測図・SX9- ······	197
第4-20図 遺構出土遺物実測図・SK98- ······	198
第4-21図 遺構出土遺物実測図・SK102- ······	199
第4-22図 遺構出土遺物実測図・SK84・SK85- ······	200
第4-23図 遺構出土遺物実測図・SK83- ······	201
第4-24図 遺構出土遺物実測図・SK82・SK87- ······	202
第4-25図 中央部北寄りの遺構群平・断面図 ······	203
第4-26図 遺構出土遺物実測図・SX3①- ······	204
第4-27図 遺構出土遺物実測図・SX3②- ······	205
第4-28図 遺構出土遺物実測図・SX3③- ······	206
第4-29図 遺構出土遺物実測図・SX4- ······	207
第4-30図 遺構出土遺物実測図・SD4・SD5・SD6①- ······	208
第4-31図 遺構出土遺物実測図・SD6②・P314- ······	209
第4-32図 中央部北東寄りの遺構群平面図 ······	210
第4-33図 中央部北東寄りの遺構群断面図 ······	211
第4-34図 遺構出土遺物実測図・SK96- ······	212
第4-35図 遺構出土遺物実測図 -SK103・SK143・SD7- ······	213
第4-36図 遺構出土遺物実測図 -SK31・SK52・SD15- ······	214
第4-37図 中央部～南部の遺構群平・断面図① ······	215
第4-38図 中央部～南部の遺構群平・断面図② ······	216
第4-39図 中央部～南部の遺構群断面図① ······	217
第4-40図 中央部～南部の遺構群平・断面図③ ······	218
第4-41図 中央部～南部の遺構群断面図② ······	219
第4-42図 遺構出土遺物実測図・SK1・SK2・ SK3・SK66・SK75・SK77・SK78- ······	220
第4-43図 遺構出土遺物実測図・SK79・SK90- ······	221
第4-44図 遺構出土遺物実測図・SK81- ······	222
第4-45図 遺構出土遺物実測図 SK71・SK72・ SK73・SK104・SK122- ······	223
第4-46図 遺構出土遺物実測図 SD2①- ······	224
第4-47図 遺構出土遺物実測図 SD2②- ······	225
第4-48図 遺構出土遺物実測図 SD2③・ SD3・SK25- ······	226
第4-49図 北東部の遺構群平・断面図① ······	227
第4-50図 北東部の遺構群断面図① ······	228
第4-51図 北東部の遺構群断面図② ······	229
第4-52図 遺構出土遺物実測図・SX7・SX8・ SK11- ······	230
第4-53図 遺構出土遺物実測図・SK146①- ······	231
第4-54図 遺構出土遺物実測図 SK146②- ······	232

第4-55図 遺構出土遺物実測図-SK146③-	233	第4-86図 遺構出土遺物実測図-SK125③-	264
第4-56図 遺構出土遺物実測図-SK146④-	234	第4-87図 遺構山上遺物実測図 SK125④-	265
第4-57図 遺構出土遺物実測図-SK146⑤-	235	第4-88図 遺構出土遺物実測図-SK125⑥-	266
第4-58図 遺構出土遺物実測図-SK146⑥-	236	第4-89図 遺構出土遺物実測図-SK125⑦-	
第4-59図 遺構出土遺物実測図 SK146⑦-	237	SK135- ······	267
第4-60図 遺構出土遺物実測図-SK146⑧-	238	第4-90図 遺構出土遺物実測図-SK136①-	268
第4-61図 遺構山上遺物実測図 SK147①-	239	第4-91図 遺構山上遺物実測図-SK136②-	269
第4-62図 遺構出土遺物実測図-SK147②-	240	第4-92図 遺構出土遺物実測図 SK136③-	270
第4-63図 遺構出土遺物実測図-SK147③-	241	第4-93図 2B区南部の遺構群平・断面図	271
第4-64図 遺構出土遺物実測図-SK147④-	242	第4-94図 遺構山上遺物実測図 SK110①-	272
第4-65図 遺構出土遺物実測図 SK147⑤-	243	第4-95図 遺構出土遺物実測図 SK110②-	
第4-66図 遺構出土遺物実測図-SK148-	244	SK105・SK107・SK142- ······	273
第4-67図 遺構出土遺物実測図 SK30・SK65・		第4-96図 遺構山上遺物実測図-SK108-	
SK99- ······	245	SK109・SK111・SK115 ······	274
第4-68図 遺構出土遺物実測図 SD1	246	第4-97図 遺構出土遺物実測図-SK116-	275
第4-69図 遺構山上遺物実測図-SK91・SK92・		第4-98図 2C区遺構配置図	276
SK93・SD8- ······	247	第4-99図 2C区西壁土層断面図	277
第4-70図 北東部の遺構群平・断面図②	248	第4-100図 遺構出土遺物実測図-SD16①-	278
第4-71図 遺構出土遺物実測図-SK33・SK35・		第4-101図 遺構山上遺物実測図 SD16②-	279
SK36・SK59・SK60・P75・P447-		第4-102図 遺構出土遺物実測図-SD16③-	280
·····	249	第4-103図 遺構出土遺物実測図-SD11①-	281
第4-72図 遺構出土遺物実測図-SX1①-	250	第4-104図 遺構出土遺物実測図 SD11②-	282
第4-73図 遺構出土遺物実測図-SX1②-	251	第4-105図 遺構出土遺物実測図-SD11③-	283
第4-74図 2B区・2C区遺構配置図	252	第4-106図 遺構出土遺物実測図-SD11④-	284
第4-75図 2B区西壁上層断面図	253	第4-107図 遺構出土遺物実測図 SD11⑤-	285
第4-76図 2B区北部の遺構群平・断面図①	254	第4-108図 遺構出土遺物実測図-SD12①-	286
第4-77図 遺構山上遺物実測図-SK128-	255	第4-109図 遺構出土遺物実測図-SD12②-	287
第4-78図 遺構出土遺物実測図-SK129・SK131-		第4-110図 遺構出土遺物実測図-SD12③-	
SK127・P370- ······	261	SX10- ······	288
第4-84図 遺構出土遺物実測図-SK124・		第4-111図 遺構出土遺物実測図-SX11-	289
SK125①- ······	262	第4-112図 遺構山上遺物実測図	290
第4-85図 遺構出土遺物実測図-SK125②-	263	第4-113図 遺構外出土遺物実測図-弥生土器①-	291
·····		第4-114図 遺構外出土遺物実測図-弥生土器②-	292
·····		第4-115図 遺構外出土遺物実測図-弥生土器③-	293
·····		第4-116図 遺構外出土遺物実測図-須恵器①-	294
·····		第4-117図 遺構外出土遺物実測図-須恵器②-	
·····		陶磁器- ······	295

表目次

第3-1表 中小路遺跡 事業概要16	第4-2表 安富羽場遺跡出土石器一覧表327～328
第3-2表 中小路遺跡出土遺物観察表109～119	第4-3表 羽場遺跡検出の大型土坑一覧336
第3-3表 穴穴建物跡一覧121	
第3-4表 据立柱建物跡一覧122	
第4-1表 羽場遺跡出土遺物観察表296～315	

卷頭図版目次

卷頭図版1 中小路遺跡遠景(上空北西から)	卷頭図版4 中小路遺跡6区 穴穴建物群(北西から)
卷頭図版2 中小路遺跡遠景(上空南面から・遠方に 青野山を望む)	中小路遺跡6区 SI04(南西から)
卷頭図版3 中小路遺跡6区 半安面(西から)	
中小路遺跡6区 弥生面(東から)	

図版目次

図版1 昭和22年米極東空軍撮影空中写真	3区×SB4(南西から)
図版2 中小路 調査前(1～4区 南西から) 調査前(6区× 南西から)	3区SK5柱根検出(北西から)
図版3 中小路1～4区 空撮写真	図版9 中小路1～4区 SK5出土の柱根
図版4 中小路1～4区 1区完掘状況(南西から) 2区完掘状況(北東から)	SK6出土の柱根
図版5 中小路1～4区 3区完掘状況(南西から) 4区完掘状況(南西から) 1区ビット群(南西から)	図版10 中小路1～4区 3区SK6柱根検出(西から) 3区SK7柱根検出(北東から)
図版6 中小路1～4区 2区大隣(南西から) 2区SK1遺物出土状況 (南から)	3区×SK4(北から)
図版7 中小路1～4区 3区SB1(北東から) 3区SB2(南西から)	図版11 中小路1～4区 3区SK2、SK3(南から) 3区×SD1(南東から)
図版8 中小路1～4区 3区SB3(北東から)	3区×SD2(南東から)
	図版12 中小路1～4区 4区SE1縦面検出(北から) 4区SE1完掘(北から) 4区SE2完掘(東から)
	図版13 中小路1～4区 遺構出土遺物
	図版14 中小路1～4区 遺構山上遺物

	遺構外出土遺物		埴土検出状況
	井戸内出土遺物		SK05 遺物出土状況
図版15 中小路1~4区	井戸内・大型柱穴内出土 遺物	図版32 中小路6区	SK09 検出状況
	SK1出土遺物①		SK09木棺検出状況
図版16 中小路1~4区	SK1出土遺物②	図版33 中小路6区	SK09木棺内遺物検出状況
	SK2出土遺物		体験学習
図版17 中小路1~4区	SK3出土遺物		田中義昭氏指導
	ピット内出土遺物		作業状況
図版18 中小路1~4区	SD1・SD2出土遺物	図版34 中小路6区	SI01出土遺物
	大溝出土遺物①		SI02出土遺物
図版19 中小路1~4区	大溝出土遺物②	図版35 中小路6区	SI02出土遺物
	人溝出土遺物③		SI03出土遺物
図版20 中小路1~4区	大溝出土遺物④	図版36 中小路6区	SI03出土遺物
	人溝出土遺物⑤		SI03出土遺物
図版21 中小路1~4区	遺構外出土遺物①	図版37 中小路6区	SI04出土遺物
	遺構外出土遺物②	図版38 中小路6区	SI04出土遺物
図版22 中小路6区	SI01遺物検出状況		SI05・SI06出土遺物
	SB03完掘状況	図版39 中小路6区	SI02出土遺物
図版23 中小路6区	SI02遺物出土状況		上坑出土遺物
	SI02完掘状況	図版40 中小路6区	土坑出土遺物
図版24 中小路6区	SI03検出状況		土坑出土遺物
	SI03完掘状況	図版41 中小路6区	土坑出土遺物
図版25 中小路6区	SI04遺物検出状況		土坑出土遺物
	SI04完掘状況	図版42 中小路6区	包含層出土遺物(赤生土器)
図版26 中小路6区	SI05遺物検出状況		包含層出土遺物(赤生土器)
	SI05完掘状況	図版43 中小路6区	包含層出土遺物(赤生土器)
図版27 中小路6区	SI06遺物検出状況		包含層出土遺物(赤生土器)
	SI06完掘状況	図版44 中小路6区	包含層出土遺物(須恵器)
図版28 中小路6区	SB01完掘状況		包含層出土遺物(須恵器)
	甕衆土坑	図版45 中小路6区	包含層出土遺物(土師器等)
図版29 中小路6区	SK02遺構検出状況		包含層出土遺物(土師器等)
	SK02遺物検出状況	図版46 中小路6区	SK02出土遺物
	SK02完掘状況		SK09出土遺物
図版30 中小路6区	SX02遺構検出状況	図版47 羽場1区	1区全景(東から)
	SX02遺物検出状況		1区全景(南から)
	SX02完掘状況	図版48 羽場1区	SK01遺物検出状況(北から)
図版31 中小路6区	SD04完掘状況		右列遺物検出状況(北から)

図版49 羽場1区	1区土層堆積状況(南から) SK01完掘状況(北から) SK04土層堆積状況(東から)	図版64 羽場2区	SD2完掘状況 SD5完掘状況 SD4・SD6完掘状況
図版50 羽場1区	SK04完掘状況(東から) 落込み土層堆積状況(西から) 落込み遺物出土状況(西から)	図版65 羽場2区	SD15遺物出土状況 SD15完掘状況 SK1完掘状況
図版51 羽場1区	石列検出状況(西から) 石列遺物出土状況(西から) 落込み検出状況(南から)	図版66 羽場2区	SK17・SK18完掘状況 SK19完掘状況 SK23・SK24完掘状況
図版52 羽場1区	SK01出土遺物 SK01出土遺物	図版67 羽場2区	SK25遺物出土状況 SK33遺物出土状況 SK33完掘状況
図版53 羽場1区	SK04出土遺物 包含層出土遺物(弥生土器)	図版68 羽場2区	SK45完掘状況 SK51・SK52完掘状況 SK66完掘状況
図版54 羽場1区	包含層出土遺物(弥生土器) 包含層出土遺物(弥生土器)	図版69 羽場2区	SK75完掘状況 SK76完掘状況 SK78完掘状況
図版55 羽場1区	包含層出土遺物(須恵器蓋) 包含層出土遺物(須恵器)	図版70 羽場2区	SK79完掘状況 SK81完掘状況 SK81土層堆積状況
図版56 羽場1区	包含層出土遺物(陶磁器) 包含層出土遺物(陶磁器)	図版71 羽場2区	SK87完掘状況 SK87土層堆積状況 SK96土層堆積状況
図版57 羽場1区	包含層出土遺物(火鉢・上馬) 鋳造鉄斧	図版72 羽場2区	SK104完掘状況 SK152完掘状況 SK156遺物出土状況
図版58 羽場2区	2A区全景(北西から) 2A区遺構完掘状況(東から)	図版73 羽場2区	2B区全景(北から) 2B区南半遺構完掘状況(東から)
図版59 羽場2区	2A区北壁土層堆積状況 SX1遺物出土状況 SX1完掘状況	図版74 羽場2区	2B区西壁土層堆積状況 SK108完掘状況 SK110遺物出土状況
図版60 羽場2区	SX2遺物出土状況 SK147～SK148遺物出土状況 SK147遺物出土状況	図版75 羽場2区	SK125遺物出土状況 SK125土層堆積状況 SK126遺物出土状況
図版61 羽場2区	SK147～SK149完掘状況 SK147上層堆積状況 SK148土層堆積状況	図版76 羽場2区	SK128完掘状況 SK132遺物出土状況
図版62 羽場2区	SX3土層堆積状況 SX3完掘状況 SX4完掘状況		
図版63 羽場2区	SX5・SK83～SK85完掘状況① SX5・SK83～SK85完掘状況② SD2遺物出土状況		

	SK132 完掘状況	SK147 出土遺物②
図版77 羽場2区	SK136 遺物出土状況	SK148・SD1 出土遺物
	SK136 土層堆積状況	SK137・SK127 山上遺物
	SK136 完掘状況	図版88 羽場2区
図版78 羽場2区	2C区第1遺構面(奈良～平安) 完掘状況(北西から)	SK124 山上遺物
	2C区第1遺構面(奈良～平安) 完掘状況(西から)	SK125 山上遺物①
図版79 羽場2区	2C区第2遺構面(弥生) 完掘状況(北から)	SK125 出土遺物②
	2C区第2遺構面(弥生) 完掘状況(南から)	SK136 山上遺物①
図版80 羽場2区	SD11・SD12 遺物出土状況	図版90 羽場2区
	SD11・SD12 完掘状況(東から)	SK136 出土遺物②
図版81 羽場2区	SD11・SD12 完掘状況(西から)	SK110 出土遺物①
	SD16 完掘状況	SK110 山上遺物②
	SX10 完掘状況	SK107・SK108 出土遺物
図版82 羽場2区	SK98・SK102 出土遺物	図版92 羽場2区
	SX3 山上遺物	SK108 出土遺物
図版83 羽場2区	SX4・SD6 出土遺物	図版93 羽場2区
	SK96 出土遺物	SD11 出土遺物①
図版84 羽場2区	SD2 山上遺物	SD12 山上遺物
	SK25 出土遺物	図版94 羽場2区
図版85 羽場2区	SK146 山上遺物①	SX11 出土遺物
	SK146 出土遺物②	遺構出土遺物
図版86 羽場2区	SK147 出土遺物①	図版95 羽場2区
		遺構出土遺物
		図版96 羽場2区
		遺構出土遺物
		図版97 羽場2区
		遺構山上遺物
		図版98 羽場2区
		遺構出土遺物
		図版99 羽場2区
		遺構出土遺物
		図版100 羽場2区
		遺構外山上遺物(弥生上器)
		遺構外出土遺物(弥生土器)
		図版101 羽場2区
		遺構外出土遺物(須恵器)
		遺構外出土遺物(陶磁器)

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

県道白上横田線は国道9号線から石見虚空ファクトリーパークへのアクセスを目的とした一般県道である。幅員が狭く小曲線部が連続し、大型車の通行や普通車の離合が困難な状況であったため、平成11年度より島根県益田国土整備事務所が道路改良事業に着手した。

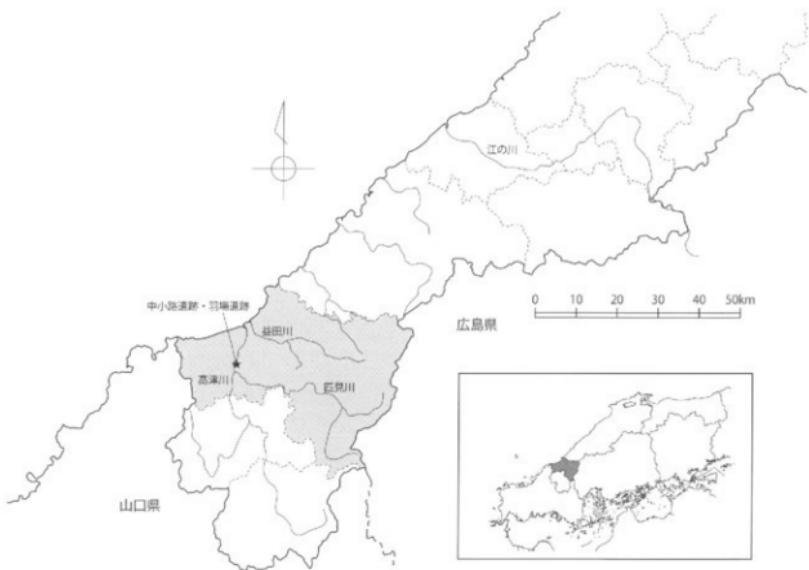
平成15年11月、島根県益田国土整備事務所から事業計画地一帯の埋蔵文化財の有無の確認依頼を受けた。「羽場遺跡（はばいせき）」の存在が既に知られていたが、この他にも遺跡が存在する可能性があることから、平成15年度国庫補助事業市内遺跡発掘調査の一環として益田市教育委員会が試掘確認調査を行った。

平成10年3月に農業基盤整備事業の一環で実施した横田・安富地区全域の分布調査を基に15箇所の調査区を設定し、9箇所で遺構あるいは遺物包含層が確認され、遺跡の広がりが確認された。新たに発見された遺跡の名称については、当該地名から「中小路遺跡（なかじょうじいせき）」とした。

その結果を踏まえ、事業主体である島根県益田国土整備事務所と協議をすすめた。

平成17年8月22日に事業主体者から埋蔵文化財発掘通知が提出され、同年9月12日付で島根県教育委員会より発掘調査の実施についての通知がされた。

以後、年次ごとに事業主体から委託を受け、益田市教育委員会が調査を実施した。



第1-1図 益田市の位置と遺跡の位置

第2節 本調査の経過

平成17年度は、中小路遺跡の1～4区の側溝部分を対象として、平成17年9月13日付で島根県教育委員会に埋蔵文化財発掘調査に係る書類を提出し、同年9月13日より開始、同年12月20日を持って現地調査を終了した。

平成18年度は、中小路遺跡1～6区を対象として、平成18年5月30日付で埋蔵文化財発掘調査に係る書類を提出し、同年6月1日より開始し、同年12月28日を持って現地調査を終了した。

平成19年度は、中小路遺跡の6区・羽場遺跡の1区を対象として、平成18年5月31日付で埋蔵文化財発掘調査に係る書類を提出し、中小路遺跡は同年6月5日に開始、平成20年1月15日に終了し、羽場遺跡は平成19年6月11日に開始し、同年8月27日に現地調査を終了した。

平成20年度は、羽場遺跡2区を調査対象として、平成20年7月7日付で埋蔵文化財発掘調査に係る書類を提出し、同年7月9日に着手し、同年12月7日に現地調査を終了した。

なお、平成17年9月に事業主体者と施工業者との間の確認不足により、対象範囲のうち約2,305m²が調査前に掘削行為を受け、島根県教育委員会から事業主体者に対し平成17年11月30日付で厳重注意の通知がだされる事態が起きた。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と益田市域の地勢

益田市は島根県の最西端に位置し、山口県と広島県に接し、北は日本海、南は中国山地に至る山陰と山陽を結ぶ交通の要衝地である。面積は733.24km²で島根県の総面積の約1割を占め、人口約5万人を擁する県西部の中核都市となっている。平均気温は15～16度、年間降雨量は1,500～1,700mm程度で、対馬暖流の影響により比較的温暖な気候であり、メロンやブドウなどの生産が盛んである。

地形の骨組は北東一南西方向に延びる中国山地とその中に刻まれた断層谷によって形づくられる。南部の広島県境は標高が1,000mを超える高起伏山地が帶状に走り、その北側には標高500m～700m、幅8km程度の中起伏山地があり、数条の構造性の崖状急斜面が並走している。さらに中起伏山地の北辺には低起伏山地・丘陵地が幅広く展開し、その北縁は日本海沿岸となっている。沿岸部には砂丘・砂州が発達し、いずれも新生の堆積とみられるが、上層部は近世のかんな流しによる砂の堆積層の可能性が高い。

高津川・匹見川とその支流、益田川とその支流が、このような横方向の地形を南北方向に分断・削制する。結果として、東西に帯状の地塊ブロックが形成され、その間隙に小盆地が点在する地勢を生み出したと見られる。

中小路遺跡・羽場遺跡が存在する安富町は益田市内の西寄りに位置し、高津川と匹見川の合流地点から下流に向かって広大な平野が広がる。平野の周囲には標高100～200mのごくなだらかな丘陵地が立ち並ぶ。

高津川は総延長81.1kmを測る河川であり、平成22年度一級河川（直轄管理区間）水質調査結果で日本一となるほどの清流が知られており、急峻な西中国山地から流れ出るために勾配の大きい急流である。平野の南で高津川は支流の匹見川と合流し、合流点の下流側で逆「コ」の字状に大きく曲流しており、平野はこの曲流の内側に形成された堆積面である。

支流の匹見川は源を益田市匹見町道川に発し、総延長52.0kmと本流に次ぐ規模を持つ河川である。本流以上に急流であり、平野の形成に匹見川による堆積作用が与えた影響は本流に劣らず大きいと思われる。

平野は上流側では旧河道とそれに伴う微高地列が明瞭に認められるのに対し下流側ではそれらの微地形が不明瞭となる。その境界は比高2～3mの小崖として明瞭に認められ、地名も「大堀」と呼ぶ。

中小路遺跡から安富王子台遺跡の一帯が周囲に比べて若干高い微高地面を形成しているが、この微高地北端部に位置している。上流側では高津川と匹見川の氾濫時に河道変遷が繰り返されたことが地形図や空中写真から読み取れる。

安富町は市内でも有数の穀倉地帯である。横川安富地区は大正9年に耕地整理が起工され、同14年に完工している。現在の行政区画では安富町、横川町、梅月町、本俣賀町、左ヶ山町の5町で「豊田地区」と呼ばれている。

第2節 益田平野と周辺部の原始・古代

[地域開拓の始まり・縄文時代]

益田平野の周縁で今日もっとも遡りうる人跡は新石器時代としての縄文時代の開始期にある。久城西遺跡から出土した尖頭器がその物証となる。隣接する堂ノ上遺跡でも同期の有茎尖頭器が発見されており、久城地区の低丘陵が初期狩獵・採集民の活動舞台であったことを示している。山間部では匹見川上流部の道川地区に旧石器時代後期（新横原遺跡）、中流部の澄川地区、匹見中央部に縄文時代早・前期の遺跡（藪屋敷田遺跡、上ノ原遺跡、山崎遺跡）がある。中期遺跡としては右ヶ坪遺跡等が存在し、この地域が狩獵・採集生活に有利な自然条件を備えていたことが推定される。注目されるのは、中期遺跡からは九州方面の縄文土器（並木式・阿高式）が発見され、後期には山陽瀬戸内の影響が認められることである。

縄文時代後半（後期・晩期）になると気候が冷涼となり、小規模な海退現象が起こる。この変化とともに東日本縄文文化の西漸の影響で石見地方全域の縄文文化が活気を帯びて来る。匹見盆地には大規模な環状配石遺構をもつ水田ノ上遺跡やヨレ遺跡等の拠点集落が営まれ、大きな繁栄を誇ったと推定される。匹見川中流域の山崎遺跡では土器埋設炉や石匂が検出されている。これは後期旧石器時代以降、中国山地を縱断する断層谷や南北方向に流れる河川の谷が主要な交通路を形成し、その交差要衝地として匹見盆地に縄文人が集住した結果と考えられる。

沿岸部にあっては、「古益田湖」中の微高地と低丘陵に狩獵・漁労を営む採集民集落が出現する。久城丘陵上の若菜台遺跡からは後期前葉の縄文土器が出土するとともに、大型の落とし穴が検出されている。益田川河口付近の平野部の沖手遺跡では後期のものと判定された丸木舟が出土している。三宅御十居跡の地にも晩期の遺跡として上井後遺跡がみられる。

益田川を遡ると、美都町仙道地区の酒屋原遺跡、都茂地区的唐干田遺跡、二川地区的本郷遺跡で後・晩期の縄文土器が検出されている。

[水田耕作の伝来と農耕集落の定着・弥生時代]

紀元前4～3世紀頃から益田平野とその周辺部に水田耕作によるイネの栽培を主とする農業が到来する。浜寄遺跡（高津町）からは弥生時代前期の水田遺構が検出された。近辺には前期後半に属する松ヶ丘遺跡があり、この一帯に外来の弥生人集団が集落を営んでいたことを推定できる。浜寄遺跡は、弥生・古墳の各時代から古代中世の遺物が相当量出土しており、高津川左岸河口部に長期にわたって盤踞した有力な集落遺跡（拠点集落）と考えられる。

また、平野中央部の沖手遺跡では少量ながら前期の弥生土器片が出土しており、ここに初期の農耕集落が存在した可能性を示している。益田市域東部の井元遺跡は沖川川左岸の後背湿地縁に立地し、杭列が発見された。出土土器には口縁内面に突唇をもつものがあり、響灘沿岸部との関連を伺うことができる。

山間部の匹見盆地ではまとまった弥生時代の遺跡群が存在している。旧石器・縄文時代に交通路となった東西方向の断層谷は、弥生文化東漸のルートとしても継承されている。水田ノ上遺跡発見の細形銅戈はそうした事情を雄弁に物語る。匹見川右岸の塚田遺跡、イセ遺跡等からも前期中葉を降らない土器が採集され、盆地全体でいち早く弥生文化の受容されたことが判明する。

【拡大する稻作と地域社会の形成】

弥生時代中・後期になると平野・盆地で遺跡が増加する。中期遺跡の多くは前期遺跡を継承する形をとるが、中期になって農耕集落が出現するところも少なくない。

益田平野東部の久城丘陵に遺跡が出現するのは、久城東遺跡で確認された円形住居址の時期からみて中期中葉以降と考えられる。丘陵西縁には専光寺脇遺跡があり、中期後半期の貼石墳丘墓が発見されており、益田川河口部一帯の集落をまとめる小首長の台頭を示すものといえる。久城丘陵上では後期以降に多くの小集落群が現れており、堂ノ上遺跡はその代表的な遺跡で、丘陵には2～3棟を一単位とする家族的集落が群集して地域集団を形成していたことを教える。

低地の沖手遺跡からは、中期後半から後期の土器が出土しており、前期に引き続き集落の営まれたことが知られる。南方の日赤敷地遺跡等も後半期に登場する低地の集落遺跡である。おそらく、弥生時代の後半期に沖手遺跡は、周辺集落群を併せた地域集団内において、拠点の性格を帶びた有力集落に成長していたと推定される。

高津川河口の浜寄遺跡も同様に地域の拠点集落として勢いを増していたと思われる。高津丘陵端にあるサガリ遺跡、廿子遺跡群は浜寄遺跡の分村集落であり、両者は一体になって地域社会を形作っていたのであろう。サガリ遺跡の大型住居址は大家族的集団の中核施設と見られるが、堂ノ上遺跡でもほぼ同規模の大型円形住居址が発見され、隣接して方形の大型住居と石垣が掘り出された。弥生時代後期の大家族的集団の構成を考えるうえでまたとない遺構群といえる。同時に、益田平野の東西に相呼応するかのように、こうした優勢な集団が姿を現していることは大いに注目されることといえる。

【前方後円墳の登場】

沖手遺跡や堂ノ上遺跡、あるいは中小路遺跡からは弥生時代終末期から古墳時代初期に属する近畿系土器が出土している。これらは前方後円墳を表象とする古墳時代の始まりを予測させる事実と見ることができる。

初期の古墳としては東部の小河川・遠田川谷頭付近の丘陵上にあって威容を誇る大型前方後円墳の大元1号墳（全長88m）がある。埴輪・葺石をもつ。三角縁神釈鏡が出土した四塚山古墳群（乙吉町）も注目される存在だが、現在は破壊・消滅している。主体部は箱形石棺であったと伝えられる。この二古墳は4世紀代の築造が考えられる。

久城丘陵縁に造営された5世紀前半のスクモ塚古墳は2段地盤成で埴輪・葺石が巡る当代有数の大型古墳として注目してきた。その墳形については、造り出し付きの大型円墳とする説が有力であったが、近年の測量調査の結果、全長約100mの前方後円墳として再認識されつつあり、その場合県下最大規模の中前期古墳となる。こうした大型の首長墓が前方後円形をとり、久城丘陵上に築造されていることは、当地域の農耕社会が明確な階級的構成をとるに至ったことを物語る。（その周辺には平成23年に調査が行われた5世紀中頃の造出し付円墳である金山古墳がある。）

先の浜寄遺跡では、古墳時代前半期の住居址と大量の土師器が出土している。また、スクモ塚古墳の東にある若葉台遺跡でも中期の小集落が発見された。こうした拠点集落や周辺集落の存在と大型古墳出現は対をなす現象と理解される。

大元1号墳—スクモ塚古墳に続く大型古墳として乙吉の丘陵先端にある小丸山古墳がある。全長52m、周堀や外堤を備えた堂々たる前方後円墳である。副葬品には銅鏡・馬具類・鉄刀・須恵器等があり、有力首長墓として遜色ない。6世紀前半の築造である。

これらの大型三古墳が益田平野東部の丘陵に代を追って造営されていることは偶然ではない。低地の冲手遺跡、丘陵上の堂ノ上遺跡等の弥生集落が引き続いでその繁栄を保ち、安定した地域農耕社会に成長してきたことが背景をなしていると考えて差し支えないであろう。

[群集墳と横穴群]

大型古墳で特徴付けられる古墳時代前半期に対して後半期、とくに6世紀後半～7世紀中頃までは多数の小型古墳が集う群集墳の時代となる。また、平野背後の丘陵地帯には横穴が群をなして造営される。

日本海に島状に小さく突き出た鵜ノ鼻台地には約50基の古墳で形成される鵜ノ鼻古墳群がある。ほとんどは円墳であるが、前方後円墳も4基ある。これらは、台地上の起伏に応じて4群に分けられる。内部主体は自然石を使った横穴式石室で、石西では比較的規模の大きな部類に属する。これまでに出土した遺物としては、須恵器が圧倒的に多く、直刀、鉄族、勾玉、ガラス小玉、耳環等があり、単純の大刀柄頭は優品として注目される。高津川支流・内田川上流にある小盆地の中央に築かれている白土古墳（白土町）は、全長8mの大規模な横穴式石室墳である。

次に、横穴群として著名な例に南・北長迫横穴群、片山横穴群、多田横穴群等がある。いずれも、6世紀末頃～7世紀後半に掘られたもので、低いドーム状の天井と丸みを帯びた玄室平面が特徴といえる。中には方形プランの家形横穴も見られる。副葬品は、長迫横穴の場合、須恵器類が圧倒的で、直刀、鉄族、耳環、玉類等がある。優品と見られるのは南長迫の一横穴から出土した金銅製の胡蝶帯である。南・北長迫横穴群は総数約60基からなる大群集墳である。墓そのものは簡単な構造であるが、副葬品の量と質は鵜ノ鼻古墳群のそれと引けを取らない。

以上のような大群集墳は平野地域に限られる。しかし、市域全体を見渡すと、益田川支流の三谷川筋に三谷古墳群（細長い玄室が特徴）があり、匹見盆地にも江田古墳群、山根古墳群が築かれている。市域東部の土田古墳はその様相から終末期古墳かと推測される。その他、津田・連田町にも軒々と横穴式石室をもつ後期古墳が知られている。

これらの後期古墳に副葬された須恵器は、市城東部の芝・中塚窯跡（西平原町）、木片子窯跡・柴ヶ迫窯跡・杉迫窯跡（津田町）等の窯元群から供給されたことが考えられる。いずれも都心津層に由来する良質の粘土層の存在が立地条件を提供している。なお、木片子窯跡からは丸瓦・平瓦が出土しており、三宅御土居跡でも単弁八葉連華文の軒丸瓦が出土した。これらは未発見の古代寺院や官衙の存在を示唆する重要な遺物といえよう。杉迫窯跡は長らく詳細不明の窯跡とされてきたが、近年造成に伴い所在地が再確認され、多数の遺物が採取されている。

[奈良・平安時代の動向]

石見空港敷地内にあった大溝遺跡では海岸砂丘背後の緩斜面に階段状に一群の建物があり、内部からは須恵器や製塩土器が出土している。また、小鍛冶遺跡が検出されていることも見逃せない。日本海沿岸に営まれた自営的な小集落と考えられる。

奈良・平安時代の中小路遺跡と対比されるのは美都町の酒屋原遺跡・下都茂原遺跡であろう。酒屋原遺跡は益田川右岸の台地上にあり、大量の須恵器と古代末～中世前半の貿易陶磁器類が出土し、周縁部からは道路状遺構や多数の柱穴群が検出されている。須恵質の硯片が少なくないことから官衙的な性格を有する遺跡と考えられる。この遺跡と益田川を挟んだ対岸の低地には下都茂原遺跡がある。低位段丘面から氾濫原に営まれた集落で、酒屋原遺跡とほぼ同時期に存続したことが推定される。出土遺物には多数の須恵器・貿易陶磁器に混じって線釉陶器があり、防長地方からの搬入品とされる。両遺跡が地域の中核的集落として広く内外と交流した事情がうかがえよう。鶴山関連遺跡と見られる大年ノ元遺跡が確かな集落として現れるのも平安時代である。

匹見盆地の長グロ遺跡では奈良末・平安初期の方形堅穴住居址が複雑な重複状態で検出されている。個々の住居址には煙道の長い造り付けの「かまど」があり、当地独特の炊飯施設として注目されている。

[戦国城下町と有力村落の形成・活性化の中世]

三宅御土居跡に関しては、1990（平成2）年以来の調査により、12世紀～16世紀末にわたる長期継続型の遺跡と判明した。このおよそ400年以上に及ぶ期間に数次の面期が認められる。すでに述べたように、本遺跡は、弥生時代以来地域拠点集落として存続してきており、おそらく12世紀頃からは中世的拠点としての性格を帯びてきたと考えられる。そして14世紀頃に本格的な居館として築造され、益田氏の地域支配の中核施設として機能したものと推測される。その後、一時的に七尾城に居宅が移動した時期もあったが、16世紀後半には、再度大規模な修築が行われたようである。平成16年に益田氏城館跡として国史跡に指定後も発掘調査を継続しており、三宅御土居の構造の変遷が徐々に明らかになりつつある。

三宅御土居が益田氏の居館として威勢を示した時期には、対岸一帯は中世城下町としての様相を整えつつあったと推定される。このことを立証する考古学的知見は限られているが、三宅御土居一七尾城を結ぶ道路沿いの曉音寺遺跡で注目すべき事が明らかにされている。この遺跡は、益田川の自然堤防上にあり、古代に有力な集落が存在したとされる。同時に、関心が注がれていた「鍵曲り」遺構については、中世に遡る可能性があると推測され、中世街区の一角が判明したと考える。

三宅御土居の対岸に展開していたと想定される戦国城下町については、近代初頭に描かれた『美濃郡上本郷村水路図』、『美濃郡上本郷村地図』『地籍図』の町図が参考になる。図中には東西方向の道路と三宅御土居一七尾城を結ぶ道路がクロスしており、道路サイドに建物が並んでいる。東西道路の一部には「市」の地名が残っている。このような景観は都市の風貌を伝えるものと考える。

益田川河口付近の右岸側の低地に広がる沖手遺跡では12～16世紀を中心とした大規模な集落跡が確認されている。溝、柵列により区画された計画性に基づいた景観を有し、益田川河口部の潟湖に面した立地から、交通・流通に関わる人々が日本海の水運を利用して、国内外の遠隔地を結ぶ流通拠点として機能した遺跡と考えられる。

沖手遺跡の西、益田川左岸の中須西原・東原遺跡では中国・朝鮮・東南アジアからの伝来陶磁器や国内の中部・北陸方面からの搬入陶器が出土し、船着き場と見られる礫敷遺構などにより港

湾機能を持った物資の集散拠点集落と考えられる。また鍛冶関連遺構はこの地域に鍛冶職人集団が存在していたことを伺わせ、益田家文書「益田本郷御年貢井田数目録帳」に記載のある「大中洲鍛冶名」を裏付ける。

今市船着場遺跡は近世期が中心であるが、その走りはさらに遡り、古代・中世から三宅御上層と河口の交易街を結ぶ中継点として機能していたと推定されている。以上で知られるように、中世期には七尾城下の街区（行政・経済・文化の特区）と河口域の手工業・交易区とが有機的に結合された広大な都市空間が出現したことは疑いない。

近世・近代益田市域の歴史には未解明な部分が多い。今後、文献史料の涉獵や実在する建造物、地名等を考古学的調査と相合わせて解明しなければならない。

[安富平野周辺の遺跡]

1953（昭和28）年に安富遺跡で後・晩期の土器が出土していて著名な存在となっていた。これらの遺跡を特徴づける事象として、打製石器が大量に出土することがあげられる。安富遺跡からは楕円形の大型打製石器が採取され、1953年当時から話題を呼んでいた。

丸山遺跡（隅村町）からも弥生前期土器が採集され、この地区にも初期農耕集落が存在したことが明らかになった。この遺跡からは、前期の朝鮮系無文土器が出土しており、右西地方初の発見として注目される。

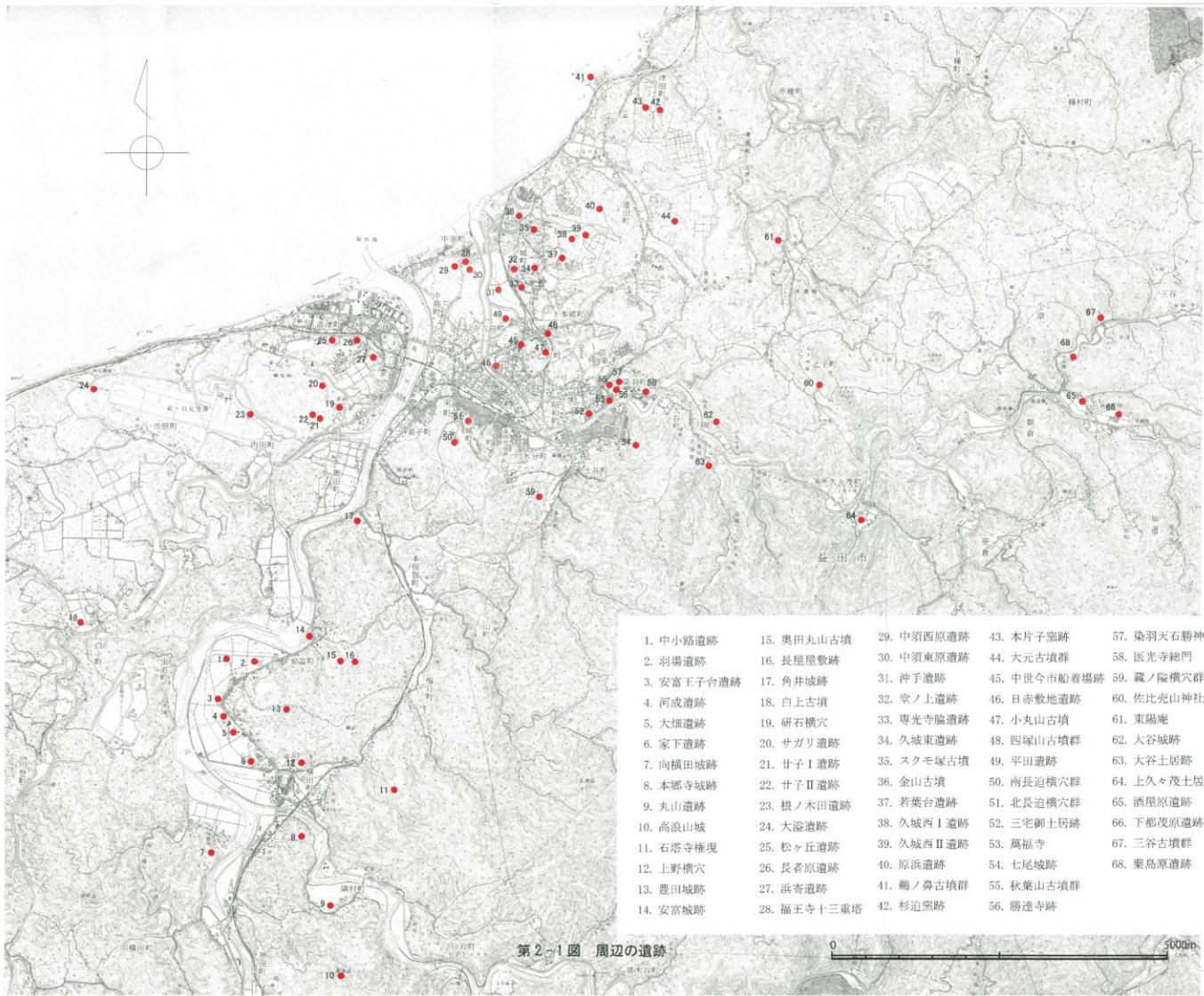
横田町の上野横穴から出土した須恵器、刀剣類は東京国立博物館に寄託している。豊田神社に伝わる中国製の陶製経筒は平安時代末から鎌倉時代初期のものであり、北部九州からの発見例が多く、益田に伝わった経筒が注目される。

安富平野の周辺の山城は向横田城跡、豊田城跡、安富城跡、角井城跡がある。暦応2年（1339年）吉川経明、内田三限の構えた豊田城に押し寄せた際の軍忠を書き上げ、上野頼兼の証判を求める記録が残っている。豊田郷をめぐり、益田氏と吉見氏が鎌倉時代から戦国時代に至るまで長きにわたり対立した。益田氏の庶子家・安富氏に伝わる安富家文書は足利尊氏、足利直冬の動きなど全国的な時代の流れにおいて石見国の武士の動きを示すものとして貴重な資料として知られる。

参考文献

- (1) 益田市誌編纂委員会 1975 『益田市誌』上巻
- (2) 木原 光 1992 「益田市・羽場遺跡出土の陶磁器」『松江考古』第8号 松江考古学講話会
- (3) 島根県教育委員会 1992 『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (4) 島根県教育委員会 2002 『増補改訂島根県遺跡地図 II (石見編)』
- (5) 島根県教育委員会 2006 『廿子I遺跡・廿子II遺跡一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (6) 島根県教育委員会 2006 『浜寄・地方遺跡-1A・1B・1C・1D・1F・2A・2C・2F・2G区の調査-一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- (7) 島根県教育委員会 2007 『沖手遺跡-1区の調査-一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3』
- (8) 島根県教育委員会 2007 『浜寄・地方遺跡-1H・1I・2B・2D・2E・2A各区の調査-一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4』
- (9) 増野晋次 2001 「益田・鵜ノ鼻古墳群について」『松江考古』第9号 松江考古学講話会
- (10) 益田市教育委員会 1981 『安富王子台遺跡発掘調査概報』
- (11) 益田市教育委員会 1982 『国営農地開発事業関係埋蔵文化財調査報告書 木片子遺跡・木原古墳』
- (12) 益田市教育委員会 1984 『鵜ノ鼻古墳群発掘調査概報』
- (13) 益田市教育委員会 1986 『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書 I』
- (14) 益田市教育委員会 1986 『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書 II』
- (15) 益田市教育委員会 1987 『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書 III』
- (16) 益田市教育委員会 1990 『小丸山古墳発掘調査報告書』
- (17) 益田市教育委員会 1991 『三宅御土居跡 I』
- (18) 益田市教育委員会 1983 『益田氏関連遺跡群 I-勝連寺・七尾城跡-』
- (19) 益田市教育委員会 1994 『益田氏関連遺跡群 II』
- (20) 益田市教育委員会 1995 『益田氏関連遺跡群 III』
- (21) 益田市教育委員会 1998 『七尾城跡・三宅御土居跡 益田氏関連遺跡群発掘調査報告書』
- (22) 益田市教育委員会 2000 『中世今山船着場跡文化財調査報告書』
- (23) 益田市教育委員会 2001 『身近なまちづくり支援街路事業 歴史的環境整備地区沖田七尾線街路事業に伴う曉音寺発掘調査報告書』
- (24) 益田市教育委員会 2003 『市内遺跡発掘調査報告書 I (七尾城跡・三宅御土居跡・沖手遺跡・中世石造物分布調査)』

- (25) 益田市教育委員会 2004 『中小路遺跡-平成15年度ふるさと農道整備事業横田安富地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (26) 益田市教育委員会 2007 『益田市中吉田平田土地整理区画整理事業に伴う平田遺跡発掘調査報告書』
- (27) 島根県教育委員会 2008 『沖子遺跡・専光寺脇遺跡』
- (28) 益田市教育委員会 2008 『家下遺跡・中小路遺跡』



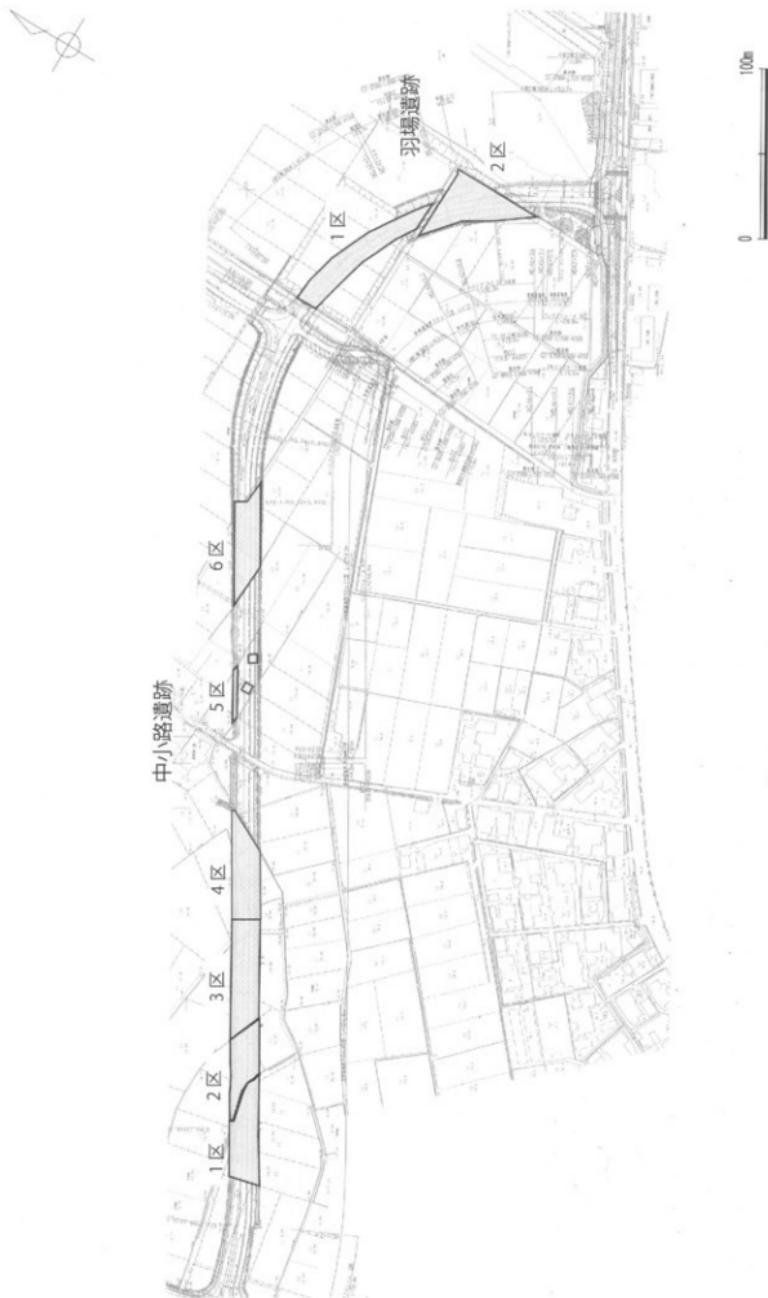


第2-2図 平野内の遺跡

0

500m

第2-3図 調査区配置図



第3章 中小路遺跡

第1節 既往の調査歴

1. 遺跡の発見（2002年）

中小路遺跡は安富遺跡として登録されていた。

平成15年の試掘調査より名称変更され、中小路遺跡として登録されている。

2. 第1次調査（2003年）

2003年（平成15年）にはふるさと農道建設工事に伴い大量の赤土器、平安期の須恵器が出土している。

弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴建物跡が1棟、掘立柱建物跡が2棟検出されている。

遺物は縄文時代晚期の土器が出土しており、尖底土器と石鏃・石錐、黒曜石剥片が得られている。遺跡全体を調査したわけでは断定的なことはいえないが、この時代の終わりころに遺跡縁辺部に零細な集落が営まれたことが推定される。

3. 第2次調査（2004年）

2004年～2005年（平成16～17年）には、農業基盤整備事業に伴い発掘調査を行った。

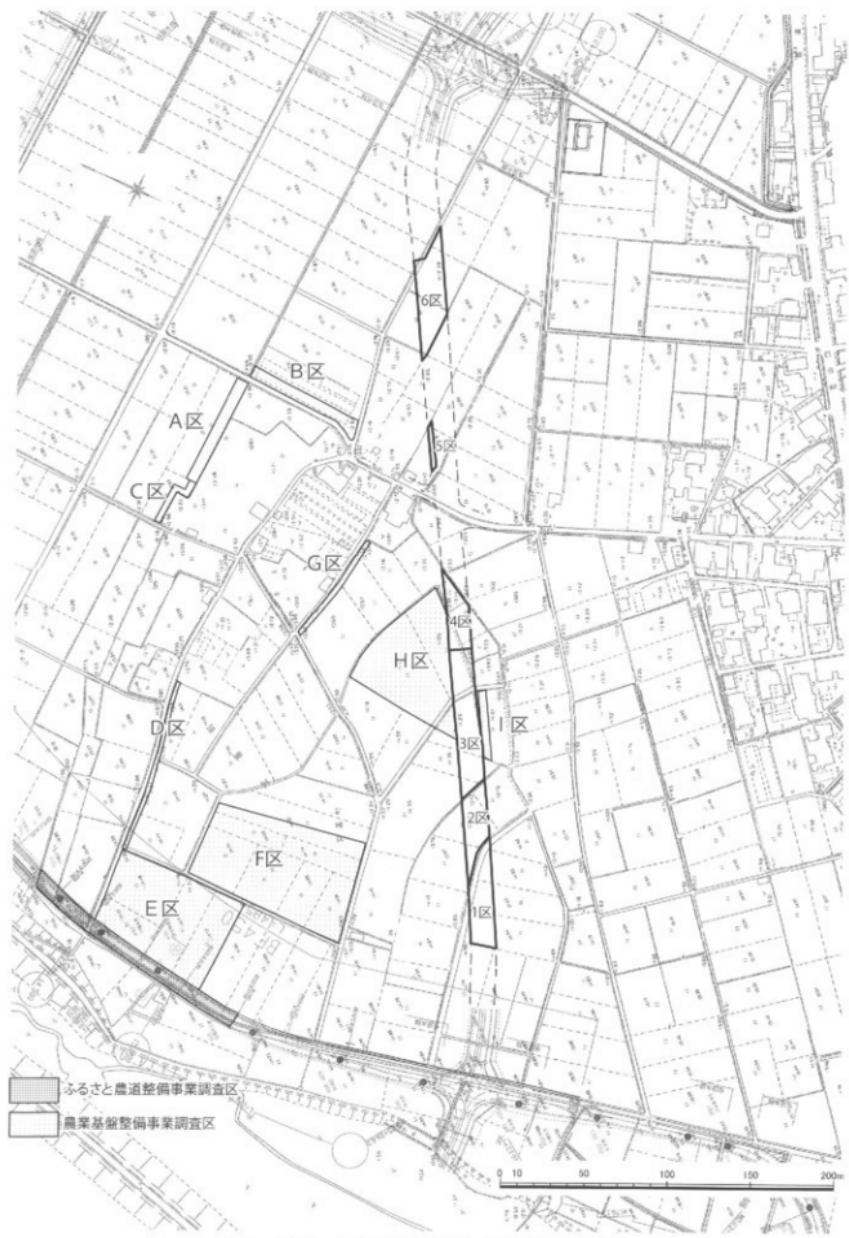
竪穴建物跡が9棟、土器棺墓群10基が検出され、環濠の可能性がある溝状遺構が検出されている。竪穴建物跡は後期初頭から後期後葉までの変遷が遺物から認められる。

この変遷を地形的に見ると北端の微高地先端部から徐々に高手への移動が明らかになった。

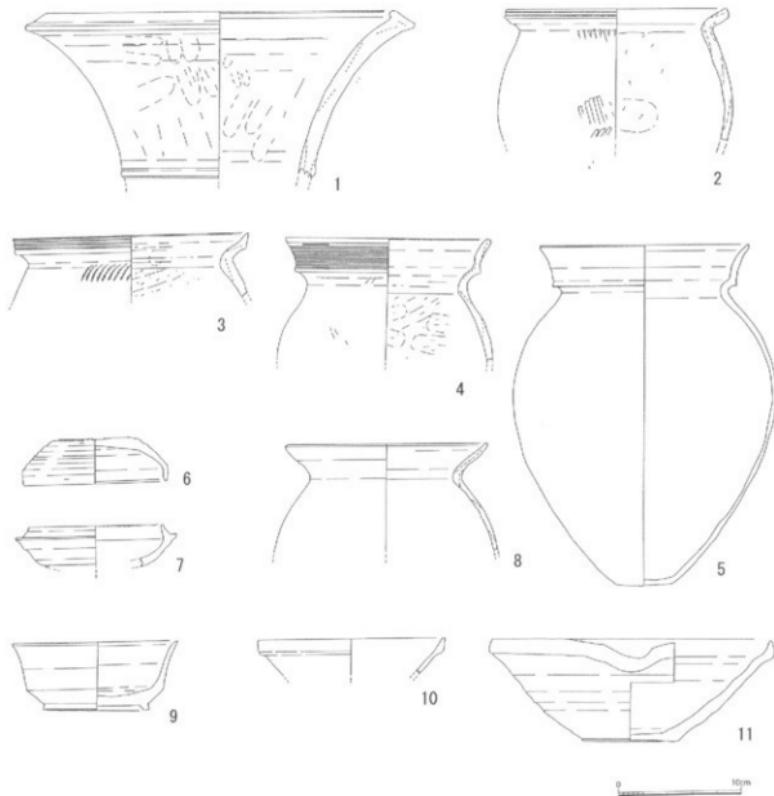
土器棺墓群について、棺に用いられた大型壺型土器は防長地方特有の形式であった。中小路遺跡の一角にこの方面からの移住者の集落が営まれていた可能性が高いと理解されている。こうした集落構成の在り方も安富遠跡群の特徴である。

4. 第3次調査（2005年）

2005年（平成17年）の調査では大型の土坑を柱穴として整然と並ぶ掘立柱建物群が検出されている。15棟以上の掘立柱建物の中には、E区で大型の倉庫跡と思われる遺構を検出し、官衙関連遺構と判断された。壺型土器等官衙の存在を直接的に示す遺物は出土していないが、3区及び北側調査区では大型掘立柱建物跡が検出されており、それらの遺構群と有機的につながる建物の存在をうかがい知ることができる。



第3-1図 中小路遺跡既往の調査区配置図



1～5 弥生土器

1. 中期中葉頃 2. 中期後葉 3. 後期前半 4. 後期中頃

5. 後期後半

6、7. 須恵器（古墳） 8. 古式土師器 9. 須恵器（奈良・平安）

10. 白磁碗 11. すり鉢（東播）

(益田市教育委員会 2008 『家下遺跡・中小路遺跡』より転載)

第3-2図 既往の調査における出土遺物

第2節 調査の経過

1. 1～4区の調査経過

1～4区は、中小路集落を貫く道路から西側に位置し、平成17年度、平成18年度の2ヶ年にわたって調査を行った。

平成17年度は、道路側溝部分の調査を行った。トレーンチ幅1m、長さ約220mと狭長な調査区となり、遺構も建物復元が不可能であるなど、調査は部分的なものとなった。また、翌年度の道路本体部分の調査に向けて一部試掘調査を行っている。現地調査は平成17年9月13日から平成17年11月30日にかけて実施し、面積は576m²である。

平成18年度は道路部分の調査であったが、農地への通行を確保する必要があったため、道路幅を南北に二分し、南側から調査を行った。調査区の設定は、県道整備予定地を現況の地形によって区分けし、西から1～4区を設定した。

現地調査は平成18年6月1日から平成19年1月19日にかけて実施し、面積は3,495m²である。

2. 5～6区の調査経過

6区は対象面積約715m²を平成18年度：平成18年9月20日～平成19年1月19日、平成19年度：平成19年8月27日～平成20年1月15日の2ヶ年に亘り現地調査を行った。なお、当初5区として予定した区域については前年のトレーンチ調査により遺構が確認できなかつたことから調査範囲から外した。

5区南側約190m²、6区東端から農道までの部分約2,065m²については前述の調査前掘削行為に伴い調査を行うことができなかつた。

グリッド設定は西から10m毎に8分割し、調査区東西に設置した基準杭を結んだ線で南北に区分けし、西からN1～N7、S2～S8の合計14のグリッドに分割して調査を進めた。

3. 調査指導

現地調査中に下記のとおり研究者及び島根県文化財課職員に調査方針等について指導を受けた。

(平成17年度)

平成17年11月 7日 田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）

(平成18年度)

平成18年 9月 11日 中村唯史（三瓶自然館）

平成18年11月13日 田中義昭

柳浦俊一（島根県埋蔵文化財調査センター）

(平成19年度)

平成19年 6月 5日 田中義昭

是田 敦（島根県教育庁文化財課）

平成19年 8月 7日	村上 勇（広島県立美術館）
	中村唯史
	是田 敦
平成19年10月 5日	田中義昭、林 健亮（島根県教育庁文化財課）
平成19年11月 14日	田中義昭
	丹羽野 裕、宮本正保、池淵俊一（島根県埋蔵文化財調査センター）
平成19年12月 3日	中村唯史
平成19年12月 9日	是田 敦
平成19年12月 14日	田中義昭
平成20年 1月 15日	村上 勇

4. 普及活動

現地説明会を1～4区は平成18年12月23日（45名参加）、6区は平成19年10月13日（50名参加）に行なった。

近隣の西益田小学校6年生児童を対象に発掘体験学習を平成18年10月17日、平成19年10月2日に実施した。また、中西中学校3年生を対象とした職場体験を平成18年6月14日に行い、2名の生徒が発掘調査を体験している。

益田市立歴史民俗資料館において毎年開催される発掘調査速報展により出土遺物等の公開を行った。



平成18年6月14日 職場体験



平成18年12月23日 現地説明会

第3節 1～4区の調査結果

1. 調査の概要

安富地区は大正9年～14年にかけて耕地整理が行われており、遺跡は擾乱を受けているものと推測された。実際に調査を実施した結果、遺構本末の掘り込み面は削平を受けていることが明らかとなり、耕作上の直下が地山である地点も存在していた。検出された遺構は1面で、黄褐色粘質土の地山上で確認されている。

県道整備予定地内は、元々の地形に高低差が存在したため、調査区の設定は現況の地形によつて区分けし、西から1～4区とした。1区は耕作上の直下が地山となっており、地山はひどく擾乱を受けていた。そのため遺構の検出は難航し、地山を削り込んで遺構の確認に努めた。検出したピットの深さは0.1～0.2m程度であり、遺構の上半は削平されているものと思われた。2区は隣接する1,3区より約0.7m下がった場所に立地する。3区は遺構密度が最も密であり、3区を中心として東、西へ向かうにつれて疎となっていた。掘立柱建物跡、土坑、溝などが検出されている。4区では、北西から南東に向かって落ちる段状の地形が確認され、一段低い南側では遺構密度は非常に疎であった。

上層の基本層序は、①耕作土、②遺物包含層、③地山である。なお、本発掘調査に先だって実施された基礎整備事業の一環で水田耕作土は除去していただいたため、②遺物包含層からの調査となっている。

2. 古代の遺構と遺物

1) 掘立柱建物

SB1（挿図3-10図、図版7）

3区西寄りで検出された。建物の南半は調査区外へ続いており、部分的な検出にとどまつたが、規模は2間×1間以上と推定される。柱穴の規模は直径約40cm、深さ10～30cm、柱間は1.2～1.5mを測る。周囲には、直径30cm程度の小型の柱穴が廻っており、柵状の施設と考えられた。また、柵の外側にはSD2が廻っており、建物、柵と一体的な構造であった可能性もある。これらに伴う遺物として、柱穴内から土師器と須恵器が出土しているが、いずれも小片であり、図化できなかつた。

SB2（挿図3-11図、図版7）

3区で検出されている。南半は調査区外へ続いており、部分的な検出にとどまっている。検出できた規模は、2間×2間以上、柱穴の規模は直径40～50cm、深さ約10cmと非常に浅く、上半は削平を受けているものと思われる。上述のSB1とは、主軸を異にしており、時期差があるものと考えられた。

これらに伴う遺物として、柱穴内から土師器と須恵器が出土しているが、いずれも小片であり、図化できなかつた。

SB3（挿図3-12図、図版8）

3区東寄りで検出されている。南半は調査区外へ続いており、部分的な検出にとどまっている。検出できた規模は、4間×2間以上、柱穴の規模は直径40～55cm、深さは約20cmであった。柱間は1.2～1.5mをはかる。上述のSB2とは主軸がほぼ一致し、同一時期の可能性がある。

これらに伴う遺物として、柱穴内から土師器と須恵器が出土しているが、いずれも小片であり、

図化できなかった。

SB4（挿図3-13図、図版8）

3区の中央部において、大型の柱穴が3基検出されている。掘形はいずれも方形で、内部からは柱根と思われる木材が出土している。これらは南北・北東方向に直線状に並び、規格も同様であることから、同一の建物を構成していたものと考えられる。柱間は西から5.5m、4.5mであり、上述の建物群より広い。建物構造の復元にはさらなる検討を要する。同規格の柱穴はこの3基以外に検出されなかったため、建物は北側へ続くものと考えられ、規模等の詳細は不明である。

2) 大型柱穴

SB4を構成する柱穴である。

SK5（挿図3-14図、図版8）

*平面形：隅丸長方形

*規 模：約1.3m×0.9m、深さ約0.6m

*形状の特徴：掘形は南北および西側に段をもち、内部に柱根が残存していた。腐食が進んでいるものの、長辺約50cm、短辺20cmをはかり、材質はヒノキ属であった。

*出土遺物（挿図3-15図、図版15）：1は須恵器の壺蓋である。上半は欠損しているが、径は推定15cmであり、口縁端部は嘴状に垂れ下がる。

SK6（挿図3-14図、図版10）

*平面形：隅丸方形

*規 模：約1.0×1.0m、深さ約0.5m。

*形状の特徴：掘形は北側において段をもつが、南側は逆台形状に掘り込まれる。内部から柱根が検出されている。柱根は長辺が約50cm、短辺は約20cmで、方形に成形されていた。材質はカヤである。なお、柱の下には黄褐色シルトが約6～20cmの厚さで敷き詰められており、柱の根固めのためと推定される。

*出土遺物（挿図3-15図、図版15）：2はボタン状つまみが付く須恵器壺蓋である。つまみは天井部が平坦であり、側面に稜線を持つ。つまみ周辺は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデで調整する。

SK7（挿図3-14図、図版10）

*平面形：隅丸長方形

*規 模：約0.9m×0.8m、深さ約0.6m。

*形状の特徴：掘形は北西側に段をもち、南側は逆台形状に掘りこまれている。北西部をP99によって切られている。柱穴内に柱材は残存していなかったが、中央部に30cm四方の空間が存在し、それを囲むように南西、北東側に木材が残存していた。これらは柱そのものではなく、柱材を支えるための添え木と思われる。なお、図面作成中に大雨によって水没したため、木材の一部が元位置から動いたため、平面図と断面図の整合を図ることができなかつた。

これに伴う遺物は出土していない。

3) 井戸

4区において、2基検出されている。

SE1（挿図3-16図、図版11）

*平面形：隅丸方形

*規模：約1.3×1.3m、深さ約1.1m

*形状の特徴：ほぼ垂直に掘り込まれる。底部中央には、直径60cmの範囲に栗石が敷き詰められていた。また、埋土内からは須恵器、土師器の破片に混じって木片が出土している。形状および木片が出上していることから、円形の木枠を備えた井戸と推定した。

*遺物の出土状態：井戸枠の裏込め土、および井戸廃絶後の堆積土中から須恵器と土師器が出土している。

*出土遺物（挿図3-17図、図版13～15）：3は輪状つまみが付く須恵器壺蓋である。天井部は平坦であり、口縁部にむかって「ハ」字状に開く。口縁端部は嘴状に小さく下方へ折れ曲がる。つまみ内部に回転糸切りの痕跡を残す。石見9B期、大溢III期。4は擬宝珠つまみが付く須恵器壺蓋。体部はやや丸みを帯び、口縁端部は堅く下方へ折れ曲がる。他地域からの搬入品か。5～7は高台付の須恵器壺である。いずれも高台は断面方形、小型で高台端部を強く押さえ沈線状に仕上げる。5は高台の取り付け位置から逆「ハ」字状に開き、口縁端部は丸く収める。石見9A期、大溢II期か。6は高台がやや外に張る。体部は高台の取り付け位置から大きく開き、腰部分で強く屈曲する。口縁端部は面取りにより断面方形気味に仕上げる。7は口縁部を欠損する。体部は逆「ハ」字状に開く。底部は回転糸切り。8は無高台の須恵器壺の底部である。体部はやや丸みを帯びる。底部外辺を回転ヘラケズリ、それ以外を回転ナデで調整する。

9は高壺の脚部である。脚端部、壺部を欠損する。脚部上半はやや直線的であるが、下半にかけて湾曲しながら開く。外面中ほどに2条の沈線を廻らせる。10は大型の長頸壺の頸部で、体部、口縁端部を欠損する。口縁部にかけて外反気味に広がり、中ほどに2条の沈線を施す。内面は指ナデ。大型のものと推測され、器壁は約1.5cmをはかる。

11は土師器の甕の口縁部であり、やや強く外反させる。全体をナデで調整する。

SE2（挿図3-16図、図版11）

*平面形：円形

*規模：直径約1.5m、深さ約1.0m。

*形状の特徴：埋土は、にぶい黄褐色シルトの単層である。井戸枠等の施設は検出できなかったが、形状から井戸と判断した。

*出土遺物：これに伴う遺物は出土していない。

4) 土坑、ビット

SK1（挿図3-18図、図版6）

2区において検出された。

*平面形：北半が調査区外へと続いているため全容は不明であるが、ほぼ円形と思われる。

*規模：検出された径約1.4m、深さ0.15m

*形状の特徴：断面はレンズ状を呈する。

*遺物の出土状態：内部からは炭とともに須恵器、土師器等が出土している。

*出土遺物（挿図3-19図、図版15～16）：12は輪状つまみが付く須恵器壺蓋である。天井部は平坦であり、口縁部にかけ「ハ」字状に開き、口縁端部は嘴状に小さく下方へ折れ曲がる。つまみ周辺を回転ヘラケズリ、それ以外を回転ナデで調整する。内面が磨滅しており、硯として転

用された可能性がある。石見9B期、大溢III期か。13～16は高台付の須恵器坏である。体部は高台の取り付け部から逆「ハ」字状に開き、口縁端部は丸く收める。13、15の高台は断面方形、小型であり、高台端部を強く押さえ沈線状に仕上げる。14は高台部を欠損する。16の高台は断面方形、小型で、やや外に張る。全体を回転ナデで調整する。13、15は石見9A期、大溢II期か。17・18は須恵器壺である。17は頸部を欠損する。肩はやや張り、胴部へむかって徐々にすぼまりながら底部へ至る。肩部に沈線を2条巡らす。18は長頸壺で、底部を欠損する。体部は丸みを持ち、口縁部に向かってラッパ状に開く。頸部中ほどに2条の沈線を巡らす。いずれも全体を回転ナデで調整する。19は須恵器壺の胴部である。外面は格子タタキ、内面は同心円状のタタキで調整する。

20～22は土師器壺の口縁部。いずれも胴部内面はヘラケズリ、それ以外をナデにより調整する。20の口縁部はやや短めで肥厚し、短く外反させる。21・22の口縁部はやや長く、端部を外反させる。23は磨石の破片で、外面に磨耗がみられる。

SK2（挿図3-20図、図版10）

*平面形：南北方向の楕円形

*規 模：約2.6m×1.6m、深さ約0.2m。調査工程の都合により、南北に二分して調査を行った。

*形状の特徴：浅い皿状

*遺物の出土状態：須恵器と土師器が多く出土したほか、拳大の河原石が多く出土している。

*出土遺物（挿図3-20図、図版15）：24～31は須恵器。24,25は壺蓋である。いずれも擬宝珠状つまみが付き、やや焼き重む。つまみ周辺を回転ヘラケズリ、それ以外を回転ナデで調整する。24の天井部は平坦であり、「ハ」字状に開いて口縁部に至る。壺部は嘴状に小さく下方へつまみだす。石見8期、大溢I期。25の天井部は丸みを帯び、口縁端部はやや長めに下方へ折れる。石見8期、大溢I期。26、28は高台付の坏である。26は高台がやや長く、端部内面を段状に整形する。また、高台端部を強く押さえ沈線状に仕上げる。底部はヘラ切り。28は高台が外へ張り、端部は丸みを帯びる。27は壺と推定したが、高壺の可能性もある。29は高壺の壺部。底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部付近でやや外反する。30は小型の高壺であり、口縁部を欠損する。脚部はラッパ状に大きく開き、端部は嘴状に小さく下方へ折れ曲がる。脚部中ほどに1条の沈線、裾部に浅い巾広の溝を巡らせる。31は壺の口縁部で、端部をわずかに内側につまみだす。

32、33は土師器。32は壺の口縁部で、大きく外反させる。調整は風化により不明瞭である。33は高壺の脚部である。筒部は短く、裾に向かって大きくラッパ状に開く。脚端部は断面方形に整形される。胎土が精良であり、焼成不良の須恵器の可能性もある。

SK3（挿図3-18図、図版10）

SK2の東側に接して検出されている。

*平面形：南北方向の楕円形

*規 模：約1.6m×1.0m、深さ約0.15m。

*形状の特徴：南北に2分して調査を行っている。SK2とSK3の切り合い関係から、まずSK3が先行して掘削され、SK2が切り込む形で検出された。

*遺物の出土状態：埋土中から須恵器と土師器が出土している。

*出土遺物（挿図3-20図、図版17）：34は高台付の須恵器壺の底部である。高台は断面方形で

やや外に張り、内面を段状に整形する。また、高台端部を強く押さえ沈線状に仕上げる。35は提瓶の体部。外面はタタキの後カキ目を施し、内面は荒くナデる。

36、37は土師器壺の口縁部である。口縁部は大きく外反して開き、体部はほとんど膨らまず、直線的に下垂する。体部内面はヘラケズリ、それ以外をナデにより調整する。

SK4 (挿図 3-21図、図版 9)

3区で検出された。

*平面形：楕円形

*規模：約1.7m×1.2m、深さ約0.1m

*形状の特徴：浅い皿状

*遺物の出土状態：埋土中から須恵器が出土している。

*出土遺物(挿図3-22図)：39は輪状つまみが付く須恵器壺蓋である。輪状つまみは径が大きく、体部と比較してやや高めである。口縁端部は嘴状に下方へ垂れ下がるが、やや内傾する。石見9B期、大満Ⅲ期か。40は須恵器壺の口縁部で、体部から口縁部にかけて直線的に開く。

SK8 (挿図 3-21図)

3区で検出された。

*平面形：隅丸長方形

*規模：約1.3m×0.9m、深さ0.75m

*形状の特徴：掘形は断面台形。掘立柱建物跡SB3の内部にあたる位置で検出された。

*遺物の出土状態：埋土中から須恵器が出土している。

*出土遺物(挿図3-22図)：38は須恵器壺である。体部中ほどに稜線をつけ、口縁部に向かって逆「ハ」字状に聞く。外面ともに回転ナデで調整し、入念に仕上げる。金属器模倣の良好な作りであり、他地域からの搬入品とも考えられる。

P59 (挿図 3-7図)

3区において検出された。

*平面形：円形

*規模：直径40cm、深さ20cm

*形状の特徴：断面台形状を呈する。

*遺物の出土状態：埋土中から須恵器、土師器および川原石が出土している。

*出土遺物(挿図3-23図、図版17)：41は無高台の須恵器壺である。平らな底部から体部を直線状に引き上げる。42、43は土師器の壺。42は口縁部で、頸部から口縁部にかけて強く外反する。胴部内面はヘラケズリ、それ以外をナデにより調整する。43は頸部から口縁部にかけて短く外反する。頸部はナデ、胴部はケズリ調整。全体として下膨れ気味の安定した器形である。

遺構出土遺物(挿図 3-23図)

建物構造を復元することはできなかったが、上記以外のピットから遺物が出土している。44～48は須恵器である。44は無高台の壺。底部から体部へ内湾しながら立ち上がり、口縁端部は小さく外へ引き出す。他地域からの搬入品の可能性もある。45、46は高台付壺の底部である。45の高台は断面方形で、やや長く外に張り、端部を強く押さえ沈線状に仕上げる。底部は回転ヘラケズリ、それ以外を回転ナデで調整する。46の高台は断面方形の小型であり、退部はほぼ

垂直に立ち上がる。高台端部を強く押さえ沈線状に仕上げる。47は無高台の壺の底部である。底部と体部の境でやや丸く屈曲する。底面付近を回転ヘラケズリ、それ以外を回転ナデで調整する。48は高壺の壺部と考えられる。底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部付近でやや外反させる。

49は土師器壺の口縁部である。口縁部はゆるく外反させ、端部は丸く收める。調整は風化により不明瞭である。50は磨石。両平坦面に線状痕が見られ、摩滅している。長片、短片に敲打痕がみられ、石錘へ転用した可能性もある。

5) 溝

SD1 (挿図 3-24図、図版10)

3区で検出された。

*平面形：北西方向へ伸びた後、西側へ強く屈曲する。

*規 模：長さ約2.3m、幅約0.6m、深さ約5cm

*形状の特徴：浅い台形状

*遺物の出土状態：埋土中から土師器が出土している。

*出土遺物 (挿図3-25図、図版18) :51は土師器の壺である。頸部から口縁部にかけて外反させ、口縁端部は丸く收める。頸部から体部にかけてはほとんど開かない。調整は風化により不明瞭である。

SD2 (挿図 3-24図、図版10)

3区で検出された。

*平面形：Y字状

*規 模：長さ約5.1m、幅約0.8m、深さ約0.2m

*形状の特徴：SB1の周囲を巡る形で検出され、一体的な施設とも考えられる。

*遺物の出土状態：埋土中から須恵器、土師器が出土している。

*出土遺物 (挿図3-25図、図版18) :52～54は須恵器である。52はボタン状つまみが付く壺蓋。つまみは中心をくぼませ、縁は丸く收める。口縁端部は嘴状に下方に垂れ下がり、小さく外傾する。つまみ周辺を回転ヘラケズリ、それ以外を回転ナデで調整する。石見9A期、大溢II期。53は輪状つまみが付く壺蓋である。輪状つまみは径が大きくやや高めであり、断面二角形に整形する。口縁端部は嘴状に小さく垂れ下がり、やや内傾する。石見9A期、大溢II期。54は高壺であり、口縁部を欠損する。脚部は裾部にかけて大きくラッパ状に開き、端部は嘴状に小さく下方へ折れ曲がる。脚部中ほどに1条の沈線を巡らせる。

55～58は土師器壺である。55～57はいずれも口縁部が大きく外反し、端部は丸く收める。58は口縁部の外反がやや弱く、端部も断面三角形に近い。55は口縁部がやや肥厚する。56～58はいずれも頸部から体部にかけてほとんど膨らまず、器壁も薄手である。55～57は調整が不明瞭であり、58は体部内面をケズリで調整する。

大溝 (挿図 3-26図、図版6)

2区において南東方向から北西方向へのびる溝跡を検出した。

*平面形：帯状

*規 模：幅10～16m、深さ約1.4m、両端は調査区外へと延びているため、総延長は不明。

*形状の特徴：落ち込みの肩部から底へ向かって緩やかに落ち込む。溝底からは人頭台の礫が大量に検出されている。これらの礫群は軟質化しており、石材の劣化が進んでいた。人為的に投げ込まれたもの、あるいは水の流れで運ばれたものとは考え難く、風化礫の混じる岩盤が露出したものと考えられる。内部の堆積土は2層に分けられるが、いずれも粘質シルトであることから、當時水の流れがあるのではなく滞水した状態であったと推測される。また、これが自然によって形成されたものか、あるいは人為的に掘削されたものかを判別することはできなかつたが、平成15年調査の1区においても同様の落ち込みが確認されている。

*遺物の出土状況：17層と18層の境から、奈良～平安時代の須恵器、土師器が多量に出土した。

*出土遺物（挿図3-27～3-30図、図版18～20）：59～97は須恵器で、59～66は蓋壺。ボタン状のつまみをもつもの（59～62）と、輪状つまみをもつもの（63～66）に大きく分けられる。59のつまみは上部半平坦面が広く、縁はやや角張る。口縁端部は嘴状に下方に垂れ下がり、断面三角形に仕上げる。石見8期、大溢Ⅰ期。60のつまみはやや低く、中心部をわずかに窪ませ、縁はしっかりと稜をつける。口縁端部は嘴状に小さく下方へ垂れ下がり、断面三角形に仕上げる。肩周辺を回転ヘラケズリ、それ以外を回転ナデで調整する。石見8期、大溢Ⅰ期か。61はつまみの中心部をやや窪ませ、縁が突出する。天井部は平壠であり、体部はなだらかに開く。肩周辺を回転ヘラケズリ、それ以外を回転ナデで調整する。62のつまみは小型であり、天井部に平坦面は無く、つまみの取り付け位置から丸みをもって口縁部に至る。端部は嘴状に下方へ垂れ下がる。自然釉により調整は不明。石見7期か。63～66は輪状つまみが付く須恵器壺蓋である。輪状つまみは径が大きく高めであり、端部は丸く整形する。口縁部を欠損する64を除き、口縁端部は小さく下方に垂れ下がる。63、64はつまみ端部が短く外反する。63、66は全体を回転ナデで調整し、64、65は肩部を回転ヘラケズリ、それ以外を回転ナデで調整する。63は内面が磨滅しており、硯として転用された可能性がある。石見9A期、大溢Ⅱ期か。

67～74は高台付き須恵器壺である。67は底部である。高台はやや長く、内面を段状に整形する。また、高台端部を強く押さえ沈線状に仕上げ、高台の外面がわずかに浮く。全体を回転ナデで調整する。68、69は小型で断面方形の高台を取り付け、体部は直線的に立ち上がる。いずれも右見9B期、大溢Ⅲ期と思われる。70は高台が低く、やや内向きである。高台の端部は軽く押さえ、わずかに凹む。体部下半に稜を持ち、口縁部に向かって逆「ハ」字状に大きく開く。全体を回転ナデで調整する。71は高台がやや外に張るタイプである。体部下半に稜を持ち、口縁部に向かって逆「ハ」字状に大きく開き、端部は強く屈曲させる。高台周辺を回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデで調整する。72は高台が外に張る。底部から内湾しながら立ち上がり、直線的に口縁部へ至る。全体を回転ナデで調整する。石見8期、大溢Ⅰ期。73の高台は低く、外側で接地する。腰部に稜をつけ、体部は逆「ハ」字に開き、口縁端部を外方へ屈曲させる。74の高台は強く外へ張り出し、高台端部を強く押さえ沈線状に仕上げる。底部と体部の境で強く屈曲させ、体部は直線的に立ち上がる。底部を一部ケズリ調整する71を除き、いずれも回転ナデで調整する。70～74は、大型の金属器を模倣したと考えられる優品であり、他地域からの搬入品の可能性もある。

75は無高台の壺である。体部は内湾しながら立ち上がり、直線的に口縁部に至る。体部中ほどに小さく明瞭な突帯を取り付ける。全体を回転ナデで調整し、内外面の一部に自然釉が付着す

る。76は高台付き壺である。高台は高く、「ハ」字状に開き大きく外に張る。体部は内湾しながら立ち上がる。全体を回転ナデで調整する。77～81、92は高壺である。77は体部が逆「ハ」字状に大きく開く。78は底部からなだらかに短く立ち上がり口縁部へ至る。口縁端部は断面方形に整形し、全体を回転ナデで調整する。石見9B期、大溢Ⅲ期か。

79は脚部が裾にかけてラッパ状に大きく開く。80は脚端部を小さく下方へ折る。81は筒部からラッパ状に開き、脚端部は丸く仕上げる。中ほどに沈線を一条巡らせる。いずれも全体を回転ナデで調整する。92は体部から口縁部は向かってなだらかに開き、上半で屈曲させる。口縁端部は断面方形に仕上げ、回転ナデで全体を調整する。石見9B期、大溢Ⅲ期か。82～84は小型の壺である。82は肩部で「く」字状に屈曲し、ゆるく内湾しながら底部へ向かう。体部上半に交叉文を施す。83は肩部でゆるやかに屈曲して内湾気味に底部へ向かう。頸部内面にしづり痕を残し、体部下部にヘラ傷がある。84は肩部で「く」字状に強く屈曲し、直線的に底部へ向かう。水差しと考えられる。いずれも全体を回転ナデで調整する。

85、86は壺である。85は体部中ほどに沈線を2条巡らせる。器壁は厚く、頸部のくびれは緩くシャープさに欠け、型式的に崩れた印象を受ける。86は壺の体部の可能性もある。器壁は85に比べ薄い。いずれも全体を回転ナデで調整する。87～90は大型の無高台壺である。87～89は肩部で「く」字状に強く屈曲して底部へ下降する。87、88は長頸壺の体部か。87は中ほどの屈曲部に幅広の凹線1条と、細い沈線を1条巡らせる。88は体部上半に2条1単位の沈線を計3セット巡らせる。体部はタタキ後回転ナデで調整する。89は短頸壺の体部と考えられ、口縁部は短く外反させる。体部は直線的であり、平底とあいまって角張った印象を受ける。90は器壁が厚く、体部は内湾しながら立ち上がる。上部はタタキ後回転ナデ、下部と底部は回転ナデで調整する。91は高台付き壺の底部である。高台は高く外に張り、内面を段状に整形する。高台内は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデで調整する。

93～95は短頸の甕である。口縁部は逆「ハ」字状に開き、体部との境は「く」字状に屈曲する。93は口縁端部を断面方形に仕上げ、端部を内側につまみだす。口縁部は回転ナデ、体部はタタキで調整する。94は口縁端部がやや内湾し、断面は丸く仕上げる。体部は丸みを持ち、口縁部は回転ナデ、体部はタタキで調整する。95は頸部が外反しながら大きく開き、口縁端部を帯状に肥厚させる。端部は断面方形で、内側に鋭く折れ、波状文を1条巡らせる。頸部中ほどにも3条の波状文を巡らせ、体部はタタキ後、カキメで調整する。96は横瓶、もしくは平瓶の体部である。全体をタタキ調整後、外面にカキメを施す。97は鉢、もしくは壺の底部である。底部と体部の境は明瞭であり、体部は逆「ハ」字状に広く開きながら直線的に立ち上がる。

98～100、103は上部器甕の口縁部である。いずれも口縁部は大きく外反し、端部は丸く收める。98、100は体部がやや膨らむ。いずれも体部内面をヘラケズリ、それ以外をナデにより調整する。101、102は管状土錐で、焼成は土師質である。104は白磁の碗で、口縁端部を肥厚させ、玉縁状にする。大宰府IV類。105は土師器高台付杯の底部である。高台は高く、「ハ」字状に開く。106は瓦質土器の辻鍋である。全体を指ナデによって調整し、ススが付着する。107は縄文土器片の浅鉢と考えられる。

3. 近世以後の遺構

近世以後の遺構として、溝跡が2基検出された。

SD3 (挿図 3-4 図)

- 1区で検出された。
- *平面形：帯状
- *規 模：幅約2m、深さ約0.4m、両端は調査区外へ延びており、総延長は不明。
- *形状の特徴：石積みの護岸を伴い、内部にはコンクリート擁壁が倒れ込む形で検出された。平成17年度の基盤整備事業が行われるまで存在していた用水路と並行しており、近代の圃場に伴う用水路跡と考えられる。
- *遺物の出土状態：内部からは近代の陶磁器類が出土している。

SD4 (挿図 3-7 図)

- 4区で検出された。
- *平面形：帯状
- *規 模：幅約2m、深さ約0.3m、両端は調査区外へ延びており、総延長は不明。
- *形状の特徴：石積みの護岸を伴う。
- *遺物の出土状態：溝底に堆積した砂質土中から、近代の陶磁器やガラス類が多く出土している。かつて4区周辺には集落が存在していたといわれ、近代以降の集落に伴う溝と推測される。

4. 遺構に伴わない遺物 (挿図3-31～3-33図、図版21)

包含層中から、奈良～平安時代の上師器、須恵器、中世の陶磁器類が多量に出土している。

108～128は須恵器。108は擬宝珠つまみが付く壺蓋である。109は壺蓋で、広めの頂部平坦面から「ハ」字状に開き、断面方形の口縁端部へ至る。天井部平坦面の端に2条の沈線を巡らせる。いずれも全体を回転ナデで調整する。110は壺で、底部を欠損する。口縁端部は外側へ小さく屈曲させ、全体を回転ナデで調整する。111～113は高台付き壺である。111の高台は低く断面台形であり、端部をナデで沈線状に仕上げる。石見8期、大瀧I期。112の高台は低く断面方形で、やや外向きに開く。113の高台は低く、端部を沈線状に仕上げる。体部は内湾気味に立ち上がり、下半で強く屈曲し口縁部へ向かう。いずれも全体を回転ナデで調整する。114は無高台の壺である。底部はやや上げ底で、体部は内湾しながら立ち上がる。底部周辺を回転～ラケグリ、それ以外を回転ナデで調整する。115、116は高壺である。115は脚部がラッパ状に大きく開き、端部は嘴状に小さく下方へ折れ曲がる。壺部は平坦な底部から屈曲して口縁部へ向かう。116の脚部はラッパ状に開く。いずれも全体を回転ナデで調整する。ともに石見7期（久本奥IV期）と思われる。

117は長頸壺である。頸部が直線的で長く、体部は球形を呈する。口縁部は水平方向へのタガの痕跡を残しており、頸部には2条1単位を2箇所、計4条の沈線を巡らせる。118は大型の壺である。肩部で「く」字状に強く屈曲して底部へ下降する。屈曲部に3条の沈線を巡らせる。体部下半をケグリ、それ以外を回転ナデで調整する。119は壺、もしくは横瓶の口縁部と考えられる。口縁部は直立しながら立ち上がり、中ほどで大きく開いて口縁端部に至る。120、121は高台付の壺である。ともに高台は高く、外側へ強く踏ん張り、内面を段状に仕上げる。120の体部は内湾しながら立ち上がる。全体を回転ナデで調整する。121は大型の壺で、体部は逆「ハ」字状に直線的に開く。体部をタタキ、高台部は回転ナデで調整する。122は壺の底部である。半底であり、体部との境は明瞭である。上部はタタキ、底部は回転ナデで調整する。123～126は壺の口縁部

である。123は口縁端部を外方へ折り返して帯状に整形し、鰐歯文を、口縁部に波状文と沈線を巡らせる。124は逆「ハ」字状に開き、口縁端部は断面方形に整形する。肥厚部と頸部に波状文を巡らせる。125は口縁部が大きく外反し、端部を肥厚させ、断面方形に整形する。口縁端部は面をもつ。口縁の内外面に波状文を巡らせる。126は体部から「く」字状に強く屈曲し、口縁部へ至る。口縁端部は断面方形に仕上げられ、口縁部は回転ナデ、体部はタタキで調整する。

127、128は把手付横瓶である。127は把手の取り付け部であり、断面方形に近い形の把手を貼り付けている。把手は途中から水平方向へ屈曲している。体部は、整形時の開口部を粘土板で塞ぎ、把手の横に改めて注ぎ口を開けている。全体をナデ調整する。128は把手部分であり、断面方形を呈し、指ナデ整形の痕が残る。

129～133は土師器甕である。129、130は口縁部を肥厚させ、短く外反する。131は口縁部を強く外反させ、端部は丸く收める。132、133は口縁部が逆「ハ」字状に直線的に開き、体部はやや膨らむ。体部内面をケズリ調整する。134は高台付の土師器甕である。高台は低く断面方形であり、やや外へ張る。体部は内湾しながら立ち上がる。全体をナデ調整し、内外面に赤色顔料を塗布する。

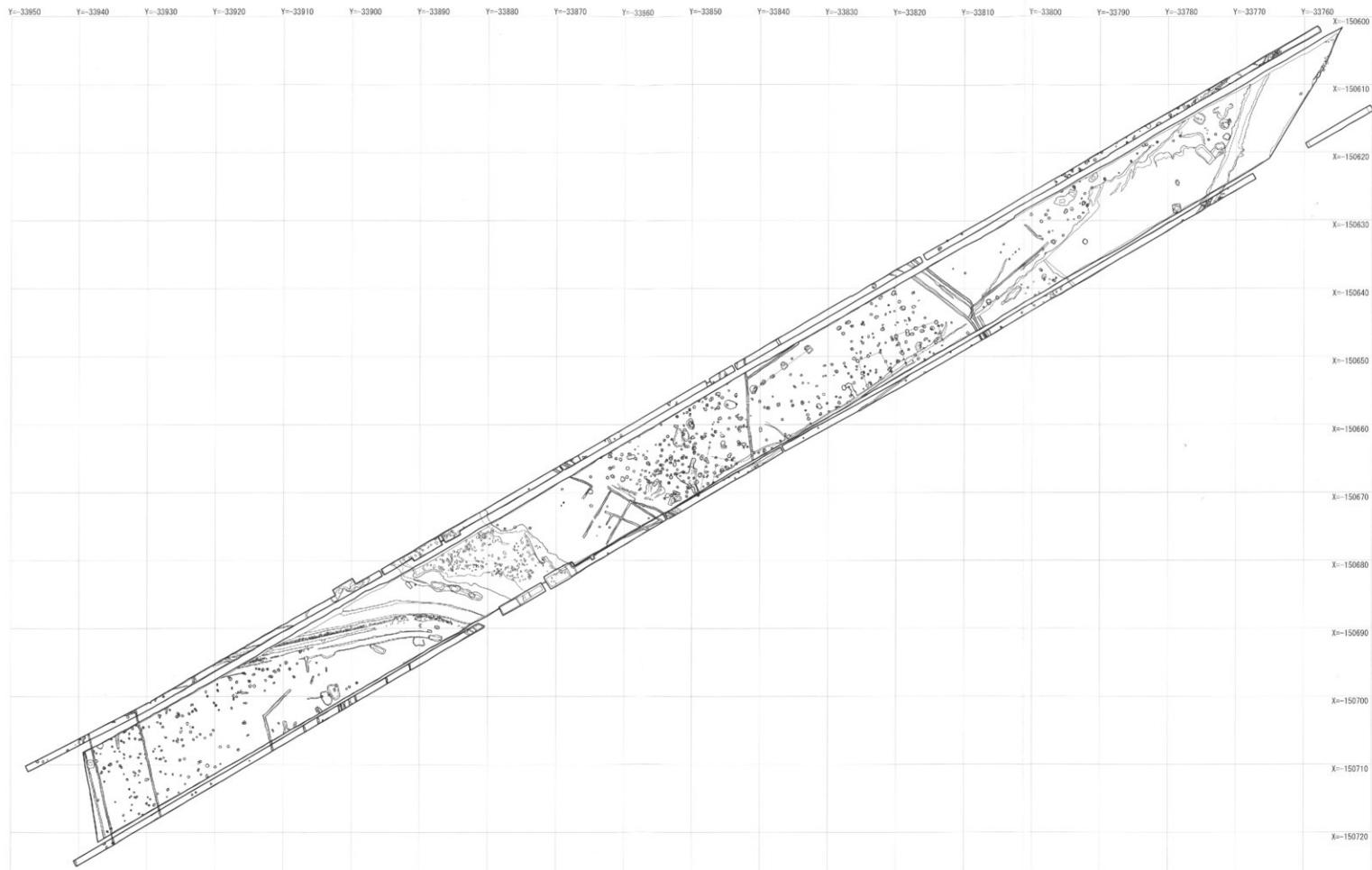
135～139は白磁である。135は玉縁をもつ甕の口縁部であり、大宰府編牛のIV類。136は碗。体部から逆「ハ」字状に直線的に開く。137はいわゆる口禿の皿で、口縁端部の釉薬を剥ぎ取り、内面見込みに1条の沈線を巡らせる。大宰府IX類。138は皿耳壺の口縁部と思われる。端部を外方に折り返して玉縁状に仕上げる。内外面に施釉する。139は皿で、口縁端部を外反させる。15世紀～16世紀頃と考えられる。

140～142は青磁。140は竜泉窯系I-4類の碗で、体部内面にヘラ描きの文様を施し、口縁部を数ヶ所窪ませて、輪花状に仕上げる。141は竜泉窯系の錦蓮弁文碗である。142は壺の口縁部と思われ、ヘラによって花弁状に仕上げている。

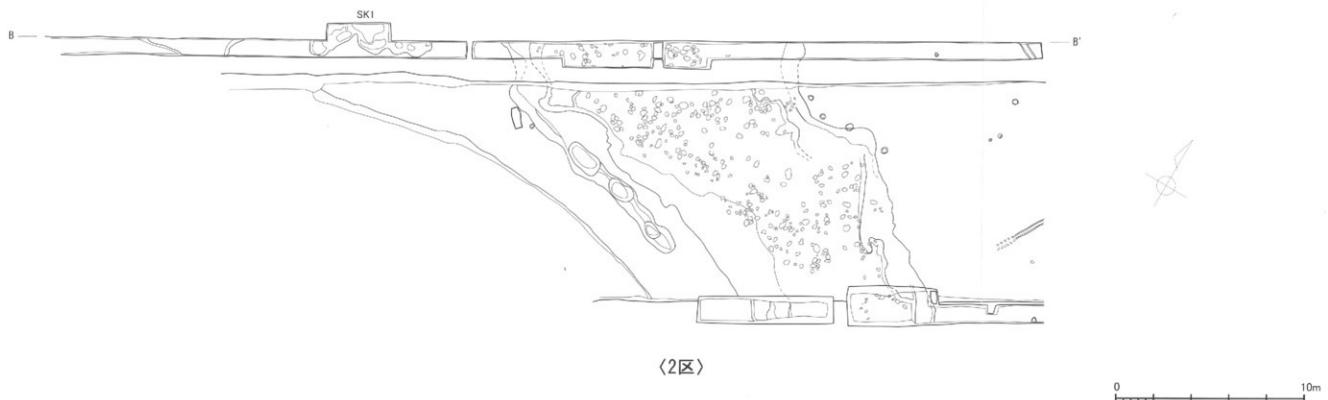
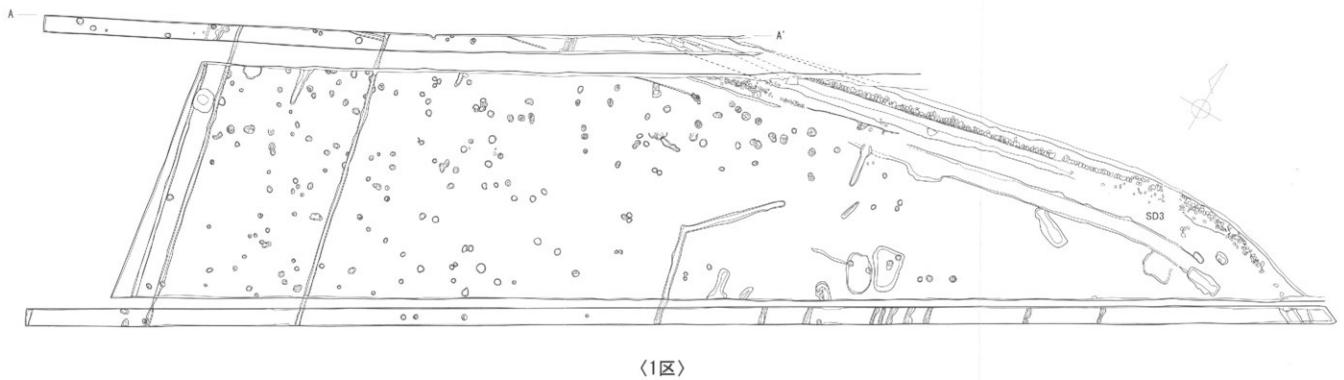
143は陶器で、鉢の口縁部である。内面はハケ状工具によって斜め方向のカキメを入れる。色調は暗赤褐色を呈し、生産地は不明である。144は備前焼のすり鉢。内面には、1単位7条からなるすり目が入れられている。

145は瓦質土器のすり鉢。口縁端部を内側に折り返して突帯状にする。色調は黒灰色を呈する。内面にはすり目がみられるが、小片のため単位は不明である。

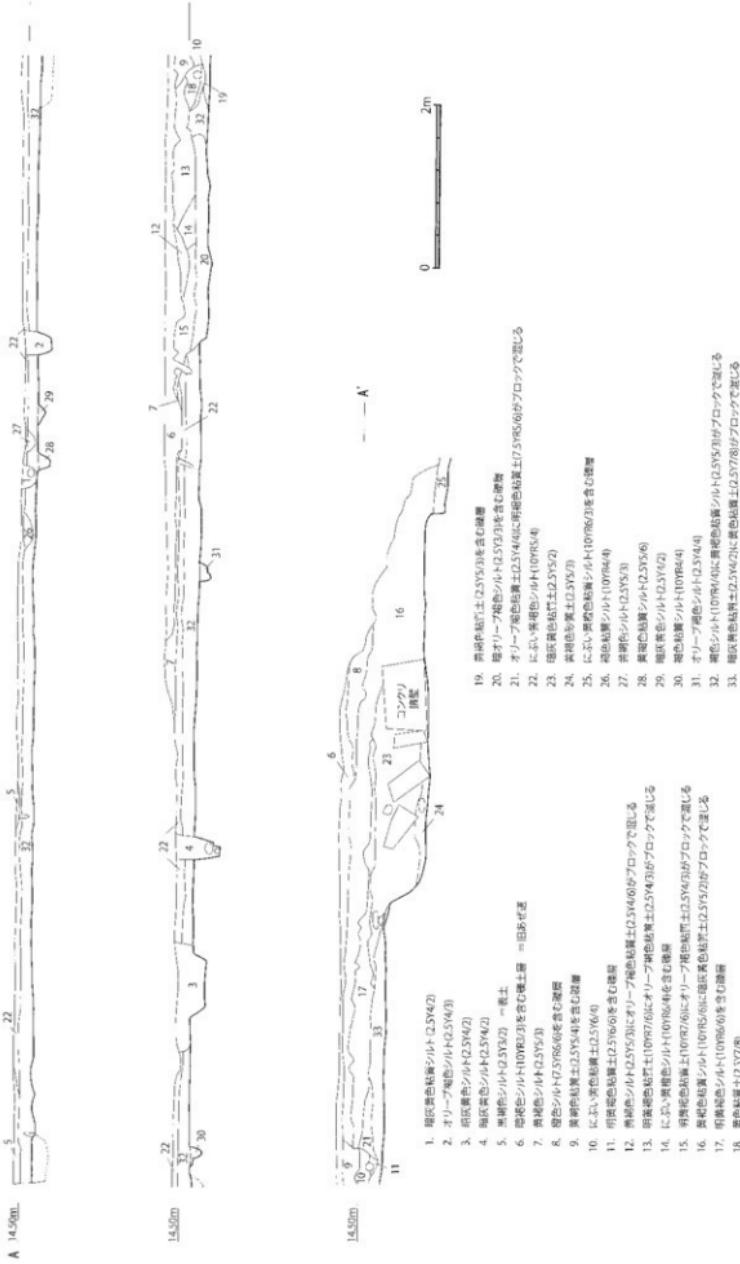
146は石鐵。凹基無茎式で、石材は安山岩である。最大長2.2cm、最大幅1.8cm、最大厚0.3cmをはかる。



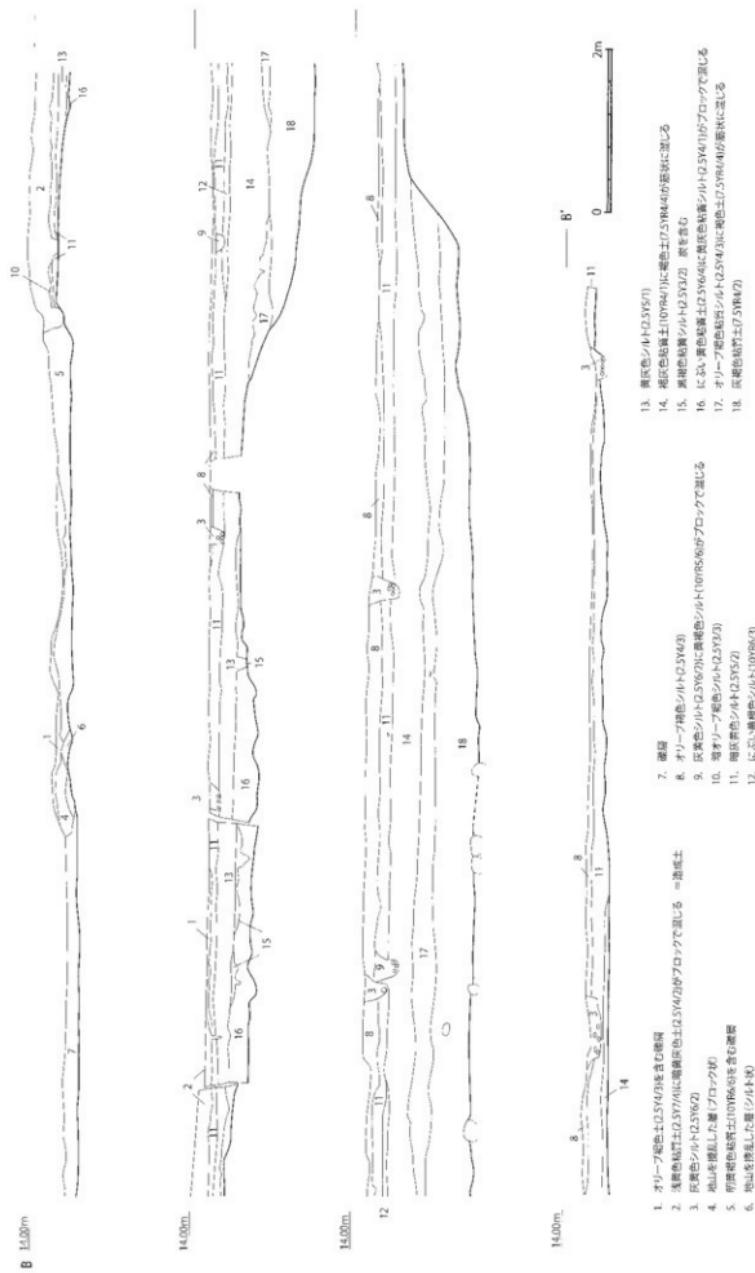
第3-3図 1~4区遺構配置図 (S=1/500)



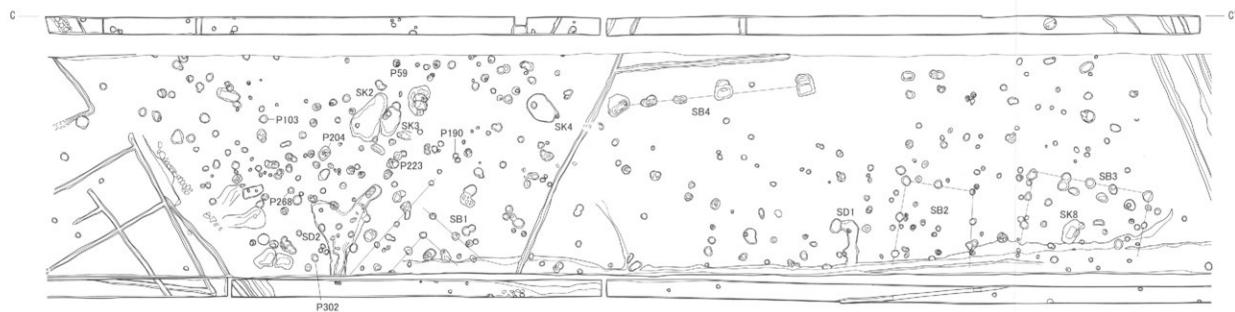
第3-4図 1・2区遺構配置図 (S=1/200)



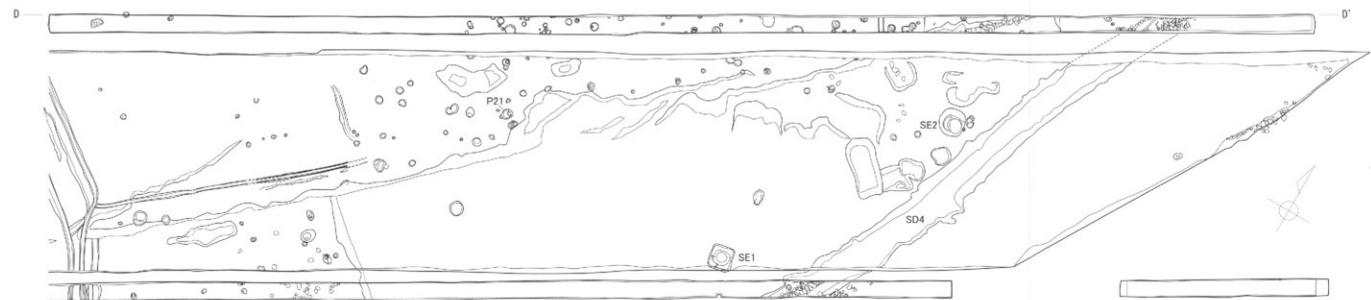
第3-5図 1区北壁土層断面図 (S=1/60)



第3-6図 2区壁土層断面図 (S=1/60)

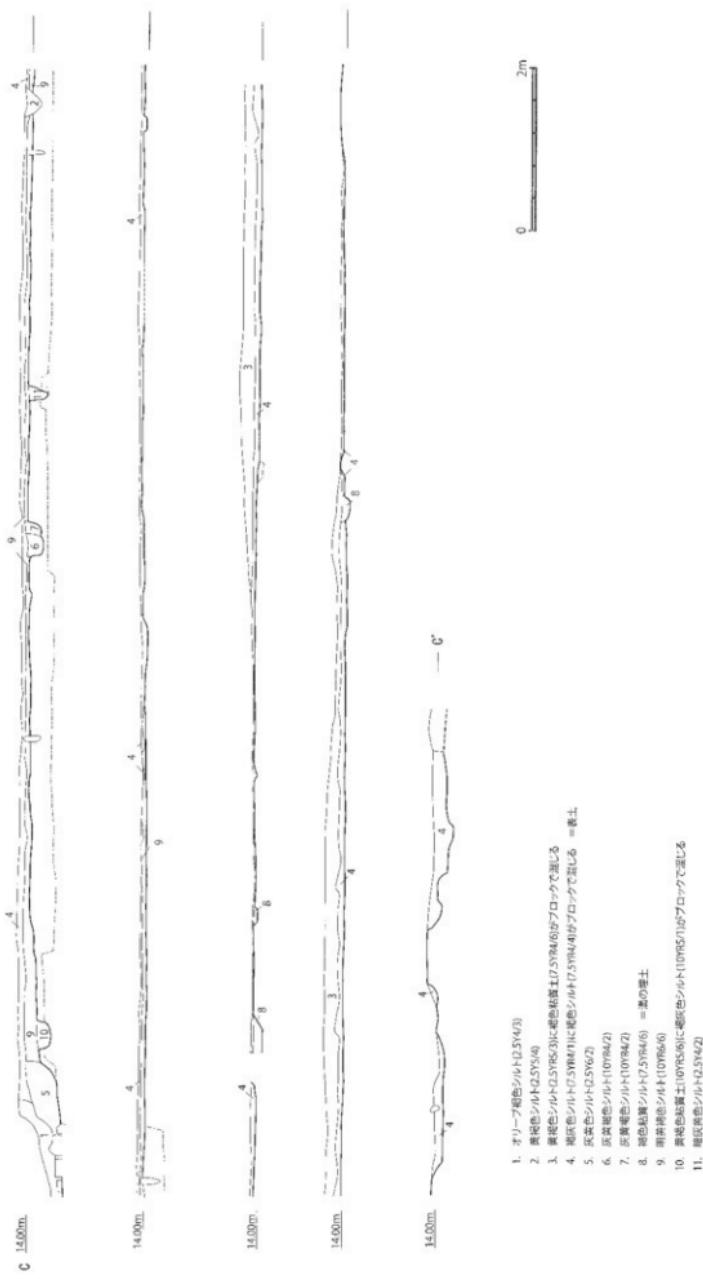


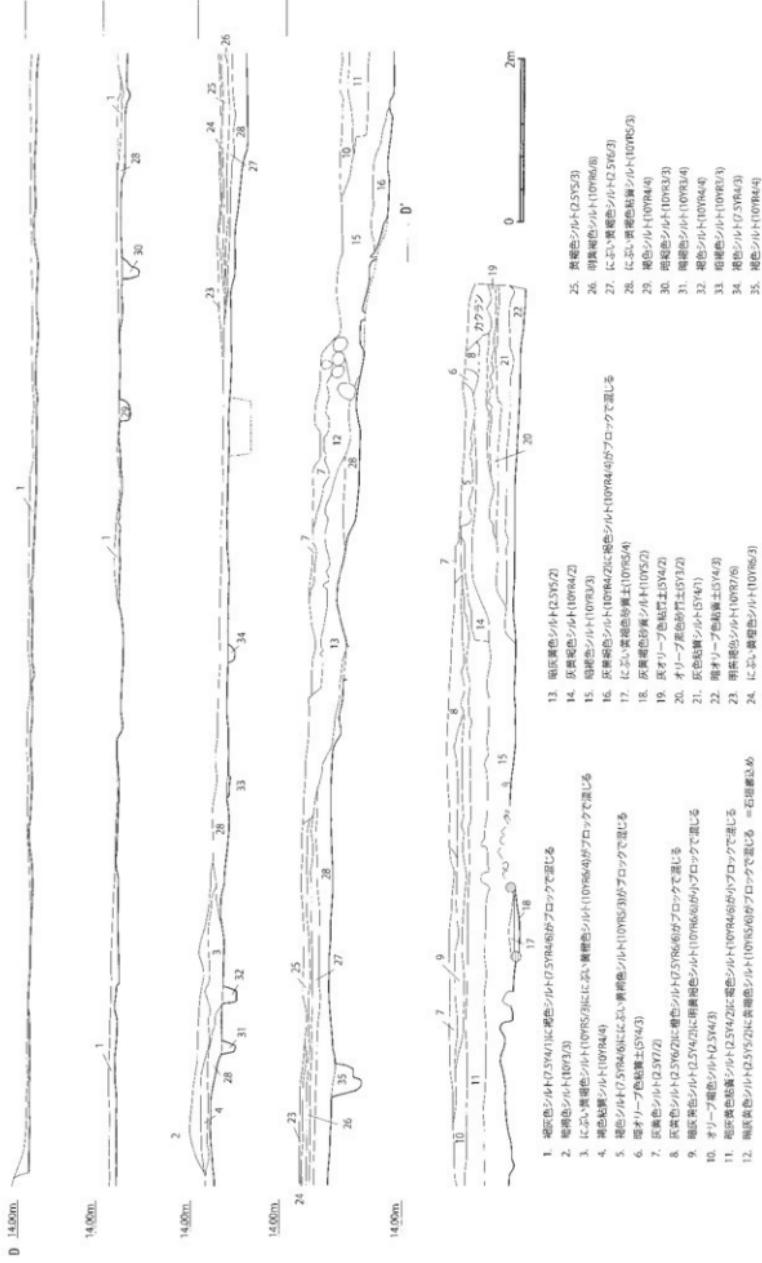
〈3区〉



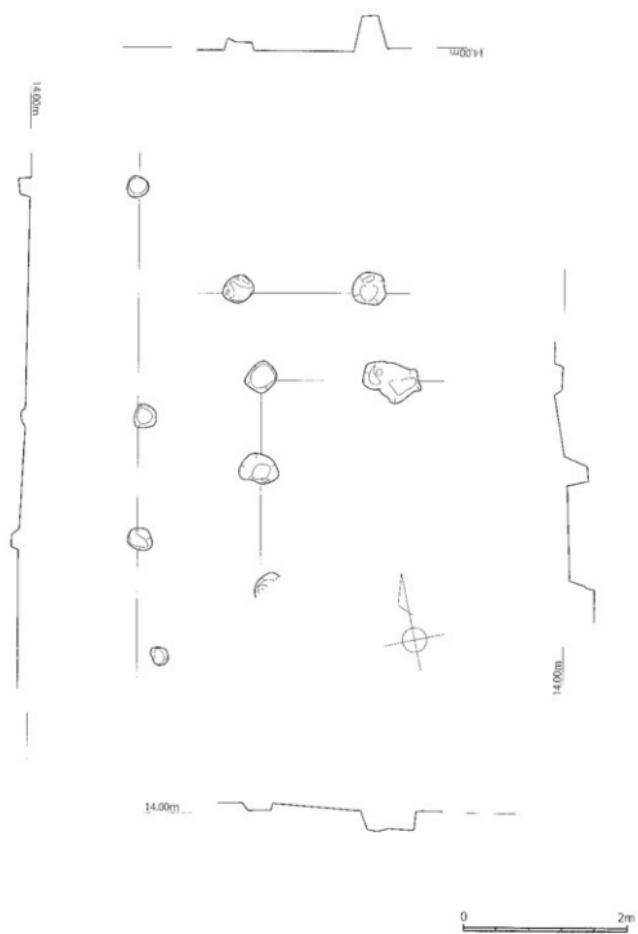
〈4区〉

第3-8図 3区北壁土層断面図 (S=1/60)

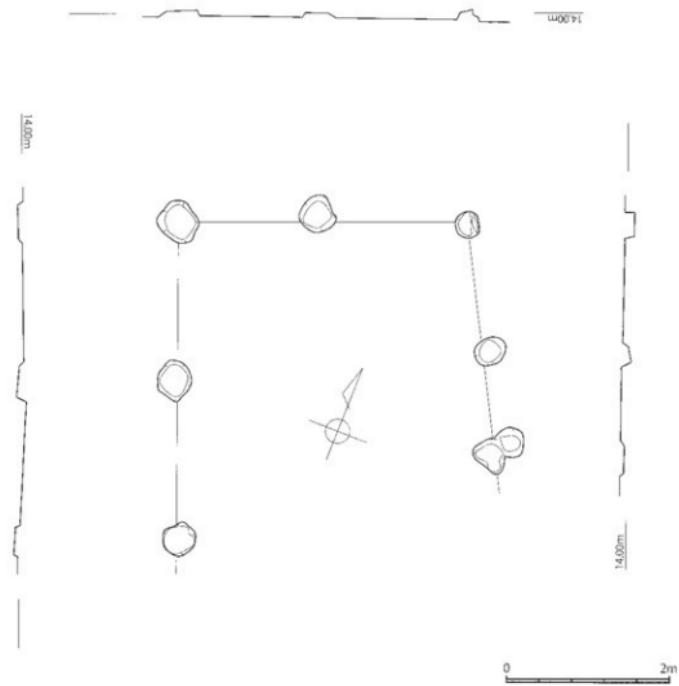




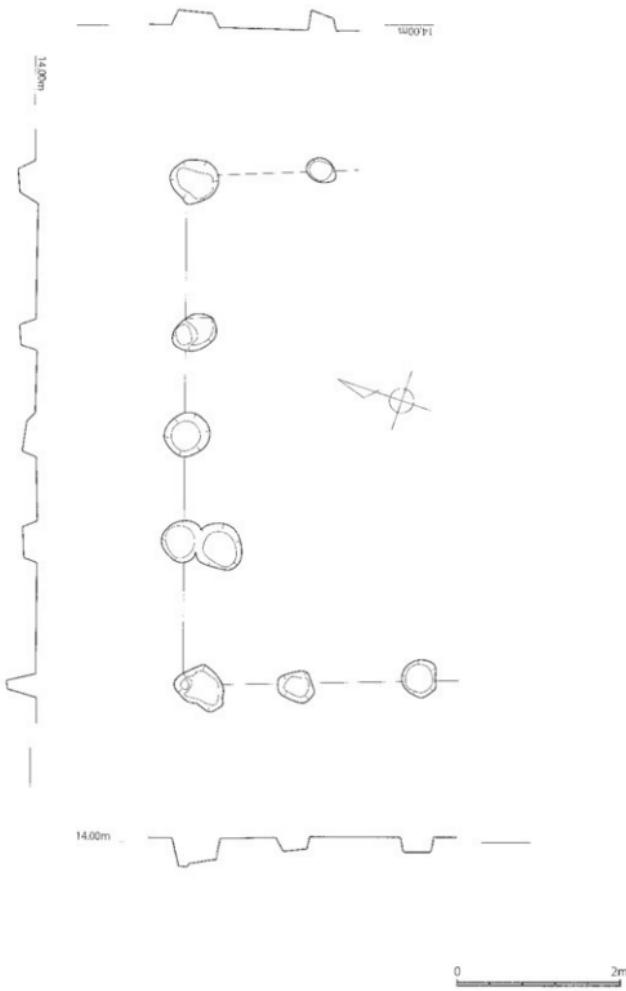
第3-9図 4区北壁土層断面図 (S=1/60)



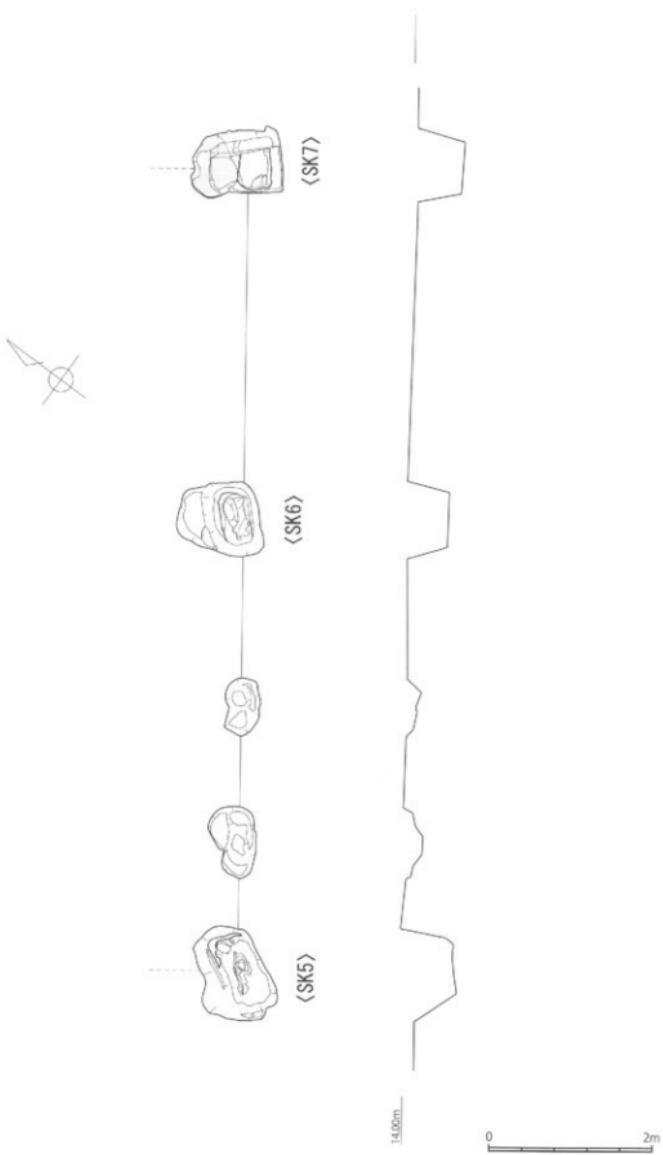
第3-10図 SB1 実測図 ($S=1/60$)



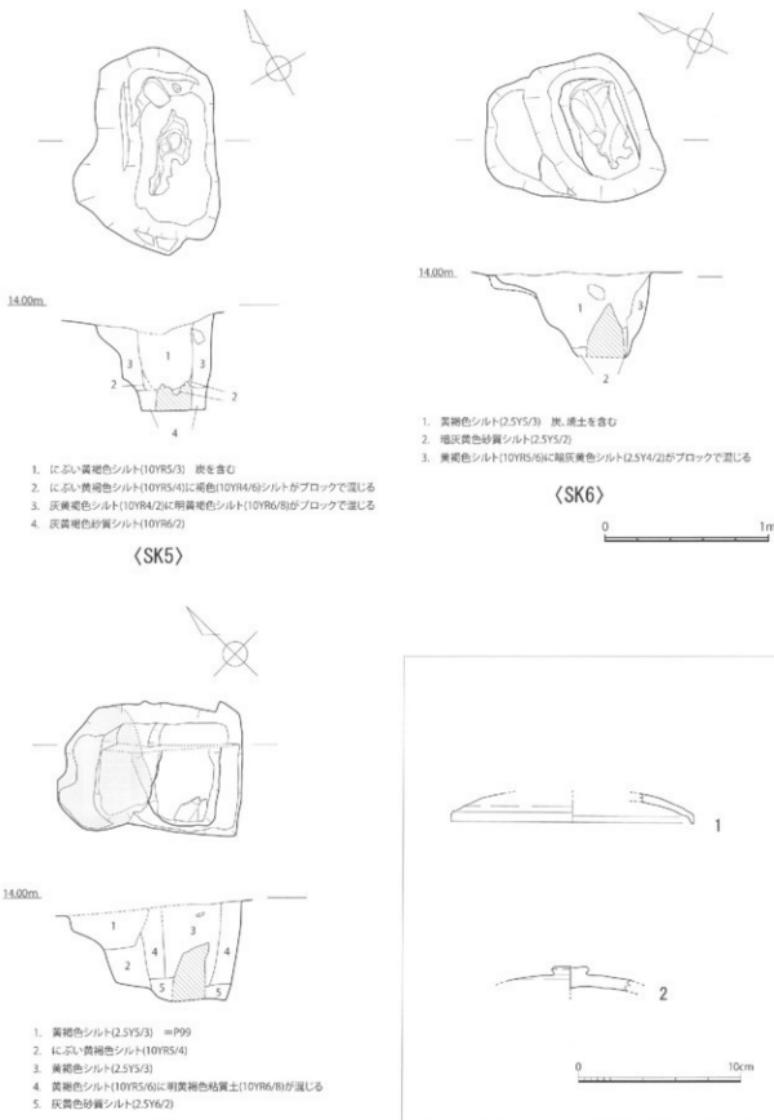
第3-11図 SB2実測図 ($S=1/60$)



第3-12図 SB3 実測図 ($S=1/60$)

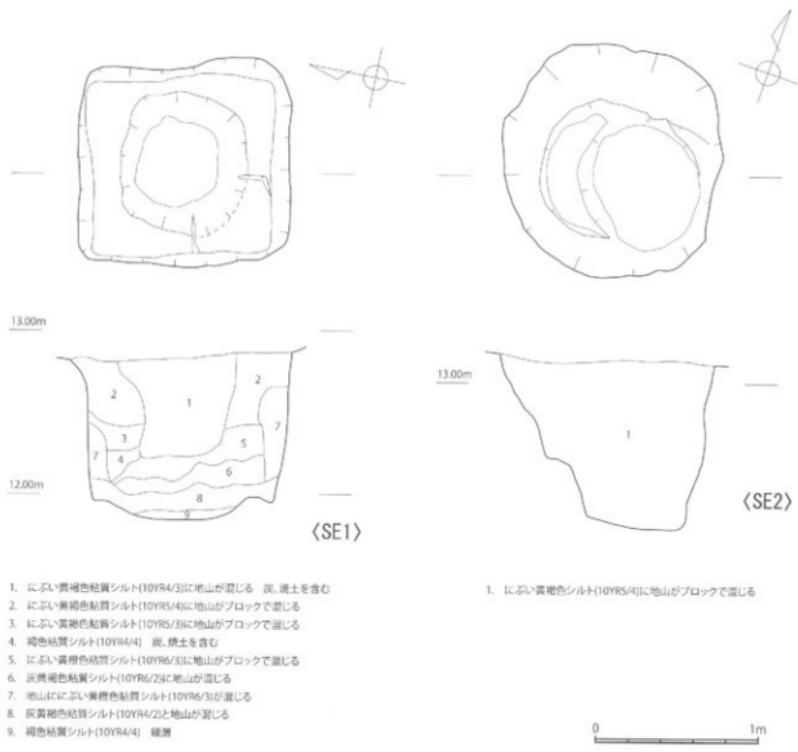


第3-13図 SB4 実測図 (S=1/60)



第3-15図 出土遺物実測図 (S=1/3)

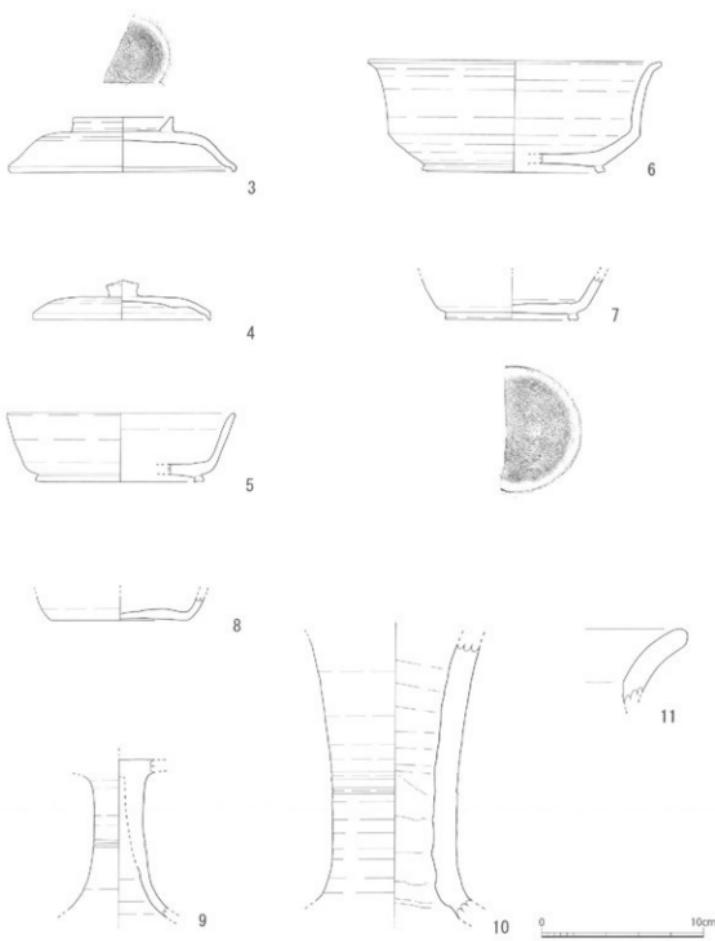
第3-14図 SB4関連遺構実測図 (S=1/30)



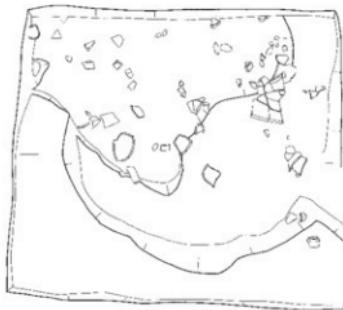
第3-16図 SE1・SE2 実測図 (S=1/30)



SE1 遺物出土状況（東から）



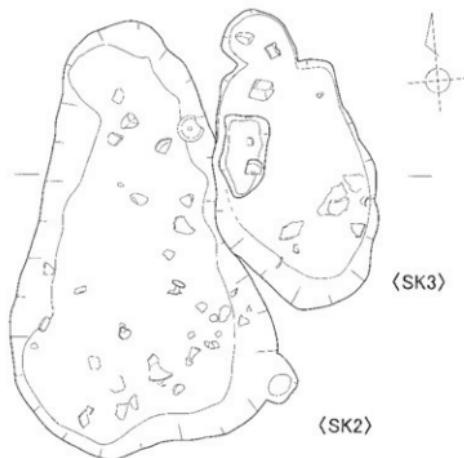
第3-17図 SE1・SE2出土遺物実測図 (S=1/3)



〈SK1〉



1. 黒色粘質シルト(10YR2/1)に暗赤褐色土(SYR3/4)が小ブロックで混じる



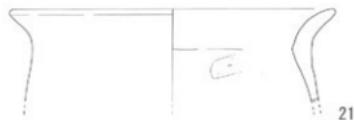
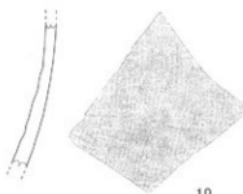
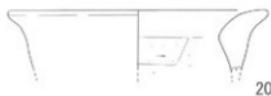
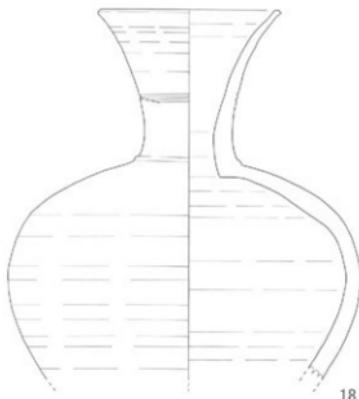
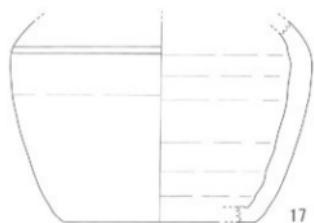
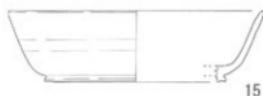
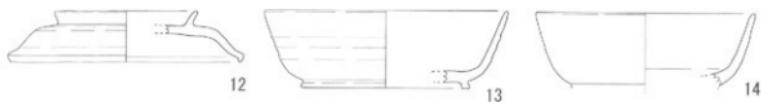
〈SK2〉



1. 黄褐色シルト(10YR5/6) 淡、鐵土を含む
2. 黄褐色シルト(2.5Y5/4) 淡、鐵土を含む

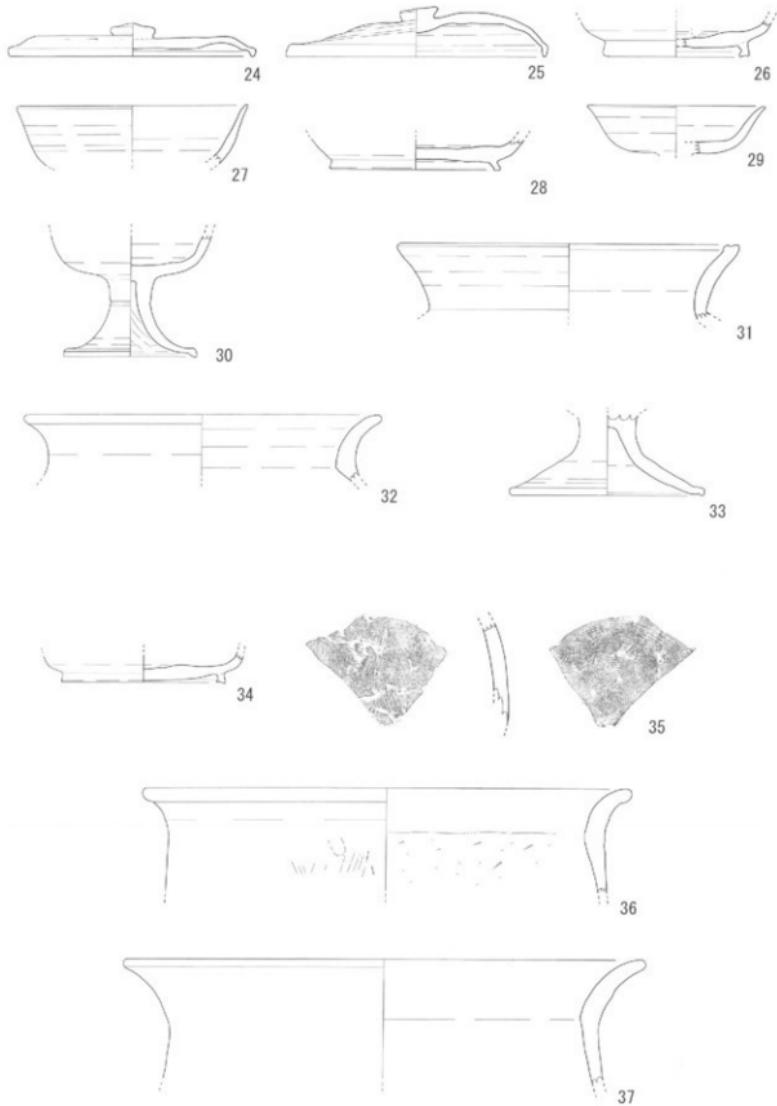
0 1m

第3-18図 SK1・SK2・SK3実測図 (S=1/30)

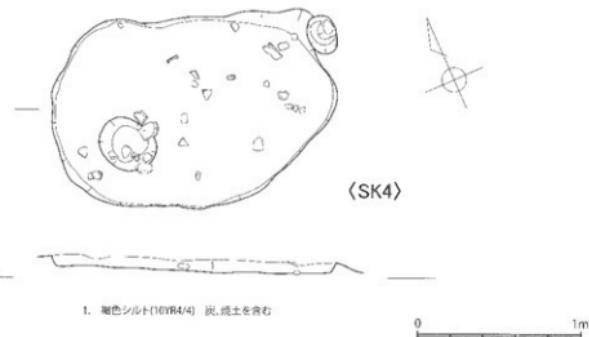
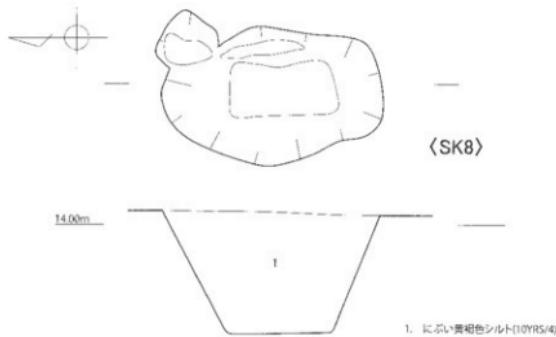


0 10cm

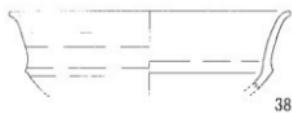
第3-19図 SK1出土遺物実測図 (S=1/3)



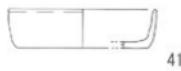
第3-20図 SK2・SK3出土遺物実測図 (S=1/3)



第3-21図 SK4・SK8実測図 (S=1/30)



第3-22図 SK4・SK8出土遺物実測図 (S=1/3)



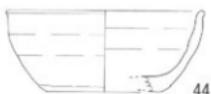
41



42



43



44



45



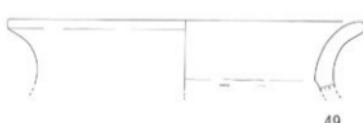
46



47



48



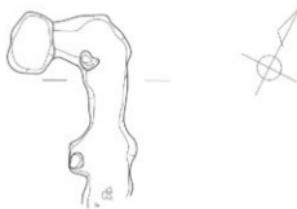
49



50



第3-23図 遺構出土遺物実測図 (S=1/3)



14.00m.

〈SD1〉

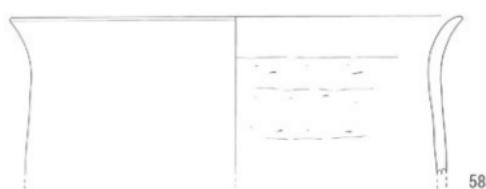
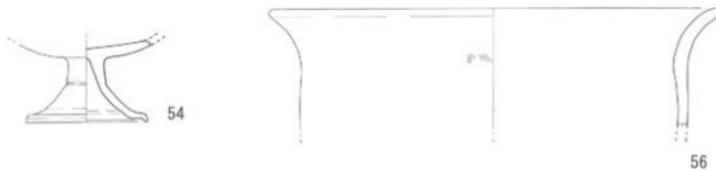


14.00m.

〈SD2〉

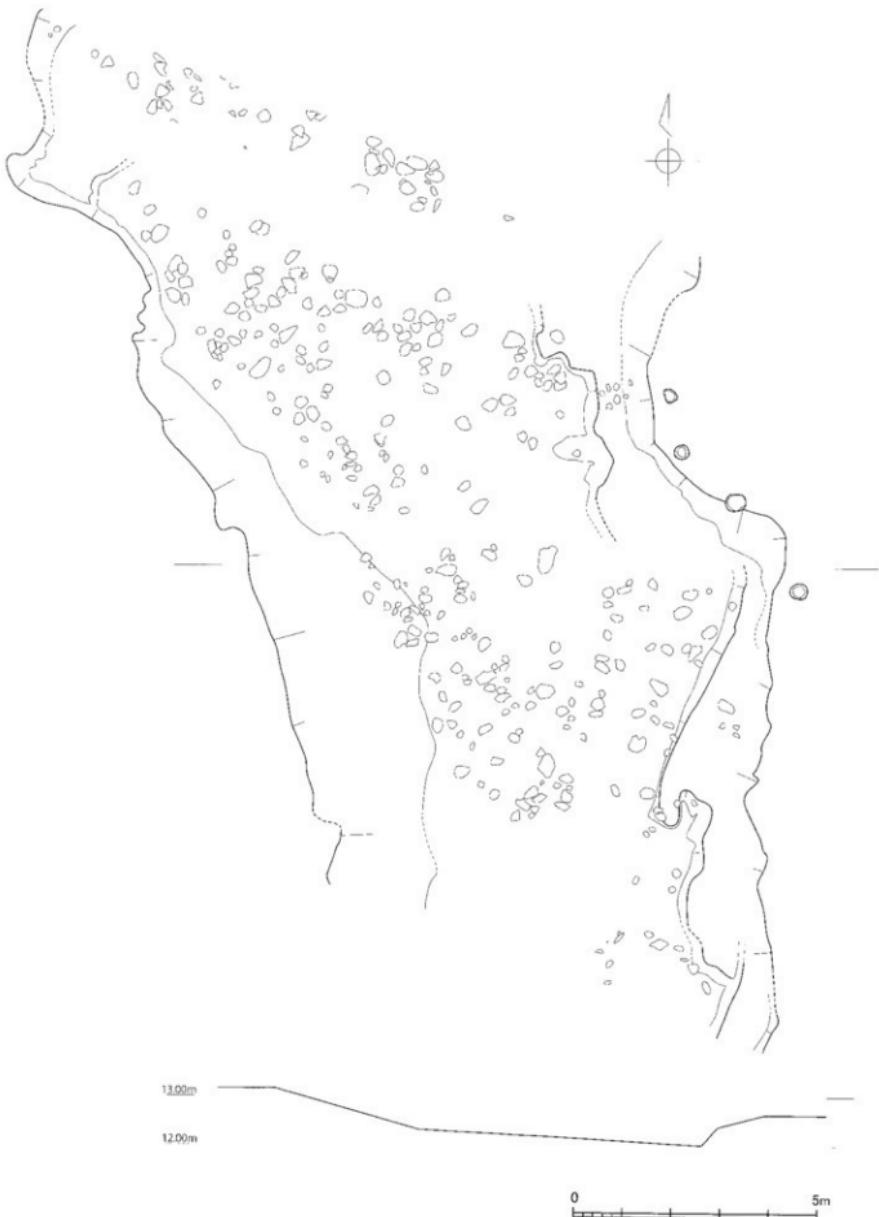
0 2m

第3-24図 SD1・SD2実測図 ($S=1/60$)

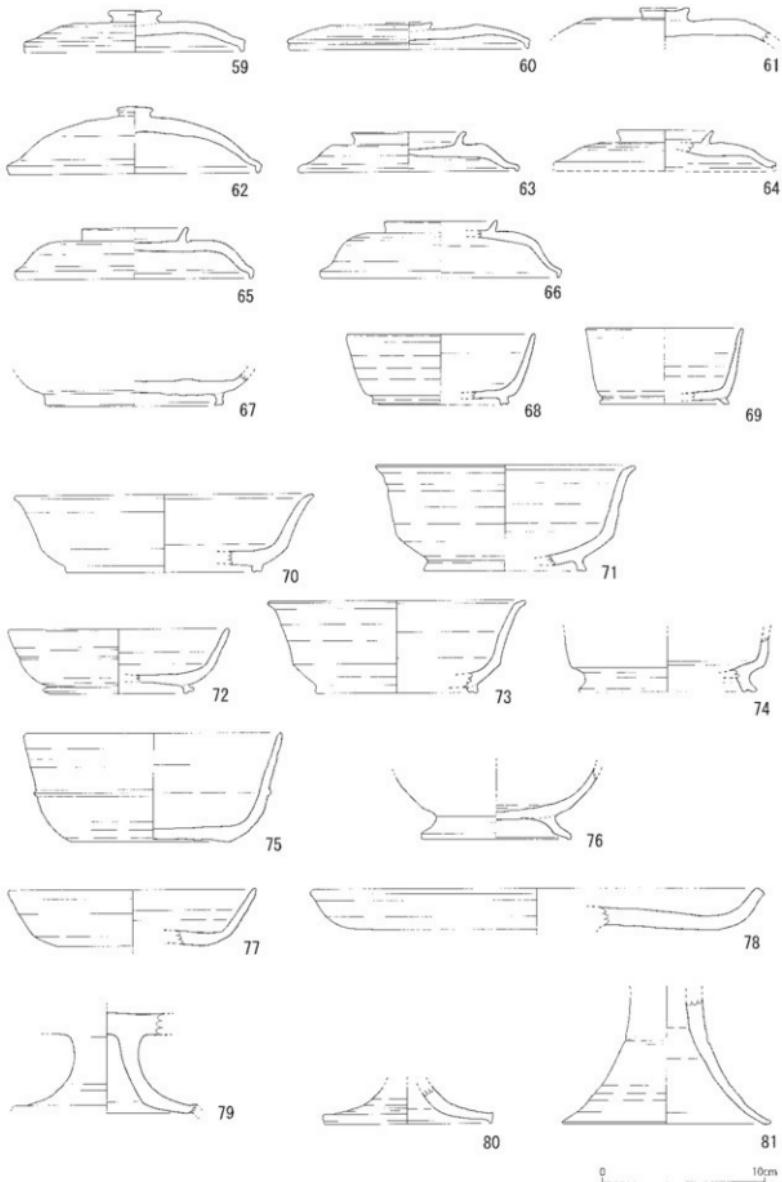


0 10cm

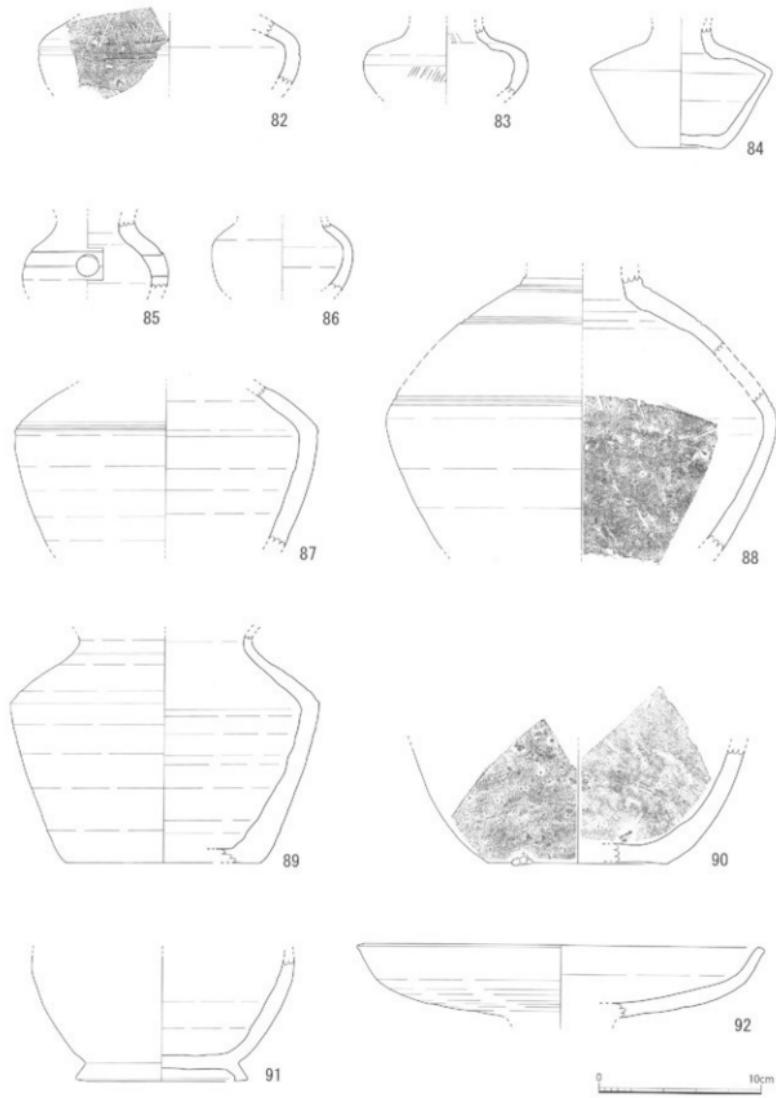
第3-25図 SD1・SD2出土遺物実測図 (S=1/3)



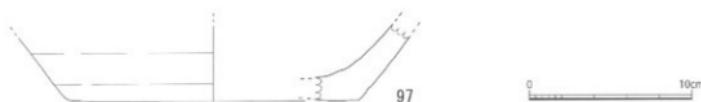
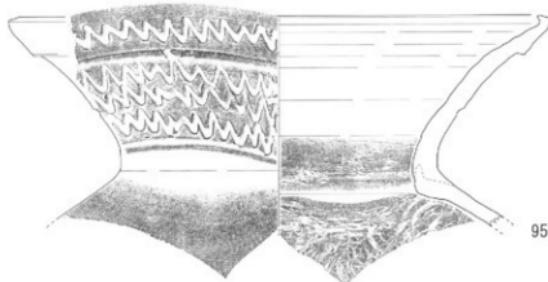
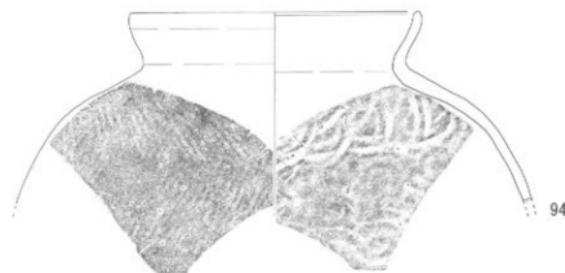
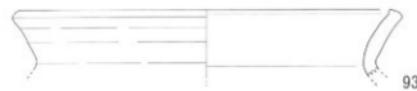
第3-26図 大溝実測図 ($S=1/100$)



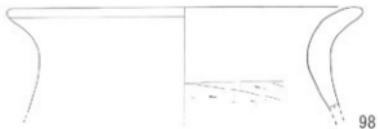
第3-27図 大溝出土遺物実測図① (S=1/3)



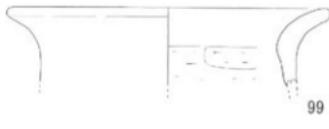
第3-28図 大溝出土遺物実測図② (S=1/3)



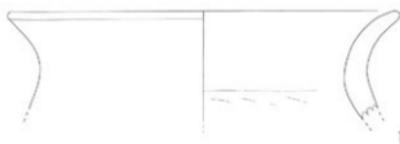
第3-29図 大溝出土遺物実測図③ (S=1/3)



98



99



100



101



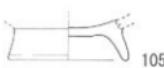
102



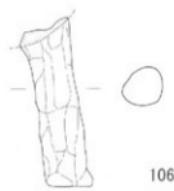
103



104



105



106



107



第3-30図 大溝出土遺物実測図④ (S=1/3)



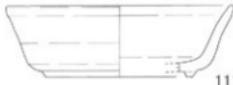
108



109



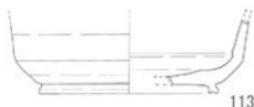
110



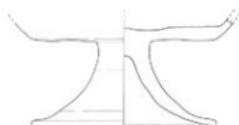
111



112



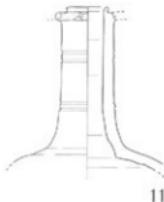
113



114



115



116



117



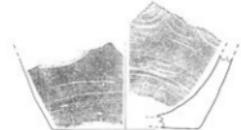
118



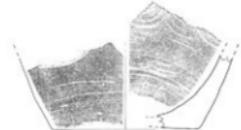
119



120

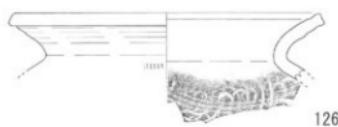
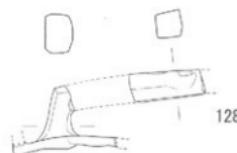
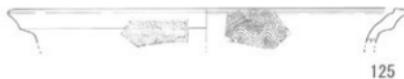
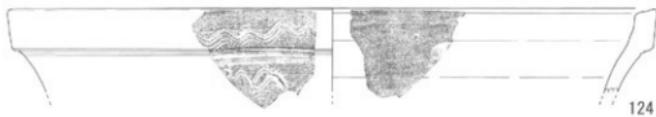
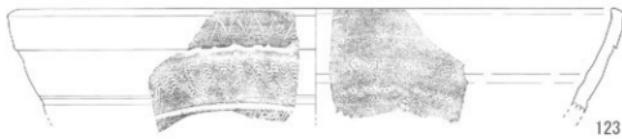


121

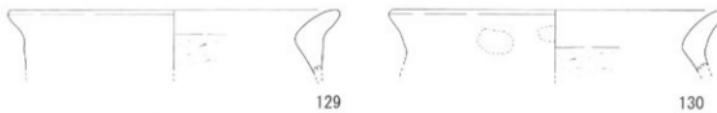


122

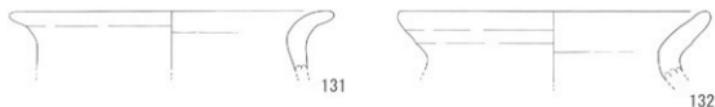
第3-31図 遺構外出土遺物実測図① ($S=1/3$)



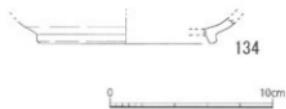
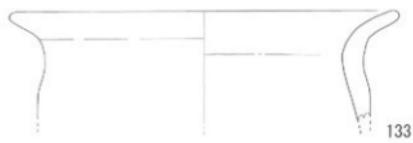
127



130

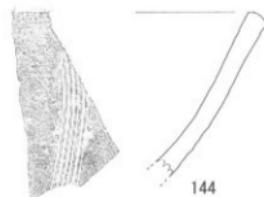


132

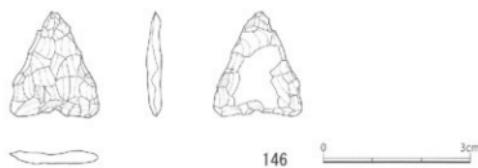


0 10cm

第3-32図 遺構外出土遺物実測図② (S=1/3)



0 10cm



第3-33図 遺構外出土遺物実測図③ (S=1/3; S=1/1)

第4節 6区の調査結果

1. 調査区の概況

6区の基本層序は、①暗褐色砂質土（水田耕土）②明黄褐色粘質土③灰褐色砂質土④にぶい灰褐色砂質土（水田床土）⑤灰褐色砂質土（水田客土）⑥暗茶灰褐色砂質土（マンガン片含む）⑦暗茶褐色土⑧黄灰褐色土⑨淡黄灰色土⑩綠灰色土となっている。

調査は①～④層まで重機で掘削し⑤層から人力による掘削を行なった。調査区の南側については調査前の時点では⑥層まで削られており、⑦層上面がすでに見えている状態だった。サブトレチによる下層確認を行なった結果、⑥、⑦、⑧、⑨層の上面において遺構が検出された。⑩層からは遺物は得られていない。

⑥層上面ではピット約40基、溝2条が検出できた。出土遺物から中世および中世以降のものと考えられる。また上面では検出できなかったが木棺墓を1基検出した。遺物は上師器環と明鏡10枚が出土した。

⑦層上面ではピット約350基等を検出した。N4で特に遺構が密集しており、中には碗型滓、羽口、須恵器（奈良～平安時代）を含んだ土坑が見つかっている。N2では堅穴建物跡1棟（SI06）を検出した。なお、このSI06は平成18年度調査段階ではSI01としていたものであるが、平成19年度調査において新たに5棟の堅穴建物跡が検出されたことを受けて、資料整理を行い、SI06に名称変更したものである。

⑧層上面ではピット群及び土坑を11基検出した。また⑧層中層で堅穴建物跡1棟（SI01）を検出した。

⑨層上面では堅穴建物跡4棟（SI02～05）、掘立柱建物跡（SB01～03）、墓3基以上を検出した。なお、調査区東端において土器溜まりを確認している。

遺物は弥生土器（後期～終末期）、須恵器、上師器（古墳時代全般、奈良～平安時代）、陶磁器、石器、鉄製品等コンテナ約200箱出土した。

2. 古代の遺構と遺物

1) 遺構の概要

堅穴建物跡、掘立柱建物跡の特徴については下記のとおりである。

2) 堅穴建物跡

SI01（挿図3-36図）

平面形・規模 径約3.6mの円形又は多角形

柱穴 2基以上

柱間 約1.2mか

中央土坑 中央部に炭集中箇所

出土遺物 弥生土器 堅穴内土坑から発見

6区中央の北寄りで検出された。SI02の廃絶後に造られた建物跡である。建物跡内からは炭化物・焼土がまとまって出土しており、焼失建物の可能性が高い。

壁帯溝の状態から、この建物跡の平面形は梢円形または多角形と考えられる。主柱穴は2基ないし3基であろうか。

中央ピットの範囲で炭混じりの焼土が検出された。焼土は、床面よりやや高い位置で検出され

たもの（焼上1）と、床面が被熱しているもの（焼土2・3）の2者があった。焼上1は範囲にひろがり、焼上2は、柱穴を覆っている。この焼上は、地山との間に炭化物を含む暗茶色土が間層として堆積しており、屋根土が焼けて崩落した可能性がある。

覆土中には、炭化物が多く含まれている。小片が多く、建築部材と判断できなかった。

出土遺物は、III～V-4様式までが含まれる。全体的に風化が著しい。

147は中期の壺の口縁部である。148が床面から出土している。V様式で後期後半頃の土器である。頸部から口縁部にかけて「く」字状に折れ曲がる。149～154については、小片で磨耗が著しいが、151、152などのV-3様式が多い傾向が見られる。

以上のことから、この建物跡は弥生時代後期前葉頃の建物と考えられる。

SI02（挿図3-37～3-38図）

平面形・規模 推定径約6.4mの胴張隅丸方形

柱穴 3基（4本構造）

柱間 約2.5～2.7m

中央土坑 底部に一面に炭

出土遺物 弥生土器（後期）・砥石・碧玉？

6区北側、SI05の北西側を切る形で検出された。つまり、SI05が廃絶した後に構築された建物である。建物跡内からは屋根土と考えられる焼土塊が出土している。

形状は胴張隅丸方形を呈し、壁の外側には壁帶溝が設けられていた。床面はほぼ平坦だが、中央ピットの残存する規模は南北約0.8m、東西約0.6m、最も残存状態のよい東壁で深さ0.3mである。4本構造で、そのうち3基の柱穴を検出した。方位は真北を指している。

床面で検出した主柱穴3基は、方形に配置されており、柱間が約2.5mと広く設けられている。このうち1基では、径30cmの柱痕と思われる土層が確認された。また、南側の主柱穴2基のさらに南側で検出した柱穴は、建て替えあるいは主柱を支える支柱の可能性があるが、断定はできなかった。

中央ピットは2段に掘られており、平面形は梢円形をなす。埋土はレンズ状に堆積し、底面には多くの炭化物が含まれていた（挿図3-37図）。壁帶溝は、北側に向かって伸びている。

出土遺物は、V-2～3様式を中心としてまとまっているが、いずれも風化が著しい。

156はV-2様式または3様式を示している。凹線を巡らし内面は頸部から下の調整はヘラケズリである。160は同様に凹線を巡らし口縁端部が外側へやや広がり丸く收める。

165は頸部に貝殻による文様を描いている。器壁は薄く作られている。

169、170のような鼓型の土器を伴うことが特徴であろう。175は高坏の脚部である。内側にヘラケズリを残す。177から179が碧玉の小片で、中央土坑周辺で出土した。極僅かな小片である。上房跡の可能性は不明であるが、特別な施設であると考えられる。180は土塊、非常に軽いものである。181は石錘である。

以上のことから、SI02は、後期の前葉頃の建物と考えられる。

SI03（挿図3-39～3-41図）

平面形・規模 推定径約5.0mの胴張隅丸方形

柱穴 3基（4本構造）

柱間 約2.5m
中央土坑 北東部周辺から内部にかけて赤変硬化
底部一面に炭
出土遺物 弥生土器（後期）
SI04の北側、東端に位置する。平面形は胴張隅丸方形を呈し、東西4.5m、南北5.0mを測る。もっとも残存状態のよい西壁は高さ約30cmである。検出された土柱穴は3基であるが、本来は4本柱の構造と考えられる。主柱穴のうち1基の底面には、支柱の可能性のある小さなピット状の窪みがみられた。柱間は約2.5mで、SI02とほぼ同規模である。

中央ピットは平面形不整円形で、皿状の断面形を呈し、覆土はレンズ状の堆積であった。西側で柱穴と極近い。SI05との新旧関係は把握できないが、床面の標高は、北側土肩からSI05の廃絶後に造られたSI02の床面とほぼ同レベルに位置している。

出土遺物は、V-2～3様式を中心として出土している。

186～190がV-2様式の特徴を示しており、内面はヘラケズリで外面は頭部に笠状工具による連続圧痕を施している。

186は回線を巡らし内面は頭部から下の調整はヘラケズリである。口縁端部が外側へやや広がり丸く収める。187は体部にハケ目調整が顕著である。口縁部はやや直立しており、V-3様式の特徴も持っている。188は頭部に笠状工具による連続圧痕を施している。190は貝殻による条痕を残し、体部はハケ目調整が顕著である。

196、197は口縁端部に回線を巡らすが、上部への発達はしていない。V-2と並行するものであろうか。198は口縁端部の内側を僅かにつまみ出している。

以上のことから、SI03は、後期の前葉頃の建物と考えられる。

SI04（挿図3-42～3-43図）

平面形・規模 径約5.6mの胴張隅丸方形
柱穴 4基（4本構造）
柱間 約2.5m
中央土坑 底部一面に炭・上部に両面披熱石
出土遺物 弥生土器（後期）・刀子

6区東側中央、SI05の東方約2mに位置する。平面形は胴張隅丸方形で、壁帶溝が廻っている。この堅穴建物跡は炭化した垂木材・屋根材が残存しており焼失建物と考える。

規模は東西5.6m、南北5.4mを測る。残存状態の良い西北壁は高さ約30cmである。床面ではピットが6基検出された。

中央ピットは建物跡のほぼ中央に位置し、平面形は梢円形、断面形は皿状を呈している。内部の上はレンズ状に堆積しており、西側から中央ピット上部まで焼土粒を多く含んだ茶色土の上に1×0.6mの焼土塊が落ち込んでいた。中央ピット付近から東南側は厚さ5～7cmの貼床が確認された。

東北側では、土屋根の下地材が炭化して残存していた。住居跡内の覆土には、下位層では焼上・炭化物が多く含まれ、部分的に検出面でも焼土が認められた。1・2層除去後は、北西部分で暗黄褐色上層が検出された。

北東及び西側では焼土粒を多く含む層が検出された。焼土粒が主体の層で、焼土そのものではない。調査を進めると、下位に向かうにつれて焼土粒が大きくなる傾向にあり、最下部は床面に接して焼土塊が堆積した部分もある。これらはピット底面より高い位置で検出されている。また、床面より高い位置に堆積している焼土塊もあり、焼土塊・焼土粒は十層板が焼け落ちたものと考えられる。

床面が被熱し赤化している部分は3箇所確認した。被熱部分は20～60cmの規模で、さほど大きくなはないが、中央ピット内部は著しく赤変し、中の扁平石も大きく被熱している。壁が被熱した部分が、北で約1.5m、西で約50cmの範囲で確認された。

出土遺物は、V-2様式が中心で、内面はヘラケズリ、口縁端部に擬凹線が巡っている。218～219の鼓形器台、220、221などの小型の上製品も出土している。

以上のことから、SI04は、後期の中葉頃の建物と考えられる。

SI05（挿図3-44図）

平面形・規模 径約6.8mの円形

柱穴 5基（6本構造）

柱間 約2.2m～2.7m

中央土坑 底部一面に炭・周辺被熱硬化

出土遺物 弥生土器（後期初頭）、ガラス玉

6区北辺中央、SI02の東側に位置し、これに切られている。床面レベルがSI02よりも約10cm高いため、西北側は欠損している。平面形は円形で、北西・北東には周溝が廻っている。また、覆土の検出時及び掘削時にSB01が検出された。

規模は東西6.8m、南北6.6mを測る。もっとも残存状態の良い西北壁は高さ約20cmである。床面ではピットが6基検出された。これらは半柱穴で、ほぼ正六角形に近い柱の配置であった。中には柱痕が確認されたものがあり、いずれも径20cm程度の大きさである。

中央ピットは住居跡のほぼ中央に位置し、平面形は不整形、断面形は皿状を呈している。内部の土はレンズ状に堆積し、焼土塊が落ち込んでいた。中央ピット付近から東南側は厚さ5～7cmの厚さで貼床が確認された。

床面が被熱し赤化している部分は2箇所確認した。被熱部分は20cm～1mの規模でやや大きい。また、壁が被熱した部分が、北で約1.5m、西で約50cmの範囲で確認された。

出土遺物は、222～228までが出土しており、いずれも床面出土である。ガラス玉が2個出土していることが注目される。弥生土器は、おそらくV-1またはV-2様式である。

224は鉢である。凹線を巡らし、内面はミガキである。225は小型の壺である。口縁部は単純で外側へ広がり、体部は中程で張った印象を受ける。

以上のことからSI05は中期末から後期初頭の廃絶であると考えられる。

SI06（挿図3-45図）

平面形・規模 径約5.6mの胴張隅丸方形か

柱穴 7本か？

中央土坑 下面被熱石、石の下に炭あり

出土遺物 弥生土器（終末期）

調査区の西側に位置している。上部は後世の影響で削り取られているが、壁帶溝の一部は残存している。床面の平面形は楕円形もしくは径約5.6mの胴張隅丸方形で、北西・北東には壁帶溝が廻っている。

中央ピットは住居跡のほぼ中央に位置し、平面形は楕円形、断面形は皿状を呈している。内部の土はレンズ状に堆積しており、焼上粒を多く含んだ茶色土（11層）の上に1m×0.6mの焼上塊が落ち込んでいた。中央ピット付近から東南側は厚さ5～7cmの貼床が確認された。

壁帶溝は、2つに分断された形で検出された。中には土器が伴っていたが、意図的なものかは判断できなかった。

床面が被熱し化している部分は3箇所確認した。被熱部分は20～60cmの規模で、さほど大きくなはない。出土遺物は、壺、甕の体部が多く出土したもの、終末期の口縁部229のみ掲載した。以上のことから、終末期の建物と考えられる。

3) 挖立柱建物跡

SB01（挿図3-50図）

規模は2間×2間で、柱間は約1.5～1.8mである。

6区東で検出された。柱穴の規模は直径約40cm、深さは約30cmを測る。

これらに伴う遺物は土師器、弥生土器の小片しか得られておらず図化できなかった。周辺の同規模の柱穴から古墳時代の須恵器（7世紀）の底部が出土している。

SB02（挿図3-49図）

規模は1間×2間で、柱間は約2.6mである。

SI01の南側で検出された。柱穴の規模は直径約40cm、深さは約30cmを測る。造構埋土は灰褐色土である。弥生土器の小片が出土している。

SB03（挿図3-49図）

SI04と重なる位置で検出した。SI04が廃絶後に造られている。規模は1間×2間で、柱間は約2.2mである。柱穴の規模は直径約30cm、深さは30cmを測る。造構埋土は灰褐色土である。弥生土器の小片が出土している。

4) 上坑

以下検出された主な土坑と出土遺物を述べる。

SK05（挿図3-46図）

調査区南側で検出された土坑である。埋土には粘土を含み、底面は皿状を呈している。出土遺物は、弥生時代後期初頭を中心で、性格は墓の可能性がある。

230～236が出土している（挿図3-46～3-47図）。230は大型の壺で、口縁端部に浮文を巡らす。頸部には突帯を巡らしている。231は底部。232はヘラ状工具による3条の平行沈線を巡らす。内部はヘラケズリである。IV-2様式であろう。233は櫛状工具による平行沈線を巡らす。234は口縁部に11条の平行沈線を巡らす。V-3様式。235、236は小型の壺である。236は口縁端部刻目を施し、頸部には列状工具による刺突文が巡っている。V-1様式である。

SK06

調査区中央で検出された土坑である。237はV-1様式で、238はV様式である。239はV-1様式で、口縁部は内傾し、凹線文を巡らす（挿図3-47図）。

SK12

調査区東側中央で検出された性格が不明の土坑である。廐棄土坑の可能性がある。240は小型の壺で口縁部に櫛状工具による擬凹線を巡らす。V-2もしくはV-3様式である。241～248は甕でいずれもV-1様式であろう。口縁端部は内傾し沈線を巡らし、頸部には列状に刺突文を巡らせている（挿図3-47図）。

SK07

調査区西側中央で検出された土坑である。249～251は甕や高坏を含み、V-1様式である（挿図3-48図）。

SK17

254～255までV-1様式の弥生土器が出土している（挿図3-48図）。この他、図示していないが、須恵器の环身や、単純口縁の壺などが焼土と供に出土しており、古墳時代の営みは確認されている。

SK02（鍛冶関連土坑、挿図3-51図）

小型の羽口や楕円形、9世紀の輪状つまみの蓋、坏が埋土上位から出土しており、廐棄土坑と考えられる。

SK22～SK24

調査区南側で検出された大型の土坑である。埋土下位では粘土を含み、掘形底面は半らに整えられていた。柱穴と考えられる。

3. 中世の遺構と遺物

中世の遺構としては、木棺墓、溝状遺構がある。

1) SK09（木棺墓、挿図3-53図）

掘形の規模は1.4m×1.0m、木棺は約1.1m×約0.6mで、掘形と棺の軸がずれている。検出時には上部に拳大の石が数点認められた。これらは墓石の可能性がある。木棺の構造などは不明である。

木棺内部から、人骨と土師器坏、錢貨が出土した（挿図3-54図）。大腿骨と頸骨と思われる骨を検出したが、土壤化が激しく取り上げられなかった。

269は坏で、底部から口縁部へやや内湾気味に聞く。口縁部に煤が付着している。風化が著しい。270～275は錢貨である。洪武通宝（初鑄年1368年）を含む明錢で、ほぼ中央に10枚以上がまとまって出土した。274は3枚、275は2枚が接着している。出土状況から六道錢と考えられる。

木棺の形状や出土遺物から中世後半頃のものと考えられる。

2) 溝状遺構

調査区の東端と西端で検出されている。その方向は現在の水田方向に一致している。当時の地割りを意味する可能性がある。出土遺物は土師器や陶磁器の小片である。

3) ピット群

ピット群の分布は、大きく調査区の北西部と南東部の2群に分かれる。出土した土師器は小片が多いものの、北西ピット群には平安期の遺物が多く、南西ピット群には中世の遺構が多く含まれる傾向にある。

4. 遺構に伴わない遺物

1) 包含層遺物の総量

包含層からは、弥生時代～現代にいたる様々な遺物が出土している。総量は整理用コンテナ約120箱である。

2) 包含層遺物の時期的傾向

弥生時代後期の土器が大多数を占めている。大半は複合口縁を有し、口縁部に多条の平行沈線を施す。これらは山陰地方に分布する後期土器に共通する特徴であり、この時期には安富平野が石見地方西部の土器分布圏に包摂されていたことを示す。一部には防長地方や安芸方面の土器も散見される。

また、古墳時代の須恵器の蓋杯や、壺、甕の体部片も多く出土しているが、奈良・平安時代の輪状つまみを持つタイプも多く出土している。

土師器については、古墳時代後期末の可能性のあるものも含まれる。中世前半の土器は小片で出土している。中世後半以降は、近世陶磁器を含め出土している。

3) 弥生土器

276～287は、IV-2様式～V-1様式である（挿図3-55図）。288～300は、V-2様式の土器である（挿図3-56図）。301～325はV-2～V-3様式の土器である（挿図3-57～3-58図）。331～333は8条の沈線が巡る（挿図3-59図）。334・336～341は高杯、335・342～347は鼓形器台である（挿図3-60図）。V-2～V-3様式である。358は注口を持つ土器の取手部分と思われる（挿図3-61図）。V-1様式か。

4) 石器

359～365は打製石斧である。366は不明。367、368は石錘である（挿図3-62図）。

5) 須恵器

坏蓋・坏身（挿図3-63図）

369～374は坏蓋である。369～372は6世紀後半頃のものである。369は上半部に稜線を施す。373、374は、天井部は丸みをもち、口縁端部内側に浅い沈線を施す。山本編年IV期。375と377はやや扁平に形成され、石見型とされるものである。376は受け部が上方に発達している。378はやや小型である。

坏蓋・つまみ（挿図3-64図）

380は宝珠つまみをもつ蓋で、天井部は丸みをもち口縁部にかえりをもつタイプである。381～383まで同時期ものであろう。384、385は乳頭状のつまみをもつタイプで、小型のものである。古墳時代後期のものである。388～390は小型の坏身で高台を持たないタイプである。

391は平坦な天井部から口縁端部は下方へ折れ曲がる。393～395は輪状つまみをもつ蓋で、天井部は平坦で下方へ「ハ」字状に開き、口縁端部はやや嘴状に折れ曲がる。395は内面に黒斑が認められ、転用硯の可能性がある。

396～402は高台付坏で高台の取り付け部から逆「ハ」字上に開く。400は回転ナデで仕上げ、やや外側に開く。金属器の模倣品の可能性がある。403は高台を持たない。

壺・提瓶等（挿図3-65図）

404は壺の口縁部である。端部には文様は無い。405、406は断面三角形で、2条の沈線を施す。

407は長頸壺である。408、409は小型の壺、体部にカキメを施す。410、411は壺の高台部である。
高坏・壺（挿図3-66図）

412は提瓶である。413は半瓶の可能性がある。414～423は高坏である。419は平行カキ目
が施されている。424～427は壺である。424は口縁部、425には体部に円孔がみられる。

壺・その他（挿図3-67図）

428～442は壺である。口縁端部に特徴をもち、三角形や尖り気味に收めるものもある。435
は薄手で横瓶の可能性がある。437は上馬である。装飾が施されているものであろうか。尾の部
分である。438は坏である。平安期の坏で、底部側面に絞り痕が強くみられる。

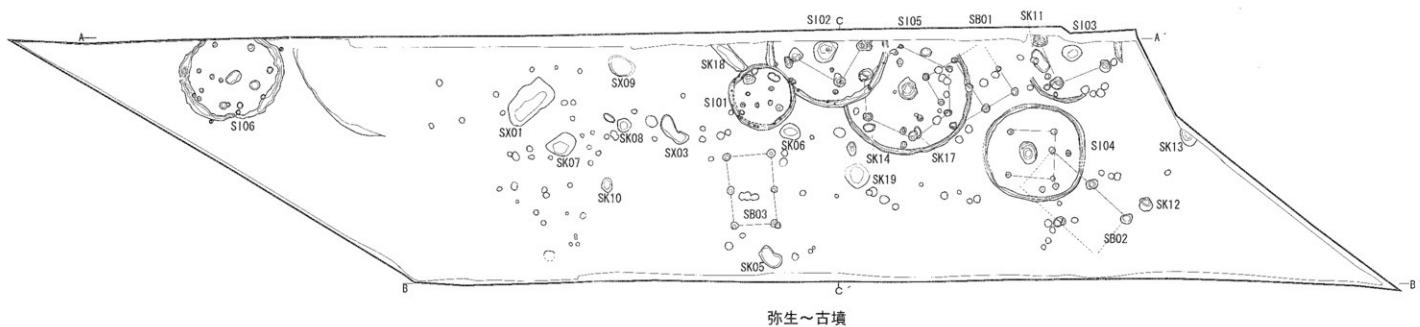
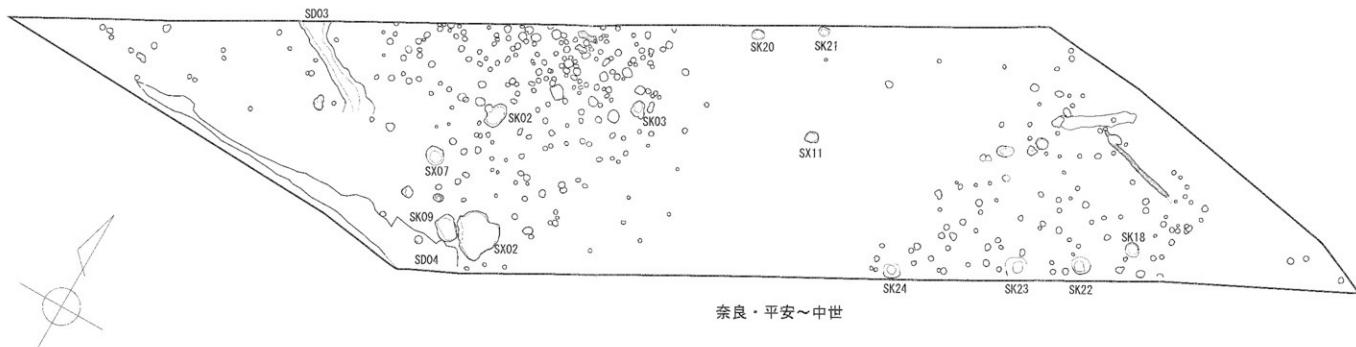
6) 土師器（挿図3-68～3-69図）

440～448まで壺の口縁部もしくは体部である。頸部から「く」字状に折れ曲がる。450は取っ
手部分である。451は管状の模倣品であろうか。

452、453は薄手で開き気味の皿である。中世後半のものと思われる。また平安時代頃の高台
を持つ坏のタイプ455～457が出土している。458、459は皿である。458は体部が丸みをおび
て立ち上がるものの。459は浅く、口縁端部が丸くおさまる。460は瓦賀鍋である。内面はハケ目
調整で脚が付かないタイプである。

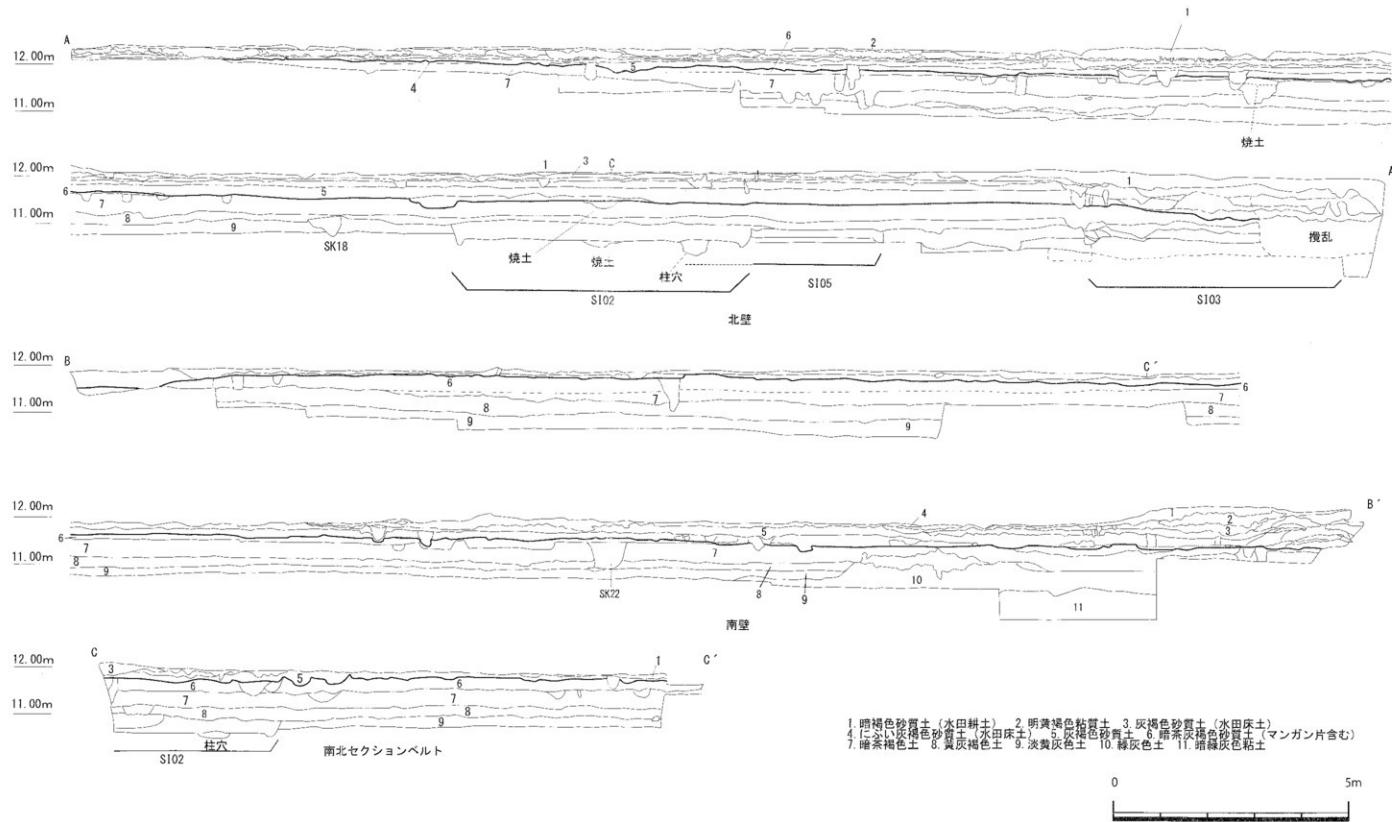
7) 陶磁器（挿図3-69図）

461は白磁の碗である。玉縁状の口縁部を持つIV類。462は白磁碗V類の高台部である。463、
464は青磁碗B1類。465は碗D類の高台部である。466は青白磁の合子。467はC群の碗である。
16世紀後半頃か。468、469は備前の摺鉢である。時期は不明。

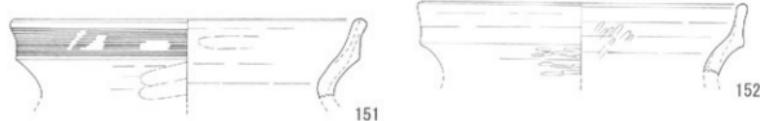
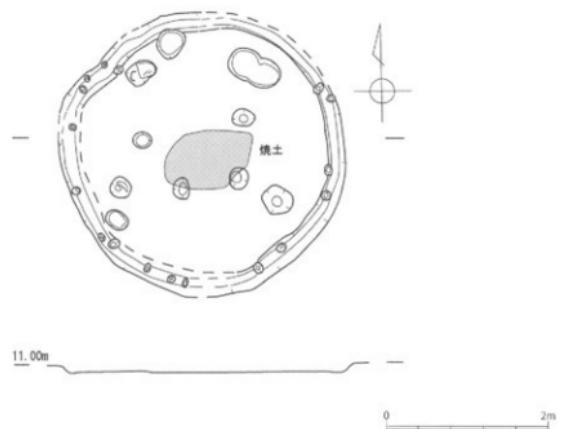


0
10m
1/200

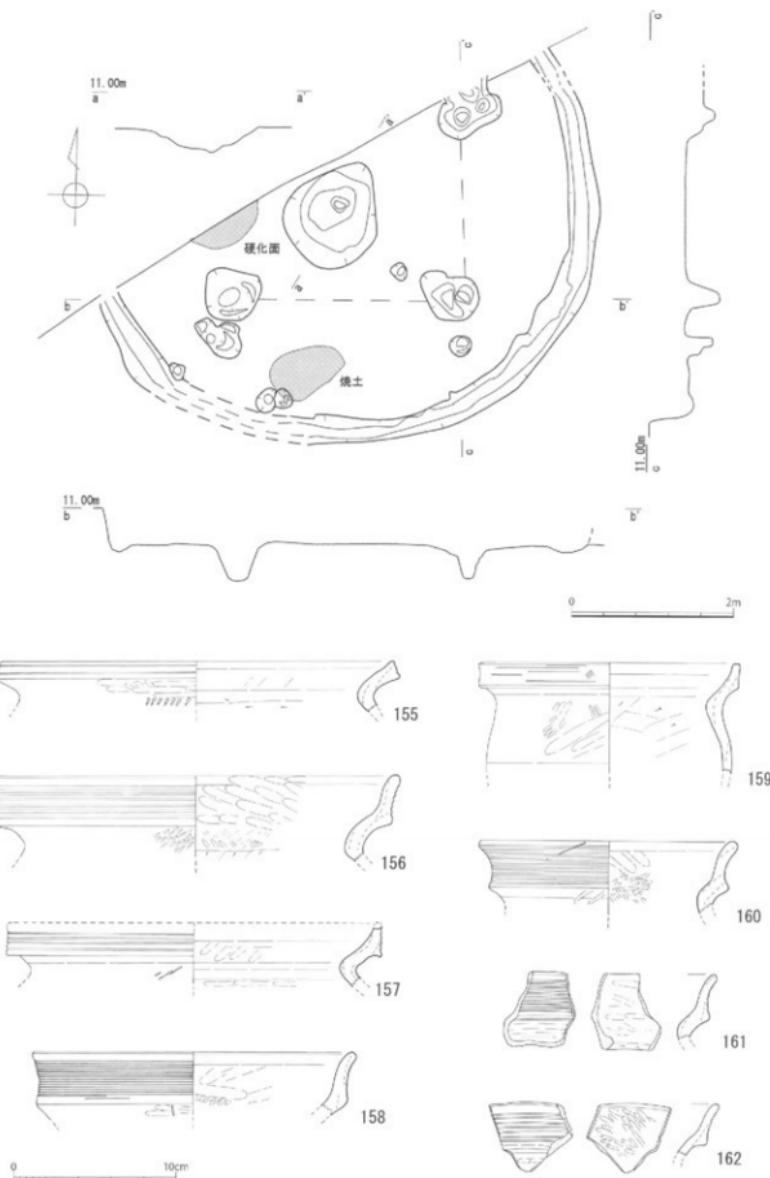
第3-34図 6区遺構配置図 (S=1/200)



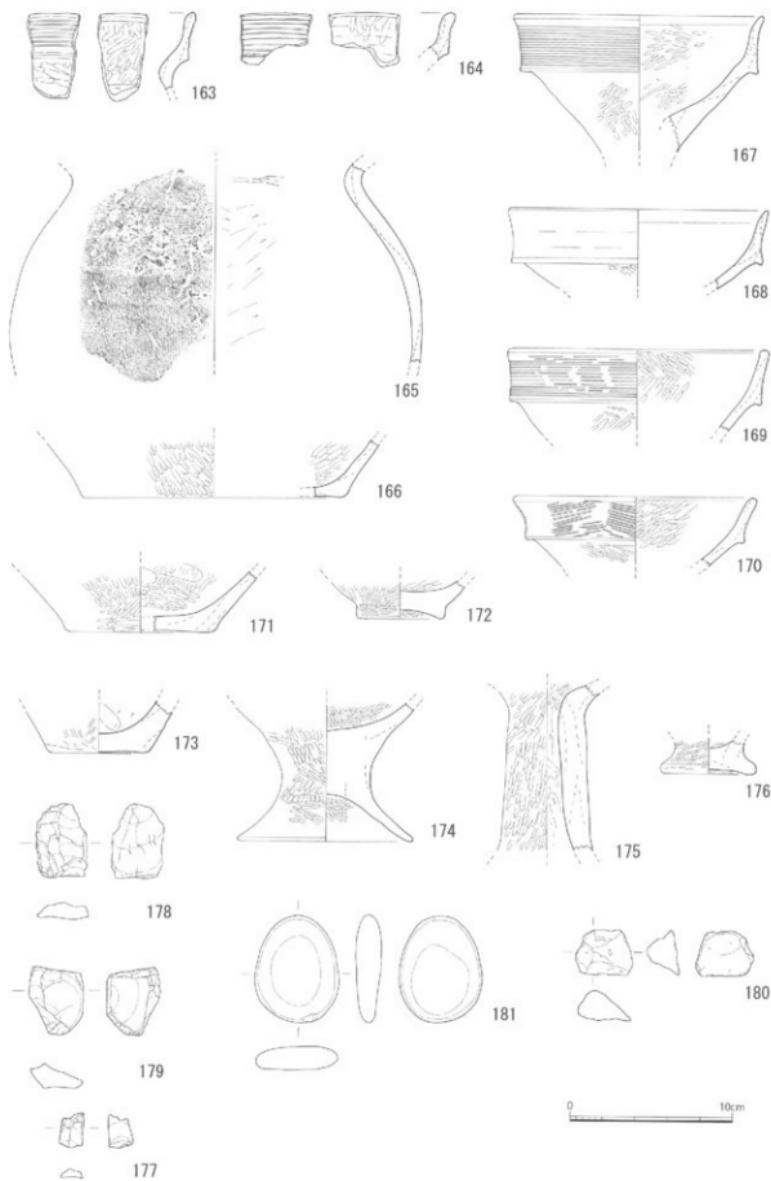
第3-35図 6区土層断面図 (S=1/80)



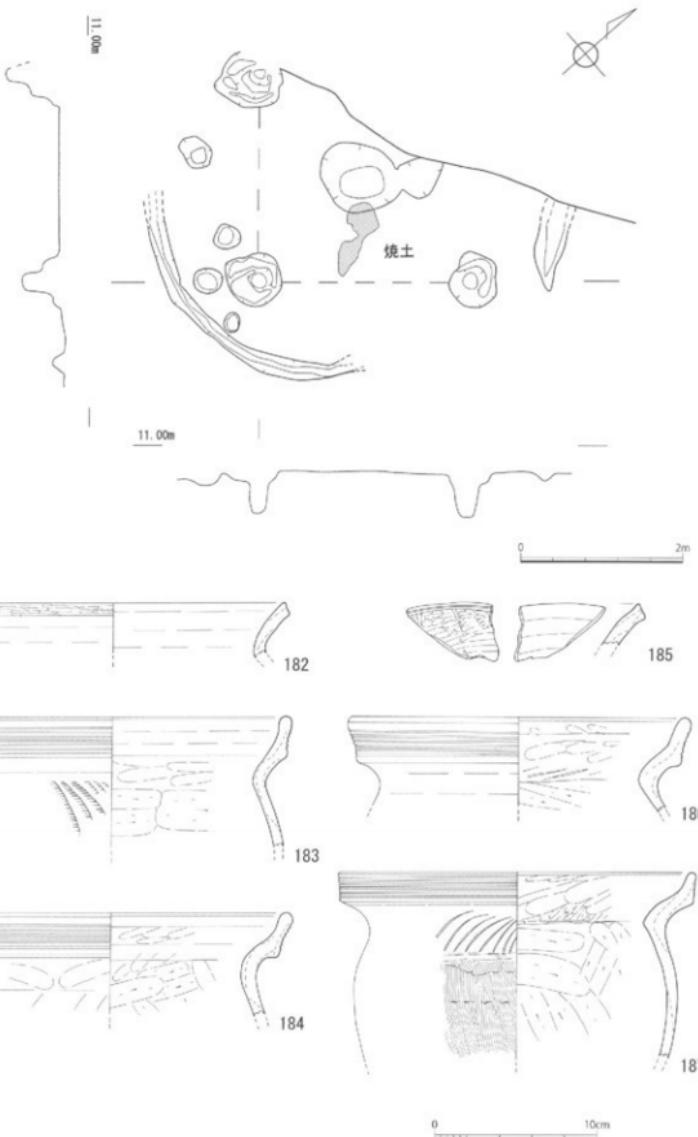
第3-36図 SI01遺構及び出土遺物実測図（遺構S=1/60・遺物S=1/3）



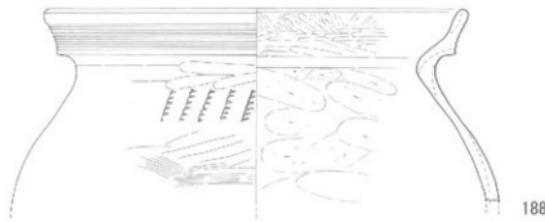
第3-37図 S102遺構及び出土遺物実測図①（遺構S=1/60・遺物S=1/3）



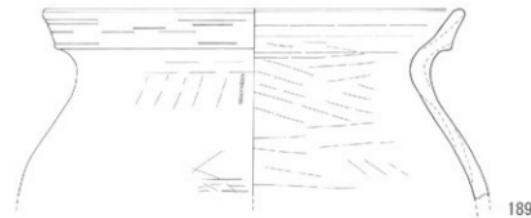
第3-38図 SI02出土遺物実測図② (S=1/3)



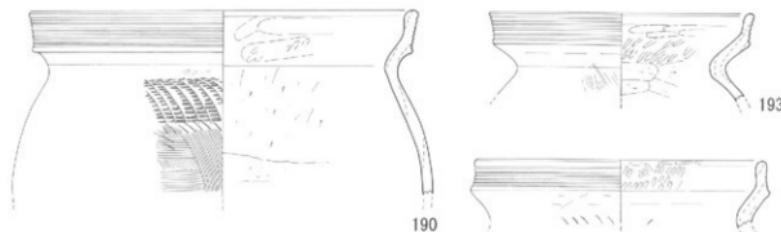
第3-39図 SI03遺構及び出土遺物実測図①（遺構S=1/60・遺物S=1/3）



188



189

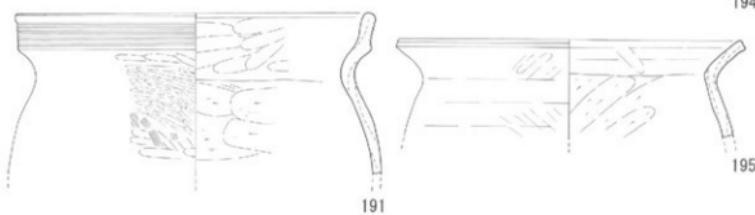


190

193

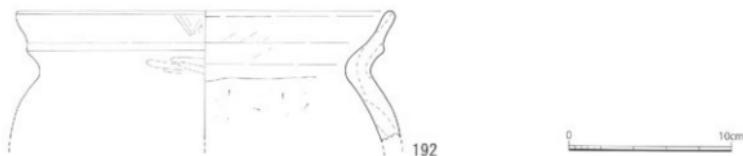


194



191

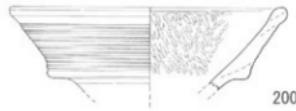
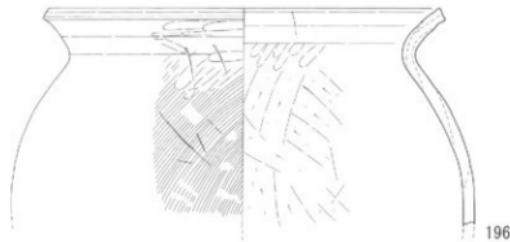
195



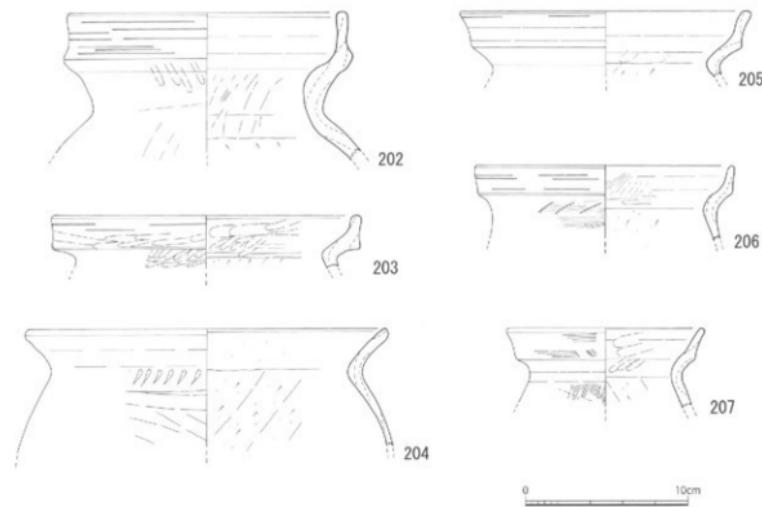
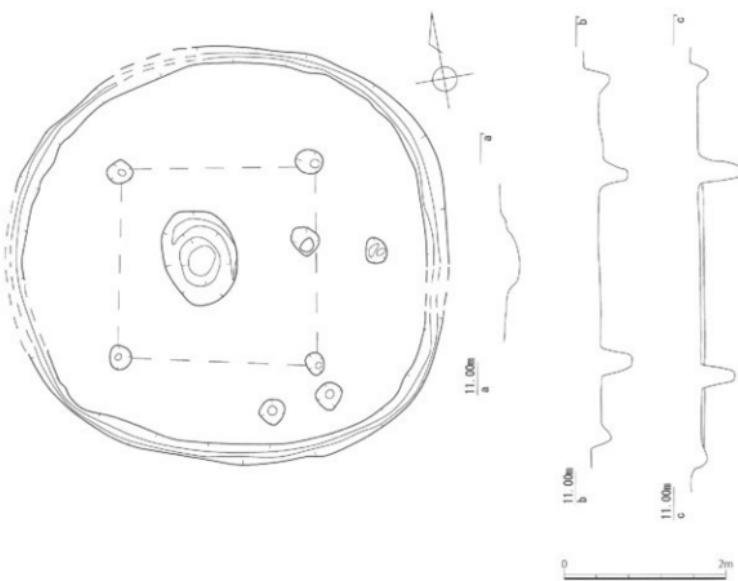
192

0 10cm

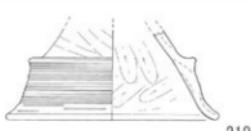
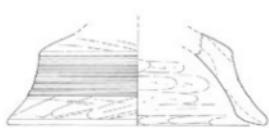
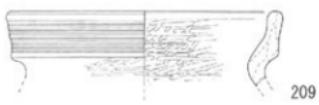
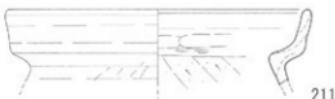
第3-40図 SI03出土遺物実測図② (S=1/3)



第3-41図 SI03出土遺物実測図③ (S=1/3)

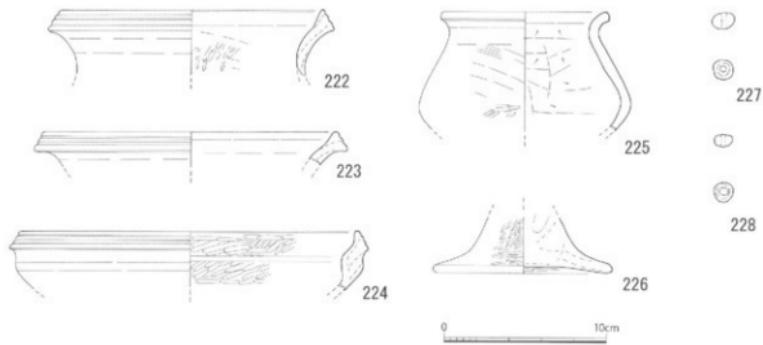
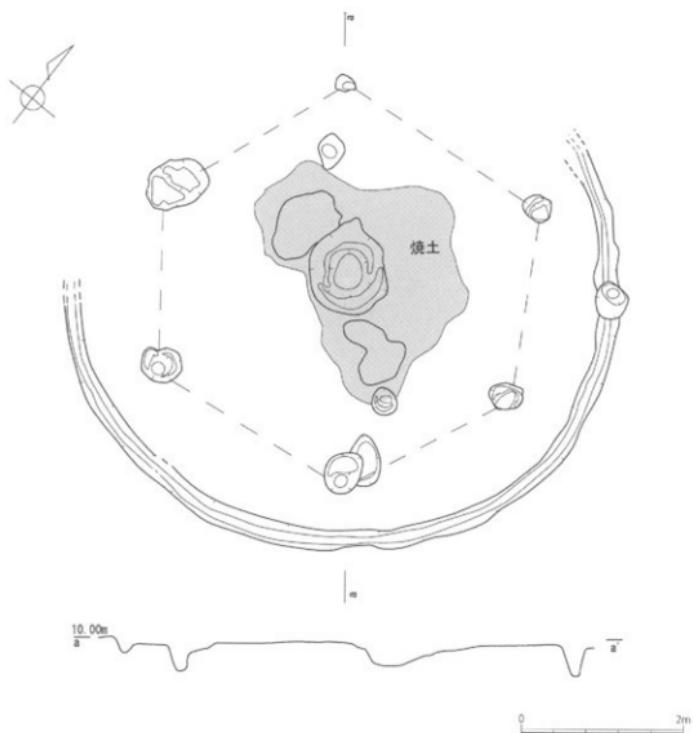


第3-42図 SI04遺構及び出土遺物実測図①（遺構S=1/60・遺物S=1/3）

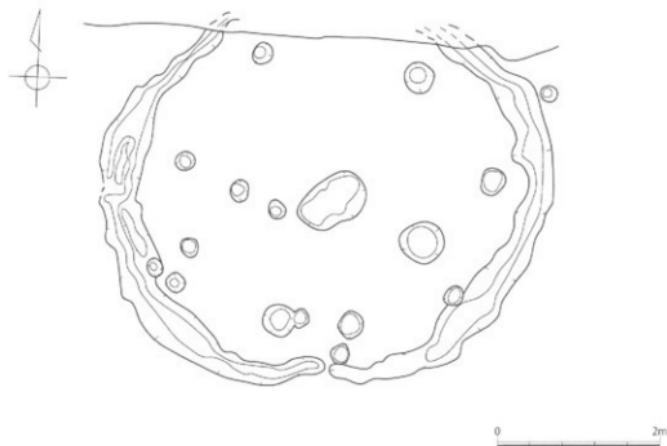


0 10cm

第3-43図 SI04出土遺物実測図② (S=1/3)

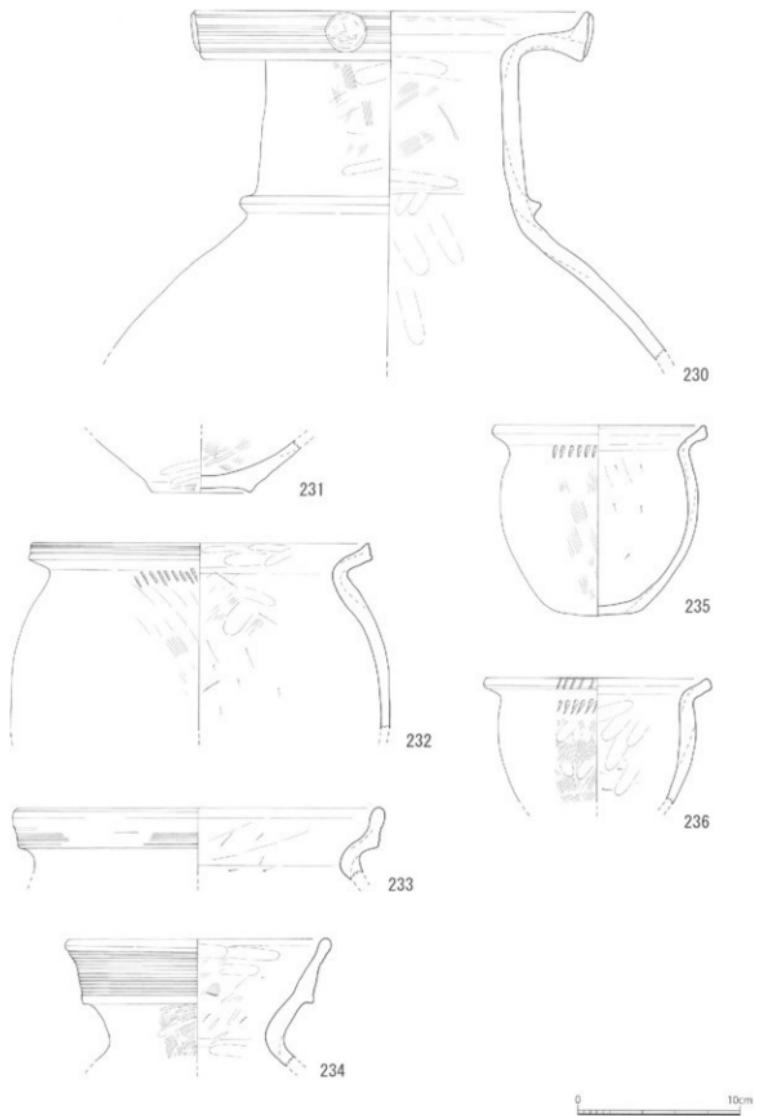


第3-44図 S105遺構及び出土遺物実測図（遺構S=1/60・遺物S=1/3）

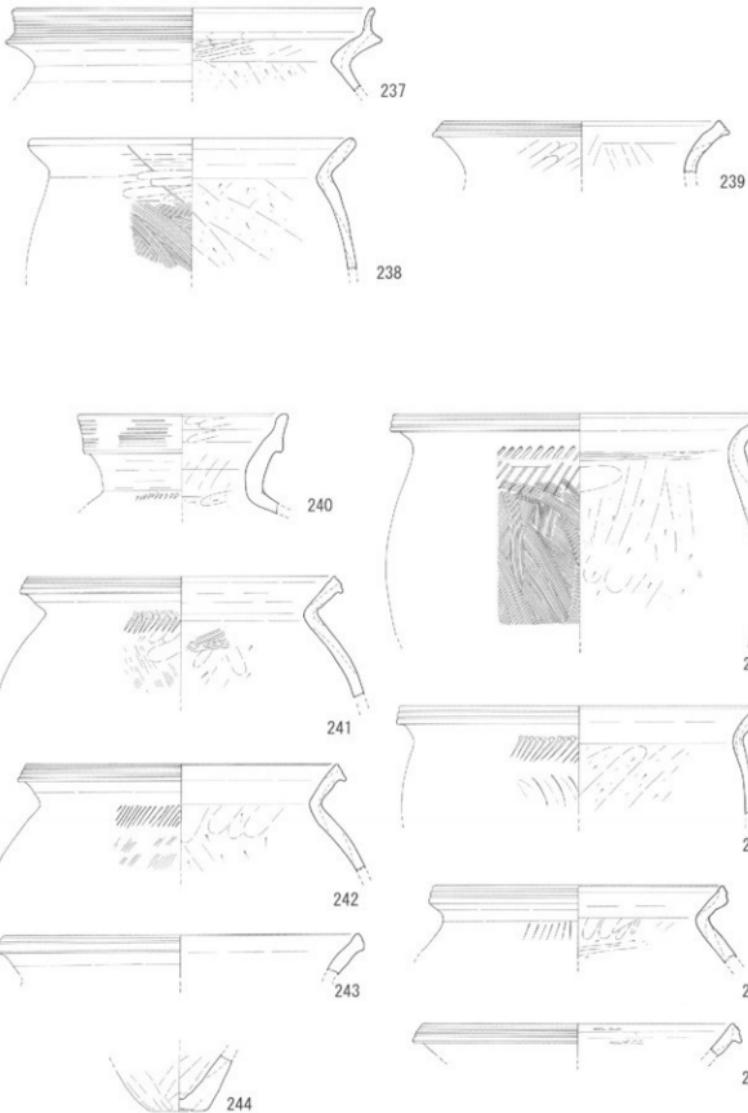


229

第3-45図 S106遺構及び出土遺物実測図（遺構S=1/60・遺物S=1/3）

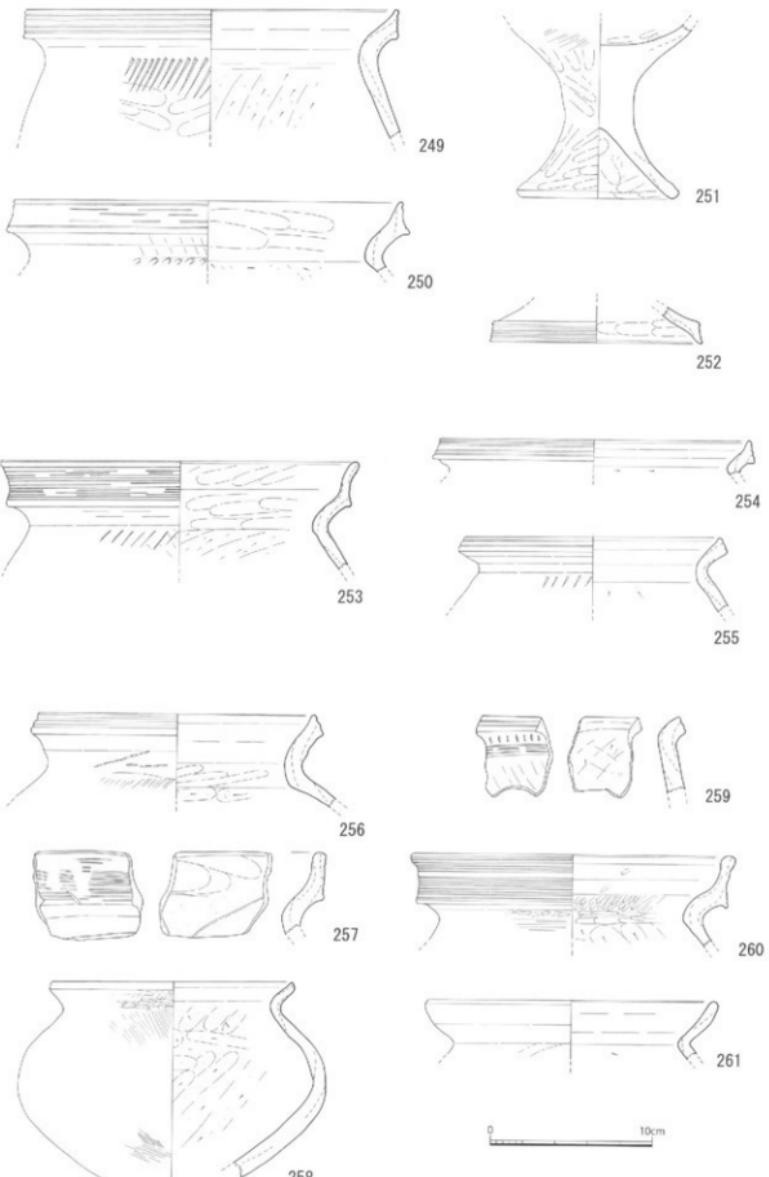


第3-46図 遺構出土遺物実測図-SK05- (S=1/3)

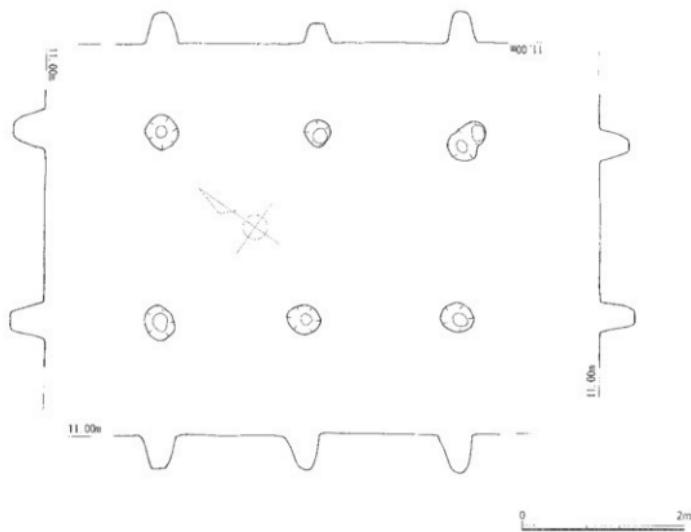
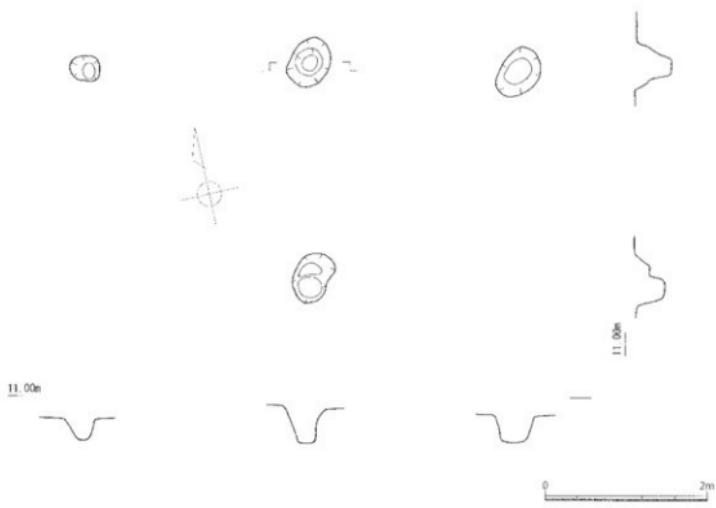


0 10cm

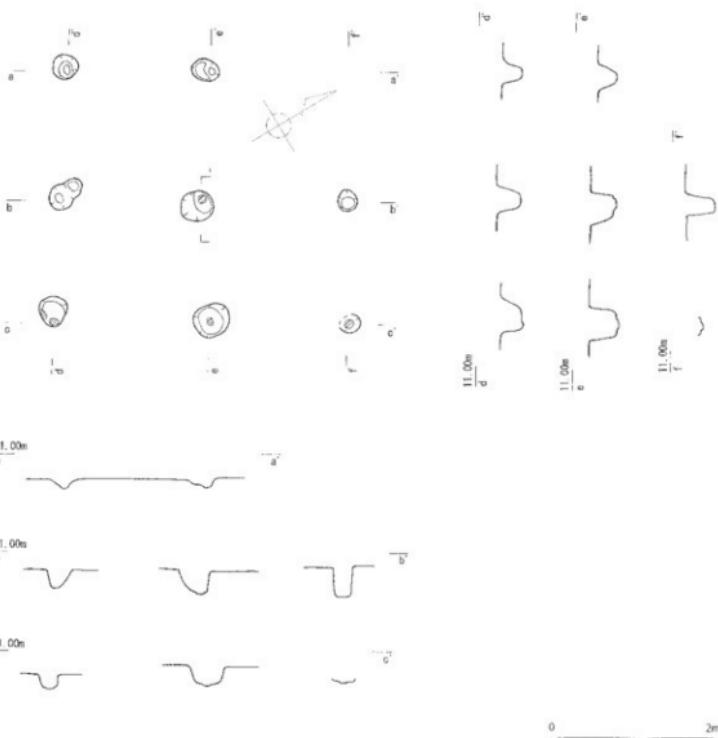
第3-47図 遺構出土遺物実測図-SK05・SK06・SK12- (S=1/3)



第3-48図 遺構出土遺物実測図 -SK07・SK11・SK14・SK17・SK18- (S=1/3)



第3-49図 SB02・SB03 実測図 (S=1/60)



第3-50図 SB01実測図 ($S=1/60$)



遺物出土状況



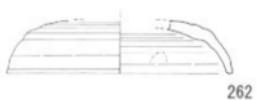
完掘状況



1. 黒褐色混じり暗茶褐色土
2. 暗茶褐色砂質土

第3-51図 SK02 実測図 ($S=1/20$)



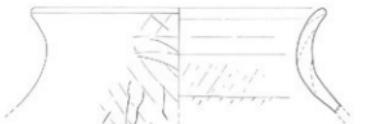


262



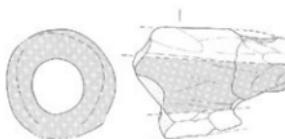
263

⟨SX01⟩



264

⟨SK13⟩



265



266



267

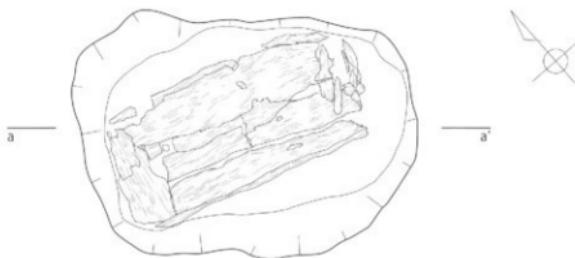


268

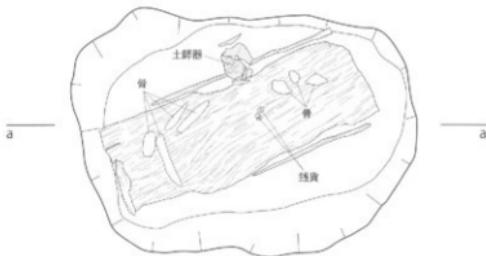
⟨SK02⟩

0 10cm

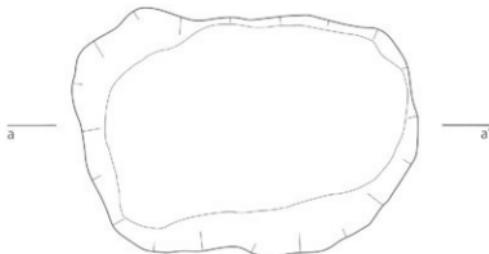
第3-52図 遺構出土遺物実測図 -SX01・SK02・SK13- (S=1/3)



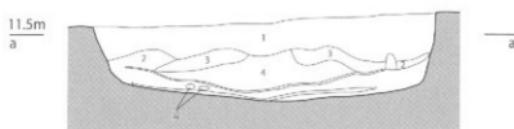
木棺検出状況



蓋除去後遺物出土状況



完掘状況

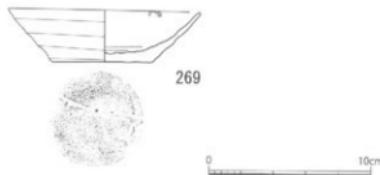


- 1.灰褐色砂質土(灰黄色土がブロックで混ざる)
- 2.茶褐色シルト(灰黄色がブロックで混ざる)
- 3.暗灰黄色粘質土
- 4.青灰色粘土

第3-53図 SK09 実測図 ($S=1/20$)

0

1m



270

271

272



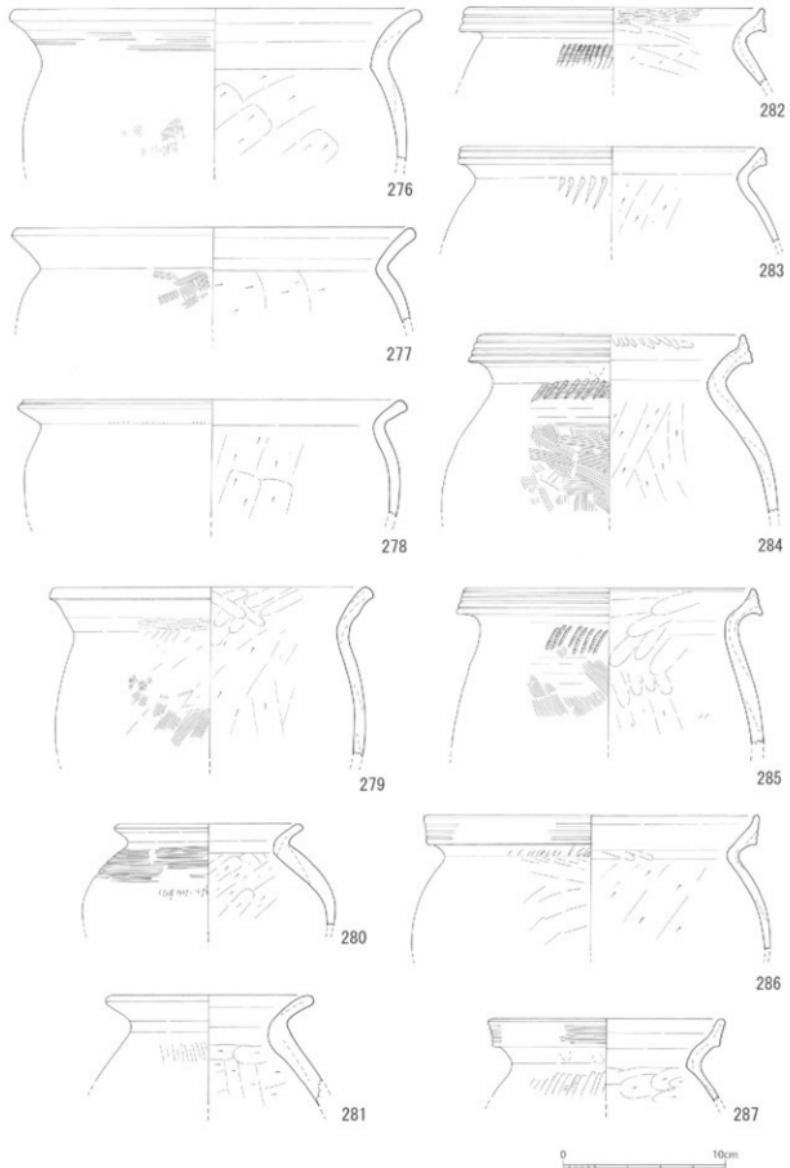
273

274

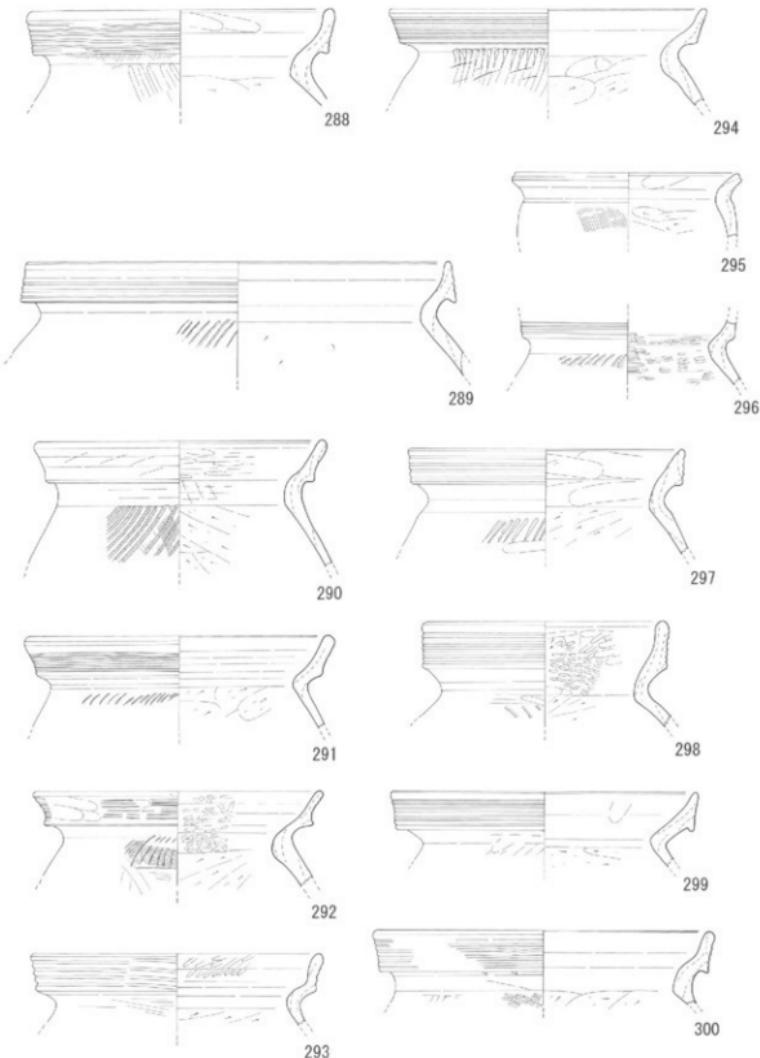
275



第3-54図 遺構出土遺物実測図-SK09- (S=1/3・1/1)

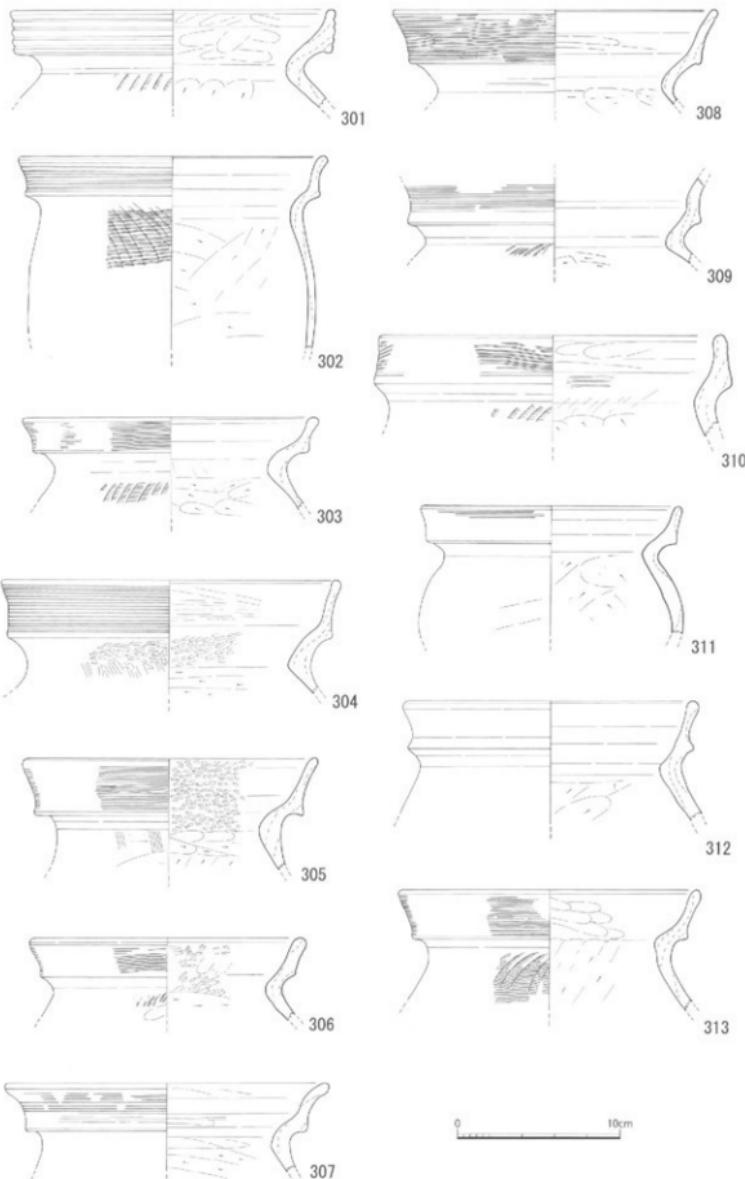


第3-55図 遺構外出土遺物実測図 - 弥生土器①- (S=1/3)

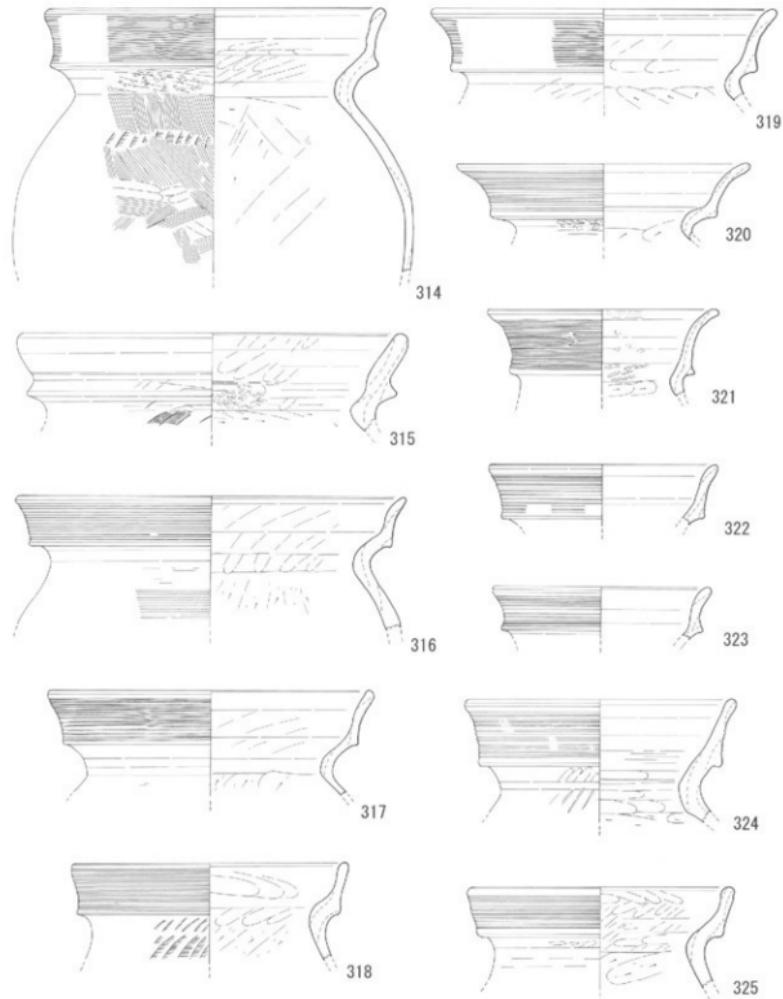


0 10cm

第3-56図 遺構外出土遺物実測図 - 弥生土器② - (S=1/3)

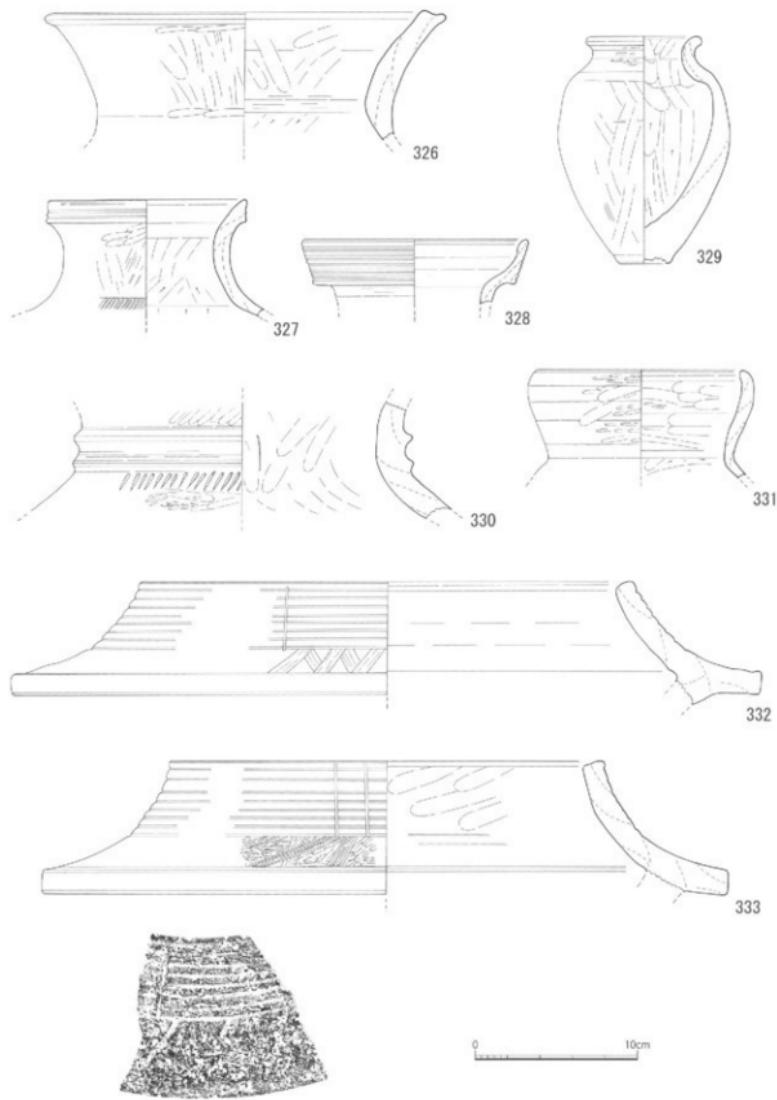


第3-57図 遺構外出土遺物実測図 - 弥生土器③ - (S=1/3)

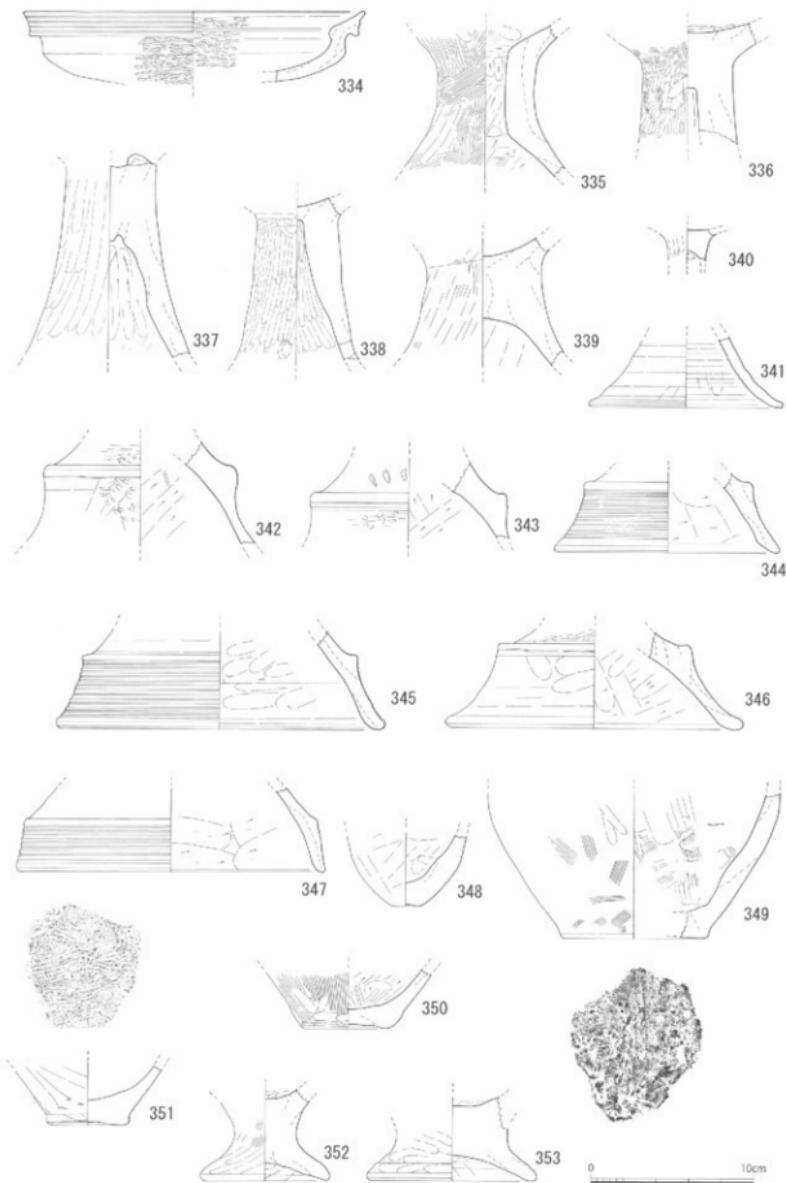


0 10cm

第3-58図 遺構外出土遺物実測図 - 弥生土器④ - (S=1/3)



第3-59図 遺構外出土遺物実測図－弥生土器⑤－(S=1/3)



第3-60図 遺構外出土遺物実測図 -弥生土器⑥- (S=1/3)



354



356



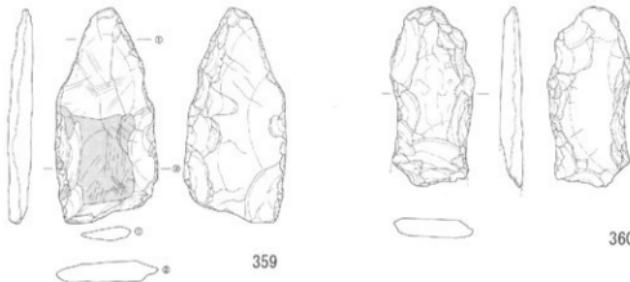
357



358

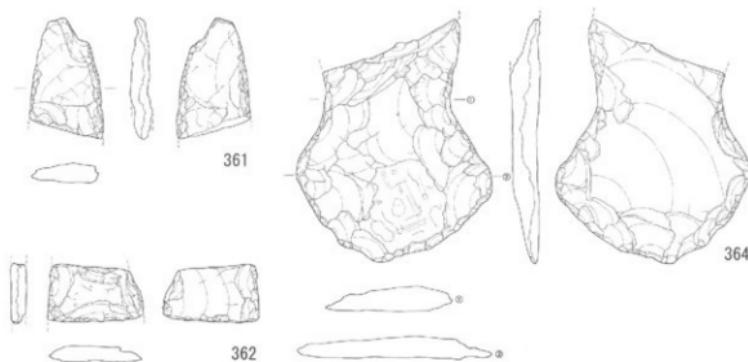


第3-61図 遺構外出土遺物実測図 - 弥生土器⑦- (S=1/3)



359

360

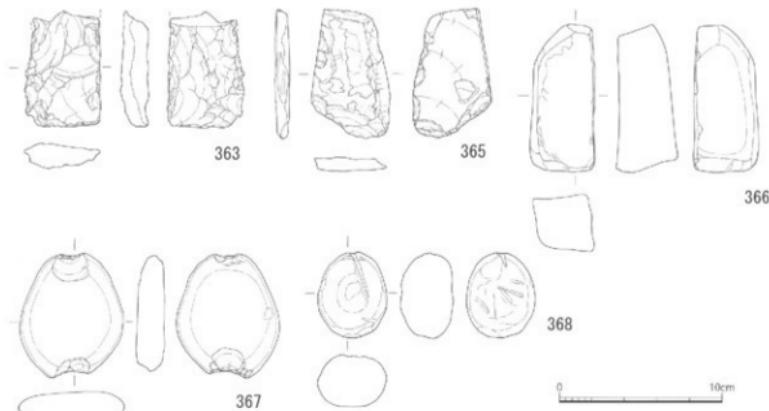


361

362

364

366



363

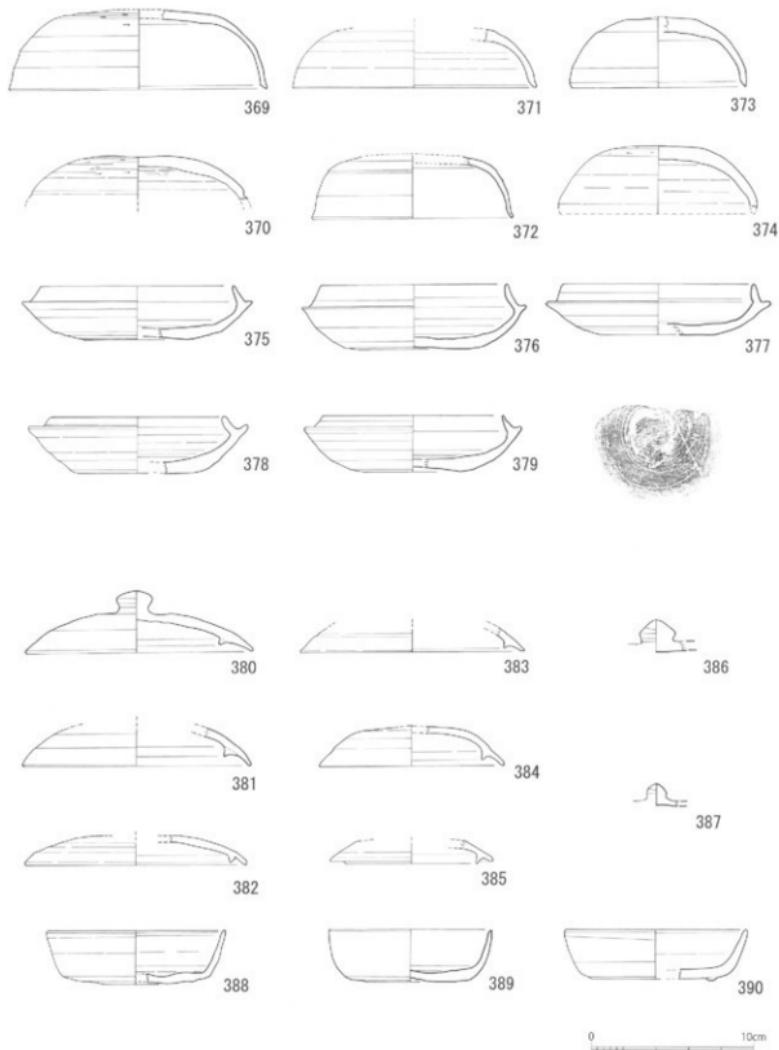
365

367

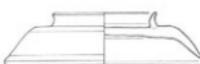
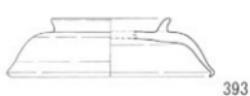
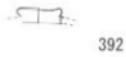
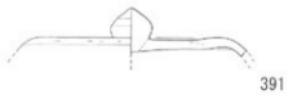
368

10cm

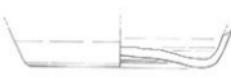
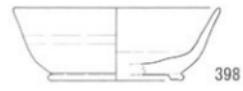
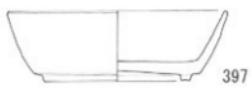
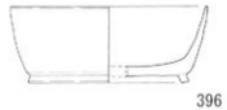
第3-62図 遺構外出土遺物実測図 - 石器 - (S=1/3)



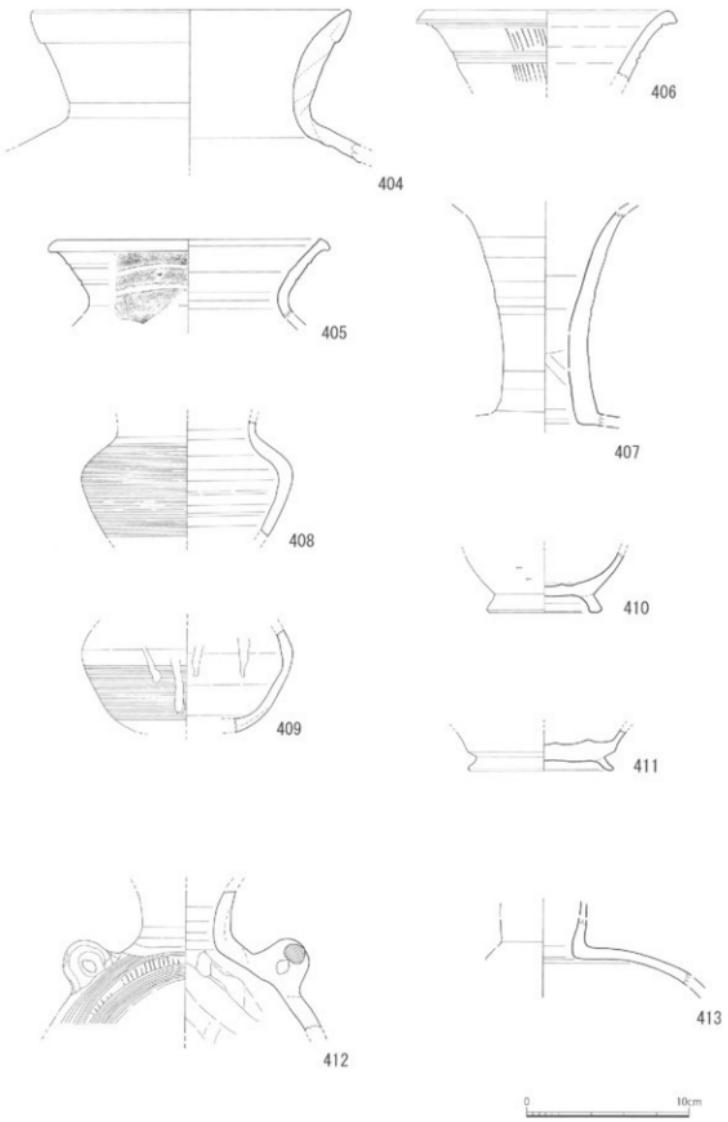
第3-63図 遺構外出土遺物実測図 -須恵器①- (S=1/3)



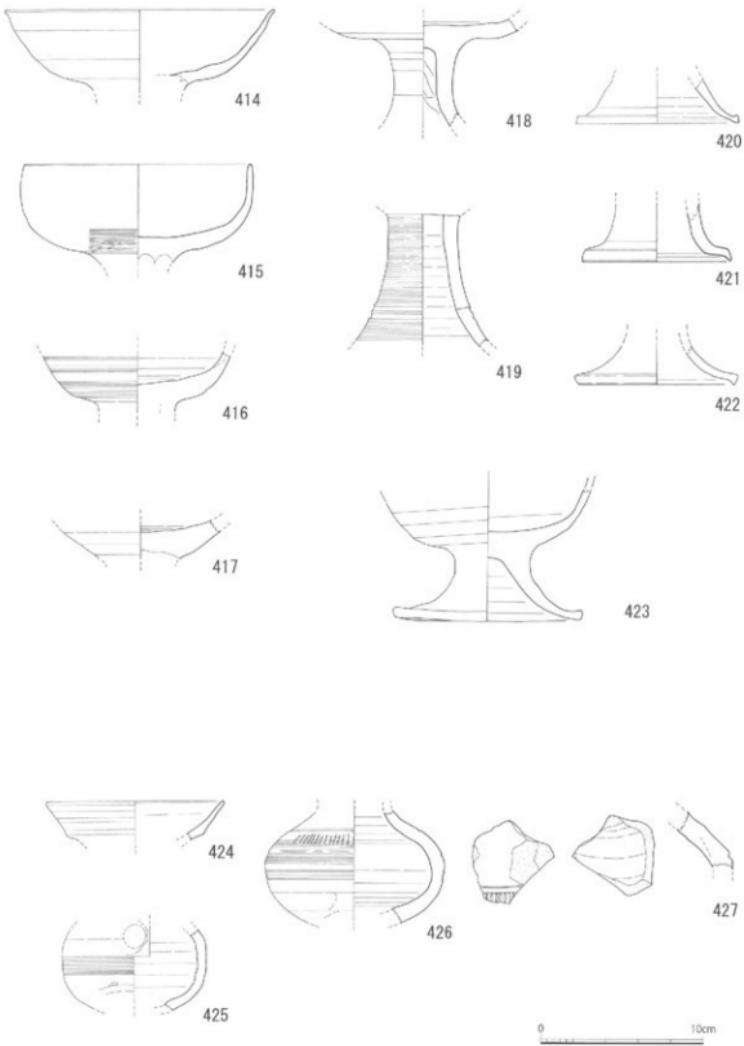
395



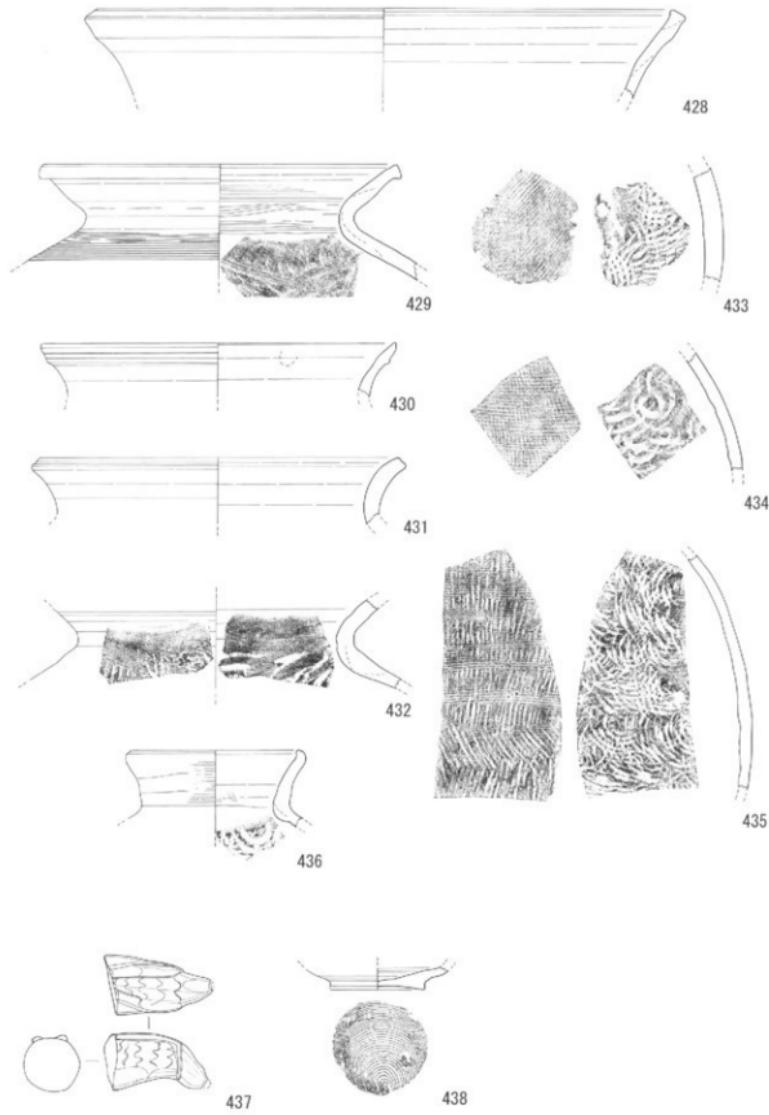
第3-64図 遺構外出土遺物実測図 -須恵器②- (S=1/3)



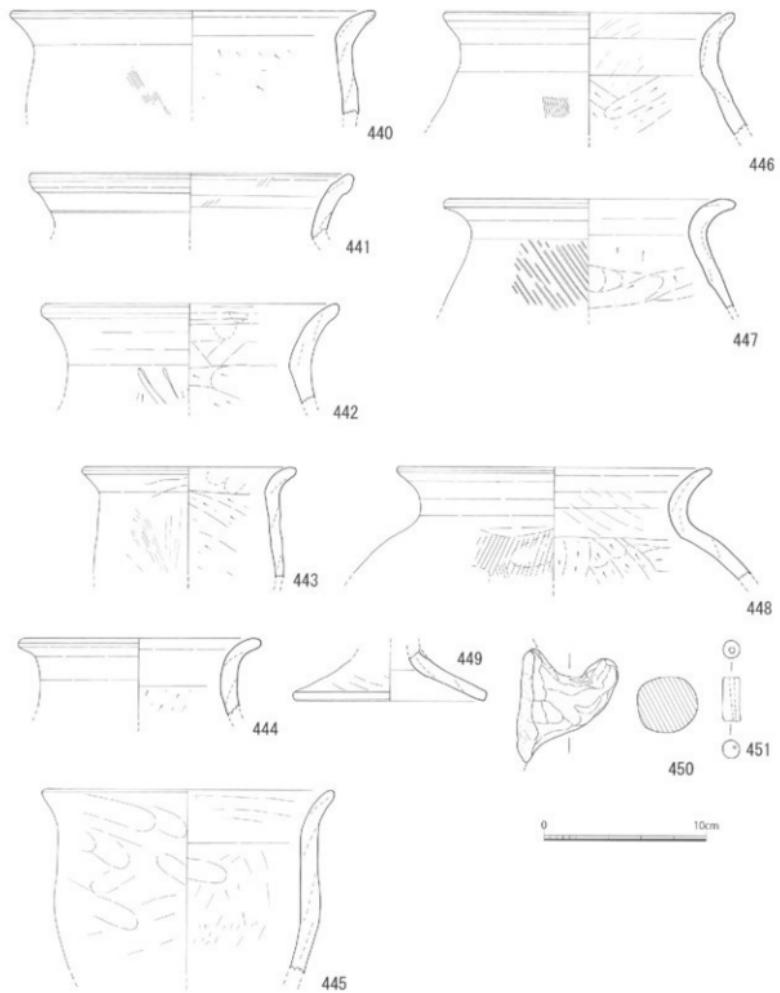
第3-65図 遺構外出土遺物実測図 -須恵器③- (S=1/3)



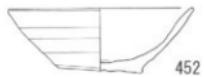
第3-66図 遺構外出土遺物実測図 -須恵器④- (S=1/3)



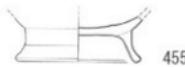
第3-67図 遺構出土遺物実測図 -須恵器⑤- (S=1/3)



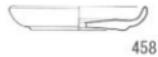
第3-68図 遺構外出土遺物実測図 - 土師器①- (S=1/3)



452



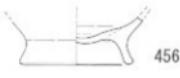
455



458



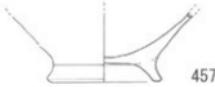
453



456



454



457



459



460



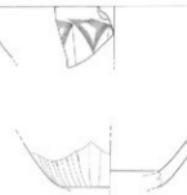
461



463



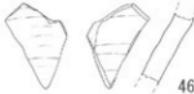
462



464



466



469



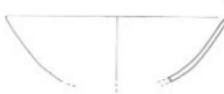
465



467



468



0 10cm

第3-69図 遺構外出土遺物実測図 - 土師器②・陶磁器 - (S=1/3)

第3-2表 中小路遺跡出土遺物観察表

遺物 番号	写真番号	出土位置	種別	形状	型式 時期	計測値(cm) 口径、底径、 高さ	文様・調査		色調	備考
							内面	外面		
1	3-15	圓版15	3区	SK5	須恵器 磁	15.0	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	自然縫がかかる
2	3-15	圓版15	3区	SK6	須恵器 磁		回転ナデ	ケズリ	暗灰色	ボタン状つまみ
3	3-17	圓版14	4区	SE1	須恵器 磁	石見8期 13.6	14.回転ナデ	天井部:回転糸切り	灰色	横状つまみ
4	3-17	圓版14	4区	SE1	須恵器 磁	石見9期 11.0	7.4回転ナデ	回転ナデ	灰色	縦状つまみ
5	3-17	圓版14	4区	SE1	須恵器 破	石見9期 14.0	10.4 4.3回転ナデ	回転ナデ	灰色	
6	3-17	圓版13	4区	SE1	須恵器 破	石見9期 18.2	11.4 6.9回転ナデ	回転ナデ	灰色	金属接着剤
7	3-17	圓版14	4区	SE1	須恵器 破		8.2回転ナデ	底部:回転糸切り	灰色	
8	3-17	圓版14	4区	SE1	須恵器 破		8.4ナデ	ケズリ後ナデ	灰褐色	
9	3-17	圓版15	4区	SE1	須恵器 磁			ナデ	2条の沈縫	灰白色
10	3-17	圓版15	4区	SE1	須恵器 磁			ナデ	2条の沈縫	灰褐色
11	3-17		4区	SE1	土師器 磁			ケズリ	ナデ	淡青褐色
12	3-19	圓版15	2区	SK1	須恵器 磁	石見8期か 14.1	3.2回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	縦状つまみ 内面が剥離
13	3-19	圓版15	2区	SK1	須恵器 破	石見9期 15.0	9.4 4.8回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	
14	3-19		2区	SK1	須恵器 磁	13.6	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	
15	3-19		2区	SK1	須恵器 破	石見9期 15.6	10.1 4.4回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	
16	3-19	圓版15	2区	SK1	須恵器 破		9.0	渦巻状のナデ	臺台内:ケズリ	淡灰色
17	3-19	圓版15	2区	SK1	須恵器 磁		11.8ナデ	前に2条の沈縫	灰褐色	
18	3-19	圓版13	2区	SK1	須恵器 磁	石見9期 11.3	回転ナデ	底部に2条の沈縫	灰褐色	自然縫がかかる
19	3-19	圓版15	2区	SK1	須恵器 磁		タタキ	タタキ	灰褐色	
20	3-19	圓版16	2区	SK1	土師器 磁	16.0	ケズリ	ナデ	青褐色	
21	3-19	圓版16	2区	SK1	土師器 磁	20.0	ケメリ	ナデ	淡青褐色	
22	3-19	圓版16	2区	SK1	土師器 磁	20.0	ケメリ	ナデ	暗褐色	
23	3-19		2区	SK1	石器 地石				灰褐色	外縫が剥離
24	3-20	圓版16	3区	SK2	須恵器 基	石見8期 15.0	2.1回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	縦状つまみ 自然縫がかかる
25	3-20	圓版13	3区	SK2	須恵器 基	石見8期 16.0	3.1回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	縦状つまみ
26	3-20	圓版16	3区	SK2	須恵器 破		9.0ナデ	臺台内: ハラ切り後ケズリ	灰白色	
27	3-20		3区	SK2	須恵器 破	14.2	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	
28	3-20	圓版16	3区	SK2	須恵器 破		10.5渦巻状のナデ	回転ナデ	灰褐色	
29	3-20		3区	SK2	須恵器 磁	11.0	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	
30	3-20	圓版16	3区	SK2	須恵器 磁		8.2回転ナデ	底部に1条の沈縫	灰白色	
31	3-20	圓版16	3区	SK2	須恵器 磁	21.0	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	
32	3-20		3区	SK2	土師器 磁	22.0	ナデ	ナデ	淡青褐色	
33	3-20		3区	SK2	土師器 高		12.0回転ナデ	回転ナデ	灰白色	須恵器の可能性もあり
34	3-20	圓版17	3区	SK3	須恵器 破		10.0回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	
35	3-20	圓版17	3区	SK3	須恵器 磁		ナデ	タタキ後カキメ	灰白色	
36	3-20	圓版17	3区	SK3	土師器 磁	30.2	ケズリ	アテ	灰褐色	
37	3-20	圓版17	3区	SK3	土師器 磁	32.4	ケズリ	ナデ	淡青褐色	
38	3-22		3区	SK4	須恵器 破	17.3	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	金属接着剤
39	3-22		3区	SK4	須恵器 磁	石見8期 14.4	1.8回転ナデ	回転ナデ	灰白色	縦状つまみ
40	3-22		3区	SK4	須恵器 破	13.0	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	
41	3-23	圓版17	3区	P59	須恵器 破	9.0	8.2 2.4回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	
42	3-23		3区	P59	土師器 磁	22.0	ケズリ	ナデ	淡青褐色	
43	3-23		3区	P59	土師器 磁	32.6	ケズリ	ナデ	に沿い青褐色	
44	3-23	圓版17	3区	P103	須恵器 破	12.0	7.0 5.0ナデ	ナデ	灰白色	

通 号	件 番 号	東 京 都 道 府 県 市 町 村	出 土 地 点	種 別	器 種	型 式 時 期	計 測 値 (cm)	文 様・調 整		色 調	備 考
								内 面	外 面		
45	3-23	西	17	3区	P302	須恵器	齊		8.4	回転ナデ	高台内: 回転ヘラケズリ
46	3-23	西	17	3区	P223	須恵器	河		9.0	回転ナデ	回転ナデ
47	3-23	西	17	3区	P21	須恵器	坪		9.5	回転ナデ	底部: ケズリ
48	3-23	西	18	P190	須恵器	高坪		12.2	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色
49	3-23	西	18	P268	土師器	裏		22.0	ケズリ	ナデ	にふい黄褐色
50	3-23	西	18	P204	石器	磨石				敲打痕あり	灰白色
51	3-25	西	18	SD1	土師器	裏		34.0	ケズリ	ナデ	灰白色
52	3-25	西	18	SD2	須恵器	底	石見9A期	15.4	3.0	回転ナデ	回転ナデ
53	3-25	西	18	SD2	須恵器	底	石見9A期	16.6	3.7	回転ナデ	回転ナデ
54	3-25	西	18	SD2	須恵器	高坪			7.6	回転ナデ	底部に1条の沈線
55	3-25	西	18	SD2	土師器	裏		21.0	ケズリ	ナデ	にふい黄褐色
56	3-25	西	18	SD2	土師器	裏		26.0		ハケか	にふい褐色
57	3-25	西	18	SD2	土師器	裏		30.0	タテハケか	ヨコハケ	にふい褐色
58	3-25	西	18	SD2	土師器	裏		26.0	ケズリ	ナデ	にふい褐色
59	3-27	西	19	大溝内	須恵器	底	石見8期	13.6	2.6	回転ナデ	回転ナデ
60	3-27	西	19	大溝内	須恵器	裏	石見8期	15.0	1.7	回転ナデ	回転ナデ
61	3-27	西	19	大溝内	須恵器	裏				回転ナデ	回転ナデ
62	3-27	西	19	大溝内	須恵器	底	石見7期?	15.3	4.2	回転ナデ	回転ナデ
63	3-27	西	19	大溝内	須恵器	裏	石見9A期	13.6	2.5	回転ナデ	回転ナデ
64	3-27	西	19	大溝内	須恵器	裏				回転ナデ	回転ナデ
65	3-27	西	19	大溝内	須恵器	裏	石見9A期	14.8	3.1	回転ナデ	回転ナデ
66	3-27	西	19	大溝内	須恵器	裏	石見9A期	15.0	3.6	回転ナデ	回転ナデ
67	3-27	西	19	大溝内	須恵器	坪			11.0	回転ナデ	回転ナデ
68	3-27	西	19	大溝内	須恵器	坪	石見9B期	11.6	8.4	4.4	回転ナデ
69	3-27	西	19	大溝内	須恵器	坪	石見9B期	9.8	8.0	4.7	回転ナデ
70	3-27	西	19	大溝内	須恵器	坪			16.4	12.1	4.8
71	3-27	西	19	大溝内	須恵器	坪				回転ナデ	回転ナデ
72	3-27	西	19	大溝内	須恵器	坪	石見9B期	13.6	9.2	4.0	回転ナデ
73	3-27	西	19	大溝内	須恵器	坪			16.0	10.0	5.7
74	3-27	西	19	大溝内	須恵器	坪				回転ナデ	回転ナデ
75	3-27	西	19	大溝内	須恵器	坪			16.0	5.4	6.7
76	3-27	西	19	大溝内	須恵器	坪				回転ナデ	回転ナデ
77	3-27	西	19	大溝内	須恵器	坪			9.4		回転ナデ
78	3-27	西	19	大溝内	須恵器	坪	石見9B期	28.0		回転ナデ	回転ナデ
79	3-27	西	19	大溝内	須恵器	坪				回転ナデ	回転ナデ
80	3-27	西	19	大溝内	須恵器	底				回転ナデ	回転ナデ
81	3-27	西	19	大溝内	須恵器	底			16.3	回転ナデ	回転ナデ
82	3-28	西	19	大溝内	須恵器	底				回転ナデ	回転ナデ
83	3-28	西	19	大溝内	須恵器	底			13.0	回転ナデ	回転ナデ
84	3-28	西	19	大溝内	須恵器	底				回転ナデ	回転ナデ
85	3-28	西	19	大溝内	須恵器	底				回転ナデ	回転ナデ
86	3-28	西	19	大溝内	須恵器	底				回転ナデ	回転ナデ
87	3-28	西	19	大溝内	須恵器	底				回転ナデ	回転ナデ
88	3-28	西	19	大溝内	須恵器	底				回転ナデ	回転ナデ

埋蔵 場所 番号	写真番號	出土位置	種別	基準	型式 時期	計測値(cm)	文様・調整		色調	備考		
							口送 底径	器高	内面	外面		
89	3-28	圓版13	2区	大溝内	須惠器	蓋		12.0	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	自然縫がかかる
90	3-28	圓版19	2区	大溝内	須惠器	蓋		11.0	同心円タキ回転ナデ	ナデ	灰色	
91	3-28	圓版14	2区	大溝内	須惠器	蓋		10.6	回転ナデ	高台内:回転ヘラケズリ	灰色	
92	3-28	圓版19	2区	大溝内	須惠器	高环	石見8期	23.2	回転ナデ	回転ナデ	暗灰~淡灰色	自然縫がかかる
93	3-29		2区	大溝内	須惠器	蓋		24.0	回転ナデ	回転ナデ	灰色	
94	3-29		2区	大溝内	須惠器	蓋		18.0	同心内タキ	丸子タキ	灰白色	
95	3-29	圓版14	2区	大溝内	須惠器	蓋		23.4	同心内タキ	口縁部に波状文	緑黄色	
96	3-29		2区	大溝内	須惠器	横板			カキメ		灰色	
97	3-29		2区	大溝内	須惠器	鉢か		18.0	ナデ	回転ナデ	灰白色	
98	3-30	圓版20	2区	大溝内	土師器	蓋		22.0	ケズリ	ナデ	灰白色	
99	3-30	圓版20	2区	大溝内	土師器	蓋		20.0	ケズリ	ナデ	赤褐色	
100	3-30	圓版20	2区	大溝内	土師器	堀		24.2	ケズリ	ナア	にぶい黄褐色	
101	3-30		2区	大溝内	土師器	土師				ナデ	黄灰色	最大長: 4.9cm、最大幅: 2.0cm
102	3-30		2区	大溝内	土師器	土師				ナデ	淡赤褐色	最大長: 4.3cm、最大幅: 1.1cm
103	3-30		2区	大溝内	土師器	堀		32.0	ケズリ	ナデ	にぶい黄褐色	
104	3-30	圓版20	2区	大溝内	白磁	碗 IV期	16.0		玉縁口壁		灰白色	
105	3-30	圓版20	2区	大溝内	土師器	堀		7.4	ナデ	ナデ	灰白色	風化する
106	3-30	圓版20	2区	大溝内	瓦質土器	鍋				ナデ	灰白色	表面
107	3-30		2区	大溝内	陶文土器	浅鉢					にぶい褐色	
108	3-31	圓版21	2区	包含層	須惠器	蓋			回転ナデ	回転ナデ	灰白色	銀宝残つみ
109	3-31	圓版21	3区	包含層	須惠器	蓋		15.0	回転ナデ	回転ナデ	灰色	自然縫がかかる
110	3-31		2区	包含層	須惠器	堀		14.0	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	
111	3-31		2区	包含層	須惠器	堀	石見8期	14.0	4.4 回転ナデ	回転ナデ	灰色	
112	3-31	圓版21	2区	包含層	須惠器	堀		8.4	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	
113	3-31	圓版21	2区	包含層	須惠器	堀		11.0	回転ナデ	回転ナデ	灰色	
114	3-31		2区	包含層	須惠器	堀		8.0	回転ナデ	回転ナデ	深灰色	漆状の物質が付着
115	3-31		2区	包含層	須惠器	底环	石見7期	11.4	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	
116	3-31		2区	包含層	須惠器	底环	石見7期		回転ナデ	回転ナデ	灰色	
117	3-31	圓版14	2区	包含層	須惠器	須惠器			回転ナデ	2条の沈縛各2セット	灰白色	自然縫がかかる
118	3-31		2区	包含層	須惠器	蓋				2条に3条の沈縛	灰白色	自然縫がかかる
119	3-31		2区	包含層	須惠器	坦?		4.6	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	自然縫がかかる
120	3-31	圓版21	2区	包含層	須惠器	堀		7.0	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	自然縫がかかる
121	3-31	圓版21	2区	包含層	須惠器	蓋		19.0	同心内タキ	回転ナデ	灰色	自然縫がかかる
122	3-31	圓版21	2区	包含層	須惠器	蓋		9.0	同心内タキ	回転ナデ	灰色	
123	3-32		1区	包含層	須惠器	堀		38.0	回転ナデ	口縁部に波状文	灰白色	自然縫がかかる
124	3-32		3区	包含層	須惠器	堀		40.0	回転ナデ	口縁部に波状文	灰白色	自然縫がかかる
125	3-32		2区	包含層	須惠器	堀		23.0	口縁部に波状文	口縁部に波状文	灰色	
126	3-32		2区	包含層	須惠器	堀		19.0	同心内タキ	回転ナデ・カキメ	灰白色	
127	3-32	圓版14	2区	包含層	須惠器	横板			ナデ		灰色	
128	3-32		2区	包含層	須惠器	取手				指ナデ	灰色	
129	3-32		2区	包含層	土師器	蓋		20.2	ケズリ	ナデ	橙色	
130	3-32		2区	包含層	土師器	蓋		20.4	ケズリ	ナデ	黄褐色	
131	3-32		2区	包含層	土師器	底环		20.0	ケズリ	ナデ	黄褐色	
132	3-32		2区	包含層	土師器	蓋		19.0	ケズリ	ナデ	黄褐色	

調査 番号	発掘 場所	出土位置	種別	器種	形態 期別	計測値 (cm)	文様・測定		色調	備考	
							口径	底径	基高		
133	3-32	2区	包含層	土器類	甕	24.0	ケズリ	ナデ	褐色		
134	3-32	2区	包含層	土器類	甕	11.0	ナデ	ナデ	に赤い色	内外面に赤色斑状	
135	3-33	圓瓶21	2区	包含層	白磁	8V-8	15.0	無地	無地	灰色	
136	3-33	圓瓶21	2区	包含層	白磁	破	16.0	無地	無地	灰白色	
137	3-33	圓瓶21	2区	包含層	白磁	圓	12.0	無地	口元	灰白色	
138	3-33	圓瓶21	2区	包含層	白磁	四脚壺	10.0	無地	無地	灰白色	
139	3-33	圓瓶21	2区	包含層	白磁	圓	12.0	無地	無地	灰白色	
140	3-33	圓瓶21	1区	包含層	青磁	瓶	16.0		刻花文	オリーブ灰	
141	3-33	圓瓶21	2区	包含層	青磁	瓶	16.0		錦唐草文	緑灰色	
142	3-33	圓瓶21	2区	包含層	青磁	立	6.2		錦唐草文	青綠色	
143	3-33	圓瓶21	2区	包含層	青磁	錐		クシメ	ナデ	灰茶褐色	
144	3-33	圓瓶21	2区	包含層	偏斜	すり跡		スリ目	ナデ	灰色	
145	3-33	圓瓶21	2区	包含層	瓦質土器	すり跡	30.2	スリ目	ナデ	黄灰色	
146	3-33	圓瓶21	2区	包含層	石器	石器				安山岩	
147	3-36	6区	S101	弥生土器	甕			ナデ		灰白色	
148	3-36	圓瓶34	6区	S101	弥生土器	甕	Vの後半	23.4	ヘラケズリ	ナデ	褐色
149	3-36	6区	S101	弥生土器	甕	IV-7	22.7	ナデ	ナデ	灰白色	
150	3-36	6区	S101	弥生土器	甕	III-2	19.0	ナデ	ナデ	に赤い黄褐色	
151	3-36	圓瓶34	6区	S101	弥生土器	甕	V-3	21.0	ナデ	ナデ	に赤い黄褐色
152	3-36	圓瓶34	6区	S101	弥生土器	甕	V-37	19.7	ナデ	ナデ	に赤い黄褐色
153	3-36	圓瓶34	6区	S101	弥生土器	甕	底部	5.2	ナデ	ナデ	に赤い黄褐色
154	3-36	6区	S101	弥生土器	甕	底部	前orVII	6.0	ナデ	ナデ	に赤い黄褐色
155	3-37	圓瓶34	6区	S102	弥生土器	甕	V-1	24.0	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	黄褐色
156	3-37	圓瓶34	6区	S102	弥生土器	甕	V-2	24.2	ミガキ、ヘラケズリ	ミガキ	淡黄褐色
157	3-37	6区	S102	弥生土器	甕	V-2~3		ナデ、ヘラケズリ	ナデ	に赤い黄褐色	
158	3-37	6区	S102	弥生土器	甕	V-2~3	19.2	ナデ	ナデ	淡黄褐色	
159	3-37	圓瓶35	6区	S102	弥生土器	甕	V-27	15.3	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	褐色
160	3-37	圓瓶34	6区	S102	弥生土器	甕	V-3	15.2	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	灰褐色
161	3-37	6区	S102	弥生土器	甕	V-2~3			ナデ		灰褐色
162	3-37	6区	S102	弥生土器	甕	V-3			ナデ		淡黄褐色
163	3-38	6区	S102	弥生土器	甕	V-3		ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄褐色	
164	3-38	6区	S102	弥生土器	甕	V-3か		ナデ、ヘラケズリ	ナデ	灰褐色	
165	3-38	圓瓶34	6区	S102	弥生土器	甕	V1orV2		ヘラケズリ	ナデ	淡黄褐色
166	3-38	6区	S102	弥生土器	甕		15.5	ミガキ	ミガキ	に赤い黄褐色	
167	3-38	6区	S102	弥生土器	甕	銚形鋏台	15.0	ナデ	ナデ	黄褐色	
168	3-38	圓瓶35	6区	S102	弥生土器	銚形鋏台	V-2	15.2	ナデ		淡黄褐色
169	3-38	6区	S102	弥生土器	銚形鋏台	V-2	15.2	ナデ	ナデ	淡黄褐色	
170	3-38	圓瓶34	6区	S102	弥生土器	銚形鋏台	V-2~3	14.2	ナデ	ナデ	
171	3-38	6区	S102	弥生土器	甕	中周後半	9.0	ナデ	ナデ		
172	3-38	圓瓶35	6区	S102	弥生土器	甕or甕	5.0	ミガキ	ミガキ	黄褐色	
173	3-38	圓瓶35	6区	S102	弥生土器	甕		5.8	ヘラケズリ	ナデ	灰褐色
174	3-38	圓瓶35	6区	S102	弥生土器	高甕	中周	10.2	ナデ	ナデ	灰白色
175	3-38	圓瓶35	6区	S102	弥生土器	高甕			ヘラケズリ	ナデ	黄褐色
176	3-38	6区	S102	弥生土器	鉢	鉢or甕	5.5	ナデ	ナデ	弱い黄褐色	

通 物 番 号	写真図版 番号	出土位置	種別	種類	型式 時期	計測値 (cm)	文様・施設		色調	備考	
							内面	外 面			
177	3-38	6区	S102	碧玉?	剥片	口径: 重さ: 高さ: 0.71 0.5 0.2					
178	3-38	6区	S102	碧玉?	剥片	重さ: 高さ: 1.5 1.05 0.35					
179	3-38	6区	S102	碧玉?	石核	重さ: 高さ: 1.4 1.1 0.5					
180	3-38	6区	S102	石製品	不明	重さ: 高さ: 2.8 3.6 1.9					
181	3-38	6区	S102	石製品	石核				淡黄色		
182	3-39	6区	S103	弥生土器	壺	III-1 20.4	ナデ	ナデ	灰青褐色		
183	3-39	6区	S103	弥生土器	甕	V-2 21.0	ナデ、ヘラケズリ	へら状工具	浅青褐色		
184	3-39	圓版35	6区	S103	弥生土器	甕	V-2 21.2	ナデ、ヘラケズリ	ナア	にぶい黄褐色	
185	3-39	6区	S103	弥生土器	甕	III? 21.7			にぶい黄褐色		
186	3-39	圓版37	6区	S103	弥生土器	甕	V-2 20.0	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶい黄褐色	
187	3-39	6区	S103	弥生土器	甕	V-2? 21.2	ナデ、ヘラケズリ	貝殻状工具、削毛目	にぶい黄褐色		
188	3-40	圓版36	6区	S103	弥生土器	甕	V-2 25.0	ナデ、ヘラケズリ	貝殻状工具、ナデ	淡青褐色	
189	3-40	圓版36	6区	S103	弥生土器	甕	V-2 25.2	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡青褐色	
190	3-40	圓版35	6区	S103	弥生土器	甕	23.0	ナデ、ヘラケズリ	貝殻状工具、削毛目	淡青褐色	
191	3-40	6区	S103	弥生土器	甕	V-2 21.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、削毛目	にぶい黄褐色		
192	3-40	6区	S103	弥生土器	甕	V-2 22.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶい黄褐色		
193	3-40	6区	S103	弥生土器	甕	V-2 15.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶい黄褐色		
194	3-40	6区	S103	弥生土器	甕	V-2~3 17.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶい黄褐色		
195	3-40	6区	S103	土師器?	甕	20.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡白色		
196	3-41	圓版36	6区	S103	弥生土器	甕	V-2斜行 23.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、削毛目	にぶい褐色	
197	3-41	圓版36	6区	S103	弥生土器	甕	V-2? 24.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、削毛目	灰白色	
198	3-41	圓版36	6区	S103	土師器?	甕	20.0	ナデ、ヘラケズリ	ナデ		
199	3-41	6区	S103	弥生土器	甕				灰白色		
200	3-41	圓版36	6区	S103	弥生土器	鉢形削台?	16.0	ナデ	解凹縁文	灰白色	
201	3-41	6区	S103	弥生土器	甕	6.5	ナデ	削毛目	灰白色		
202	3-42	圓版37	6区	S104	弥生土器	甕 V-27	16.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	灰白色	
203	3-42	圓版37	6区	S104	弥生土器	甕 V-1~27 18.5		ナデ	ナデ	灰白色	
204	3-42	圓版37	6区	S104	弥生土器	甕 V-2~37 21.2		ナデ、ヘラケズリ	折突文	灰白色	
205	3-42	6区	S104	弥生土器	甕	V-27 17.5	ナデ	ナデ	灰白色		
206	3-42	6区	S104	弥生土器	甕	V- 15.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	灰白色		
207	3-42	6区	S104	弥生土器	甕	V-27 11.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶい褐色		
208	3-43	圓版38	6区	S104	弥生土器	甕 V-2~3 14.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶい褐色		
209	3-43	圓版38	6区	S104	弥生土器	甕 V-2~27 16.0	ナデ	ナデ	にぶい褐色		
210	3-43	圓版37	6区	S104	弥生土器	甕 V-1~2 19.6	ナデ	ナデ	黄褐色		
211	3-43	6区	S104	弥生土器	甕	18.0	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶい褐色		
212	3-43	圓版38	6区	S104	弥生土器	甕 V-2(斜行) 17.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡褐色		
213	3-43	6区	S104	弥生土器	甕	V-4 10.2	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	灰白色		
214	3-43	6区	S104	弥生土器	甕	8.0	ヘラケズリ	ナデ	にぶい褐色		
215	3-43	6区	S104	弥生土器	甕?	10.2	ヘラケズリ	削毛目、ナデ	にぶい褐色		
216	3-43	6区	S104	弥生土器	甕底部	7.0	ヘラケズリ	削毛目	にぶい褐色		
217	3-43	6区	S104	弥生土器	甕	V-4? 8.0	ヘラケズリ	削毛目	にぶい褐色		
218	3-43	圓版38	6区	S104	弥生土器	鉢形削台 V-2	15.2	ヘラケズリ	ナデ	にぶい褐色	
219	3-43	6区	S104	弥生土器	鉢形削台	V-2 12.8	ヘラケズリ	ナデ	灰白色		
220	3-43	圓版38	6区	S104	弥生土器	手捏小型?			灰白色		

遺物 番号	種類 形態	写真箇所	出土位置	種別	名様	型式 時期	計測値(cm)			文様・調整		色調	備考
							口径	底径	高さ	内面	外面		
221 3-43	圓瓶38	6区	SI04	弥生土器	鉢	高环?				ナデ	ナデ	にぶい褐色	
222 3-44	圓瓶38	6区	SI05	弥生土器	甕?	V-1	15.5			ナデ	ナデ	にぶい褐色	
223 3-44	圓瓶38	6区	SI05	弥生土器	甕	V-2 ~ V-1	17.8			ナデ	ナデ	にぶい褐色	
224 3-44	圓瓶38	6区	SI05	弥生土器	鉢	V-1 ~ 2	20.2			ミガキ	ナデ	灰白色	
225 3-44	圓瓶38	6区	SI05	弥生土器?	甕?			9.5		ヘラケズリ	ナデ	褐色	
226 3-44	圓瓶38	6区	SI05	弥生土器	高环 腹部			16.7		ミガキ	ナデ	灰白色	
227 3-44	圓瓶41	6区	SI05	玉類	ガラス小 玉							古灰色	
228 3-44	圓瓶41	6区	SI05	玉類	ガラス小 玉							青灰色	
229 3-45	圓瓶38	6区	SI06	弥生土器	甕	V-4	5.8			ナデ、ヘラケズリ	ナデ		
230 3-46	圓瓶41	6区	SK05	弥生土器	甕	V-3(併行)				ナデ、ヘラケズリ	刷毛目	黄灰色	突起付、口縁部に円 文
231 3-46	圓瓶41	6区	SK05	弥生土器?	甕			5.5		ナデ	ナデ	黄灰色	
232 3-46	圓瓶41	6区	SK05	弥生土器	甕	IV-2	20.0			ナデ、ヘラケズリ	ナデ、刻文	黄灰色	
233 3-46	圓瓶41	6区	SK05	弥生土器	甕	V-2	22.0			ナデ	ナデ	黄灰色	
234 3-46	圓瓶41	6区	SK05	弥生土器	甕	V-3	15.2			ナデ、ヘラケズリ	刷毛目	黄灰色	
235 3-46	圓瓶41	6区	SK05	弥生土器	甕	V-1	12.5			ヘラケズリ	ナデ、刻文	黄灰色	
236 3-46	圓瓶41	6区	SK05	弥生土器	鉢	V-1	13.2			ヘラケズリ	刻文、刷毛目、削	黄灰色	
237 3-47	圓瓶39	6区	SK06	弥生土器	甕?	V-1 ~ 2	21.7			ナデ、ヘラケズリ	刷毛目	黄灰色	
238 3-47	圓瓶39	6区	SK06	弥生土器	甕	V	19.5			ヘラケズリ	刷毛目	黄灰色	
239 3-47	圓瓶39	6区	SK06	弥生土器	甕?	V-1?	16.5			ヘラケズリ	ナデ	黄灰色	
240 3-47	圓瓶39	6区	SK12	弥生土器	甕	V-2 ~ 3	12.2			ヘラケズリ	刻文、刷毛目	黄灰色	
241 3-47	圓瓶39	6区	SK12	弥生土器	甕	V-1	16.5			ヘラケズリ	刻文、刷毛目	にぶい褐色	
242 3-47	圓瓶39	6区	SK12	弥生土器	甕	V-1	19.0			ヘラケズリ	刷目	灰白色	
243 3-47	圓瓶39	6区	SK12	弥生土器	甕	V-1	21.5			ヘラケズリ	ナデ	灰白色	
244 3-47	圓瓶39	6区	SK12	弥生土器	甕		3.5			ナデ	ナデ	灰白色	
245 3-47	圓瓶39	6区	SK12	弥生土器	甕	V-1	22.5			ナデ、ヘラケズリ	刷毛目	にぶい褐色	
246 3-47	圓瓶39	6区	SK12	弥生土器	甕	V-1	21.5			ヘラケズリ	刻文	にぶい褐色	
247 3-47	圓瓶39	6区	SK12	弥生土器	甕	V-1か	17.2			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶい褐色	
248 3-47	圓瓶40	6区	SK12	弥生土器	甕?		18.5			ヘラケズリ	ナデ	にぶい褐色	
249 3-48	圓瓶40	6区	SK07	弥生土器	甕	V-1	22.0			ナデ、ヘラケズリ	刻文、ナデ	にぶい褐色	
250 3-48	圓瓶40	6区	SK07	弥生土器	甕	V-1 ~ 2	23.2			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶい褐色	
251 3-48	圓瓶40	6区	SK07	弥生土器	甕	V-1	9.2			ナデ	ナデ	にぶい褐色	
252 3-48	圓瓶40	6区	SK11	弥生土器	高环?	V-1?	13.0			ナデ	ナデ	灰黄色	
253 3-48	圓瓶40	6区	SK14	弥生土器	甕	V-3	21.5			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	浅黄褐色	
254 3-48	圓瓶40	6区	SK17	弥生土器	甕	V2 ~ V-1?	19.0			ナデ	ナデ	浅黄褐色	
255 3-48	圓瓶40	6区	SK17	弥生土器	甕	V-1	15.2			ナデ	ナデ	灰白色	
256 3-48	圓瓶40	6区	SK18	弥生土器	甕	(V-2 ~ V-1)	16.2			ヘラケズリ	ナデ	浅黄褐色	
257 3-48	圓瓶40	6区	SK18	弥生土器	甕	V-2				ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	
258 3-48	圓瓶40	6区	SK18	弥生土器	鉢	V?	19.0			ナデ	ナデ	黄褐色	
259 3-48	圓瓶40	6区	SK18	弥生土器	鉢	V-1				ナデ	ナデ	浅黄褐色	
260 3-48	圓瓶40	6区	SK18	弥生土器	甕	V-3	19.5			ナデ	ナデ	浅黄褐色	
261 3-48	圓瓶40	6区	SK18	土師器	甕		17.2			ヘラケズリ	ナデ		
262 3-52	圓瓶41	6区	SK01	酒器			13.0			高輪ナデ	茶色		
263 3-52	圓瓶41	6区	SK01	酒器			12.0			四輪ナデ	茶色		
264 3-52	圓瓶41	6区	SK13	土師器			13.2					黄褐色	

通期 監号	検出 番号	写真回数	出土位置	種別	器種	型式 時期	計測値(cm)			文様・調整		色調	備考
							口径	底径	器高	内面	外面		
265	3-52	6区	SX02	羽口									
266	3-52	固所46	6区	SX02	酒器		11.0			ナデ	ヘラ、ナデ	灰白色	
267	3-52	6区	SX02	酒器				13.2		ナデ	ナデ	灰色	
268	3-52	固所46	6区	SX02	酒器			12.5		ナデ	ナデ	灰白色	
269	3-54	6区	SX09	土師器	坏					ナデ	回転ナデ	黄白色	
270	3-54	固所46	6区	SX09	罐							緑縞灰	
271	3-54	固所46	6区	SX09	罐							緑縞灰	
272	3-54	固所46	6区	SX09	罐							緑縞灰	
273	3-54	固所46	6区	SX09	罐							緑縞灰	
274	3-54	固所46	6区	SX09	罐							緑縞灰	帆1枚
275	3-54	固所46	6区	SX09	罐							緑縞灰	帆2枚
276	3-55	固所42	6区	弥生土器		V-2~V-1	24.5			ナデ、ヘラケズリ	ナデ		
277	3-55	6区	弥生土器	要		V-2~V-1	24.2			ナデ、ヘラケズリ	ナデ		
278	3-55	6区	弥生土器	舟		V-2~V-1	22.5			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	灰白色	
279	3-55	6区	弥生土器	要			18.5			ナデ、ヘラケズリ	ナデ		
280	3-55	固所42	6区	弥生土器	舟or舟	V-2~V-7	10.5			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	灰白色	
281	3-55	6区	弥生土器	要(削)			10.1			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	燕褐色	
282	3-55	6区	弥生土器	舟		V-2	18.0			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
283	3-55	6区	弥生土器	要		V-2	17.5			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
284	3-55	6区	弥生土器	要		V-1	15.5			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
285	3-55	固所42	6区	弥生土器	舟	V-1	19.5			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
286	3-55	6区	弥生土器	要			19.5			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
287	3-55	6区	弥生土器	舟		V-1~2	14.0			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡褐色	
288	3-56	6区	弥生土器				18.0			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	黄褐色	
289	3-56	6区	弥生土器	要			25.5			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	黄褐色	
290	3-56	6区	弥生土器	要		V-2	17.0			ナデ、ヘラケズリ	回旋によるナデ	黄褐色	
291	3-56	6区	弥生土器	要		V-2	18.0			ナデ、ヘラケズリ	ヘラ状工具によるナデ	淡黄色	
292	3-56	固所42	6区	弥生土器	要	V-2	17.0			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
293	3-56	6区	弥生土器	要		V-2	17.2			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
294	3-56	6区	弥生土器	要		V-2	19.0			ナデ、ヘラケズリ	ヘラ状工具によるナデ	淡黄色	
295	3-56	6区	弥生土器	舟		V-2?	13.0			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
296	3-56	6区	弥生土器	要		V-2				ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
297	3-56	6区	弥生土器	舟		V-2	17.0			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
298	3-56	固所42	6区	弥生土器	要	V-2	14.5			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
299	3-56	6区	弥生土器	舟		V-2	18.2			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
300	3-56	6区	弥生土器	舟			20.0			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
301	3-57	6区	弥生土器	要		V-2	19.5			ナデ、ヘラケズリ	クシ状工具によるナデ	淡黄色	
302	3-57	固所42	6区	弥生土器	要	V-2~3	18.0			ナデ、ヘラケズリ	クシ状工具によるナデ	淡黄色	
303	3-57	6区	弥生土器	舟		V-2~3	17.5			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
304	3-57	6区	弥生土器	要		V-3	20.2			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
305	3-57	6区	弥生土器	舟		V-3	15.6			ナデ	ナデ	淡黄色	
306	3-57	6区	弥生土器	舟		V-3	44.5			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
307	3-57	6区	弥生土器	要		V-3				ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
308	3-57	6区	弥生土器	要		V-2(削)?				ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	

番号	種類	写真用番号	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm)			文様・特徴		色調	備考
							口径	底径	高さ	内面	外面		
309 3-57	6区	弥生土器	裏	V-2(新)						ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
310 3-57	6区	弥生土器	裏			20.3				ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
311 3-57	6区	弥生土器	鉢	V-2~3	15.0					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
312 3-57	6区	弥生土器	裏	V-3	17.0					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
313 3-57	6区	弥生土器	裏	V-3	18.0					ナデ、ヘラケズリ	クシ状工具によるナデ	淡黄色	
314 3-58	6区	弥生土器	裏	V-3	14.5					ナデ、ヘラケズリ	クシ状工具によるナデ	淡黄色	
315 3-58	6区	弥生土器	裏	V-3	15.0					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
316 3-58	6区	弥生土器	裏	V-3	23.5					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
317 3-58	6区	弥生土器	裏	V-3?	19.5					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
318 3-58	6区	弥生土器	裏	V-3	17.0					ナデ、ヘラケズリ	クシ状工具によるナデ	淡黄色	
319 3-58	6区	弥生土器	裏	V-3	20.2					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
320 3-58	6区	弥生土器	裏?	V-3	17.5					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
321 3-58	6区	弥生土器	裏	V-3	13.5					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
322 3-58	6区	弥生土器	裏	V-3	13.5					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
323 3-58	6区	弥生土器	裏	V-3	12.5					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
324 3-58	6区	弥生土器	裏	V-3	15.5					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
325 3-58	6区	弥生土器	裏	V-3?	15.2					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
326 3-59	6区	弥生土器	裏		22.5					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
327 3-59	6区	弥生土器	裏	V-1?	11.5					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
328 3-59	6区	弥生土器	裏		13.1					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
329 3-59	6区	弥生土器	裏		7.0					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
330 3-59	6区	弥生土器	裏	N~V						ナデ、ヘラケズリ	ナデ、実相文	淡黄色	
331 3-59	6区	弥生土器	裏	V-39(行?)	12.0					ナデ、ヘラケズリ	ナデ	淡黄色	
332 3-59	6区	弥生土器	裏	V-1~2	29.5					ナデ	8条波綺	淡黄色	
333 3-59	6区	弥生土器	裏	V-1~2	23.0					ナデ	8条波綺	淡黄色	
334 3-60	6区	弥生土器	基部	V-1~2	20.4					ナデ	ナデ	明る褐色	
335 3-60	6区	弥生土器	鼓形縁台							ナデ	ナデ	黄褐色	
336 3-60	6区	弥生土器	基部							ナデ	ナデ	黄褐色	
337 3-60	6区	弥生土器	高坪							ナデ	ナデ	淡黄色	
338 3-60	6区	弥生土器	高坪							ナデ	ナデ	淡黄色	
339 3-60	6区	弥生土器	高坪							ナデ	ナデ	淡黄色	
340 3-60	6区	弥生土器								ナデ	ナデ	淡黄色	
341 3-60	6区	弥生土器	透坪		4.5					ナデ	ナデ	淡黄色	
342 3-60	6区	弥生土器	鼓形縁台							ナデ	ナデ	淡黄色	
343 3-60	6区	弥生土器	鼓形縁台							ナデ	ナデ	淡黄色	
344 3-60	6区	弥生土器	鼓形縁台	V-2	13.4					ナデ	ナデ	黄褐色	
345 3-60	6区	弥生土器	鼓形縁台	V-2	19.2					ナデ	ナデ	黄褐色	
346 3-60	6区	弥生土器	鼓形縁台	V-3(新)	17.2					ナデ	ナデ	黄褐色	
347 3-60	6区	弥生土器	鼓形縁台	V-2?	18.4					ナデ	ナデ	黄褐色	
348 3-60	6区	弥生土器	斜小口		1.2					ナデ	ナデ	淡黄色	
349 3-60	6区	弥生土器			8.2					ナデ	ナデ	淡黄色	
350 3-60	6区	弥生土器	透	IV?	5.2					ナデ	ナデ	淡黄色	
351 3-60	6区	弥生土器	裏		4.9					ナデ	ナデ	淡黄色	
352 3-60	6区	弥生土器	裏		7.3					ナデ	ナデ	淡黄色	

遺物 編號	博物 館番 号	写真同版	出土位置	種別	器種	型式 時期	計測値 (cm)			文様・痕跡		色調	備考
							口徑	底径	高さ	内面	外面		
353	3-60		6区	弥生土器	甕			10.0		ナデ	ナデ	黄褐色	
354	3-61		6区	弥生土器	甕			5.3		ナデ	ナデ	黄褐色	
355 (20)													
356	3-61		6区	弥生土器	甕			6.2		ナデ	ナデ	黄褐色	
357	3-61		6区	弥生土器	甕			9.7		ナデ	ナデ		
358	3-61		圓板43	6区	弥生土器	甕				ナデ	ナデ		取手付
359	1-62		6区	石製品	石製品	自製石器 (山根周)						灰色	
360	3-62		6区	石製品	石製品	自製石器 (山根周)						灰色	
361	3-62		6区	石製品	石製品	自製石器 (山根周)						灰色	
362	3-62		6区	石製品	石製品	自製石器 (山根周)						灰色	
363	3-62		6区	石製品	石製品	自製石器 (山根周)						灰色	
364	3-62		6区	石製品	石製品	自製石器 (山根周)						灰色	
365	3-62		6区	石製品	石製品							灰色	
366	3-62		6区	石製品	石製品								
367	3-62		6区	石製品	石錐							灰白色	
368	3-62		6区	石製品	石錐							灰白色	
369	3-63		圓板44	6区	漆器器	坪蓋		15.8		(4.9) ヘラケズリ、ナデ	ナデ	灰白色	
370	3-63		6区	漆器器	坪蓋	山本日野期				ヘラケズリ、ナデ	ナデ		
371	3-63		6区	漆器器	坪蓋		15.0			ナデ		灰色	
372	3-63		6区	漆器器	坪蓋		12.2		(3.8)	ナデ		灰色	
373	3-63		圓板44	6区	漆器器	坪蓋	山本IV(古)	10.2		(4.35) ヘラケズリ、ナデ	ナデ	灰色	
374	3-63		6区	漆器器	坪蓋	山本IV(古)				ヘラケズリ、ナデ	ナデ	灰色	
375	3-63		6区	漆器器	坪蓋					ヘラケズリ、ナデ	ナデ	灰色	
376	3-63		圓板44	6区	漆器器	坪蓋				ヘラケズリ、ナデ	ナデ	灰色	
377	3-63		圓板44	6区	漆器器	坪蓋				ヘラケズリ、ナデ	ナデ	灰白色	
378	3-63		6区	漆器器	坪	山本Ⅲ(新)	13.6	7.0	3.5	ナデ	ナデ	淡灰色	
379	3-63		6区	漆器器	坪蓋					ナデ	ナデ	灰色	
380	3-63		6区	漆器器	坪蓋		13.8		3.8	ナデ	ナデ	淡灰色	
381	3-63		6区	漆器器	坪蓋		13.9		(2.3)	ナデ	ナデ	淡灰色	
382	3-63		6区	漆器器	坪蓋		13.6			ナデ	ナデ	淡灰色	
383	3-63		6区	漆器器	坪蓋		15.8			ナデ	ナデ	淡灰色	
384	3-63		6区	漆器器	坪蓋					ナデ	ナデ	灰色	
385	3-63		6区	漆器器	坪蓋		10.0			ナデ	圓輪ナデ	灰色	
386	3-63		6区	漆器器	坪蓋					圓輪ナデ		灰色	
387	3-63		6区	漆器器	坪蓋					ナデ		灰色	
388	3-63		6区	漆器器	坪		11.0	9.0	3.3	ナデ	ナデ	灰色	
389	3-63		6区	漆器器	坪蓋		9.8	5.2	3.2	ナデ	圓輪ナデ	灰色	
390	3-63		6区	漆器器	坪	7C				ナデ	圓輪ナデ	灰色	
391	3-64		6区	漆器器	蓋		(2.5)			ナデ	圓輪ナデ	淡灰色	
392	3-64		6区	漆器器	蓋					ナデ	圓輪ナデ	灰白色	
393	3-64		6区	漆器器	坪蓋		12.2		3.6	ナデ	圓輪ナデ	淡灰色	
394	3-64		6区	漆器器	蓋		7.8	6.4		ナデ	圓輪ナデ	灰色	
395	3-64		6区	漆器器	坪蓋		12.2		3.2	ナデ	圓輪ナデ	淡灰色	
396	3-64		圓板44	6区	漆器器	坪	12.2	9.7	(4.7)	ナデ	圓輪ナデ	灰色	軽用研か

通物 番号	地図 番号	写真・絵版	出土分類	種別	種類	型式 時期	計測値 (cm)	文様・調査		色調	備考
								口徑	底径	腹高	
397 3-64	6区		須恵器	环			13.4	9.0	(4.3)	ナデ	回転ナデ、ナデ
398 3-64	回版44	6区	須恵器	环			12.6	6.1	4.45	ナデ	回転ナデ
399 3-64	6区		須恵器	环			13.6			ナデ	回転ナデ
400 3-64	6区		須恵器	凸环			21.8		(3.7)	ナデ	回転ナデ
401 3-64	6区		須恵器	环				11.8		ナデ	回転ナデ
402 3-64	6区		須恵器	环				9.7		ナデ	回転ナデ
403 3-64	6区		須恵器	环				10.4		ナデ	回転ナデ
404 3-65	6区		須恵器	素			19.4		(8.3)	ナデ	回転ナデ
405 3-65	6区		須恵器	素						ナデ	回転ナデ
406 3-65	6区		須恵器	素			15.0			ナデ	回転ナデ
407 3-65	6区		須恵器	凸環	縦部					ナデ	回転ナデ
408 3-65	6区		須恵器	小腹						ナデ	回転ナデ
409 3-65	6区		須恵器	小腹						ナデ	回転ナデ
410 3-65	6区		須恵器	素			6.6	(3.5)	ナデ	回転ナデ	淡灰色
411 3-65	6区		須恵器	素				8.2	(2.3)	ナデ	回転ナデ
412 3-65	回版45	6区	須恵器	深腹						ナデ	回転ナデ
413 3-65	6区		須恵器	平底						ナデ	回転ナデ
414 3-66	6区		須恵器	凸环			16.4	(5.0)	ナデ	回転ナデ	灰色
415 3-66	6区		須恵器	凸环	环部		13.9			ナデ	回転ナデ
416 3-66	6区		須恵器	高环						ナデ	回転ナデ
417 3-66	6区		須恵器	高环						ナデ	回転ナデ
418 3-66	6区		須恵器	高环						ナデ	回転ナデ、ナデ
419 3-66	6区		須恵器	高环						ナデ	回転ナデ、カキメ
420 3-66	6区		須恵器	高环	腰部		10.0			ナデ	回転ナデ
421 3-66	6区		須恵器	高环	腰部		9.0	(3.6)	ナデ	回転ナデ	灰色
422 3-66	6区		須恵器	高环	腰部		9.5	(2.4)	ナデ	ナデ	
423 3-66	6区		須恵器	高环						ナデ	
424 3-66	6区		須恵器	素?			10.8			ナデ	ナデ
425 3-66	6区		須恵器	素?						ナア	灰白色
426 3-66	回版45	6区	須恵器	素?						ナデ	回転ナデ
427 3-66	6区		須恵器	素?	山本田(腰)					ナデ	回転ナデ
428 3-67	6区		須恵器	便			37.0			ナデ	カキメ
429 3-67	6区		須恵器	便			22.0			ナデ	
430 3-67	6区		須恵器	便			21.8			ナデ	
431 3-67	6区		須恵器	便			23.0			ナデ	
432 3-67	6区		須恵器	便						ナデ	回転ナデ
433 3-67	6区		須恵器	便						ナデ	回転ナデ
434 3-67	6区		須恵器?	便?						ナデ	回転ナデ
435 3-67	6区		須恵器	便						ナデ	回転ナデ
436 3-67	6区		須恵器	小腹の 腰?			11.0			ナデ	回転ナデ
437 3-67	回版45	6区	須恵器	土馬						ナデ	回転ナデ
438 3-67	6区		須恵器	环	9CM未~ 10CM		5.8			ナデ	回転ナデ
439 3-67	回版45	6区	須恵器	环	9CM未~ 10CM					ナデ	回転ナデ
440 3-68	6区		土師器	便	奈良	22.6			ナデ	ナデ	黄褐色

遺物 番号	検出 番号	写真図版	出土位置	種別	群種	型式 時期	計測値 (cm)			文様・調査		色調	備考
							口径	底径	脚高	内面	外面		
441	3-68		6区	土師器	壺	奈良?	20.0			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	褐色	
442	3-68		6区	土師器	壺		18.4			ナデ	ナデ	黄褐色	
443	3-68		6区	土師器	壺	奈良?	13.2			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	褐色	
444	3-68		6区	土師器	壺		15.0			ナデ	ナデ	黄褐色	
445	3-68	図版43	6区	土師器	壺		19.0			ナデ	ナデ	赤褐色	
446	3-68		6区	土師器	壺		18.0			ナデ	ナデ	黄褐色	
447	3-68		6区	土師器	壺		18.0			ナデ	ナデ	黄褐色	
448	3-68		6区	土師器	壺		19.5			ナデ	ナデ	黄褐色	
449	3-68		6区	土師器	高杯			12.0		ナデ	ナデ	青褐色	
450	3-68		6区	土師器	把手	古墳				ナデ	ナデ	黄褐色	
451	3-68		6区	土師器	呑玉		(長さ) 2.7	(中) 1.1	(高さ) 0.8				
452	3-69	図版45	6区	土師器	坪		5.0			ナデ	回転ナデ	にふい青褐色	
453	3-69	図版45	6区	土師器	皿		12.7	6.7	4.5	ナデ	回転ナデ	淡褐色	
454	3-69		6区	土師器	皿			6.4		ナデ	回転ナデ	淡褐色	
455	3-69		6区	土師器	坪			7.2	(2.7)	ナデ	ナデ	淡褐色	
456	3-69		6区	土師器	坪	10C?		7.0		ナデ	回転ナデ	淡褐色	
457	3-69	図版45	6区	土師器	蓋付坪	古墳		6.5	(4.0)	ナデ	ナデ	白色	
458	3-69		6区	土師器	皿			8.2		ナデ	ナデ	明褐色	
459	3-69		6区	土師器	皿		7.2	4.1		ナデ	ナデ	明褐色	
460	3-69	図版45	6区	瓦質土器	鍋					ハケ	スス、ナデ		
461	3-69		6区	白磁	碟	中世前半	16.4					手縫	
462	3-69		6区	白磁	碗	中世前半		4.4			舗砂粒	地：灰白色 釉：灰白色	
463	3-69		6区	青磁	碗			16.6				露井文	
464	3-69		6区	青磁	碗				(2.6)			露井文	
465	3-69		6区	青磁	碗			5.0			露井	地：灰褐色 釉：黄褐色	底部 離壁 厚手
466	3-69		6区	青磁	合子蓋	中世前半	9.0			内：ナデ 外：天井部一革文	志	地：灰白色 釉：灰白色	中国製
467	3-69		6区	陶器器	罐			13.6					
468	3-69		6区	陶器	罐					内：回転子の5-11mm以上の瘤目 外：回転ナデ	微砂粒	内：黄褐色 外：褐灰色	
469	3-69		6区	陶器	瓶?					内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	1mm程度の砂粒を含む	内：灰褐色 外：灰褐色	透視系

第5節　まとめ

1. 1～4区の調査概括

《検出された遺構》

1～4区の調査では、掘立柱建物跡4棟、井戸跡2基、溝状遺構4条、また土坑とピットが多数検出された。特筆すべきものとして、3区において一般の住居とは考え難い大規模な建物を予想させる柱穴が確認されている。内部には長方形に成形された柱材が残存し、一部にヒノキ属が使用されている。また、掘形は1m前後の方形を呈するなど規模が大きく、特別な建物であったことが推定される。

また、上記以外に掘立柱建物跡は3棟を復元できたが、これ以外にもピットが多数検出されていることから、復元できなかった建物も多くあると考えられる。

2区では大溝が検出された。今回の調査では、人為的に掘削されたものか否かの判断はつきかねたが、遺跡の営まれていた期間に継続して存在しており、何らかの区画意識は存在していた可能性がある。

また、廐棄土坑と推定されるSK1～SK4では、土師器、須恵器がまとまって出土しており、良好な一括遺物として貴重な資料が得られた。

《時期と性格》

遺物はコンテナに約40箱出土している。当地域で編年作業の進んでいる須恵器を元にして遺構の時期を推定すると、①石見8期（SK2）、②石見9A期（SD2）、③石見9B期（SE1、SK1、SK4）に分けることができ（柳原2010）、遺跡の営まれていた時期は概ね奈良時代～平安時代初頭（8世紀代を中心）と推定される。また、大溝中からは、石見7期～9B期に至るまでの遺物が出土しており、遺跡の営まれていた期間、継続して機能していたと考えられる。

上述のように、検出された遺構からは官衙等の可能性をうかがわせるが、一方で出土遺物にはそれを示すような様相は見られなかった。これらのことから、安富平野一帯を基盤としていた地方の有力者の居宅であるとも考えられる。

なお、本調査区に隣接した箇所において、平成17年度に基盤整備事業に伴う発掘調査が実施されている。その結果、奈良～平安時代の掘立柱建物群、総柱建物跡等が検出され、官衙関連遺跡の可能性が指摘されている。本調査区とは直線距離で約150mの位置にあたるため、一連の遺跡である可能性もあり、建物群の変遷を一体的に捉えていく必要があると考える。

2. 6区の調査概括

《調査区の位置と範囲》

6区は県道建設予定範囲の東端になる。調査区は幅14m、長さ70m、面積約700m²になる。調査区東限より直線距離で200m先から羽場遺跡になる。6区は中小路遺跡全体では南東域に相当する。6区と羽場遺跡の間には谷状地形が認められる。

《微地形と土層》

確認された調査区の基本層序は次の通りである。①暗褐色砂質土（水田耕上）②明黄褐色粘質土③灰褐色砂質土④にぶい灰褐色砂質土（水田床土）⑤灰褐色砂質土（水田客土）⑥暗茶灰褐色砂質土（マンガンを含む）⑦暗茶褐色土⑧黄灰褐色土⑨淡黄灰色土⑩綠灰色土。調査は①～④層までを重機で掘削し、⑤層から人力による掘削を行なった。調査区の南側については調査以前に

⑥層まで削り取られており、調査当初には⑦層上面がすでに見えている状態だった。⑥層以下の調査はサブトレーンによる下層確認を行なった結果、⑥、⑦、⑧、⑨層を確認し、つづいて面的に掘り下げ、各層の上面において遺構が検出された。⑩層からは遺物は得られていない。

以上から遺構検出に関わる層は⑥層から⑩層と確定できた。⑥層はマンガンを含む薄い層で、その形成因は水田土壤に含まれるマンガンが沈殿・集積したものと考えられる。⑥層自体は本来もう少し厚く堆積していたのであろうが、水田造成により上部が削平され、その削平面にマンガンが集積したのであろう。⑦層は北西部が薄く、南東部に向かって厚みを増している。上面はほぼ平坦でここに奈良～平安時代の遺構群が分布している。⑧層は遺跡の基盤をなす土層で調査区の西側で検出されている。⑨層は調査区中程から東側にかけて堆積している。やはり南東部に進むに従って厚みを増している。弥生時代の遺構はこの層に掘り込まれている。

こうした層序と遺構群の年代差からは鯨背状をなす基盤層=⑧層の東側から南東部にかけて堆積していた泥土状の地層が沼澤地の縮小に応じて干陸化し、そこが弥生時代に居住域として利用されるようになり、さらにその後の追加堆積によって古墳時代以降にも広範囲に建物群が存立しうる状況に至ったものと推定される。

《検出された遺構》

⑥層上面ではピット約40基、溝状遺構2条が検出された。これら遺構は出土遺物から中世および中世以降のものと考えられる。また、上面では掘形を確認できなかつたが、層中で長方形土坑に箱形木棺を納めた墓坑を1基検出した。共伴遺物は、土師器壺と明鏡1枚である。

⑦層上面ではピット約350基等を検出した。N4区はとくに遺構が密集しており、中には楕円溝、羽口、須恵器（奈良～平安時代）を伴う土坑が見つかっている。N2区では⑦層・⑧層の不整合面から堅穴建物跡1棟（SI06）を検出した。

⑧層上面ではピット群及び土坑を11基検出した。また⑨層中位で堅穴建物跡1棟（SI01）を検出した。⑩層上面では堅穴建物跡4棟（SI02～05）、掘立柱建物跡（SB02～03）2棟、墓坑3基以上を検出した。なお、調査区東端において土器溜まりを確認している。

堅穴建物跡、掘立柱建物跡の特徴については下記のとおりである。

第3-3表 堅穴建物跡一覧

遺構名	規模・平面形	柱穴	柱間	中央上坑	出土遺物
SI01	径約3.6m 円形又は多角形	2基	約1.2m	中央部に炭化物集中箇所	弥生土器（中・後期） 堅穴内土坑から甕
SI02	径約6.4m 胴張彌丸方形	3基 (4本構造)	約2.5～ 2.7m	底部一面に炭化物	弥生土器（後期）・ 甕石・碧玉片
SI03	推定径約5.0m 胴張彌丸方形	3基 (4本構造)	約2.5m	北東部周辺から内部にかけて赤変硬化 底部一面に炭化物	弥生土器（後期）
SI04	径約5.6m 胴張彌丸方形	4基 (4本構造)	約2.5m	底部一面に炭・上部に両面被熱石	弥生土器（後期）・ 刀子
SI05	径約6.8m 円形	5基 (6本構造)	約2.2m ～2.7m	底部一面に炭化物・周辺被熱化	弥生土器（後期初頭） ・ガラス土
SI06	径約5.6m 胴張彌丸方形	7本か？	約1.5m	下面被熱石 右の下に炭化物あり	弥生土器（終末期）

第3-4表 掘立柱建物跡一覧

遺構名	規模	柱間	出土遺物
SB01	2間×2間	約1.5～1.8m	土師器（周辺の同規模の柱穴から古墳時代須恵器）
SB02	1間×2間	約2.6m	弥生土器
SB03	1間×2間	約2.2m	弥生土器

《出土遺物》

出土した遺物の種別と数量は次の通りである。

遺物の大半は土器類である。時代別では弥生土器（後期～終末期）、須恵器・土師器（古墳時代・奈良～平安時代）、中世陶磁器類。その他に石器と鉄製品等が存在する。総量コンテナ200箱。

出土遺物で注意されたのは、弥生時代後期の堅穴建物内の中央土坑（楕円形で長軸は約80cm、深さ約20cm、内面底部には炭層、内部から周辺が赤変している）上か直近箇所から大型の鏡餅形をした扁平な川原石が検出されたことである。中には片面の被燃した例があるなど中央土坑との機能的関連性が想起されたところである。類似の川原石は遺構外からも數個検出されており、その数が堅穴建物の棟数と対応関係にある可能性をうかがわせている。その他に堅穴内部床面や柱穴からガラス小玉や碧玉、刀子が出土したことでも後期集落を特徴付ける事象として注目された。

古墳時代の遺構としては7世紀代の高台付壺片が出土したSB01以外には明確なものはないが、出土した須恵器の量は多い。時期的には6世紀後葉～9世紀前半代のものが含まれるが、6世紀後葉から7世紀、8世紀後半から9世紀前半代の量的な割合が高い。

奈良～平安時代の遺構・遺物で顕著なものを挙げると、掘立柱建物跡の柱穴群や碗形溝・羽IIを含んだ土坑等の鍛冶関連遺構と遺物、直径1m前後で柱穴の可能性を持つ土坑などがある。6区の西側に位置する調査区の3区で検出された遺構と同様大型の建物の存在を想定し、官衙関連遺構の可能性を含め検討が必要であろう。

3. 小結

中小路遺跡の発掘調査は県道白上横田線改良工事に伴い平成17年度～平成20年度にかけて実施したところである。この間、遺跡全体の約2～3割に当たる3.5万m²の面積を発掘調査した。調査域は遺跡の北側から東側にかけての周縁部と中央部より西側の中心部を発掘調査したことになる。

検出された遺構・遺物は、時代ごとに粗密はあるものの、縄文時代から近世に至るまでのものがある。以下、時代を追って遺構・遺物のあり様と特徴点を列記し、中小路遺跡の意義にも触れてまとめたい。

1) 遺跡の変遷

縄文時代

この時代の遺構は検出されていない。遺物も6区から晩期の突帯文土器が1点のみ出土した。平成15年度に行われた北西部の調査では突帯文土器と石鏃・石錐、黒曜石剝片等がえられている。

遺跡全体を調査したわけではないので断定的なことはいえないが、この時代の終わり頃に遺跡縁辺部に零細な集落が営まれたことが推定される。南辺の山丘裾に立地する安富王子台遺跡では、縄文時代後・晩期の土器が出土しており、この一帯に縄文人の活動拠点が存在したことは確実である。中小路遺跡における縄文晩期土器の出土は居住域周縁部の活動の痕跡と理解される。

おそらく、北に張り出した丘陵の裾と平野の中の微高地の間には沼沢地が存在し、そこでの狩猟漁労活動が細々と展開されていたのであろう。

弥生時代

この時代については竪穴建物跡6棟、掘立柱建物跡2棟を検出した。これらの遺構には多くの弥生土器が伴出している。型式は中期末から後期末のものが含まれる。竪穴建物は柱丘に重なり合うものが存在し、短期間の集住状態が看取された。これらは平成16年度に調査された遺跡東部において10棟前後の竪穴建物跡が検出されたことと軌を一にする現象で安富平野における安定的な農業生産と居住が進展しつつあったことを示している。なお、弥生時代集落の構造と様相については別項を立ててまとめを行うことにしたい。

出土遺物の中心は弥生土器である。大半の土器は複合口縁を有し、口縁部に多条の平行沈線を施している。こうした様態は山陰地方に分布する後期土器に通有の特徴であり、後期には安富平野が右見地方西部の土器分布圏の包摂されていたことを示すものといえよう。ただし、一部には防長地方や安芸方面の土器も見出され、これら地方との関係性が保持されていることを物語っている。平成16年度の調査では同じく後期に属する土器棺墓群が検出されているが、棺に用いられた大型壺形土器は防長地方特有の型式であった。中小路遺跡の一角にこの方面からの密接な関連性をうかがわせている。こうした集落様相も中小路遺跡の顕著な特徴ということができよう。

古墳時代

この時代の遺構としては7世紀代とみられる掘立柱建物が1棟確認されている。3間×3間（1間=1.5m～1.8m）で倉庫跡と考えられる。他に同時期の遺構は確認できないが、南西のSX02から7世紀頃の須恵器壙蓋が中世土器と混在して出土しているが、出土状態からは古墳時代に通る可能性がある。

また、上師器については、壺形土器・壺形上器の体部の破片数が多く出土しており、中には古墳時代後期末に属する可能性のあるもののが存在する。さらに、7層～8層上面にかけては、調査区の東側で焼土が数箇所検出されている。関連遺構の検出はできなかったが、その焼土の周辺または土器が被熱しているものが多いことから、当該期の何らかの人為的面（住居の床面）であったことが推定される。

奈良～平安時代

この時代の所産と考えられる須恵器の出土は多く、とくに3区では大溝や柱穴周辺、6区では北側で集中的に検出されている。

特筆されるのは、3区の大型の柱穴群である。穴中には方形の柱根が良好に残っている。平成17年度調査区のE区では大型の倉庫跡と思われる遺構を検出しており、宮衙関連遺構と判断された。墨書き土器等宮衙の存在を直接的に示す遺物は出土していないが、3区およびその北側の調査区（平成17年度E区）では大型掘立柱建物跡が検出されており、それらの遺構群と有機的につながる建物の存在をうかがい知ることができる。弥生時代集落同様、奈良・平安時代の大型建

物群についても別項でやや詳しく触れたい。

この他、当該時代の遺物として金属器の写しとされる高台付の坏が多く出土し、転用硯も出土したことを記しておこう。中小路遺跡の官衙跡としての性格に問わる可能性があると考えるからに他ならない。あるいは、6区において羽II・鐵治津と、奈良時代後半～平安時代初期の善坏を含む鐵治関連土坑が検出されている。周辺においては、多くのピット群が検出されており、建物は復元できなかったが、複数の建物が存在した可能性は高い。また周辺では綠釉陶器が出土している。これらも遺跡の性格を考えるうえで看過できない遺物といえよう。

中世

中世の遺構としては6区の木棺墓や周辺の溝状遺構が挙げられる。後者は調査区の東端と西端で検出されているが、その方向は現在の水田方向に一致していることは興味深い。

今回の調査では白磁や青磁、肥前陶器などが出土しているので、時期不明な建物跡や柱穴には中世に属するものが存在する可能性はある。羽場遺跡における平成元年の調査区では中世の貿易陶磁器等が多く出土している。安富平野の有力な中世集落が営まれていたことは疑いない。中小路遺跡に関連集落が存在したことは十分考えられる。

2) 弥生時代の集落について

6区検出の竪穴建物群の分布と変遷

6区では弥生時代中期末～古墳時代初期にかけて築造された6棟の竪穴建物跡と継続して営まれた集落の居住域が確認された。今回検出された竪穴住居跡の時期ごとの変遷と共に通する特徴をまとめる。

検出された遺構は竪穴建物跡6棟・掘立柱建物跡2棟・上器溜まり・墓坑・ピット群である。これらの遺構群は西端にSI06が1棟、そこから約20m東にSI01～SI05、SB02・SB03等の遺構群が200m²の範囲に相互に重複状態をなして存在している。上器溜まりはこの群集域から東約10m離れて見出されている。ピットが集中するのはSI06と群集域の中間になる。

竪穴建物跡の重複関係においてもっとも先行するのはSI05である。後期初め頃に属する。後期の竪穴建物は径が8m前後のものを大型、6m前後のものを中型、4m前後のものを小型として扱っているが、それに従えばSI05は中型建物ということになる。平面形が円形もしくは多角形を呈し、ガラス小卡が検出されている。

SI02はSI05の西壁を據されて築造されている。平面形は胴張隅丸方形とした。北側半分は調査区外であるが、柱穴・中央十坑が確認されており、構造の観察に支障はない。径6.4mの中型建物である。出土土器は後期前葉とした。SI05とSI01は壁の一部がわずかに重なり合っている。床面のレベルは後者が高く、その壁帶溝は、前者の埋土中に検出されている。SI01が後出の建物であることは明瞭である。SI01の平面形は円形もしくは多角形で径は3.6mと小型建物となる。出土土器は最新のものが後期前葉から中葉に属する。以上の重複関係を整理するとSI05（後期初頭）→SI02（後期前葉）→SI01（後期前葉・中葉）となる。

次に建物の位置関係から併存状態を復元する。SI04は胴張隅丸方形で径は5.6m。中型建物に含められよう。出土土器の多くは後期前葉から中葉に位置づけられる。刀子が川上。SI05との間隔は狭いので両者の併存は考えにくい。同じくSI03との共存も成り立たないとすべきであろう。SI03の全構造は捉え切れないが、胴張隅丸方形の中型建物の可能性が高い。出土土器は後

期前葉である。このように観察すると SI03 が SI04 に先行することになる。調査区西側で検出された SI06 は胸張隅丸方形で径 5.6m の中型建物である。時期は後期末になる。

以上を図式的にまとめると以下のようになる。



後期集落の復元

上記の堅穴建物変遷図からすると 6 区内では中期末・後期初頭より後期末までに中・小型建物 1 棟～2 棟が断続的に営まれていたことになる。この堅穴建物群に 1 間 × 2 間の掘立柱建物 1 棟が加わって集落の一角を構成したと考えられる。一角としたのは、弥生時代の集落は通常 5 棟前後の堅穴建物と付属的な施設、たとえば掘立柱建物等が組み合って構成されるという従来の成果に拠っている。そして、多くの場合これら建築物が半径 50m 前後の半円形に配置されている。

そこで、一集落（一個の単自集落）の建物構成からすると 6 区の一時期 1 棟～2 棟の建物群は集落の一部分で、これに調査区外に存在が予測される未検出の数棟が加わって集落全体が形成されていたと考えられよう。実際、平成 16 年度に調査された B 区では後期に属する 9 棟の堅穴建物跡が確認されている。B 区は 6 区の北側に位置し、距離は至近で 50m 程度になる。先の集落範囲を参考にすれば、6 区建物群が遺跡東部緩斜面に営まれた B 区集落の一部をなしていた蓋然性は高いといえよう。

なお、堅穴建物内の中央十坑に作った鏡餅形の川原石は俗的な意味での検討が求められるところであるが、集落構成に引き付けていえば、これは一棟一石を示す事物と読み取ることができそうである。とすれば、6 区内にさらに数棟の堅穴建物が存在したこととも予想しうる。先の B 区に統いて密集状態で後期集落が展開していたのであろうか。平成 15 年には遺跡北西部で後期末の堅穴建物跡が 1 棟検出され、B 区西側では後期の土器棺墓群が発見されてもいる。中小路遺跡の北縁部から東側・東南縁部にかけての複数の単自的集落が併存していたことを物語る事象と考える。

3) 奈良・平安時代の建物群と遺物

県道白上横田線建設に伴う発掘調査で奈良・平安時代の遺構が検出されたのは 3 区を中心とした調査域である。3 区では一辺約 1m の大型方形柱穴 3 基が確認され、その一穴からは方形に削りだした柱根が検出された。また、掘立柱建物跡、溝状構造を伴う棚列や井戸、土器の廃棄土坑、多数の柱穴等の存在も判明している。これらの遺構や遺構外から多くの須恵器が出土しているが、その時期は概ね奈良時代～平安時代初頭に相当する。6 区でも多くの当該期須恵器の出土があり、他に絵柄陶器等が得られている。遺構としては羽口・鉄滓を伴う上坑が発見された。

これらの遺構・遺物が平成 17 年度に検出された特大の掘立柱建物群と一連のものであることは論を俟たない。特大建物群は県道建設予定地の北側で検出されている。遺跡全体からするとこれら建物群（10 数棟）は鯨背状に隆起した微高地の中央部から北西部を広く占め、その面積は約 1 万 m² に及ぶ。前面庇付きの 7 間 × 3 間の建物を中心に様々なタイプの建物が群集し、その周辺に中小の建物や付属施設が配置されている。3 区はこの中心域の南側に当たるが、ここにも方柱の大型建物の存在が明らかにされたことは一連の建物群が南北方向を主軸として造営されていた

ことを推測させる。同時に内部が柵等によって小区に分割されていったことなども想定できる。そして周辺部には鍛冶工房等が存在し、地域有力者層の一種の家政機関群と居住部分が共存する自己完結的な特徴的集落が営まれていたことは疑いない。

4) 中小路遺跡の意義

中小路遺跡は縄文時代晩期～近世・近代に至るまで連続として集落が営まれ、とくに弥生時代後期と奈良時代後半～平安時代前半には地域の拠点集落・村落として、その性格を露わにした遺跡とすることができる。国道9号線が走る低丘陵前面の段丘面にも多くの遺跡があり、中小路遺跡の歴代集落と共に地域的な大共同体・村落共同体が形成されて高津川水系の優勢な地域をなしていたことが考えられる。

平成15年までは安富平野の中核的集落として安富王子台遺跡や羽場遺跡が注目されていた。しかし、安富地区の開拓整備事業と県道白土横田線建設に伴って中小路遺跡の発掘調査が大規模に行われた結果、少なくとも弥生時代後期と奈良・平安時代には平野の中央を占める中小路地区に顕著な様相を示す集落が存在したことが明瞭になり、この所見を通じて平野全体の前近代における集落・村落共同体の構成と変遷にある種の見通しが得られたことは意義深い。

広大な盆地地形を高津川・四見川が貫流する自然環境と日本海までもそう遠くない地理的位置の優位さが東西南北交通の利便性に繋がり、水田経営の発展とともに相俟って相対的に安定した地域力を創出したものと考えられる。中小路遺跡の発掘調査はそうした歴史的地域相の解明に貴重な貢献をなしたというべきであろう。

参考文献

- 益田市 1978 『益田市誌（下巻）』
島根県教育委員会 1992 『石見空港建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』
益田市教育委員会 2004 『中小路遺跡』
益田市教育委員会 2008 『家下遺跡・中小路遺跡』
柳原博英 2010 「石見国須恵器生産と出雲產須恵器」『出雲国の形成と国府成立の研究-古代山陰地域の土器様相と領域性-』島根県古代文化センター
横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心として-」『太宰府陶磁器研究』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会
島根県教育委員会 1995 『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
島根県教育委員会 2010 『久城東遺跡・若葉台遺跡・久城西I遺跡・久城西II遺跡・原浜遺跡-一般国道9号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書6』
島根県教育委員会 2010 『堂ノ上遺跡 一般県道久城インター線久城工区地域活力基盤創造交付金（改良）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』
島根県教育委員会 2011 『堂ノ上遺跡 一般国道9号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7』

第4章 羽場遺跡の発掘調査

第1節 既往の調査歴と調査の経過

1. 既往の調査

羽場遺跡は、平成元年（1989年）のドライビングスクール建設による残土処理工事に先立ち、本発掘調査が実施された。

対象地は、益田市街の南西、高津川によって形成された安富平野の一角に位置し、国道9号線の北側、標高約11mの水田中に存在する。上記の調査で、全長50mにわたる弥生時代中期の濠や多数の土坑群、中世の柱穴が約300基検出されている。濠で囲まれた集落であることが明らかになるとともに、排水機能を兼ねていたことが想定される。

出土遺物には、大量の弥生土器、上師器、須恵器の他に縞類陶器や白磁があり、古代から中世における地域の拠点的な遺跡と考えられている。

2. 調査の経過

羽場遺跡は、平成15年度に確認調査を実施し、その結果に基づいて調査範囲を確定、平成19年度から20年度の2ヶ年をかけて本発掘調査を実施した。農道部分の西側を1区として平成19年度に、東側を2区として平成20年度に実施した。報告書作成業は、平成23年度に合わせて実施している。

1) 平成19年度の調査

確認調査 平成19年度は、1区を先ず6月11日から6月20日にかけて、トレーニングによる補足・確認調査を実施した。

対象地において西から10m毎に調査区G1～G9を設定し、下層の堆積状況を確認するため部分的な掘下げを3箇所行った。

上記の結果、その遺物の出土状況や土層観察により、少なくとも東側のG7～G9には遺構が存在するものと考え、西側のG1～G6は、谷部と判断し、調査対象外とした。

また、調査地の南北側の盛土による造成工事部分については、表土掘削・下層掘下げ時等に随時立会を実施した。

本発掘調査 平成19年度は、並行して実施している中小路遺跡6区の発掘調査期間と面積を考慮して、1区G7～G9の調査を実施することとした。調査は7月15日に開始、8月27日に終了した。調査面積は約250m²である。

調査開始後、まずは重機により表土掘削を実施、3日間で終了した。その後、測量業者による基準杭設置、発掘作業員により遺物包含層・遺構検出までを掘削した。

7月25日には落込みの掘削も開始し、遺物が多く出土するようになった。随時測量作業や写真撮影を実施し、8月27日にすべての現場作業を終了した。

9月2日には現地説明会を実施し、10月には、益田市歴史民俗資料館にて展示を実施した。

2) 平成20年度の調査

平成20年度の現地調査は、7月9日から開始、12月7日に終了した。なお、終了当日に現地説明会を実施している。

1区の調査成果に基づいて、2区は全面を重機による表土掘削を実施し、その後人力による発

掘に着手した。その結果、弥生時代前期、中期、平安時代頃の遺構を検出し、3時期にわたる集落跡だったことが確認された。

調査の成果は、益田市民俗資料館の発掘速報展などで活用した。

3) 調査指導

現地調査中に下記のとおり研究者及び鳥根県文化財課職員に調査方針等について指導を受けた。
(平成19年度)

平成19年 8月 7日 是田 敦（鳥根県教育庁文化財課）

村上 勇（広島県立美術館）

中村唯史（鳥根県立三瓶自然館）

(平成20年度)

平成20年 8月 22日 是田 敦（鳥根県教育庁文化財課）

9月 12日 田中義昭（鳥根県文化財保護指導委員）

宮本正保（鳥根県埋蔵文化財調査センター）

10月 4日 植原博英（浜田市教育委員会） 徳永 隆（松江市教育委員会）

10月 6日 大谷晃二（鳥根県立穴上高等学校）

11月 5日 田中義昭

11月 27日 是田 敦（鳥根県教育庁文化財課）

12月 3日 丹羽野 裕 宮本正保（鳥根県埋蔵文化財調査センター）

3. 発掘調査成果の概要

発掘調査は、上記のように2ヶ年にわたって実施した。

1) 各区の位置

羽場遺跡のなかで、1区は南西部、2区は南部に位置する。調査前は水田と草地であった。

なお、調査の便宜上、1区はG7区～G9区の3つ、2区は2A区～2C区の3つに分けている。
前述のとおり、1区については、追加した試掘調査結果によって調査範囲対象地を絞っている。

2) 1区の概要

1区では、農道部西側を発掘調査した。遺構の検出面は標高約10.4mである。

調査成果の中で特筆される点としては下記の内容が挙げられる。

- ・弥生時代中期及び中世前半期における集落跡。
- ・弥生時代中期の土坑4基、落込み2箇所を確認した。
- ・中世前半期の石列、落ち込みが確認され、当該期の集落の広がりが確認された。
- ・主な遺物は、石器、弥生土器、須恵器、土師器、土馬（須恵質）、青磁、白磁等で、整理コンテナ15箱である。

3) 2区の概要

調査成果の中で特筆される点としては下記の内容が挙げられる。

- ・弥生時代前期の遺物が遺構に伴って出土している。大型土坑は、墓の可能性があり、集落の様相が明らかになった。
- ・弥生時代中期の土器が環壕に伴って出土している。集落を区画するように機能していた溝が確認された。

・弥生時代中期の土器が多量に破棄された落ち込みが確認された。当該期の集落の広がりが確認された。

・平安時代の掘立柱跡が検出された。柱穴の掘り方は方形を呈し、官衙的様相が確認された。上記の遺構を含め、各時期の遺構、遺物は一覧表にしてまとめた。

また、遺構に伴う遺物以外に、遺構面上に堆積した包含層から時期幅のある遺物が出上している。その数は整理コンテナ約160箱である。

3. 文化財保護法上の措置と経過

本発掘調査の文化財保護法第99条第1項に係る発掘通知について、1区は平成19年6月1日付、2区は平成20年7月7日付で益田市教育委員会教育長から提出した。

調査は、同年12月7日にて全て終了し、それぞれ記録保存が正式に決定し、現地での工事が行われた。平成24年現在、工事は進捗し、木造跡は掘削及び大規模な盛土施工がされている。

第2節 1区の結果

1区は、補足・確認調査によって最終的には農道部分に隣接した西側から、中世前半期の落込みを含むG7～G9までを調査範囲とした。遺構は、東側に集中し、西側は検出されていない。

1. 遺構面と遺物包含層の概要

遺構が検出される遺構面は2面ある。基本層序は、次のとおりである。

①耕作土②黒色砂質土③黄灰色粘質土④暗青灰色粘質土⑤緑灰色土⑥暗褐色土（弥生時代中期遺物包含層）⑦緑灰色粘質砂質土⑧緑青灰色砂

最初にG2、G5、G7において下層確認調査を実施した。3箇所とも④層までは磨耗が著しい土器が出土した。G2、G5については、④層の堆積が厚く、⑧層へと続く。G7の⑤層上面で土師器が出土したため、調査範囲をG7～G9に絞り込み、層位毎に精査をし、遺構の検出に努めた。

⑤層上面において、G8で石列とそこから北西方向への落込みを検出した。この石列は護岸や、区割に関係するものの名残と考えられる。落込み埋土や石列の周辺から須恵器や同安窯系青磁碗が出土していることから、中世前半期の遺構である可能性が高い。この面での柱穴等は見つかっていない。

以下、各遺構と出土遺物について述べる。

2. 各時代の遺構と遺物

1) 弥生時代

SK01（挿図4-3図）

東側の先端部で検出された遺構である。平面形はほぼ円形を呈し、検出面で約0.5m×0.7m、深さ0.3m、黒褐色土が堆積している。その下部には一部炭化物が認められた。埋土の上部は近世の溝、現代の水路等で一部搅乱を受けているものの、鋳造鉄斧、鑿状石器が出土している。

下部では、弥生中期中葉の大型、小型の甕がそれぞれ検出された。大型の甕は、平らな上坑の底部から正位で出土している。その内部には砂が認められた。

性格は不明であるが、廐棄上坑の可能性がある。

4-3図の1は小型の甕である。口縁部は逆ハの字状に開く。外面のハケメ調整、内面のヘラミガキが丁寧である。3は大型甕の底部で、外面にヘラ状工具の痕跡が明瞭である。4は鋳造鉄斧である。

SK03

炭や骨の一部が認められたため、墓の可能性がある。

SK04（挿図 4-4 図）

遺物は弥生中期中葉の遺物が多く出土している。性格は、廃棄土坑と考えられる。

5は口縁部に刺突紋を施された壺である。8は口縁部端部に連続した刻み目を施す。9は口縁端部が内側につまみ出されたものである。10・11は壺の底部で、底部にナデを施している。

落込み（挿図 4-2 図）

西側へ落ちこんでいる。落込みの肩部から下部にかけて、弥生中期中葉の遺物が集中して出土した。その出土状況が、地山に接しているものが多いことから、縁辺部での上器廃棄場、もしくは、祭祀場の可能性が考えられる。また、遺物の時期に大差なく、磨耗度がかなり少ないことから、ある一時期にまとめて棄てられたと推測される。

出土遺物は壺と甕を中心に出土している。4-5～4-8図に掲載した遺物の大半がこの落込みから出土したものである。

12～31は壺で、口縁部が朝顔状に大きく開くものがみられる。12、26は、防長地方の土器で、中期中葉頃のものである。口縁部端部は、上下にわずかに拡張する13～15、下方のみに拡張する18～22、27、28、29などがある。16は下方へ屈折するタイプである。13～22は、口縁部拡張部の内外面に斜格子文・波状文・山形文・列点文などが施されているものである。頸部には24、25、32などの断面三角形の突帯文、31の指頭圧痕文帯を巡らしている。

33～42は甕である。口縁部が外方に強く屈折するものが多く、胴部は張り出す。器壁は口縁部から底部まで極めて薄いつくりとなっているのが特徴である。文様は、40のようにヘラによる文様が簡素に巡らされる。器面調整は内外面共にハケ調整、ヘラミガキ、ナデ調整などである。外面の調整は、底部へのヘラミガキが顕著である。41は小型の甕である。43はヘラによる3条の刻目が巡る。46～48は土鍤である。49は蓋で、2箇所穿孔されている。50～63は壺、甕の底部である。54、58は内外面共にハケ目調整である。64は高杯である。

2) 中世

石列と落込み（挿図 4-2 図、4-9～4-11図）

G7西側で検出された。北東～南西方向へ延びると想定される石列である。その右と右の間から、外面に櫛書きを施す同安窯系青磁碗（109）や、1類で劃花文を施す碗（107）、9世紀初頭頃の須恵器蓋（68）が出土している。

落込みは、この石列から北西側へ落ち込んでいる。埋土の上層では平安期の須恵器の壺や甕、白磁（94）などが出土し、下層には須恵器の甕の体部の破片が多く出土した。周辺では、須恵質の土馬（132）が出土している。その頭部、手脚は欠損しており、可能性として水辺の祭祀に使用されたものと考えられる。

これらのことから、落込みは平安期には形成され、中世前半期まで機能したものと考えられる。

3) 近世以降

1区北東部に位置し、SK01の上部を切っている。溝の底面に肥前系の擂鉢が出土している。また、近代の溝と平行で、水田の用水路等の可能性がある。

3. 包含層遺物の概要

1) 総量

1区では、弥生時代～現代にいたる様々な遺物が出土している。総量は整理コンテナ箱約12箱である。

2) 時期的傾向

まず、縄文時代の遺物は極僅かであるが出土している。弥生時代前期の土器もみられるが、中期の土器が大半を占める。後期～古墳時代まで量は少ないながらも連続して遺物がみられる。奈良時代の遺物はほとんどみられないが、平安時代になって再び増加する。その遺物の多くが須恵器か、土師器の破片である。

これは造構の消長とも一致する。G8中央部では中世前半期の貿易陶磁が集中し、その上層からは後半期のものが出土している。

3) 弥生土器

包含層中では多量の弥生土器の破片が採取されている。第4-8図の59、63のみ図示している。59、63は甌の底部である。

4) 須恵器

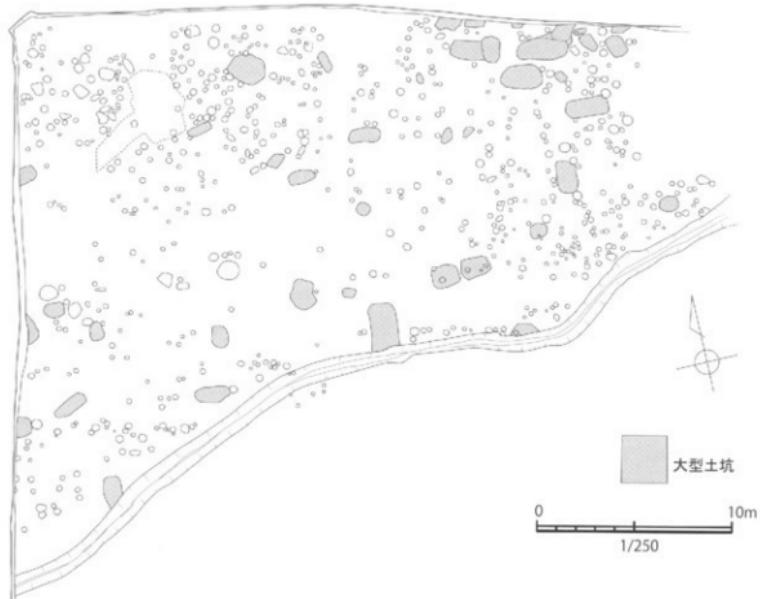
須恵器は、8世紀後半から9世紀のものが大半を占めている。蓋窯の蓋は、輪状つまみに口縁部が嘴状に下がるタイプである。71、72のように奈良時代前半頃のものもみられる。壺、甌の類は、胴部が多く出土している。77は長颈壺である。87は高壺で小型のものである。

5) 陶磁器

88～94はいわゆる玉縁状の白磁碗の口縁部、97は高台部で白磁碗IV類、95はV類で、端部が外側へ屈曲する。96はV類より時期が下る碗か。99は合子か。100は内外面に草文を施す。101は高台部が直角に造られた碗である。103はB1類青磁碗で、錦蓮弁を施すもの、111は内面に草花文を施し、D類の碗である。115は青花で、C群の皿である。114は美濃犬目である。116は香炉である。117は中国製褐釉陶器の壺の口縁部、106は壺の体部、121は四耳壺の底部である。119、120は鉢か。123は壺か。124は朝鮮の徳利である。122、125は備前の描鉢の底部である。127は陶器の壺、126、128は火鉢である。

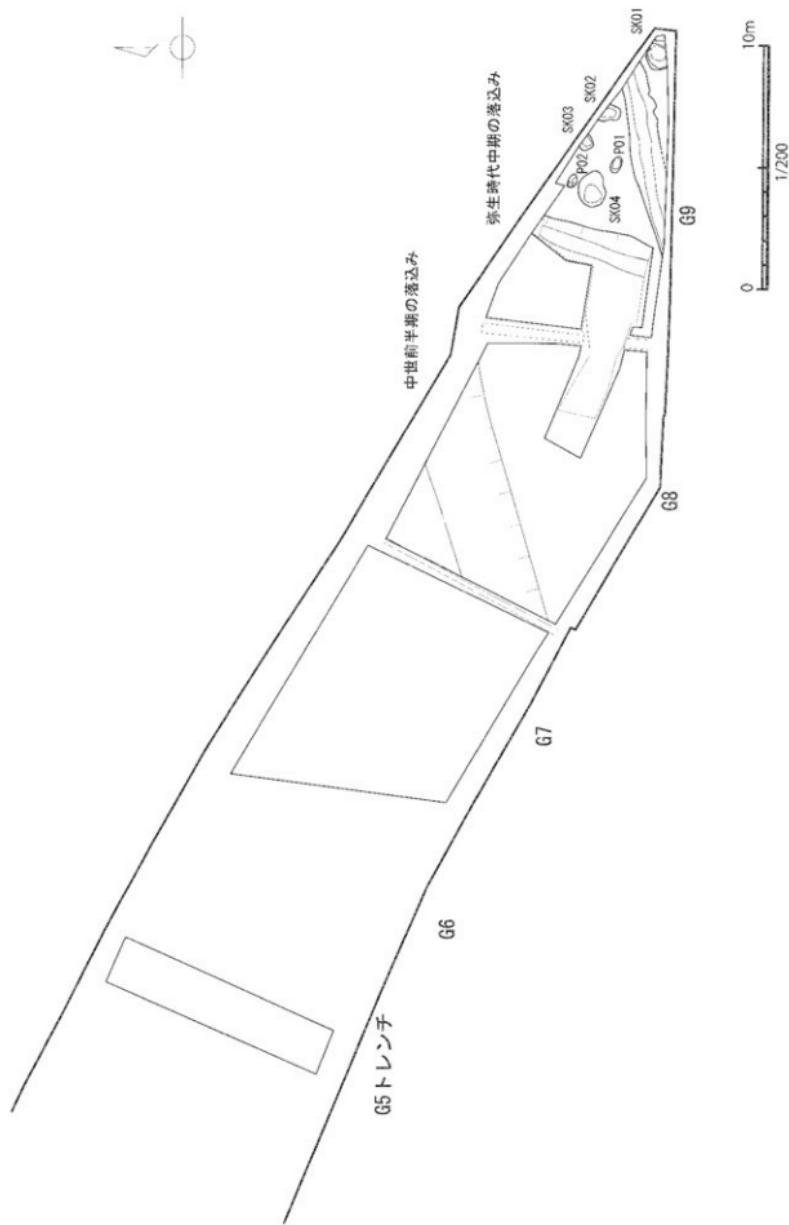
6) 上飾器、その他

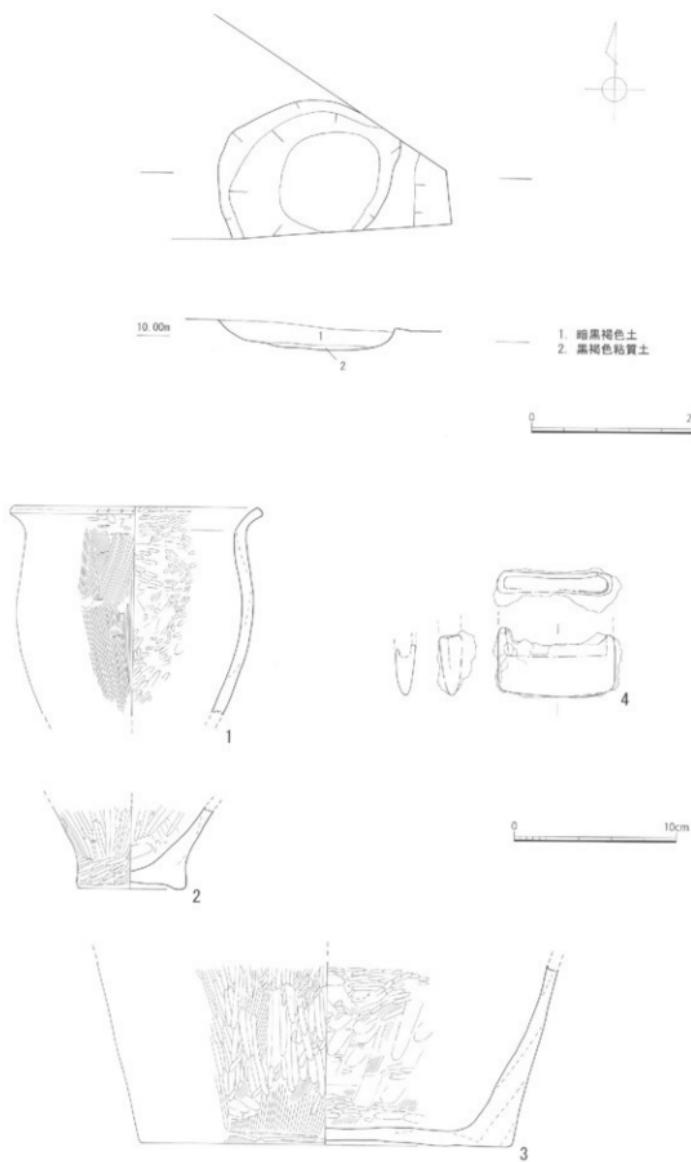
65は土塊、66は鉄滓である。130は高脚壺で内部は穿孔されている。131は土師器の壺である。回転糸切痕が明瞭である。132は須恵質の土馬である。頭部手脚は欠損している。



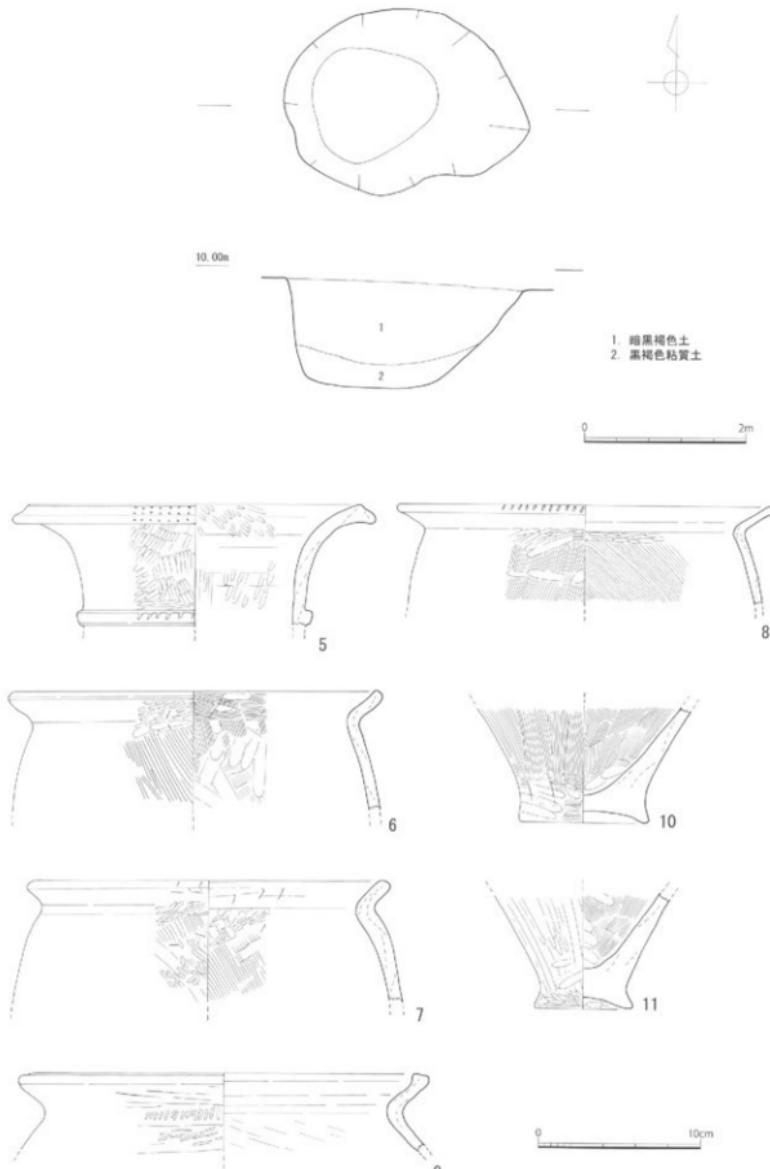
第4-1図 羽場遺跡既往の調査における検出遺構

第4-2図 1区遺構配置図

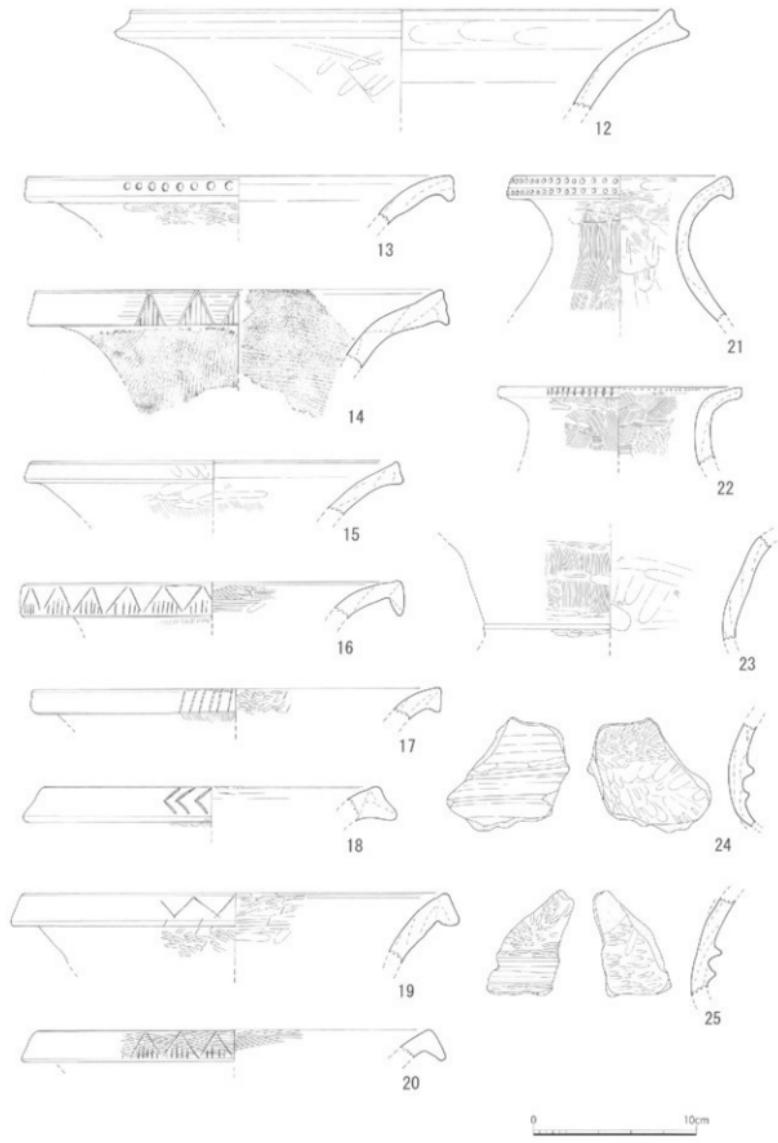




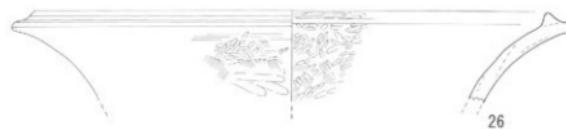
第4-3図 SK01遺構及び出土遺物実測図（遺構S=1/30・遺物S=1/3）



第4-4図 SK04遺構及び出土遺物実測図（遺構S=1/30・遺物S=1/3）



第4-5図 出土遺物実測図 - 弥生土器① - (S=1/3)



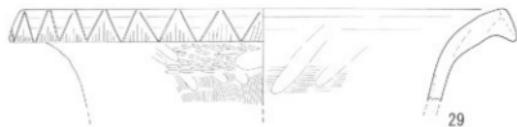
26



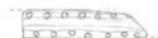
27



28



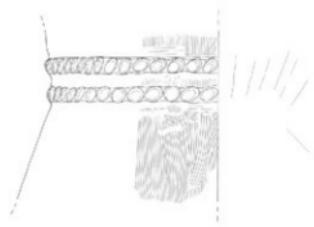
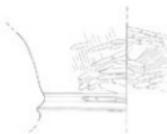
29



30



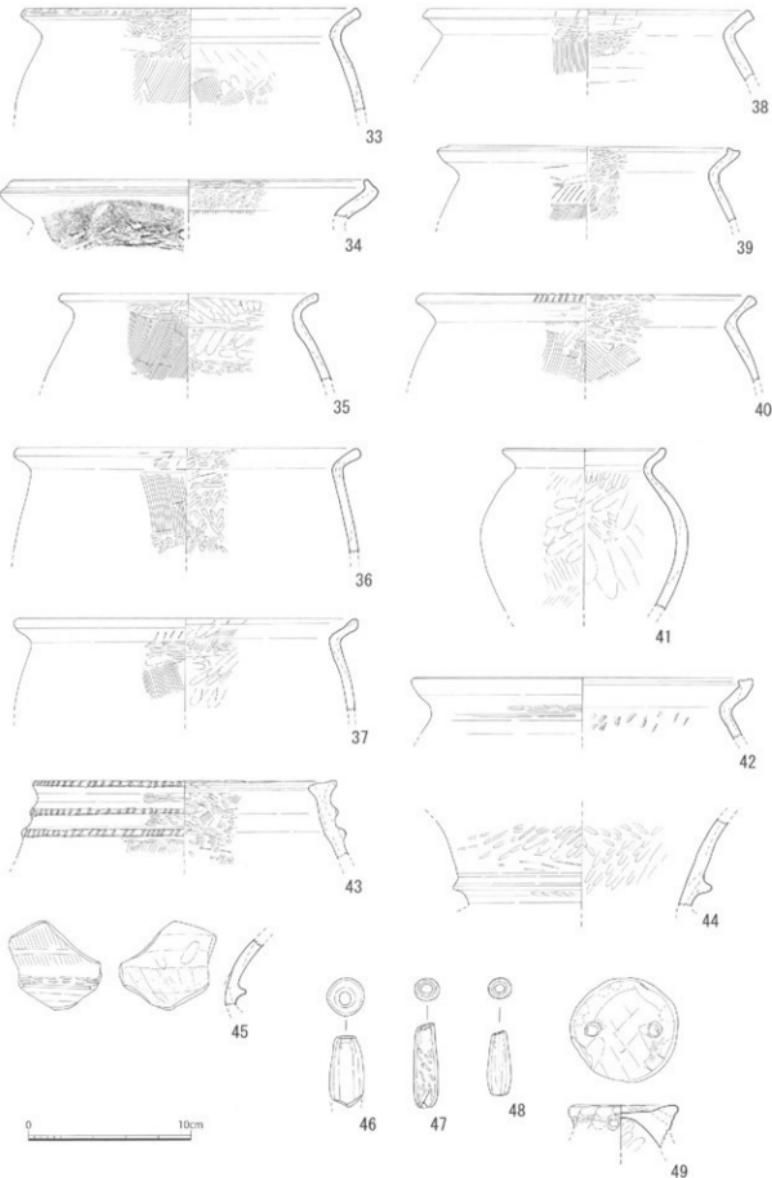
32



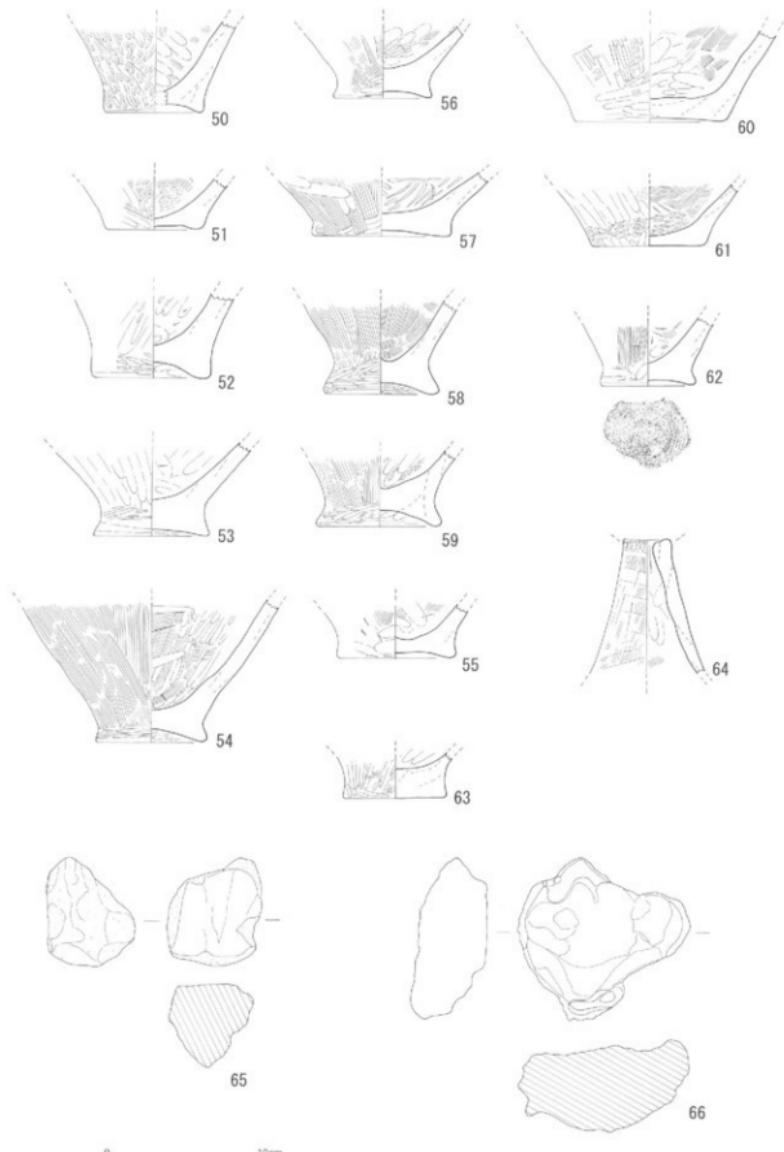
31

0 10cm

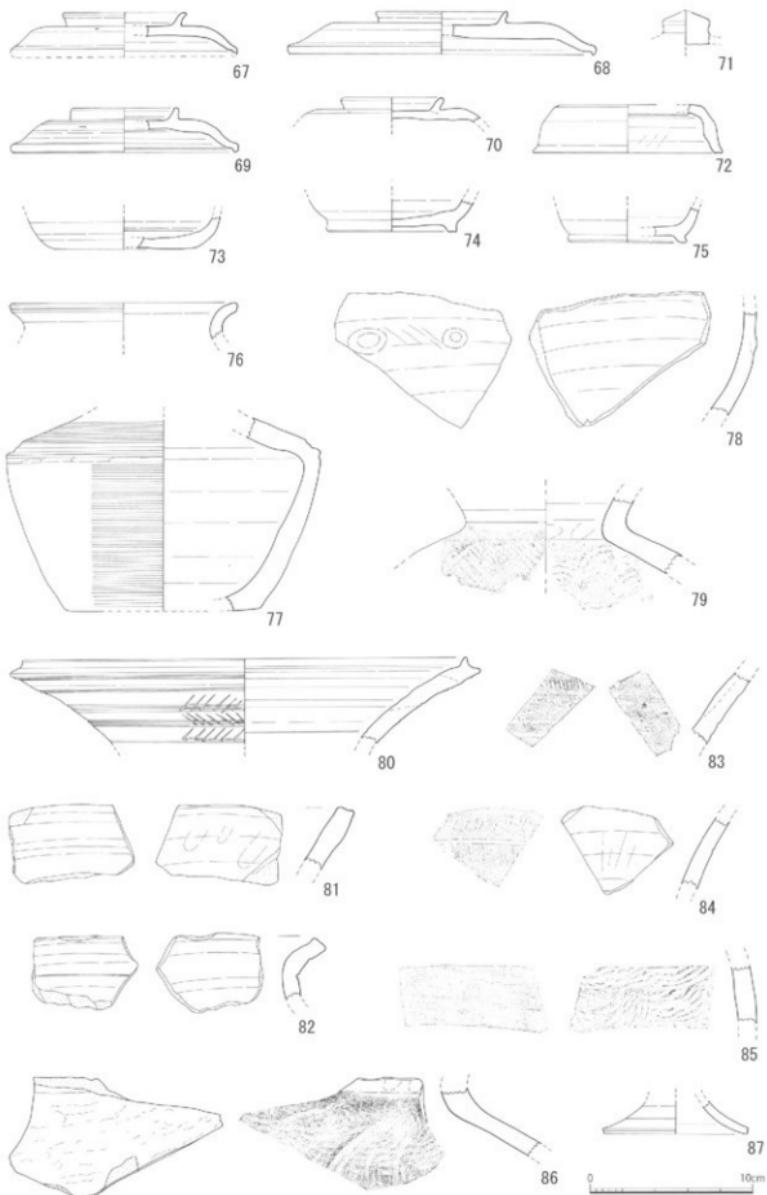
第4-6図 出土遺物実測図 - 弥生土器②- (S=1/3)



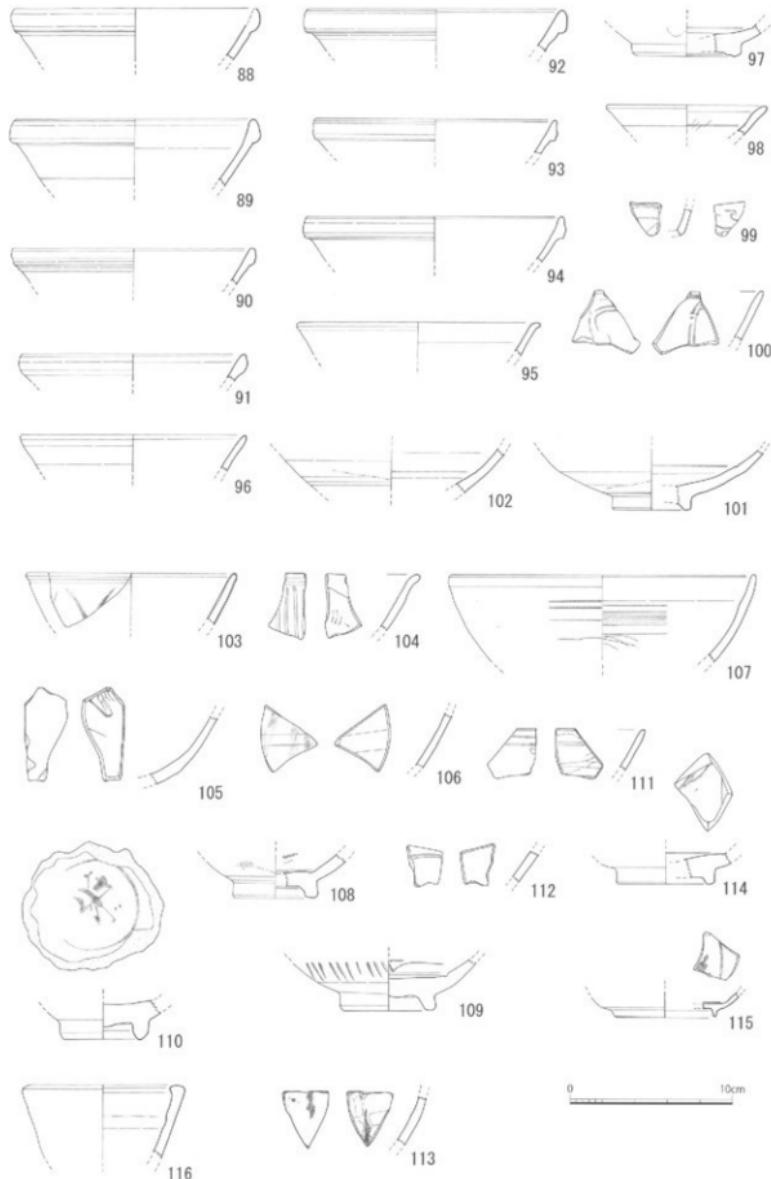
第4-7図 出土遺物実測図 - 弥生土器③ - (S=1/3)



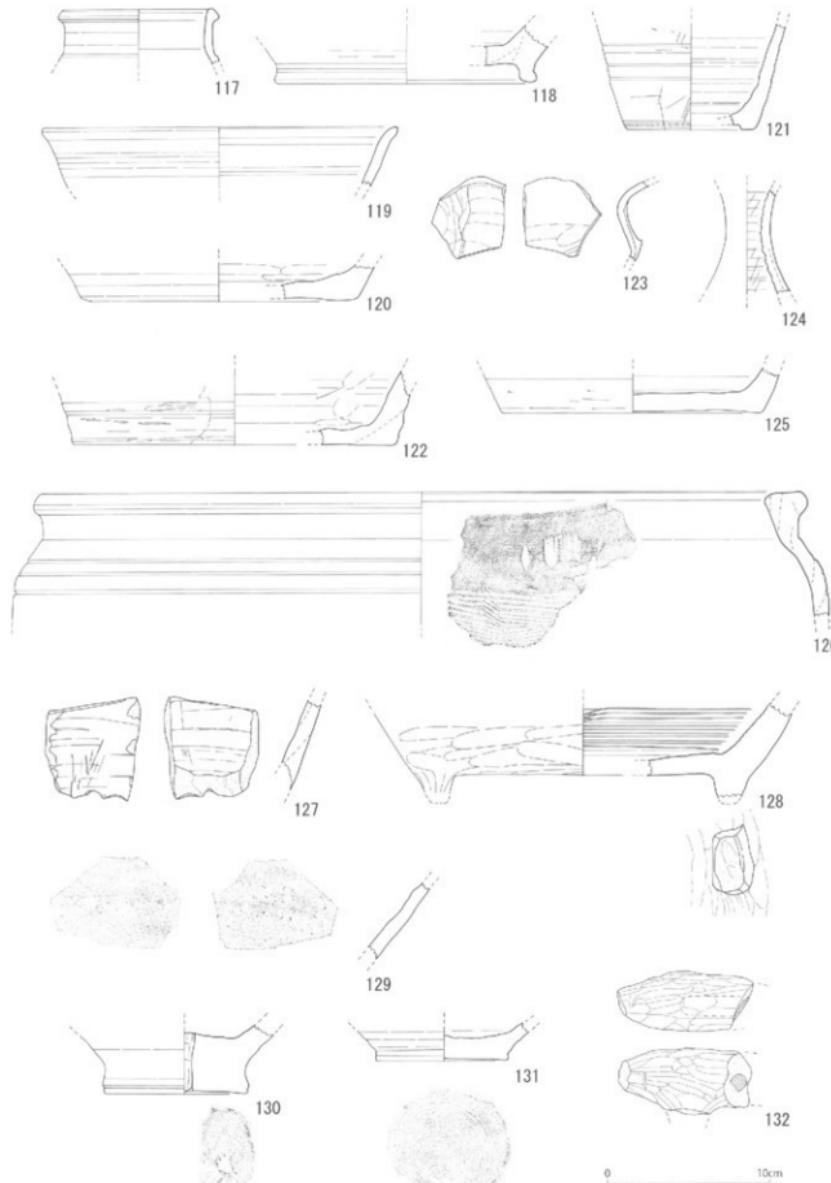
第4-8図 出土遺物実測図 - 弥生土器④- (S=1/3)



第4-9図 出土遺物実測図 - 須恵器 - (S=1/3)



第4-10図 出土遺物実測図 - 陶磁器①- (S=1/3)



第4-11図 出土遺物実測図 -陶磁器②・その他- (S=1/3)

第3節 2区の調査

1. 調査の概要

1) 調査区の位置

平成20年度調査区（2区）は、同19年度調査区（1区）の南東に当たる。調査区の東南端から計画中の県道白土横田線と国道9号線までの距離は約40mである。また、既述のように調査区東側は平成元年の調査区と隣接し、今回の調査区は、遺跡全体の北西部の一画に相当する。

2) 調査状況

(1) 調査区の規模

東西に通る小径（アカ道・長さ45m。以下、東西道路）を北限とし、この道の東限点からはほぼ直角に折れて南行する小道（畔道）約50mの地点が調査区の南限になる。この地点と東西の道の西限点を結ぶ直角三形状の範囲が今年度の調査区で面積は約900m²である。発掘作業の手順を勘案し、2区内を水田区画に応じA・B・Cの3区に分けた。区割りと各区の形状・面積等は次のとおりである。

2A区は、東西道路を北限線とし、この道路の起点からからほぼ直角に折れて南に延びる畦道沿い20mまでを東限線に、南限線はこの20m地点で直交する東西畦道（約20m）までとした。この東西南北の境に区分されたエリアが2A区となる。面積約650m²を測る。

2A区の南側略三角形部分を2B区とした。面積約210m²を測る。2B区と2C区の境は東西方向に走る現代水田のコンクリート堤とした。したがって、2C区は調査区南端の狭い三角形状範囲となる。面積約40m²になる。

(2) 遺構群の検出状態

調査は、2A・2B区の重機による耕作土除去後東部から精査を行い、2C区の精査で終了した。2A・2B区では多数の上坑や溝状遺構、ピットが複雑に重複した密集状態で検出された。わずかに南東の一部に空白域が見られた。平成19年度における調査区（東西道路西端の北側の一角）は、平成20年度調査の2A区・北西隅の遺構群と一連の遺構である。

遺構の平面形と規模は検出面で確認された形状と測定値によっている。とくに、土坑、ピット、溝状遺構の深さに関しては「検出面よりマイナス（-）○○m」と表示した。これは、あくまで検出面からの相対値である。

(3) 遺跡の微地形と基本層序

調査区内の微地形を基盤層（地山）上面から考察すると2B区中央部の基盤層面が最も高く（標高11.5m）、2A区東西道路辺（標高11.0m）、2C区（標高10.7m）と緩い角度で傾斜している。さらに、2A区北西端付近では急激に落ち込み、中小路遺跡の南東端との間に形成された谷間に移行すると考えられる。北西端付近では水田面と基盤層面との間層は厚さが1.8m～2.0mに達し、2C区でも0.8mを測る。同様な地層状況は19年度調査区でも確認されている。

認定された基本層序は次のとおりである。

①層：水田耕作土⇒②層：明褐色土（疊上）⇒③層：灰オリーブ色砂質土⇒④層：灰褐色土（遺物包含層）。

遺構検出については弥生時代の遺構群は基盤層上面から、古代の遺構群（2C区）は④層上面からそれぞれ検出されている。また、弥生時代の遺物は主として④層から出土し、一部は③層か

らもえられている。各遺構は上方部を後世にかなり削平されるか、部分破壊された可能性があり、同時に、遺構の中には近現代の水田作業によるビット等も含まれている。(挿図4-12図)

2. 2A区の遺構と遺物

1) 遺構群の分布と小区分 (挿図4-13図)

2A区は東西に長い台形状をなし、面積で調査区域全体の3分の2以上を占め、かつ遺構群が密集・重複状態で検出されている。単体で確認しうる土坑等が少ないことから、重複し合う遺構群を便宜的に解説するため2A区を6つの小区に分けることにする。その1は北西部の遺構群、その2は西部の遺構群、その3は中央部北寄りの遺構群、その4は中央部北東寄りの遺構群、その5は中央部～南東部遺構群、その6は北東部の遺構群として仮区分し、解説する。

2) 北西部の遺構群 (挿図4-15図)

(1) 遺構群の範囲

2A区の北西部の一角から道路沿いで検出された遺構群をまとめて東西道路沿い遺構群とする。最北西のSK152から東西道沿いの東に向かって西から順にSX9・P261、その東のSX4・SD6、さらにSK96・SK143、SX7・SX8等が確認されている。便宜上SK152周辺を北西部遺構群とし、その東のSX9・SK98・SK102周辺を西部遺構群、SX4・SX3周辺を中央部北寄り遺構群とし、SK96・SK143周辺を中央部北東寄り遺構群、SX7・SX8周辺を北東部遺構群として記述する。

東西道路沿い遺構群の南側にSX5群、さらに南辺にSK87やSK82等がある。これら遺構群の一帯には多数の柱穴状ビットが検出されている。

東西道路沿いの遺構群は、道路南面の土層観察からすると、水田床上下に厚い遺物包含層(4・4'層)がSK152からSX7までの全遺構を覆い、その下部から各遺構が検出されている。したがって、遺構群の年代は上部遺物包含層の最新期以前に位置付けうことになる。(挿図4-16図)

東西方向に帯状に並ぶ遺構群は複雑に重複し、かつ、遺構の大半が道路下に存在するため形状の確認が困難な例が多く、性格を明らかにしうる例は少ない。ここでは、検出された範囲での形状判定によって記載する。

(2) 遺構の形状と出土遺物及び時期

i) SK152・SK154 (挿図4-15図、図版72)

*平面形：2A区北東隅で検出された土坑である。SK152は遺構の1/3が東西道の下に埋もれている。平面形は橢円方形状を呈する。SK154は不定形の小土坑である。

*規模：SK152は一辺1.1m、深さ0.56m。SK154は最大長約1.08m、深さ0.5m。

*形状の特徴：SK152は緩い凹状の底面から壁が急角度で立ち上がっている。SK154はいくつかの小坑とビットが重複している。

*遺物の出土状態：弥生土器がかなりの数出土し、石礫も得られた。

*出土遺物(挿図4-16図)：133は壺形土器の口縁部である。大きく外反し、端部を斜面下方に小さく引き出す。端部斜面には内部を斜線で埋めた鋸歯文を施している。134～136は壺形土器の口縁・頸部・体上部片。いずれも頸部で強く屈折し、大きく開いて肥厚気味の口縁端部に至る。134は端部外面に有軸羽状文を施し、頸部に刻口をもつ突帯を巡らせている。135・136も口縁端部に刻口を施す。137は口縁端部が肥厚する壺形土器である。138は壺形土器の底部。器壁が

薄い。これらの弥生土器は概ね中期中葉頃といえる。

この他、斜辺がわずかに湾曲し、基部に浅い削り込みを持つ二等辺三角形状の打製石鎌も出土している。

*時 期：弥生土器の型式からSK152は中期中葉頃といえる。

3) 西部の遺構群（挿図4-17～4-18図）

(1) 遺構群の範囲

東西道路下から検出されたSX9・SX4～その南側一帯で検出された遺構群をまとめる。すなわちSX9・SK102・SK98からその南辺のSX5を中心とする遺構群である。この遺構群の東側にSX3を中心とする中央部北寄りの遺構群とこれに関連する遺構群が存在する。西部遺構群の北端にあるSK102はSX9の南東部に接し、SK98と重複している。SX5も複数の土坑と重複しているが、坑内堆積土から前後関係を特定することができた。

(2) 遺構の形状と遺物の出土状態及び時期

i) SX9（挿図4-17図）

*規 模：平面形では南北に主軸を持つ隅円長方形形状の深い土坑のように思われるが、坑中程には不整形の凹部があり、複数の土坑が重複する可能性もある。検出範囲では南北約2m、東西2m（東西道上層断面より）と測定される。

*形状の特徴：水田床土の下層（遺物包含層）よりさらに下方で外郭プランを確認している。坑底は不規則な面を呈し、東西側壁の立ち上がりは斜面状をなしている。P261と重複する。土層の観察ではSX9が後出である。

*遺物の出土状態：南北断面では最下層に傾斜状態で検出された上器片が見られる。出土土器の量からしても庶庶十坑を見るのが妥当かと思われる。

*出土遺物（挿図4-19図）：100点を越す弥生土器片が出土している。この内、上器16点を図示した。139・140は大型壺形土器の口縁部。大きく逆「ハ」字状に開く。139の端部は斜め内側に引き出す。140の端部には浅い逆続刻目と斜線文が施される。141～145、147～149は甕形土器である。141・142は口・頸部。141は弓状に緩く湾曲するが、ともに頸部にヘラ描き沈線3条を巡らす。143・144は頸部が「く」字状に屈曲し、143の口縁端部は斜目内側に小さく引き出す。145も頸部が湾曲し、口縁部が逆「ハ」字状に開いている。147は頸部がわずかに屈曲し、小さく外に開く口縁部に移行する。体部はほとんど膨らみをもたない。148・149は口縁部が短く外反している。149は小型である。146は鉢形上器であろう。

150～154は底部である。150は大型壺形土器の底部と思われる。151・152も壺形上器の底部であろう。153・154は甕形土器の底部と思われる。153は浅い上げ底になる。

この他、刃部を大きく欠損する大型蛤刃石斧片も出土している。

*時 期：143・144は中期中葉頃、140は中期初頭、141・142・146は前期後葉にそれぞれ対応できる。時期幅があるので遺構とどの上器とが共存関係にあるのかが問題になるが、最新の土器の形式からいえば、中期中葉頃を過らないことになる。

ii) SK98（挿図4-17～4-18図）

*平面形：SK98として捉えた落ち込みは幅広い隅円長方形形状をなしているが、単一の遺構とは断定はできない。

*形 状：平面形はほぼ隅円方形を呈するが、北東部でSK102等と重複し（SK102によって破壊される）、後述のピットとも重なり合っている。

*規 模：隅円方形の軸線は1.4m程度。深さは0.7mを測る。

*形狀の特徴：南北方向の中軸線上層断面では南・北壁ともやや内湾して立ち上がっている。東・西壁は直立に近い立ち上がりである。また、南北断面では中央から北寄りにかけて坑底が深くなり、そこに箱形木棺の側板のような痕跡が見られる。東西断面でも中央から西側の坑底が少し深くなっている。東西方向の小型木棺がセットされていたのであろうか。側板痕は坑底に堆積した黒褐色土層上面から底面に達している。

要約的にいえば、隅円方形の土坑の北寄りを浅く掘り広め、坑全域に黒褐色土を詰め、その上で箱形の木棺を設えたことになる。棺の規模は0.6m×0.4m前後と推定される。

*遺物の出土状態：30点近く遺物が出土している。形状が確認された土器や石器はいずれも最上層（1層）から検出されたものである。中、弥生上器8点を図示した。

*出土遺物（挿図4-20図）：155～159は甕形土器である。155は外反気味に逆「ハ」字状に開く口縁部で端部に細い刻目が見られる。頸部にはヘラ描き沈線4条が巡る。156は体部が少し膨らみをもつ。頸部にはヘラ描き平行沈線2条を施している。157～159は頸部が「く」字状に屈曲する。157・159は端部を肥厚させ、斜日内側に小さく引き出している。160は壺形土器の頸部で刻目をもつ突審が巡る。161・162は底部。径が小さく浅い上げ底状を呈する。

この他、二等辺三角形様で底辺を深く抉り、一側辺の裾部が欠損する打製石鎌も出土している。

*時 期：155・156は前期後半に属する可能性があるが、157～160はいずれも中期中葉前後の型式的特徴を持っている。よってSK98の時期は中期中葉頃とするのが妥当であろう。

iii) SK102（挿図4-17～4-18図）

*形 状：判然としないが、小規模な溝状の落ち込みで、廐棄土坑かと考えられる。

*規 模：不明。

*形狀の特徴：東西方向の断面で見る限り幅0.4m程度の溝のような造構と思われるが、詳細は不明である。

*遺物の出土状態：小規模な土坑にも関わらず多くの遺物が検出された。

*出土遺物（挿図4-21図）：163～166は甕形土器である。163は頸部から口縁部にかけて強く外反する。頸部にはヘラ描き沈線3条が施されている。164・165は頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部は逆「ハ」字状に開く。164は口縁端部を浅い波状の押印文を施す。166は口縁部が逆「L」字状に強く折れる。167～171は底部。167は壺形土器のものと思われる。171は高台状の底部で、底盤が「ハ」字状に開いている。172は鉢形土器の把手と思われる。

*時 期：163・166は前期後半から中期初頭に属すると考えられる。164・165は中期中葉古相であろうか。171は中期中葉前後であろう。このように時期幅があるが、並的には中期中葉頃のものが多数を占めているのでSK102の所属期も中期中葉頃と推定できる。

iv) SX5・SK83・SK84・SK85・SK141（挿図4-17～4-18図、図版63）

*平面形・規模：南北方向に軸を持つ土坑（SX5）と東西方向に主軸を持つ土坑が重複する遺構群と見られる。しかし、精査する中で5基以上の土坑が複雑に重複していることが判明した。検出面に残る壁線と縦断・横断断面図からこれらの土坑を確認した範囲で構築の新しいものから

復元すると次のようになる。

イ) SK84 = 円内長方形 (略東西方向主軸)・長軸約2.1m、短軸1.3m、深さ0.32m。

ロ) SK85 = 長方形か (東西方向主軸)・長さ約1.6m、幅0.86m、深さ0.5m。

ハ) SK141 = 短辺に丸味のある長方形 (北西—南東方向主軸)・長軸約2.2m、幅約1.2m、深さ約0.38m。

ニ) SK83 = 不整方形 (一边約1.0m、深さ0.45m) ないし不整長方形か。

ホ) SX5 = 不整橢円形 (短軸約2.5m、深さ0.35m以上)。南端の一部確認。

* 形状の特徴 : SK84は最後に構築された土坑である。長軸・短軸とともに断面上で捉えられる。浅い皿状をなしている。SK85はSK84に2／3以上を破壊され、西側の1／3が残っている。底面は浅く窪み、長軸両端に低い段状の切り込みがある。SK144は東壁と最下部で床面が捉えられている。壁は、北側小口辺では立ち上がりが急でU字型は皿状に緩く傾斜している。底面も浅く窪み、北東側では長方形の川原石が埋まった状態で検出された。* 遺物の出土状態 : SK84では坑底直上位から数点の弥生土器片、打製石鏃、割石等が得られた。SK85では西側の底部斜面上から数点の弥生土器片、割石、土塊（壁土か）等が出土している。SK83では南壁付近の覆土中位辺から大量の弥生土器片、鉄片、割石、土塊等が出土している。SK141では若干の弥生土器の小片が得られている。SX5からは遺物の出土はない。

* 出土遺物（挿図4-22～4-23図）：第4-22図はSK84出土遺物図である。173～175は壺形土器の口・頸部・体部。173は頸部が「く」字状に屈曲し、体部が膨らむ。174は逆「ハ」字状に短く開く口縁部。175は体部で緩く膨らむ。176は複合口縁の壺形土器である。口縁部は外傾気味に立ち上がり、複合部は突出しない。外面にやや幅広い平行沈線を施す。177は鼓形器台の受部である。外反気味に立ち上がり、複合部は下方に突出する。178は上下に沈線を施し、その間に線刻が見られる。179は蓋の頂部片。180は壺形土器の底部。181は壺形土器の底部。176・177は後期後葉に属するが、他はいずれも中期中葉頃の所産である。この他、二等辺三角形を呈し、基部を浅く削り込む打製石鏃が出土している。

第4-22図下段はSK85の出土遺物図である。182は壺形土器の口縁部。大きく外反して開く。183～185は壺形土器の口縁部から体上部片である。183は頸部が緩く「く」字状に屈曲しく口縁部は逆「ハ」字状に開く。184・185はやや長目の口縁部で外反する。頸部に多条の平行沈線が施される。184のそれはヘラ描き、185のそれはクシ描きである。186は壺形土器の底部と思われる。182・184は前期後葉に属り、185は中期前葉、183は中期中葉頃に位置づけられる。

第4-23図はSK83の出土遺物図である。187～191は壺形土器の口縁部。187は外反し、端部を下方に小さく引き出す。188・189は逆「ハ」字状に開く。188は端部に羽状文が見られる。190は大型品で外反して開き、端部を肥厚させ、上方に小さく引き出す。191も大型品で端部内面を帯状に肥厚させ、そこに重鋸齒文を施している。192は壺形土器の頸部。上下に6条・4条のヘラ描き平行沈線を巡らし、その間を複線鋸齒文で埋めている。193は小型の壺形土器と考えられる。

194・195は壺形土器である。194は頸部が「く」字状に屈曲し短く外反する口縁部で端部に刻目を入れ、頸部にクシ状工具による多条の平行沈線を施している。195は小型品。短く外傾する口縁部で体部に膨らみは見られない。196～199は壺形土器の底部である。196は大きく逆「ハ」

字状に開く。器壁が薄い。187・191・192・194は中期前葉に属し、他は中期中葉頃に比定できよう。

*時 期：SK84は検出面で後期後葉の弥生土器が出土しているが、覆土の土器は概ね中期中葉頃に属するので土坑の時期としては中期中葉頃と考え誤りないであろう。後期後葉の土器は2区全休を見ても川土例は希少であるが、調査区の外に当該期の集落跡が存在することを示す点で見逃せない。SK85は中期中葉頃に位置づけられるが、前期後葉から中期前葉の土器を含む点が注意されよう。SK83も同様な傾向を示している。

iv群として括した土坑群は、重複関係からSX5→SK141→SK83→SK85とSX5→SK85→SK84の構築順が確認されている。各土坑出土土器の様相もこの順序と矛盾しない。

v) SK82（挿図4-17～4-18図）

*平面形：不整圓張長方形を呈する。

*規 模：長軸1.68m、短軸1.54m、深さ0.30m。

*形状の特徴：浅い皿状の土坑。底面は中央から北西部がやや深く、北東部・南東部・南西部の壁に向かって緩やかに上昇している。覆土は概ねレンズ状の堆積を示す。下層（2層等）から上層（2層・3層）まで焼土や炭化物が含まれている。

*遺物の出土状態：中央及び北西の下層上部から上層下部にかけて弥生土器片、磨製石斧、磨石、削石、土塊等が検出された。中でも土塊が多く出土したのが注目される。

*出土遺物（挿図4-24図）：200・201は壺形土器の口縁部。200は逆「ハ」字状に開き、端部を内側に小さく引き出し、連続刻目を施している。201も外傾する口縁部。両者とも中期中葉頃に属する。202は壺形土器の底部である。203・204は土塊。203には竹管のような断面半円形の痕跡がある。204には円形小孔が見られる。いずれも壁上の破片であろう。

この他、断面が蒲鉾状をなし、両側に調整打撃痕が残る短冊形の石斧が出土している。

*時 期：200・201の弥生土器より中期中葉頃の廃棄土坑と判断される。

vi) SK87（挿図4-17～4-18図、図版71）

*平面形：不整長方形を呈する。

*規 模：長軸2.5m、短軸（幅）0.76～0.85m、深さ0.38m。

*形状の特徴：短辺の両壁は緩やかに立ち上がるが、長辺の壁は急角度面をなしている。とくに南壁は傾斜が急である。底部に約1.3×0.7mの長方形の平坦面が見られる。覆土は下部に薄い黒褐色土層（5層）が皿状をなして坑底全体に広がり、その上部に厚い黄色土層（3層）が重なっている。最上位はにぶい黄褐色層が土坑全面に及んでいる。

*遺物の出土状態：坑西寄りの最下層（7層＝5層に先行する）付近から弥生土器数点が出土している。中2点を図示した。

*出土遺物（挿図4-24図）：205・206とも壺形土器の口縁部～体部片である。頸部がわずかに湾曲し、口縁部は小さく開く。端部を尖り気味に収める。中期前葉から中期中葉頃の中間に位置づけられる上器と考える。

*時 期：205・206の弥生土器より中期前葉から中葉の移行期に當まれた埋葬用の箱形土坑と考えられる。

vii) SK88・SK101・SK121（挿図4-17図）

SK87の周辺で検出された土坑群である。

*平面形：SK88は円形、SK101は梢円形、SK121は不整円形をそれぞれ呈する。

*規模：SK88の径0.76m、深さ0.2m。SK101は上面0.61m×0.46m、深さ0.32m。SK121は0.76m×0.64m、深さ0.4m。

*形状の特徴：SK88は浅い皿状の土坑。SK101はP190と重複する。SK121は二段掘り状になっている。

*出土遺物：SK121から弥生土器の底部が得られている。甕形土器のものと思われる。形状から中期中葉頃より遡る可能性がある。

*時期：中期中葉以前とする。

4) 中央部北寄りの遺構群（挿図4-25図）

(1) 遺構群の範囲

北西群の東側、2A区の中央北寄りの遺構群である。SX3を中心とし、SD4～SD8、SK45、SK46（SD9）、SK49、P312、P314、P318と東西道に掛けて遺構の一部が検出されたSX4もこの群に含めることにする。SX3の北東隅は東西道路下のSX4に接近している。

(2) 遺構の検出状態

検出作業中に確認された各遺構の前後関係は次の通りである。まず、SX3・SP1～SX3・SP2の断面図よりSX3内に堆積した5・6層を切ってP314が掘り込まれ、同時にSD4内の11層も切り込まれている。よってSX3とSD4はP314に先行する遺構となる。SX3～SD9～SK45の断面図からはSD9を切ってSK45が掘られているかに見えるし、SD9を切ってSX3が構築されたようにも読める。しかし、SD9内の堆積層は薄く、断定的なことはいえない。SX3とSD5の前後関係は不明。

(3) 遺構の形状と出土遺物及び時期

i) SX3（挿図4-25図、図版62）

*平面形：東短辺幅のやや長い楕円長方形

*規模：長軸3.75m、東短辺2.0m、西短辺1.5m、深さ0.25m（坑中央部の測定値）

*形状の特徴：平面形が長台形様を呈し、坑壁は北壁が急角度で立ち上がるのに比べて西壁と南壁は緩く傾斜している。底面は浅く皿状に窪む。

*遺物の出土状態：坑内の堆積層は、おおまかにいうと皿状ないしはレンズ状をなしている。最上層（1層）は坑のほぼ全体を覆い、その下方に2層から5層・14層・15層・18層が認められる。各層の重なり状態からは坑底のほぼ全体に2層が広がり、三分の一東寄りでは2層下部に5層が認められた。1層と5層中には焼土・炭化物が少々見られ、2層・3層は焼土・焼土塊と炭化物が多量に包含されていた。この焼土・炭化物層は坑全体に広がり、中央から東寄りには厚く堆積していた。

坑中からは大量の弥生土器が出土した。出土レベルとして10.8mから11.3mまでが記録されているので、これらの土器は1層から2層にかけて包含されたものと判断される。なお、1層と2層の層境は不整合を示すから、掘り直して再度利用した可能性がある。

*出土遺物（挿図4-26～4-28図）：大量に出土した弥生土器中42点を図示した。207～210・225は壺形土器である。いずれも頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部に外側に傾斜する

面をつくる。207・209・210は縁部外斜面に無軸羽状文や鋸歯文を描いている。225は頸部と同胴部の境に刻目を施した突帯が巡る。

211～224・226は壺形土器である。211・212・214・215・224は頸部から口縁部にかけて緩く外反し、口縁・頸部境にヘラによる2～3条の平行沈線を施す。216・219・221も外反する口縁部だが、口径がやや小さい。218・220・222は口縁部が逆「ハ」字状に開き、胴部に膨らみをもっている。213・217は口縁部が短く逆「ハ」字状に開き、頸部が「く」字状に扁曲する。217は口径が大きく口縁端部に二次的な浅い削り込みがある。223・226は頸部が「く」字状に強く屈折し、逆「ハ」字状に開く口縁部の端部を斜め内側に引き出している。

これらの壺形土器群は211・214のように器壁が厚めのものは前期後半に属する可能性があり、薄い器壁で頸部が逆「ハ」字状に開くものは中期前葉の所産と思われる。223・226のような口縁端部は中期中葉頃に表れる特徴と考えられよう。227は繩文土器片の可能性がある。

228～248は底部である。228・230～232は底径が比較的大きく壺形土器の底部と思われる。236・239・242・243は器壁の薄く底径が小さい。壺形土器の底部であろう。229・234・244・245・248のような上底は中期前葉から中葉にかけて出現する底部である。

*時 期：出土した弥生土器群の様相は前期後半・中期前葉から中葉の型式特徴を示しているが、焼土層より出土した217の壺形土器によりSX3の時期は弥生時代中期中葉頃と考えられる。

ii) SX4 (挿図4-25図、図版62)

*平面形：略長方形土坑かと考えられるが、検出されたのは南側の長辺壁と底部のみであり、全体の形状や坑の性格を明らかにすることはできない。

*規 模：検出された落ち込みの長辺は凡そ2.45mを測る。

*形状の特徴：長軸の断面で見ると浅い二段掘立坑のようにも見えるが、底面には低い凹凸があり、複数の十坑と重複する可能性もある。单一の遺構と判定するには至らない。

*遺物の出土状態：水田床土下の遺物包含層(4・4'層)と坑底面との間に2層(21・22層)がある。21層はほぼ水平に堆積しているが、検出範囲から遺物は検出されていない。2層も同様である。なお、上部の遺物包含層からは中期中葉頃の土器とともに鉄斧が出土している。(挿図4-29)

*時 期：遺構にともなう土器等が存在しないので詳細な時期比定はできない。

iii) SD4 (挿図4-25図、図版64)

*平面形：東側をSD6、西側をP314に切られた残部で略方形をなす。

*規 模：長さ0.55m、幅0.56m、深さ0.15～0.17m

*形状の特徴：両側壁は平行し、底はフラットになる。SD6より東に延長部は存在しないので東端はSD6内に収まっていたと考えられる。西側についてはSX3の横断面にこの溝状遺構の痕跡が認められないことよりSX3に先行して掘られた可能性があり、さらに西に延びてSD5と繋がっていたと見られなくもない。

*遺物の出土状態：溝内は炭化物等が若干混じる黒褐色土層のみで層中から壺形土器の口縁部片が検出された。(挿図4-30図254)

254の壺形土器口縁部は外反して開き、端部を斜め下方に引き出して幅広い面をつくる。面上には格子目文が施される。

*時 期：254の壺形土器より弥生時代中期中葉頃とすることができよう。重複関係からすると第1遺構群中では最も古い遺構となる。

iv) SD5 (挿図4-25図、図版64)

*平面形：長大でやや不定形な溝状遺構。

*規 模：長さ1.7m、幅0.4～0.7m、深さ0.2m。

*形状の特徴：西端が乱雑に膨らむ。SX3の西壁際で切れる（前後関係不明）。底の形状も不定。

*遺物の出土状態：覆土は黒褐色土で壁際にわずかに褐色土層が残る。溝西側とSX3近くの覆土中から弥生上器と打製石鎌が検出された。

*出土遺物（挿図4-30図）：弥生土器8点を図示した。255・260・261は壺形土器である。255は頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁端部を斜め上方に小さく引き出している。斜面は浅く窪む。260は胴下部片。内外面にハケ凹が見られる。261は外反する口縁端部片。無輪羽状文が施される。256・257・258は壺形土器である。256は頸部から口縁部にかけて緩く弓状に湾曲し頸部に2条のヘラ描き平行沈線を入れる。257・258は頸部が「く」字状に屈折し、口縁端部を内側に小さく引き出す。259は鉢形土器であろう。262は壺形土器の底部と思われる。

この他、小型の安山岩製の打製石鎌が出土している。

*時 期：8点の上器中256は弥生時代中期前葉頃に属すると思われるが、他の7点はいずれも中期中葉頃の所産であり、SD5の時期を中期中葉頃とする根拠になる。

v) SD6 (挿図4-25図、図版64)

*平面形：不定形の幅広い溝状遺構。

*規 模：北端が畦道の下で未検出。長さ2.0m以上、幅0.85～1.0m、深さ0.2m（溝中央部）。

*形状の特徴：平面形のみならず溝底も定まった状態を呈していない。複数の小規模遺構が重複していた可能性もある。

*遺物の出土状態：覆土は炭化物片を少量含む暗黒褐色土層のみ。遺物は弥生土器で主として南側から検出された。

*出土遺物（挿図4-30～4-31図）：弥生土器のみ11点を図示した。263～266は壺形土器である。263は大型品で口・頸部が大きく外反し、口縁端部に分厚い平坦帯が付く。265は頸部下方の小片であるが、4条の深い平行沈線を挟んで上下に鋸歯文を施している。263と同一個体の可能性がある。264・266は単純口縁の壺形土器264は口・頸部が逆「コ」字状を呈し、266は緩く弓状に湾曲している。270は甕形土器で頸部は屈折し、口縁部が逆「ハ」字状に開く。口縁端部がわずかに内側に肥厚する。267～279、271～273は底部。267は大型の壺形土器の底部と考えられる。多くの底部が上げ底状をなしている。

*時 期：以上の弥生土器群中で新しい様相を示すのは270の甕形土器である。口縁端部がわずかに肥厚しており、中期中葉でも古相に属すると考えられる。壺形土器は中期前葉頃の様相を示しているので中期前葉から中葉の時期がSD6にあてはまるのではないだろうか。

vi) SD9 (挿図4-25図)

*平面形：SX3とSK45に挟まれた不定形な溝状遺構。

*規模：約0.40m四方の小規模な遺構が残る。

*形状の特徴：東・西壁は低く、溝底も南・北端が皿状に浅く湾曲している。当初はSK46とし

て認識したが、壁線の延び方からSD9とした。

*覆土上の堆積状態：暗褐色土層のみが認められる。遺物は検出されていない。

*時期：不明。

vii) SK45（挿図4-25図、図版68）

*平面形：略円形を呈する皿状の土坑。

*規模：径1.05m、深さ0.10～0.15m。

*形状の特徴：平面形は略円形を示すが、坑底には凹凸があり、整正形の土坑ではない。北西の一角をP132で破壊されている。

*覆土上の堆積状態：上2層が認められる。上層は炭化物・焼土・マンガン等を含む暗褐色土層。下層は地山表面の媒乱層。両層とも遺物はなく、植物根が侵入していること等から後世の造構の可能性が高い。

viii) P314（挿図4-25図）

*平面形：隅に丸味のある方形の土坑状遺構。

*規模：0.65m四方、深さ0.35m。

*形状の特徴：平面、壁、底とも整正形状を示す。

*遺物の出土状態：SX3とSD4の覆土・底をほぼ垂直に切って掘り込まれている。薄い中間層を挟んで上部に焼土ブロックを少し含む黒褐色土層、下部に黒色土層が厚く堆積している。弥生土器の多くは下部層から出土した。

*出土遺物（挿図4-31図）：弥生土器5点を図示した。274は壺形土器の口縁部である。逆「ハ」字状に開き、端部を斜口下方に引き出し、斜面に有軸羽状文を施す。275・276は壺形土器である。頸部が「く」字状に屈折し、口縁部は逆「ハ」字状に開く。端部が内側に小さく引き戻される。277は胴部中央に2条の突帯を巡らす。278は浅い上げ底状の底部。

*時期：下部層出土弥生土器の形状から中期中葉頃と考えられる。

以上の他にP312（弥生土器底部出土）やSK49等の遺構が存在するが、重複関係と明確な遺物が見られないで位置付けはできない。

5) 中央部北東寄りの遺構群（挿図4-32図）

(1) 遺構群の範囲

SX4の東側に分布する一群で、SK96・SK108・SK139・SK143等の遺構を含める。

(2) 遺構の検出状態

北東隅で検出されたSK96、SK103、SK139・SK143等は団子状に重なり合っている。南側から延びてきたSD7はSK50近くで北北西に延びるSD15と繋がって外見上は逆「V」字状をなしているが、調査時の所見ではSD7の先端部を切ってSD15が掘られた結果と判明している。これらの溝状遺構に近接するSK52、SK64、SK80は単独で検出された。SK70、SK94はSD7と重複する。いずれもSD7より後出する土坑である。SK31はSD15と接している。SK52、SK64もほぼ単独状態にある。その他、SD7と重複してP186・P187・P209・P210・P211等が検出されている。

(3) 遺構の形状と出土遺物及び時期

i) 土坑群=SK96-1・SK96-2・SK103・SK139・SK143（挿図4-32～4-33図、図版71）

*平面形：SK96-1は隅円長方形と思われる。SK96-2・SK139は隅円長方形様。SK103は不定三角状をなすが、底部は長方形のプランを示す。SK143は上坑南端部のみの検出で全体は明確ではない。隅円方形ないし長方形と推定される。

*規模：SK96-1は長さ2.32m×幅0.46m以上、深さ0.61m。SK96-2は長さ約2.3m×幅約1.1m、深さ0.7m。SK103は一辺1.3m、底のプランは長さ0.84m、幅約0.3m、深さ0.42m。

SK139は長さ約1.2m、幅約0.8m、深さ約0.35m。SK143は幅1.4m以上、深さ約0.35m。

*形状の特徴：これら5基は大型の長方形土坑とみられるが、重複によって完全形を止めている。SK96-1とSK96-2は東西方向に長軸をもち、横断面でみると後者の北側長辺が前者の南側長辺を破壊して構築されている。しかし、縦上の上部（25層・暗褐色土層）は両者にまたがつて広がっているのでSK96-1廃棄後にも2つの土坑上部が浅く掘り込まれ、皿状ピットとして機能していたかも知れない。

*遺物の出土状態：SK96とSK103からは多量の弥生土器・磨石・割石等が出土している。SK139・SK143でもかなり量の弥生土器片が得られた。重複関係が複雑なのでまとめて解説する。

SK96は大まかに上層（1層）と下層（3層）の2層分かれるが、出土土器の大半は上層から検出されている。下層は量的には少なく、細片のため型式はうかがえない。SK103の出土土器は最上部層に包含されていた。

*出土遺物（挿図4-34～4-35図）：第4-34図にはSK96出土の弥生土器を図示した。279・280・281・288は壺形土器である。279は口縁・頸部片。緩く外反して開き、端部を尖り気味におさめる。頸部にヘラ描き平行沈線を6条巡らし、その下方にヘラ描き有輪羽状文を施している。280は大きく外反する口縁部で端部を斜内側に小さく引き出す。斜面にはLRの連続「＼」線刺突文が施される。281は頸部で体部との境に断面三角形の突帯が付く。288は小型の壺形土器の下半部。体部が小さく膨らんでいる。

282～284・287は甕形土器。の口縁から体部中位片である。282は口縁部が短く外反し、体部がわずかに膨らむ。頸部にヘラ描き平行沈線6条を巡らしている。器壁がやや厚目である。283・284は頸部が「く」字状に湾曲し、口縁部は長目で逆「ハ」字状に開く。体部が膨らみをもつていて。器壁は薄い。287は頸部から口縁部にかけて弓状に湾曲し、体部がわずかに膨らむ。口縁部に最大径がある。285・286は壺形土器の底部と思われる。286は上げ底である。289は壺形土器の底部。

この他、二等辺三角形様で側辺がわずかに湾曲し、基部に浅い三角形様の凹部をもつ打製石鏃が出土している。

第4-35図にはSK103出土の弥生土器を図示した。290・291は甕形土器の口縁・頸部である。頸部が「く」字状に屈折している。292・295は壺形土器の頸部。ともに断面三角形の太い突帯を付ける。294・295は甕形土器の底部。294は上げ底になる。器壁は294・295とも薄い。

SK143出土の弥生土器も第4-35図に図示した。296は大きく外反する甕形土器の口縁部で器壁が薄い。297は内傾する口縁部で小さい突帯が巡る。鉢形土器であろう。298は壺形土器の頸部で太い突帯を付ける。

*時期：SK96・SK103・SK143はその出土土器から判断して中期中葉頃に構築されたといえる。しかし、第4-35図297は前期末から中期初頭、第4-35図290は中期中葉でも古朴の形状をそ

それぞれ示している。古い型式の上器が新しい型式の土器群中に混在することはままあることであるが、ここでは、遺跡全体の時期が中期前葉に遡ることと破壊された土坑にもその期に営まれるもののが存在することを予測しておかねばならない。

ii) SD7 (挿図 4-32 ~ 4-33図)

*平面形：SK66からSK50近くにまで北東方向にほぼ直線的に延びる帯状の長大な溝状遺構である。南端はSK66と直結し、北端はSD15によって切られている。

*規模：長さ 7.2m、幅 0.3 ~ 0.4m、深さ 0.15 ~ 0.18m。

*形状の特徴：SK66近くでは少し蛇行するが SK94付近からは直線をなしている。断面は「U」字形を呈する。また、SK66に近い個所では小ピット (P209、P210、P211) が溝底に掘られている。

*遺物の出土状態：溝内の大部分は暗褐色土層で占められる。硬く縮まった上層で炭化物片を若干含んでいる。色調はやや異なるが、層の状態はSK66の1・2層と相似した状態を示す。遺物としては弥生土器片数点が出土した。

*出土遺物 (挿図 4-35図)：壺形土器の口縁部1点を図示した。逆「ハ」字状に外反気味に開き、端部を「へ」字状に折曲げて斜目斜面をつくる。面上にはクシ状工具による無軸羽状文を施している。中期中葉頃の所産である。

*時期：出土した弥生土器より中期中葉頃と考えられる。

iii) SD15 (挿図 4-32 ~ 4-33図、図版65)

*平面形：北北西方向に延びる幅広い帯状の溝状遺構である。南端はP490との重複によってやや膨らんでいる。

*規模：長さ 5.2m、幅 0.30 ~ 0.44m、深さ 0.22m。

*形状の特徴：断面は浅い逆台形を呈し、底は幅が広く、多少の凹凸があるが、ほぼ平坦になる。

*遺物の出土状態：暗褐色土層で埋まる。この層は硬く縮まり、少量の焼土を含んでいる。遺物としては弥生土器がSD7との繋がり部付近やSK31近辺でまとまって出土した。他に磨石や削石片が得られた。

*出土遺物 (挿図 4-36図)：弥生土器4点を図示した。300は大型の壺形土器の口縁部である。大きく外反して開き、端部を斜目内側に小さく引き出している。301も大型壺形土器の頸部で断面三角形の突起を2条巡らす。302・303は壺形土器の底部と思われる。上げ底状を呈する。

*時期：300・301の壺形土器より中期中葉頃と判断される。

iv) SK50 (挿図 4-32図)

*平面形：円形を呈する。

*規模：径 0.50m、深さ 0.23m。

*形状の特徴：削平面よりやや斜目に掘り込まれる。

*出土遺物：弥生土器片と石皿片が出土した。土器は小片で型式は特定できない。

*時期：弥生時代である。

v) SK51・SK52・P92・P202 (挿図 4-32 ~ 4-33図、図版68)

*平面形：SK51・SK52とともに不整円形。P92は不整円形、P202は不整梢円形。

*規模：SK51の径 0.66 ~ 0.70m、深さ約 0.20m。SK52の径 1.4m、深さ約 0.20m。P92の径

0.26m、深さ0.28m。P202の長軸0.58m、短軸0.36m、深さ約0.16m。

*形状の特徴・重複関係：SK51・P202・SK52の底面は平坦でほぼ同一レベル（Z=10.75m）にある。SK51とSK52は盆状の浅い土坑。P92は断面逆台形で底は平坦面を成している。これら三者の重複関係は、SK51・SK52を破壊してP202が掘られているので前二者が先行して構築されたことになる。P92とSK52の関係ではP92が後出と判断された。

*出土遺物（挿図4-36図）：SK51からは弥生土器片と石皿片が出土した。土器は網片のため型式を特定できない。P92・P202では覆土よりの出土遺物はない。SK52では底面直上から約20点の弥生土器片が得られている。その他、荆石片も数点みられた。また、削平面上からは砥石片2点が採集されている。ここでは弥生土器2点を図示した。

304は壺形土器の口縁・頸部細部である。口縁部緩く外傾し、内外面はハケ調整を基調にしている。305は壺形土器の底部である。いずれも中期中葉頃の所産と考えられる。

*時期：SK52は304の壺形土器より中期中葉頃である。他の3遺構もほぼ同時期内に構築された可能性がある。

vi) SK64・P133（挿図4-32～4-33図）

*平面形：SK64は不整円形。P133は不整長方形。

*規模：SK64=長軸1.0m、短軸0.64m。P133は長軸0.50m、短軸0.32m。

*形状の特徴：断面逆台形で黄褐色ないし黄橙色の上が詰まっていた。P133は二段掘り。

*出土遺物：なし。

vii) SK70（挿図4-32～4-33図）

*平面形：不整円形をなす。

*規模：径0.8～0.9m。深さ0.22m。

*形状の特徴：段掘り様を呈している。

*出土遺物：なし。

viii) SK80（挿図4-32～4-33図）

*平面形：不整円形をなす。

*規模：長軸1.24m、短軸0.76m、深さ0.38m。

*形状の特徴：大型のビットであるが、壁・底は不整状態である。

*出土遺物：なし。

ix) SK31・P205（挿図4-32～4-33図）

*平面形：SK31・P205は重複して帶状の平面をなす。

*規模：長さ1.10m、幅0.4m、深さ0.15～0.17m。

*形状の特徴：長軸断面をみると底面は不規則な波状をなしており、上層の状態からは中程最下部に炭化物や焼土を含む層があり、その上に同じく炭化物・焼土を含む層が浅い椀状に堆積する。SK31である。この椀状層を切ってP205が掘り込まれている。つまり三個の土坑（SK）がSD15に近接平行して次々に掘り込まれたものと推測される。

*出土遺物（挿図4-36図）：SK31の覆土上部から削平面上にかけて数点の弥生土器片や割石が包含されていた。土器は小片のため型式をうかがうことのできる破片は少なく、2点を図示する。

306は壺形土器の口縁部である。大きく外反し、端部内面を帶状に肥厚させている。307は甕

形土器の底部。

*時 期：1の壺形土器は中期中葉でも古相に属する可能性がある。ここでは中期前葉～中期中葉頃としておきたい。

6) 中央～南部の遺構群（挿図4-37図）

(1) 遺構群の範囲

SK66、SK72・SK73・SK122・SK144等の密集する遺構群と北西のSK63や南西のSK77、SK81等を含めた2A区南部から南東部に分布する遺構群である。SK66から北北東に延びるSD7とその近辺の遺構群は中央部北東寄り遺構群で記載した。

(2) 遺構の検出状態

SK66を中心にこれと重複するSK67、北側のSX6、SK62、西側のSK63、SK74、南西のSK75やSK81、南北土堤寄りのSK群を含める。土堤沿いのSK73、SK122、SK144、SK150等は検出面上においてたかも入道雲のような形状を呈しており、相当複雑な重複状態にある。南西のSK75やSK81等は単独状態で検出されている。

いずれも検出作業時の削平面で平面形を確認したものである。

以下では、便宜上SK66とその周辺の遺構群から始め、次に南側のSK1～SK4とその近辺、さらに西側のSK75、SK81の順で説明する。

(3) 遺構の形状と出土遺物及び時期

i) SK66（挿図4-37図、図版68）

*平面形：検出面での形状は不整の長楕円形を呈するが、南東コーナー付近をSK67によって破壊されているので本来は整った長楕円形を成していたと思われる。このことは坑底のラインが長楕円状に巡ることから推測できるし、SP3-SP4の断面も同様な傾向を示している。北東コーナーではSD7と繋がる。

*規 模：上場＝長軸2.0m、短軸1.5m、下場＝長軸1.26m、短軸0.54m、深さ0.5m（坑中央の測定値）。

*形状の特徴：壁は緩く傾斜し、底は浅く皿状に窪む。

*遺物の出土状態：覆土は上部に焼土と炭化物片を含む黒褐色土層（1・2層）が坑全体に広がっている。この層は汚れがなく縮まった上層で攪乱の形跡はなく、下部には黒褐色上層（8層）、黄褐色土層（9・10・13層）や暗褐色土層の薄い層が（12層）北壁より雪崩れ込んだような状態で堆積していた。さらに下部では黒褐色上層（3層）・黒色層（4・6層）が炭層（5層）を挟んでレンズ状に堆積する状態が認められた。

坑中から多くの弥生土器と石製品が出土している。これらのほとんどは坑中程の黒褐色土層上部（1層）に包含されていた。土器はいずれも細片で型式を特定できるものは少ない。

*出土遺物（挿図4-42図）：2点の土器片を図示した。308は壺形土器の口縁部である。頸部から逆「ハ」字状に開き、口縁部は肥厚し、外側に斜口平坦部をつくり、格子状文を施している。309は頸部と体部の境付近の破片で突帯が巡らされる。これらの土器は中期中葉頃の所産といえるだろう。

この他、羽口片が出土している。1層最上部の検出面上から出土しており、中期中葉頃の土器との共存関係は明確ではない。

*時 期：上坑に直接ともなう土器が認められないので正確な時期を特定することはできないが、最上層の弥生土器が中期中葉頃とすれば、坑年代もそれに近いとみて差し支えないだろう。

ii) SK6 (挿図 4-37図)

不定形な小溝状遺構で西側がやや幅狭になり両端は丸い。長軸1.28m、短軸0.34～0.42m、深さ0.11m。出土遺物は無い。

iii) SK62 (挿図 4-37図)

不整形の楕円形坑で長軸0.92m、短軸0.58m、深さ0.36m。出土遺物は無い。

iv) SK63 (挿図 4-37図)

不整長楕円形坑。長軸0.94m、短軸0.40、深さ0.16m。坑底は浅い皿状を呈する。覆土は褐色土層のみ。植物の根が広がっている。安山岩製の打製石鏃が1点出土した。基部に浅い凹部のある二等辺三角形形状の石鏃である。坑は形状と覆土の状態から後世の搅乱土坑の可能性がある。

v) SK67 (挿図 4-37図)

不整形の楕円形土坑。長軸0.85m、短軸0.61m、深さ0.33m。SK66の東壁の一部を地破壊して掘られている。出土遺物は認められない。

vi) SK74 (挿図 4-37図)

円形土坑。径0.5m。深さ0.41m。出土遺物なし。

vii) ピット群 (挿図 4-37図)

SK66の北側・西側からはいくつかのピットが検出されている。番号の若い順から列記しておく。P3 (楕円形・長軸0.44m、短軸0.34m、深さ0.28m。弥生時代中期頃の鉢形土器片が出土)。P4 (不整円形・径0.5m、深さ0.36m。遺物無し)、P7 (不整円形・径0.54、深さ0.13m。遺物無し)、P14 (不整円形・径0.5m、深さ0.48m。出土遺物無し)、P15 (略円形・径0.4m、深さ0.38m。出土遺物無し)、P127 (不整円形・径0.28m、深さ0.43m)・P128 (不整円形・径0.28m、深さ0.38m)・P129 (不整楕円形・短軸0.42m、深さ0.42m)・P131 (略円形・径0.33m、深さ0.21m)・P132 (円形・径0.52m、深さ0.42m)・P134 (円形・径0.26m、深さ0.16m) は近接して一群を成し、P128とP129と重複する。出土遺物は認められない。

P149 (不整隅円形・一边0.60m、深さ0.6m)、P150 (不整円形・径0.70m、深さ0.3m)とP151 (円形・径0.43m、深さ0.39m)は重複している。P151が先行する。P179 (不整円形・径0.34m、深さ0.26m)。P180 (西洋梨形の深いピット) はSK66の南壁を壊している。いずれも出土遺物は無いが、多くのピットがわずかに2段掘り状になっているのは注意される。あるいは、P128と重なるP129はP128に立てられた柱の抜き取り跡と考えることもできよう。

viii) SK1 (挿図 4-38図、図版65)

*平面形：不整長楕円形を示す。南端部は小型円形土坑と重複している。

*規 模：長軸1.26m、短軸0.75m、深さ0.75～0.85m。南端の土坑の径は0.23m、深さ0.12mである。

*形状の特徴：底面は北側に向かって傾斜し、北端底部は浅い円穴になっている。この部分は柱の先端にあたり、傾斜部は抜き取り痕と考えられる。円坑はSK1の最上層から掘り込まれている。

*遺物の出土状態：最上層から多量の弥生土器・石鏃・荆石が坑北寄り辺を中心に出土した。土器はほとんど小片である。土器片3点を図示した。

*出土遺物（挿図4-42図）：310は壺形土器の口縁・頸部である。頸部は「く」字状に屈折し、口縁部は逆「ハ」字状に開く。端部を上方に小さく引き出している。311は壺形土器の頸部で、断面三角形の太い突帯を付ける。312は壺形土器の底部である。休部器壁は薄い。

この他、二等辺二角形で基部を浅く削り込む安山岩製の打製石礫が出土している。

*時期：310から312の弥生土器はいずれも中期中葉頃に属し、坑の時期を示すと考えられる。

ix) SK2・SK3・SK4・P152・P13（挿図4-38～4-39図）

*平面形：SK2～SK4・P152・P13は相互に重複する一続きの遺構群である。SK2は不整楕円形（ラッキョウ形）で西壁をSK3に破壊されている。SK3は不整円形を示す。SK4はSK3によつて東側の一部を破壊されている。不整楕円形を呈する。P152は円形の小ビットでSK4とP13双方の一部を切って掘られている。P13は大型の不整楕円形である。

*規模：SK2は長軸0.70m以上、短軸0.35～0.55m、深さ0.52m。SK3は径0.54m、深さ0.35m。SK4は長軸0.75m以上、短軸0.5m、深さ0.69m。P152は径0.24m、深さ0.17m。P13は長軸0.9m、短軸0.64m、深さ0.76mである。

*形状の特徴：SK2は一端が膨らむ不定形な楕円形であり、断面も漏斗状を呈している。坑底に炭化物の薄い層があり、覆土も柱穴状の堆積を示している。SK3は覆土断面が不規則な状態を示し、底面は整然と整えられた形跡が認められない。SK4は円筒形をなすが、底面は段状を示しており、覆土の堆積状態からするとSK4に先行する土坑が存在した可能性もある。P13は底がほぼ平坦で二段掘りになっている。

*遺物の出土状態：SK2とSK3では覆土最上部から弥生土器片が数点出土した。P13でも最上層から小片の弥生土器が出た。

*出土遺物（挿図4-42図）：313はSK2出土の大型壺形土器頸部である。外反し、6条以上の太い突帯を巡らしている。314はSK3出土の壺形土器である。頸部が強く折れ、口縁部は大きく外傾し端部を肥厚させる。いずれも中期中葉頃に属する。

*時期：SK2～SK4・P13は重複しており、相互に新古の関係にあるが、覆土最上層出土土器で見る限り中期中葉頃を降らない時期の所産といえよう。P152についても同様なことがいえるであろう。

x) SK5（挿図4-38図）

*平面形：隅凹長方形である。

*規模：長軸0.72m、短軸0.48m、深さ0.12m。

*形状の特徴：西壁は緩やかに立ち上がり、底面には大きな起伏が見られる。覆土の断面からも2つ以上の浅い坑が重複して長方形土坑になったと考えられる。

*出土遺物：遺物は出土しない。

xi) SK6・P11・P12（挿図4-38図）

*平面形：SK6は不整闊円長方形。P11・P12とも不整円形を呈する。

*規模：SK6は長軸0.85m、短軸0.36～0.56m、深さ0.74m。P11は径0.52m、深さ0.71m。P12は径0.54m、深さ0.38m。

*形状の特徴：SK6は西側が急角度の壁になり、底部も最深となる。東側三段掘りになっている。柱穴であろう。P11二段掘りで、東側が深い。P12はSK6の最上層を切って掘り込まれ、断面は

漏斗状を呈する。

*遺物の出土状態：P11の最上層から弥生土器片が検出されている。2点を図示した。

*出土遺物：壺形土器の口縁部が出土している。外反して開き、端部を内側に小さく引き出す。中期中葉頃に属する。

*時期：SK6は出土土器が見られないで時期を特定できないが、P11が中期中葉期とすれば相似た時期の構造と考えてよいであろう。P12についても同様である。

xii) SK75 (挿図 4-38 ~ 4-39図、図版69)

*平面形：隅円長方形を呈する。

*規模：長軸0.92m、短軸0.64m、深さ0.57m。

*形状の特徴：大型の二段掘り。北東隅が最深部である。

*遺物の出土状態：坑中最下層中位から上位にかけて弥生土器が数点検出された。

*出土遺物（挿図4-42図）：315は壺形土器の頸部である。大きく屈曲する。器壁が薄い。316は壺形土器の底部であろう。平底である。

*時期：315は中期中葉頃に属し、土坑もこの時期である。

xiii) SK76・SK77・SK78・P6 (挿図 4-38 ~ 4-39図、図版69)

*平面形：SK76・SK77・SK78・P6は重複する一連の遺構である。SK76は不整長楕円形、SK77はSK76とSK78によって東西の壁を大きく破壊されており、平面形は南・北壁の一部を残すのみである。SK78は椭円形。P6は不整円形を呈する。

*規模：SK76は長軸1.5m、最大幅（短軸）0.57m、深さ0.12 ~ 0.26m。SK77は幅0.56m、深さ0.14m。SK78は長軸1.28m、短軸0.76m、深さ0.7m。P6は径0.33m、深さ0.26m。

*形状の特徴：SK76は歪な平面形であり、底面も凹凸が激しい。SK78は長軸が深い「V」状を示すが、底面は不規則である。P6はSK78の東端を切る小ピット。

*遺物の出土状態：SK77から弥生土器の底部が1点とSK78では16点の弥生土器片が土坑の中央部最上層から得られている。

*出土遺物（挿図4-42図）：317は壺形土器の底部と思われる。318は壺形土器の口縁・頸部である。「く」字状に屈折して逆「ハ」字状に開く。320はお大型の壺形土器の口縁部。大きく外反して開き、端部を上方に小さく引き出している。319は壺形土器の口縁部。

このほか、三角形を呈し、基部を浅く削り込む安山岩製の打製石鏃が出土している。

*時期：318・320の弥生土器は中期中葉頃に属する。4つの遺構の時期はおよそ中期中葉期としておこう。

xiv) SK79 (挿図 4-38 ~ 4-39図、図版70)

*平面形：大型の土坑で不整楕円形を呈する。

*規模：長軸1.8m、短軸1.24m、深さ0.25m。

*形状の特徴：南側を現代の構造物（暗渠）で大きく破壊されている。平面形の歪みもあり、後世の改変を少なからず受けているので本来の形状はうかがいにくい。底面にも起伏があって複数の遺構との重複が考えられる。

*遺物の出土上状態：坑東寄りの底面近くから数点の弥生土器が検出された。

*出土遺物（挿図4-43図）：321は小型の壺形土器の口縁・頸部である。「く」字状に屈曲し、

逆「ハ」字状に開く。322は大型の壺形土器である。口縁・頸部は緩く外反し、体部は砲弾状にすぼまると思われる。器壁が厚い。323・324は壺形土器の底部。

その他、正三角形状をなす安山岩製の打製石鏃が出土している。

*時 期：321・323・324は中期中葉頃に属する。322は中期前葉に遡る可能性がある。土坑の時期は321・323・324から中期中葉頃と考えられる。

xv) SK81 (挿図 4-38 ~ 4-39 図、図版 70)

*平面形：大型の土坑で剥張長方形を呈する。

*規 模：長軸 2.02m、短軸 0.94m、深さ 0.42m。

*形状の特徴：長側辺に垂みがあるもののほぼ整った長方形土坑である。側壁も直線的に外傾する。底面は中央が浅く窪むが、凹凸はない。

*遺物の出土状態：覆土の堆積状態は浅いレンズ状を示す。最下層は薄く、中位層が厚い。100点を越える多量の弥生土器片や割石が最下層（底面直上層）から中位層下部と最上層から出土した。その中の12点を図示する。

*出土遺物 (挿図 4-44 図)：326 ~ 328は壺形土器口縁・頸部片である。326・327は小さく外反し、328は弓状に大きく反る。326・328は口縁端部に連続刻目が見られる。328は頸部にクシ状工具による9条の平行沈線を巡らし、その下方に列点文が施される。329 ~ 333は壺形土器の口縁・体部片。329 ~ 331は緩く外反する口縁・頸部で329・330の頸部にはクシ状工具による平行沈線が5 ~ 6条施される。331は体部が小さく膨らんでいる。332は体部からII縁部にかけて外湾気味に開き、口縁部が肥厚し、やや強く外反している。333は口縁・頸部が小さく屈曲し、体部も膨らむ。334 ~ 337は壺形土器の底部である。

*時 期：326 ~ 330は中期前葉に位置づけられる。331 ~ 333の壺形土器も中期前葉から中期中葉頃にかけての所産としておいきたい。329・333が最下層上部から中位層下部より検出されているのでSK81の時期は中期中葉でも古相期と捉えるべきであろう。

xvi) SK90 (挿図 4-38 図)

*平面形：隅円長方形と不整梢円形の土坑の一端が重なり合ったような状態を示す。

*規 模：長軸（最大長）は 0.70m、幅 0.35m、深さ 0.34m。

*形状の特徴：隅円長方形と不整梢円形が重なり合って「く」字状に折れ曲がった不定形の土坑である。

*出土遺物 (挿図 4-43 図)：弥生土器片が 1 点得られたに過ぎない。

*時 期：弥生時代とする。

xvii) SK71、SK72、SK73、SK104、SK122、SK138、SK144、SK145、SK150、SD2、SD3、P145、P216、P315、P329、P453、P456、P458、P459、P460、P514、P517 等 (挿図 4-40 図、図版 64)

上記の遺構群は連鎖状に二重三重に重複して検出されており、自己完結の単独遺構としては観察し切れない。したがって密接に関連し合う遺構群をイ群～ロ群の順に振りにまとめて記載する。イ群：SK71・SK72・P453 (挿図 4-40 ~ 4-41 図)

*平面形：SK71は東壁・北壁のラインから北北西—南西西方向の隅円長方形と考えられる。SK72については検出面での平面形は判然としないが、縦横の断面図によると北東—南西方向の長方形プランが想定される。P453は円形である。

* 規 模 : SK71は短軸0.6m、長軸は推定1.0m、深さ0.55m。SK72は長さ約1.7m、幅約0.7m、深さ0.24m。P453は径0.54m、深さ0.56m。

* 形状の特徴 : SK71では2基のピットが重複している。最初にSK72の北東隅付近に先行ピット（SK71・占）が掘られ、続いてSK71（新）が前者の上部を破壊して掘り込まれたと考えられる。平面形が隅円長方形状を呈するのは新しいピットが二段に掘られたことによると考えられる。

SK72はSK73によって南側壁（長辺）を切られ、P453によって北西隅付近を破壊されている。SK71との前後関係は不明。両短辺（小口）壁かなり急角度で立ち上がっている。縁上の最下層は整然とした堆積状況を示すが、上層には攪乱が見られる。P453は炭化物・焼土を多く含む黒褐色土で埋まっている。

* 遺物の出土状態 : SK71（新）の縁上中位から弥生土器片数点、磨石、打製石鏃等が出土している。SK72からもかなりの量の弥生土器片と打製石鏃等が最下層上部より検出されている。P453の縁土中位には弥生土器片が存在した。

* 出土遺物（挿図4-45図）: SK71（新）出土の弥生土器を図示した。338は壺形土器の頸部である。外反して開き外面にヘラによる平行沈線3条が施される。内面には突帯が見られる。前期末から中期前葉の範囲に収まる型式と考えられる。SK72出土の弥生土器も図4-45に図示した。339・340は壺形土器の底部、341は甌形土器の底部である。中期のものであろうか。

* 時 期 : SK71は前期末から中期前葉の頃の所産であろう。SK72は中期中葉でも古柏期のSK73によって破壊されているのでこれに先行することは間違いない。出土した弥生土器も中期のものと見られるので中期中葉古期としておく。

ロ群 : SK73・SK138・SK150・P514（挿図4-40～4-41図）

* 平面形 : SK73は南北方向に軸をもつ不整円形。SK138は不詳。SK150は隅円方形と考えられる。P514は円形か。

* 規 模 : SK73は長軸1.11m、短軸0.88m、深さ0.61m。SK150は一辺1.1m、深さ0.19m。

* 形状の特徴 : 複数のピットが重複している。SK138、SK73とSK150の前後関係は不明。

* 遺物の出土状態 : SK73の下層（5層）中位から弥生土器片が1点検出された。また、SK138からは弥生土器片10数点が出土しているが、小片のため型式は確認できない。

* 出土遺物（挿図4-45図）: 342はSK73出土の甌形土器の頸部・体上部片で「く」字状に屈折する。器壁が厚く、内面に横方向のハケ目が明瞭に残されている。中期中葉古柏と考えられる。

* 時 期 : SK73は中期中葉古柏期に属する。SK138はSK73との前後関係を明らかにしえないが、相前後する時期の構築と考えて大過ないだろう。

ハ群 : SK104・SK144・P216・P329（挿図4-40～4-41図）

* 平面形 : SK104は東西方向に軸をもつ不整橢円形。SK144は不詳。P216は円形か。P329は不詳。

* 規 模 : SK104は長軸1.12m、短軸0.70m、深さ0.34m。

* 形状の特徴 : SK104は底面の凹凸があり縁土の断面は不規則な堆積状況を示している。複数の遺構が重なり合い、結果として不整橢円状の平面形を呈することになった可能性がある。

* 遺物の出土状態 : SK104では最下層から弥生土器数点と石斧片1点が出土した。他の遺構から

は遺物は検出されていない。

*出土遺物（挿図4-45図）：343は壺形土器の口縁・頸部である。口縁部は逆「ハ」字状に開き、端部に狭い面をつくる。頸部には連続刻目を施した突帯が巡る。中期前葉もしくは中葉占和に含めうるであろうか。344は大型壺形土器の底部であろう。

この他、磨製石斧の破片を再利用した石斧が出土している。

*時 期：SK104は川土壺形土器より中期前葉から中葉に掛かる時期の築造と見たい。

二群：SK122・P318・P458・P459（挿図4-40～4-41図）

*平面形：SK122は不整梢円形。3基のビットは不整円形もしくは不定形。

*規 模：SK122は北西-南東方向に長軸をもち約1.5m、短軸0.6m、深さ0.72m。

*形状の特徴：SK122とした土坑状遺構は底面に3か所の窪みがあり、ビットの重複によって平面形が梢円状を呈したとも考えられる。また、南東部がSD3と切り合っている。SK122が後出である。

*遺物の出土状態：SK122からは20点の弥生土器片が得られている。

*出土遺物（挿図4-45図）：345は大型壺形土器の口縁部である。外反して開き端部を肥厚させ上方に小さく引き出している。346は壺形土器の口縁・体部片・頸部がゆるく湾曲し、体部は小さく膨らんでいる。347は壺形土器の底部で上げ底になる。348も壺形土器の底部。347・348とも器壁が薄い。これらの弥生土器は中期中葉頃に属する。

*時 期：SK122は中期中葉頃の築造であろう。

ホ群：SD2・SK25・P114・SD3（挿図4-40～4-41図）

i) SD2（挿図4-40図、図版64）

*平面形：2A区の南東から北東東にのびる幅広い帯状の溝状遺構である。

*規 模：全長8.4m、幅0.9～1.1m、深さ0.3mを測る。

*形状の特徴：いくつかの土坑と重複しており、壁ラインに浅い出入りが見られる。東端は北東方向に膨らんでいるが、これも円形遺構との重複の結果であろう。断面では底面は浅い皿状ないし椀状に満たす。最下層は薄くレンズ状に堆積し、最上層は厚い。

重複関係ではSK25が南壁を切って構築され、P125は先行する遺構と思われる。P125は南壁を破して掘り込まれている。

*遺物の出土状態：300余点の遺物が得られている。打製・磨製石器や割石等が若干含まれるが、ほとんどは弥生土器片で接合復元しうる個体も数点あった。以下に上器28点を図示した。

*出土遺物（挿図4-46～4-48図）：第4-46図349～358は壺形土器である。349～356は口縁部が逆「ハ」字状に開き、頸部に平行沈線を施す。開き具合は349・350のように小さいものからやや大きい351・352・355、外反する5等偏差がある。平行沈線もヘラ描きで2条巡らすもの349・350と4条かそれ以上巡らす351～355が見分けられる。356は口縁部が尖り気味になり、頸部にはクシ状工具による多条の平行沈線を施している。357は口縁部が短く、頸部の湾曲、体部の膨らみが小さい。358は口縁部が逆「ハ」字状に開き、頸部は「く」字状に屈曲し、体上部が膨らんでいる。

第4-47図359～363も壺形土器である。口縁部が逆「ハ」字状に開き、頸部が「く」字状に浅く屈曲している。361は体部が膨らみを持っている。363も体部が膨らむ。器壁が薄い。364

～372は底部である。364は壺形土器の底部で器壁が厚い。365～372は壺形土器の底部と思われる。底径が小さく、体部の立ち上がりが急角度になる。第4-48図373は壺形土器の底部で上底を呈する。374・375は高环の脚裾片である。大きく傘状に開く。376は緩く開く口縁部で端部に刻目が見られる。

この他、石器2点が出土している。二等辺三角形状で其部を浅く例り込む打製石鏃と上方が欠失した大型蛤刃石斧である。

SD2から出土した弥生土器は前期後葉から中期前葉の様相をもつ349～356と中期中葉頃に属する358～363の2群に区別できる。374・375の高环も中期中葉頃に現れるタイプであろう。

また、平行沈線をもつ壺形土器群は覆土の下層から多く検出されており、層位的にも349～356が先行することを確認しうる。

*時 期：SD2の最終期は中期中葉頃にあるが、機能した時期はおよそ中期前半から中頃と考えるべきであろう。

ii) SK25（挿図4-40図、図版67）

*平面形：隅円方形を呈する。

*規 模：0.5m四方、深さ0.35m。

*形状の特徴：南側は暗渠で破壊されている。椀形に広む二段掘りの土坑の可能性がある。

*遺物の出土状態：覆土は上下2層が認められ、遺物は下層上部から上層中位にかけて相当量出土した。弥生土器・石器・割石等である。弥生土器3点を図示した。

*出土遺物（挿図4-48図）：377は壺形土器である。頸部が「く」字状に強く屈曲し口縁部はやや内湾気味に逆「ハ」字状に開く。端部が小さく肥厚する。体部も膨らみをもつ。378は大型壺形土器の頸部で大きく外反して開く。太い突帯が4条付く。379は壺形土器の底部と思われる。これらはいずれも中期中葉頃に属する。

*時 期：377・378は下層出土である。SK25は中期中葉頃としてよいだろう。

iii) P114 (SK26)（挿図4-40図）

*平面形：不整円形。

*規 模：径0.48m、深さ0.3m。

*形状の特徴：SD2の南壁を切って掘られている。覆土の断面では褐色上層が垂直状をなしていた。柱穴様の堆積である。

*出土遺物：無し。

iv) SD3（挿図4-40～4-41図）

*平面形：ほぼ東西方向に延びる帶状の溝状遺構である。

*規 模：長さ4.46m、幅0.3m、深さ0.19m。

*形状の特徴：箱形の浅い溝状遺構。西端はSK122と重複している。

*遺物の出土状態：中程の覆土上部から弥生土器が出土した。

*出土遺物（挿図4-48図）：380は壺形土器の底部である。上底状で体部は開く。

*時 期：380の弥生土器より中期中葉頃と考える。

7) 北東部の遺構群（挿図4-49、4-70図）

(1) 遺構群の分布と遺構群の小区分

北東部遺構群では、中央より北側東西道沿いまでの間におびただしい数の十坑・ピット・溝状遺構が複雑に重複して検出された。説明の便宜上これらを東西道路沿いのSX7、SX8を中心とする一群、その南側のSK146～SK149を中心とする一群、南北暗渠よりのSK60からSK36・40、SK33等の一群、南東域のSX1とその周辺の一群に分けて記載する。

(2) 遺構群の検出状況

遺構の検出状況は西半部と基本的には変わらない。水川耕作土（床上含む）を除去したところで遺物包含層（4層）と遺構の存在が確認された。検出面は北東隅が若干高く、西・南西に向かって少し傾斜している。

(3) 西東道沿い遺構群（挿図4-49図）

①. 遺構群の範囲

2A区の北東端、東西道路に接する一群の遺構でSX7、SX8、SK11、SK12、SK56等を含める。この群とSK146～149等の遺構群との区分は便宜的なものである。

②. 遺構の形状と出土遺物及び時期

i) SX7（挿図4-49図）

*平面形：SX7と複数のピットが重複した遺構である。北側半分は調査区外のため不明。

*形状の特徴：SX7とした遺構は浅い皿状の落ち込みである。落ち込みの壁線は北西一南東東方向に走り、緩く湾曲している。坑底には凹凸がある。壁線は長さ約2.23m、壁高は0.2m程度である。

*遺物の出土状態：SX7とした遺構の上層部（3・4層）からは100点の弥生土器片等が検出されている。しかし、坑底面の堆積層（34層）からは遺物は得られていない。

*出土遺物（挿図4-52図）：大量の遺物中、型式をうかがえる弥生土器2点を取り上げた。381は壺形土器の口縁部。大きく外反して開き端部は肥厚し、外面に緩やかな傾斜面をつくる。面上にはヘラ描きの斜目格子文を施す。中期中葉頃に属する。382は壺形土器の底部と思われる。他に中期前半期に属する壺形土器等の破片も少なからず存在する。

*時期：中期中葉頃と考えられる。

ii) SX8（挿図4-49～4-50図）

*平面形：SX8・SK155等が重複する遺構。SX8とした遺構は検出面での平面形が北西一南東東方向に主軸のある長方形様に見えるが、北側の半分以上が東西道路下に延びており、正確な形は不明である。

*規模：検出された長辺は4m以上ある。深さは0.1m～0.5mと一律ではなく、東側が深い。

*形状の特徴：検出平面の壁線が複雑に屈曲し、坑底面も東に向かって階段状に傾斜している。底面には暗褐色土（1層）が堆積している。単一の上坑か否か判断は難しい。

*遺物の出土状態：約30点の弥生土器片・石器等が出土している。

*出土遺物（挿図4-52図）：383は壺形土器の口縁部である。逆「ハ」字状に開き、端部を斜め上下に小さく肥厚させる。頸部には刻目を施した突帯が付く。中期中葉でも新規の型式と考えられる。384も壺形土器の頸部片。刻目をもつ突帯が付く。385・386は底部。体部の立ち上がりが急角度をなす。

この他、刃部の一角が丸味をもつ大型船刃石斧が出土している。かなり使い込んだ様子がうか

がえる。

*時 期：中期中葉の新相に属すると考えられる。

iii) SK11 (挿図 4-49図)

*平面形：不整円形。

*規 模：径 0.4m、深さ 0.27m。

*形状の特徴：円形のピットの一端が膨らみ、「三角むすび」状を呈する。

*出土遺物（挿図4-52図）：大型壺形土器の口・頸部である。緩く外反し口縁端部はごくわずかに肥厚し、外面に連続羽状文を施している。頸部にはクシ状工具による7条の平行沈線を巡らす。沈線の下方には重圓円弧文が見られる。

*時 期：中期初頭である。

(4) 中央部・SK146～SK149等の一群（挿図4-49図）

①. 遺構群の範囲

北東－南西方向に帶状に並ぶSK146からSK149を中心とする遺構群である。SK146～SK149の遺構群の北側に北東－南西方向に延びるSD1等を含める。東西道沿い遺構群との区分けは記載の便宜的なものである。

②. 遺構の形状と出土遺物及び時期

i) SK146 (挿図 4-49、4-51図、図版 60)

*平面形：やや不整形の凹円長方形を呈する。

*規 模：長軸 3.94m、短軸 2.4m、深さ 0.5m。

*形状の特徴：東側でSK147と重複しているが、長軸（東西方向）断面で見ると東側底面は緩く湾曲して立ちあがっており、SK147の西側壁とは分水嶺状をなしている。平面形を見るとSK147による破壊で本土坑北東部が広く失われたように見受けられる。さらに、坑底面には浅い皿状の凹凸があり、SK146に先行する上坑が存在した可能性もある。埋土上層（1層）は厚く水平に堆積し、下層（2層～5層）は緩いレンズ状の堆積を示す。

のことからすればSK146とした落ち込み遺構は、下部に先行する土坑があり、これらを破壊して掘り込まれた扁平な上坑（当初SX2として扱う）があり、この坑内に堆積した埋土が上層をなすと考えた。層順としては、5層→4層・3層→2層→1層となる。

*遺物の出土状態：大小700余点の弥生土器片と石器等が検出された。これらは1層下部から坑底面上にかけて万遍なく包含されていた。平面的には長軸沿いの中央部に舟状に集中する傾向が認められた。土器片は雜然とした状態で検出されている。すなわち、直立状をなすもの横たわるもの等様々で土坑の性格を反映する様相と見ることができる。

*出土遺物（挿図4-53～4-60図）：弥生土器片123点を図示した。388～396、399～401、451～469は壺形土器である。388・389は頸部から口縁部にかけて刃状に湾曲・外反して開く。口縁端部には羽状文を施す。頸部にはヘラ描き多条平行沈線を巡らす。体部は膨らむ。393・400はやや大型の壺形土器で大きく外反する口縁部。389～392・401は小型の壺形土器で口縁部が短く外反する。394～396は外反する口縁部が斜下方に肥厚している。端部には刻目（395）や斜線文（396）を施している。399は短く弓状に屈曲する口・頸部で体部が大きく膨らむ。451～453、455～458、462～468は壺形土器の頸部から体部片。頸部が直立状ないしわず

かに外傾し、体部は小さく膨らむ。多条の平行沈線を施す。465・467はクシ状工具による平行沈線であるが、他はヘラ描きである。459は大きく「ハ」字状に開く頸部・体部の境に明瞭な段と平行沈線が見られる。460は頸部片。2段のクシ描き多条平行沈線群の間と下部に小さい連続刺突文を施している。469は体下部片。複線鋸齒文が見られる。

397・398、402～447は壺形土器である。口・頸部の形状や文様等によっていくつかの群にまとめることができる。①は頸部下にヘラ描きの平行沈線を施す群。404～408・438、470～476が相当する。群中、口縁部の開きが大きい405・407・408、やや小さい406といった変異が認められる。②は頸部が「く」字状に屈曲する例である。屈曲度が小さく体部があまり膨らまない409～413、416～420、424～432・435・439・441・445～447等である。③は頸部が「く」字状に屈折し、体部がやや大きく膨らむ例である。421・422で423・433・443もこれらに近い形状を示す。②・③の出土量は圧倒的多い。④は口縁部が短く逆「ハ」字状に開き、端部を斜目内側に小さく引き出す例である。414・440・442が相当する。出土数は少ない。⑤は口縁部が逆「L」字状になり、頸部下に刻目を施した突帯を付ける。415の1例がある。453も逆「L」字状に屈折する口縁部で端部がわずかに肥厚し、刻目が見られる。器種は不明。

448～450は鉢形土器である。大型の448、中型の450、小型の449が存在する。

478～512は底部である。出土量が多い。底径が大きく器壁の厚い478～481・485・490・493等は壺形土器の底部である。底径が小さく薄手で立ち上がりが急な例、494～505・510等は壺形土器の底部と思われる。486は上げ底である。

この他、二等辺三角形で凹基部になる打製石鎌や大型船刃石斧の未成品、圓石が出土している。圓石の一つは、縁に調整痕が見られる。

*時 期：出土した大量の土器は、大まかに見ると前期中葉に遡る459の壺形土器、408の壺形土器等があるが、量は少ない。また、中期中葉頃と見られる440・442の口縁端部を小さく引き出す壺形土器も存在するが、数量は乏しい。上げ底になる壺形土器の底部が少ないと対応する現象と思われる。415の壺形土器は中期中葉頃に属する。このように、SK146の土器群は前期中葉から中期中葉頃までの諸型式を含むが、大半の土器は前期後葉から中期前葉代におさまるもので占められる。とくに目立つのは頸部下に平行沈線群を施す壺形土器や口縁端部が斜目下方に引き出される壺形土器等は中期前葉に属する型式と考えられる。

先述のようにSK146はいくつかの上坑が重複している。土層でいえば5層が最古となる。この層から検出された土器には411の前期中葉の壺形土器がある。次に来る3層からは443の鉢形土器がある。前期後半とを考えられる。3層上部から1・2層下部より392・422・430・448等が出土している。前期末から中期前半代の土器である。

このような出土土器の型式判定に従えば、SK146は前期中葉に最初の土坑が掘られ、次いで2層坑が、さらにSX2の1層坑が掘り込まれることになる。1層坑の時期は中期中葉頃であろう。

ii) SK147 (挿図4-49～4-51図、図版60)

*平面形：北西四一南南東に長軸をもつ不整橢円形もしくは不整長方形と考えられる。

*規 模：長軸2.2m、短軸1.3m（推定）、深さ0.8m（推定）。

*形状の特徴：短軸断面＝横断面から観察すると西側壁はほぼ直立状を呈し、東側壁はSK148の西端を切り、急角度の立ち上がり示すが、上方は明瞭ではない。SK147とSK148の前後関係

は前者が後者の巖上を切って構築されているのでSK147が後出ということになる。なお、覆土は横断面で見ると、下位に炭化物や焼土を含む薄い層が数層皿状に重なっており、中位から上位には厚い土層が水平に堆積している。

*遺物の出土状態：おびただしい量の赤生土器が密集・雜然とした状態で出土し、中には完形に復元しうる例も少なくない。層位的には下位層群（31層等）から少量、中位層群（17・19・24・26の各層）から大量に、そして、上位層から少量がそれぞれ検出されている。器形の判明した37点を図示した。

*出土遺物（挿図4-61～4-65図）：第4-61図513～521、第4-63図526～530、第4-64図536～539は壺形土器である。513～518・521は頸部が緩く湾曲し、口縁部は外反気味に開き、端部は丸味を持つかやや尖り気味に收める。体中位部が小さく膨らむ。第4-62図522～525は大型品である。頸部の屈曲する頸であるが、522・524は口縁部が短く、器壁が厚い。第4-63図526～530は口縁部が長く、外傾して逆「ハ」字状に大きく開く。体部の膨らみは小さく、最大径が口縁部にあるのが特徴である。第4-61図519・520は体部が膨らまない小型の壺形土器である。第4-63図531は鉢形土器であろう。以上の壺形土器は中期前葉から中葉古相期に位置付けられよう。

第4-65図544～549は壺形土器である。544は口縁部が短く外反し体部が「ハ」字状に大きく開いている。545は体上部片である。大きく膨らみ、ヘラ描き平行沈線で4段以上の帶状空間を区分けして内部に鉛歯文や無軸羽状文を配している。546～549は器壁の厚い頸部片。548は筒状の頸部で5～6条のヘラ描き平行沈線を2段に巡らし、上・中・下に連続列点文を施す。549も8条のヘラ描き平行沈線を巡らしている。これらの壺形土器は前期末から中期前葉の頃産といえる。

第4-63図532は蓋と思われる。第4-63図533～535、第4-64図540～543は底部である。533～535は底部から体部へ大きく開いて移行しており、壺形土器のものと考えられる。540～543は体部の開きがやや小さい。540は外面をミガキで仕上げ、器壁は厚口である。他は器壁が薄い。

*時期：544～549の壺形土器は下位層からの出土である。壺形土器の大半も下位層から中位層にかけて包含されていた。よってSK147は中期前葉から中葉古相期に比定することができる。

Ⅲ) SK148・SK149・SK65（挿図4-49、4-51図、図版60）

*平面形：SK148は隅円長方形であろうか。SK149は隅円長方形と考えられる。SK65も小規模な隅円長方形状を呈する。この三者はいずれも大きく重複し合っているので正確なプランは定められない。

*規模：SK148は長軸2.6m以上、短軸1.6m（推定）、深さ0.74m。SK149は長軸2.0m（推定）、短軸1.0m（推定）、深さ0.6m。SK65は長軸1.0m（推定）、短軸0.8m、深さ0.3mと各々測定される。

*形状の特徴：SK148は西側をSK147によって大きく破壊されている。縦断面では底面は浅い皿状を呈し、東側壁には低い段状の落ち込みがみられる。巖上は下位・中位層は整合状態で中央部に向かって緩く傾斜しながら堆積している。最上層は厚くほぼ水平に堆積する。南北（短軸）壁は比較的整然と立ち上がる。

SK149はSK148と長軸方向は同一であるが、前者の南側壁によって後者の北側壁が破壊されたと考えられる。側壁の立ち上がりは比較的整然としている。SK65はSK148とSK149の最上層を切って掘り込まれている。底面に凹凸がある椀底状の土坑である。

*遺物の出土状態：SK148では相当量の弥生土器片が検出されている。下位層（縦断面8・9層）から中位層（縦断面7層）に大半が包含されていた。SK149では最上層から弥生土器片20点以上が得られた。SK65からは弥生土器片10数点が出土している。

*川土遺物（挿図4-66～4-67図）：第4-66図の550～553は壺形土器である。550は大型品の口縁部。外反して大きく開き、端部面にクシ状工具による羽状文を施す。551も大きく外反する口縁部。内面にクシ状工具による押引き列点文が見られる。552は頸部で緩く漏斗状に開く。下方に6条の平行沈文が巡る。これらは中期中葉頃の所産である。553は体部片。「ハ」字状に開き、6条のヘラ描き平行沈線を施す。中期前葉に遡る土器であろう。

554～557は壺形土器である。554～556は頸部から口縁部にかけて緩く渦曲し体部が小さく膨らむ。器壁が薄い。557は頸部下に刻み口を施した突帯が付く。口縁部が逆「L」字状に屈折するタイプと思われる。いずれも中期中葉頃に属する。558・559は底部。559は体部が大きく開いている。壺形土器のものであろう。

第4-67図の560は壺形土器の口縁部である。外反して大きく開き、端部に垂直面をつくる。ここに複線鉤彫文が施される。561・562は上げ底状の底部である。

*時期：SK148は550～552の壺形土器より中期中葉頃に属するといえる。壺形土器の型式も矛盾しない。SK149の弥生土器は細片のため型式を判定できないが、後出のSK65が560の上器より中期中葉頃と考えられるので時期的には同一の時間幅の中におさめられよう。

iv) SK140（挿図4-49～4-50図）

*平面形：SK140は後出の遺構と重複しているので原形はうかがい難いが、底面プランや北壁の状態からの不整隅円形ないし隅円長方形と考えられる。

*規模：SK140は長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.5m程度。

*形状の特徴：検出面でのプランから複数の遺構と重複関係が想定され、覆土の堆積状態でも3基程度の土坑の重なり合いが考えられる。

*出土遺物：なし。

v) SK15・SK14（挿図4-49～4-50図）

*平面形：SK15は、一見の不整隅円長方形風を呈しているが、複数の遺構と重なっているので単一の土坑かどうか判断できない。SK14は検出面では胴張隅円長方形を示すが、重複した結果とも思われる。

*規模：SK15は長軸1.0m、短軸0.6m、深さ0.32m。SK14は長軸約1.1m、短軸約0.9m、深さ0.44～0.5m。

*形状の特徴：SK15は底面の状態から複数の土坑が重複した可能性がある。SK14も底面や覆土の状態から2～3基の土坑が重複している。

*出土遺物：SK15の最上層から弥生土器片1点が出土しているが、型式は不明。

vi) SK30（挿図4-49図）

*平面形：SK30もSK14同様検出面では南北方向に長軸をとる不整隅円長方形を呈している。

北側は柱穴様のピットと重複する。SK99は不整隅円長方形をなしている。

*規 模：SK30は長軸1.7m、短軸0.8～0.9m、深さ0.22m。

*形状の特徴：SK149の覆土上部を切り込み構築されている。浅い皿状の土坑である。

*遺物の出土状態：覆土中位から上位にかけて弥生土器10数点が検出されている。

*出土遺物（挿図4-67図）：563は壺形土器の頸部である。クシ状工具による6条の平行沈線が水平方向とこれに直交方向に施される。564は器壁が厚目の底部である。

*時 期：SK149はSK65とほぼ同時期の中期中葉頃と考えられる。563の壺形土器は中期前葉頃のものと見られるが、重複関係からすればSK30はSK149より後出であるから中期中葉を遡り得ない。したがって563は混入品としなければならない。

vii) SK99（挿図4-49～4-50図）

*平面形：不整隅円長方形を呈する。

*規 模：長軸1.06m、短軸0.7m、深さ0.74mを測る。

*形状の特徴：短軸断面を見ると上部で他の土坑と重複しているかと思われる。底部はほぼ平坦で中位以下の覆土も水平に堆積している。

*遺物の出土状態：最上層から弥生土器片10数点が出土している。出土層はSK99の上部に掘り込まれた遺構の可能性があるので直接的な伴出遺物ではない。

*出土遺物（挿図4-67図）：565は壺形土器の口縁部から体上部片である。口縁部は逆「ハ」字状に開き、体部はわずかに膨らむ。566は壺形土器の底部と思われる。

*時 期：565の壺形土器よりSK99は中期中葉頃を遡らないことになる。

viii) SD1（挿図4-49～4-50図）

*平面形：ほぼ東西方向に延びる溝状遺構である。

*規 模：確認できる範囲での長さは約3.5m、幅約0.7m、深さ約0.4m。

*形状の特徴：西端はSK99と重複し、東端は調査区外に延びている。溝内には円形ピットが検出されている他西半分も他の遺構により一部破壊された可能性がある。覆土断面にも整合的な堆積は認められない。SK99の最上層部に掘り込まれた遺構はSD1かとも考えられる。

*遺物の出土状態：覆土上部から100点を越える大量の弥生土器等が出土している。土器15点を図示した。

*出土遺物（挿図4-68図）：567～570は壺形土器の口縁部である。567は大きく外反して開き、端部を肥厚させ上方に小さく引き出している。568・569は口縁端部で共に端部を下方に引き出し、外面に鋸歯文で鋸歯内部を2本の縦線で埋める。570は口径の小さい壺形土器。頸部に断面二角形の突帯を付ける。571～575は壺形土器である。571は頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部は逆「ハ」字状に開き、端部を内側に小さく引き出す。572は口縁部が短く外傾し、体部はほとんど膨らまずすぼまり、径の小さい底部に移行している。573は口・頸部が小さく外傾し、頸部にヘラ状工具による4条の平行沈線を巡らしている。574・575も頸部が「く」字状に屈曲し、頸部に沈線を施す。575はヘラ状工具による平行沈線。576は壺形土器の体部片と思われる。突帯を付ける。

577～581は底部である。577・578は壺形土器のもの。579～581は器壁の薄い壺形土器の底部で浅い上げ底状を呈する。580は底部縁が張り出している。

567～570・576の壺形土器はいずれも中期中葉頃に属する。571・572・579～581の壺形土器も中期中葉頃の型式と見られる。573～575は前期後葉から中期前葉の所産であろう。

*時 期：SD1は多くの壺形上器・壺形土器の型式から中期中葉期に含まれる溝状造構と考えられる。

ix) SK92 (挿図 4-49 ~ 4-50図)

*平面形：不整長方形を呈する。

*規 模：長軸1.4m、短軸1.06m、深さ0.42～0.64m。

*形状の特徴：検出面では不整長方形をなしているが、北壁（長辺）内側にピットがあり、西側壁も窪みがある。南側ではSD8と重複している。崖上断面ではSD8が後出と判断される。底部は不定形をなす。單一の整然とした土坑とはいえない。

*遺物の出土状態：若干の弥生上器片が上層から出土している。2点を図示した。

*出土遺物（挿図4-69図）：582・583とも壺形土器の口縁部である。逆「ハ」字状に開き、端部を斜め内側に小さく引き出している。582は端部に連続刻目を施している。いずれも中期中葉頃に属する。

*時 期：SK92とした遺構の年代はおよそ中期中葉頃としてよいであろう。

x) SK93 (挿図 4-49 ~ 4-50図)

*平面形：長方形に近いプランである。

*規 模：長軸（東西方向）1.16m、短軸（南北方向）約1.0m、深さ0.14m。

*形状の特徴：検出面では北壁に2本の舟状突出部をもつ土坑のようにみえるが、覆土断面によると東西壁際に南北方向の溝状造構があり、その上部を破壊してSK93の掘られたことが判明する。西壁沿いの溝状造構はSD8の一部と考えられる。

*遺物の出土状態：覆土上部から弥生上器数点が得られている。2点を図示した。

*出土遺物（挿図4-69図）：584は壺形土器の底部。585は壺形土器の底部。585は底径の小さい上底である。中期中葉頃かと思われる。

*時 期：浅い覆土から584・585が出土しているので遺構も中期中葉頃と見てよいだろう。

xi) SK91 (挿図 4-49 ~ 4-50図)

*平面形：両長辺に小さく窪み、短辺が胴張になる不整長方形である。

*規 模：長軸（南北方向）1.1m、短軸（東西方向）0.56～0.76m、深さ0.1～0.18m。

*形状の特徴：長軸断面をみると南側の浅い土坑を切って北側に同程度の土坑が掘り込まれたように看取られる。両長辺の窪みともこの複合と対応するのでSK91とした遺構は2基の浅い土坑が隣り合って形成されたことを考へるべきであろう。

*遺物の出土状態：南側の覆土上部から弥生上器片が検出された。

*出土遺物（挿図4-69図）：頸部が「く」字状に屈曲し、短く外反する口縁部に移行している。胴部は小さく膨らむ。中期中葉頃の所産と考える。

*時 期：SK91は2基の小規模な土坑が重複している。厳密には南側土坑が出土器より中期中葉頃を降らなくなるが、周辺の遺構群の時期と考え合わせると北側土坑もほぼ同時期内におさまるとしてよいであろう。

xii) SD8 (挿図 4-49 ~ 4-50図)

*平面形：南北方向に延びる長大な溝状遺構である。SK149の北東隅、SK93の西壁際、SK92南東部と重なっている。

*規模：長さ約1.0m、幅約0.3m、深さ0.2m。

*形状の特徴：断面「U」字状を呈する。先述のようにSK92より新しく、SK93に先行する遺構である。

*出土遺物（挿図4-69図）：弥生土器片が1点確認されている。型式は不明。

*時期：SK92、SK93との前後関係から中期中葉頃の構築と考えられる。

(5) 南北暗渠付近の遺構群（挿図4-70図）

①. 遺構群の範囲

SK93の西側から南北土堤沿いに一連の遺構群がある。北よりSK59、SK60、SK95、SK136、SK33等である。これらの多くは密集して団子状に重なり合い複雑な平面形状を示す。以下では、比較的の形態の明瞭な遺構について記載する。

②. 遺構の形状と出土遺物及び時期

i) SK59・SK60（挿図4-70図）

*平面形：SK59・SK60とも小規模な不整形円形を呈する。

*規模：SK59は東西方向に長軸を持ち、検出面で長軸0.56m、短軸0.34m、深さ0.38mを測る。SK60も同様に東西方向長軸があり、長軸0.66m、短軸0.4m、深さ0.18m。

*形状の特徴：SK60は底面に凹凸があり、北西部をP442で破壊されている。南北隅付近では坑縁に被さるような状態で扁平な川石が検出された。

*出土遺物（挿図4-71図）：両SKから弥生土器の底部片が1点ずつ得られている。壺形土器のもので、浅い上げ底をなしている。中期中葉頃と思われる。

*時期：SK59、SK60はいずれも中期中葉頃に属する。

ii) SK29・SK35・SK36・SK41・SK42・P75・P445・P447（挿図4-70図）

*平面形・規模：SK29は平面形不詳。深さは検出面-0.2m。SK35は北西-南東方向長軸の不整形土坑と考えられる。長軸長0.84m、短軸は不明。深さは0.18m。SK36も平面形不詳。深さは-0.3m。SK41は不整円形で径0.48m。深さは不詳。SK42は長方形土坑かと思われるが、確認できたのは北東のコーナーの一部で詳細は分からぬ。P445は不整円形の大型ピットと思われる。径約0.55m、深さは推定で-0.5m。P75は円形ピットで径は約0.2m、深さは不明。P447浅い不定形土坑。

*形状の特徴：これら8個の上坑とピットは相互に重複しており、本来の状態を復元することは困難である。ただ断面図で観察するとSK36が先行し、その一部を破壊してSK29やP445が掘られている。P447とSK35は重複関係の最後になる。

*遺物の出土状態：SK36の理上最上部から弥生土器片と石器、SK35とP445の混在層から弥生土器片、P75、P447からも弥生土器片が得られた。

*出土遺物（挿図4-71図）第4-71図590は壺形土器の底部。浅い上げ底で「ハ」字状に開く。SK36出土。591も同じく壺形土器の底部。SK35出土。592・593は大型壺形土器の口縁部。592は端部を内側に小さく引き出す。以上の弥生土器はすべて中期中葉頃におさまる型式である。

この他、中程から刃部を欠失する大型蛤刃石斧が出土している。SK35出土。

*時 期：SK29～P447の土坑・ピット群は中期中葉頃に属する。

iii) SK32・SK33・SK39（挿図4-70図、図版67）

*この3基の土坑ではSK33の残りがよく、他の2基はごく小型の土坑である。以下、SK33を中心記載する。

*平面形：SK33は検出面では南東・北西方向に長軸をもつ不定形の土坑と見られた。南半分は方形形状で北半分は円形をなしている。

*規 模：長軸1.42m、短軸1.03m、深さ約0.3m。

*形状の特徴：北側でSK39を切り、南西角でSK40（不整円形・径0.5mの浅い皿状土坑）と、南東角でP69とそれぞれ重複する。この2遺構はSK33より新しい。覆土断面からは楕円状平面形（長軸1.2m、短軸0.7m）で浅い皿状のSK32を切り込んでSK33が構築されたと判断される。

*遺物の出土状態：上下2層が識別され、その下層上位から上層にかけて多くの弥生土器片や石皿、割石、土塊等が検出されている。6点を図示した。

*出土遺物（挿図4-71図）：594は大型の壺形土器口縁部である。大きく外反して開き端部を上方に引き出している。595は壺形土器の体部である。太い突帯が3条付く。596・597は壺形土器の底部。596は大型品のものと思われる。598は甕形土器の底部で直立して立ち上がっている。597は土塊で植物纖維状の条線や竹管痕が認められる。壁上塊か。

*時 期：SK33は594・595の弥生土器より中期中葉頃に属するといえる。

(6) 南東部の遺構群（挿図4-49図）

①. 遺構群の範囲

北東部の遺構群の中央から東寄りで検出された遺構群。SX1を中心にSK17、SK19と北側のSK10を含める。

②. 遺構の形状と出土遺物及び時期

i) SX1（挿図4-49図、図版59）

*平面形：整然とした大型の隅円長方形を呈する。

*規 模：長軸2.75m、短軸1.6m、深さ0.2m。

*形状の特徴：検出面でのプランでは北西部に小さい方形形状の膨らみが見られた。また底面はフラットではなく、北西側4分の1が少し低くなっている。底面プランにおいても長方形の浅い溝みが見られることからSX1に先行する土坑（長軸約2.0m、約短軸0.9m）の存在が推定される。東側長辺壁はSK19に切られている。

また、東南部にはP37との重複が認められる。東西南北の壁は60度以上に傾斜しており、整然とした土坑の形状をなしている。南西側の外には多数のピットが坑縁を取り囲むような状態で検出されているが、関連性は不明。

*遺物の出土状態：約130点の弥生土器片や石が出土している。

*出土遺物（挿図4-72～4-73図）：600と601は壺形土器である。600は頸部が大きく湾曲する。口縁部は外反して開く。端部には沈線状の条線が見られる。体部は膨らむ。頸部下にヘラ描き平行沈線4条が施される。601は上部部片である。貝殻復縫による下開きの重円弧文がある。

602～610は甕形土器である。602は外反する口縁部で体部は膨らまない。頸部に4条のヘラ描き平行沈線が見られる。603は口縁部が逆「L」字状に屈折している。体上部がわずかに膨ら

むが、中位以下は直線的すぼまる。頸部下に6条のクシ書き平行沈線を施す。604・605は口縁部が外反し、体部が膨らむと思われる。606～608は口縁部が外反気味に開くが、体部は膨らまない。608は器喉が薄い。609は外傾するやや長い口縁部。610は外反する口縁部で内外面をハケ調整している。611は突帯文様土器。

412は小型の鉢形土器。底部から口縁部まで逆「ハ」字状に直線的に開く。413も鉢形土器である。体部から口縁部にかけて外湾状の膨らみを持つ。器壁が厚い。

614～616は底部。614～616は壺形土器のもの、617・618は壺形上器のものと思われる。

*時期：600・601の壺形土器や602・603の壺形土器は前期後半でも降る型式である。

Ⅱ) SK17・SK18（挿図4-49図、図版66）

*平面形：SK17は不定長方形を呈し、SK18は不整方形ないし長方形と考えられる。

*規模：SK17の東西長約1.2m、深さ0.30m。SK18は東西長約0.8m、南北長約0.64m、深さ0.24m。

*形状の特徴：SK17は西側をSK18によって切られ、南西部でP214、P215と重複している。そのため本来の平面形は把握し難いが、断面では椀状の溝みを呈する。SK18も椀状の土坑と考えられる。

*遺物の出土状態：SK17からは弥生土器の小片数点が得られた。SK18からはかなりの量の弥生土器片や石器等が出土している。いずれも覆土中に包含されていた。

*出土遺物：1は壺形上器の完形品である。口・頸部は短く外傾し体部は膨らまず、砲弾状にすぼまり、底部は浅い上底状を呈する。中期初頭を下らない時期の所産と考えられる。2は壺形土器の口縁部から体上部片。頸部が「く」字状に屈曲し口縁部は外反気味に逆「ハ」字状に開いている。体部は膨らむ。中期中葉でも古相に属する土器であろう。3・4は壺形上器の底部と思われる。器壁が厚目である。

*時期：SK18は1・2の壺形土器から中期中葉でも古相期と見られる。SK17は出土した弥生土器が細片のため時期を明確にしえない。

Ⅲ) SK19（挿図4-49図、図版66）

*平面形：不整長方形を呈する。

*規模：長軸1.53m、短軸0.92m、深さ0.23m。

*形状の特徴：東側半分は底面がほぼフラットで壁の立ち上がりも急角度をなし、整然とした土坑の体をなしている。しかし、西側は平面形に乱れがあり、断面でもSK19の覆土に切り込まれた遺構の存在がうかがえる。南北軸の長方形状の土坑が重複している可能性がある。他にP38、P55が境内で重複している。

*遺物の出土状態：覆土上層から弥生土器片が10点ほど検出された。

*出土遺物：1は壺形土器である。頸部が浅く「く」字状に折れ、口縁部は逆「ハ」字状に開いている。体部は砲弾状にすぼまり、径の小さい底部に繋がると思われる。中期初頭であろう。2は突帯文土器。突帯に刻目が施される。縄文晩期後半期と考えられる。

*時期：1の壺形土器より中期初頭に遡りうる上坑といえる。

2. 2B区の遺構と遺物

1) 遺構群の分布（挿図4-74図）

2B区は2A区の南側に位置する直角三角形状の調査区である。東西20m、南北19m、面積約190m²である。南端はC区につながる。区内の中央部に北東東-南西西方向に走る用水路があり、これにより北側を北部遺構群、南側を南部遺構群とする。北部遺構群にはSK125、SK128、SK135等が含まれる。南部遺構群にはSK108、SK110、SK142、SK118等があり、C区との境にはSD11がある。

2) 遺構の検出状態

耕作下の床土を除去した處で薄い黒褐色土層(4層)が露出し、その下部に黄褐色粘土層の存在することが知られた。遺構の確認面は黄褐色土層上面であるが、構築面は黒褐色土層かその上方面と考えられるが、水田造成等により削平・除去されたものと思われる。

3) 北部遺構群（挿図4-76、4-80図、図版73）

(1) 遺構群の範囲

北西側からSK128、SK125等の一群、南側にSK135、SK136等の一群を一括する。

(2) 遺構の形状と出土遺物及び時期

i) SK128（挿図4-76図、図版76）

*平面形：北東東-南西西に長軸をもつ隅円長方形。

*規模：長軸約2.7m、短軸1.2m、深さ0.42m。

*形状の特徴：西端を暗渠によって破壊されているが、長方形土坑の形状をよく保っている。坑底は浅い起伏が見られるが、略平坦としてよい。東壁は緩く湾曲して立ち上がり、東西の壁は直立状に立ち上がっている。

覆土断面では下半部で薄く皿状に堆積した層が数枚見られる。上半部は厚い單層で北側から流れ込んだような状態を示す。オリジナルな土層ではなく、上坑上部に二次的に掘り込まれた坑に堆積した層の可能性がある。

*遺物の出土状態：弥生土器片40数点と鉄器片、石が出土している。包含層は底面上0.15～0.30mの厚さがあり、ほとんどの遺物がこの範囲内から検出されている。上部層からは遺物は得られていない。

*出土遺物（挿図4-77図）：弥生土器10点と鉄器片1点を図示した。619は壺形土器の口縁部である。大きく外反するが、端部は肥厚しない。623は小型壺形土器で、体部中位よりやや上方に最大径をもつ。口縁部を欠く。620～622は壺形土器である。620は口径が大きく、頸部は円状に屈曲し、外反する口縁部に移行している。体部はほとんど膨らみをもたず、砲弾状にそぼまっている。621、622も620同様に口縁部が短く外反している。624は壺形土器の体下部片。625～627は壺形土器の底部片である。626は立ち上がりをしぶり、底部縁断面が三角形状を呈する。628は壺形土器の底部である。629は薄い小鉄器片。

壺形土器の619は中期中葉古相と判断される。620～622の壺形土器も同時期の所産と見て誤りなかろう。

*時期：SK128は中期中葉古相に属する。

ii) SK129・SK130・SK131（挿図4-76図）

SK129は径0.8mの楕円形状小ピットである。西側を暗渠で破壊されている。壺形土器片と壺形土器片が得られている（挿図4-78図）。壺形土器片は口縁部小片で罐部が小さく内傾して膨

らむ。中期中葉頃であろう。SK130はSK128の西側に近接する。不整円形を呈する。南北径が0.9mを測る。覆土より大型蛤刃石斧の刃部片が出土した。SK131はSK130と重複し、東辺を欠く。隅丸方形ないし長方形の土坑と考えられる。南北幅が1.0mを測る。大型壺形土器の口縁部片等が出土している（挿図4-78図）。この口縁部は緩く外反して開き、端部に狭い面がある。ここにクシ状工具による連続刺突文を施している。前期末ないし中期初頭に遡る可能性がある。

iii) SK137（挿図4-76図）

*平面形・規模：隅円状の東南角が残っている。北辺と西側は暗渠で破壊されている。北東東一南西西方向の長方形土坑の可能性があるが、西側は調査区外のため未確認である。南北幅は1.2m程度であるから規模的にはSK125、SK128に近い。

*遺物の出土状態と時期：覆土から数点の弥生土器と石器が出土している。土坑にともなう遺物と考えられる。

*出土遺物（挿図4-79図）：第4-79図635は壺形土器の口・頸部片である。漏斗状に開き、口縁端部には有軸の連続羽状文を施す。頸部にはヘラ描きの平行沈線3条を巡らしている。636～638は壺形土器の口縁～体上部片。いずれも口縁部が緩く外反する。637は頸部に6条のヘラ描き平行沈船を施す。639は壺形土器の体下部～底部。わずかに内湾しつつぼまる。640も壺形土器の底部。

このほか、再利用した可能性がある打製石器片や縁が分厚く、丸味をもつ環状石器の破片が出土している。

*時期：635の壺形土器、637の壺形土器の特徴から前期後葉の土坑といえる。

iv) SK126・SK127（挿図4-80～4-81図、図版75）

*平面形：SK126は北北西一南南東に長軸をもつ不整隅円長方形。SK127は隅円長方形様を呈する。主軸方向はSK126と同様である。

*規模：SK126は長軸2.44m、短軸1.15m、深さ0.46m。SK127は長軸1.46m、短軸1.12m、深さ0.26m。

*形状の特徴：SK126は底面に浅い凹凸が見られるが、概略皿状の断面を示し、覆土は坑底に薄く灰色の粘質土や砂が堆積する。全体に厚い黒褐色土層が広がっていた。南壁は後出のP450やP451と重複する。

SK127は坑底がほぼ平坦で壁は急角度で立ち上がっている。覆土は下位に灰色系の粘質土があり、中位から上位には厚い暗褐色土層が見られる。南東隅をSK126によって切られている。またP370が北壁を破壊して掘り込まれている。

*遺物の出土状態：SK126では黒褐色土層の下位から中位にかけて小片になった弥生土器や石鏃、石塊等が検出された。SK127でも覆土中位から弥生土器片が得られている。

*出土遺物（挿図4-82～4-83図）：第4-82図の641は大型の壺形土器である。頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部は短く外反して開く。体部は緩く膨らんでいる。642は壺形土器の口縁部。逆「ハ」字状に開き、端部外面にクシ状工具による羽状文を施す。643は壺形土器の口縁部から体部中位片。頸部は緩く湾曲し、口縁部は外反気味に開く。体部が小さく膨らんでいる。644・645は底部。いずれも分厚く、壺形土器のものと思われる。

以上の土器は中期中葉頃と判断される。644は前期後葉に遡る可能性がある。二等辺三角形状

を呈し、基部を浅く抉り込む打製石器も出土している。

第4-83図の646・647は壺形土器。646は頸部が「く」字状に屈折し、口縁部は大きく外傾する。体部の膨らみは小さい。647は逆「ハ」字状に開く口縁部で端部を上方に小さく引き出している。648は壺形土器の頸部。外傾して開く。体部との境に突帯を巡らす。649は壺形土器の体部。器壁が薄く、上底状になる。これらの土器は中期中葉頃に属すると考えられる。650はP370出土の土器片。壺形土器の体下部か。

*時期：SK126は中期中葉頃に属し、SK127も同様中期中葉頃といえる。

v) SK123（挿図4-80図）

*平面形：長軸が北東東—南西西の小型の隅円長方形である。

*規模：長軸1.2m、短軸0.72m、深さ0.24m。

*形状の特徴：SK123は底面に深い凹凸が見られるが、概略皿状の断面を示し、覆土は坑底に厚く暗褐色土が堆積する。

*遺物の出土状態：覆土から数点の弥生土器が出土している。

*出土遺物（挿図4-83図）：651・652は壺形土器。651は口縁部が外反気味に開き、頸部は「く」字状に屈曲する。体部は小さく膨らむかと思われる。頸部下に3条のヘラ描き平行沈線が巡る。652は頸部から口縁部にかけて大きく外反している。頸部下に4条のヘラ描き平行沈線を施す。653は壺形土器の体上部片である。貝殻復線による3段の羽状文が見られる。654は壺形土器の底部であろう。これらの土器は前期後葉の所産であろう。

*時期：SK123の所属期としては前期後半が考えられる。

vi) SK124（挿図4-80図）

*平面形：長軸東西方向の隅円長方形であろう。

*規模：長軸約1.4m、短軸約1.0m、深さ0.49m。

*形状の特徴：北東隈は調査区外のため未検出である。

*出土遺物（挿図4-84図）：655～658は壺形土器である。655は外反する口縁部で斜目端部間に複線鋸歯文が施される。656も大きく外反する口縁部で垂直の端部面に斜格子文がある。657は短い口縁・頸部が緩く湾曲し、体上部は「ハ」字状に開いている。658は体上部片。クシ状工具による6条の平行沈線とその下方に鋸歯状のコンパス文が見られる。以上の土器は中期前葉もしくは中葉古相に位置づけられよう。

659は壺形土器で頸部が浅く「く」字状に屈曲し、口縁部は外傾する。660・661は壺形土器の底部で上底状を呈する。660は器壁が薄い。659～660は中期中葉頃であろう。

*時期：壺形土器は前期前葉にまで遡る型式とみられるが、659以下の壺形土器の特徴からは中期中葉期の上坑とすべきであろう。

vii) SK125（挿図4-80図、図版75）

*平面形：北東東—南西西長軸の胴張長方形を呈する。

*規模：長軸3.02m、短軸1.6m、深さ0.38m。

*形状の特徴：SK125は底面が浅い3段の階段状を呈し、それぞれが平坦面を形成する。壁は急角度で立ち上がる。覆土は坑底に薄く褐色の粘質土が堆積する。全体に厚い暗褐色上層が広がっていた。

*出土遺物（挿図4-84～4-89図）：第4-84図662～667は壺形土器である。662・663は口縁・頸部が弓状に湾曲する。662の湾曲度は小さい。663はやや大きく湾曲し、口縁端部に羽上文、頸部に多条のヘラ描き平行沈線を施している。664は頸部から体下部片である。中位より少し上方で大きく膨らむ。頸・体部境と体下部に多条のヘラ描き平行沈線を施している。665・666は体上部片である。665は多条のヘラ描き平行沈線を施し、沈線間を細かい刻目で埋めている。666はヘラ描き平行沈線下に連続列点文を入れている。667は体下部片。多条のヘラ描き平行沈線が斜目方向の太いハケ線を横切るように巡らされる。

第4-85図668～671は壺形土器である。668は体上部片で「ハ」字状に開き上下に多条のヘラ描き平行沈線を施す。669も同じく体上部片。頸部との境付近に多条のヘラ描き平行沈線が見られる。670は小型の壺形土器である。体中位が膨らみ、上方にクシ状工具による多条の平行沈線を2段に巡らし、その間にクシ状工具による波状文を入れている。671は体下部片である。最大径が体中位にあり、かなり腰高の器形が想定される。

第4-86図の672は壺形土器の体上部片。頸・体部境に多条のヘラ描き平行沈線を施す。673～680、第4-87図の681～687、第4-88図の688～692はすべて壺形土器である。口縁部は逆「ハ」字状に開き、頸部が湾曲ないし肩曲し、体上部に膨らみをもつ。頸部の湾曲度が小さい第4-86図673～679、「く」字状をなす第4-87図681～684・686の差異が見られる。第4-86図675は頸部下に6条のヘラ描き平行沈線を施している。

第4-88図688～692も壺形土器である。690は口縁部が短く逆「ハ」字状に開く。692は体部上方にヘラ描き平行沈線を巡らしている。体部は緩く膨らんでいる。

第4-89図の693・694は壺形土器の底部で器壁が厚目である。695・696は壺形土器の底部であろう。696は器壁が薄い。

*時期：壺形土器の型式的特徴からは前期末から中期初頭が考えられる。壺形土器のそれも前期末から中期前葉の様相を示している。SK125の掘削期は中期初頭をあまり下らないと考えるべきであろう。

vii) SK132（挿図4-80～4-81図、図版76）

*平面形：隅円長方形の土坑である。

*規模：北東東～南南西方向で長軸2.2m、短軸0.97m、深さ0.29m。

*形状の特徴：長辺の両側壁はほぼ平行するが、短辺（小口）は東側が膨らみ、不定形を示す。

ix) SK135（挿図4-80～4-81図）

*平面形：不整梢円形を呈する。

*規模：検出面では北西～南東の長軸1.8m、北東～南西の短軸1.1m、深さ0.34mを測る（最深部）。

*形状の特徴：北辺が円弧状をなし、南辺は緩く膨らんでいる。東西の長辺も少し膨らむ。

断面は西側の立ち上がりが斜目に傾斜し、東壁と南壁は急角度で立ち上がる。坑底はほぼ平坦。埋土の堆積状態は上下3層が水平状態をなしている。

*遺物の出土状態：20余点の弥生土器片が出土している。その大半は下層（-0.32～-0.20m）より検出され、一部は中層から得られている。

*出土遺物（挿図4-89図）：弥生土器4点を図示した。697は、壺形土器2点の同一個体である。

上方は頸部から体上部片、下方は底部片。外反氣味の頸部から大きく「ハ」字状に開く体上部と大きく逆「ハ」字状に開く底部で、底径は大きい。頸部から体上部には4条・単位のクシ状工具による平行沈線を3段に施し、段間にはクシ状工具による横方向と縦方向の波状線を配している。また平行沈線間に小さな円形竹管文を巡らす。全体に器壁が厚く、底径も大きい。698も壺形土器の口縁部と思われる。大きく外反し、端部を内側に小さく引き出している。699・700は壺形土器の底部であろう。700は底部高がかなり高い。

*時 期：697の壺形土器は中期初頭に位置付けられる。698は中葉古段階の可能性がある。上坑の上限年代としては中期初頭を当てることができるが、中葉古段階にも使用されたとすべきであろう。

x) SK136 (挿図 4-80 ~ 4-81図、図版77)

*平面形：不定形な台形を呈する。

*規 模：検出面での大きさは南辺（台形底辺）が約2.2m、北辺（台形上辺）約1.2m、幅（台形高さ）約2.0m。深さ0.4m（最深部）。

*形狀の特徴：東西・南北の断面図はほぼ船底状を呈しているが、検出面での平面形状からは明らかに複数の上坑が重複しているように看取される。注意深く見ると、東西断面（SP3-SP4）の西側には棺外の埋上状の互層が見られ、南北断面（SP1-SP2）の南側にも十坑状の掘り込みが認められる。おそらく、ほぼ東西方向軸（長さ約2.2m）の長方形土坑と南北方向の長方形土坑（長さ約2.0m）が同一個所に重複して掘り込まれたことが推定される。新古関係は、当然上部の主軸が南北方向になる土坑が新しく、下部の東西方向主軸の十坑が古いことになる。

*遺物の出土状態：遺物は坑底部に接する下層（検出面より-0.4 ~ -0.20m）、検出面より-0.15mまでの上層、その中間に横たわる中層に分けられる。どの層も底部の形狀に対応して浅い皿状に堆積している。中層の土器群は東西主軸土坑の埋土上面に水平状態で包含されていた。上層の土器群は南北主軸土坑に伴うものと判断される。

SK136全体では120点余の弥生土器片が得られている。これを層位的に大掘みにわけると、下層からは数点、中層から約50点余、残りは上層出土である。

*出土遺物（挿図4-90 ~ 4-92図）：多量の弥生土器と石器がある。中、上器17点を図示した。第4-90図701 ~ 704、第4-91図708は壺形土器である。701は口・頸部が失われているが、体部が弓状に膨らみ、上方に7条以上のクシ状工具による平行沈線が施されている。外面の一部にタテハケが見られる他は内外ミガキで仕上げている。702は口・頸部が緩く屈曲・外反する。体部は楕円状に膨らむ。口縁端部は狭い平坦面をなし、一条の沈線が残る。703は大きく逆「ハ」字状に開く口縁部で端部の斜め平坦面にはクシ状工具による連続羽状文が施される。704・708は体下部である。大きく湾曲してすぼまる。

第4-90図705・706、第4-91図709 ~ 712、第4-92図716は壺形土器である。705は短く緩く外反する口縁部で、体部はわずかに膨らむ。頸部下にクシ状工具による6条の平行沈線が巡る。706は小さく外反する口縁部で大部分は砲弾形にすぼまる。709・710も口縁部が小さく外反し、体部はわずかに膨らみをもちながらすぼまる。711・712・716は口縁部の外反度が709・710より強い。

第4-91図713 ~ 715、第4-92図717は壺形土器の底部である。いずれも平底で体部は急傾

斜で立ち上がる。

第4-90図707は蓋である。傘状に開き裾部に2個一对の小孔が2か所以上に穿たれる。

この他、刃部を欠失し、頂部には打痕が見られる大型の太型蛤刃石斧が出土している。

*時 期：出土した弥生土器の様相からは壺形土器701や甕形土器705が示すように中期初頭に属する一群が存在している。他方、壺形土器706のように中期前葉と思われるものも存在する。壺形土器702も中期前葉に位置付けられる。壺形土器は口縁部の外反具合から中期初頭から前葉の範囲に認められるであろう。707の蓋も中期前葉の所産と見てよいだろう。

とすれば、下位の土坑の年代決定に預かる中層下部の弥生土器が問題になる。甕形土器705は中層下部から出土した。同レベルからはクシ状工具による多条平行沈線をもつ甕形土器の破片がえられているので土坑の時期を中期初頭とすることができます。

他の弥生土器群はいずれも中層上部から上層より検出されている。702・703の壺形土器等の型式からこれらは中期前葉に位置付けられるので上位土坑の年代は中期前葉といえる。

4) 南部遺構群（挿図4-93図）

(1) 遺構群の範囲

区中程の東西用水路南側の範囲で、南限はSD11とする。

(2) 遺構の形状と出土遺物の時期

i) SK110・SK142（挿図4-93図、図版74）

*平面形：SK110は長軸方向北西—南東のやや不整の長方形。

*規 模：長軸長2.0m、短軸は1.3m、深さ0.62を測る。

*形状の特徴：SK110の両長辺は平行になるが、北辺は膨らむ。四辺の壁は急角度で立ち上がる。東西の壁は垂直に近い。形状が比較的整った土坑である。この土坑の南半分とすっぽり重なるような状態でSK142が検出されている。平面形は不整方形。規模は一辺約1.3m、深さ0.36m。SK110の覆土はほぼ水平の互層をなす。

*遺物の出土状態：約70点の弥生土器片と砥石片、割石等が出土している。上器の多くはSK110の覆土中に包含され、一部はSK142の覆土から検出された。

*出土遺物（挿図4-94～4-95図）：第4-94図718～724は甕形土器である。II・頸部が「く」字状に屈曲ないし湾曲する。体部は緩く膨らんでいる。718は後元により完形をうかがうことができる一例。体上部で膨らんだ後直線的にすぼまっている。724は体部をミガキで仕上げる。725～731は底部。726～728は器壁が分厚く、大きく開いて立ち上がる。甕形土器の底部と思われる。他は甕形土器の底部。

第4-95図732～734はSK142に属する甕形土器である。732は短く外反する口縁部で端部は平坦になるここに太い斜格子文が施される。頸部にはクシ状工具による3条の平行沈線と同一工具による波状文が見られる。733は「く」字状に屈曲する頸部から短く逆「ハ」字状に開く口縁部移行している。口縁部端を斜内側にごくわずかに引き出す。734は外反する小型甕である。

*時 期：718の甕形土器はSK110の覆土から検出されている。720の甕形土器はSK142に属すると思われる。718は中期前葉新、720は中期中葉古と想定されるのでSK110は718の時期に、SK142では第4-95図732のような中期前葉に遡る土器もあるが、733は中期中葉古と見られるので土坑の時期もこの間に位置付けることができる。両者の間の時間差はわずかであろう。

ii) SK105 (挿図 4-93図)

* 平面形：小型の不整梢円形。

* 規 模：約 0.6×0.4 m、深さ 0.3 m

* 形状の特徴：一方の西端が円形のピット状になっており、北側は浅い円形のピットと重複する。先後関係は不明。上坑とするよりも柱穴と見るのが適切か。

* 出土遺物（挿図 4-95図）：甕形土器の底部が得られている。

* 時 期：中期中葉頃か。

iii) SK107・SK108 (挿図 4-93図、図版74)

* 平面形：SK107は不整円形か。SK108は長時期方向北西—南東の略長方形を呈する。

* 規 模：SK107は径約 0.7 m 程度。深さは 0.27 m。SK108は 1.0×0.6 m 程度。深さは 0.27 m。北西側がSK107と、南邊も他の遺構と重複しており、原形は大きく損なわれている。残余の壁は低く、土坑の大半が失われたように看取される。

* 出土遺物（挿図 4-95～4-96図）：第4-95図はSK107出土の弥生土器で736～738は甕形土器。736は甕形土器の口・頸部である。小さく外反し、頸部にはヘラ状工具による5条の平行沈線が見られる。737は復元による完形品である。やや内湾する口・頸部で口縁部にはクシ状工具による多条の平行沈線が施される。沈線群は5条一単位で上部に二単位10条、さらに下部にも一単位の平行沈線を巡らす。その中间と最下部に楔状の連続刺突文を入れる。738は甕形土器の口縁部片。短く逆「ハ」字状に開き、端部を内側に小さく引き出している。端部外面には連続斜線が認められる。

SK108からは多くの弥生土器片が得られた。中、復原した土器を含めて5点と異形土器片1点を図示した。第4-96図739～743はいずれも甕形土器である。739は体下部の一部を欠くが、ほぼ全形をうかがうことができる。口・頸部は弓状に強く湾曲し、口縁端部に連続刻目を施す。頸部にはクシ状工具による7条の平行沈線を巡らし、その直下に棒状工具の先端で印した連続刺突文が施される。

740・743は口縁部が短く外反し、体上部が小さく膨らむ。頸部にヘラ状工具による平行沈線4条を巡らす。741は体部の膨らみが見られない。742は小型の甕形土器で口縁端部に連続刻目が見られる。744は2個の小孔を穿った鉄状の土器片である。壺形土器の把手かも知れない。

* 時 期：SK107の第4-95図736の土器は前期後葉、737は中期初頭、738は中期中葉前後と出土土器の時期は分かれれる。遺構が重なり合い、SK107に属する土器を特定できない。

第4-96図のSK108出土の土器では739が中期初頭でSK107の737の甕形土器と同一形式に属する。740・743は前期後葉まで遡る可能性もあるが、他の甕形土器の特徴からすると中期初頭まで下降するタイプとも考えられる。他の甕形土器は中期前葉を下らない型式と思われる。遺構の残存状況と土器の完存度が比較的高いSK108の年代は中期初頭から前葉にあると考えられる。SK107の2はSK108の土器が混入した可能性もある。

iv) SK111 (挿図 4-93図)

* 平面形：長軸が北西西—南東東方向で梢円形状を呈する。

* 規 模：長軸が北側がSK110・SK142と重複するが、約 1.0 m 程度であろう。短軸は 0.7 m、深さは 0.2 m 程度。

*形状の特徴：北辺以外の長・短辺は整然としているが、底面は凹凸が激しく二次的な変異していると見られる小土坑。SK142が北辺を切っている。

*出土遺物（挿図4-97図）：口縁部が外反し、体上部は小さく膨らんでいる。

*時期：中期前葉であろう。

v) SK109（挿図4-93図）

*平面形：不整梢円形もしくは不整長方形である。長軸はほぼ南北方向になる。

*規模：長軸約1.0m、短軸約0.8m、深さは0.51m。

*形状の特徴：二つ以上の遺構と重複している。

*出土遺物（挿図4-97図）：746は複合口縁の壺形土器である。少し外傾して開く。複合部は突出しない。747は壺形土器の頸部・体部境の破片。太い刻口を施した貼付け突帯がある。748は壺形土器の底部である。

*時期：746は後期中葉、745は中期中葉頃、747も中期のものと思われる。これらの中どの土器が時期決定に預かるのかは判断できない。

vi) SK115・SK116（挿図4-93図）

*平面形：SK115は不整梢円形か。SK116は隅円長方形を呈する。両者とも長軸東西方向を探る。

*規模：SK115は推定長軸0.5m。SK116は長軸1.1m、短軸約0.8m、深さ0.65m。

*形状の特徴：SK115はSK116に先行する柱穴状のピット。SK116は四壁の立ち上がりが急角度で浅い皿状の底部をなす十坑である。

*出土遺物（挿図4-97～4-98図）：第4-97図はSK115の上器で弥生土器の底部。壺形土器のものと思われる。第4-98図はSK116の土器で750～754は壺形土器の口縁部から体中部片である。いずれも口縁部が逆「ハ」字状に外反するが、750・751・753・754は頸部が「く」字状をなし、体部が膨らむ。752は円状に緩く湾曲し、体部に膨らみは見られない。755は壺形土器の頸部・体上部片。上下2段にクシ状工具による多条の平行沈線帯をつくりその中に重四角文を配している。下段沈線文帶下には連続列点文を施す。756も壺形土器の体上部片。太い刻目をもつ突帯が付く。757は逆「ハ」字状に開く口縁部で、端部を斜め下方に引き出す。高坏であろうか。758は壺形土器の底部。759は壺形土器の底部と思われる。

*時期：SK116の755は中期初頭に属するが、他の壺形土器は中期前葉新に位置付けられる。756は中期中葉頃に下る可能性がある。このように出土土器に時期幅があるので。

4. 2C区の遺構と遺物

1) 2C区の範囲と遺構群の分布（挿図4-99図）

2B区の南側に続く三角形状の区域である。2B区との境はSD12とする。面積は約57m²になる。遺構群はほぼ東西方向に走るSD11・SD12を北端とし、そこから南側のSX10・SX11と方形プランの大型柱穴群、それに、いくつかの柱穴状のピット群からなる。

当初、溝状遺構と想定したSD16はその後の調査により隅円長方形上坑と判明した。この遺構と付近のピット群も併せて2C区に含める。

2) 遺構群の検出状態

水田面の標高は+12mを測り、2A・2B・2C区中ではもっとも高い。遺物包含層（5層・9層・

12層、厚さ40cm)は水田床土下に水平に堆積している。これらの層群下から遺構群が検出されている。主な遺構としてはB・C区境をほぼ東西に走るSD11・12の溝状遺構、この溝の約3m南側のSX10、さらに3m程南にSX11、そして、SX10と重複する大型の方形柱穴群等がある。

3) 遺構の形状と出土遺物及び時期

i) SD16 (挿図4-99図、図版81)

*平面形：東西方向に主軸を持つ隅内長方形の土坑である。

*規模：長軸約2.1m、短軸約1.5m、深さ0.5m。

*形状の特徴：東側が少し幅広になる。底面は皿状を呈し、底からの壁の立ち上がり方は丸味を持ち、外反気味に開いている。

*遺物の出土状態：坑内埋土の上・下層から数10点の弥生土器片が検出された。

*出土遺物(挿図4-101～4-103図)：760～763は壺形土器の口縁・頸部である。短い口縁部が緩く外反し、体部は膨らむ。764～777は壺形土器である。764～766は頸部が刃状に湾曲し、器底が薄い。767・771・772は頸部が「く」字状ない逆「L」字状に屈曲している。器壁は薄い。773～776は短く外反する口縁部で体部が小さく膨らむ。773・775は器壁がやや厚い。768～770・777は短く外反する口縁部で頸部は「く」字状に屈曲し、体部が小さく膨らむ。頸部下にクシ状工具による多条の並行沈線を施している。

778は口縁部に突帯を巡らす鉢が他土器である。779～785は底部。779は壺形土器の底部と思われる。784は浅い上げ底である。

*時期：760～763の壺形土器や768～770・777の壺形土器は中期前葉に遡る型式である。他の壺形土器や778の鉢形土器は中期中葉頃に含められるものであろう。したがって、遺構の時期は中期中葉頃に求めうることになる。

ii) SD11 (挿図4-99図、図版80)

*平面形：北東東～南西西方向に延びる溝状遺構である。

*規模：検出された長さ約8.2m、上幅約0.6m～1.6m、底幅約0.2m、深さ約0.5m。

*形状の特徴：断面が逆台形をなす。調査区東壁から西3m付近でSD12と分岐している。分岐点までは上幅が広く、分かれた後は狭まる。両構は平行して南西西向きに走っている。

なお、SD11は、調査区北東で平成元年調査の際に検出された「堀濠跡」(北東～南西方向約40m以上の長大な溝状遺構)に繋がることが判明している。

*遺物の出土状態：溝底より0.2m上部辺りから大量の弥生土器が出土した。

*出土遺物(挿図4-104～4-108図)：786～788は中型の壺形土器口・頸部である。大きく外反して開き、口縁端部を肥厚させ内縁角を上方に小さく引き出す。789～792は同型式の小型壺形土器である。790は端部を肥厚させ端面に刻み目を施す。791は頸部に低い突帯を巡らしている。793・794、796・797は外反する口・縁部で端部を斜め下方に引き出している。793・794は端斜面には櫛齒状工具による羽状文を施す。795は口・頸部が逆「L」字状に開く最小型の壺形土器である。

798～820は壺形土器である。798～808、811はやや大型で短い口縁部が逆「ハ」字状に開き、端部を小さく引き出している。頸部は「く」字状に屈折している。809・810・812・816・817も短く逆「ハ」字状に開く口縁部で端部が小さく肥厚する。頸部は「く」字状に屈折している。

814は逆「L」字状に近い屈折の口縁部を持つ小型の壺形土器。818は口縁部がごく短く、頸部が「く」字状に屈曲する壺形土器である。813・820は頸部が緩い「く」字状の屈曲を示す壺形土器である。

819・821は鉢形土器である。819は短い口縁部で端部が肥厚し、外面に2条の凹線が施される。821は内湾する口縁部の外面に幅広い突帯を貼り付けている。

822～829は壺形土器の頸部・上体部である。2条～3条の断面三角形の突帯を巡らしている。822の突帯には太い刻み目が施される。

832～852は底部である。831～833・835・838・844・845は壺形土器の底部で平底を呈する。836～843・847～850はやや上げ底気味の底部である。853は高壺の脚部。脚高が長い。

*時 期：出土土器のほぼ100%が中期中葉期であることからするとSD11は中期中葉期の溝状遺構となる。ただし、819の鉢形土器は中期後葉に降る型式である。上層部への混入と見うるか。
iii) SD12（挿図4-99図 図版80）

*平面形：SD11から分岐した溝状遺構である。

*規 模：分岐点から調査区西限までの長さは約5m、上幅約0.7m、底幅約0.3、深さ0.4mと計測される。

*形状の特徴：断面は上部で逆「ハ」字状に開き、SD11程シャープな立ち上がりではない。北縁部はSD16等によって損傷を受けている。

*遺物の出土状態：SD11と同様に溝底面よりやや浮いた状態で弥生土器や石器が検出された。

*出土遺物（挿図4-109～4-111図）：854・855は比較的大型の壺形土器である。頸部から口縁部にかけて外反して開き、端部を上方に引き出している。855は頸部に断面三角形の太い突帯を貼り付ける。856・859も同様な型式の壺形土器と思われるが、器壁が薄い。858は口縁端部を内側に折り込むようにした壺形土器である。857・866は前期の壺形土器の口・頸部と胴部である。857は緩く湾曲する頸部に段が見られる。866は体上部で上方には複数段の羽状文、下方には多条のヘラ描き平行沈線が施されている。

860～864は壺形土器である。短く逆「ハ」字状に開く口縁部で端部を上方に小さく引き出している。頸部が「く」字状に屈折し、体部はやや膨らむ。865は小型の壺形土器である。口縁端部を上方に引き出す。体部中位が大きく膨らむやや扁平な形状を呈している。

867～874は底部。867は前期の壺形土器の底部と思われる。869・870・873・874は壺形土器の底部で上げ底状を呈する。

このほか、中央部に両面から穿孔された環状石器が出土している。

*時 期：多くの壺形土器や壺形土器の型式から中期中葉頃といえる。

iv) SX10（挿図4-99図、図版81）

*平面形：溝状を呈する遺構。両端は丸味を持つ。

*規 模：長さ約3.6m、幅0.5m、深さ0.71m。

*形状の特徴：東側が調査区外になるため正確な形状は不詳である。検出面での落ち込み具合では東側が緩く幅狭になつてゐるので、あるいは長楕円形となる可能性もある。

*遺物の出土状態：数点の弥生土器が検出された。

*出土遺物（挿図4-111図）：875は壺形土器である。低い口頸部で緩く湾曲し、体部が大きく

張り出している。876～877は甕形土器である。短く逆「ハ」字状に開く口縁部で頸部は「く」字状に屈折している。体部は小さく膨らむ。876は器壁がやや厚い。878は鉢形土器か。短い口縁部が外傾している。879は甕形土器の底部と考えられる。

*時 期：875の壺形土器と877の甕形土器とは時期を異にする可能性があるが、おおむね中期中葉古相の範囲に収まる型式と見られる。

v) SK11（挿図 4-99図）

*平面形：椭円形かと思われる。

*規 模：短軸約2.0m、長軸2.0m以上。深さ0.33m。

*形状の特徴：短軸の法量からすると大型の土坑の可能性があるが、半分以上は調査区外のため不詳である。

*遺物の出土状態：数10点の弥生土器が検出されている。

*出土遺物（挿図4-112図）：880・882・887～889は壺形土器である。880は口縁部が外反して大きく開き、端部は下方に小さく引き出している。端部外面には斜格子文が見られる。884・887～889は頸部付近にヘラ描きの複線の平行沈線や波状文を施している。口縁・頸部の形状が分かる884は大きく弓状に湾曲し、口縁端部にも複線の粗い波状文が施される。

881～883、885・886は甕形土器である。881・882、885・886はいずれも短く逆「ハ」字状に開く口縁部で、端部がわずかに肥厚し、頸部は「く」字状に屈折している。体部は小さく膨らむ。883は頸部が緩く円状に湾曲し、口縁端部を斜め下方に小さく引き出している。鉢形土器の可能性もある。

890～896は底部である。890・891は壺形土器の底部。892～896は甕形土器の底部で上げ底になる。

*時 期：884・887～889は中期前葉の壺形土器と思われる。880の壺形土器や881・882～886の甕形土器、892・893・895・896の底部は中期中葉頃に属する。よってSK11は中期中葉頃の所産といえる。

vi) P334・P335・P336・P340（挿図 4-99図、図版78）

2C区最南部からは多くの柱穴が比較的まとまった状態で検出されている。とくに、SD11の南側から発見された方形プランの大型柱穴群は注目される。以下にその詳細を記載する。

①P334：西側が調査区外となるため未確認であるが略方形を呈する。一辺0.55m、深さ0.30mを測る。中心よりやや北寄りに径10cm足らずの柱材穴があり、底面が浅く窪んでいる。穴の断面は整然としているが、柱材根は腐食して確認できない。

②P335:P334の東6mに位置する。やや胴膨らみの方形プランである。一辺0.55m、深さ0.34m。柱材穴は一辺0.26mの方形状を呈し、先端を受ける穴底面は浅く窪む。

③P336：P335の東1.9mに位置する。不整方形を対する。一辺0.54m、深さ0.28m。穴中央の坑底が浅く窪んでいる。穴断面の土層は乱れており、柱材が抜き取られた可能性がある。

④P340：P336の南2.4mに位置する。略方形を呈する。一辺0.60m、深さ0.54mを測る。穴中央部に約0.30mの略方形の柱材穴が見られる。軸線はP334～P336よりも少し南に振れる。方形穴の断面は整然としており、柱材根は腐食したものと思われる。

*遺物の出土状態：P335からは鉄滓、P340より須恵器の坏蓋片がそれぞれ出土している。

*建物の復原：以上4穴が大型の掘立柱建物の存在を示すことは明瞭であるが、柱間がまちまちであり、セット関係も確定できない。複数の建物の一角が偶然まとまって検出されたものと判断せざるをえない。

*時期：遺構にともなう土器が少數のため確実な年代を特定することは難しい。しかし、大型の方形柱穴群は古代の官衙的遺跡から発見されるケースが多く、中小路遺跡の同類柱穴等の様相から考えても2C区大型方形柱穴群は官衙の建物跡と判定しうる蓋然性は高いであろう。

vii) その他のピット群について

2C区においても平面が円形を呈する柱穴状のピットがいくつか検出されている。その中には須恵器をともなう例がある。すなわちP339からは8世紀代の壺（高台付きで体部から口縁部にかけては内湾気味に聞く。器壁はやや厚目）、P344からは甕の頸部片が出土している。

5. その他の遺構に伴う遺物

2区のピット群については、平面が円形を呈する柱穴状のピットがいくつか検出されている。その中には須恵器を作りうる例がある。その傾向は2C区で多く検出されている。

多くは8世紀後半から9世紀、大溢Ⅲ期の須恵器である。蓋については、P37では蓋が出土し輪状つまみをもつものが出土している。P523では壺（高台付きで体部から口縁部にかけては直線的）が出土している。897は9世紀の蓋の蓋である。天井部は平坦で、天井部から体部へは直角状に移行する。898は輪状つまみをもち、天井部は平坦で、体部に向かって屈曲し、口縁端部は嘴状に尖る。901は高台付の壺である。高台の断面は台形状で逆「ハ」字状にひらく。902、903の口縁端部は尖り気味ながら丸くおさめる。904は高壺の脚部である。905は取手付の甕である。首は直線か。9世紀であろうか。906は大型の甕か。内部に大きな沈線がみられる。やや直線的な体部から外方へ屈折する口縁部へと続く。中世前半期のものと思われる（挿図4-112図）。

6. 遺構に伴わない遺物

1) 弥生土器（挿図4-113～4-115図）

907は大きく外反する口・頸部。口端部面に有軸斜状文を施す。前期後半の広口の壺形土器である。908は小型壺形上器の口・頸部。強く外反し、口端部に鋸歯文と「X」字状文を連続して施している。中期前葉であろう。909は口縁部が大きく開く。口端部の垂直面に鋸歯文を刻む。鋸歯内は5～7条の縦線で埋める。中期中葉に属する。

915は逆「ハ」字状に小さく外反する口・頸部。口端部の内面を小さく突起させ、頸部下端に断面三角形の突帯を付ける。中期中葉頃であろう。912は鰐先状の口縁部。鎧状の端部面は水平で上面に円形浮文を付ける。中期中葉頃であろう。913は911と同タイプの大型壺形土器である。口端部内側を上方に明確に引き出している。中期中葉頃。

915は筒状の口・頸部をもつ特異な壺形土器である。口縁端部と頸部下端に断面「M」字状の突帯を巡らしている。類品が十井ヶ浜遺跡から出土している。福岡県東部から大分県北部方面からの搬入品と見られる。中期中葉。916は頸部下方に断面三角形の突帯2本を付ける。中期中葉頃であろう。

914は無頸壺の口縁部から体中位片である。大きく玉状に膨らみ、口縁下方に2条の低い突帯を付ける。中期中葉であろう。

917～925は壺形土器の口・頸部から体部にかけての破片である。918は大型品。口・頸部が大きく外形して開き、頸部にヘラ描期平行沈線4条を巡らしている。器壁は薄い。前期後葉か中期前葉に属する。917・919・920は頸部が「く」字状に屈折し、短く逆「ハ」字状に開く口縁部。体中位が小さく膨らんでいる。中期中葉を前後する時期であろう。921も頸部が「く」字状に強く屈折し、口縁部が逆「ハ」字状に開く。口端部はやや尖り気味になる。体部は円状に膨らむ。長胴形の壺形土器と思われる。中期中葉頃であろう。922～924は頸部が「く」字状に屈折四、短く逆「ハ」字状に開く口縁部であるが、口端部内側を小さく上方に引き出している。中期中葉頃であろう。

925～929は複合口縁部の壺形土器である。925～927は口端部が肥厚し、複合部は突出しない。口縁部にはクシ状工具による多条の平行沈線を施し、一部をナデ消ししている。後期中葉新といえる。928・929は複合口縁の壺形土器。928は複合部が水平方向に小さく突出する。929は口端部を尖り気味に收める。後期末である。

930は高坏の脚部。細身で高いのが特徴。中期中葉頃であろう。931は壺形土器の底部。

これらの他にも遺構に伴わない弥生上器片が大畠に採取されている。ここには羽場遺跡の継続期間を示す十器の代表的なものを選んで表示した。

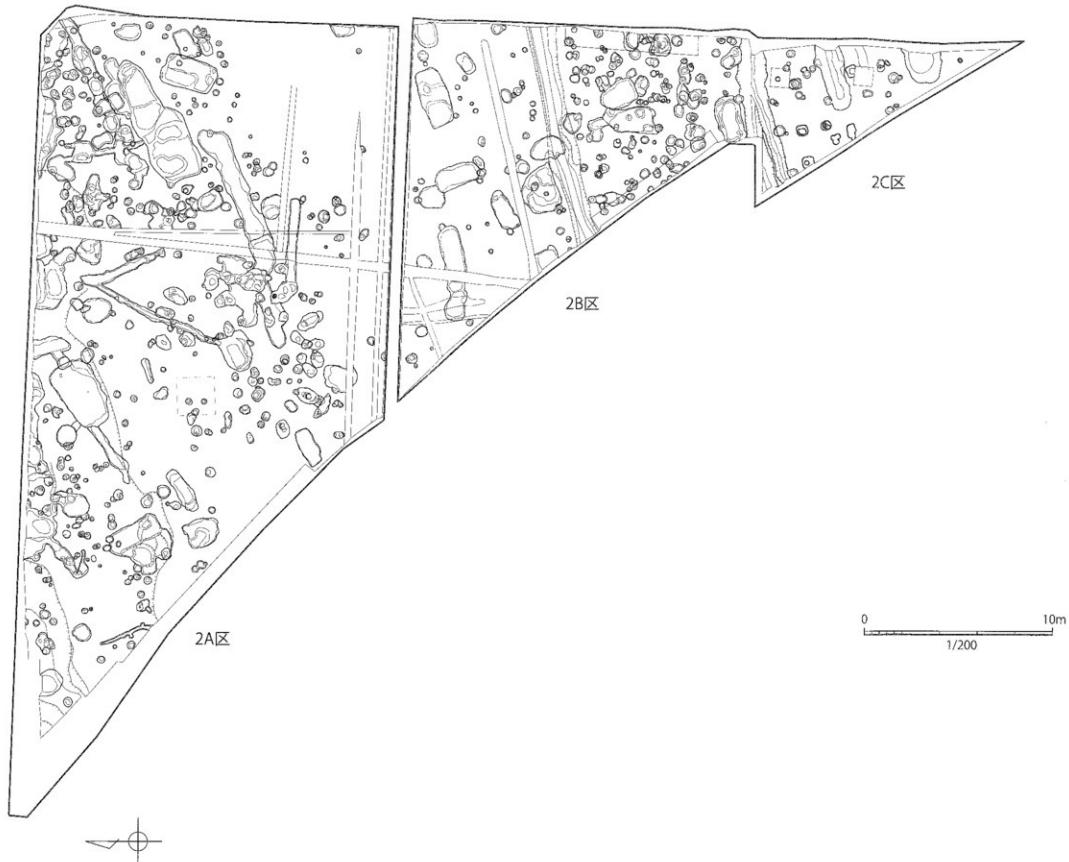
2) 須恵器、陶磁器（挿図4-116、4-117図）

932～941は蓋である。932は7世紀頃のものである。933、934、935は低い宝珠系つまみである。936～941は輪状つまみを持ち、平坦な大井から体部に向かって屈曲して、口縁部との間に平坦面をもつ。口縁端部はつまみ出すように垂下する。

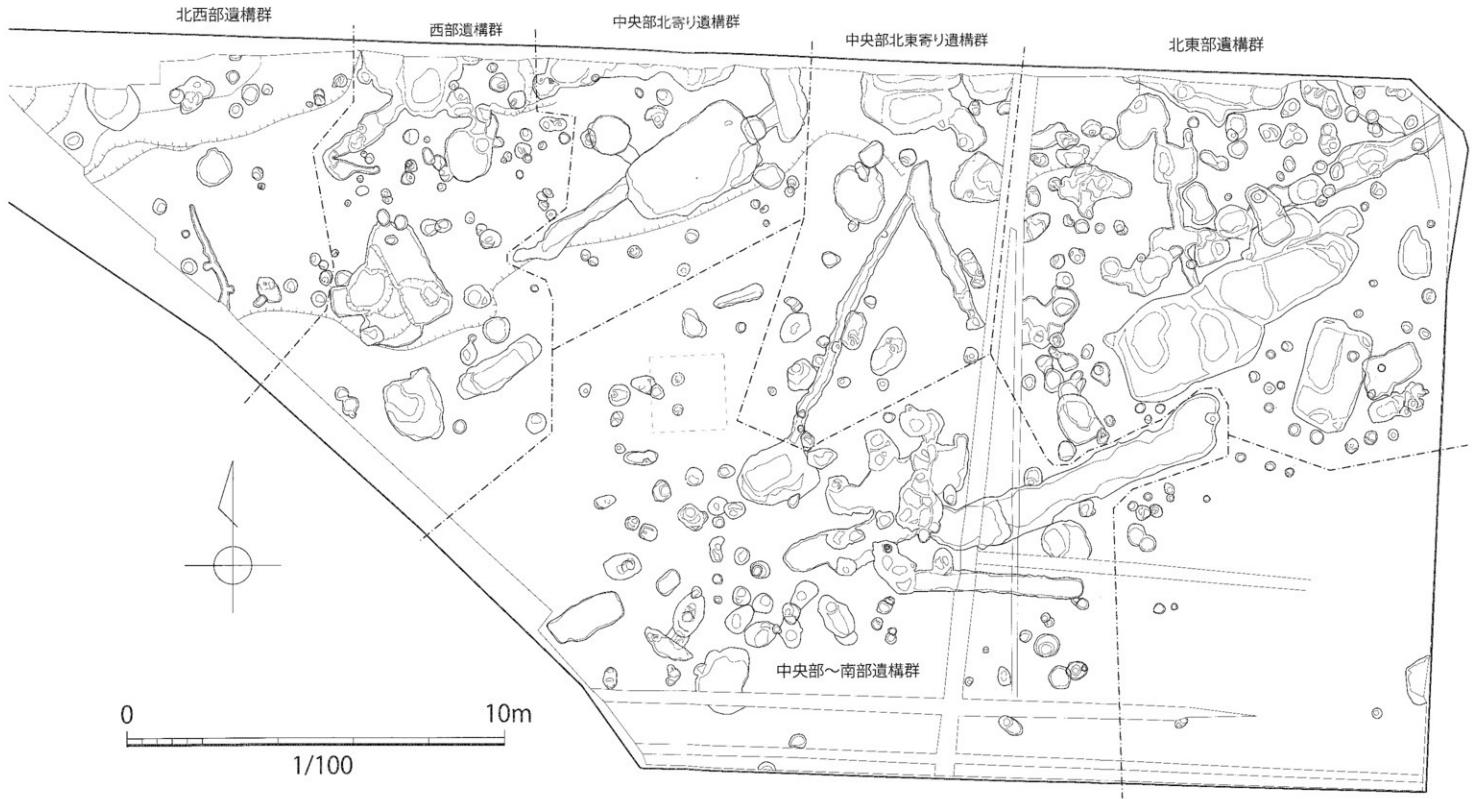
942～956は壺身である。体部がまっすぐ立ち上がり、底部のやや内側に高台がつく壺身である。多くが高台の形状に特徴がある。高台と坏部との接合部を強く押しなで、高台の底部には凹線状のくぼみを設けている。942、943は薄手で体部が折れ、金属器写しの可能性がある。955、956は小型で高台が付かない。957は壺である。口縁部に模様は施されていない。958～960は高坏である。960は小型のものである。963は東播系の鉢の口縁部で、重ね焼き痕を残す。964～966は底部に回転糸切痕を残す。底部外面に絞りがみられる。

967～972は白磁である。967は口縁部が正線状で白磁碗IV類、968はV類の高台である。969は内面に草花文がみられ、体部が緩やかに開く。970は口縁端部が外方に開き、972は高台部が垂直で、高台部から体部にかけて緩やかに開いている。V類より下る可能性がある。

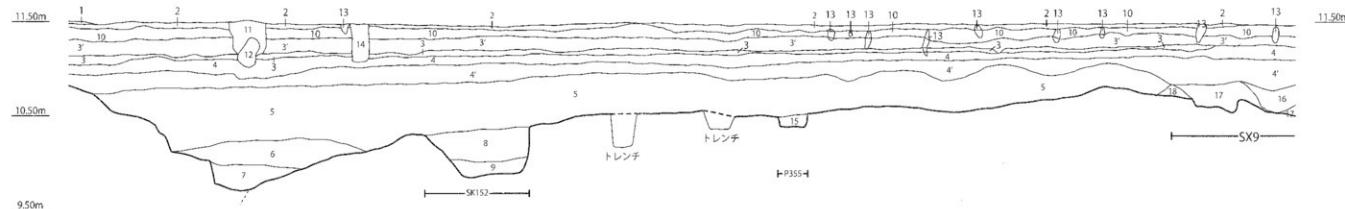
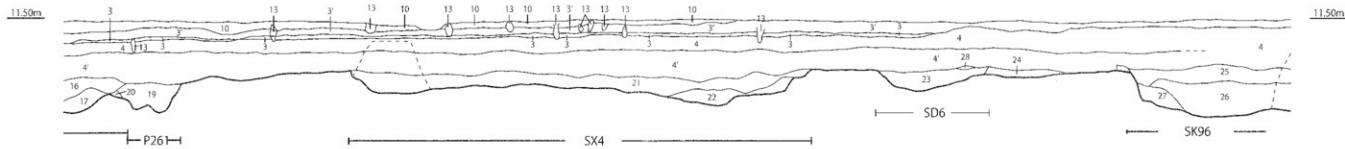
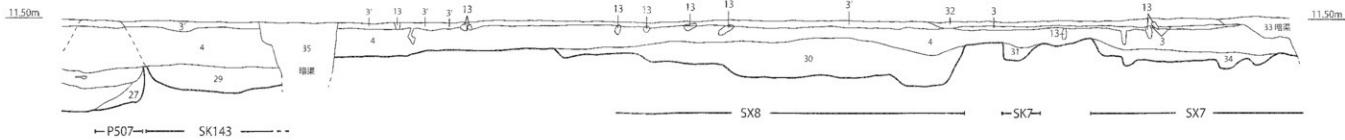
973、974、976は青磁である。973は内面に劃花文を施し、青磁碗I類である。45は内面は無文でD類である。975は青白磁の合子蓋である。977は青花で、口縁部内面に線刻される。978は瀬戸の皿である。



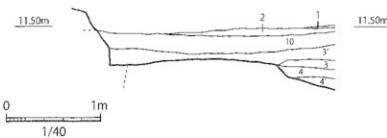
第4-12図 2区調査区配置及び遺構配置図



第4-13図 2A区遺構配置図（遺構群区分図）

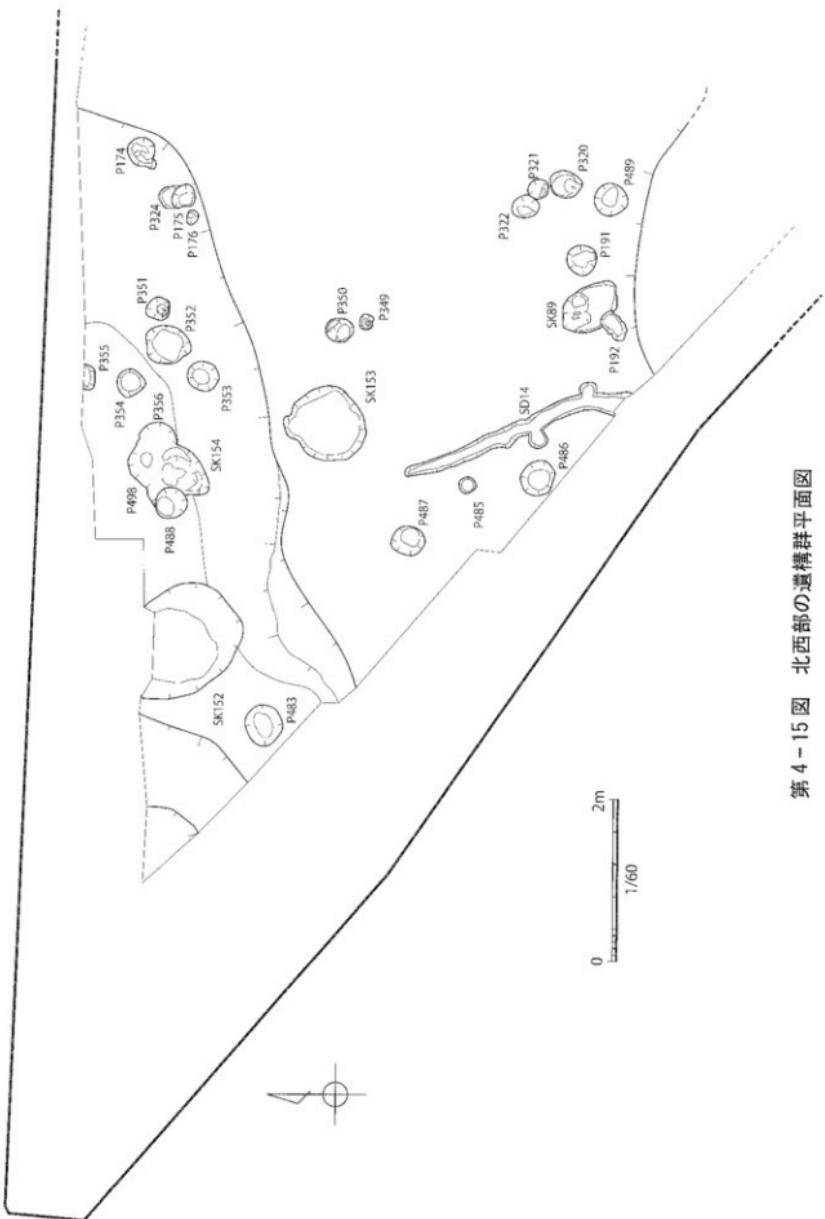


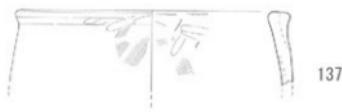
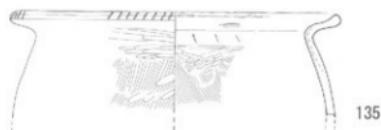
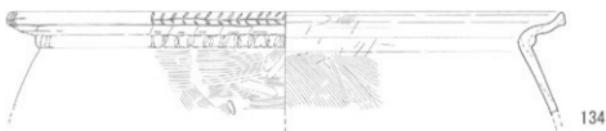
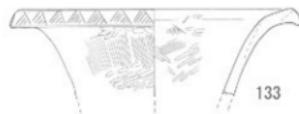
- | | | | |
|---------------------------|--------------------------------------|---|--|
| 1. 灰色土 (5Y4/1) 水田耕作土 | 9. 褐褐色粘重土 (7SYR3/1) | 19. 褐灰色土 (7SYR6/8) 地山ブロック | 28. 梅色土 (7SYR6/8) 地山ブロック |
| 2. 明褐色土 (7SYR5/6) 水田耕作土 | 10. にじむ黄色土 (2SYW3/3) | 20. 草绿色土 (7SYR4/2)+ 植生土 (7SYR6/6; 地山) 混合層 | 29. IC-5a-3種類色土 (SYR4/3) |
| 3. 床オーリーブ色砂質土 (5Y5/2) | 11. 剥離による剥起層 | 21. 黄褐色土 (10YR3/4) | 30. 暗褐色土 (7SYR3/3) |
| 3'. 床オーリーブ色砂質土 (5Y6/2) | 12. 剥離による剥起層 | 22. 黄褐色土 (10YR3/3)- 明褐色土 (7SYR5/6) 雷合層 | 31. 暗褐色土 (7SYR3/3) |
| 4. 灰褐色土 (7SYR4/2) 蕨物包存層 | 13. 灰色土 (7SY1/1) | 23. 黄褐色土 (10YR3/4) | 32. 明褐色土 (10YR6/8) |
| 4'. 黑褐色土 (7SYR3/2) 蕨物包存層 | 14. 剥離による剥起層 | 24. 黄褐色土 (10YR3/2) | 33. 増葉塊及層 |
| 5. にじむ褐色土 (7SYR5/4) 蕨物包存層 | 15. 植物土 (10YR3/2) | 25. 黄褐色土 (10YR3/2) | 34. 植物土 (SYR3/3)+ 植生土 (7SYR6/8; 地山土) 混合層 |
| 6. 暗褐色土 (7SYR4/1) | 16. 植物土 (7SYR3/3) | 26. にじむ黃褐色土 (10YR4/2) | 35. 増葉塊及層 |
| 7. 黑褐色粘重土 (SYR3/1) | 17. 植物土 (7SYR3/3)+ 植物土 (7SYR4/6) 混合層 | 27. 黄褐色土 (7SYR4/6) | |
| 8. 灰褐色土 (SYR4/2) | 18. にじむ棕褐色土 (SYR4/2) | | |



第4-14図 2A区北壁土層断面図

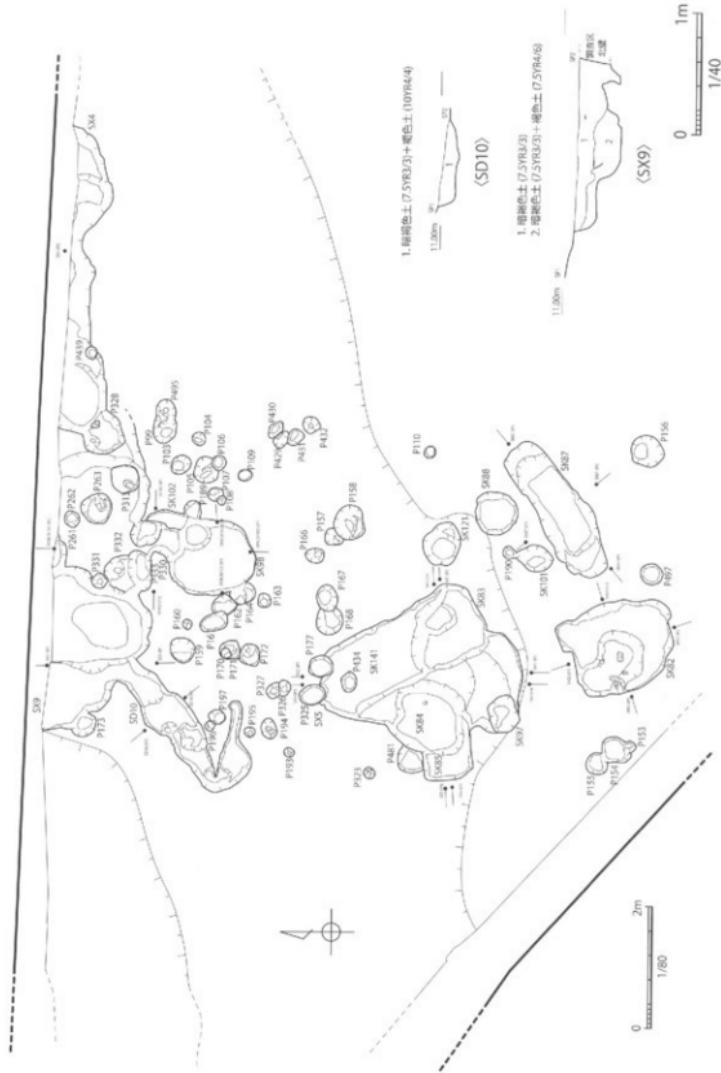
第4-15図 北西部の遺構群平面図





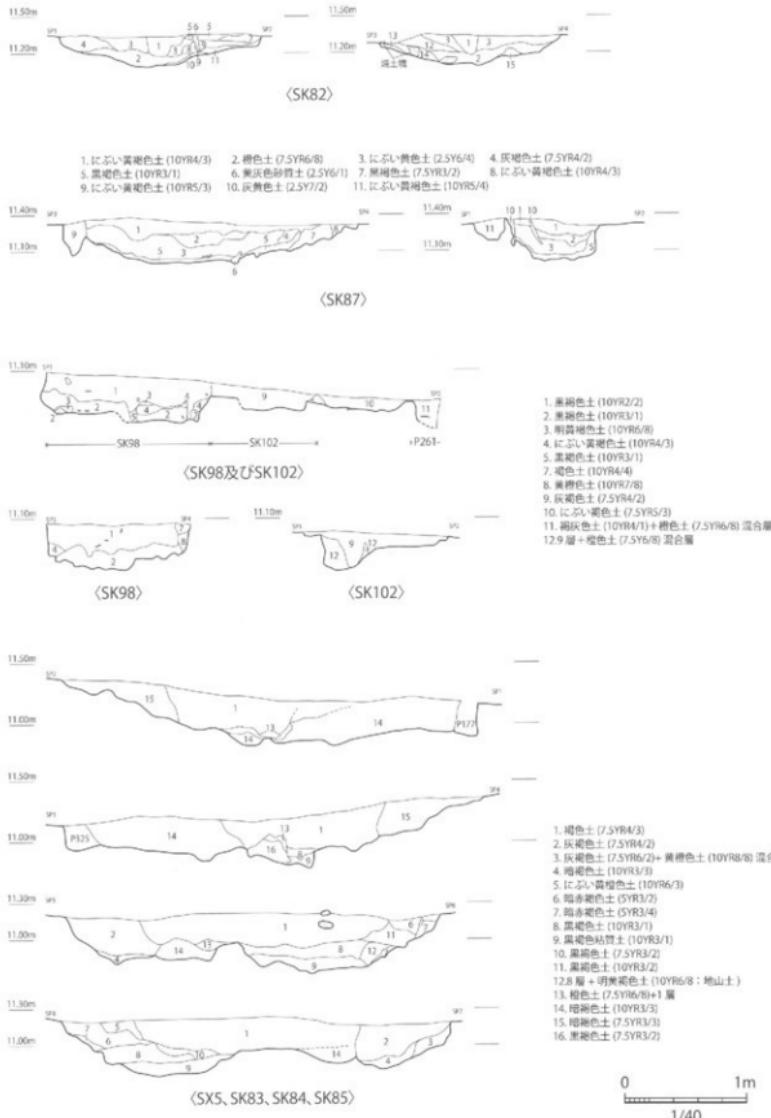
0 10cm

第4-16図 遺構出土遺物実測図-SK152- (S=1/3)

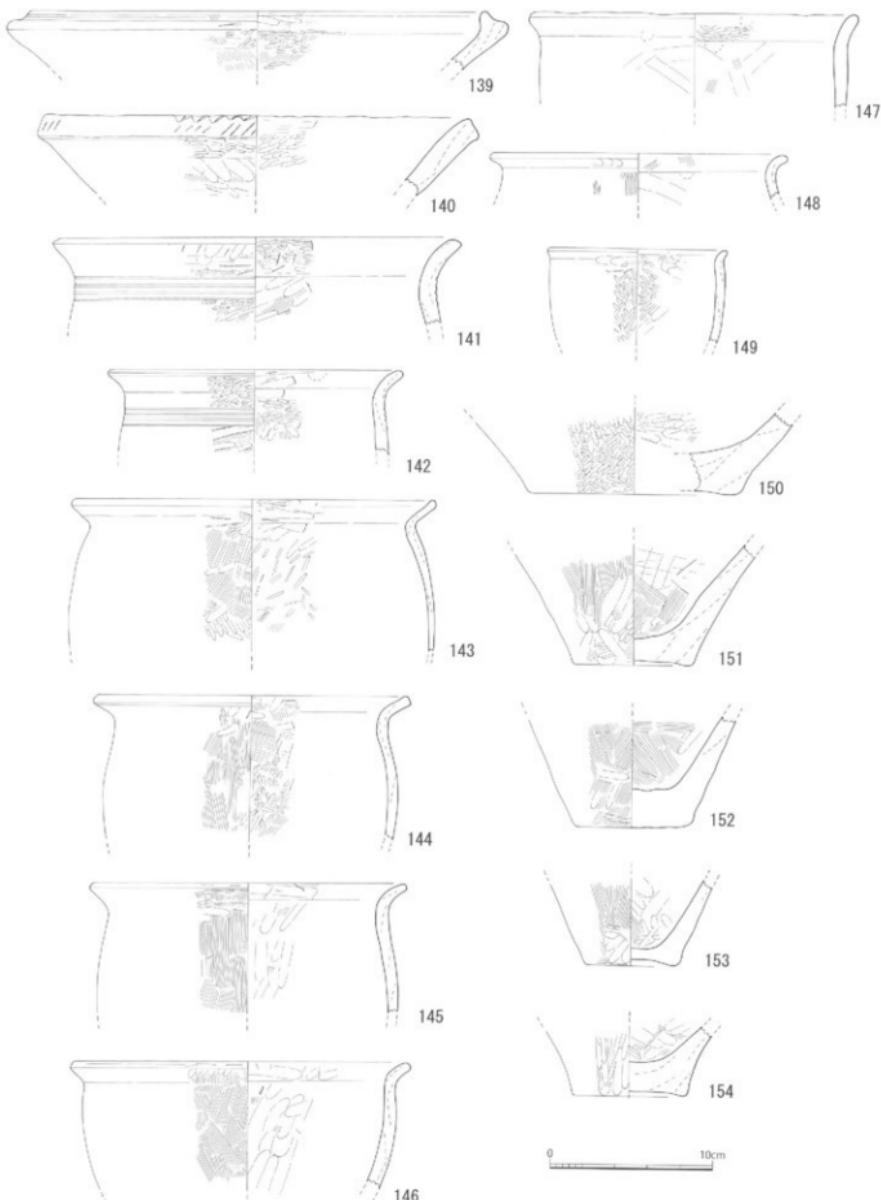


第4-17図 西部の遺構群平・断面図

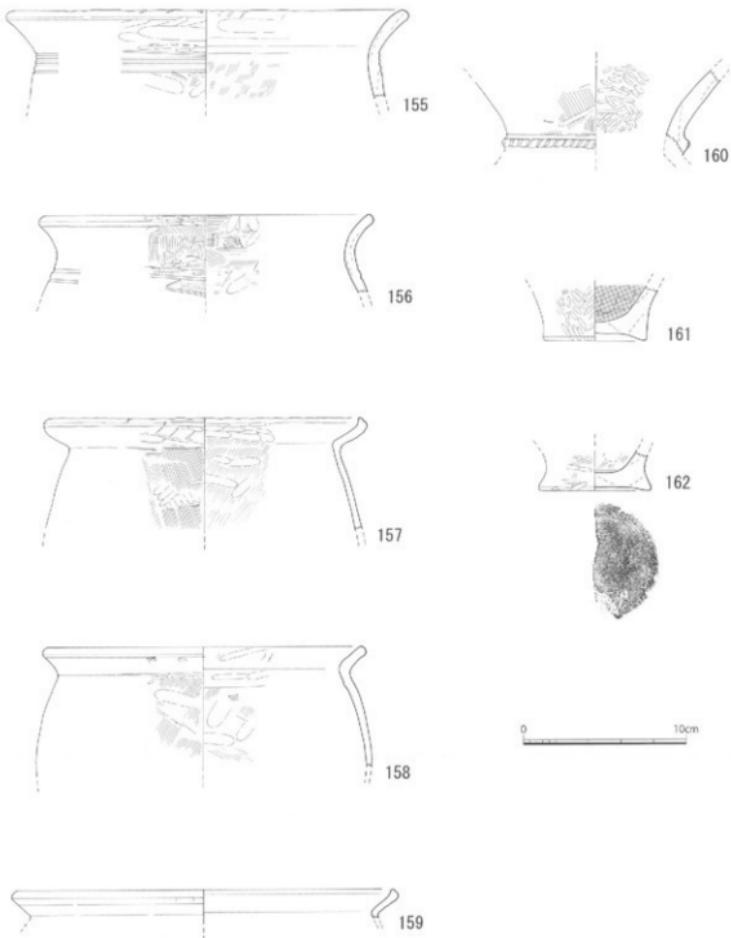
1. 鮎褐色土 (10YR3/4) 2. 鮎褐色土 (10YR4/3) 3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)+褐色土 (10YR4/6) 混合層 4. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
 5. 鮎褐色土 (10YR3/3)+にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 混合層 6. 塗灰黄褐色土 (2SY5/2) 7. 褐色土 (10YR4/6) 8. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
 9. 鮎褐色土 (10YR3/4)+褐色土 (10YR4/6) 混合層 10. 褐色土 (10YR4/4) 11. 褐色土 (10YR4/6) 12. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 13. 褐色土 (10YR4/6)
 14. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)+褐色土 (10YR4/6) 混合層 15. 黄褐色土 (10YR5/6)



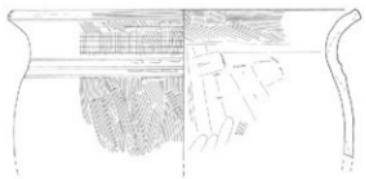
第4-18図 西部の遺構群断面図



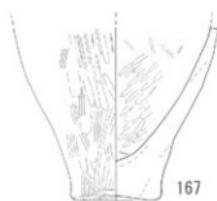
第4-19図 遺構出土遺物実測図-SX9- (S=1/3)



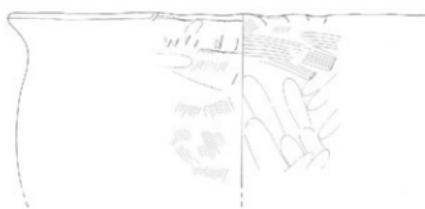
第4-20図 遺構出土遺物実測図-SK98- (S=1/3)



163



167



164



168



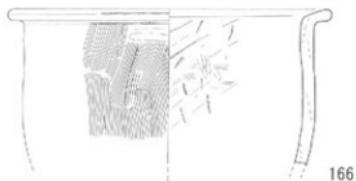
169



165



170



166



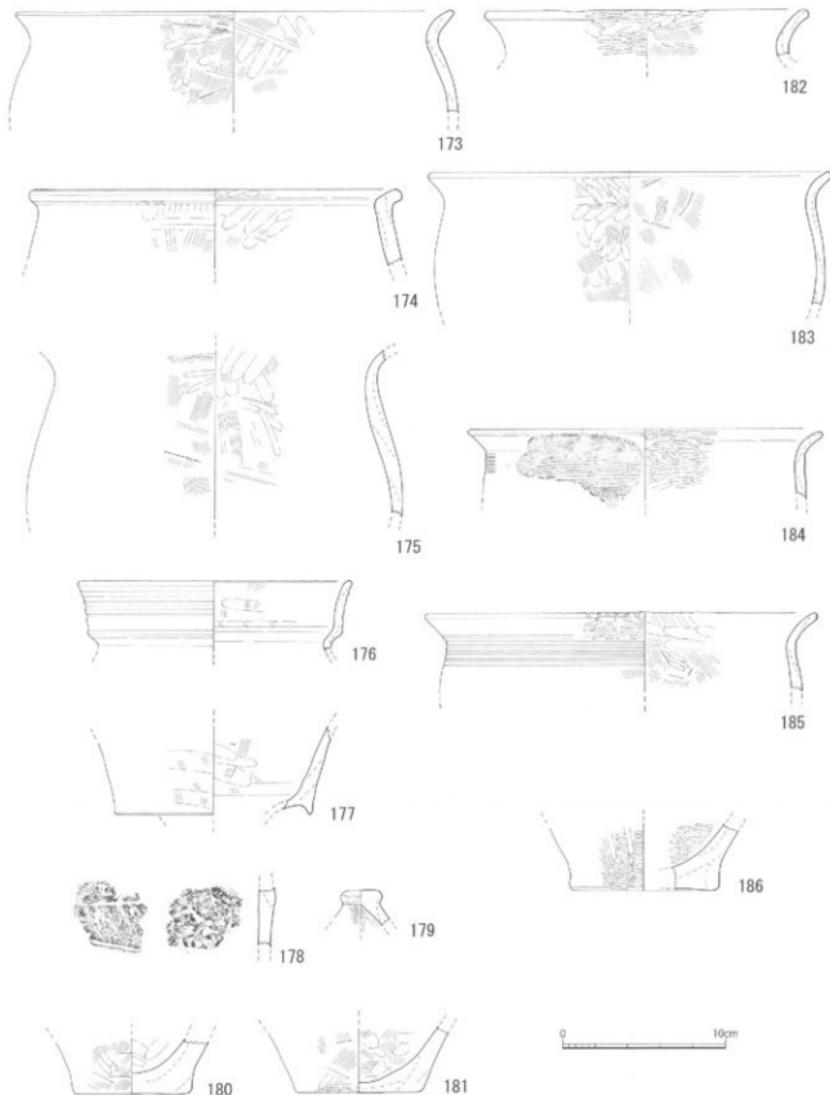
171

0 10cm

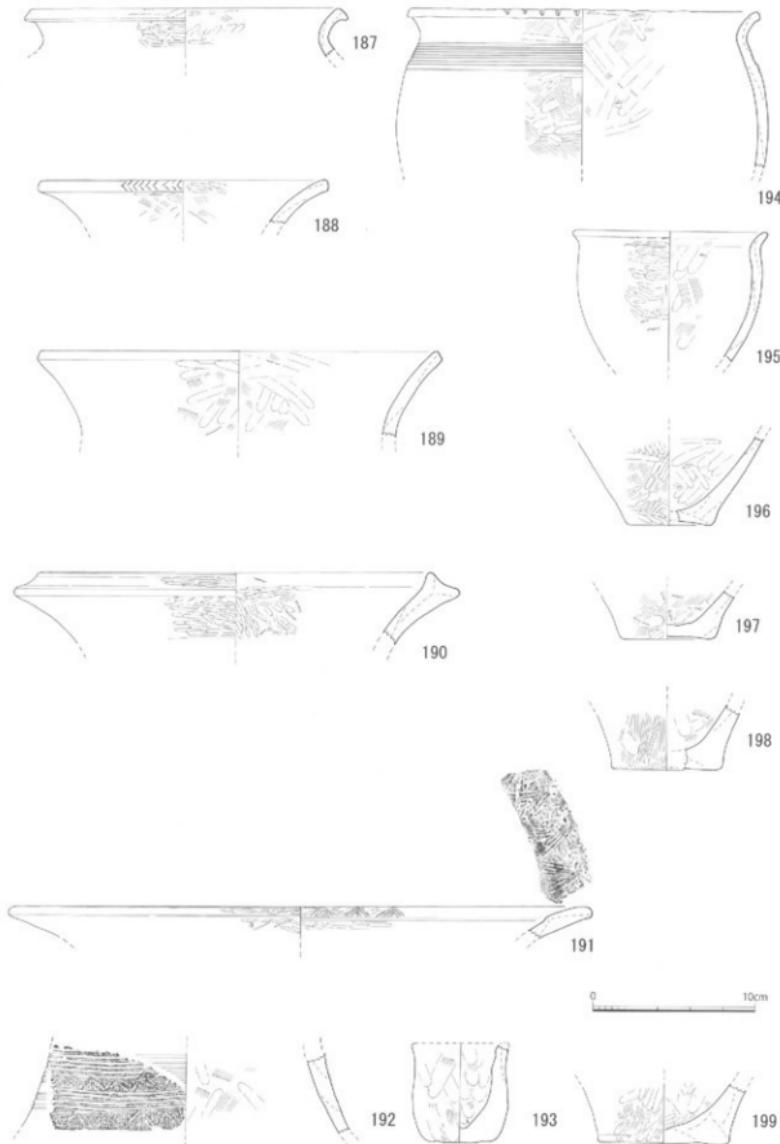


172

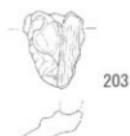
第4-21図 遺構出土遺物実測図-SK102- (S=1/3)



第4-22図 遺構出土遺物実測図-SK84・SK85- (S=1/3)

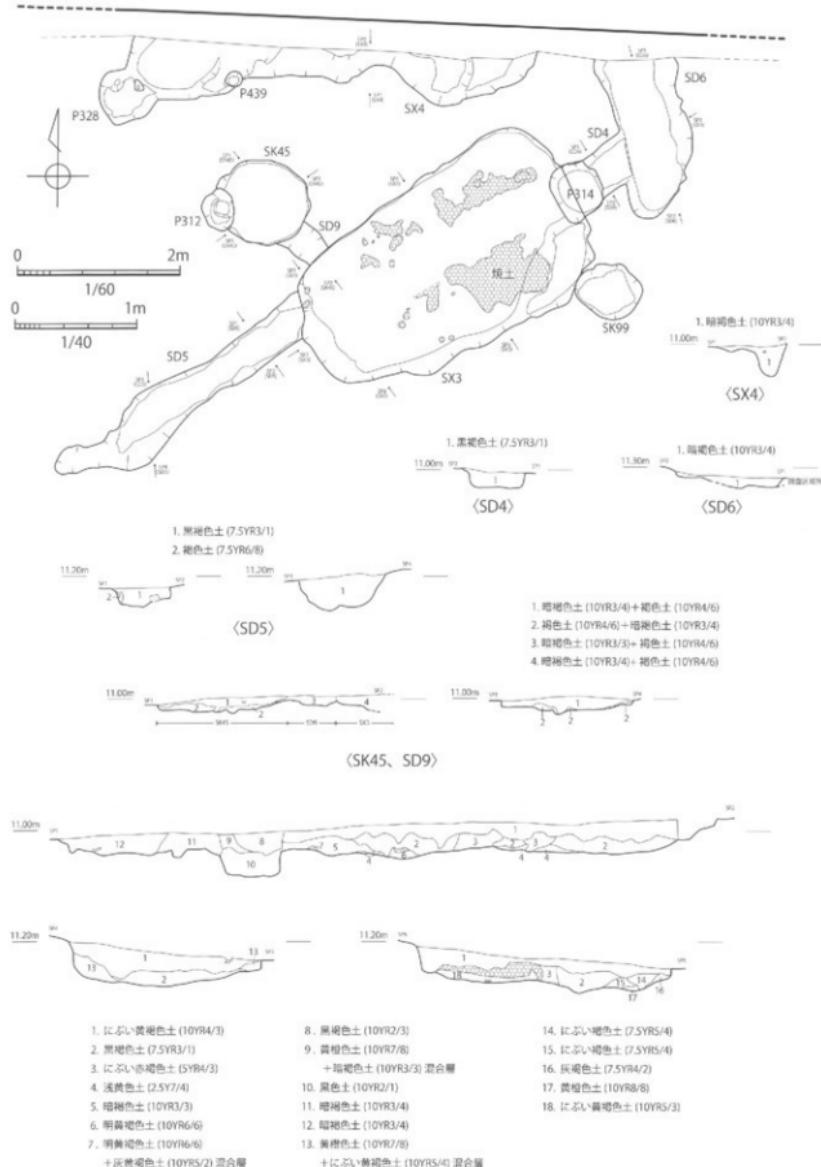


第4-23図 遺構出土遺物実測図-SK83- (S=1/3)

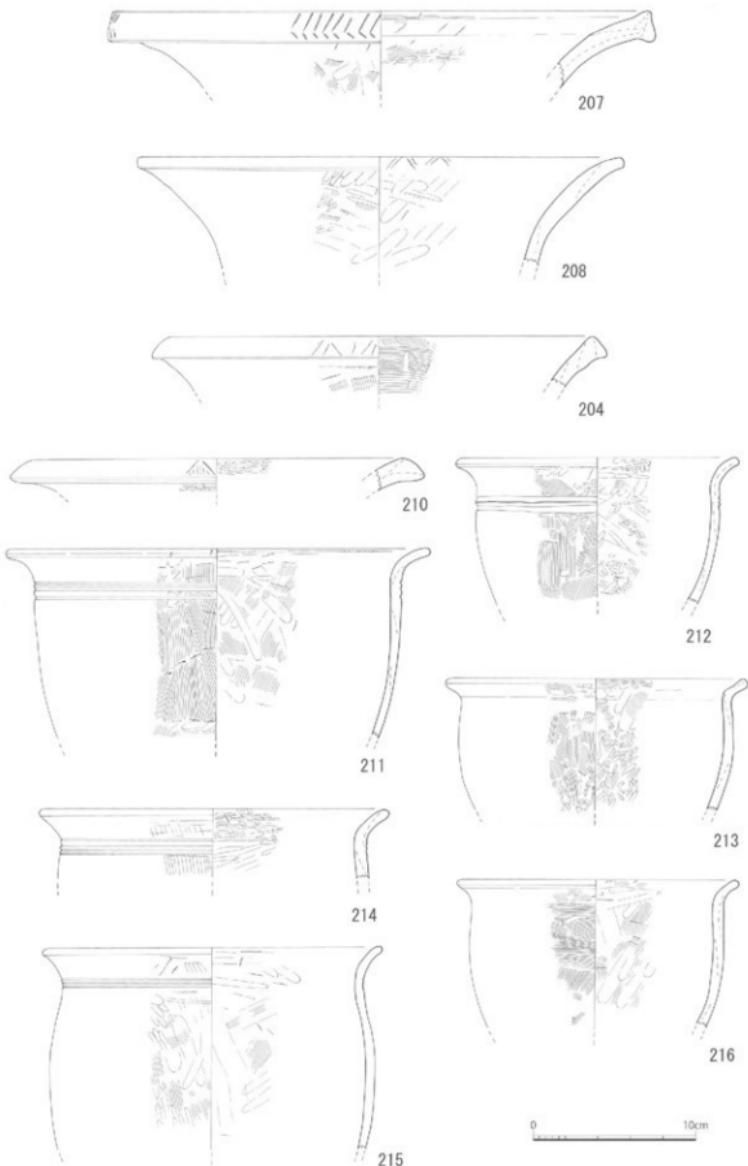


0 10cm

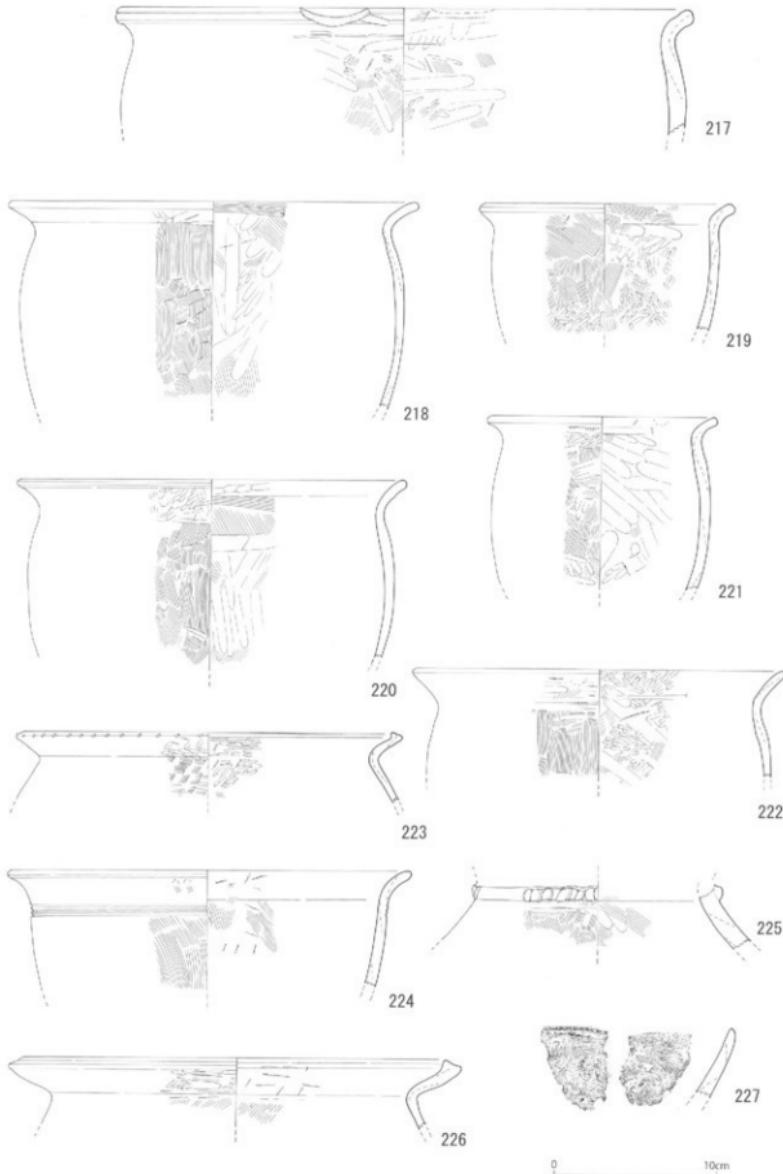
第4-24図 遺構出土遺物実測図-SK82・SK87- (S=1/3)



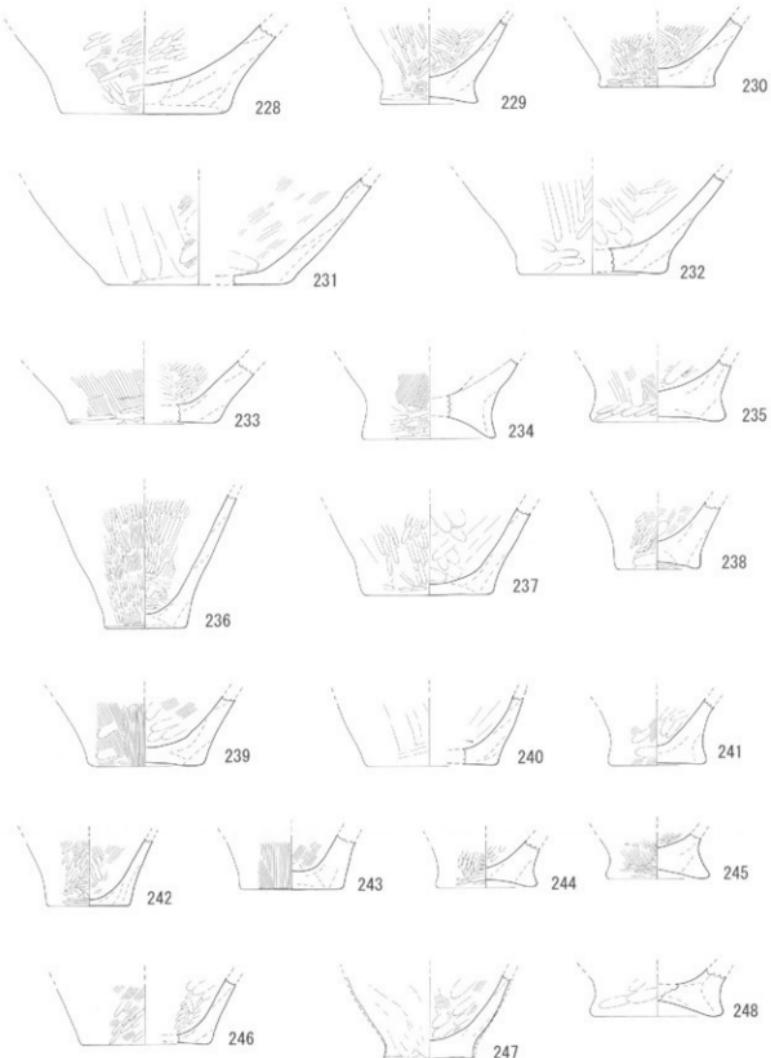
第4-25図 中央部北寄りの遺構群平・断面図



第4-26図 遺構出土遺物実測図-SX3①- (S=1/3)



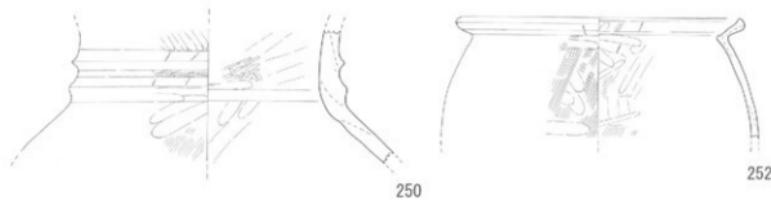
第4-27図 遺構出土遺物実測図-SX3(②)-(S=1/3)



第4-28図 遺構出土遺物実測図-SX3(③)-(S=1/3)



249



250

252

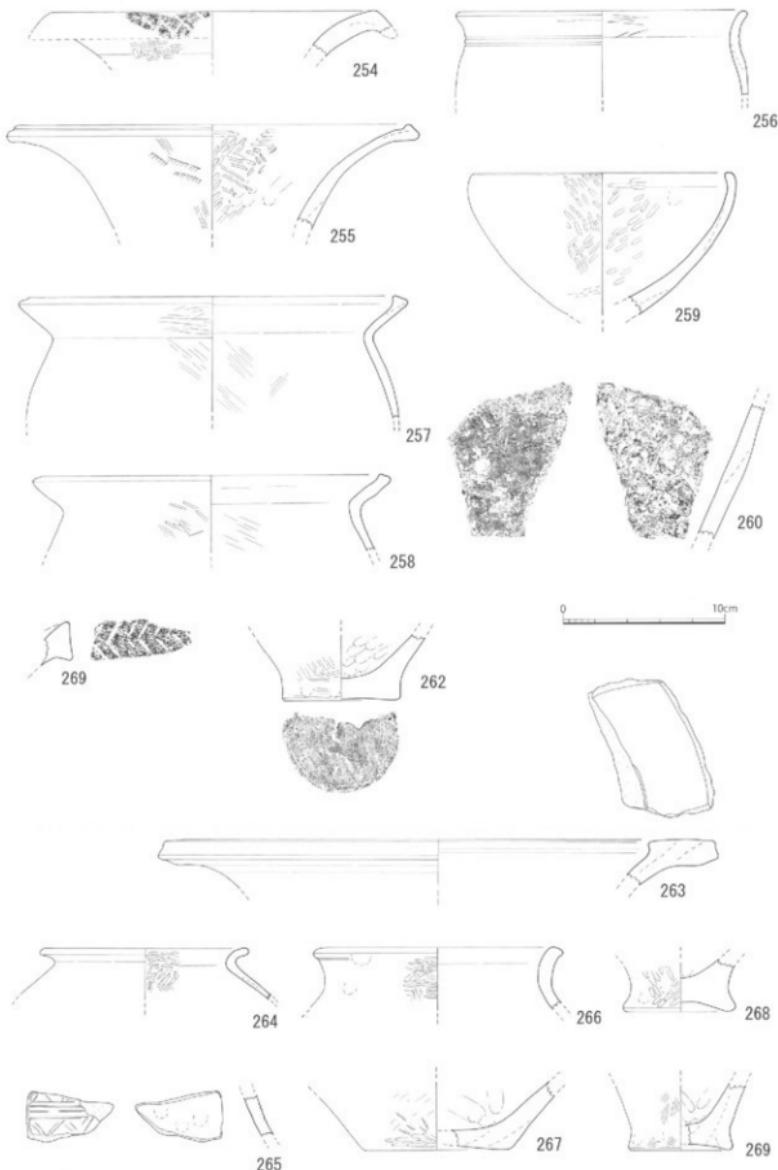


251

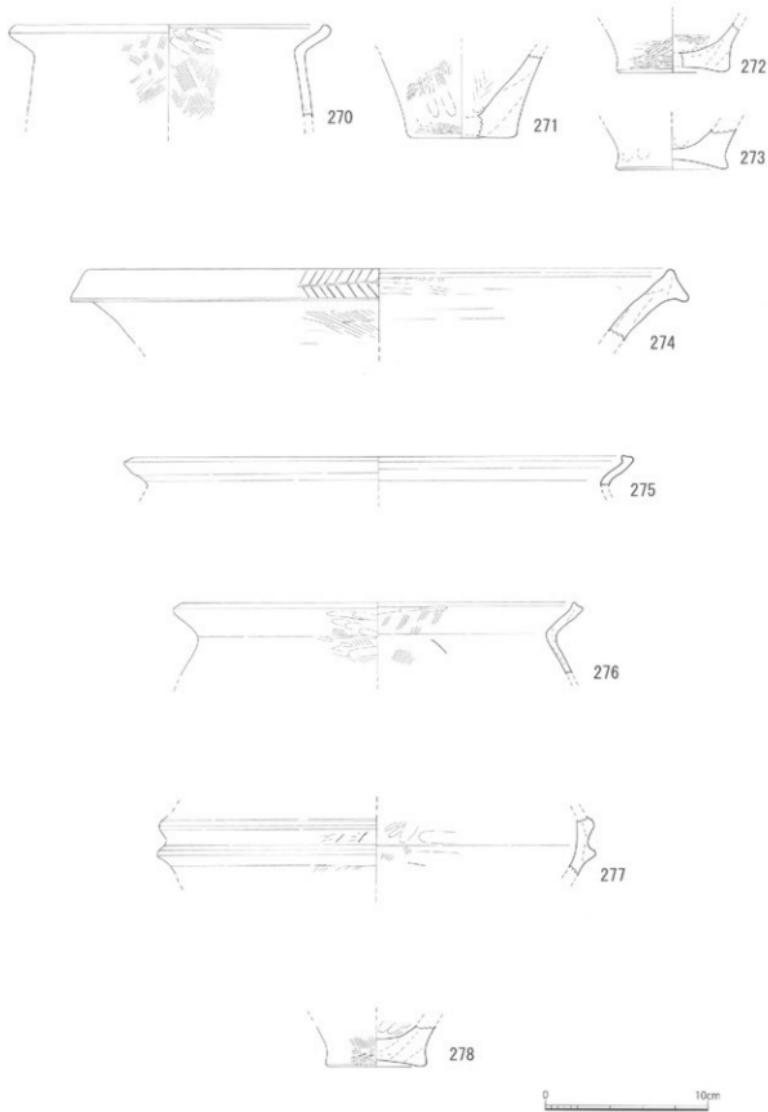
253

0 10cm

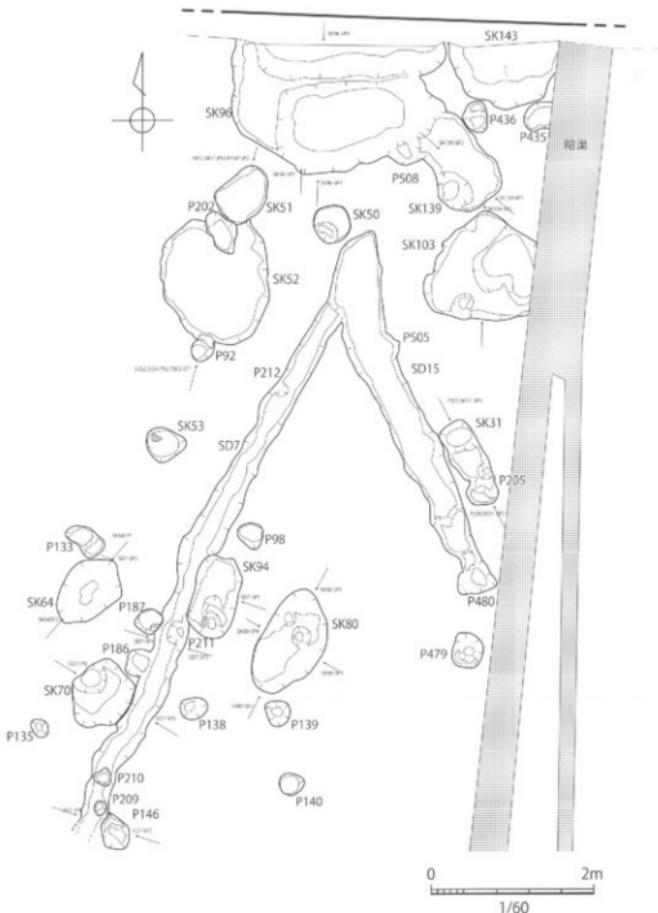
第4-29図 遺構出土遺物実測図-SX4- (S=1/3)



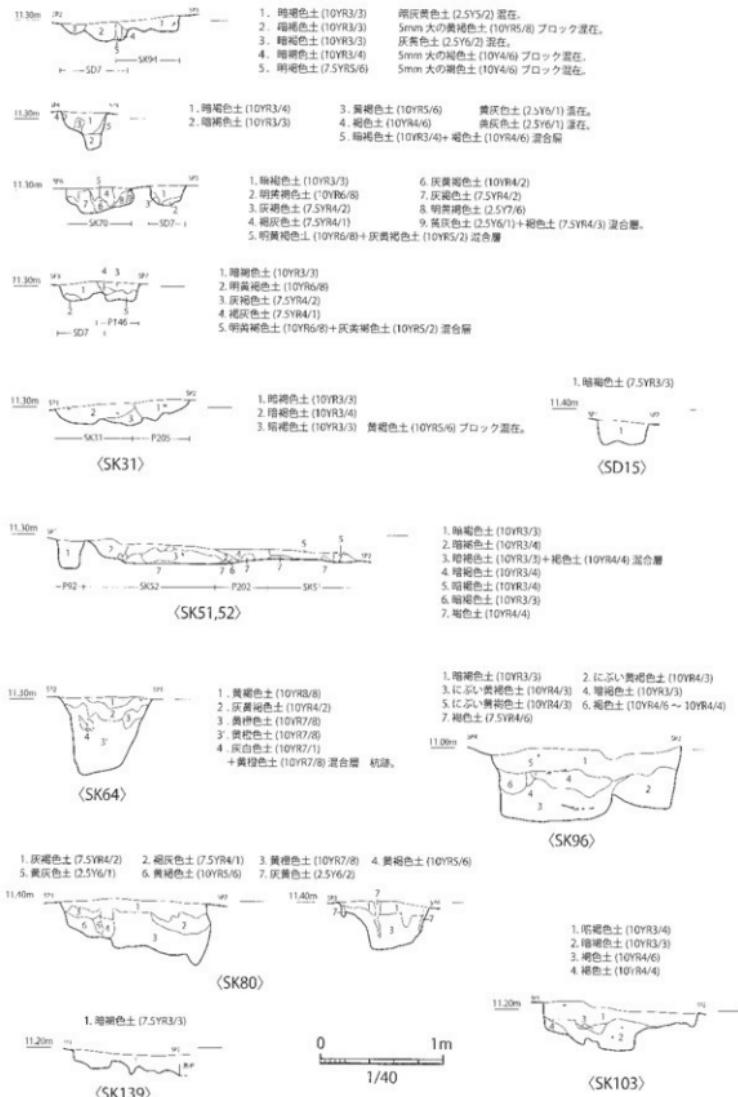
第4-30図 遺構出土遺物実測図 -SD4・SD5・SD6①- (S=1/3)



第4-31図 遺構出土遺物実測図 -SD6(2)・P314- (S=1/3)



第4-32図 中央部北東寄りの遺構群平面図



第4-33図 中央部北東寄りの遺構群断面図



279



284



280



285



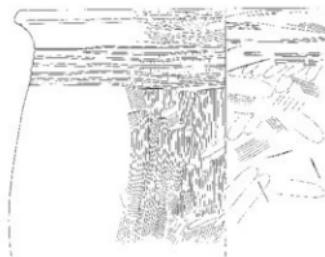
286



281



282



283



287



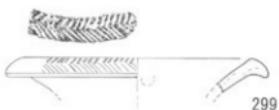
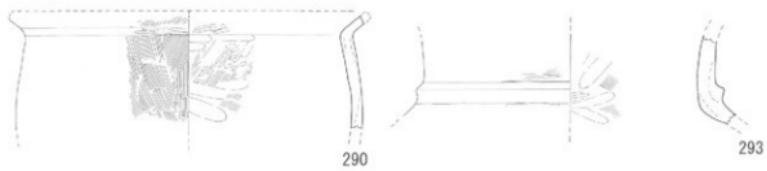
288



289

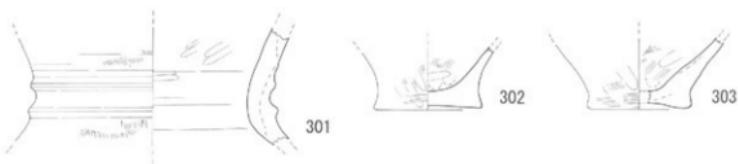
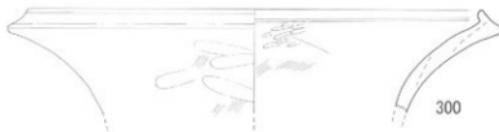
0 10cm

第4-34図 遺構出土遺物実測図-SK96- (S=1/3)



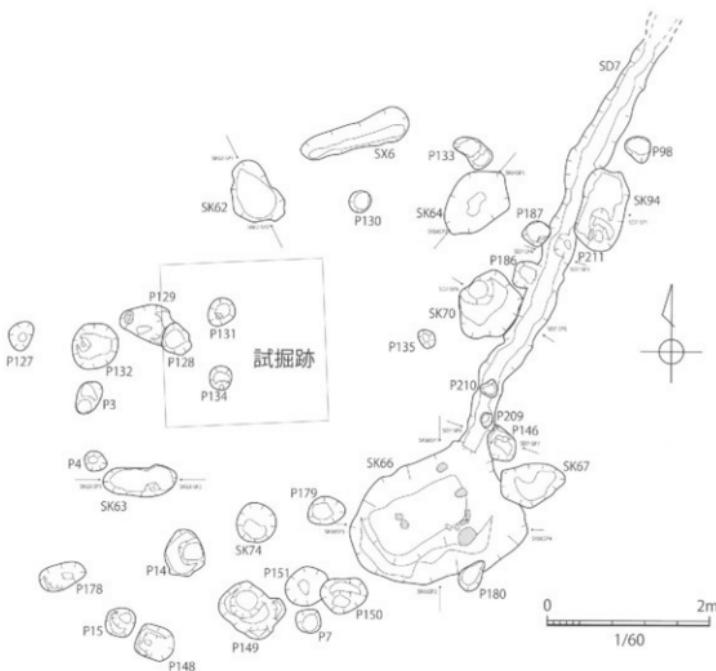
0 10cm

第4-35図 遺構出土遺物実測図-SK103・SK143・SD7- (S=1/3)



0 10cm

第4-36図 遺構出土遺物実測図-SK31・SK52・SD15- (S=1/3)



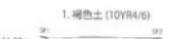
- 黑褐色土 (7SYR3/2)
 - 黑褐色土 (7SYR2/2)
 - 黑褐色土 (2.5Y3/2)
 - 黑色土 (SYR1.7/1)
 - 淤泥质腐土
 - 黑色土 (1/YR1.7/1)
 - 褐色土 (7.5YR4/3)
 - 黑褐色土 (2.5Y3/1)
 - 新斯氏黄色土 (10YR6/8)
 - 明黄色土 (10YR6/8) 黑褐色土 (2.5Y3/1) 混合层
 - 黑褐色土 (10YR3/2) 黄褐色土 (10YR7/8: 地山土) 混合层
 - 黑褐色土 (10YR7/8)
 - 明黄色土 (10YR6/8: 地山土) + 12 层混合层



(SK66)



(EV62)

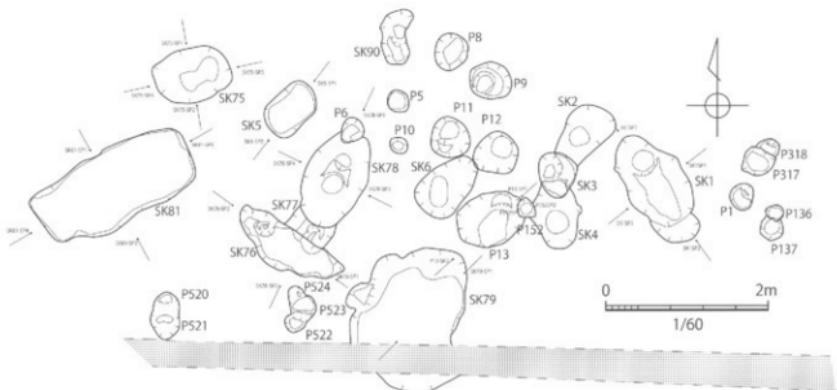


15K62



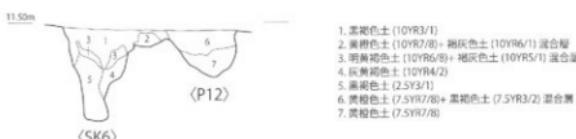
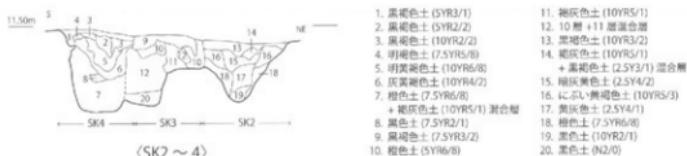
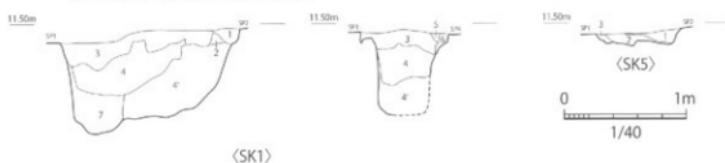
〈SK67〉

第4-37図 中央部～南部の遺構群平・断面図①

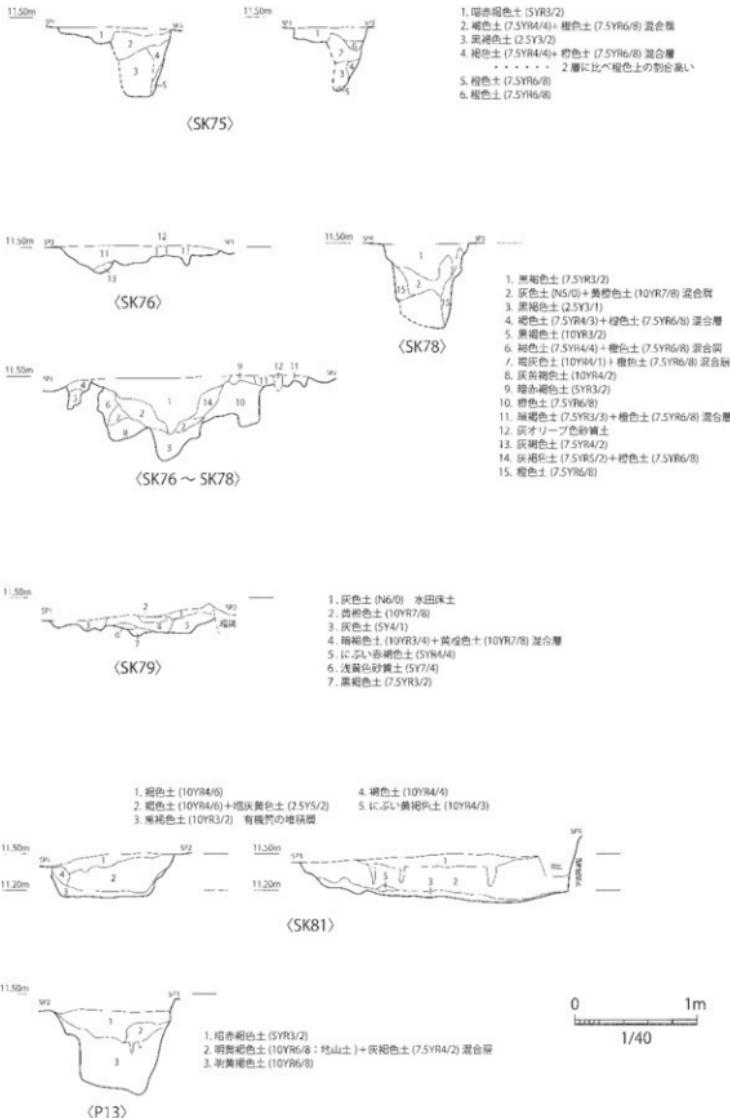


1. 淡黃褐色土 (10YR4/2) + 灰色土 (N6/0) 混合層
 2. 黃褐色土 (10YR7/8)
 3. 黑褐色土 (5YR2/1)
 4. 苦褐色土 (10YR7/8) + 墓灰土色 (10YR4/1) 混合層
 4'. 黑褐色土 (5YR2/1)
 5. 黃褐色土 (10YR7/8)
 6. 灰色土 (5Y6/1)
 7. 黑褐色土 (10YR3/1) + 黃褐色土 (10YR7/8) 混合層

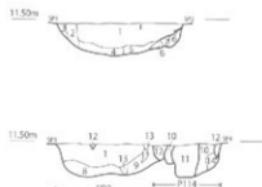
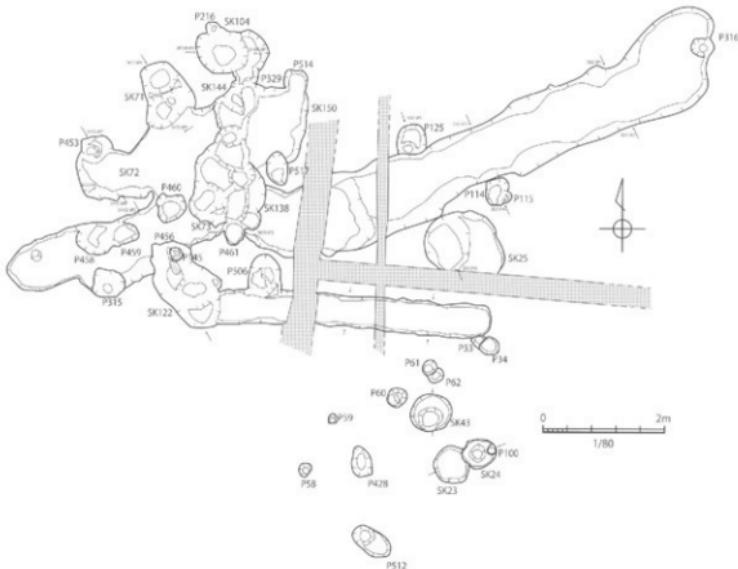
1. 暗褐色土 (7.5YR3/3)
 2. 稀色土 (7.5YR6/1)
 3. 黃褐色土 (2.5Y6/1)



第4-38図 中央部～南部の遺構群平・断面図②

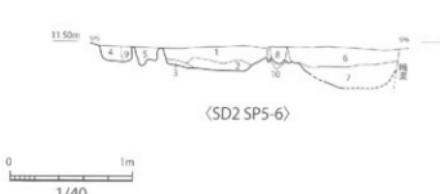


第4-39図 中央部～南部の遺構群断面図①



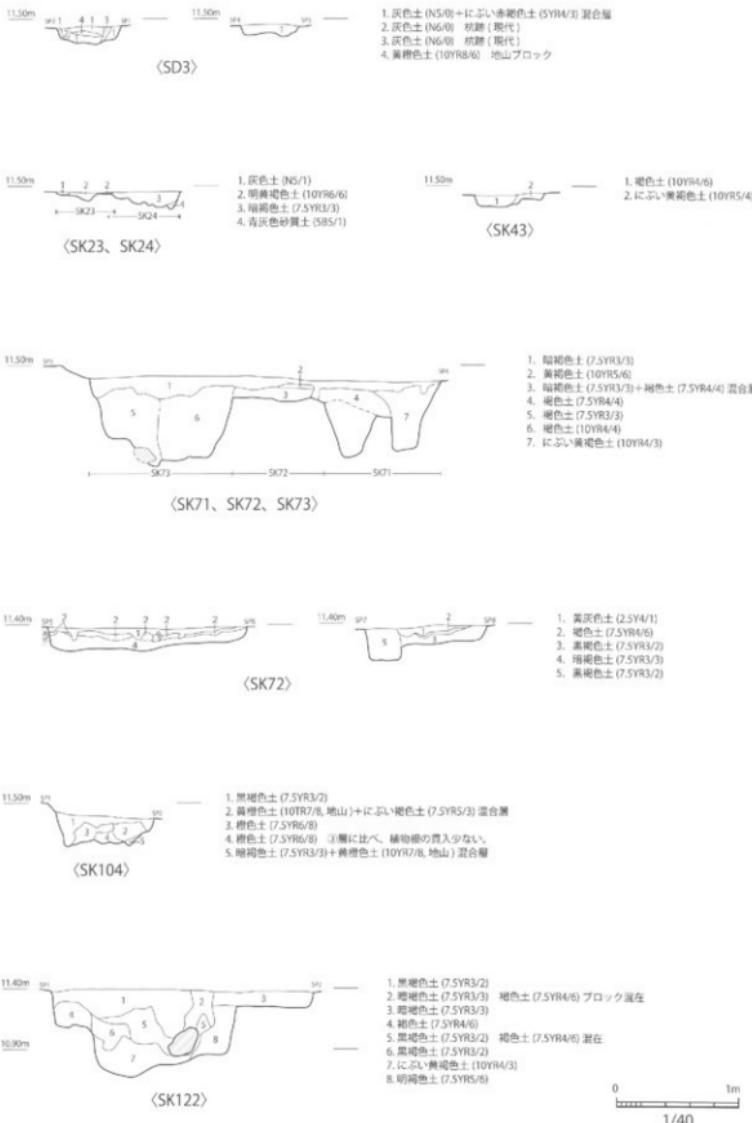
1. 褐色土 (10YR4/4)
2. 灰灰褐色土 (2.5Y4/2)
3. 灰灰褐色土 (2.5Y4/2)+黃褐色土 (10YR5/6) 混合層
4. 褐色土 (10YR4/4)
5. 黃褐色土 (2.5Y4/1)
6. 灰灰褐色土 (2.5Y4/2)+褐色土 (10YR4/6) 混合層
7. 灰褐色土 (10YR3/4)
8. 黃褐色土 (10YR5/6)
9. 褐色土 (10YR4/6)
10. 褐色土 (10YR4/6)+灰灰褐色土 (2.5Y5/2) 混合層
11. 褐色土 (10YR4/6)
12. 黄褐色土 (2.5Y6/2)
13. 灰灰褐色土 (2.5Y4/2)
14. 黄褐色土 (10YR5/6)

〈SD2 SP1-2、SP3-4〉



1. 褐色土 (10YR4/4)
2. 褐色土 (10YR4/6)
3. 灰灰褐色土 (2.5Y4/2) 褐色土 (10YR4/4) 若干混じる。
4. 灰灰褐色土 (2.5Y4/2)+褐色土 (10YR4/4) 混合層
5. 灰灰褐色土 (2.5Y5/2) 褐色土 (10YR4/6) 若干混じる。
6. 灰褐色土 (10YR3/4)
7. 黄褐色土 (10YR2/2)
8. 黄褐色土 (10YR4/6)
9. 黄褐色土 (2.5Y4/1) 拾跡
10. 黄褐色土 (2.5Y4/1) 褐色土 (10YR4/6) 若干混じる。

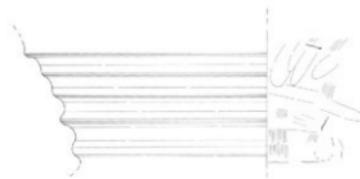
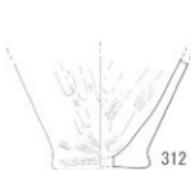
第4-40図 中央部～南部の遺構群平・断面図③



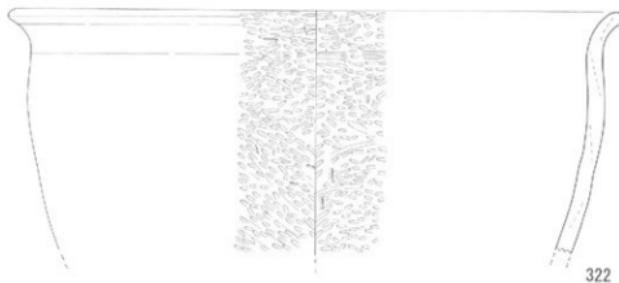
第4-41図 中央部～南部の遺構断面図②



0 10cm

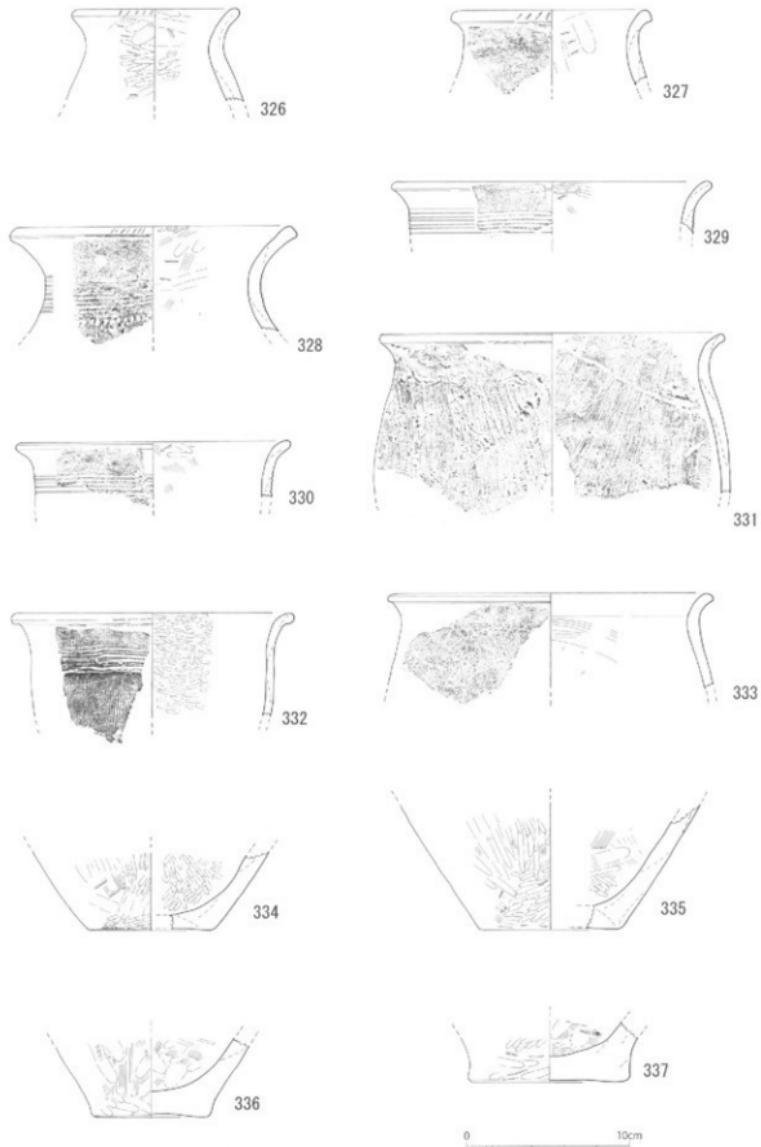


第4-42図 遺構出土遺物実測図 -SK1・SK2・SK3・SK66・SK75・SK77・SK78- (S=1/3)

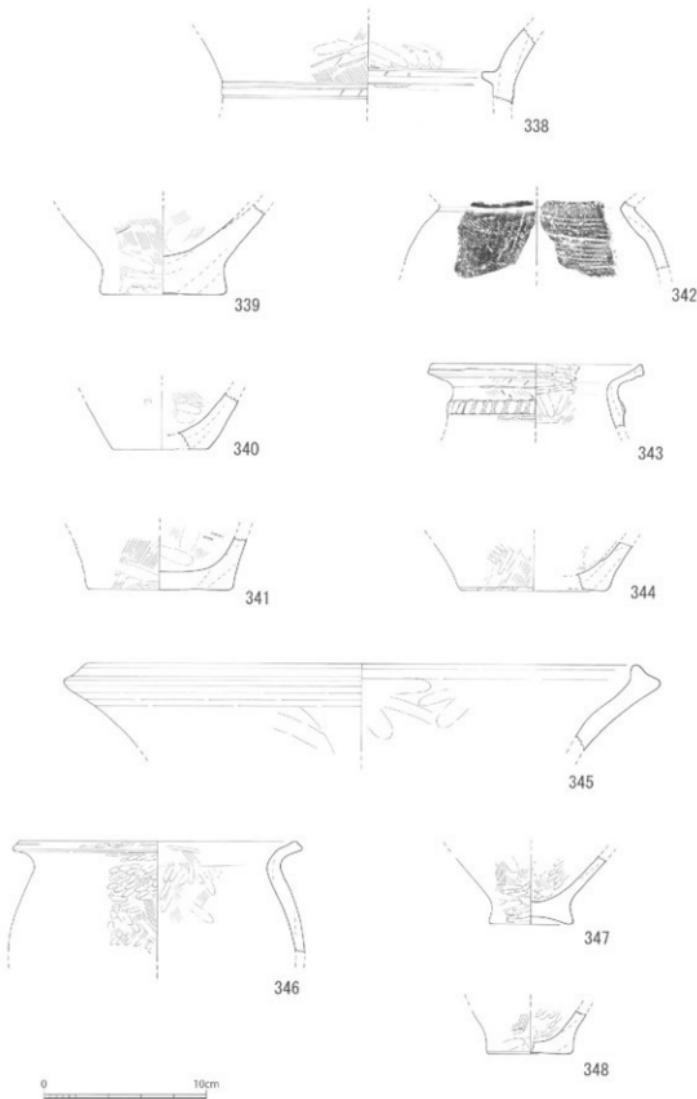


0 10cm

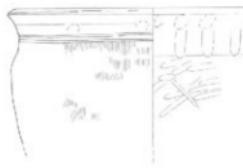
第4-43図 遺構出土遺物実測図-SK79・SK90- (S=1/3)



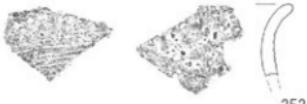
第4-44図 遺構出土遺物実測図-SK81- (S=1/3)



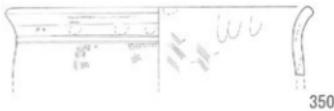
第4-45図 遺構出土遺物実測図 -SK71・SK72・SK73・SK104・SK122- (S=1/3)



349



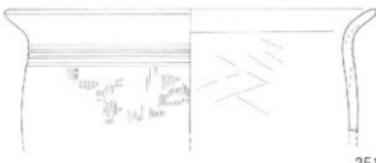
353



350



354



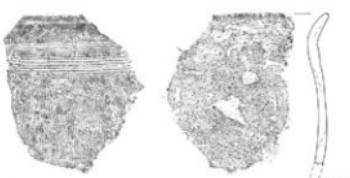
351



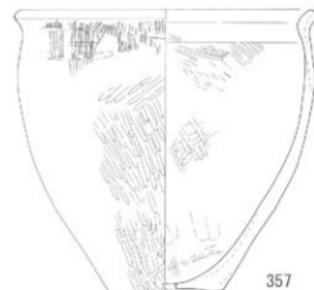
355



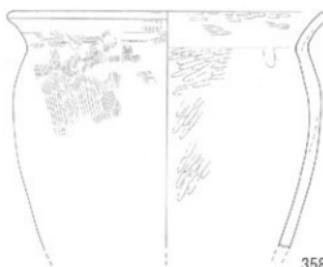
352



356



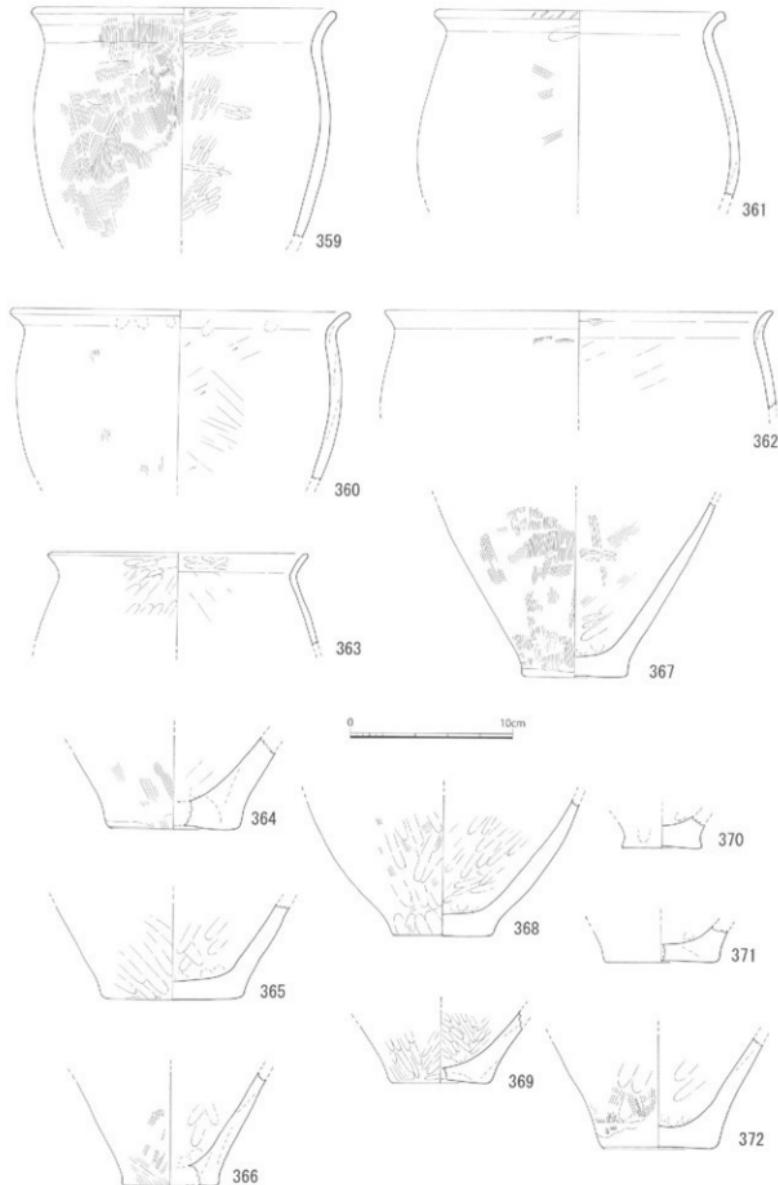
357



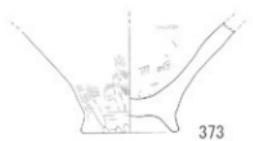
358



第4-46図 遺構出土遺物実測図 -SD2 ①- (S=1/3)



第4-47図 遺構出土遺物実測図-SD2②-(S=1/3)



373



375



376



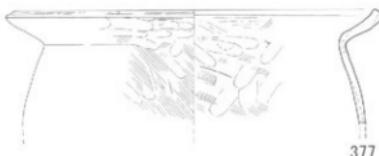
376



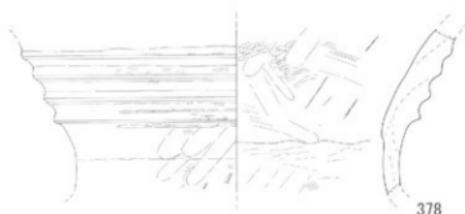
374



375



377



378



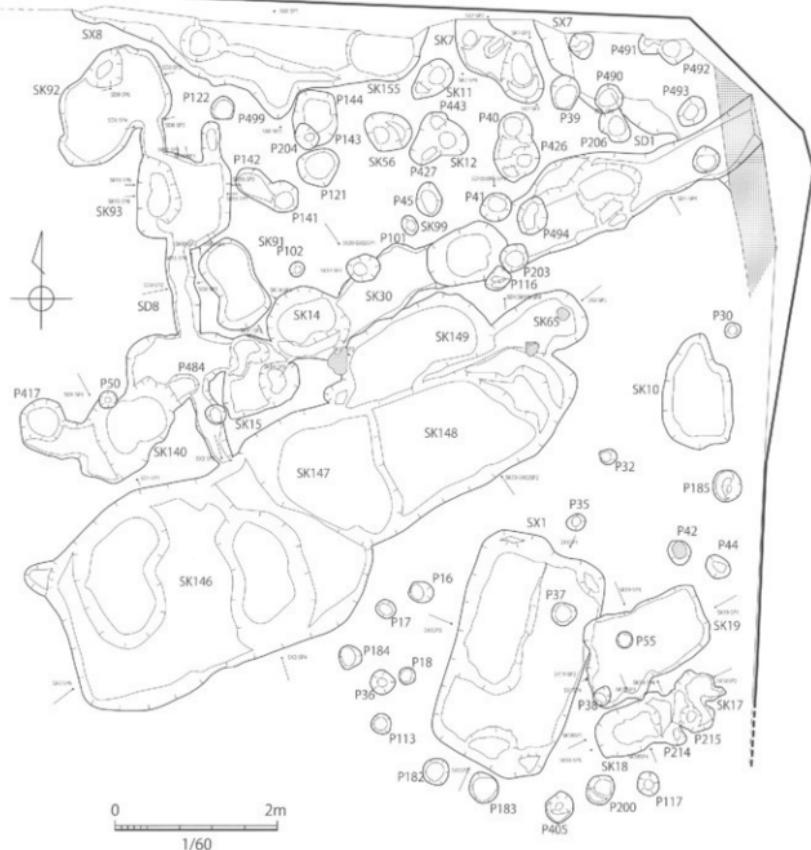
379



380

0 10cm

第4-48図 遺構出土遺物実測図 -SD2③・SD3・SK25- (S=1/3)



1. 褐色土 (10YR4/4) 2. 暗褐色土 (10YR3/4) 3. 褐色土 (10YR4/6)
6. 灰色土 (5Y5/1) 机跡 7. 黄褐色土 (10YR5/8)+灰黄色土 (2.5Y6/2) 混合層
4. 墓色土 (10YR4/6) 5. 黑褐色土 (10YR5/6)
8. 灰黄色土 (2.5Y7/2) 9. 黄褐色土 (10YR5/6)



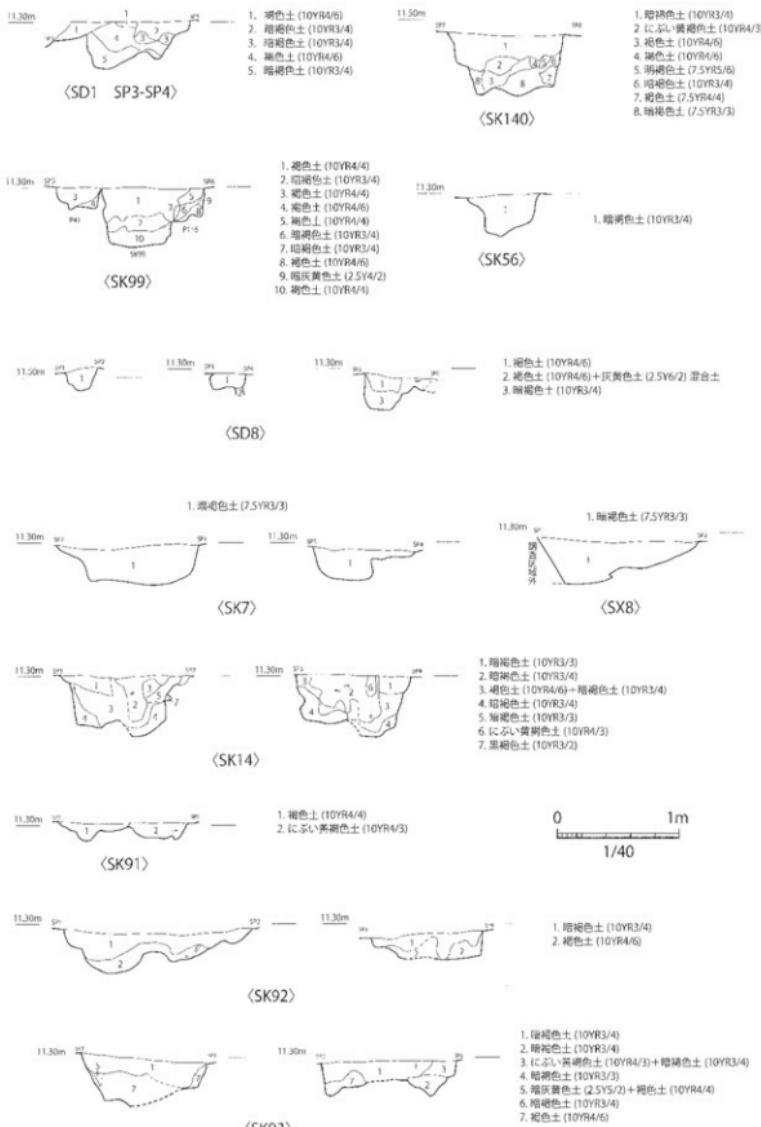
〈SX1〉

1. 灰褐色土 (7.5YR4/2) 2. 暗赤褐色土 (SYR3/2)
1. 褐色土 (10YR4/4) 2. 褐色土 (10YR4/4) 3. 暗褐色土 (10YR3/4)

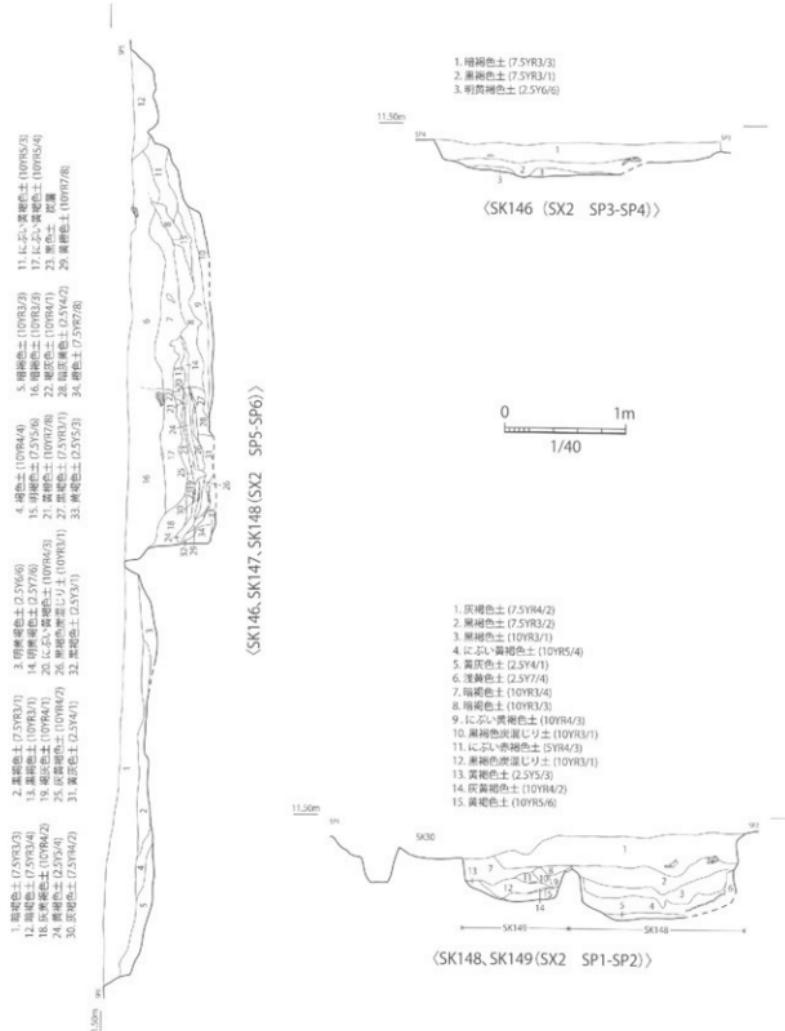


〈SK17、SK18〉

第4-49図 北東部の遺構群平・断面図①



第4-50図 北東部の遺構群断面図①



第4-51図 北東部の造構群断面図(2)



381



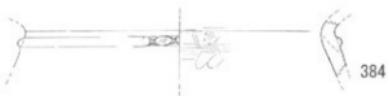
382



383



385



384



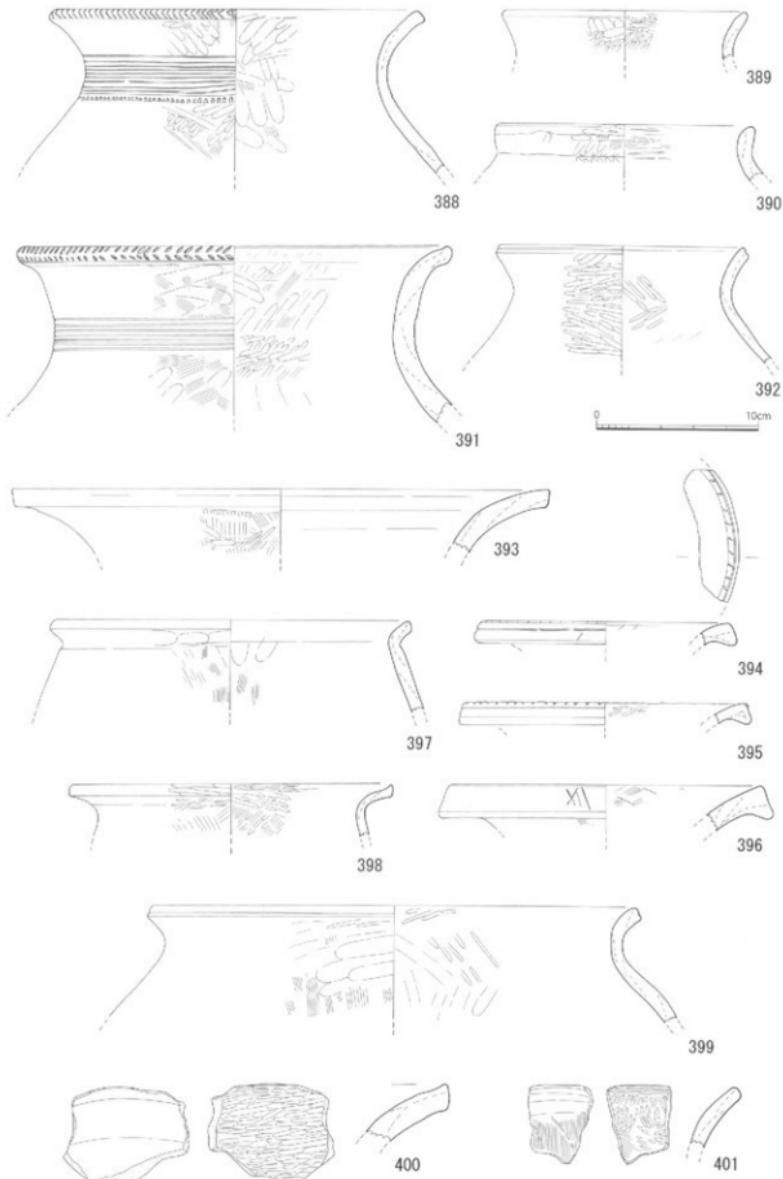
386



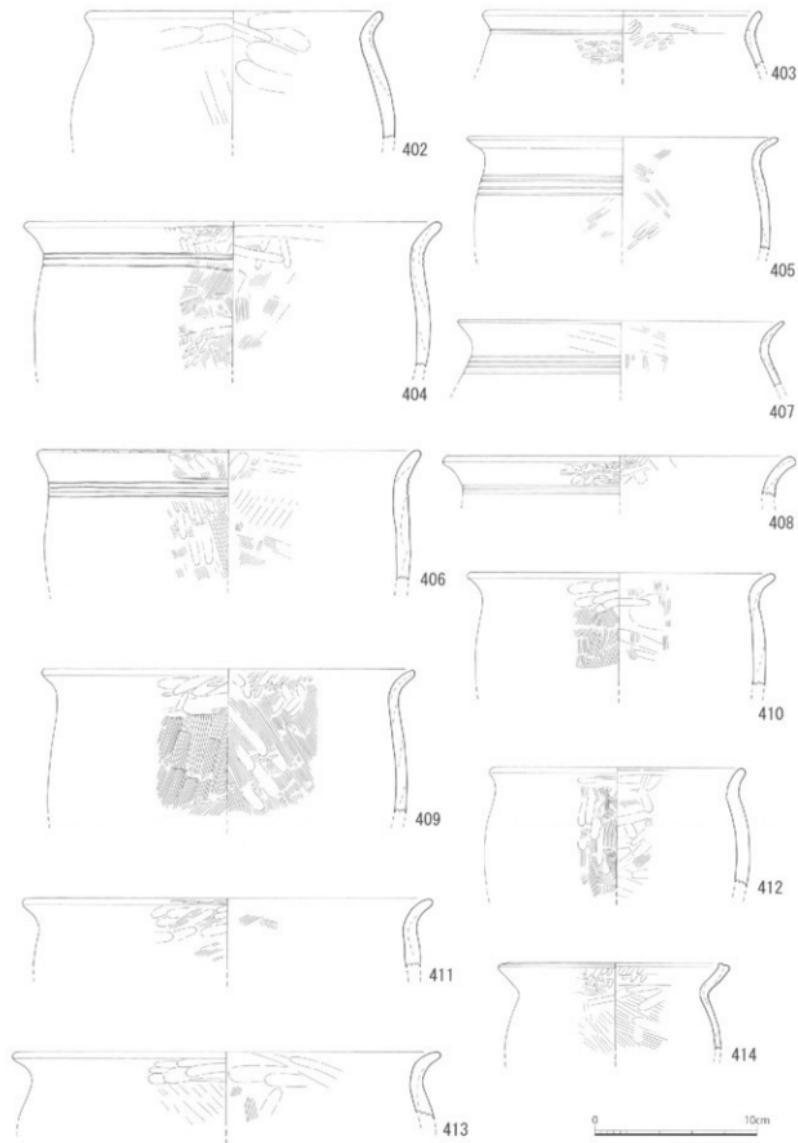
387

0 10cm

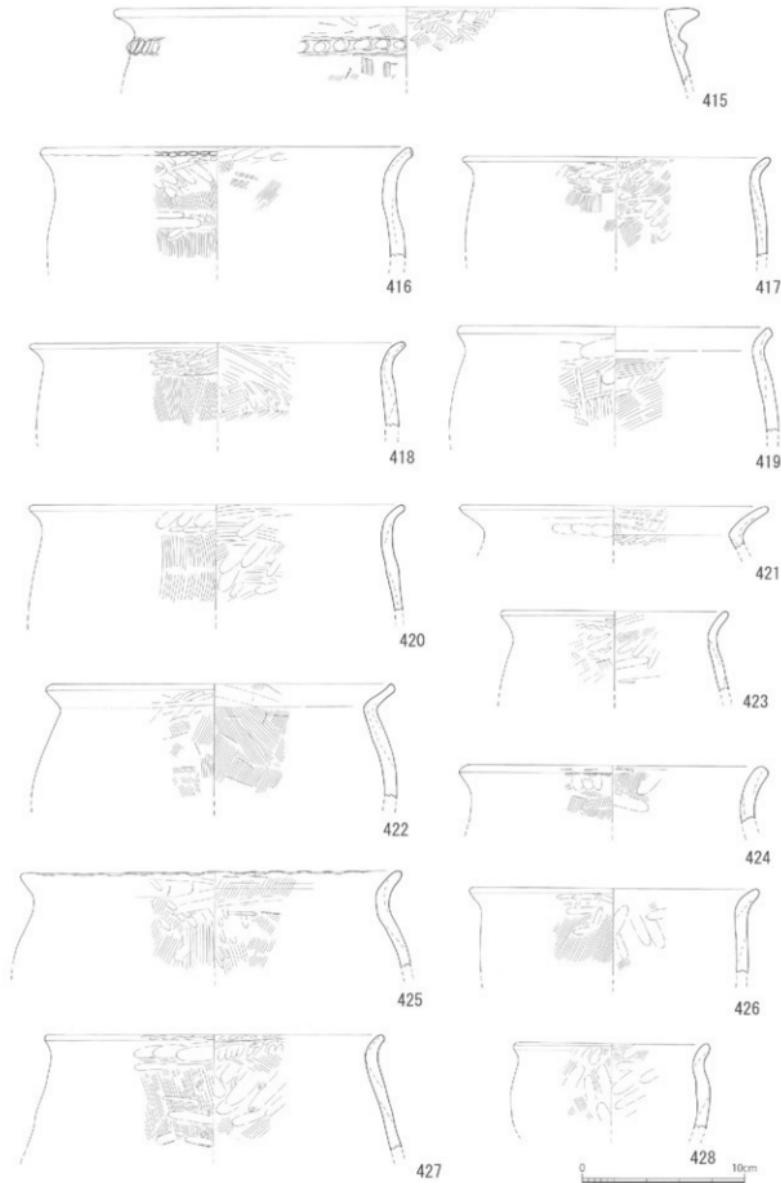
第4-52図 遺構出土遺物実測図-SX7・SX8・SK11- (S=1/3)



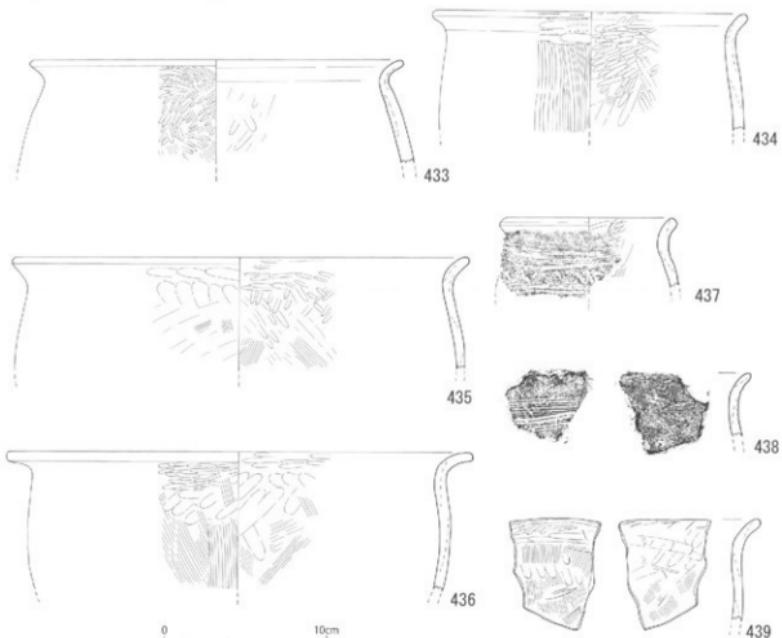
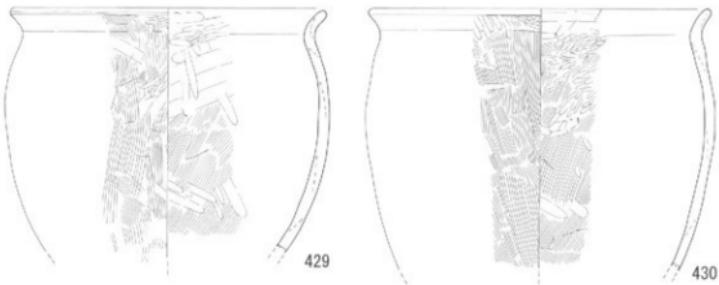
第4-53図 遺構出土遺物実測図-SK146①-(S=1/3)



第4-54図 遺構出土遺物実測図-SK146②-(S=1/3)



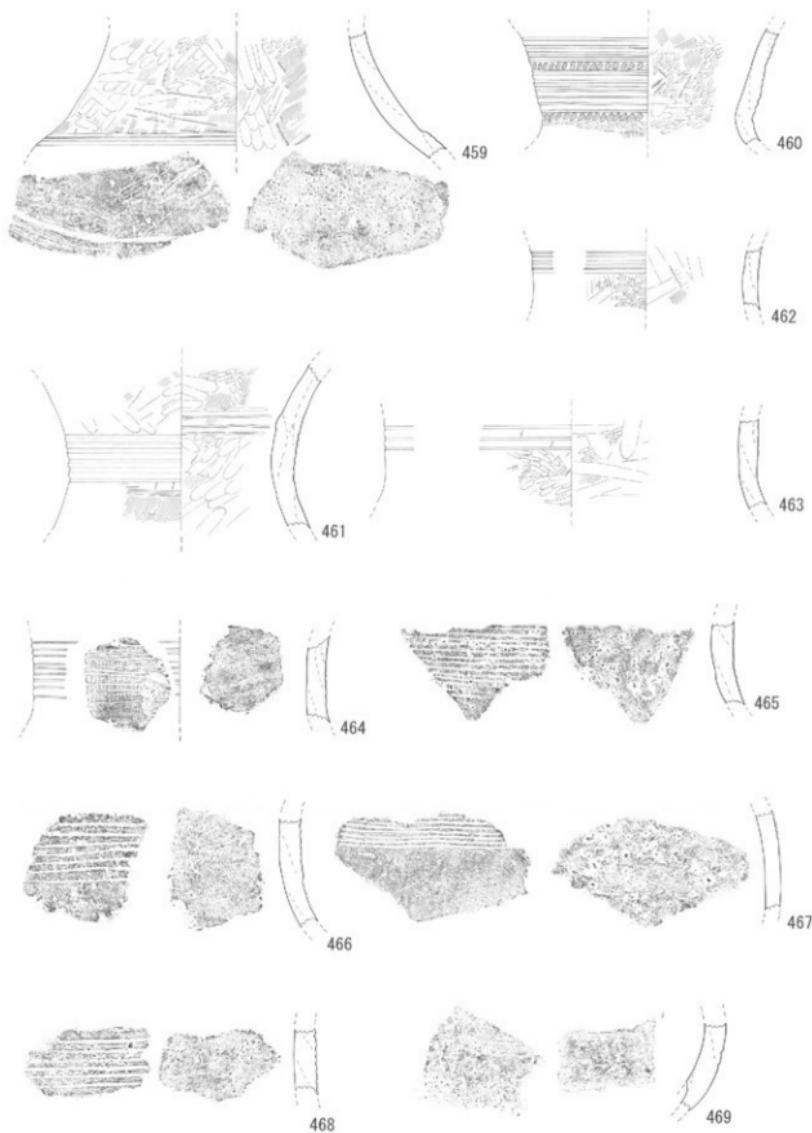
第4-55図 遺構出土遺物実測図-SK146(③)-(S=1/3)



第 4-56 図 遺構出土遺物実測図 -SK146 ④ - (S=1/3)

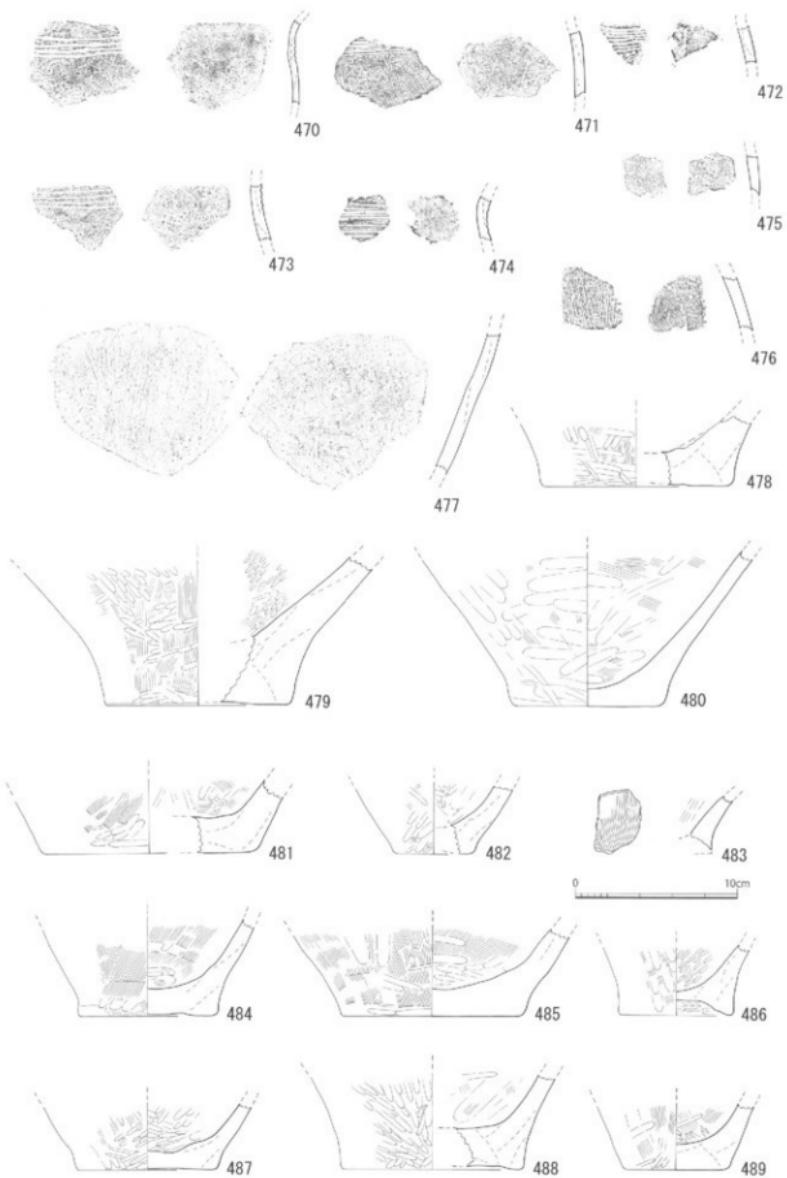


第4-57図 遺構出土遺物実測図-SK146(⑤)-(S=1/3)

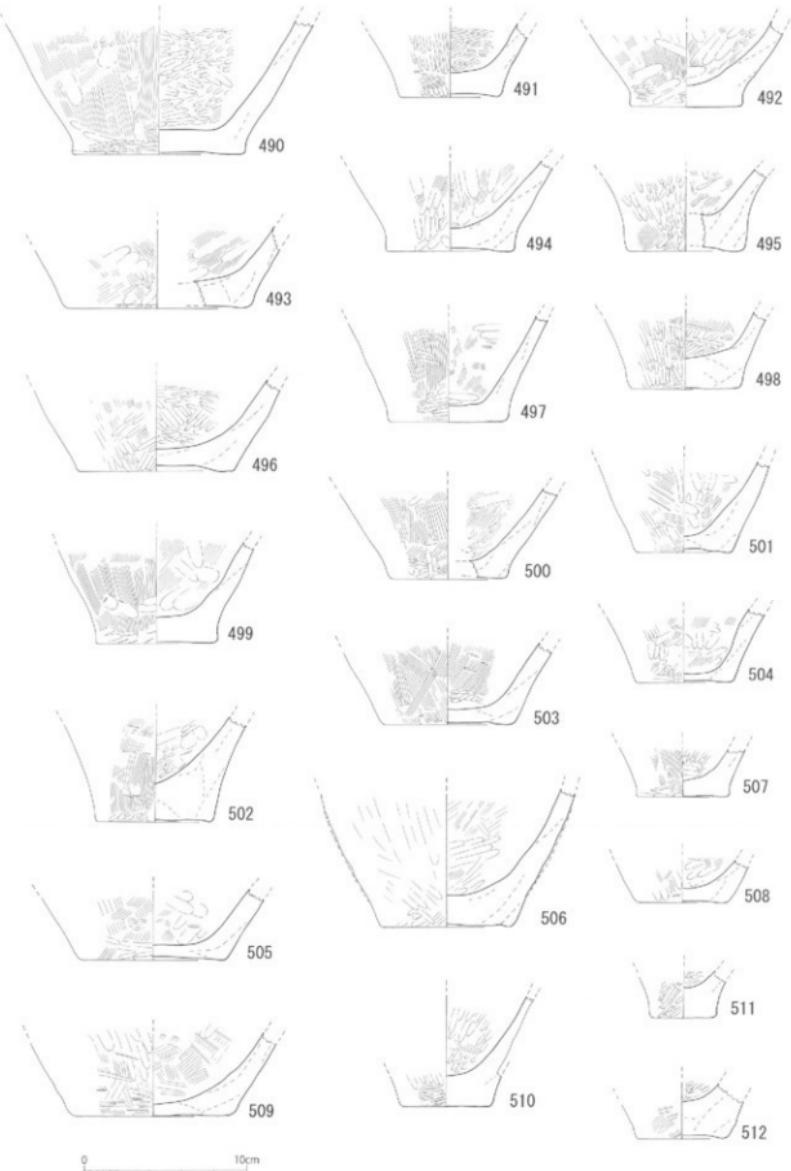


第4-58図 遺構出土遺物実測図-SK146⑥-(S=1/3)

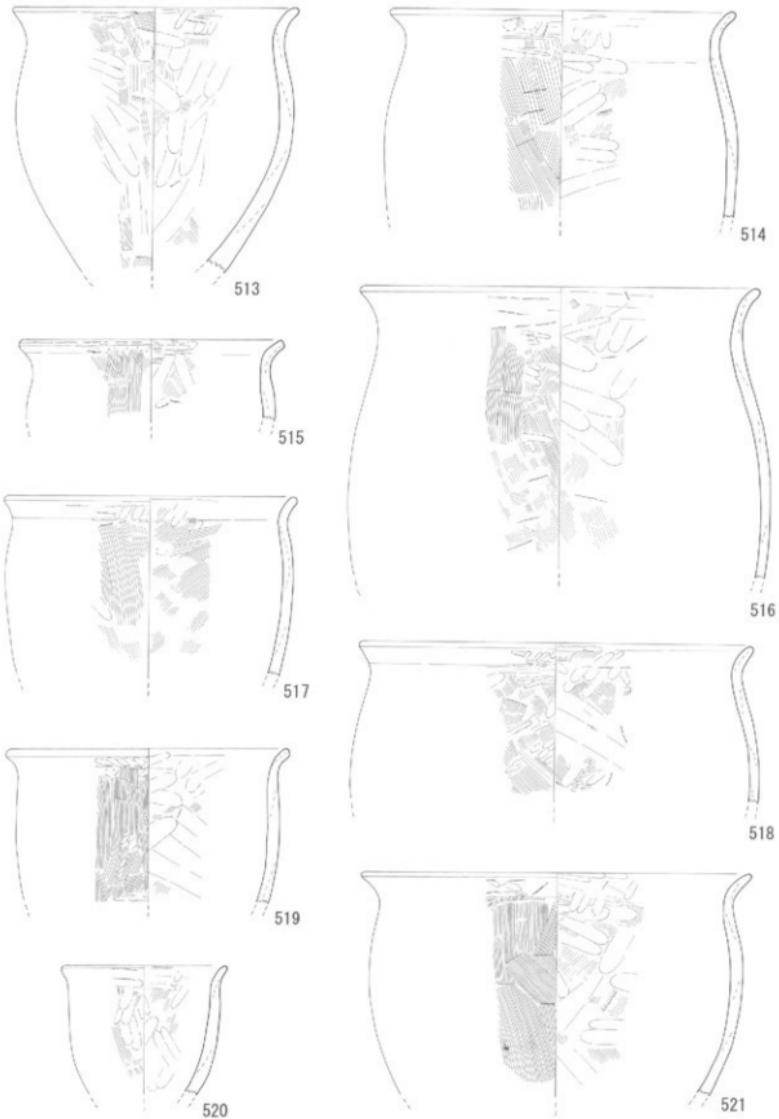
0 10cm



第4-59図 遺構出土遺物実測図-SK146⑦-(S=1/3)



第4-60図 遺構出土遺物実測図-SK146(8)- (S=1/3)



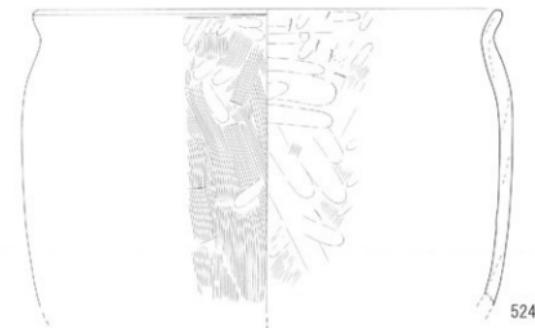
第4-61図 遺構出土遺物実測図-SK147①-(S=1/3)



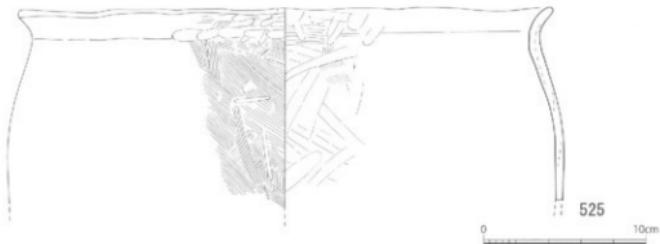
522



523

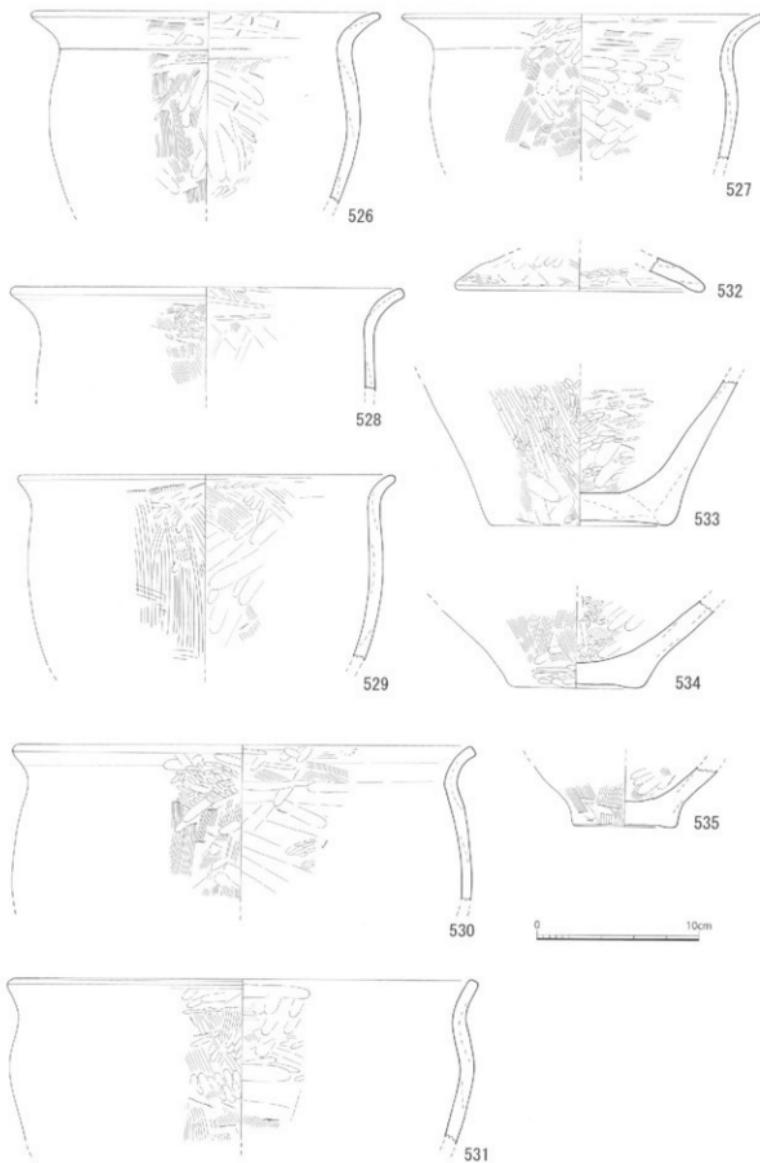


524

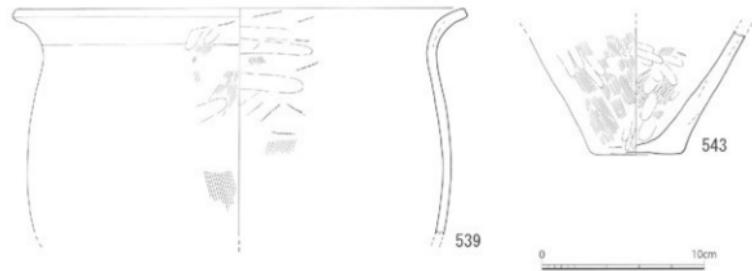
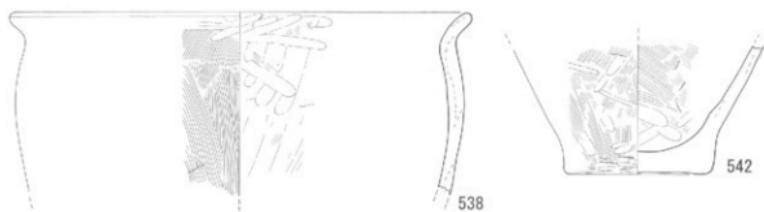
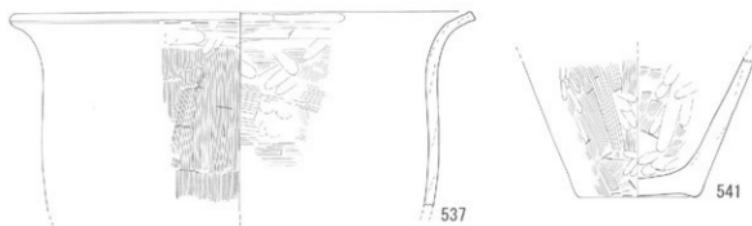
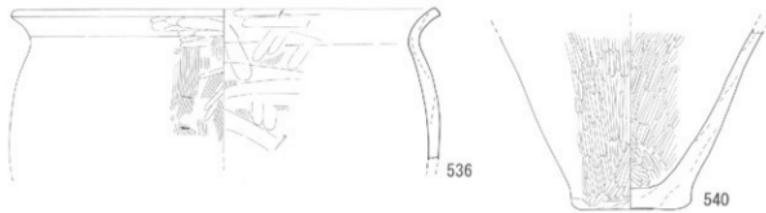


0 10cm

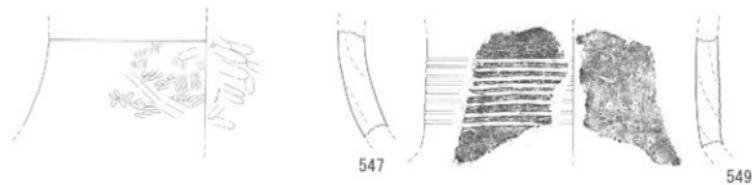
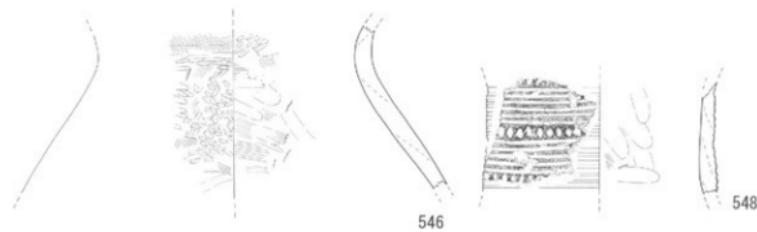
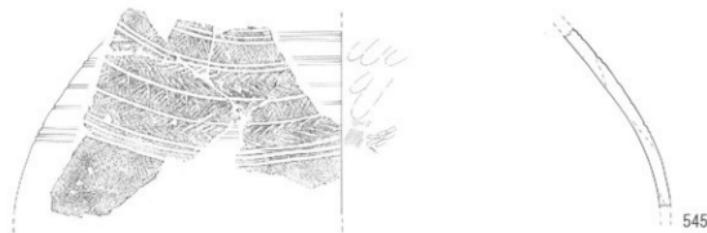
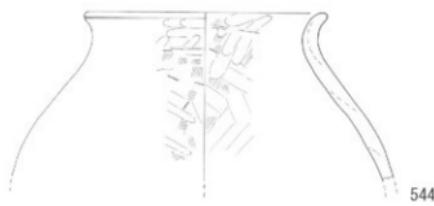
第4-62図 遺構出土遺物実測図-SK147(2)- (S=1/3)



第4-63図 遺構出土遺物実測図-SK147③-(S=1/3)

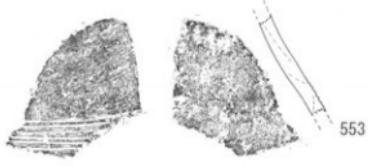
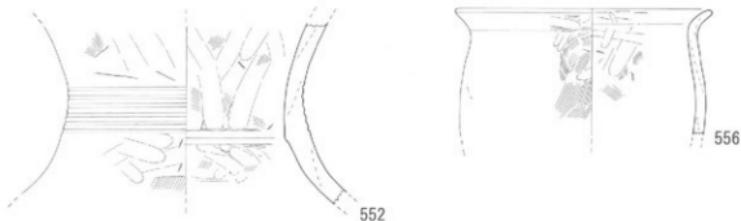
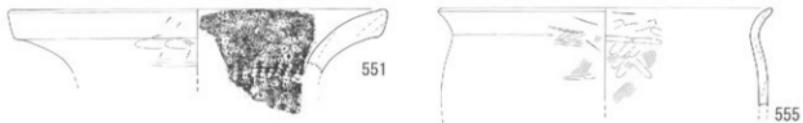


第4-64図 遺構出土遺物実測図-SK147(④)-(S=1/3)



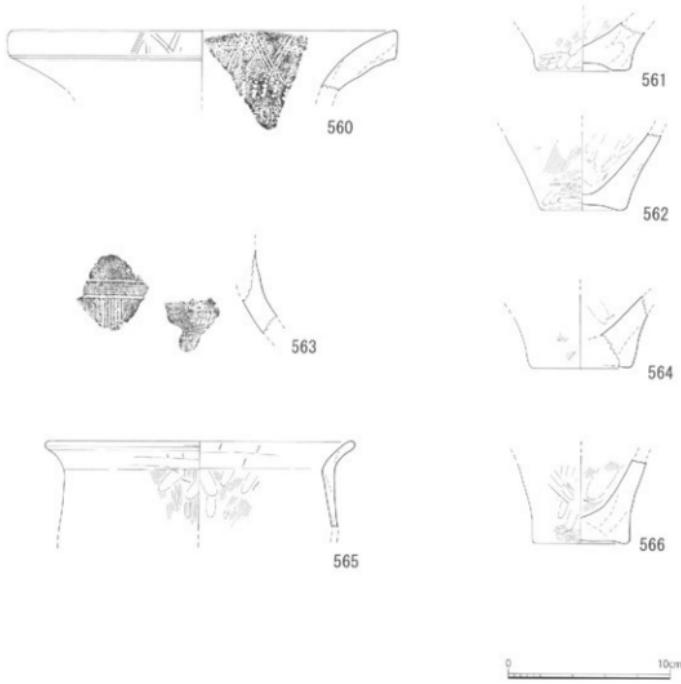
0 10cm

第4-65図 遺構出土遺物実測図-SK147(5)-(S=1/3)



0 10cm

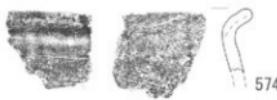
第4-66図 遺構出土遺物実測図-SK148-(S=1/3)



第4-67図 遺構出土遺物実測図 -SK30・SK65・SK99 (S=1/3)



567



574



568



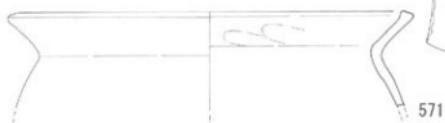
569



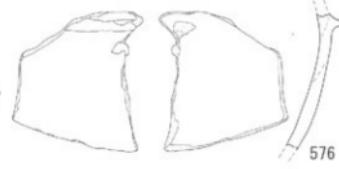
575



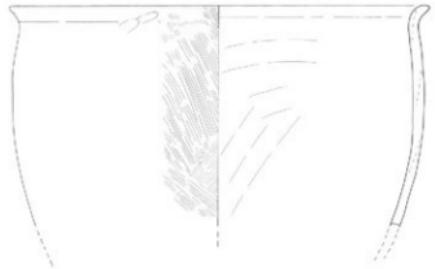
570



571



576



577



578



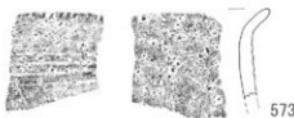
579



572



580



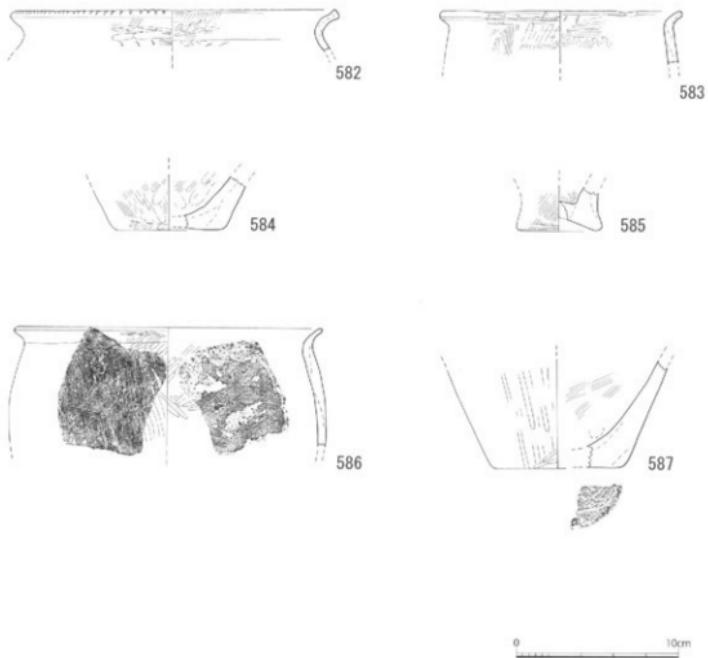
573



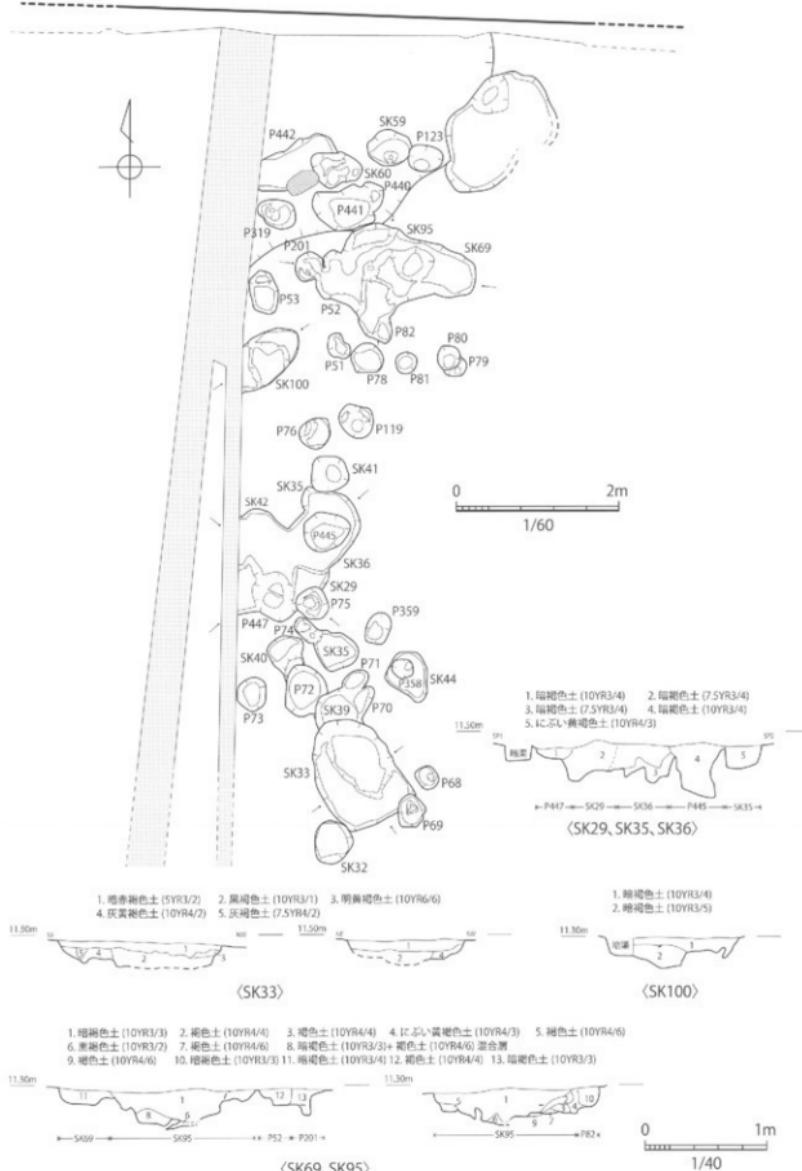
581

0 10cm

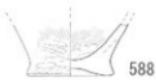
第4-68図 遺構出土遺物実測図-SD1-(S=1/3)



第4-69図 遺構出土遺物実測図-SK91・SK92・SK93・SD8- (S=1/3)



第4-70図 北東部の遺構群平・断面図②



588



590



589



591



592



593



594



597



595



598

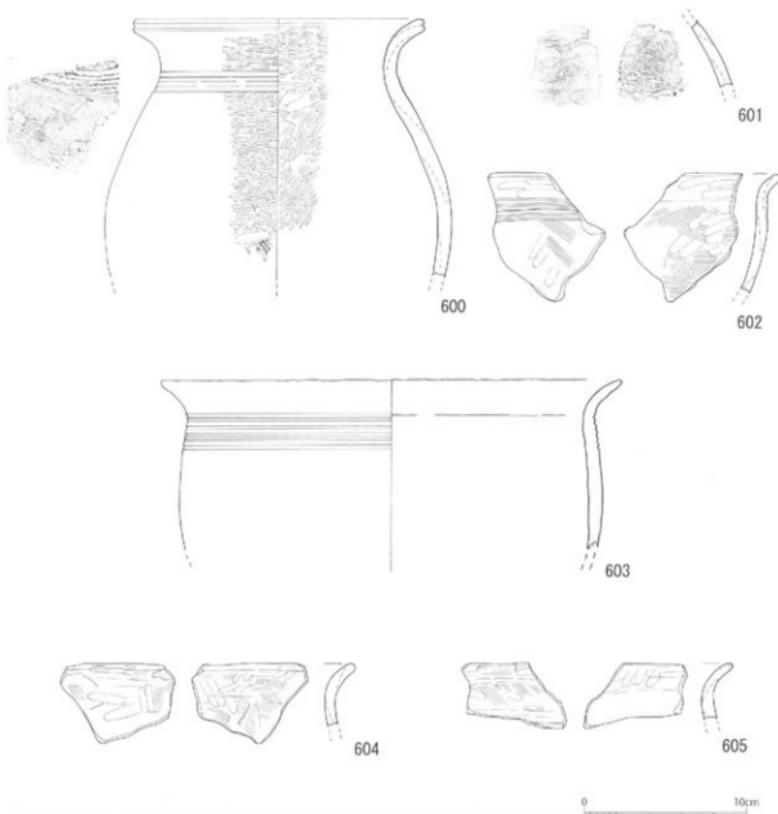


596

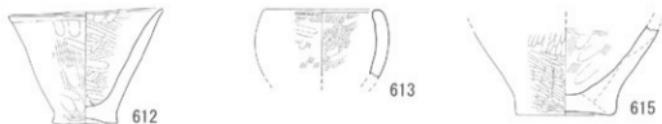
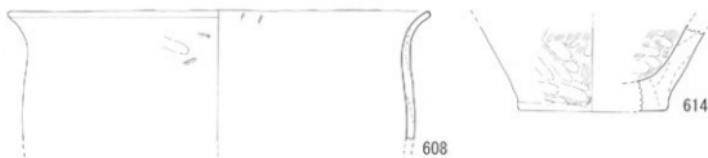
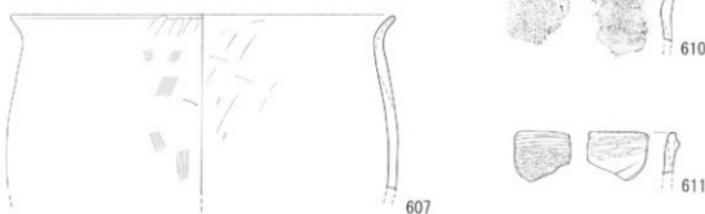
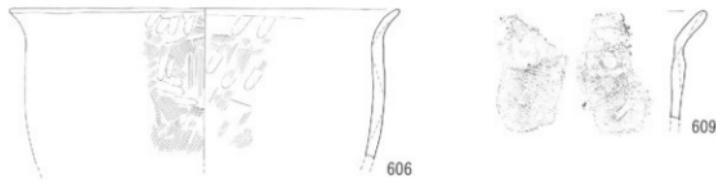


0 10cm

第4-71図 遺構出土遺物実測図 -SK33・SK35・SK36・SK59・SK60・P75・P447- (S=1/3)

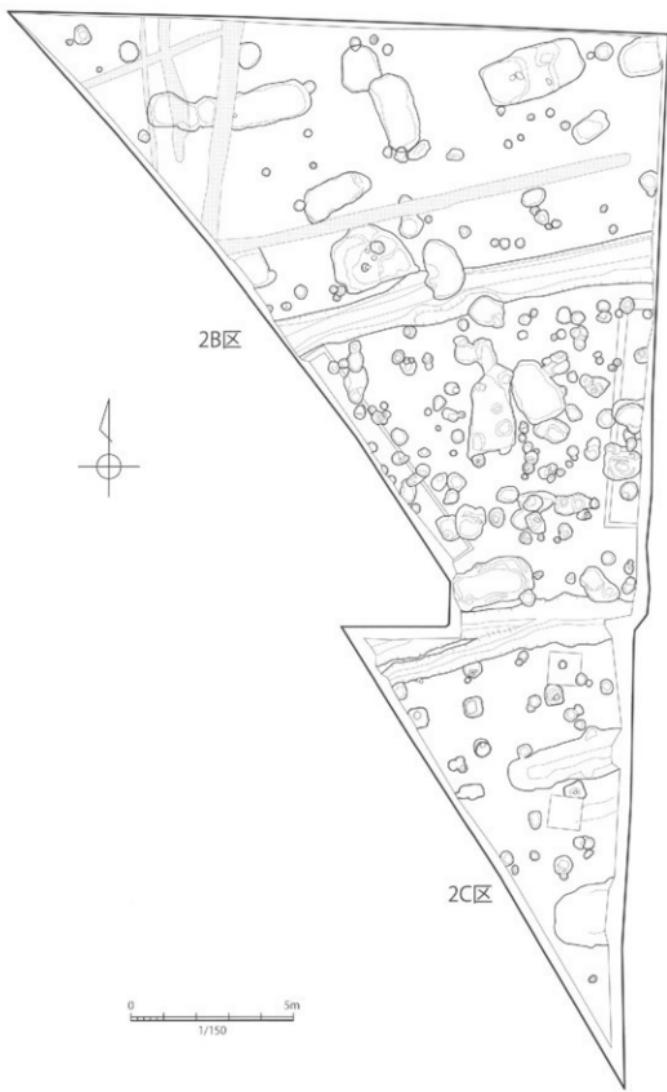


第4-72図 遺構出土遺物実測図-SX1①-(S=1/3)



0 10cm

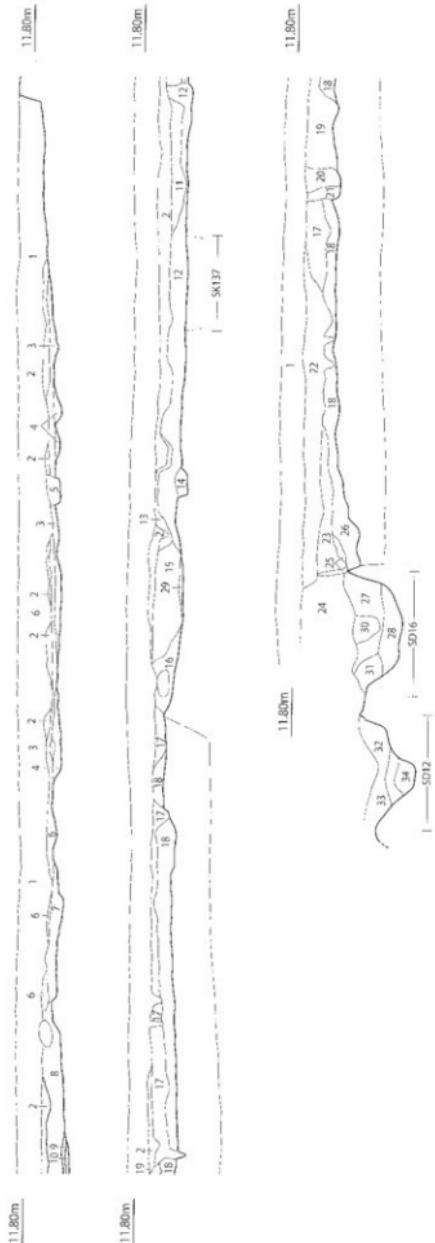
第4-73図 遺構出土遺物実測図-SX1(2)- (S=1/3)



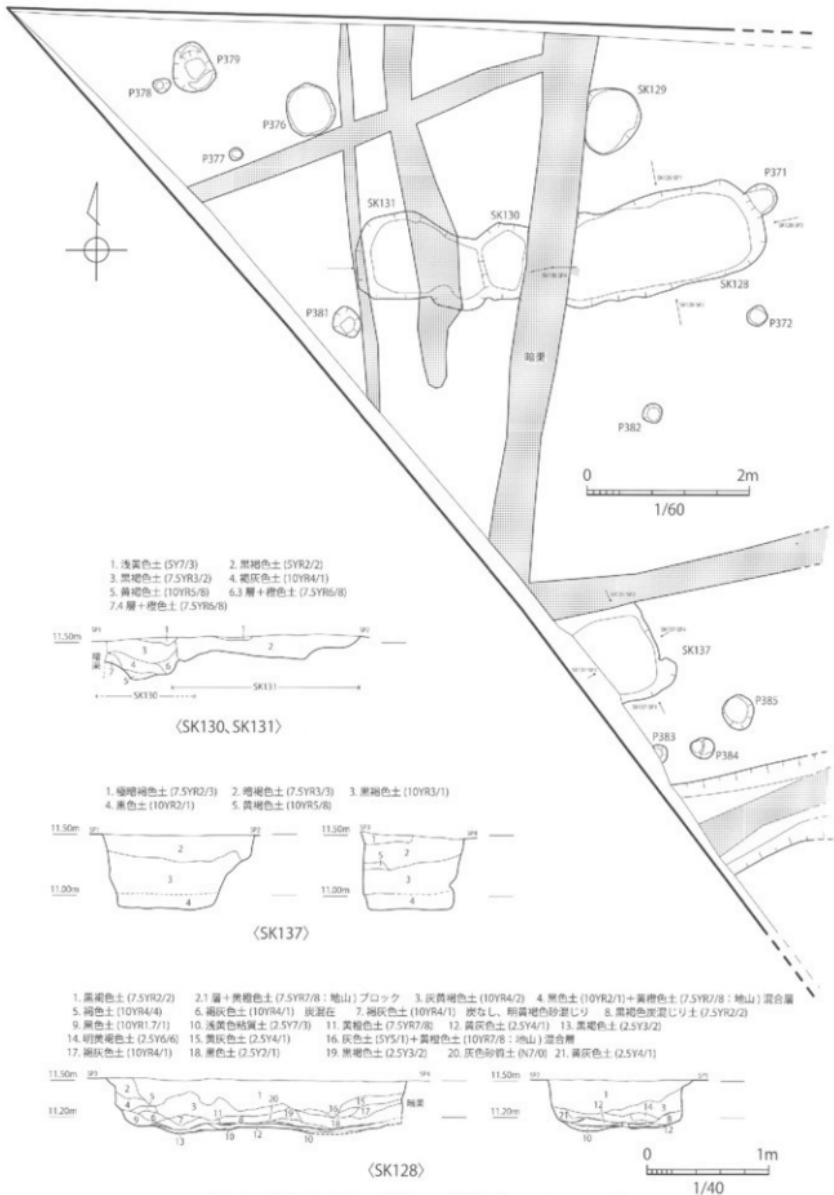
第4-74図 2B区・2C区遺構配置図

第4-75図 2B区西壁土層断面図

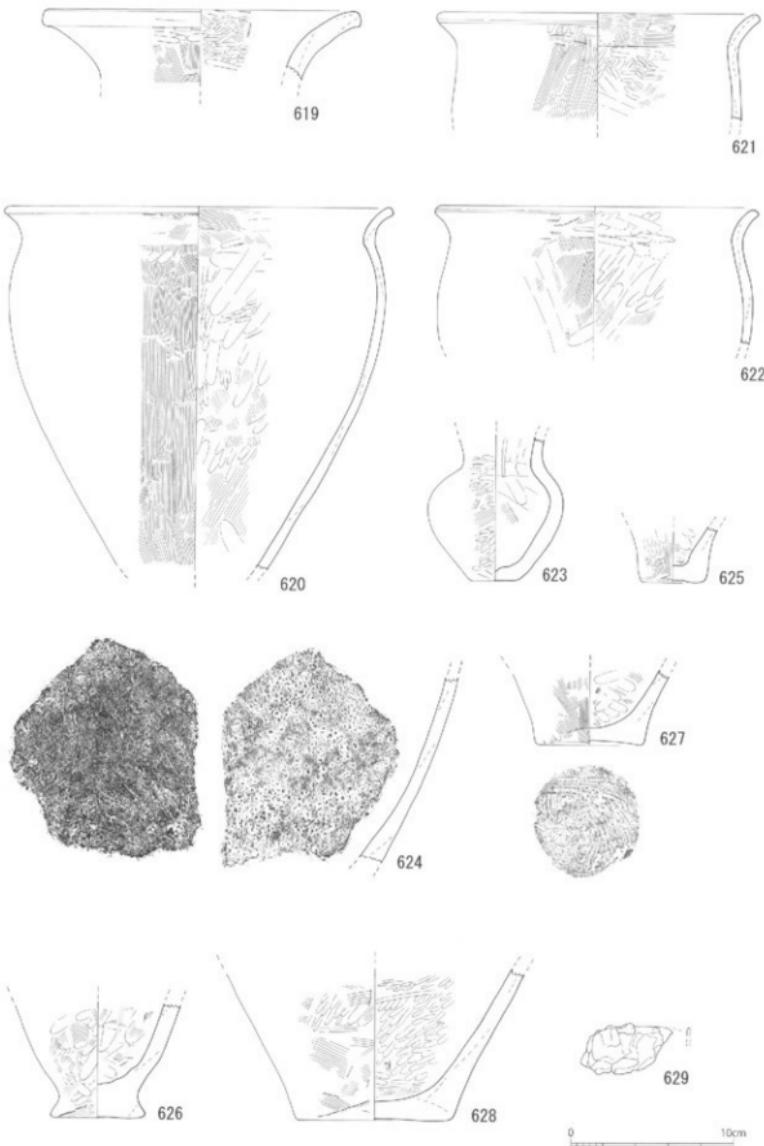
0 1m
1/40



1. 灰色土 (7.5Y4/1)
2. 灰オリーブ色土 (5Y5/2)
3. オリーブ黄色土 (5Y6/3)
4. 黑褐色土 (7.5Y8/3)
5. 灰色土 (10Y5/1)
6. 棕色土 (7.5YR6/8)
7. 灰オリーブ色砂質土 (5Y6/2)
8. 灰オリーブ色土 (5Y6/2) 腐殖質G
9. 明黄色土 (10Y6/8)
10. 明オリーブ灰紫色土 (2.5GY7/1)
11. 灰色土 (7.5Y5/1)
12. にぶい黄色土 (5Y6/3)
13. 明赤褐色土 (5YR5/8)
14. 黑色土 (7.5YR2/1)
15. 灰色土 (10Y5/1)
16. にぶい黄色土 (2.5Y6/4)
17. 黑褐色土 (7.5YR3/2) 滲物包含層
18. 明黃褐色土 (2.5Y7/6)
19. 棕色土 (7.5Y4/2)
20. 紫黒土 (5P17/1)
21. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
22. 灰褐色土 (7.5YR4/2)
23. 棕褐色土 (10YR3/2)
24. 棕色土 (7.5Y4/3)
25. 黄褐色土 (10YR7/8)
26. 棕褐色土 (7.5YR2/3)
27. 黄褐色土 (2.5Y5/4)
28. 暗灰黃褐色土 (2.5Y4/2)
29. 砂變層
30. 細灰褐色土 (7.5YR4/1)
31. 灰褐色土 (7.5YR4/2)
32. 黑褐色土 (10YR3/2)
33. 黄灰褐色土 (2.5Y4/1)
34. 33層+黄色土 (2.5Y3/8 : 地山) 混合層



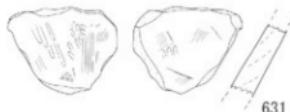
第4-76図 2B区北部の遺構群平・断面図①



第4-77図 遺構出土遺物実測図-SK128- (S=1/3)



630



631



632



633



634

0 10cm

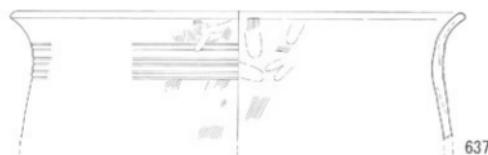
第4-78図 遺構出土遺物実測図-SK129・SK131- (S=1/3)



635



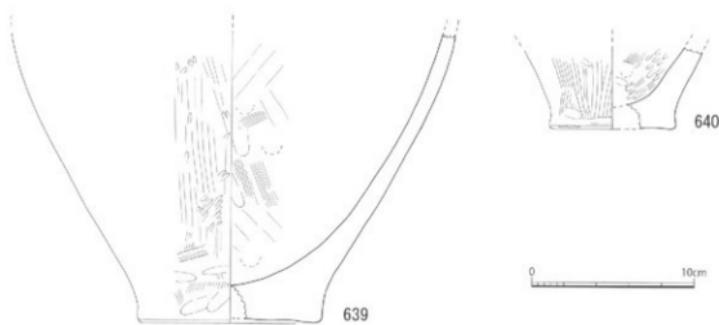
636



637



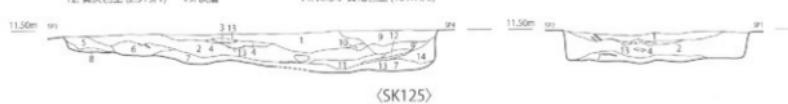
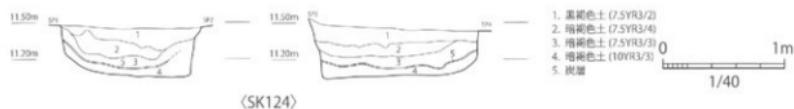
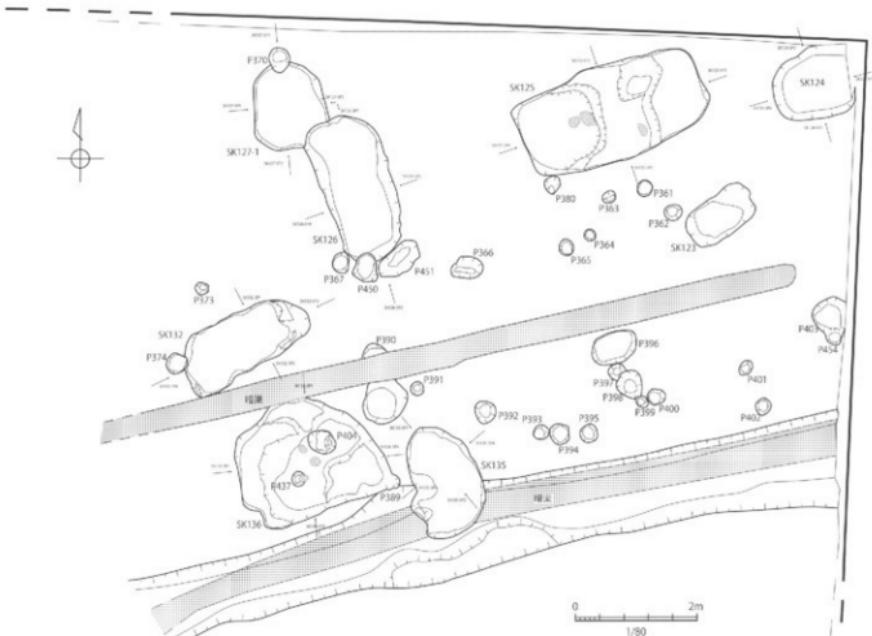
638



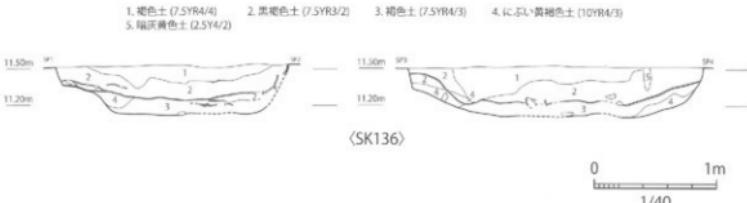
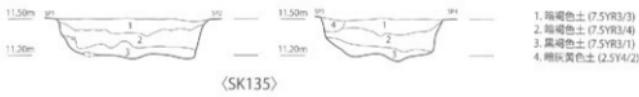
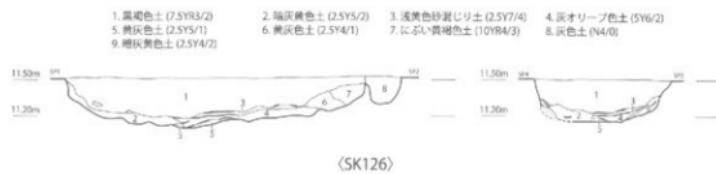
639

0 10cm

第4-79図 遺構出土遺物実測図-SK137- (S=1/3)



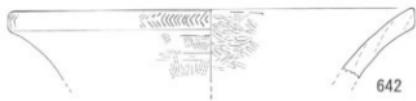
第4-80図 2B区北部の遺構群平・断面図②



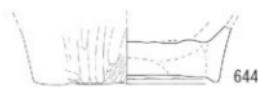
第4-81図 2B区北部の遺構群断面図



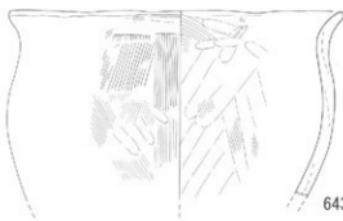
641



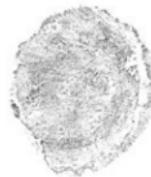
642



644



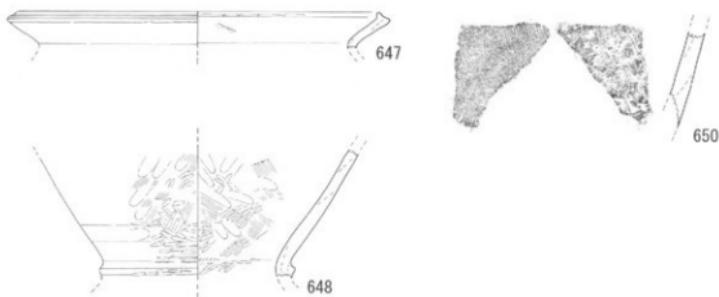
643



645

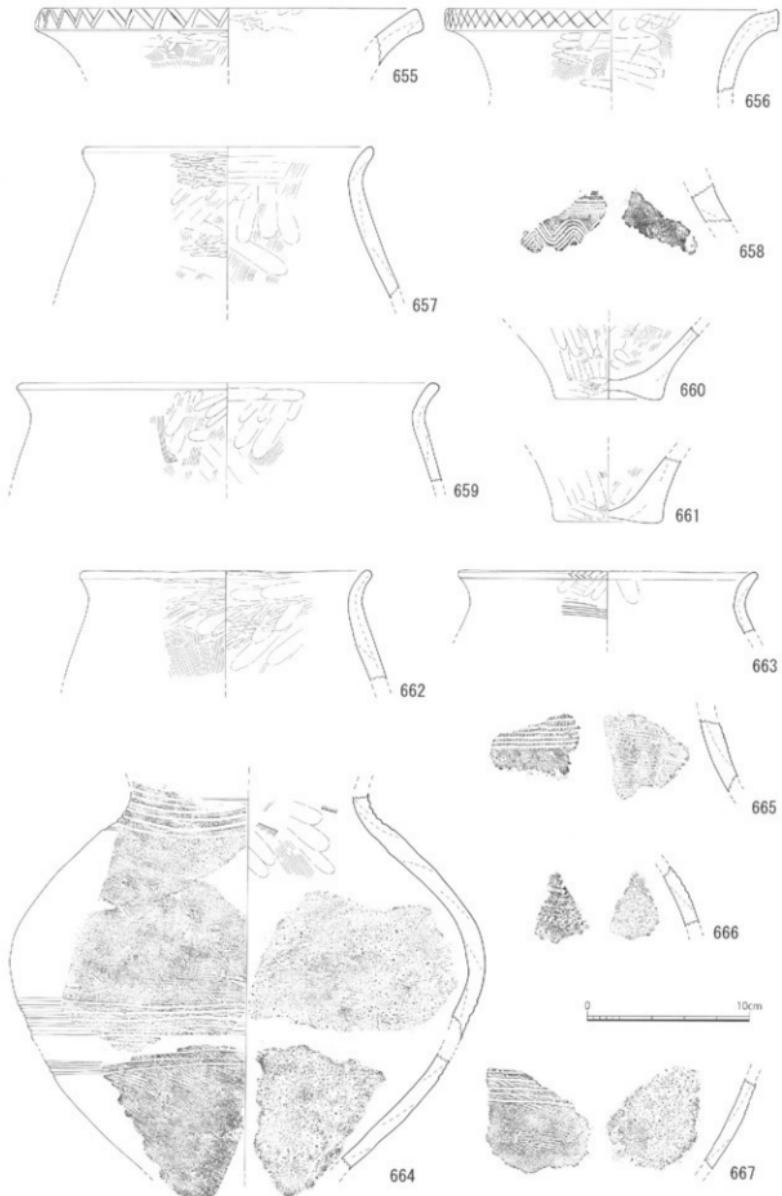
0 10cm

第4-82図 遺構出土遺物実測図-SK126- (S=1/3)

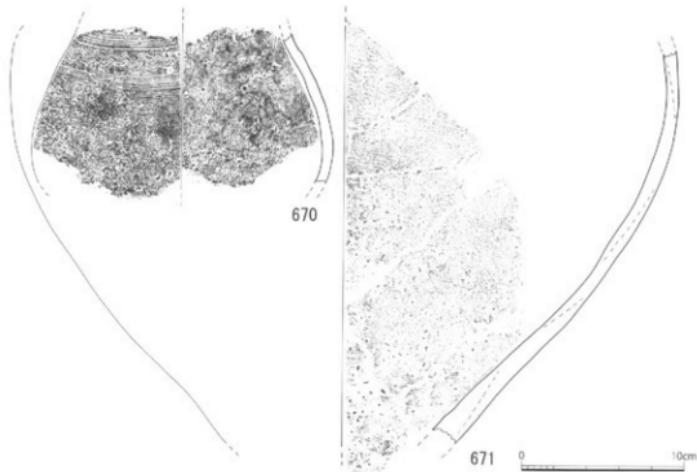
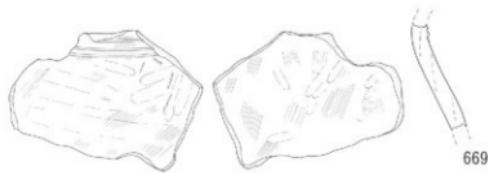
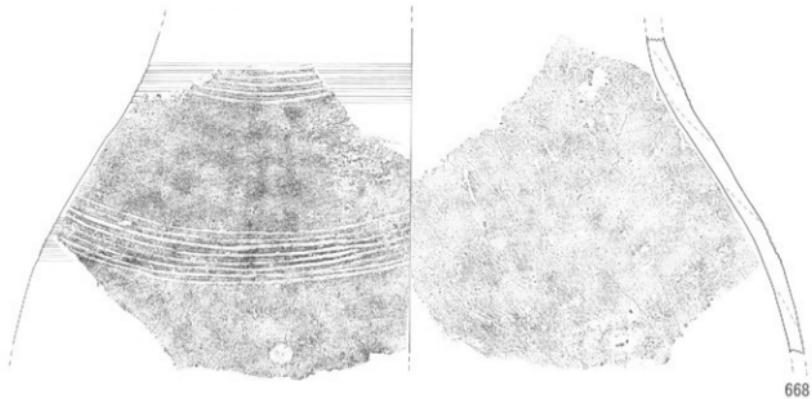


0 10cm

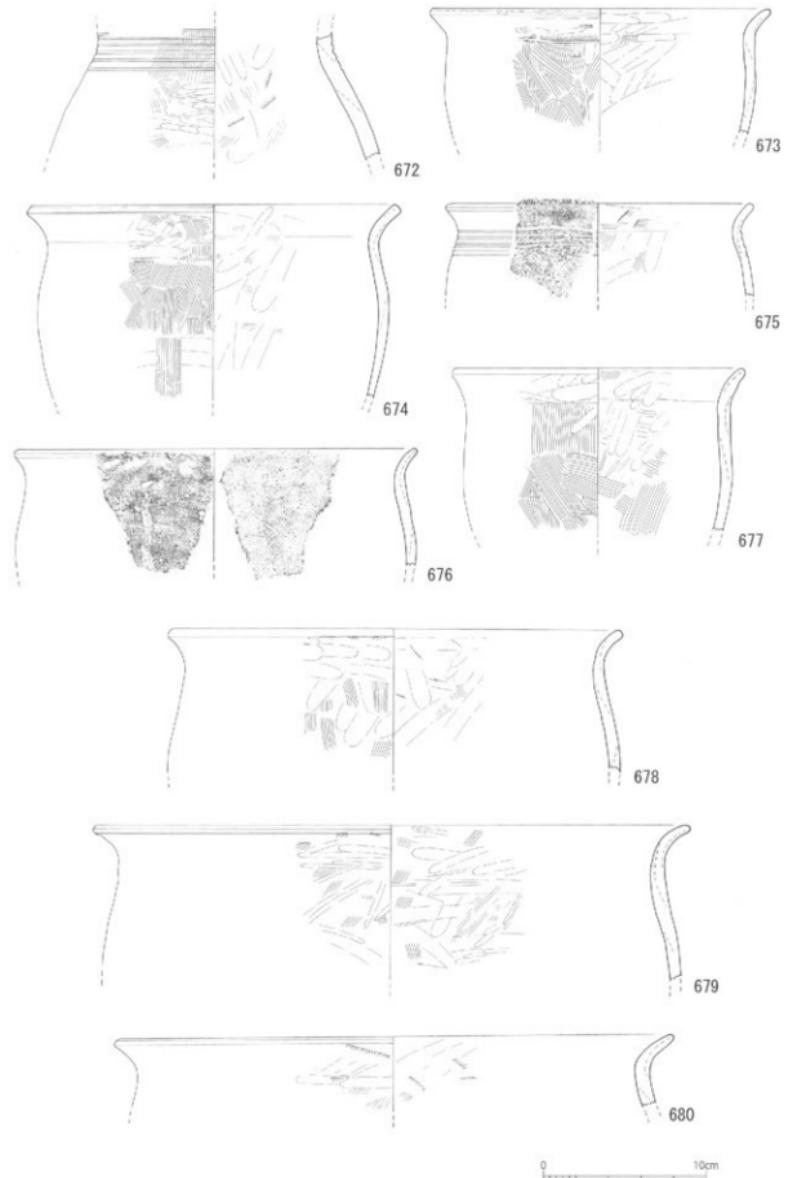
第4-83図 遺構出土遺物実測図-SK123・SK127・P370- (S=1/3)



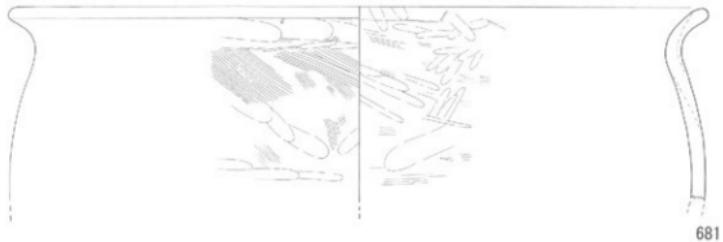
第4-84図 遺構出土遺物実測図-SK124・SK125①-(S=1/3)



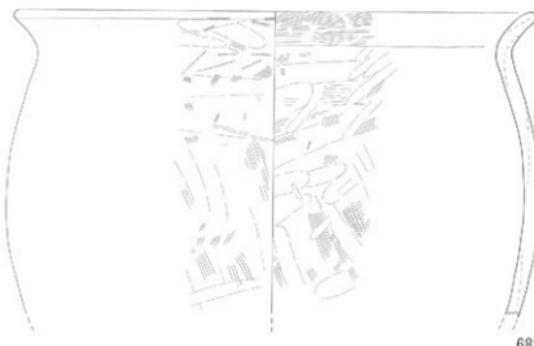
第4-85図 遺構出土遺物実測図-SK125②-(S=1/3)



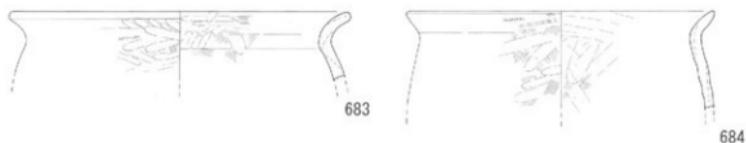
第4-86図 遺構出土遺物実測図-SK125(3)-(S=1/3)



681

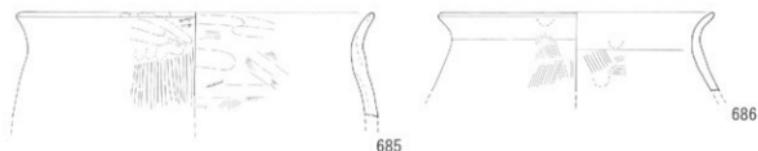


682



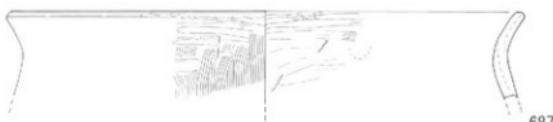
683

684



685

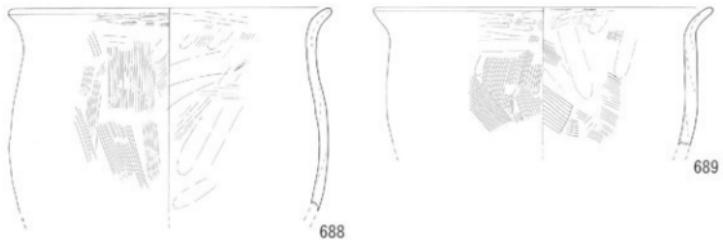
686



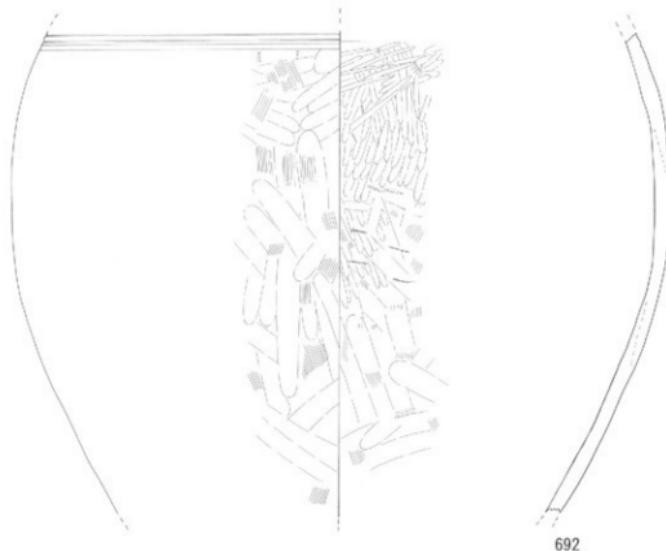
687

0 10cm

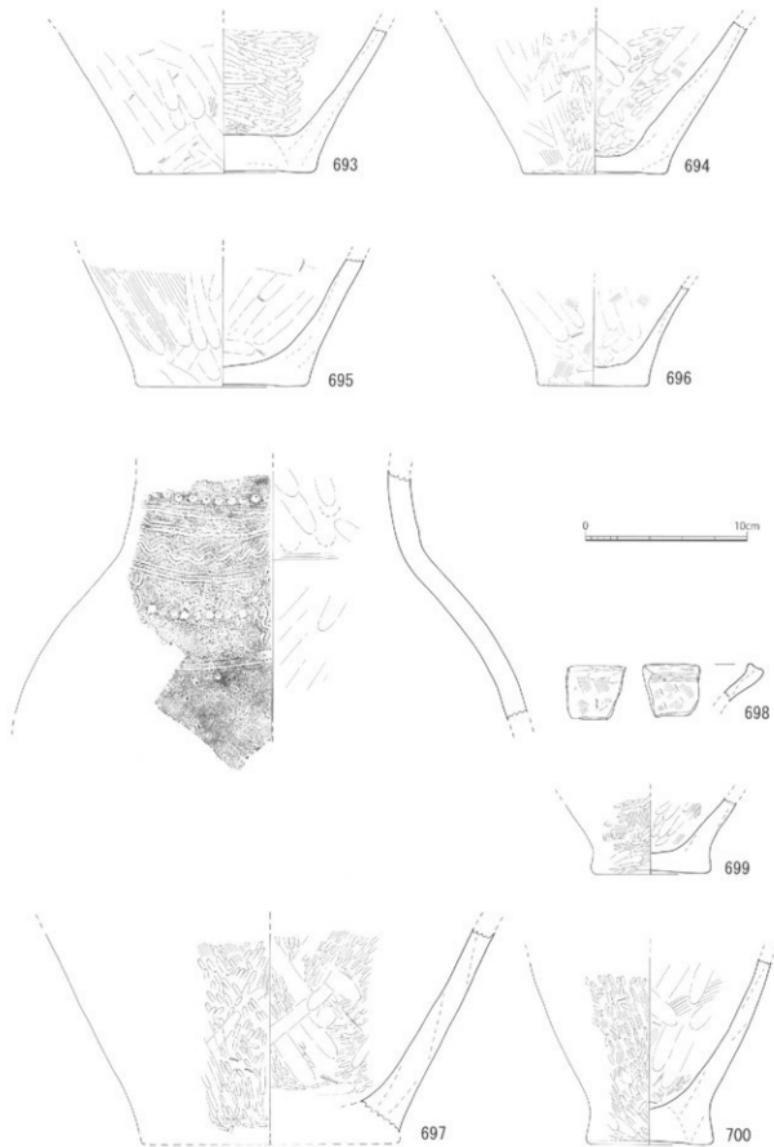
第4-87図 遺構出土遺物実測図-SK125(④)-(S=1/3)



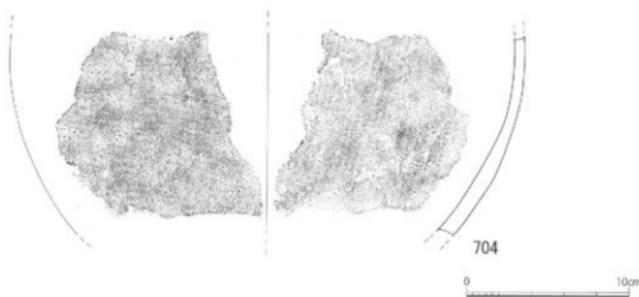
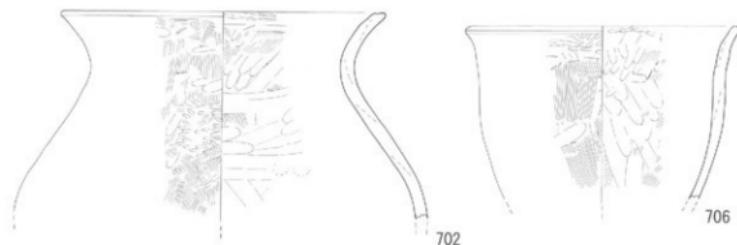
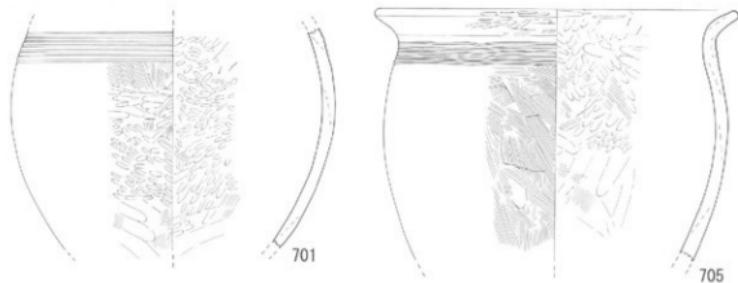
0 10cm



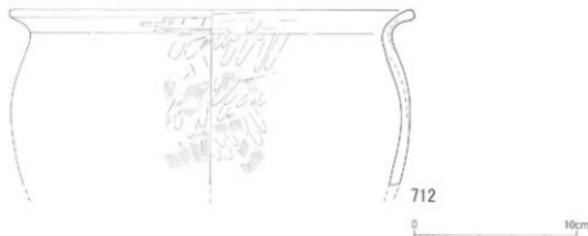
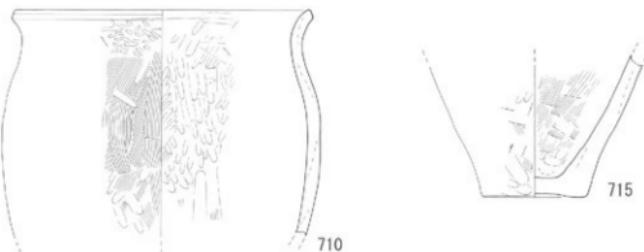
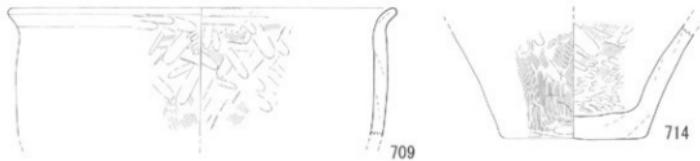
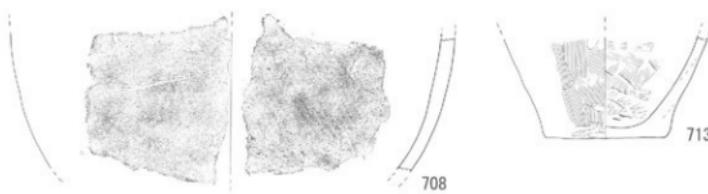
第4-88図 遺構出土遺物実測図-SK125(5)-(S=1/3)



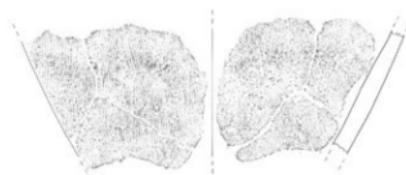
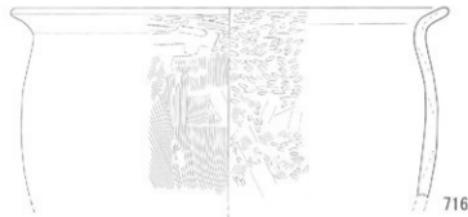
第4-89図 遺構出土遺物実測図-SK125⑥・SK135- (S=1/3)



第4-90図 遺構出土遺物実測図-SK136①-(S=1/3)

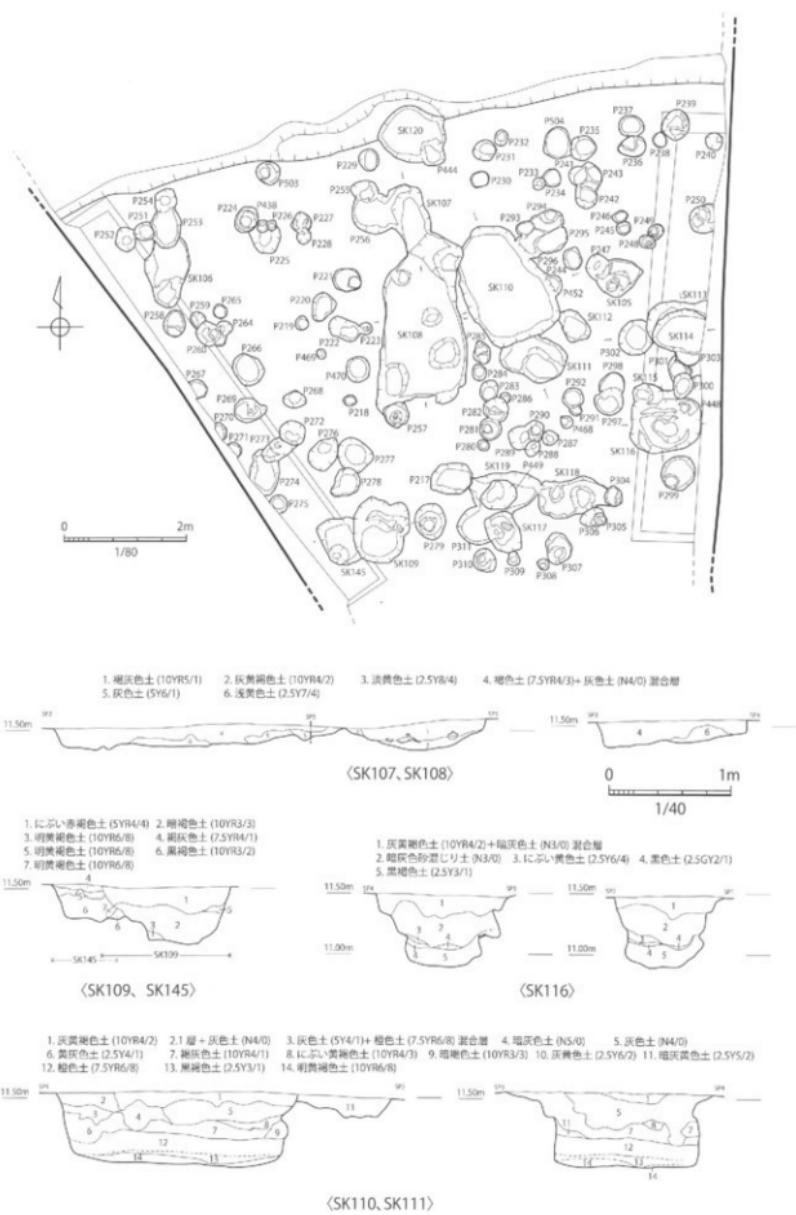


第4-91図 遺構出土遺物実測図-SK136②-(S=1/3)

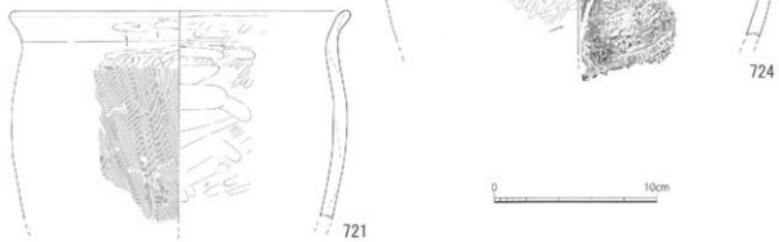
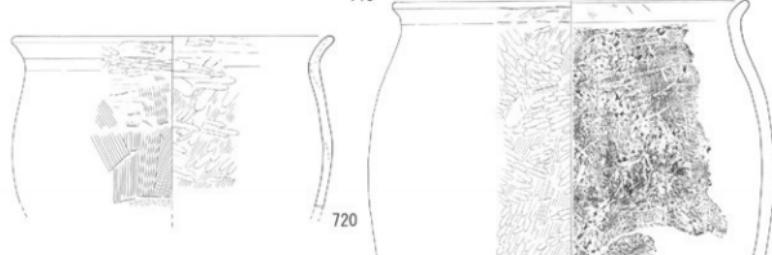
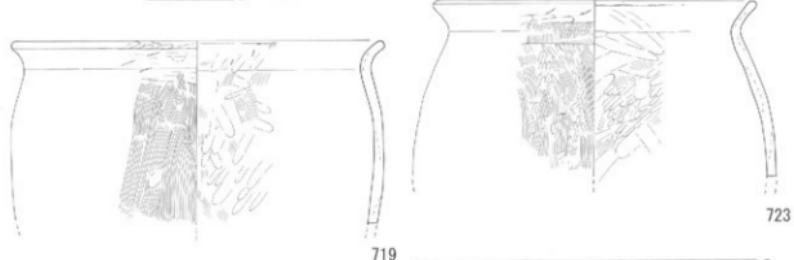
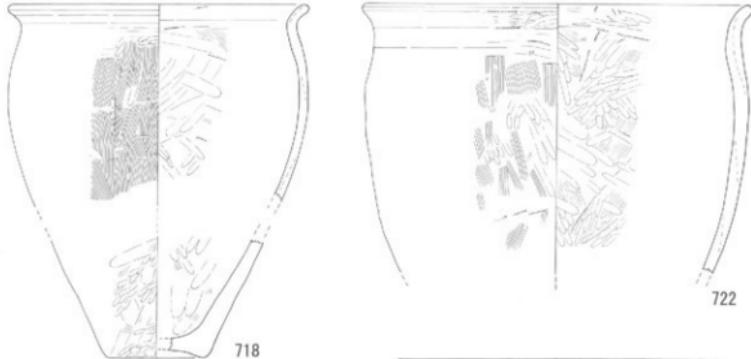


0 10cm

第4-92図 遺構出土遺物実測図-SK136(3)-(S=1/3)

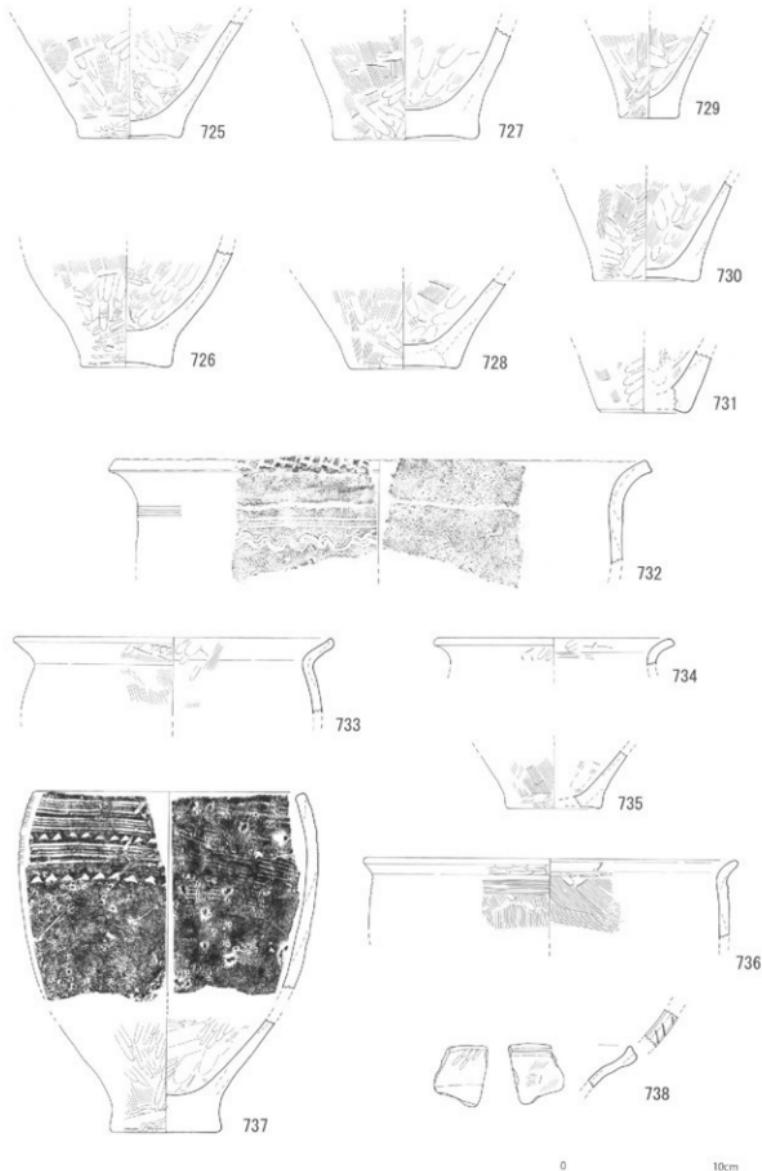


第4-93図 2B区南部の遺構群平・断面図

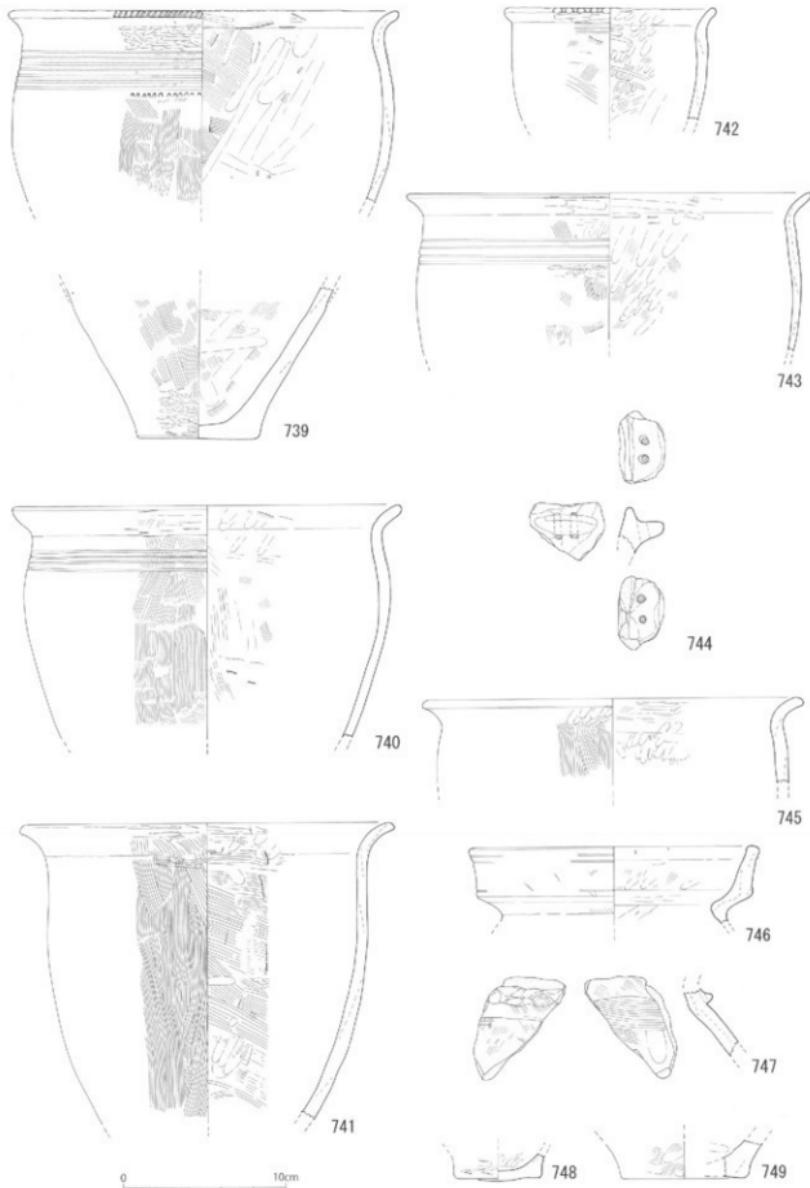


0 10cm

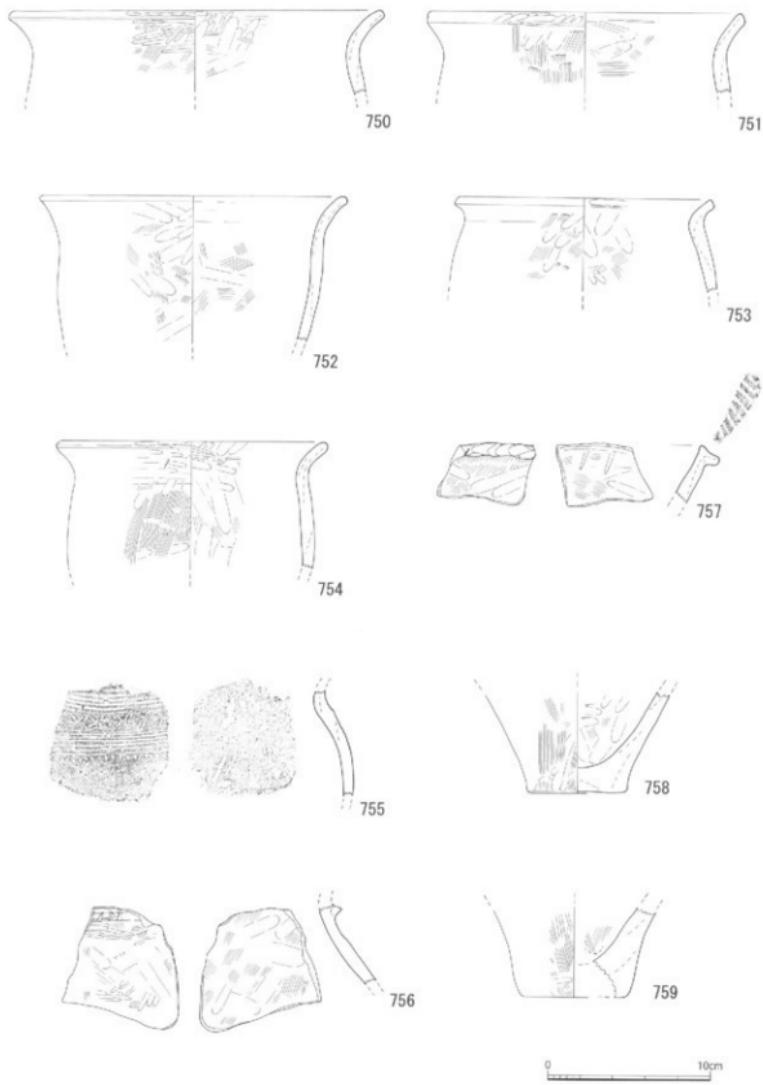
第4-94図 遺構出土遺物実測図-SK110①-(S=1/3)



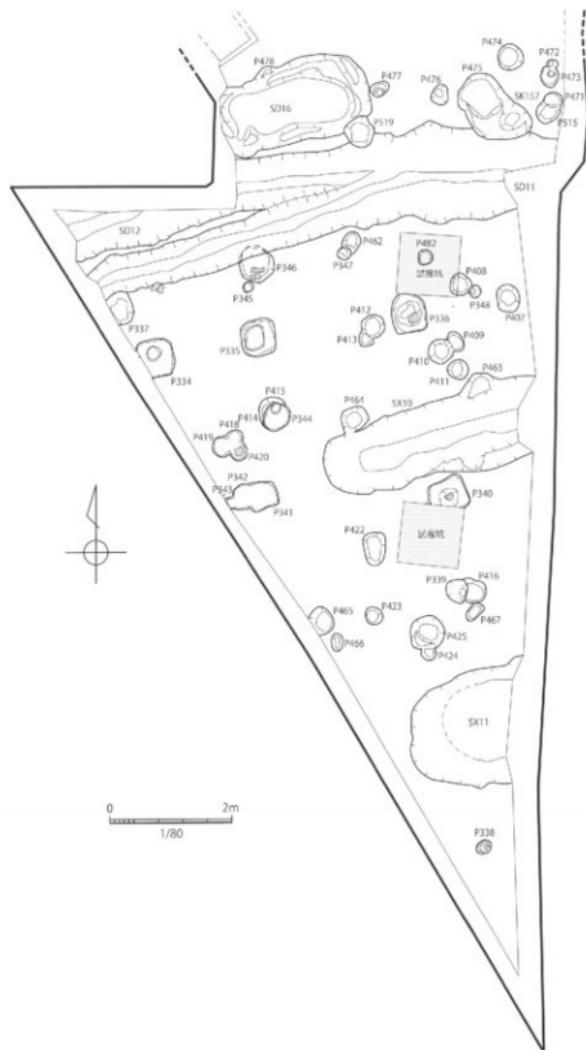
第4-95図 遺構出土遺物実測図 -SK110②・SK105・SK107・SK142- (S=1/3)



第4-96図 遺構出土遺物実測図-SK108・SK109・SK111・SK115 (S=1/3)

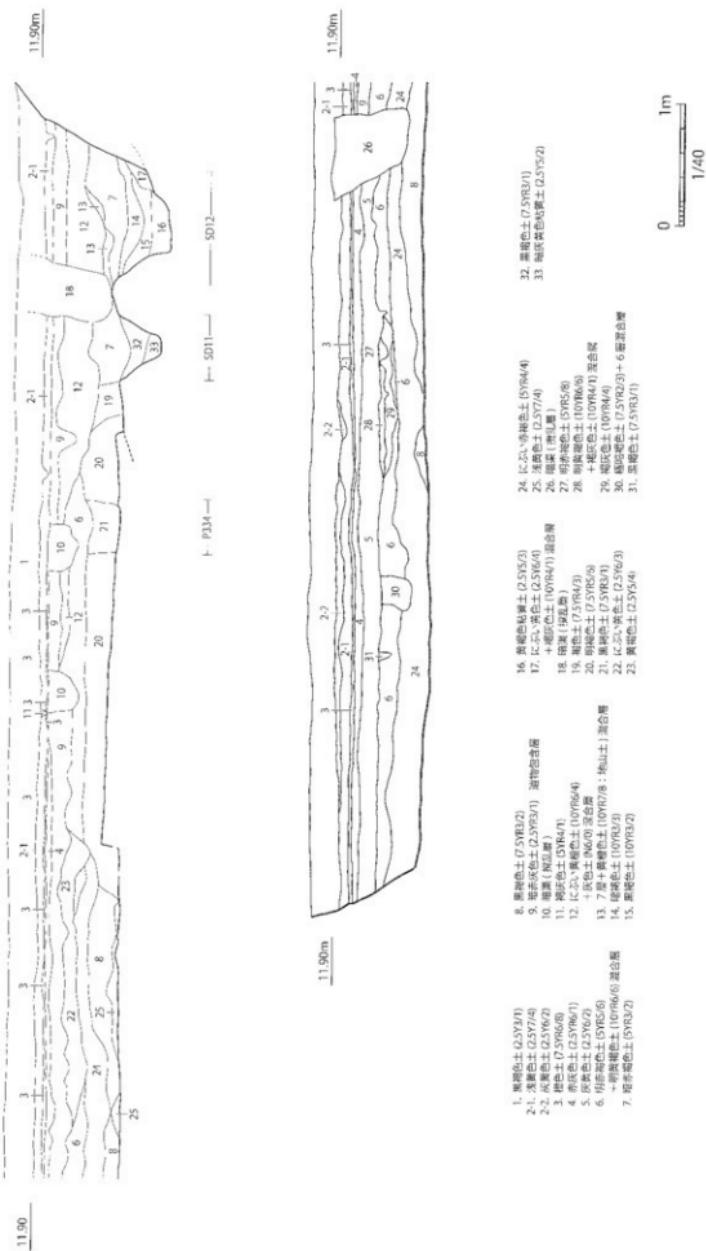


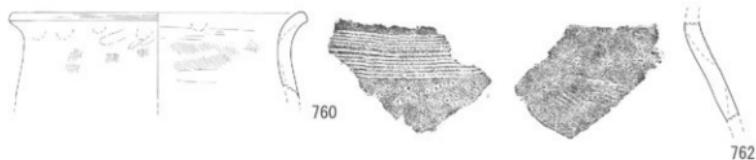
第4-97図 遺構出土遺物実測図 -SK116- (S=1/3)



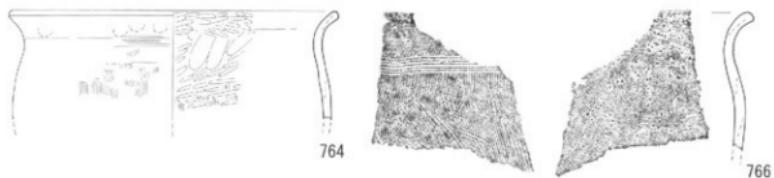
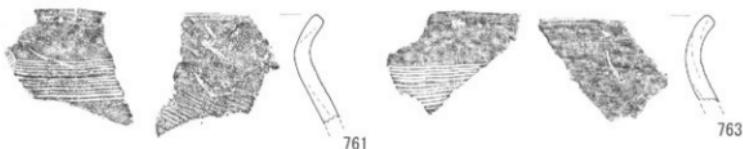
第4-98図 2C区遺構配置図

第4-99圖 2C區西壁土層斷面圖



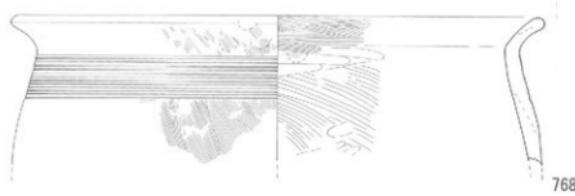


762

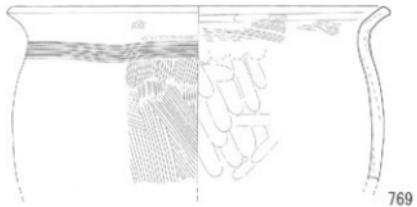


0 10cm

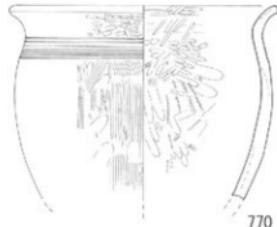
第4-100図 遺構出土遺物実測図-SD16①-(S=1/3)



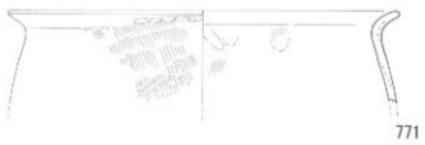
768



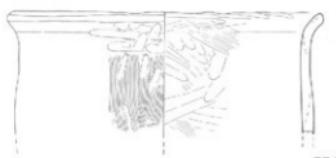
769



770



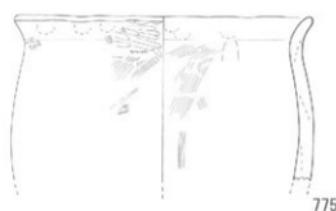
771



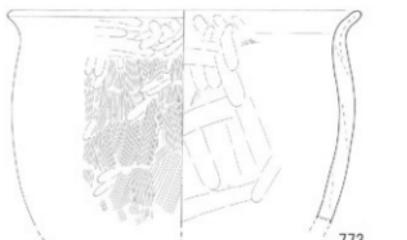
774



772



775



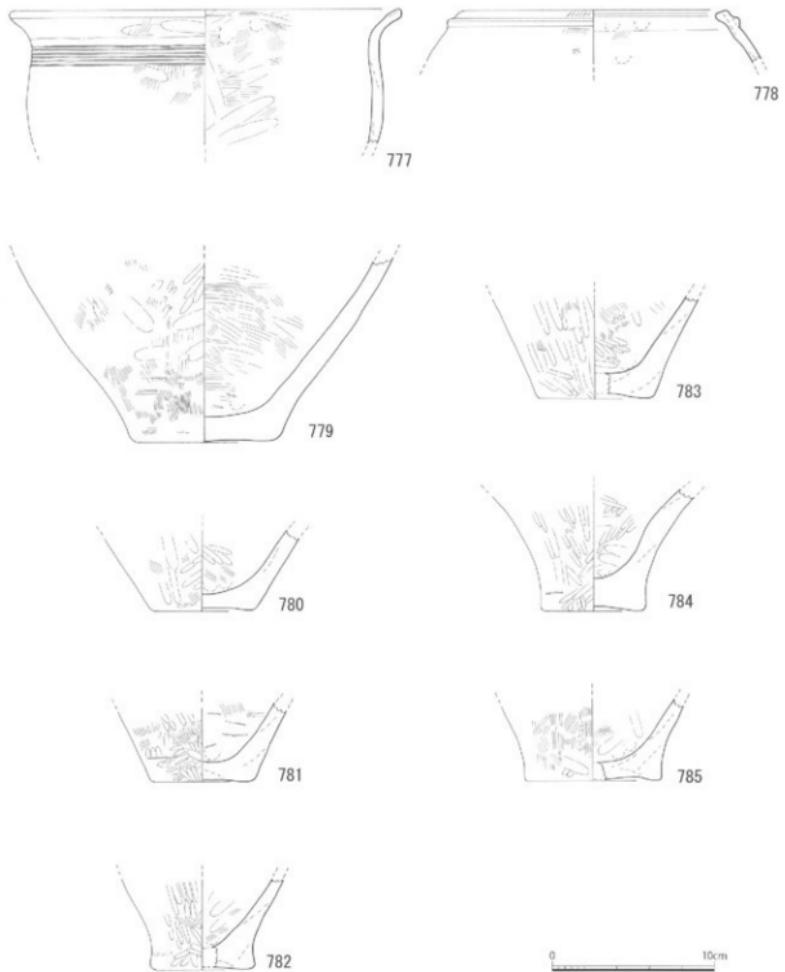
773



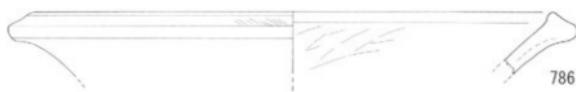
776

0 10cm

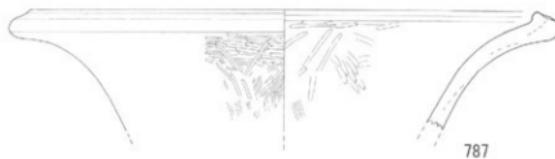
第4-101図 遺構出土遺物実測図-SD16②-(S=1/3)



第4-102図 遺構出土遺物実測図-SD16(③)-(S=1/3)



786



787



788



789



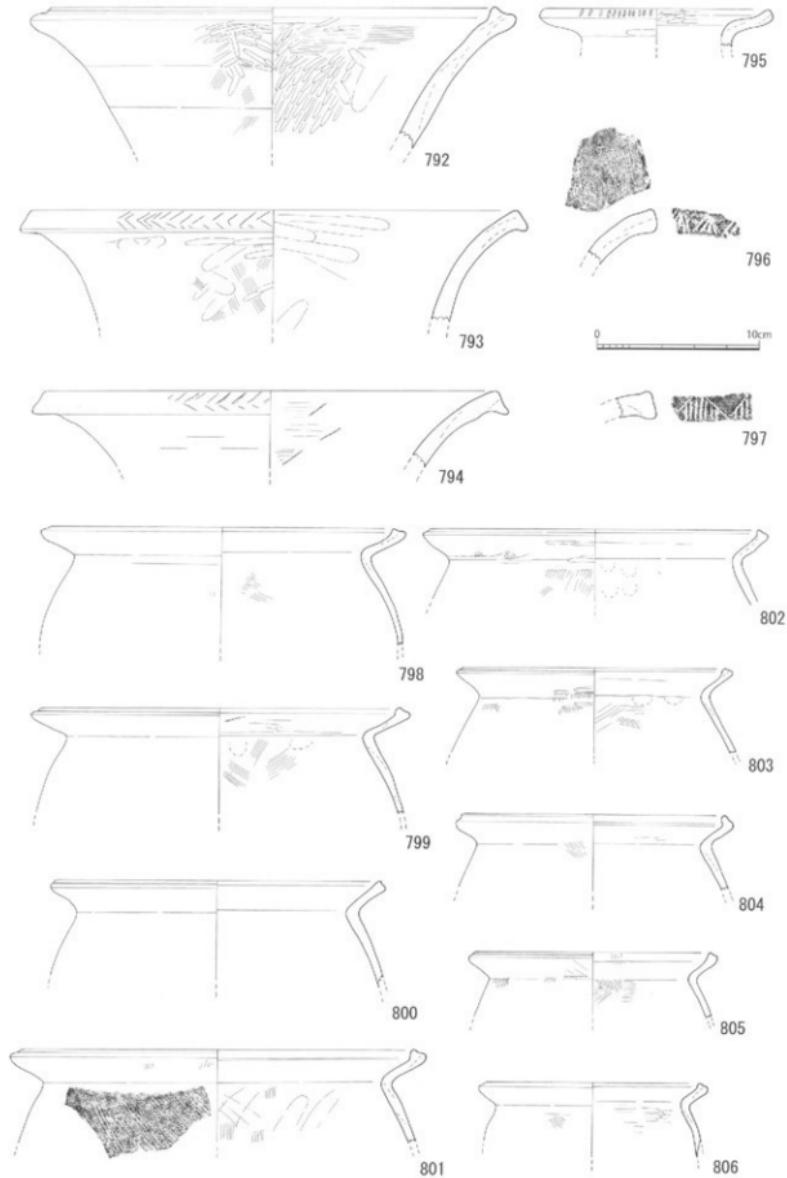
791



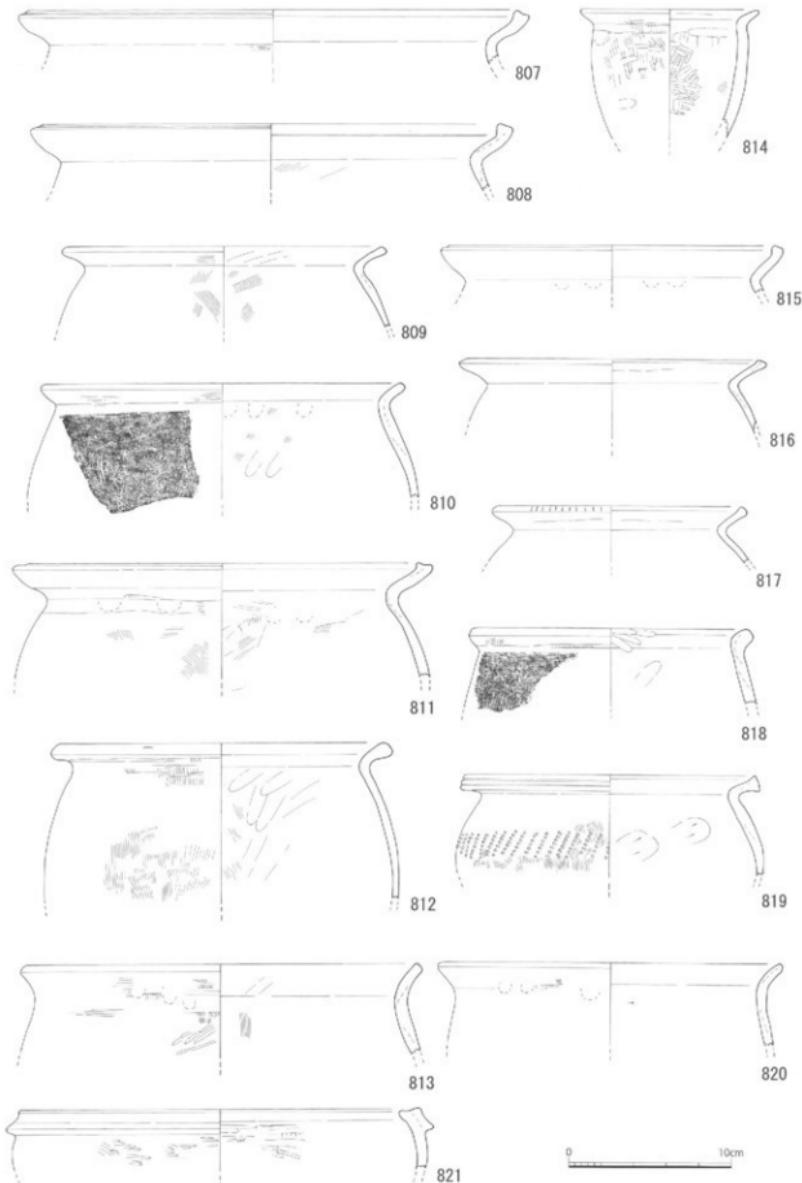
790



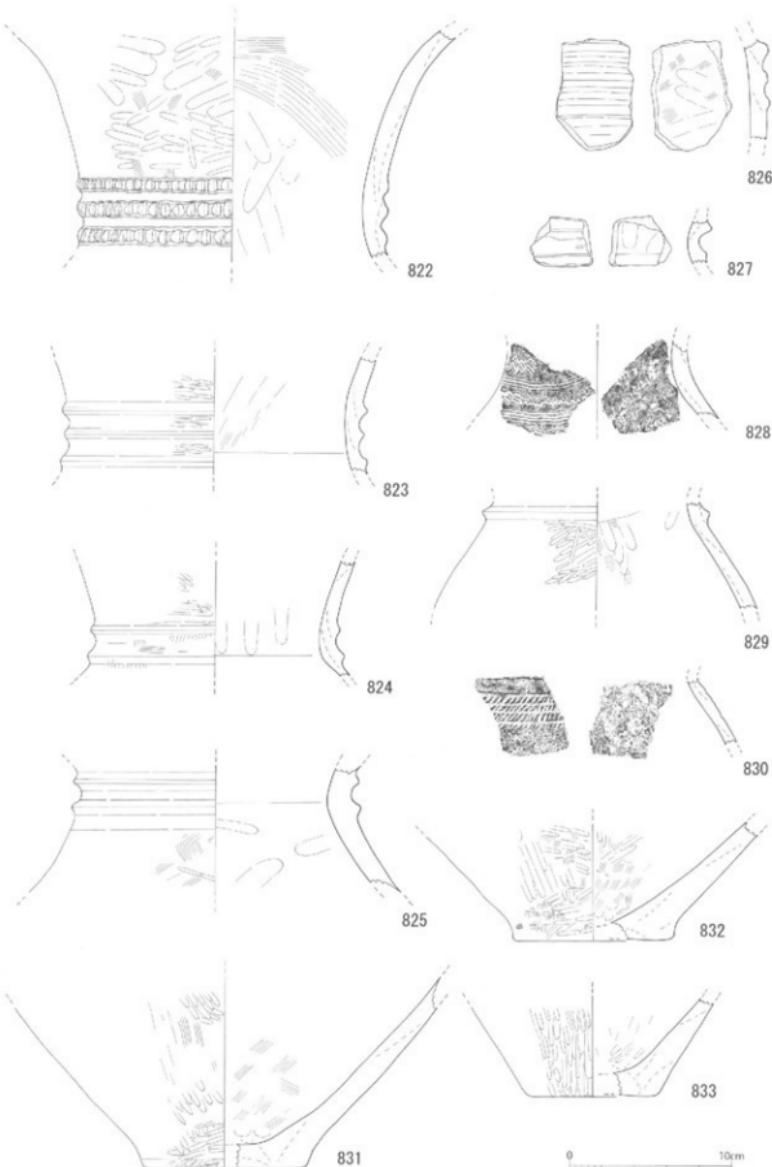
第4-103図 遺構出土遺物実測図-SD11①-(S=1/3)



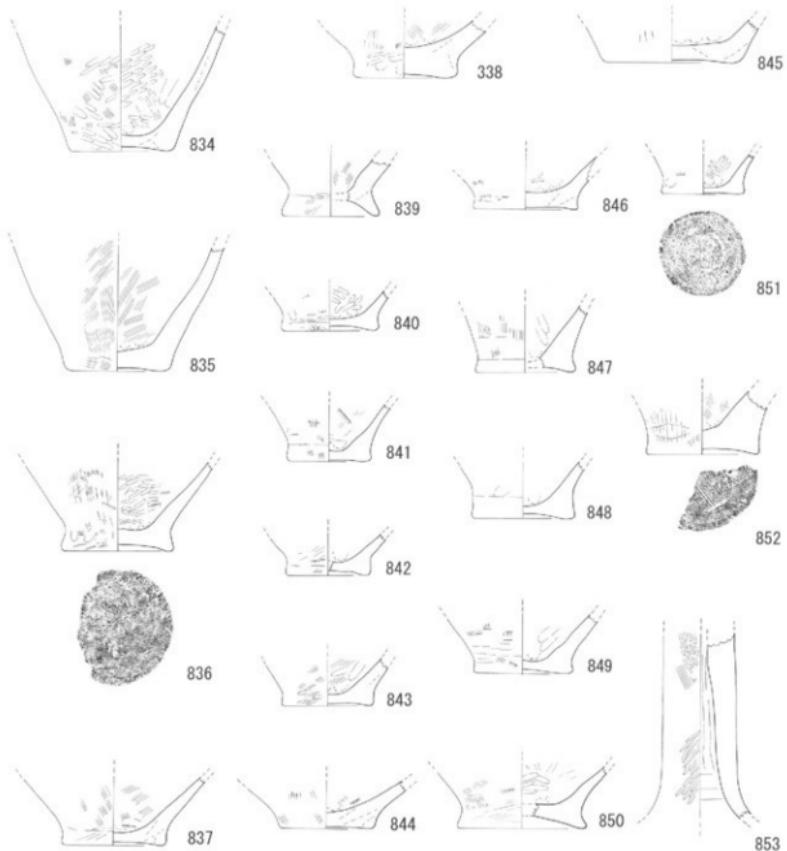
第4-104図 遺構出土遺物実測図 -SD11(②) (S=1/3)



第4-105図 遺構出土遺物実測図 -SD11(③)- ($\times 1/3$)



第4-106図 遺構出土遺物実測図 -SD11④-(S=1/3)



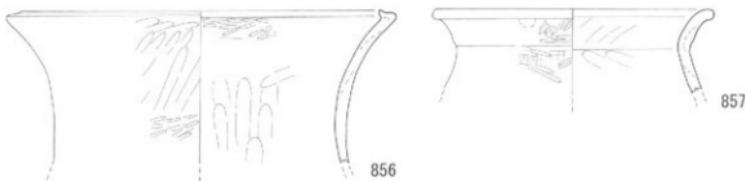
第4-107図 遺構出土遺物実測図 -SD11(5)- (S=1/3)



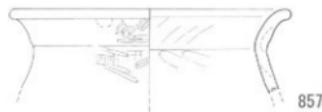
854



855



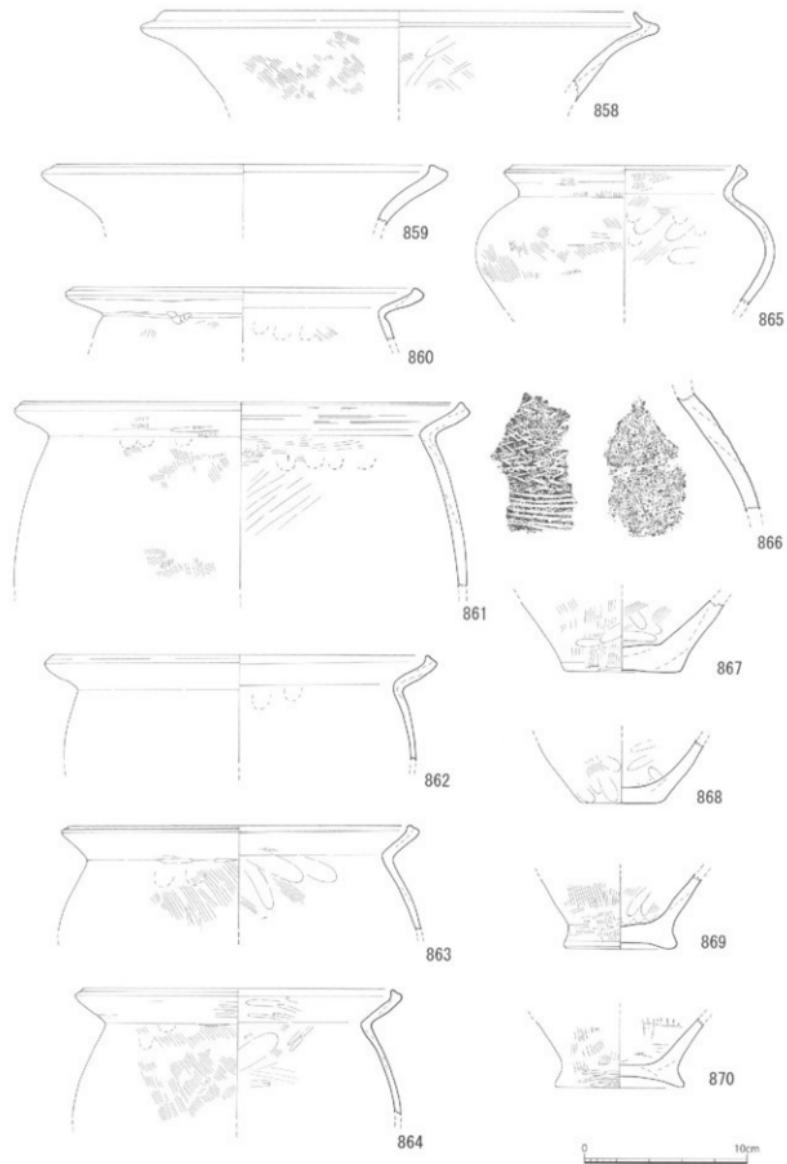
856



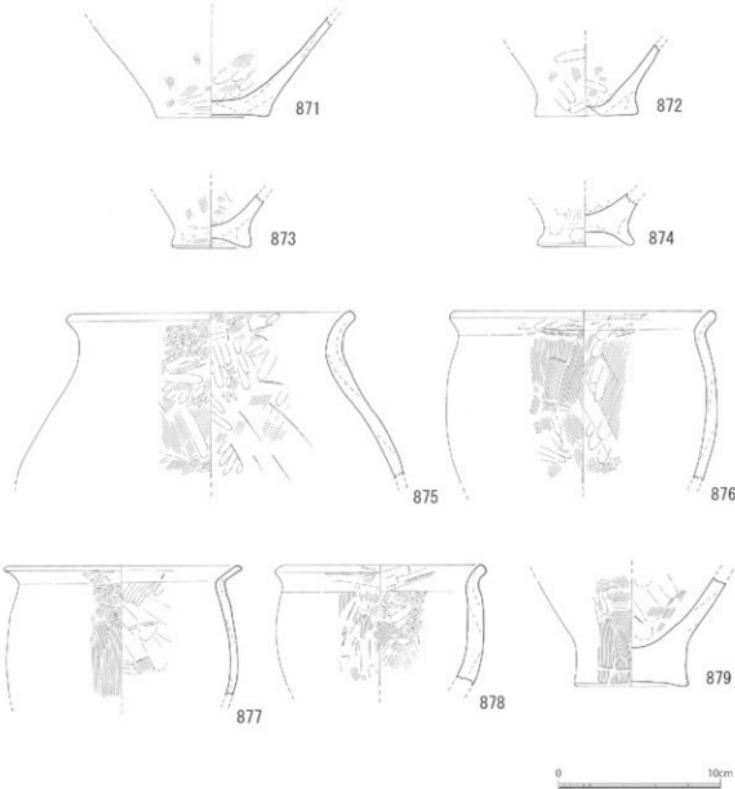
857

0 10cm

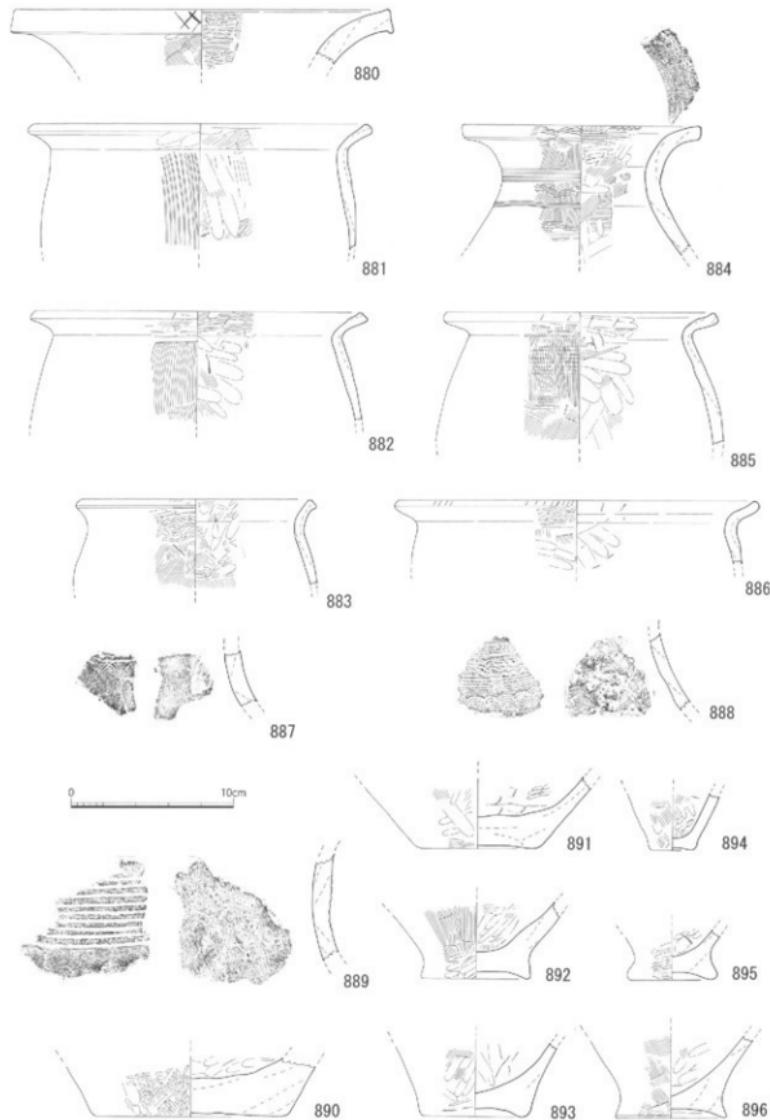
第4-108図 遺構出土遺物実測図 -SD12(1)- (S=1/3)



第4-109図 遺構出土遺物実測図 -SD12(2)- (S=1/3)



第4-110図 遺構出土遺物実測図 -SD12③・SX10- (S=1/3)



第4-111図 遺構出土遺物実測図-SX11- (S=1/3)



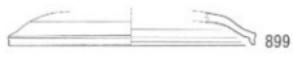
897



898



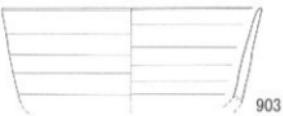
900



899



901



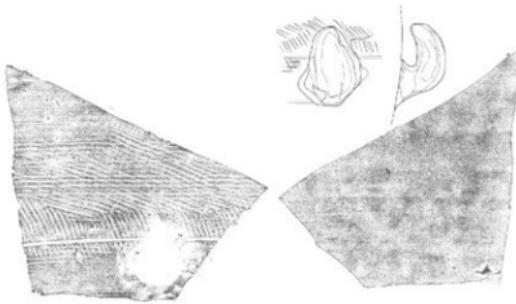
903



902



904



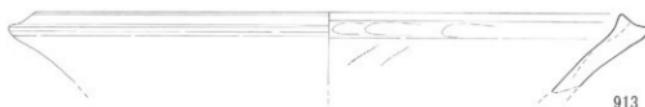
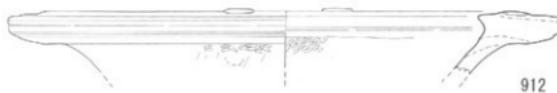
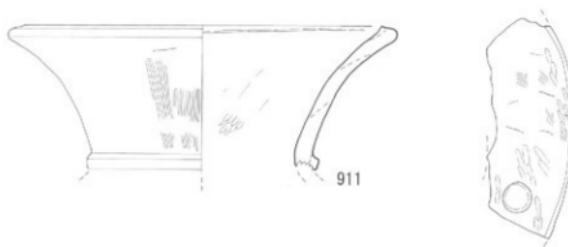
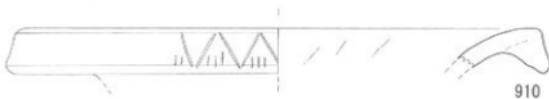
905



906

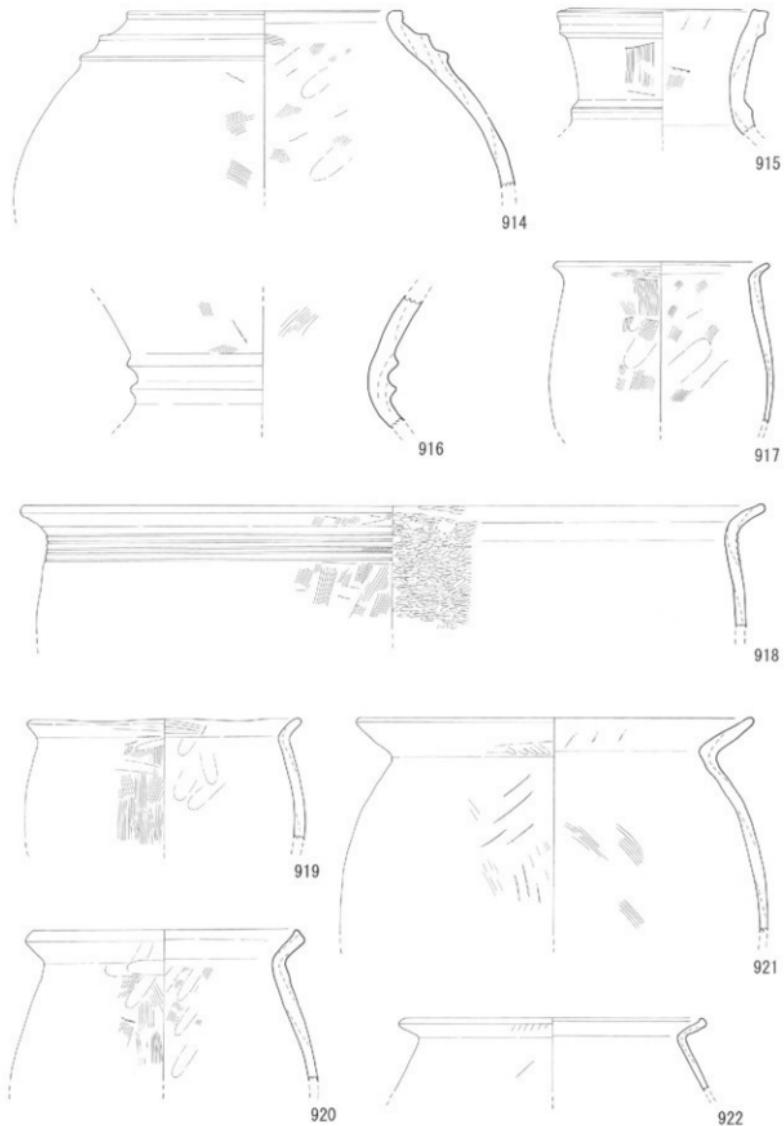


第4-112図 遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

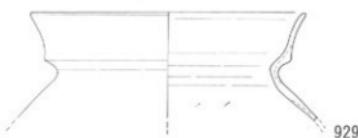
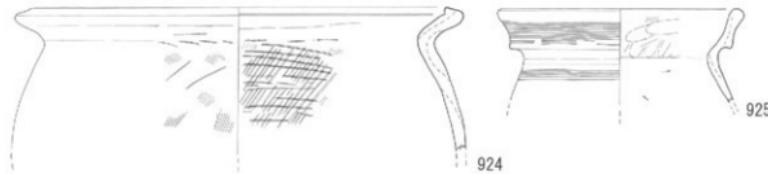
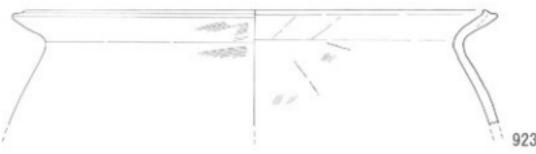


0 10cm

第4-113図 遺構外出土遺物実測図 -弥生土器①- (S=1/3)

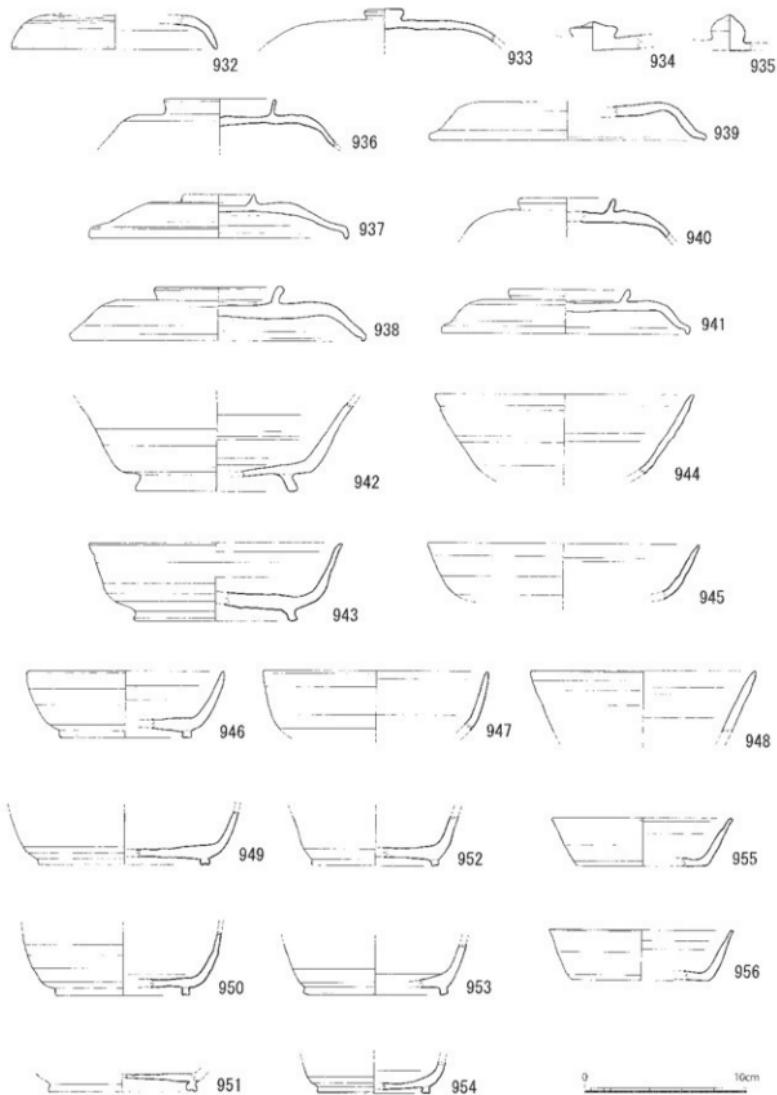


第4-114図 遺構出土遺物実測図 - 弥生土器② - (S=1/3)

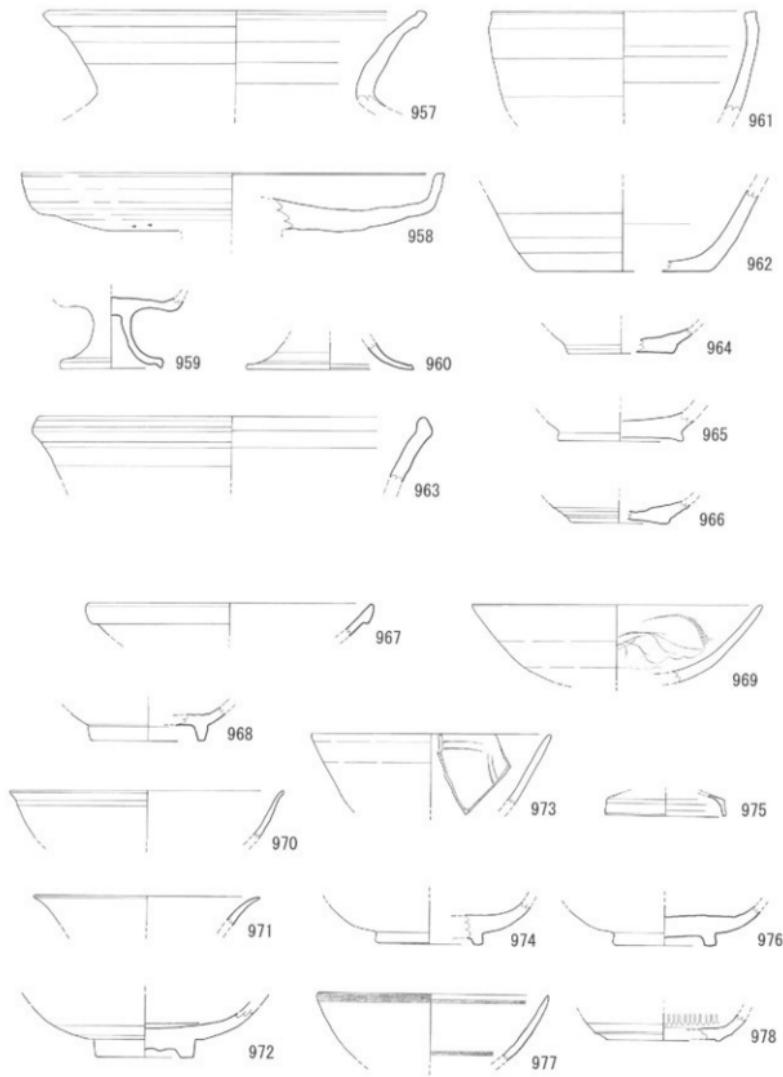


0 10cm

第4-115図 遺構外出土遺物実測図 - 弥生土器③ - (S=1/3)



第4-116図 遺構外出土遺物実測図 -須恵器(1)- (S=1/3)



0 10cm

第4-117図 遺構外出土遺物実測図 -須恵器②・陶磁器- (S=1/3)

第4-1表 羽場遺跡出土遺物観察表

遺物 番号	写真番号	出土位置	種別	形状 開閉	計測値(cm)		文様・調整		色調	備考
					口径	底径	高さ	内面	外側	
1	4-3	圓底 52 1区	SK01	弥生土器 甕	Ⅲ	15.2	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	明褐色	外面スス付有
2	4-3	圓底 52 1区	SK01	弥生土器 甕	Ⅲ~IV	7.0	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	明褐色	
3	4-3	圓底 52 1区	SK01	弥生土器 甕	Ⅲ	23.0	ナデ	ミガキ、ナデ	淡黄褐色	外面スス付有
4	4-3	圓底 57 1区	SK01	铁器 鍬	(6.5) 7.4					
5	4-4	圓底 53 1区	SK04	弥生土器 甕	Ⅲ	20.0	ミガキ	ナデ	明褐色	
6	4-4	圓底 53 1区	SK04	弥生土器 甕	Ⅲ	22.5	ナデ、刷毛目	刷毛目、ナデ	明褐色	
7	4-4	1区	SK04	弥生土器 甕	Ⅲ	21.2	刷毛目、ナデ	刷毛目、ナデ	明黄色	
8	4-4	圓底 53 1区	SK04	弥生土器 甕	Ⅲ~2	22.5	刷毛目	刷毛目、ナデ	明褐色	口縁部に刷毛目
9	4-4	圓底 53 1区	SK04	弥生土器 甕	Ⅳ	23.0	ナデ	ナデ	明褐色	
10	4-4	1区	SK04	弥生土器 甕	Ⅲ~IV	8.0	刷毛目	刷毛目	明褐色	
11	4-4	1区	SK04	弥生土器 甕	Ⅲ~IV	6.0	刷毛目	ミガキ、ナデ	浅黄褐色	
12	4-5	圓底 54 1区	落ち込み 弥生土器	甕	Ⅲ	33.0	ナデ	ナデ	灰白色	中期中盤切
13	4-5	1区 落ち込み	弥生土器	甕	Ⅲ~I	26.0	ナデ	ナデ	明褐色	口縁部に列点文
14	4-5	1区 落ち込み	弥生土器	甕	Ⅲ~I	25.0	刷毛目	刷毛目	明褐色	
15	4-5	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ~1~2	22.0	刷毛目	刷毛目、ナデ	明褐色	
16	4-5	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ	23.0	刷毛目、ナデ	刷毛目、ナデ	明褐色	
17	4-5	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ	25.0	刷毛目、ナデ	刷毛目、ナデ	明褐色	
18	4-5	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ	20.0	ナデ	ナデ	明褐色	
19	4-5	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ	26.0	ナデ	ナデ	明褐色	
20	4-5	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ	24.0	刷毛目	刷毛目	明褐色	
21	4-5	圓底 54 1区 落ち込み	弥生土器	甕	Ⅲ	13.0	ナデ	刷毛目、ナデ	明褐色	
22	4-5	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ~I	15.0	刷毛目、ナデ	刷毛目、ナデ	明褐色	口縁部に刷毛目
23	4-5	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	I?		ナデ	両毛辺	明褐色	
24	4-5	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ~I		ナデ	ナデ	明褐色	尖端
25	4-5	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	V~4?		ナデ	ナデ	明褐色	
26	4-6	圓底 54 1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ	31.0	ナデ	ナデ	明褐色	
27	4-6	圓底 53 1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ	24.0	J?	刷毛目	刷毛目	
28	4-6	圓底 53 1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅳ	24.0	ナデ	ナデ	明褐色	
29	4-6	圓底 53 1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ~I	29.5	刷毛目、ナデ	刷毛目、ナデ	明褐色	
30	4-6	圓底 53 1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ~I		刷毛目	刷毛目	明褐色	口縁部に列点文
31	4-6	圓底 53 1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ		ナデ	刷毛目	刷毛目	2条突起
32	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ		ナデ	刷毛目、ナデ	明褐色	
33	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ~I	20.0	刷毛目、ナデ	刷毛目、ナデ	淡黄褐色	
34	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ	22.0	ナデ	ナデ	淡黄褐色	
35	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ~I	15.5	ナデ	刷毛目、ナデ	淡黄褐色	
36	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ	21.0	ナデ	刷毛目、ナデ	淡黄褐色	
37	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ	21.0	ナデ	刷毛目、ナデ	淡黄褐色	
38	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ	19.5	ナデ	刷毛目、ナデ	淡黄褐色	
39	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	?	17.0	ナデ	刷毛目、ナデ	淡黄褐色	
40	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ	20.0	刷毛目、ナデ	刷毛目、ナデ	淡黄褐色	口縁部に刷毛目
41	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ	9.5	ナデ	刷毛目、ナデ	明褐色	
42	4-7	圓底 54 1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ~I	20.5	ナデ	ナデ	灰白色	
43	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	Ⅲ~I	19.0	ナデ	刷毛目、ナデ	明褐色	3条突起
44	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	?		ナデ	ナデ	明褐色	
45	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	?		ナデ	刷毛目、ナデ	明褐色	
46	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	?		ナデ	ナデ	明褐色	長さ 4.0cm
47	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	?		ナデ	ナデ	明褐色	長さ 5.0cm
48	4-7	1区 落ち込み	弥生土器 甕	甕	?		ナデ	ナデ	明褐色	長さ 4.0cm

遺物番号	種類	写真図版	出土位置	幅	長さ	厚さ	型式	計測値(cm)			文様・調整		色調	備考
								口径	底深	高さ	内面	外面		
49	4-7	1区	落ち込み 弦生土器	縫	III			7.0			ナデ	ナデ	明黄色	2カ所に穿孔
50	4-8	1区	落ち込み 弦生土器	縫	III			6.0			ナデ	ナデ	淡黄褐色	
51	4-8	1区	落ち込み 弦生土器	縫	III			6.0			ナデ	ナデ	淡黄褐色	
52	4-8	1区	落ち込み 弦生土器	縫	IV			7.0			ケズリ	ミガキ	淡黄褐色	
53	4-8	1区	落ち込み 弦生土器	縫	IV			7.0			ミガキ	ミガキ	淡黄褐色	
54	4-8	1区	落ち込み 弦生土器	縫	III~IV			7.0			刷毛目	刷毛目	淡黄褐色	
55	4-8	1区	落ち込み 弦生土器	縫	III			7.0			刷毛目	指紋状	淡黄褐色	
56	4-8	1区	落ち込み 弦生土器	縫	III?			6.0			ナデ	刷毛目、ナデ	淡黄褐色	
57	4-8	1区	落ち込み 弦生土器	縫	I			8.0			ミガキ	刷毛目、ナデ	淡黄褐色	
58	4-8	1区	落ち込み 弦生土器	縫	IV			7.0			刷毛目	刷毛目	明黄色	
59	4-8	1区	落ち込み 弦生土器	縫	IV			7.0			刷毛目	刷毛目	明黄色	
60	4-8	1区	落ち込み 弦生土器	縫	III~I						刷毛目、ナデ	ナデ、ミガキ	明黄色	
61	4-8	1区	落ち込み 弦生土器	縫	II?						ナデ	刷毛目、ナデ	明黄色	
62	4-8	1区	落ち込み 弦生土器	縫	II			5.3			真毛目	真毛目	明黄色	
63	4-8	1区	弦生土器	縫	III?						刷毛目	刷毛目	明黄色	
64	4-8	1区	落ち込み 弦生土器	縫	高坪						ミワキ	ミワキ	に赤い黃褐色	
65	4-8	1区	G9 横擦	弦生土器	土母								明褐色	
66	4-8	1区	G9 取抜	鉄薄									黒色	
67	4-9	1区	調査器	縫							ナデ	回転ナデ	淡灰色	
68	4-9	回版 55	1区	調査器	縫			18.5			ナデ	回転ナデ	淡灰色	
69	4-9	1区	調査器	縫				13.5			ナデ	ヘラケズリ	淡灰色	
70	4-9	回版 55	1区	調査器	縫						ナデ	回転ナデ	淡灰色	
71	4-9	1区	調査器	縫							ナデ	ナデ	淡灰色	
72	4-9	1区	調査器	縫				11.0			ナデ	回転ナデ	淡灰色	
73	4-9	1区	調査器	縫				8.0			ナデ	回転ナデ	淡灰色	
74	4-9	回版 55	1区	調査器	高坪			7.0			ナデ	ナデ	淡灰色	
75	4-9	1区	調査器	青苔付				7.0			ナデ	ナデ	淡灰色	
76	4-9	1区	調査器	縫				14.0			ナデ	回転ナデ	淡灰色	
77	4-9	回版 55	1区	調査器	縫			11.5			ナデ	回転ナデ	淡灰色	
78	4-9	1区	調査器	縫							ナデ	回転ナデ	淡灰色	
79	4-9	1区	調査器	縫							ナデ	回転ナデ	淡灰色	
80	4-9	回版 55	1区	調査器	縫			27.0			ナデ	ナデ	灰色	
81	4-9	1区	調査器	縫							ナデ	ナデ	淡灰色	
82	4-9	1区	調査器	縫							ナデ	ナデ	淡灰色	
83	4-9	1区	調査器	縫							ナデ	ナデ	淡灰色	
84	4-9	1区	調査器	縫							ナデ	ナデ	淡灰色	
85	4-9	1区	調査器	縫							ナデ	ナデ	灰色	
86	4-9	1区	調査器	縫							ナデ	ナデ	淡灰色	
87	4-9	1区	調査器	高坪				9.0			ナデ	ナデ	淡灰色	
88	4-10	1区	白磁	縫	IV	55.0					ナデ	ナデ	淡灰白色	玉緑
89	4-10	1区	白磁	縫	IV	14.5					ナデ	ナデ	淡灰白色	玉緑
90	4-10	1区	白磁	縫	IV	15.0					ナデ	ナデ	淡灰白色	玉緑
91	4-10	1区	白磁	縫	IV	13.5					ナデ	ナデ	淡灰白色	玉緑
92	4-10	1区	白磁	縫	IV	14.2					ナデ	ナデ	淡灰白色	玉緑
93	4-10	1区	白磁	縫	IV	14.5					ナデ	ナデ	淡灰白色	玉緑
94	4-10	回版 56	1区	白磁	縫			15.5			ナデ	ナデ	淡灰白色	
95	4-10	1区	白磁	縫				14.5			ナデ	ナデ	淡灰白色	
96	4-10	1区	白磁	縫				14.0			ナデ	ナデ	淡灰白色	
97	4-10	回版 56	1区	白磁	縫	V		6.0			ナデ	ナデ	淡灰白色	

植物 種名 標号	写真図版	出土位置	種別	基準	形式 時期	計測値(cm)	文様・柄装			色調	備考
							口径	底径	高さ		
98 4-10	1区	白磁	壺			10.0	ナデ	ナデ		淡灰白色	
99 4-10	1区	白磁	合子				ナデ	ナデ		淡灰白色	
100 4-10	1区	白磁	碗				ナデ	ナデ		淡灰白色	
101 4-10	1区	白磁	碟			4.8	ナデ	ナデ		淡灰白色	
102 4-10	1区	白磁	碟				ナデ	ナデ		淡灰白色	
103 4-10	圓瓶 56 1区	青磁	瓶	B1	13.0	ナデ	ナデ	ナデ	オリーブ灰色	褐色井	
104 4-10	圓瓶 56 1区	青磁					ナデ	ナデ	ナデ	オリーブ灰色	
105 4-10	1区	青磁	碗				ナデ	ナデ	ナデ	オリーブ灰色	濃黒系
106 4-10	圓瓶 56 1区	青磁	蓋				ナデ	ナデ	ナデ	灰褐色	円耳西か
107 4-10	1区	石列	青磁	碗		18.5	ナデ	ナデ	ナデ	黄灰色	
108 4-10	圓瓶 56 1区	青磁	碗			5.0	ナデ	ナデ	ナデ	オリーブ灰色	
109 4-10	圓瓶 56 1区	石列	青磁	碗		5.5	ナデ	ナデ	ナデ	黄灰色	円安窓
110 4-10	1区	青磁	碗			4.7	ナデ	ナデ	ナデ	明緑灰色	草花文
111 4-10	1区	青磁	碗				ナデ	ナデ	ナデ	明緑灰色	
112 4-10	1区	青磁	碗				ナデ	ナデ	ナデ	明緑灰色	
113 4-10	1区		天目				ナデ	ナデ	ナデ	茶褐色	
114 4-10	圓瓶 56 1区	青磁	碗			5.5	ナデ	ナデ	ナデ	オリーブ灰色	墨葉笠
115 4-10	1区	占花	盘	C		6.0	ナデ	ナデ	ナデ		
116 4-10	圓瓶 56 1区	青磁	青磁			9.0	ナデ	ナデ	ナデ	明緑灰色	
117 4-11	1区	陶器	盃			9.0	ナデ	ナデ	ナデ	オリーブ灰色	
118 4-11	1区	陶器	盃			15.2	ナデ	ナデ	ナデ	灰色	
119 4-11	1区	陶器	鉢			21.2	ナデ	ナデ	ナデ	灰色	
120 4-11	1区	陶器	合口 盆			16.0	ナデ	ナデ	ナデ	灰色	
121 4-11	圓瓶 56 1区	陶器	甕			8.0	ナデ	ナデ	ナデ	オリーブ灰色	四耳凸
122 4-11	圓瓶 56 1区	側面	錐錐			20.0	ナデ	ナデ	ナデ	茶褐色	
123 4-11	1区	側面	盃				ナデ	ナデ	ナデ	オリーブ灰色	
124 4-11	圓瓶 56 1区	側面	鉢				ナデ	ナデ	ナデ	灰白色	
125 4-11	圓瓶 57 1区	側面	鉢			15.8	ナデ	ナデ	ナデ	淡灰褐色	
126 4-11	1区	瓦質土器	火鉢			47.0	ナデ	ナデ	ナデ	灰色	
127 4-11	1区	瓦質土器	蓋?				ナデ	ナデ	ナデ	黑灰色	
128 4-11	圓瓶 57 1区	瓦質土器	火鉢			19.0	ナデ	ナデ	ナデ	淡灰褐色	
129 4-11	1区	陶器	鉢?				ナデ	ナデ	ナデ	淡灰褐色	
130 4-11	1区	土師器	鉢				ナデ	ナデ	ナデ	黄褐色	
131 4-11	圓瓶 57 1区	土師器	鉢			8.0	ナデ	ナデ	ナデ	茶褐色	
132 4-11	1区	瓦質土器	土器				ナデ	ナデ	ナデ	淡灰褐色	幅2.2cm
133 4-16	JA区 SK152	弥生土器	豆	III		17.0	ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	にぶい茶褐色 内:淡黃褐色	
134 4-16	JA区 SK152	弥生土器	甕	III - 2or IV 1		34.0	ナデ、刷毛目、指筋	ナデ、刷毛目、指筋	ナデ、刷毛目、指筋	にぶい明黄褐色 内:明黄褐色	外:背面ス付着
135 4-16	JA区 SK152	弥生土器	甕	III - 2		20.0	ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	にぶい茶褐色 内:にぶい黃褐色	外:明黄褐色 内:にぶい黃褐色
136 4-16	JA区 SK152	弥生土器	甕	II		15.3	ミガキ、ナデ、刷毛目、指筋	ミガキ、ナデ、刷毛目、指筋	ミガキ、ナデ、刷毛目、指筋	にぶい茶褐色 内:明黄褐色	外:内外ス付着
137 4-16	JA区 SK152	弥生土器	鉢	III		17.0	ナデ、刷毛目、指筋	ナデ、刷毛目、指筋	ナデ、刷毛目、指筋	にぶい茶褐色 内:明黄褐色	内外ス付着
138 4-16	JA区 SK152	弥生土器	甕	III		5.6	ナデ、刷毛目、指筋	ナデ、刷毛目、指筋	ナデ、刷毛目、指筋	にぶい茶褐色 内:明黄褐色	周化
139 4-19	JA区 SK9	弥生土器	豆	III		28.0	ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	にぶい黃褐色	
140 4-19	JA区 SK9	弥生土器	豆	III		26.0	ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	灰白色	
141 4-19	JA区 SK9	弥生土器	甕	I (新?)		24.0	ミガキ、ナデ、刷毛目、指筋	ミガキ、ナデ、刷毛目、指筋	ミガキ、ナデ、刷毛目、指筋	にぶい黃褐色	外:にぶい茶褐色 内:にぶい黃褐色
142 4-19	JA区 SK9	弥生土器	甕	I (新?)		17.8	ミガキ、ナデ、刷毛目、指筋	ミガキ、ナデ、刷毛目、指筋	ミガキ、ナデ、刷毛目、指筋	にぶい茶褐色 内:にぶい黃褐色	外:にぶい茶褐色 内:にぶい黃褐色
143 4-19	JA区 SK9	弥生土器	甕	III - 1		22.0	ミガキ、ナデ、刷毛目、指筋	ミガキ、ナデ、刷毛目、指筋	ミガキ、ナデ、刷毛目、指筋	にぶい茶褐色 内:にぶい黃褐色	外:にぶい茶褐色 内:にぶい黃褐色
144 4-19	JA区 SK9	弥生土器	甕	III		19.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	にぶい明黄褐色	
145 4-19	JA区 SK9	弥生土器	甕	III		19.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	にぶい明黄褐色	
146 4-19	JA区 SK9	弥生土器	鉢	III		19.6	ナデ、刷毛目、指筋	ナデ、刷毛目、指筋	ナデ、刷毛目、指筋	にぶい明黄褐色	内外ス付着

遺物 番号	地層 番号	写真図版	出土位置	種別	形態	計測値 (cm)	文様・算盤		色調	備考	
							内面	外側			
147 4-19	2A区	SK9	弥生土器	甕		20.2	ミガキ、ナデ、削毛目、彫削 刀痕	ナデ、指顎圧痕	外: 淡黄褐色 内: にふい黄褐色	内外スズ付着 風化	
148 4-19	2A区	SK9	弥生土器	甕		18.0	ナデ、削毛目、指顎圧痕	ナデ、指顎圧痕	外: 淡灰褐色 内: にふい黄褐色	内外スズ付着	
149 4-19	2A区	SK9	弥生土器	鉢	II	11.0	ミガキ、ナデ、削毛目、彫削 刀痕	ミガキ、ナデ、削毛目、指顎圧痕	灰黄褐色		
150 4-19	2A区	SK9	弥生土器	甕	I	13.0	ミガキ、ナデ、削毛目、彫削 刀痕	ミガキ、ナデ、削毛目、指顎圧痕	外: 淡灰褐色 内: にふい黄褐色	内外スズ付着	
151 4-19	2A区	SK9	弥生土器	甕	II or III	7.4	ナデ、削毛目、指顎圧痕	ナデ、削毛目、指顎圧痕	明黄褐色	内外スズ付着	
152 4-19	2A区	SK9	弥生土器	甕	II or III	7.2	ナデ、削毛目、指顎圧痕	ナデ、削毛目、指顎圧痕	にふい淡黄褐色	風化	
153 4-19	2A区	SK9	弥生土器	甕	III	5.4	ミガキ、ナデ、削毛目、彫削 刀痕	ミガキ、ナデ、削毛目、指 顎圧痕	明黄褐色	内外スズ付着	
154 4-19	2A区	SK9	弥生土器	甕	III	6.8	ナデ、削毛目、指顎圧痕	ミガキ、ナデ、削毛目	灰黄色	内外スズ付着	
155 4-20	2A区	SK9B	弥生土器	甕	II	24.8	ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目	にふい黄褐色		
156 4-20	2A区	SK9B	弥生土器	甕	II	20.6	ナデ、削毛目、指顎圧痕	ミガキ、ナデ、削毛目、指 顎圧痕	にふい黄褐色		
157 4-20	回収82	2A区	SK9B	弥生土器	甕	III	20.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、刀線跡に刀線	淡黃褐色	
158 4-20	2A区	SK9B	弥生土器	甕	III	20.0	ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目	外: 淡黄褐色 内: 淡灰色	風化	
159 4-20	2A区	SK9B	弥生土器	甕	III	24.0	ナデ	ナデ	にふい黄褐色		
160 4-20	2A区	SK9B	弥生土器	甕	III		ミガキ、ナデ	ナデ、削毛目、尖葉刺突文	羽翼褐色	頭へ口縁部	
161 4-20	2A区	SK9B	弥生土器	甕		6.4	ナデ、削毛目	ミガキ、削毛目	外: 淡黄褐色 内: 彩繪色	外因にスズor漆付着	
162 4-20	2A区	SK9B	弥生土器	甕	III	7.0	ナデ、削毛目、指顎圧痕	ミガキ、ナデ、削毛目、指 顎圧痕	外: 淡黄褐色 内: 彩繪色	内外スズ付着	
163 4-21	2A区	SK102	弥生土器	鉢	II	21.8	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、2条の細縦又 は横縞	にふい黄褐色	内外スズ付着	
164 4-21	回収82	2A区	SK102	弥生土器	甕	26.0	ナデ、削毛目、指顎圧痕	ナデ、削毛目	外: 淡黄褐色 内: にふい黄褐色	風化	
165 4-21	2A区	SK102	弥生土器	甕	III	22.6	ナデ、削毛目、指顎圧痕	ナデ、削毛目	明黄褐色	風化	
166 4-21	回収82	2A区	SK102	弥生土器	甕	III	ミガキ、ヘラケズノヘナデ	ナデ、削毛目	淡黃褐色	内外スズ付着	
167 4-21	2A区	SK102	弥生土器	甕		5.4	ミガキ、ヘラケズノヘナデ	ミガキ、ナデ、削毛目	外: にふい黄褐色 内: 淡灰色		
168 4-21	2A区	SK102	弥生土器	甕		6.2	ナデ、削毛目、指顎圧痕	ナデ、削毛目	明黄褐色		
169 4-21	2A区	SK102	弥生土器	甕		5.2	ミガキ、ナデ、指顎圧痕	ミガキ、ナデ、削毛目	にふい黄褐色		
170 4-21	2A区	SK102	弥生土器	甕		6.4	ナデ、削毛目、指顎圧痕	ナデ、削毛目	外: 明黄褐色 内: にふい黄褐色	内外スズ付着	
171 4-21	回収94	2A区	SK102	弥生土器	台付鉢	III	20.0	ミガキ、ナデ、指顎圧痕	ナデ、削毛目、指顎圧痕	にふい黄褐色	内外スズ付着
172 4-21	2A区	SK102	弥生土器	手舟			ナデ	ナデ	羽翼褐色		
173 4-22	2A区	SK9A	弥生土器	甕	III	27.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	淡黃褐色	風化気味	
174 4-22	2A区	SK9A	弥生土器	甕	III	23.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、指顎圧痕	外: にふい黄褐色 内: 淡黃褐色		
175 4-22	2A区	SK9A	弥生土器	鉢	II		ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外: 淡黃褐色 内: 淡灰色	風化	
176 4-22	2A区	SK9A	弥生土器	甕	V - 4	17.0	ナデ、削毛目	ナデ	明黄褐色	内外スズ付着 山系系統合口縫	
177 4-22	2A区	SK9A	弥生土器	甕	(新)		ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	淡黃褐色	風化 合口縫	
178 4-22	2A区	SK9A	弥生土器	甕	後期		沈埋				
179 4-22	2A区	SK9A	弥生土器	甕	II or III	1.8	ナデ、指顎圧痕	ナデ、削毛目	にふい黄褐色	口縫はつまみ縫	
180 4-22	2A区	SK9A	弥生土器	甕	III	6.2	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	淡黃褐色	底部の内外スズ付着	
181 4-22	2A区	SK9A	弥生土器	甕	III	7.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	にふい黄褐色	風化	
182 4-22	2A区	SK9S	弥生土器	甕	II	20.0	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ、口縫凹凸痕	外: にふい黄褐色 内: 淡灰色	内外スズ付着	
183 4-22	2A区	SK9S	弥生土器	甕	II	24.5	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	淡黃褐色	風化気味	
184 4-22	2A区	SK9S	弥生土器	甕	II	22.0	削毛後ミガキ及びナデ	三ガキ、ナデ、削毛目、ケン エツ工具による8字の平行凹 凸痕	外: にふい黄褐色 内: 床白色	外因スズ付着	
185 4-22	2A区	SK9S	弥生土器	甕	II	24.0	ナデ、削毛目	ミガキ、削毛目、指顎圧痕 5条の次縫、口縫凹凸目 縫	外: にふい黄褐色 内: にふい黄褐色	外因スズ付着	
186 4-22	2A区	SK9S	弥生土器	食	II	9.0	ミガキ	ミガキ	外: 黄褐色 内: 明黄褐色		
187 4-23	2A区	SK9S	弥生土器	食	(古)	19.0	ミガキ、削毛目	ミガキ、ナデ、指顎圧痕	淡黃褐色	風化	
188 4-23	2A区	SK9S	弥生土器	食	II	18.0	ミガキ、削毛目	削毛目、ヘラによる無触刃 せん	淡黃褐色	風化	
189 4-23	2A区	SK9S	弥生土器	食	(古)~(古)	25.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	淡黃褐色	外至口縫内縫にスズ付着	
190 4-23	2A区	SK9S	弥生土器	食	II	28.4	ミガキ、削毛目	ミガキ、ナデ	明黄褐色	風化	
191 4-23	2A区	SK9S	弥生土器	食	(1)~(1-1古)	36.0	ミガキ	ミガキ、削毛目、貝類壓痕 による複数の凹凸	外: にふい黄褐色 内: 明黄褐色		
192 4-23	2A区	SK9S	弥生土器	食	II	24.5	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、クレバ工具 による8字の平行凹凸痕	外: にふい黄褐色 内: 黄褐色		
193 4-23	2A区	SK9S	弥生土器	食		4.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	にふい黄褐色	手づくね風	
194 4-23	2A区	SK9S	弥生土器	食	II		ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、クレバ工具 による8字の平行凹凸痕	外: にふい黄褐色 内: 黄褐色		
195 4-23	2A区	SK9S	弥生土器	食	(古)	12.0	ヘラケズリ、ナデ、削毛目	ミガキ、削毛目	灰白色	外因スズ付着 風化気味	

遺物 登号	種類 名	写真図版	出土位置	種別	器種	型式 時期	計測値 口径 底径 幅高	cm)	文様・開閉		色調	備考
									内面	外面		
196-4-23	JAS	SK83	弥生土器	甕			5.2		ナデ、刷毛目、指鉗压痕	三ガキ、ナデ、刷毛目、し まり痕	白地	外腹ス付裏
197-4-23	JAS	SK83	弥生土器	甕			5.6 ¹		ヘラケズリ、ナデ、刷毛目		外：浅黄褐色 内：黄褐色	風化
198-4-23	JAS	SK83	弥生土器	甕			6.8		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	外腹ス付裏
199-4-23	JAS	SK83	弥生土器	甕			8.0		ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	内外ス付裏
200-4-24	JAS	SK82	弥生土器	甕	Ⅱ-2	19.0			ミガキ、ナデ	陶毛目ナデ返し、口端剥落 統制目突文	外：浅黄褐色 内：黄褐色	
201-4-24	JAS	SK82	弥生土器	甕	Ⅲ		17.0		刷毛目ナデ消し	陶毛目ナデ消し	外：浅黄褐色 内：浅黄褐色	風化気味
202-4-24	JAS	SK82	弥生土器	甕	Ⅲ		6.8		陶毛目ナデ	ミガキ、ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	風化
203-4-24 ¹	JAS	SK82	土壙								外：にぶい黄褐色 内：土壙色	有土壙、眞理模の 各保あり
204-4-24	JAS	SK82	土壙								にぶい黄褐色	有土壙、眞理模の 各保あり
205-4-24	JAS	SK87	弥生土器	甕	Ⅱ-Ⅲ	21.0			ナデ、刷毛目、指鉗压痕	ナデ、刷毛目、指鉗压痕	明黄褐色	外腹ス付裏
206-4-24	JAS	SK87	弥生土器	甕	Ⅲ	25.0			ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	黄褐色	風化
207-4-26	圓底 R2	JK8	弥生土器	甕	Ⅱ	33.0			ミガキ、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、クシ状工具 による羽状文	明黄褐色	
208-4-26	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅰ-Ⅳ	29.8			ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目 工具による羽状文	にぶい黄褐色	
209-4-26	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ	28.0			陶毛目	ナデ、刷毛目、クシ状工具 による羽状文	外：浅黄褐色 内：にぶい黄褐色	
210-4-26	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ	23.0			ミガキ	ミガキ、彌文	外：浅黄褐色 内：黄褐色	
211-4-26	圓底 R2	JK8	弥生土器	甕	I-II?	26.0			ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目 3条の凹線	にぶい黄褐色	外腹ス付裏
212-4-26	JAS	SK3	弥生土器	甕	I-II	17.0			ミガキ、ナデ、刷毛目、所附 庄屋	ミガキ、ナデ、陶毛目、施塗 庄屋、2条へら書き文字文	外：浅黄褐色 内：にぶい黄褐色	
213-4-26	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅱ	18.0			ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目、施 塗庄屋	外：にぶい黄褐色 内：浅黄褐色	
214-4-26	JAS	SK3	弥生土器	甕	I-II	21.0			ミガキ、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、ヘラ書き凹 線の上部	にぶい黄褐色	外腹ス付裏
215-4-26	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅱ?	20.6			ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、陶毛目、3 条の凹線	にぶい黄褐色	外腹ス付裏
216-4-26	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅱ	17.0			ナデ、刷毛目、指鉗压痕	ナデ、刷毛目、指鉗压痕	外：浅黄褐色 内：にぶい黄褐色	内外ス付裏
217-4-27	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ	35.0			ミガキ、ナデ、刷毛目、指鉗 压痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 鉗压痕	にぶい黄褐色	外腹ス付裏
218-4-27	JAS	SK3	弥生土器	甕		25.0			ミガキ、ナデ、刷毛目、指鉗 压痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 鉗压痕	にぶい黄褐色	外腹ス付裏
219-4-27	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅱ?	15.0			ミガキ、ナデ、刷毛目、指 鉗压痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 鉗压痕	にぶい黄褐色	内腹ス付裏
220-4-27	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ	23.6			ナデ、刷毛目、指鉗压痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 鉗压痕	にぶい黄褐色	外腹ス付裏
221-4-27	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ	14.0			ナデ、刷毛目、指鉗压痕	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：にぶい黄褐色 内：浅黄褐色	
222-4-27	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ	22.5			ミガキ、ナデ、刷毛目、擦擦 痕	ナデ、刷毛目、指鉗压痕	にぶい黄褐色	外腹ス付裏
223-4-27	JAS	SK3	弥生土器	甕		22.6			ミガキ、ナデ、指鉗压痕	ナデ、刷毛目	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	内腹ス付裏
224-4-27	JAS	SK3	弥生土器	甕		24.5			ナデ、陶毛目	ナデ、陶毛目、3条の凹線 文	外：にぶい黄褐色 内：浅黄褐色	風化
225-4-27	JAS	SK3	弥生土器	甕					ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、指 鉗压痕	にぶい黄褐色	
226-4-27	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ	26.0			ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	外腹ス付裏
227-4-27	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ				ミガキ、ナデ?	ミガキ、ナデ?	にぶい黄褐色	内腹ス付裏
228-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ?	10.0			ミガキ	ミガキ、刷毛目	にぶい黄褐色	大型の西
229-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕	II or III	6.0			ミガキ	ミガキ、ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	
230-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕	III?	6.2			ミガキ	ミガキ、刷毛目	にぶい黄褐色	風化気味
231-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ	11.0			ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 鉗压痕	にぶい黄褐色	内外ス付裏
232-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ?	9.0			ミガキ、ナデ	ミガキ?	にぶい黄褐色	
233-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ?	9.0			ミガキ	ミガキ、ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	
234-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ?	8.0			ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	
235-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ?	8.0			ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	
236-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ	6.2			ミガキ、指鉗压痕	ミガキ、刷毛目	にぶい黄褐色	外腹ス付裏 風化気味
237-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ?	7.4			ナデ、指鉗压痕	ミガキ、指鉗压痕	にぶい黄褐色	内腹ス付裏
238-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ?	5.0			ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	内腹ス付裏
239-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ?	7.4			ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	内外ス付裏
240-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕		8.0			ヘラズリ、ナデ	ナデ?	にぶい黄褐色	内腹ス付裏
241-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕		6.0			指鉗压痕	ナデ、指鉗压痕	にぶい黄褐色	
242-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕	III?	5.0			ミガキ、刷毛目	ミガキ、刷毛目	にぶい黄褐色	外腹ス付裏 風化
243-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕		6.4			刷毛目	刷毛目	にぶい黄褐色	外腹ス付裏
244-4-28	JAS	SK3	弥生土器	甕	Ⅲ?	6.2			ミガキ?	ミガキ、刷毛目	にぶい黄褐色	

遺物 番号	写真撮影 番号	出土位置	種別	器種	型式 判別	計測値 (cm)	文様・調整		色調	備考	
							内面	外面			
245	4-28	24区	SK3	弥生土器	甕	III?	6.2	三ガキ	三ガキ	内面スズ付着 風化	
246	4-28	24区	SK3	弥生土器	甕	III	8.0	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ、刷毛目	風化	
247	4-28	24区	SK3	弥生土器	甕		5.4	ナデ、刷毛目、指彌住痕		外側剥離	
248	4-28	24区	SK3	弥生土器	甕		8.0		指彌住痕	風化	
249	4-29	24区	SK4	弥生土器	甕	III	26.0	ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	灰白色 外周スズ付着 風化	
250	4-29	24区	SK4	弥生土器	甕	III		ミガキ、ナデ、刷毛目、指彌 住痕	ナデ、刷毛目	浅黃褐色	
251	4-29	24区	SK4	弥生土器	甕	III	28.6	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外：淡褐色 内：淡黃褐色 外周スズ付着 風化	
252	4-29	圆板 83	24区	SK4	弥生土器	焼	III (前)	17.0	ナデ、刷毛目、指彌住痕	ナデ、刷毛目	明黃褐色
253	4-29	24区	SK4	弥生土器	甕		6.0	刷毛目	ミガキ、刷毛目	風化	
254	4-30	24区	SD5	弥生土器	甕	III	20.0	ナデ	刷毛目、斜线条文	にぶい褐色	
255	4-30	24区	SD5	弥生土器	甕	III?	24.0	ミガキ、ナデ、指彌住痕	ナデ、刷毛目、凸線?	浅黃褐色 風化	
256	4-30	24区	SD5	弥生土器	甕	I?	18.0	ミガキ、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外：淡褐色 内：にぶい黃褐色 外周スズ付着 風化	
257	4-30	24区	SD5	弥生土器	焼	III	24.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	にぶい黃褐色	
258	4-30	24区	SD5	弥生土器	甕	III?	22.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	深褐色	
259	4-30	24区	SD5	弥生土器	台付鉢	III	16.0	ミガキ、指彌住痕	ミガキ、ナデ	外：淡黃褐色 内：灰白色 風化	
260	4-30	24区	SD5	弥生土器	甕			刷毛目?	刷毛目ナデ	風化	
261	4-30	24区	SD5	弥生土器	甕				羽状文	褐色	
262	4-30	24区	SD5	弥生土器	甕		7.2	ナデ、指彌住痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 彌住痕	外：にぶい褐色 内：にぶい黃褐色 外周スズ付着 風化	
263	4-30	圆板 83	24区	SD6	弥生土器	甕	III?	34.0	ナデ	ナデ	外：深褐色 内：深褐色
264	4-30	24区	SD6	弥生土器	焼	III?	13.0	ミガキ、ナデ	ナデ?	外：にぶい褐色 内：灰黃褐色 風化	
265	4-30	24区	SD6	弥生土器	甕	I ~ II?		ナデ、指彌住痕		浅黃褐色	
266	4-30	24区	SD6	弥生土器	甕		14.0	ナデ	ミガキ、ナデ	外：褐色 内：にぶい褐色	
267	4-30	24区	SD6	弥生土器	甕		9.0	ナデ、指彌住痕	ナデ、刷毛目	外：褐色 内：にぶい褐色 外周スズ付着 風化	
268	4-30	24区	SD6	弥生土器	甕		7.0	指彌住痕	ミガキ、ナデ、指彌住痕	外：褐色 内：黑色	
269	4-30	24区	SD6	弥生土器	甕		6.4	ナデ	ナデ、刷毛目	外：褐色 内：灰褐色 風化	
270	4-31	24区	SD6	弥生土器	甕	III	19.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	深黃褐色 風化	
271	4-31	24区	SD6	弥生土器	甕		6.4	ナデ	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：褐色 内：灰褐色	
272	4-31	24区	SD6	弥生土器	甕		7.0	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	外：にぶい褐色 内：にぶい黃褐色 風化	
273	4-31	24区	SD6	弥生土器			7.0	ナデ、指彌住痕	ナデ、指彌住痕	にぶい褐色	
274	4-31	24区	P314	弥生土器	甕	III	36.0	ナデ	ミガキ、刷毛目、無輪羽状文	外：にぶい褐色 内：褐色	
275	4-31	24区	P314	弥生土器	甕		30.0	ナデ	ナデ	褐色	
276	4-31	24区	P314	弥生土器	甕	III	24.0	ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：黃褐色 内：にぶい褐色	
277	4-31	24区	P314	弥生土器	甕			ミガキ、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、突起文?	外：淡黃褐色 内：灰白色 風化	
278	4-31	24区	P314	弥生土器	甕	III?	6.0	ナデ、刷毛目、指彌住痕	ミガキ、刷毛目	にぶい黃褐色	
279	4-34	24区	SK95	弥生土器	甕	I ~ II?	14.2	ミガキ、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、指彌住痕、 5角の沈縫、有輪羽状文	明黃褐色	
280	4-34	24区	SK95	弥生土器	甕	III	22.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、突起文	にぶい黃褐色 風化	
281	4-34	24区	SK95	弥生土器	甕	II		ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、刷毛目、指彌住痕、 突起文?	外：明黃褐色 内：にぶい褐色	
282	4-34	圆板 83	24区	SK95	弥生土器	甕	III	26.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、指彌住痕、 6角の沈縫の進行沈縫文	外：明黃褐色 内：にぶい褐色
283	4-34	圆板 83	24区	SK95	弥生土器	甕	III	26.0	ミガキ、ヘラケズリ、ナデ、 刷毛目、指彌住痕	ナデ、刷毛目、指彌住痕	外：淡黃褐色 内：灰白色
284	4-34	24区	SK95	弥生土器	甕	III	19.8	ヘラケズリ、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、指彌住痕	外：淡黃褐色 内：灰白色 外周スズ付着 風化	
285	4-34	24区	SK95	弥生土器	甕	III?	7.0	ナデ、刷毛目、指彌住痕	ミガキ、ナデ、刷毛目	にぶい黃褐色 外周スズ付着	
286	4-34	24区	SK95	弥生土器	甕	III	7.0	ミガキ、ナデ、刷毛目、指彌 住痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 彌住痕	にぶい黃褐色	
287	4-34	24区	SK95	弥生土器	甕	III	23.4	ナデ、刷毛目、指彌住痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 彌住痕	外：淡黃褐色 内：灰白色 風化	
288	4-34	24区	SK95	弥生土器	小甕	III?	4.2	ナデ、刷毛目、指彌住痕	ナデ、刷毛目	明黃褐色	
289	4-34	24区	SK95	弥生土器	甕	III?	7.0	ミガキ、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外：にぶい黃褐色 内：明黃褐色	
290	4-35	24区	SK103	弥生土器	甕		17.6	ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：にぶい黃褐色 内：にぶい黃褐色	
291	4-35	24区	SK103	弥生土器	甕	III	23.0	刷毛目、指彌住痕	ミガキ、ナデ、刷毛目	外周スズ付着	
292	4-35	24区	SK103	弥生土器	甕	III		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	風化 大生の春	
293	4-35	24区	SK103	弥生土器	甕	III		ミガキ、ヘラケズリ、ナデ、 刷毛目	刷毛目	灰白色 大生の春	

済物 番号	写真回数	生息位置	種別	脚柱	型式 時期	計測値 (cm)	文様・模様			色調	備考	
							口徑	底径	器高	内面	外面	
294 4-35	JAB	SK103	弥生土器	筒	?	5.8				ナデ、指輪圧痕	外：青黄褐色 内：にいし黃褐色	風化
295 4-35	JAB	SK103	弥生土器	筒	?	5.8				ミガキ、鳥毛目	外：明黄色 内：灰褐色	
296 4-35	JAB	SK143	弥生土器	筒	III	13.2				ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	にいし黃褐色
297 4-35	JAB	SK143	弥生土器	筒	III?	30.4				ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	浅黃褐色
298 4-35	JAB	SK143	弥生土器	筒	III					ナデ、刷毛目、2本の劍条 炎文	ナデ、刷毛目、2本の劍条 炎文	風化
299 4-35	JAB	SD7	弥生土器	筒	III	14.0				ナデ、指輪圧痕、無輪の劍条 炎文	ナデ、指輪圧痕、無輪の劍条 炎文	風化
300 4-36	JAB	SD15	弥生土器	筒	III	28.0				ミガキ、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外：浅黃褐色 内：灰白色
301 4-36	JAB	SD15	弥生土器	筒	III					ミガキ、ナデ	ナデ、刷毛目、突堤	橙色
302 4-36	JAB	SD15	弥生土器	筒		6.8				ナデ、指輪圧痕	ナデ、指輪圧痕	にいし黃褐色
303 4-36	JAB	SD15	弥生土器	筒		6.8				ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	浅黃褐色
304 4-36	JAB	SK52	弥生土器	筒	III	19.2				ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	にいし黃褐色
305 4-36	JAB	SK52	弥生土器	筒	III?	7.2				ナデ、高毛目	ナデ、刷毛目	明黃褐色
306 4-36	JAB	SK13	弥生土器	筒	II or III	29.8				刷毛目	ミガキ	外：灰白色 内：浅黃褐色
307 4-36	JAB	SK13	弥生土器	筒						ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	にいし黃褐色
308 4-42	JAB	SK52	弥生土器	筒	III	16.0				ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、斜目施文	外：にいし黃褐色 内：灰白色
309 4-42	JAB	SK52	弥生土器	筒	III					ナデ、指輪圧痕	ミガキ、ナデ、刷毛目	浅黃褐色
310 4-42	JAB	SK1	弥生土器	筒	III					ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	浅黃褐色
311 4-42	JAB	SK1	弥生土器	筒	III					ナデ、刷毛目	ナデ、突堤文	外：にいし黃褐色 内：灰白色
312 4-42	JAB	SK1	弥生土器	筒	III					ミガキ、ナデ、高毛目、指 輪圧痕	ナデ、刷毛目	外：にいし黃褐色 内：灰白色
313 4-42	JAB	SK2	弥生土器	筒	III					ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、突堤文	浅黃褐色 大型の亞
314 4-42	JAB	SK3	弥生土器	筒	III	18.8				ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目、突 堤文	外：にいし黃褐色 内：浅黃褐色
315 4-42	JAB	SK75	弥生土器	筒	III					ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、刷毛目	にいし黃褐色
316 4-42	JAB	SK75	弥生土器	筒	III	5.4				ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：にいし黃褐色 内：灰白色
317 4-42	JAB	SK77	弥生土器	筒	III?	7.0				ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ、ナデ	外：にいし黃褐色 内：灰白色
318 4-42	JAB	SK78	弥生土器	筒	III	16.0				ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外：にいし黃褐色 内：灰白色
319 4-42	JAB	SK78	弥生土器	筒	III					ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目、刻 文文	浅黃褐色
320 4-42	JAB	SK78	弥生土器	筒	III	35.2				ミガキ、ナデ、高毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：灰白色 内：灰褐色
321 4-43	JAB	SK79	弥生土器	筒	III	14.6				ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、刷毛目、たなき	灰黃褐色 内外スス付着
322 4-43	JAB	SK79	弥生土器	筒		36.0				ミガキ、刷毛目	ミガキ	浅黃褐色 内外スス付着
323 4-43	JAB	SK79	弥生土器	筒	III	6.6				ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：にいし黃褐色 内：灰白色
324 4-43	JAB	SK79	弥生土器	筒	III	5.4				ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	灰黃褐色
325 4-43	JAB	SK90	弥生土器	筒	II or III	5.6				ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目	外：灰白色 内：灰褐色
326 4-44	JAB	SK81	弥生土器	筒	II or III	10.4				ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	内面スス付着
327 4-44	JAB	SK81	弥生土器	筒	III	16.4				ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	風化
328 4-44	JAB	SK81	弥生土器	筒	II	17.8				ナデ?	ナデ、クレット工具による浅 縫、刻毛目文	浅黃褐色
329 4-44	JAB	SK81	弥生土器	筒	II	19.6				ミガキ、ナデ	ナデ、クレット工具による浅 縫、刻毛目文	浅黃褐色
330 4-44	JAB	SK81	弥生土器	筒	II	17.0				ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	灰白色
331 4-44	JAB	SK81	弥生土器	筒	II or III	21.0				ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	にいし黃褐色 内外スス付着
332 4-44	JAB	SK81	弥生土器	筒	II?	19.4				ミガキ、刷毛目	ミガキ、刷毛目、タグ状 具による平行凹縫	にいし黃褐色 内外スス付着
333 4-44	JAB	SK81	弥生土器	筒	II?	20.0				ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	にいし黃褐色
334 4-44	JAB	SK81	弥生土器	筒	II or III	8.0				ミガキ、ナデ	ナデ、刷毛目	研磨褐色 内外スス付着
335 4-44	JAB	SK81	弥生土器	筒	II or III	8.6				ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、刷毛目	にいし黃褐色 風化
336 4-44	JAB	SK81	弥生土器	筒	II or III	7.1				ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：にいし黃褐色 内：にいし黃褐色
337 4-44	JAB	SK81	弥生土器	筒	II or III	9.8				ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：研磨褐色 内：にいし黃褐色 内外スス付着
338 4-45	JAB	SK71	弥生土器	筒	II					ナデ、突堤文	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：灰白色 内：にいし黃褐色
339 4-45	JAB	SK72	弥生土器	筒		7.8				ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	淡黃褐色
340 4-45	JAB	SK72	弥生土器	筒		6.0				ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	灰黃褐色 風化
341 4-45	JAB	SK72	弥生土器	筒		9.0				ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	にいし黃褐色 風化
342 4-45	JAB	SK73	弥生土器	筒						ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	にいし黃褐色

標本 番号	写真範囲	出土位置	種別	其種	型式 隔壁	計測値 (cm)	文様・調整		色調	備考
							口徑	底径	内面	外面
343-4-45	JAH SK104	弥生土器	豆	II ~ III	13.4		ミガキ、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、新目刺突文(受部)	外：黒褐色 内：黒褐色	黒化
344-4-45	JAH SK104	弥生土器	豆		9.0		ナデ、刷毛目、指印压痕	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：灰ふじ黄褐色 内：灰褐色	
345-4-45	JAH SK122	弥生土器	壺	III	34.0		ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	
346-4-45	JAH SK122	弥生土器	壺	II	17.0		刷毛目ナデ、ミガキ	ミガキ、ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	外側スリ付着
347-4-45	JAH SK122	弥生土器	壺	II	5.2		ミガキ、ナデ、刷毛目、指印压痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指印压痕	外：灰ふじ黄褐色 内：にぶい黄褐色	
348-4-45	JAH SK122	弥生土器	壺		5.4		ミガキ、ナデ、指印压痕	ナデ、刷毛目	外：灰褐色 内：灰褐色	内外スリ付着
349-4-46	JAH SD2	弥生土器	壺	I ~ 2	17.0		ヘラケズリ、ナデ、指印压痕	ナデ、刷毛目、指印压痕	外：灰褐色 内：にぶい黄褐色	内外スリ付着
350-4-46	JAH SD2	弥生土器	壺	I	19.0		ヘラケズリ後刷毛目、ナデ	ナデ、刷毛目	外：灰褐色 内：にぶい黄褐色	
351-4-46	JAH SD2	弥生土器	壺	I ~ 4	23.0		ヘラケズリ後ナデ	ナデ、刷毛目	にぶい褐色	黒化
352-4-46	圓版 84 JAH SD2	弥生土器	壺		21.0		ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目、4 種のう縁引き洗削	にぶい黄褐色	
353-4-46	JAH SD2	弥生土器	壺	I ~ 4			ヘラケズリ、ナデ	ナデ、刷毛目、沈跡?	にぶい黄褐色	
354-4-46	JAH SD2	弥生土器	壺	I			ヘラケズリ、ナデ	ナデ、刷毛目、沈跡?	にぶい褐色	
355-4-46	JAH SD2	弥生土器	壺	II			ナデ、刷毛目、指印压痕	刷毛目、指印压痕	灰褐色	
356-4-46	JAH SD2	弥生土器	壺	II			ナデ、刷毛目、指印压痕	ナデ、刷毛目、指印压痕、ク シ状工具による多条の洗削	にぶい褐色	外側スリ付着
357-4-46	JAH SD2	弥生土器	壺	II ~ III	18.0	7.0	ミガキ、ヘラケズリ、ナデ、 刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	外側スリ付着
358-4-46 圓版 84 JAH SD2	弥生土器	壺	II	19.0			ミガキ、ヘラケズリ、ナデ	刷毛目	外：灰褐色 内：にぶい黄褐色	外側スリ付着
359-4-47	JAH SD2	弥生土器	壺	III	18.4		ミガキ、ナデ	ナデ、刷毛目、指印压痕	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	外側スリ付着
360-4-47	JAH SD2	弥生土器	壺	III	21.0		ヘラケズリ、ナデ、指印压痕	ナデ、刷毛目、指印压痕	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	黒化
361-4-47	JAH SD2	弥生土器	壺	II	18.0		ヘラケズリ	ナデ	外：にぶい褐色 内：深紫褐色	外側スリ付着
362-4-47	JAH SD2	弥生土器	壺	II	20.0		ヘラケズリ後ナデ	ナデ、刷毛目	浅黃褐色	黒化
363-4-47	JAH SD2	弥生土器	壺	II	16.0		ヘラケズリ後ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	黒化
364-4-47	JAH SD2	弥生土器	壺	I	8.0		ナデ、指印压痕	ナデ、刷毛目	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	
365-4-47	JAH SD2	弥生土器	壺		8.6		ナデ、指印压痕	ナデ	外：にぶい褐色 内：灰褐色	
366-4-47	JAH SD2	弥生土器	壺		8.0		ナデ、指印压痕	ナデ、刷毛目	にぶい褐色	
367-4-47 圓版 94 JAH SD2	弥生土器	壺	III		6.5		ミガキ、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	外側スリ付着
368-4-47 圓版 94 JAH SD2	弥生土器	壺			6.0		ナデ、指印压痕	ナデ、刷毛目、指印压痕	外：浅黃褐色 内：灰褐色	
369-4-47	JAH SD2	弥生土器	壺		6.0		ミガキ、ナデ、指印压痕	ミガキ、ナデ	外：褐色 内：灰褐色	
370-4-47	JAH SD2	弥生土器	壺		5.0		ナデ、指印压痕	ナデ、指印压痕	外：にぶい褐色 内：黑色	
371-4-47	JAH SD2	弥生土器	壺		7.0		指印压痕	ナデ	にぶい褐色	黒化
372-4-47	JAH SD2	弥生土器	壺		7.0		ナデ	ナデ、刷毛目	外：褐色 内：にぶい褐色	外側スリ付着
373-4-48	JAH SD2	弥生土器	壺		6.0		ナデ、刷毛目、指印压痕	ナデ、刷毛目、指印压痕	外：にぶい褐色 内：黑色	
374-4-48	JAH SD2	弥生土器	高杯		19.0		ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	外：褐色 内：黑色	外側スリ付着
375-4-48	JAH SD2	弥生土器	高杯				刷毛目	刷毛目	にぶい黄褐色	
376-4-48	JAH SD2	織紋土器	深鉢				ナデ、口縁に刮削			
377-4-48 圓版 84 JAH SK25	弥生土器	壺	新		23.2		ナデ、刷毛目、指印压痕	ナデ、刷毛目	外：にぶい黄褐色 内：灰白色	
378-4-48 圓版 84 JAH SK25	弥生土器	壺	新				ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目、4 種以上の突起部	浅黃褐色	
379-4-48 圓版 84 JAH SK25	弥生土器	壺	新	III			ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ	外：にぶい黄褐色 内：灰褐色	黒化
380-4-48	JAH SD3	弥生土器	壺		5.0		ナデ?	ナデ	外：にぶい褐色	黒化
381-4-52	JAH SK7	弥生土器	白		20.0		ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目、格子文	外：にぶい黄褐色 内：灰白色	
382-4-52	JAH SK7	弥生土器	白		8.0		ミガキ、ナデ、刷毛目	刷毛目	外：褐色 内：黑色	黒化
383-4-52	JAH SK8	弥生土器	壺	III ~ IV	20.0		ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目、黄 褐色	にぶい黄褐色	
384-4-52	JAH SK8	弥生土器	壺	III			ナデ、刷毛目、指印压痕	ナデ、刷毛目、指印压痕	外：黒褐色	
385-4-52	JAH SK8	弥生土器	壺		6.0		ナデ、刷毛目	ミガキ、刷毛目	内：黒褐色	
386-4-52	JAH SK8	弥生土器	壺		8.0		ヘラケズリ、ナデ、刷毛目、 指印压痕	ナデ、刷毛目、指印压痕	外：にぶい黄褐色 内：灰褐色	
387-4-52	JAH SK11	弥生土器	壺	II	30.0		ミガキ	ミガキ、ナデ、刷毛目、 指印压痕	外：にぶい黄褐色 内：灰褐色	外側スリ付着
388-4-53 圓版 84 JAH SK145	弥生土器	壺	II ~ 17	22.0			ミガキ、ヘラケズリ、ナデ、 刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目、 指印压痕、凹状文	浅黃褐色	
389-4-53	JAH SK145	弥生土器	壺	IV ~ 3	15.0		ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：にぶい黄褐色 内：灰褐色	
390-4-53	JAH SK146	弥生土器	壺		16.0		ミガキ、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	浅黃褐色	黒化
391-4-53 圓版 94 JAH SK146	弥生土器	壺	III		46.0		ミガキ、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、7種の平行 凹溝、周縁強調の突起	外：黒褐色	

漁港 種類 標本番号	本邦固有地 出土地	種類	器種	型式 時期	計測値 (cm) 口徑 底径 鰓高	文様・調整		色調	備考
						内面	外 面		
392-4-53	JA区 SK146	寄生土器	春	新	15.0	ミガキ、ナデ	ミガキ、口縁部に凹輪	淡黃褐色	
393-4-53	JA区 SK146	寄生土器	春	Ⅲ?	33.0	ナデ	ミガキ、ナデ、削毛目		
394-4-53	JA区 SK146	寄生土器	夏	Ⅲ	15.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、沈縫、薄縫 列波文	灰白色	
395-4-53	JA区 SK146	寄生土器	春	Ⅲ	17.0	ミガキ	ナデ、沈縫、列波文		
396-4-53	JA区 SK146	寄生土器	春	夏	19.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、列波文	に赤い黒褐色	
397-4-53	JA区 SK146	寄生土器	春	Ⅲ?	22.0	ナデ、削毛目、右側三縫	ナデ、削毛目、右側三縫		
398-4-53	JA区 SK146	寄生土器	春	?	20.0	ミガキ、ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目 ナデ、削毛目、口縁部に凹輪	外: 灰色 内: 黑褐色	
399-4-53	國版 85 JA区 SK146	寄生土器	夏	Ⅲ	30.0	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ、削毛目 ナデ、削毛目、口縁部に凹輪	外: 淡褐色 内: 灰白色	
400-4-53	JA区 SK146	寄生土器	夏	Ⅲ~Ⅳ?		ミガキ	ナデ?		風化 大型の呑
401-4-53	JA区 SK146	寄生土器	夏	Ⅲ		ミガキ、ナデ、削毛目	ナデ、削毛目		
402-4-54	JA区 SK146	寄生土器	春	Ⅲ or IV	18.0	ナデ、指輪疣痕	ナデ、削毛目、指輪疣痕		風化
403-4-54	JA区 SK146	寄生土器	夏	I - 3	17.0	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ、削毛目、平 行沈縫		
404-4-54	JA区 SK146	寄生土器	夏	I	25.0	ナデ、削毛目	ミガキ、削毛目、3条のヘラ 溝及び沈縫	外: に赤い褐色 内: 灰白色	風化
405-4-54	JA区 SK146	寄生土器	夏	I - 4	19.2	ミガキ、削毛目	ミガキ、削毛目、ヘラ溝及び 平行沈縫	外: に赤い褐色 内: 灰白色	風化
406-4-54	JA区 SK146	寄生土器	夏	?	23.0	ミガキ?、ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、4条のヘラ 溝及び平行沈縫	に赤い褐色	
407-4-54	JA区 SK146	寄生土器	夏	II - 17	20.0	削毛目	削毛目、クシ巻き平行沈縫		風化
408-4-54	JA区 SK146	寄生土器	夏	II	21.0	ナデ、削毛目、指輪疣痕	ミガキ、ナデ、削毛目、指輪疣痕 ツジ状工具による3条の沈縫	浅黃褐色	
409-4-54	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	23.0	ミガキ、ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外: に赤い褐色 内: 灰白色	
410-4-54	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	19.0	ナデ、削毛目、指輪疣痕	ナデ、削毛目	外: に赤い褐色 内: 浅黃褐色	
411-4-54	JA区 SK146	寄生土器	夏	?	25.0	ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ	褐色	風化
412-4-54	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	15.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外: 褐色 内: 浅黃褐色	
413-4-54	JA区 SK146	寄生土器	夏	II ~ III?	26.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外: 褐色 内: 黑褐色	風化
414-4-54	JA区 SK146	寄生土器	夏	?	13.0	ミガキ?、ナデ、削毛目、指輪 疣痕	ミガキ?、ナデ、削毛目	灰白色	風化
415-4-55	國版 85 JA区 SK146	寄生土器	夏	III	31.0	ミガキ? ヘラズイリ、指輪 疣痕	ミガキ?、ナデ、削毛目	外: 淡黃褐色 内: 灰白色	
416-4-55	JA区 SK146	寄生土器	夏	II or III	22.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、口縁部に 浅いV字形の細縫		
417-4-55	JA区 SK146	寄生土器	夏	III?	19.0	ミガキ?、ナデ、削毛目、指 輪疣痕	ミガキ?、ナデ、削毛目	外: に赤い褐色 内: 浅黃褐色	外覆ス付着
418-4-55	JA区 SK146	寄生土器	夏	II ~ III?	23.0	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ、氨基目		
419-4-55	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	19.0	ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目		
420-4-55	JA区 SK146	寄生土器	夏	III?	23.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外: 褐色 内: に赤い褐色	
421-4-55	JA区 SK146	寄生土器	夏	III?	19.0	ミガキ?、ナデ	ナデ		
422-4-55	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	21.0	ナデ?、削毛目	ナデ?、削毛目	外: 通透褐色 内: 褐色	
423-4-55	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	14.0	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ	外: に赤い褐色 内: 通透褐色	風化
424-4-55	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	18.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、指輪疣痕	外: に赤い褐色 内: 通透褐色	
425-4-55	國版 85 JA区 SK146	寄生土器	夏	III	23.0	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目	外: に赤い褐色 内: 通透褐色	
426-4-55	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	18.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	に赤い褐色	
427-4-55	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	20.5	ミガキ、ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目	外: 通透褐色 内: 褐色	風化
428-4-55	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	12.0	ミガキ?、ナデ、削毛目、指 輪疣痕	ミガキ?、ナデ、削毛目	外: に赤い褐色 内: 通透褐色	
429-4-56	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	19.0	ミガキ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目	外: 通透褐色 内: 褐色	
430-4-56	JA区 SK146	寄生土器	夏	IV	20.0	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目	に赤い褐色	外覆ス付着
431-4-56	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	23.6	ミガキ、ナデ、削毛目	ナデ、削毛目		外覆ス付着
432-4-56	JA区 SK146	寄生土器	夏	-	20.2	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目		外覆ス付着
433-4-56	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	23.0	ミガキ?、ナデ	ミガキ、削毛目		
434-4-56	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	19.0	ナデ	ナデ、削毛目	橙色	
435-4-56	JA区 SK146	寄生土器	夏	III - 1	28.2	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目	淡黃褐色	
436-4-56	JA区 SK146	寄生土器	夏	III - 1	29.0	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目	淡黃褐色	風化
437-4-56	JA区 SK146	寄生土器	夏	-	10.0	ナデ、削毛目、指輪疣痕	ミガキ、以場、波次文	外: 淡褐色 内: 明黄色	外覆ス付着
438-4-56	JA区 SK146	寄生土器	夏	III?	20.0	ミガキ?、ナデ、削毛目	削毛目、指輪疣痕、クシ巻 工具による3条平行沈縫	に赤い褐色 内: 明黄色	
439-4-56	JA区 SK146	寄生土器	夏	III	-	ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目	外: に赤い褐色 内: 明黄色	外覆ス付着
440-4-57	國版 85 JA区 SK146	寄生土器	夏	III	28.0	ナデ?、削毛目?	ミガキ?、ナデ、削毛目、指 輪疣痕、鉛縫	外: 淡黃褐色 内: 通透褐色	風化

遺物 番号	写真解説	出土位置	種別	器種	型式	計測値 (cm)	文様・範囲		色調	備考	
							内面	外面			
441-4-57		2区	SK146	弥生土器	甕	III	ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目、指 輪陶	外：灰褐色 内：浅黄褐色		
442-4-57		2区	SK146	弥生土器	甕	III	ミガキ、ナデ?	ミガキ、ナデ?			
443-4-57		2区	SK146	弥生土器	甕	III	ミガキ、ナデ?	ミガキ、ナデ、削毛目	外：灰褐色 内：灰白色	風化	
444-4-57		2区	SK146	弥生土器	甕	III	ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目	外：灰白色 内：灰白色		
445-4-57		2区	SK146	弥生土器	甕	III	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外：灰褐色 内：灰褐色	内スス付着	
446-4-57		2区	SK146	弥生土器	甕	III or IV	J デ、削毛目	ナデ、削毛目、指輪陶	内スス付着	風化	
447-4-57		2区	SK146	弥生土器	甕	?	ミガキ?、ナデ、削毛目	ナデ、削毛目			
448-4-57		2区	SK146	弥生土器	鉢	III?	26.0	ミガキ?、ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外：灰褐色 内：浅黄色	スス付着
449-4-57		2区	SK146	弥生土器	鉢	III?	13.0	ミガキ?	ミガキ?、ナデ		手づくね風
450-4-57		2区	SK146	弥生土器	鉢	I	20.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目		
451-4-57		2区	SK146	弥生土器	壺	I (新)	剥毛後ミガキ? + ナデ	ナデ、削毛目、沈縫	外：褐色 内：灰褐色		
452-4-57		2区	SK146	弥生土器	壺	I or II?	ナデ?、削毛目	ミガキ?、6~7 品のヘラ 押さ子平行沈縫	外：灰褐色 内：灰褐色	風化	
453-4-57		2区	SK146	弥生土器	壺	III	ミガキ、削毛目	ナデ、削毛目、糠穀柄文、 クシ工具による点印	外：灰褐色 内：灰褐色		
454-4-57		2区	SK146	弥生土器	壺	I	ミガキ、削毛目	ミガキ、消状文	外：灰褐色 内：灰褐色		
455-4-57		2区	SK146	弥生土器	壺			沈縫	外：灰褐色 内：灰褐色	風化	
456-4-57		2区	SK146	弥生土器	壺			沈縫	外：灰褐色 内：灰褐色	風化	
457-4-57		2区	SK146	弥生土器	壺	II	ナデ、削毛目	沈縫	外：灰褐色 内：灰褐色	風化	
458-4-57		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?、ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、グリザイユ による 4 品のヘラ押さ子	外：深褐色 内：深褐色		
459-4-58	回版 85	2区	SK146	弥生土器	壺	I - 3?	ミガキ?、ナデ	ミガキ?、ナデ、削毛目、3 品以上の沈縫	外：深褐色 内：灰白色	風化	
460-4-58	回版 85	2区	SK146	弥生土器	壺	II	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、削毛目、凹縮、突 起文	外：灰褐色 内：灰褐色		
461-4-58	回版 85	2区	SK146	弥生土器	壺	III	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目、凹 縮	外：灰褐色 内：灰白色	風化	
462-4-58	2区	SK146	弥生土器	壺	II		ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目、 手印上の 4 パタ打き沈縫	外：灰褐色		
463-4-58	2区	SK146	弥生土器	壺	III?		ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目、3 品以上の 4 パタ打き沈縫	内：灰褐色		
464-4-58	2区	SK146	弥生土器	壺			ナデ	ミガキ?、ナデ、削毛目、9 品以上の 4 パタ打き沈縫	外：灰褐色 内：灰褐色	外面に赤色顔料	
465-4-58	2区	SK146	弥生土器	壺	III?		ミガキ?、ナデ、削毛目、施脂 痕	ミガキ?、削毛目、13 品以上 の 4 パタ打き沈縫	外：灰褐色 内：灰褐色		
466-4-58	2区	SK146	弥生土器	壺	III?		ミガキ?、ナデ、削毛目、施脂 痕	ミガキ?、ナデ、削毛目、13 品 以上の 4 パタ打き沈縫	外：灰褐色 内：灰褐色		
467-4-58	2区	SK146	弥生土器	壺	II		ナデ、削毛目	ミガキ?、7 条の平行沈縫	外：灰褐色 内：灰褐色	風化	
468-4-58	2区	SK146	弥生土器	壺	II?		ナデ、削毛目	ナデ、7 条以上のヘラ引き 沈縫	外：灰褐色		
469-4-58	2区	SK146	弥生土器	壺	II?		ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目、2 品の ヘラ引き、斜面擦痕と施脂痕	外：灰褐色 内：灰褐色	内面に入付着?	
470-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	(新)	削毛目	削毛目、ヘラ引き平行沈縫	外：灰褐色 内：灰褐色	風化	
471-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II	ミガキ?、ナデ、削毛目	無文、グリザイユによる 5 条以上の沈縫	外：灰褐色 内：灰褐色	内面入付着	
472-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目	内：灰褐色		
473-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I (新)	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目、4 条の沈縫	外：灰褐色 内：灰褐色		
474-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目	外：灰褐色 内：灰褐色		
475-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺		削毛目	削毛目	外：灰褐色 内：灰白色	風化	
476-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺		ナデ	削毛目	外：深褐色 内：灰褐色		
477-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	III	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目	外：灰褐色 内：灰褐色		
478-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I	11.6	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目	外：灰褐色 内：灰褐色	
479-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I	11.4	ミガキ?、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目	外：灰白色 内：深褐色	内面風化頗る
480-4-59	回版 95	2区	SK146	弥生土器	壺	I	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外：深褐色 内：灰褐色	風化	
481-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I	ミガキ?、ナデ?、削毛目、 指輪陶	ミガキ?、ナデ?、削毛目、 指輪陶	外：灰褐色 内：灰褐色		
482-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II	ミガキ?、ナデ、削毛目?	ナデ、削毛目?	外：深褐色 内：深褐色		
483-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I?	ナデ、削毛目	ミガキ?、削毛目	外：灰褐色 内：灰褐色		
484-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I	8.0	削毛目、指輪陶	ナデ、削毛目	外：深褐色 内：灰褐色	風化
485-4-59	回版 95	2区	SK146	弥生土器	壺	I	ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目、 指輪陶	外：深褐色 内：灰褐色	外面にスス(漆皮)あり	
486-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
487-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?、ナデ	ミガキ?、ナデ、削毛目		風化	
488-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目	外：灰褐色 内：灰褐色	内面入付着	
489-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I	9.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外：灰褐色 内：灰褐色	
490-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I	13.0	ミガキ?、ナデ?、削毛目、 指輪陶	ナデ、削毛目	外：灰褐色 内：灰褐色	
491-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	3.0	ミガキ?、ナデ、削毛目?	ナデ、削毛目?	外：深褐色 内：深褐色		
492-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I?	ナデ、削毛目	ミガキ?、削毛目	外：灰褐色 内：灰褐色		
493-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I	11.6	ミガキ?、削毛目	ミガキ?、削毛目	外：灰褐色 内：深褐色	内面風化頗る
494-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I	11.4	ミガキ?、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目	外：灰白色 内：深褐色	内面風化頗る
495-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I	9.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外：深褐色 内：灰褐色	
496-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I	13.0	ミガキ?、ナデ?、削毛目、 指輪陶	ナデ、削毛目	外：灰褐色 内：灰褐色	
497-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	3.0	ミガキ?、ナデ、削毛目?	ナデ、削毛目?	外：深褐色 内：深褐色		
498-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I?	ナデ、削毛目	ミガキ?、削毛目	外：灰褐色 内：灰褐色		
499-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	I?	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外：深褐色 内：灰褐色		
500-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
501-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
502-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
503-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
504-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
505-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
506-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
507-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
508-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
509-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
510-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
511-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
512-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
513-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
514-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
515-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
516-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
517-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
518-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
519-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
520-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
521-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
522-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
523-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
524-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
525-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
526-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
527-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
528-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
529-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
530-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
531-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
532-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
533-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
534-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
535-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
536-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
537-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
538-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
539-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
540-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
541-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
542-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
543-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
544-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
545-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
546-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
547-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
548-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
549-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
550-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
551-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
552-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
553-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
554-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
555-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
556-4-59		2区	SK146	弥生土器	壺	II?	ミガキ?	ミガキ?、ナデ、削毛目			
557-4-59											

類別 種固 留番号	寄生菌属	出土位置	種別	器種	式期 時代	計測値 (cm)	文様・絞部		色調	備考
							口徑	底径	高さ	
490 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺	I	10.6	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	外：褐色 内：浅黃褐色	
491 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		6.2	ミガキ、刷毛目	ミガキ、刷毛目	外：浅黃褐色 内：褐色	外レスス付着
492 4-60	回版 95	JA区	SK146	寄生土器	壺	7.0	ミガキ、ナデ、指輪圧痕	ミガキ、ナデ、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	
493 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		11.4	ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：灰褐色 内：浅黃褐色	風化
494 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		8.0	ミガキ、ナデ、指輪圧痕	ナデ、指輪圧痕	浅黃褐色	外レスス付着
495 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		7.0	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	
496 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		9.4	ミガキ、ナデ	刷毛目、万字	外：褐色 内：褐色	
497 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		7.0	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ、刷毛目	外：褐色 内：浅黃褐色	風化断面
498 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺	III?	6.6	ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、刷毛目	外：褐色 内：褐色	
499 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺	I	7.4	ナデ、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	浅黃褐色	外レスス付着
500 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		7.0	ナデ、指輪圧痕	ミガキ、ナデ、刷毛目	灰褐色	外レスス付着
501 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		5.8	ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：褐色 内：褐色	やや風化
502 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺	I	7.0	ミガキ、ナデ、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	
503 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		8.0	ミガキ、刷毛目	ミガキ、刷毛目	外：褐色 内：褐色	
504 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		5.8	ミガキ、ナデ、指輪圧痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	外：褐色 内：灰褐色	外レスス付着
505 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		8.8	ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：褐色 内：褐色	風化
506 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		8.0	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	ナデ、刷毛目	外：浅黃褐色 内：褐色	外レスス付着
507 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		6.0	ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、刷毛目、指輪圧痕	外：褐色 内：褐色	
508 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		5.6	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目	外：灰褐色 内：浅黃褐色	やや風化
509 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		9.4	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外：褐色 内：褐色	風化
510 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		5.8	ミガキ、ナデ、指輪圧痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	外：深褐色 内：灰褐色	外レスス付着
511 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		3.6	ミガキ、ナデ、指輪圧痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	外：褐色 内：灰褐色	
512 4-60	JA区	SK146	寄生土器	壺		5.6	ミガキ、ナデ、指輪圧痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	外：褐色 内：灰褐色	
513 4-60	JA区	SK147	寄生土器	壺	II	17.2	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
514 4-61	回版 86	JA区	SK147	寄生土器	壺	20.8	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
515 4-61	JA区	SK147	寄生土器	壺	III?	17.0	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
516 4-61	回版 86	JA区	SK147	寄生土器	壺	24.0	ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：灰褐色 内：灰褐色	風化断面
517 4-61	JA区	SK147	寄生土器	壺		17.4	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	
518 4-61	JA区	SK147	寄生土器	壺	III	24.0	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	
519 4-61	JA区	SK147	寄生土器	壺	III?	17.0	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
520 4-61	JA区	SK147	寄生土器	壺		10.0	ナデ、指輪圧痕	指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
521 4-61	JA区	SK147	寄生土器	壺	III	23.6	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
522 4-62	JA区	SK147	寄生土器	壺	III	29.0	ミガキ、ナデ、指輪圧痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
523 4-62	JA区	SK147	寄生土器	壺	III	31.0	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
524 4-62	JA区	SK147	寄生土器	壺	III	28.4	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
525 4-62	回版 86	JA区	SK147	寄生土器	壺	32.6	ヘラケヌリ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
526 4-63	JA区	SK147	寄生土器	壺		21.4	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
527 4-63	JA区	SK147	寄生土器	壺		23.0	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
528 4-63	JA区	SK147	寄生土器	壺		24.0	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
529 4-63	JA区	SK147	寄生土器	壺		23.0	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
530 4-63	JA区	SK147	寄生土器	壺	III?	28.2	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
531 4-63	JA区	SK147	寄生土器	壺	III	28.0	ヘラケヌリ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	ヘラケヌリ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
532 4-63	JA区	SK147	寄生土器	壺		15.0	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
533 4-63	回版 95	JA区	SK147	寄生土器	壺	11.0	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
534 4-63	JA区	SK147	寄生土器	壺	III?	8.4	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
535 4-63	回版 95	JA区	SK147	寄生土器	壺	6.4	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	外レスス付着
536 4-64	回版 96	JA区	SK147	寄生土器	壺	28.0	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	浅黃褐色	
537 4-64	JA区	SK147	寄生土器	壺		28.0	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外：灰褐色 内：灰褐色	
538 4-64	JA区	SK147	寄生土器	壺	III	28.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	浅黃褐色	外レスス付着

遺物	博物 館番 号	英萬山出 土位置	柱別	種類	型式 特徴	計測値 (cm) 口径	計測値 (cm) 底径	計測値 (cm) 高さ	文様・調理		色調	備考	
									内	外			
539	4-64	圆底 86	24区	SK147	弥生土器	鉢	III	27.6			淡黄褐色	圓化輪著 内外スッペ付	
540	4-64		24区	SK147	弥生土器	甕	II?	7.0	三方キ	ミガキ		圓面スッペ付	
541	4-64	圆底 95	24区	SK147	弥生土器	甕	III?	7.4	ナデ、削毛目、削頭底	ナデ、削毛目	淡灰白色 内:淡棕色		
542	4-64	圆底 95	24区	SK147	弥生土器	甕		9.0	ナデ、削毛目、削頭底	ナデ、削毛目、施鉛注意	にぶい黄褐色	外面スッペ付	
543	4-64	圆底 95	24区	SK147	弥生土器	甕		5.8	ナデ、削頭底	ナデ、削毛目	にぶい黄褐色	外面スッペ付	
544	4-65		24区	SK147	弥生土器	甕	III	14.4	ヘラケズリ?、ナデ、削毛目、削頭底	ナデ、削毛目、削頭底	淡黄褐色		
545	4-65		24区	SK147	弥生土器	甕	III		ミガキ、ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目、施鉛注意 上にぶい黄褐色、削頭底化、方便	ミガキ、ナデ、削毛目	圓面文2段と引狀文 2段を斜め不規則	
546	4-65		24区	SK147	弥生土器	甕	II or III?		三方キ、ナデ、削毛目、削頭底	ミガキ、ナデ、削毛目	にぶい黄褐色		
547	4-65		24区	SK147	弥生土器	甕	I?		ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目	淡白色		
548	4-65		24区	SK147	弥生土器	甕	II?		ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目、太母、外:施鉛色 内:施鉛色	沈化を斜め刺突文で 2段に区画		
549	4-65		24区	SK147	弥生土器	甕	II		ミガキ、ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目、施鉛 方便	にぶい黄褐色		
550	4-66		24区	SK148	弥生土器	甕	和	31.2	ミガキ、ナデ、削頭底	ミガキ、ナデ、削毛目、外:施鉛色 内:施鉛色	圓面文2段と引狀文 2段を斜め不規則	圓面文2段と引狀文 2段を斜め不規則	
551	4-66		24区	SK148	弥生土器	甕	III	23.0	削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目	淡白色		
552	4-66	圆底 87	24区	SK148	弥生土器	甕	III		ナデ、削毛目、削頭底	ミガキ、ナデ、削毛目、外:施鉛色 内:施鉛色	外:施鉛色 内:施鉛色		
553	4-66		24区	SK148	弥生土器	甕	I		ミガキ、ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目、6 点のへこみ、手平刃边缘	淡黄褐色		
554	4-66		24区	SK148	弥生土器	甕	III	19.7	ヘラケズリ?、ナデ、削毛目、削頭底	ナデ、削毛目	にぶい黄褐色	外面スッペ付 變化	
555	4-66		24区	SK148	弥生土器	甕	II?	20.5	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	淡黄色	外面スッペ付	
556	4-66		24区	SK148	弥生土器	甕	III?	17.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、施鉛注意	外:にぶい黄褐色 内:施鉛色	圓化	
557	4-66		24区	SK148	弥生土器	甕	III		ナデ、削毛目、削頭底	ナデ、削毛目、施鉛注意、刻文	にぶい黄褐色		
558	4-66		24区	SK148	弥生土器	甕		8.6	ナデ、削頭底		にぶい黄褐色		
559	4-66		24区	SK148	弥生土器	甕	I?	8.2	ナデ、削毛目、削頭底	ナデ、削毛目	にぶい黄褐色		
560	4-67		24区	SK66	弥生土器	甕	III	24.0	複縫繩目文	ナデ、複縫繩目文	外:施鉛色 内:施鉛色	圓面スッペ付	
561	4-67		24区	SK65	弥生土器	甕	III?	6.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、削頭底	にぶい黄褐色	圓化	
562	4-67		24区	SK65	弥生土器	甕	II?	5.4	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目	外:にぶい黄褐色 内:施鉛色	圓面スッペ付	
563	4-67		24区	SK30	弥生土器	甕			ミガキ	ミガキ	淡白色		
564	4-67		24区	SK30	弥生土器	甕		6.2	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外:淡黃褐色 内:淡黃褐色		
565	4-67		24区	SK99	弥生土器	甕	III	19.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外:羽美褐色 内:淡黃褐色	圓面スッペ付	
566	4-67		24区	SK99	弥生土器	甕	II?	6.0	ナデ、削毛目、削頭底	ミガキ?、ナデ、削毛目	外:にぶい黄褐色 内:施鉛色	圓面スッペ付	
567	4-68		24区	SD1	弥生土器	甕	III?	20.0	ミガキ?、ナデ	ミガキ?、ナデ、施縫繩次に削毛目	にぶい棕色		
568	4-68		24区	SD1	弥生土器	甕	III	25.0	ナデ	ナデ、施縫繩文?	外:淡黃褐色 内:棕色		
569	4-68		24区	SD1	弥生土器	甕	III		ナデ	ナデ	淡黄色		
570	4-68		24区	SD1	弥生土器	甕		9.6	ミガキ、ナデ	ナデ、断面三角形の実底文	暗白色	圓化	
571	4-68	圆底 87	24区	SD1	弥生土器	甕	III~IV?	25.0	ヘラケズリ?、ナデ?	ナデ	淡黄褐色	圓化	
572	4-68	圆底 87	24区	SD1	弥生土器	甕	II?	25.0	7.8	26.0 ヘラケズリ?、ナデ?	ナデ?、削毛目	淡黄褐色	圓化
573	4-68		24区	SD1	弥生土器	甕	I~III		ヘラケズリ?、ナデ	ナデ	淡黃褐色	圓化	
574	4-68		24区	SD1	弥生土器	甕			ヘラケズリ?、ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、施縫繩	外:暗褐色 内:明赤褐色		
575	4-68		24区	SD1	弥生土器	甕			ヘラケズリ?、ナデ	ヘラケズリ?、ナデ	外:羽美褐色 内:淡黃褐色		
576	4-68		24区	SD1	弥生土器	甕	I?		ナデ	ナデ、施縫繩文	外:淡黃褐色 内:棕色		
577	4-68		24区	SD1	弥生土器	甕	II~III?	5.5	ミガキ?、ナデ、削頭底	ミガキ?、ナデ、削頭底	外:淡黃褐色 内:棕色		
578	4-68		24区	SD1	弥生土器	甕	I?	7.0	ナデ?、施縫繩文	ナデ	外:にぶい棕色 内:棕色		
579	4-68		24区	SD1	弥生土器	甕	II or III	5.8	ナデ、施縫繩文	ナデ、施縫繩文	外:にぶい棕色 内:棕色		
580	4-68		24区	SD1	弥生土器	甕		6.4	ヘラケズリ?、ナデ、削頭底	ナデ	外:にぶい棕色 内:棕色		
581	4-68		24区	SD1	弥生土器	甕		6.4	ミガキ?、ナデ、削頭底	ナデ、削毛目	外:淡黃褐色 内:棕色		
582	4-69		24区	SK92	弥生土器	甕	III?	20.0	ミガキ?、ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、施鉛注意、刻文	外:淡黃褐色 内:棕色		
583	4-69		24区	SK92	弥生土器	甕	III	15.2	ミガキ?、ナデ、削毛目、削頭底	ミガキ?、ナデ、削毛目	外:黑褐色 内:明黃褐色	圓面スッペ付	
584	4-69		24区	SK93	弥生土器	甕		6.6	ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目	明黃褐色		
585	4-69		24区	SK93	弥生土器	甕		5.2	ナデ、削毛目	削毛目	明黃褐色	圓化	
586	4-69		24区	SK91	弥生土器	甕	II	19.0	ミガキ?、ナデ、削頭底、削縫繩	ミガキ?、ナデ、削毛目	外:にぶい棕色 内:削頭底		
587	4-69		24区	SD8	弥生土器	甕		8.0	ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ	外:にぶい棕色 内:棕色		

標識番号	学名	寄生個体数	出土地點	種別	群種	型式時期	計測値(cm)	文様・病害		色調	備考	
								内面	外側			
588 4-71	DA区 SK59	弥生土器	甕	三		5.4	ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：にいし黄色 内：明るい黄色	内外スス付着		
589 4-71	DA区 SK60	弥生土器	甕	四		7.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外：にいし黄褐色 内：深黄褐色	風化		
590 4-71	DA区 SK36	弥生土器	甕	四?		7.0	ナデ	ナデ、刷毛目、指揮	にいし黄褐色			
591 4-71	DA区 SK35	弥生土器	甕	四		4.8	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	にいし黄褐色	内外スス付着		
592 4-71	DA区 P75	弥生土器	甕	三	31.0		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外：にいし黄褐色 内：浅黄褐色	風化		
593 4-71	DA区 P447	弥生土器	甕	三	32.0		ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 揮	外：にいし黄褐色 内：深黄褐色	風化		
594 4-71	DA区 SK33	弥生土器	甕	三	25.4		ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：灰褐色 内：浅黄褐色	風化 内外スス付着		
595 4-71	DA区 SK33	弥生土器	甕	四			ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目、3 箇以上の断面三角形突起文	にいし黄褐色			
596 4-71	DA区 SK33	弥生土器	甕	四		8.4	ミガキ?、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	明黄褐色	風化気味		
597 4-71	DA区 SK33	弥生土器	甕	三		7.4	ナデ、指揮	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：明黄褐色 内：にいし黄褐色	内外スス付着 風化		
598 4-71	DA区 SK33	弥生土器	甕	三		7.4	ナデ、指揮	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 揮	外：にいし黄褐色 内：深黄褐色	内外スス付着		
599 4-71	DA区 SK33	弥生土器	甕	四?					にいし黄褐色			
600 4-72	DA区 SK1	弥生土器	甕	I系～II系	18.0		ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目、5 条のへうき文	外：深黄褐色 内：灰白色	風化		
601 4-72	DA区 SK1	弥生土器	甕	初			ミガキ、ナデ	ミガキ、正規文				
602 4-72	DA区 SK1	弥生土器	甕	變		21.8	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、5条のねじ	にいし黄褐色			
603 4-72	DA区 SK1	弥生土器	甕			28.4	刷毛目、指揮	ナデ、刷毛目、指揮	外：灰褐色 内：褐色			
604 4-72	DA区 SK1	弥生土器	甕	II系～III系	21.0		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、指揮	外：褐色 内：灰褐色			
605 4-72	DA区 SK1	弥生土器	甕	I			ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、沈縫	褐色			
606 4-73	DA区 SK1	弥生土器	甕	II系	24.0		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外：にいし黄褐色 内：深黄褐色	風化		
607 4-73	DA区 SK1	弥生土器	甕		23.2		刷毛目、指揮					
608 4-73	DA区 SK1	弥生土器	甕		26.0		刷毛目	ナデ、刷毛目	浅黄褐色	風化		
609 4-73	DA区 SK1	弥生土器	甕				ミガキ、ナデ、指揮	ナデ、刷毛目、指揮	外：深黄褐色 内：灰白色			
610 4-73	DA区 SK1	弥生土器	甕		13.2		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外：灰褐色 内：にいし黄褐色			
611 4-73	DA区 SK1	弥生土器	甕				ミガキ、刷毛目	ミガキ、刷毛目、画面三角 形のへうき文	外：深黄褐色			
612 4-73	DA区 SK1	弥生土器	甕		9.0	4.0	7.0	ナデ、刷毛目、指揮	ナデ、刷毛目、指揮	外：褐色 内：灰褐色		
613 4-73	DA区 SK1	弥生土器	甕		7.0		ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：にいし黄褐色 内：灰褐色			
614 4-73	DA区 SK1	弥生土器	甕	I系～II系	9.0		刷毛後ナデ	刷毛後ナデ	外：にいし黄褐色 内：褐色			
615 4-73	DA区 SK1	弥生土器	甕		5.6		刷毛後ナデ	刷毛後ミガキ	外：灰褐色 内：白褐色			
616 4-73	DA区 SK1	弥生土器	甕		7.6			ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	外：明黄褐色 内：深黄褐色	風化	
617 4-73	DA区 SK1	弥生土器	甕	III系?	8.0		ナデ	ナデ	外：にいし黄褐色 内：深黄褐色	風化		
618 4-73	DA区 SK1	弥生土器	甕		5.2		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外：にいし黄褐色 内：深黄褐色	上底状		
619 4-77	DA区 SK128	弥生土器	甕	四	19.0		ミガキ、ナデ、刷毛目、指 揮	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 揮	外：にいし黄褐色 内：灰褐色	内外スス付着		
620 4-77	DA区 SK128	弥生土器	甕	前?	23.4		ミガキ?, ハラケズリ、ナ デ、指揮	ナデ、刷毛目、指揮	外：暗灰褐色 内：にいし黄褐色	内外スス付着		
621 4-77	DA区 SK128	弥生土器	甕	四?	19.4		ミガキ、ナデ、刷毛目、指 揮	ナデ、刷毛目、指揮	外：深黄褐色 内：にいし黄褐色	内外スス付着		
622 4-77	DA区 SK128	弥生土器	甕		12.2		ナデ、指揮	ナデ、刷毛目、指揮	外：深黄褐色 内：暗灰褐色			
623 4-77 国研 96	DA区 SK128	弥生土器	長脚甕	三	3.0		ナデ、刷毛目、指揮	ミガキ、刷毛目	灰白色	内外スス付着		
624 4-77	DA区 SK128	弥生土器	甕				ミガキ?, ハラケズリ、ナ デ、指揮	ミガキ?, ナデ、刷毛目	外：にいし黄褐色 内：褐褐色	内外スス付着		
625 4-77	DA区 SK128	弥生土器	甕	四?	7.8		ナデ、刷毛目、指揮	ナデ、刷毛目、指 揮	にいし黄褐色	内外スス付着		
626 4-77 国研 96	DA区 SK128	弥生土器	甕	四?	5.4		ハラケズリ、ナデ、指 揮	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 揮	外：明黄褐色 内：深黄褐色	内外スス付着		
627 4-77	DA区 SK128	弥生土器	甕	四?	6.8		ナデ、刷毛目、指 揮	ナデ、刷毛目	内面スス付着			
628 4-77	DA区 SK128	弥生土器	甕		9.6		ミガキ、ナデ、刷毛目、指 揮	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：浅黄褐色 内：灰白色	風化 内外スス付着		
629 4-77	DA区 SK128	铁釜										
630 4-78	DA区 SK129	弥生土器	甕	四	22.4		刷毛目	ナデ、刷毛目	灰白色	風化		
631 4-78	DA区 SK129	弥生土器	甕	四?			ミガキ?, ナデ、刷毛目	ミガキ?, ナデ、刷毛目	外：にいし黄褐色 内：明黄褐色			
632 4-78	DA区 SK131	弥生土器	甕	四	28.4		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	にいし黄褐色 内：明黄褐色			
633 4-78	DA区 SK131	弥生土器	甕	四?	10.8		ミガキ、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	浅黄褐色			
634 4-78	DA区 SK131	弥生土器	甕	四?	9.2		ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	外：にいし黄褐色 内：にいし黄褐色			
635 4-79	DA区 SK131	弥生土器	甕	四?	25.6		ミガキ?, ナデ、指 揮	ミガキ?, ナデ、指 揮	浅黄褐色 内：灰白色			
636 4-79	DA区 SK131	弥生土器	甕	四?	31.0		ミガキ、ナデ、刷毛目、指 揮	ミガキ、ナデ、刷毛目、指 揮	外：にいし黄褐色 内：灰白色	内外スス付着		

进物 番号	押出 番号	等級	出土位置	種別	絶対 年	型式 時期	計測値 (cm)	文様・彫像		色調	備考
								口徑	底面		
631	4-79	回版 87	28区 SK137	弥生土器	唐	II	27.4	ナデ、削毛目	J.フ、削毛目、指揮庄痕、6条以上の波線	灰白色	
638	4-79	28区	SK137	弥生土器	唐	II?	19.0	ミガキ、ナデ、削毛目、指 揮庄痕	ナデ、削毛目	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	
639	4-79	28区	SK137	弥生土器	壺		10.8	ナデ、削毛目、指揮庄痕	ミガキ、ナデ、削毛目	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	外曲ス付着
640	4-79	28区	SK137	弥生土器	甕	II?	7.4	三方半?、ナデ、削毛目、指 揮庄痕	ナデ、削毛目	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	内外スス付着
641	4-82	回版 87	28区 SK126	弥生土器	甕	III	34.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目		
642	4-82	28区	SK126	弥生土器	甕	II?	24.8	ミガキ、ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、クシ状工具 による波状文?	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	
643	4-82	28区	SK126	弥生土器	甕	II?	20.0	ミガキ?、ナデ、削毛目、指 揮庄痕	ナデ、削毛目	外:真黄色 内:にぶい黄褐色	内外スス付着
644	4-82	28区	SK126	弥生土器	春		11.4	ミガキ?、ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ	明黄色	外曲ス付着
645	4-82	回版 96	28区 SK126	弥生土器	壺		9.6	三方半?、ナデ、削毛目、指 揮庄痕	ミガキ、ナデ、削毛目	浅黄褐色	外曲ス付着
646	4-83	回版 87	28区 SK127	弥生土器	甕	III	30.8	ナデ、削毛目、西周庄痕	ナデ、削毛目	灰白色	
647	4-83	28区	SK127	弥生土器	甕	III	22.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	浅黄褐色	
648	4-83	28区	SK127	弥生土器	甕	III		ミガキ、ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目	外:にぶい黄褐色 内:浅黄色	
649	4-83	28区	SK127	弥生土器	甕	II?	5.2	ナデ、削毛目、指揮庄痕	ミガキ?、削毛目	外:にぶい黄褐色 内:灰褐色	内外スス付着
650	4-83	28区	P376	弥生土器	甕	III		ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	灰白色	
651	4-83	28区	SK123	弥生土器	甕	I	18.0	ナデ、削毛目、指揮庄痕	ミガキ?、ナデ、削毛目、4 条のくら縦き平行波線	にぶい黄褐色	
652	4-83	28区	SK123	弥生土器	甕		25.4	ナデ、削毛目?	ナデ、削毛目、4条のくら 縦き平行波線	浅黄褐色	風化
653	4-83	28区	SK123	弥生土器	甕	I		三方半?、ナデ、削毛目?	ミガキ?、ナデ、4段以上の 斜波状平行波線による波状文	浅黄褐色	
654	4-83	28区	SK123	弥生土器	甕	I?	9.2	ナデ、削毛目、指揮庄痕	ナデ、削毛目	外:初唐褐色 内:浅黄褐色	
655	4-84	回版 98	28区 SK124	弥生土器	甕	III	23.0	ナデ、削毛目、指揮庄痕	ナデ、削毛目、理練胡蘿蔴文	にぶい黄褐色	
656	4-84	回版 98	28区 SK124	弥生土器	甕	III	20.6	ナデ、削毛目、指揮庄痕	ナデ、削毛目、指揮庄痕、 4条のくら縦き平行波線	外:灰白色 内:浅黄褐色	
657	4-84	回版 98	28区 SK124	弥生土器	甕	III	17.6	ナデ、削毛目、指揮庄痕	ミガキ?、ナデ、削毛目	灰白色	
658	4-84	28区	SK124	弥生土器	甕	I		三方半	削毛目、凹狀、波状文	灰黃褐色	
659	4-84	28区	SK124	弥生土器	甕	III	25.2	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、指揮庄痕	灰白色	内面にコゲ付着
660	4-84	28区	SK124	弥生土器	甕	III	6.6	ナデ、削毛目、指揮庄痕	ミガキ?、ナデ、削毛目	青:浅黄褐色 内:灰白色	
661	4-84	28区	SK124	弥生土器	甕			ナデ、削毛目、指揮庄痕	ナデ?、削毛目	風化	
662	4-84	28区	SK125	弥生土器	甕	III	18.0	三方半?、ナデ、削毛目?	ミガキ?、ナデ、削毛目	外:にぶい黄褐色 内:灰黃褐色	
663	4-84	28区	SK125	弥生土器	甕	III?	18.5	ナデ	ナデ、指揮庄痕、沈縞?, 口縞に引け文?	褐褐色	風化
664	4-84	28区	SK125	弥生土器	甕	II~III?		ナデ、削毛目	ミガキ?、削毛目?、ナデ、3 条のくら縦き平行波線	外:真黄色 内:灰白色	
665	4-84	28区	SK125	弥生土器	甕	III		三方半?、ナデ、削毛目?	ミガキ?、ナデ、4段以上の 斜波状平行波線による波状文	外:浅黄褐色	外曲ス付着
666	4-84	28区	SK125	弥生土器	甕	II?		削毛目、指揮庄痕	ミガキ?、ナデ、削毛目	外:深黄褐色 内:灰白色	風化
667	4-84	28区	SK125	弥生土器	甕	II or III		削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目、5 条以上のくら縦き平行波線	外:にぶい黄褐色 内:深黄褐色	風化
668	4-85	回版 88	28区 SK125	弥生土器	甕	III		ナデ、削毛目、指揮庄痕	ミガキ?、ナデ、上段7条? 下段8条のくら縦き平行波線	にぶい黄褐色	外曲ス付着
669	4-85	28区	SK125	弥生土器	甕	II~新		ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目、3 条のくら縦き平行波線	40cm以上の大型 器	
670	4-85	28区	SK125	弥生土器	甕	III		ナデ、削毛目、指揮庄痕	ミガキ?、ナデ、削毛目、クシ状工具 による波状文	外:にぶい黄褐色 内:灰白色	
671	4-85	28区	SK125	弥生土器	甕	II~III?		ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、削毛目、クシ 状工具による波状文	外:深黄褐色 内:灰白色	外曲ス付着 風化
672	4-86	28区	SK125	弥生土器	甕	II~新		ナデ	ミガキ?、ナデ、削毛目、5 条以上のくら縦き平行波線	外:にぶい黄褐色 内:深黄褐色	風化
673	4-86	回版 88	28区 SK125	弥生土器	甕	II~中	21.0	ナデ、削毛目、指揮庄痕	ミガキ?、ナデ、削毛目、6 条以上のくら縦き平行波線	外:にぶい黄褐色 内:灰白色	
674	4-86	28区	SK125	弥生土器	甕	III	22.0	削毛目ナデ	ナデ、削毛目	にぶい黄褐色	
675	4-86	28区	SK125	弥生土器	甕	II?	16.0	ナデ、削毛目	ナデ、指揮庄痕、5条のく ら縦き平行波線	にぶい黄褐色	
676	4-86	28区	SK125	弥生土器	甕	II?	25.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外:にぶい黄褐色 内:灰白色	
677	4-86	28区	SK125	弥生土器	甕		18.0	ナデ、削毛目、指揮庄痕	ナデ、削毛目、指揮庄痕	にぶい黄褐色	外曲ス付着
678	4-86	回版 88	28区 SK125	弥生土器	甕	III	28.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	にぶい黄褐色	風化
679	4-86	回版 88	28区 SK125	弥生土器	甕	III	35.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	浅黄褐色	
680	4-86	28区	SK125	弥生土器	甕	II?	31.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	浅黄褐色	風化
681	4-87	回版 88	28区 SK125	弥生土器	甕	II?	43.0	ミガキ?、ナデ、削毛目、指 揮庄痕	ナデ、削毛目	浅黄褐色	
682	4-87	回版 88	28区 SK125	弥生土器	甕	III	32.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	浅黄褐色	外曲ス付着 風化
683	4-87	28区	SK125	弥生土器	甕	III	15.4	ナデ、削毛目、指揮庄痕	ナデ、削毛目、指揮庄痕	外:灰白色 内:灰褐色	
684	4-87	28区	SK125	弥生土器	甕	III	15.0	ナデ、削毛目、指揮庄痕	ナデ、削毛目	灰白色	
685	4-87	28区	SK125	弥生土器	甕	III	22.0	ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	浅黄褐色	

物 種 名 目 番 号	原 産 地 名	出 土 位 置	種 別	解 説	型 式 時 期	計 測 値 (cm)	文様・鉗脚		色 調	備 考	
							口径	底径	高 度		
686 4-87	渋谷	SK125	弥生土器	甕		15.0	ナフ、刷毛目、指輪圧痕	ナフ、削毛目	にぶい黄褐色	内外スズ付着	
687 4-87	渋谷	SK125	弥生土器	甕		32.0	ナフ、刷毛目、指輪圧痕	ナフ、削毛目、口部に凹	にぶい黄褐色		
688 4-88	渋谷	SK125	弥生土器	甕	II?	20.0	ナフ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ?, ナフ、削毛目	外: 重複褐色 内: 灰白色	外側スズ付着	
689 4-88	渋谷	SK125	弥生土器	甕	II?	21.0	ナフ、刷毛目、指輪圧痕	ナフ、削毛目、指輪圧痕	にぶい黄褐色	内外スズ付着	
690 4-88	渋谷	SK125	弥生土器	甕	II?		ナフ、刷毛目	ナフ、削毛目、指輪圧痕	灰白色	外側スズ付着	
691 4-88	渋谷	SK125	弥生土器	甕	III		ナフ、指輪圧痕	ナフ、削毛目、指輪圧痕	外: 灰褐色 内: E-25L 黄褐色		
692 4-88	渋谷	SK125	弥生土器	甕	III?		ミガキ、ナフ	ナフ、削毛目、複数の平行	にぶい黄褐色	内外スズ付着	
693 4-89	国原 96	渋谷	SK125	弥生土器	甕	II or III?	削毛後? 2.5mm、ナフ?	ミガキ?, ナフ、削毛目	にぶい黄褐色	外側スズ付着	
694 4-89	国原 96	渋谷	SK125	弥生土器	甕	9.0	削毛後 3.0mm、ナフ、指輪圧痕	ミガキ、ナフ、削毛目、指輪圧痕	にぶい黄褐色		
695 4-89	渋谷	SK125	弥生土器	甕	II or III	16.4	ナフ、削毛目、指輪圧痕	ナフ、削毛目、指輪圧痕	灰白色		
696 4-89	国原 96	渋谷	SK125	弥生土器	甕	III?	6.8	ナフ、削毛目、指輪圧痕	ナフ、削毛目	にぶい黄褐色	外側スズ付着
697 4-89	渋谷	SK135	弥生土器	甕			ミガキ、ナフ、削毛目、指輪圧痕 米の字縞、波状文、竹管文	ミガキ、ナフ、削毛目、指輪圧痕	灰白色		
698 4-89	渋谷	SK135	弥生土器	甕	Ⅲ		ナフ、削毛目	ナフ、削毛目	にぶい黄褐色		
699 4-89	渋谷	SK135	弥生土器	甕		7.4	ナフ、削毛目、指輪圧痕	ミガキ、ナフ、削毛目	外: 明顯灰褐色 内: 黄褐色		
700 4-89	渋谷	SK135	弥生土器	甕		7.8	ミガキ、ナフ、削毛目、指輪圧痕	ミガキ、ナフ、削毛目、指輪圧痕	外: にぶい黄褐色 内: 淡黃褐色		
701 4-90	国原 89	渋谷	SK136	弥生土器	甕		ミガキ、ナフ、削毛目、指輪圧痕	ミガキ、ナフ、削毛目、指輪圧痕	外: にぶい黄褐色 内: 淡黃褐色		
702 4-90	国原 89	渋谷	SK136	弥生土器	甕	II	19.6	ミガキ、ナフ?、削毛目、指輪圧痕	ミガキ、ナフ?、削毛目、指輪圧痕	外: にぶい黄褐色 内: 灰白色	外側スズ付着
703 4-90	渋谷	SK136	弥生土器	甕	III	28.0	ミガキ、ナフ、削毛目	ミガキ、ナフ、削毛目、ク リザーブ工具による斜角状波文	淡黃褐色	内面にスズ付着	
704 4-90	渋谷	SK136	弥生土器	甕			ミガキ、ナフ、削毛目	ミガキ、ナフ、削毛目	にぶい黄褐色		
705 4-90	国原 89	渋谷	SK136	弥生土器	甕	II	22.0	ミガキ?、ナフ、削毛目、指 輪圧痕	ミガキ?、ナフ、削毛目、指 輪圧痕、6条の平行弦文	外: 重複褐色 内: 灰白色	
706 4-90	渋谷	SK136	弥生土器	甕	II?	16.2	ミガキ、ナフ、削毛目、指 輪圧痕	ミガキ、ナフ、削毛目、指 輪圧痕	外: にぶい黄褐色 内: 淡黃褐色	外側スズ付着	
707 4-90	渋谷	SK136	弥生土器	甕		1.6 9.4 3.9	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	にぶい黄褐色		
708 4-91	渋谷	SK136	弥生土器	甕			ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ、削毛目	にぶい黄褐色	内外スズ付着	
709 4-91	国原 90	渋谷	SK136	弥生土器	甕	III	23.0	ナフ、削毛目、指輪圧痕	ナフ、削毛目、指輪圧痕	黄褐色	黒化
710 4-91	国原 90	渋谷	SK136	弥生土器	甕	II~III	20.0	ミガキ、ナフ、削毛目?	ミガキ、ナフ、削毛目?	にぶい黄褐色	内外スズ付着
711 4-91	国原 90	渋谷	SK136	弥生土器	甕	III	27.0	ハラケズリ?、ナフ、削毛目	ナフ、削毛目	外: 灰白色 内: 淡黃褐色	
712 4-91	国原 90	渋谷	SK136	弥生土器	甕	III	24.8	ナフ、削毛目?	ナフ、削毛目?	浅黃褐色	黒化
713 4-91	国原 90	渋谷	SK136	弥生土器	甕		ミガキ、ナフ、削毛目	ミガキ、ナフ、削毛目	にぶい黄褐色		
714 4-91	国原 97	渋谷	SK136	弥生土器	甕	II?	9.2	ミガキ、ナフ?、削毛目、指 輪圧痕	ミガキ、ナフ?、削毛目、指 輪圧痕	外: 重複褐色 内: 淡黃褐色	外側スズ付着
715 4-91	国原 97	渋谷	SK136	弥生土器	甕		6.4	ナフ、削毛目、指輪圧痕	ナフ、削毛目、指輪圧痕	にぶい黄褐色	黒化
716 4-92	渋谷	SK136	弥生土器	甕		26.6	ミガキ、ナフ、削毛目	ミガキ、ナフ、削毛目	にぶい黄褐色	内外スズ付着	
717 4-92	渋谷	SK136	弥生土器	甕		6.4	ナフ、削毛目、指輪圧痕	ナフ、削毛目、指輪圧痕	にぶい黄褐色		
718 4-94	国原 90	渋谷	SK110	弥生土器	甕	II?	18.6 6.0 21.7	ミガキ、ナフ、削毛目	ミガキ、ナフ、削毛目	外: にぶい黄褐色 内: 淡黃褐色	外側スズ付着
719 4-94	国原 90	渋谷	SK110	弥生土器	甕	II?	22.8	ミガキ?、ナフ、削毛目	ミガキ?、ナフ、削毛目	にぶい黄褐色	外側スズ付着
720 4-94	国原 90	渋谷	SK110	弥生土器	甕	II?	20.6 6.6 24.0	ミガキ?+ハラケズリ?、ナフ、 削毛目	ミガキ?、ナフ、削毛目	にぶい黄褐色	内外スズ付着
721 4-94	渋谷	SK110	弥生土器	甕	II~III?	21.0	ミガキ、ナフ、削毛目	ミガキ、ナフ、削毛目、指 輪圧痕	外: にぶい黄褐色 内: 淡黃褐色	外側スズ付着	
722 4-94	渋谷	SK110	弥生土器	甕	II	24.0	ミガキ?、ナフ、削毛目、指 輪圧痕	ミガキ?、ナフ、削毛目、指 輪圧痕	外: にぶい黄褐色 内: 淡黃褐色	外側スズ付着	
723 4-94	国原 91	渋谷	SK110	弥生土器	甕	II~III	20.0	ミガキ、ナフ、削毛目	ミガキ、ナフ、削毛目	にぶい黄褐色	外側スズ付着
724 4-94	国原 91	渋谷	SK110	弥生土器	甕	III	22.0	ミガキ、ナフ、削毛目	ミガキ、ナフ、削毛目	外: 重複褐色 内: 淡黃褐色	外側スズ付着
725 4-95	渋谷	SK110	弥生土器	甕		6.2	ミガキ?、ナフ、削毛目、指 輪圧痕	ミガキ?、ナフ、削毛目	にぶい黄褐色	外側スズ付着	
726 4-95	国原 97	渋谷	SK110	弥生土器	甕		5.6	ミガキ?、ナフ、削毛目、指 輪圧痕	ミガキ?、ナフ、削毛目	灰白色	外側スズ付着
727 4-95	国原 97	渋谷	SK110	弥生土器	甕		8.8	ナフ?、削毛目	ナフ?、削毛目	外: にぶい黄褐色 内: 淡黃褐色	
728 4-95	国原 97	渋谷	SK110	弥生土器	甕		6.6	ナフ、削毛目、指輪圧痕	ミガキ?、ナフ、削毛目、指 輪圧痕	外: にぶい黄褐色 内: 淡黃褐色	面内スズ付着
729 4-95	国原 97	渋谷	SK110	弥生土器	甕		3.8	ナフ、削毛目、指輪圧痕	ミガキ?、ナフ、削毛目	にぶい黄褐色	
730 4-95	渋谷	SK110	弥生土器	甕		6.6	ナフ、削毛目、指輪圧痕	ミガキ?、ナフ、削毛目	にぶい黄褐色	内外スズ付着	
731 4-95	渋谷	SK142	弥生土器	甕	II?	5.4	ナフ、削毛目、指輪圧痕	ナフ、削毛目	浅黃褐色	黒化	
732 4-95	渋谷	SK142	弥生土器	甕	II~III?	32.8	ナフ、削毛目、指輪圧痕	ナフ、削毛目、指輪圧痕	浅黃褐色		
733 4-95	渋谷	SK142	弥生土器	甕	III	19.4	ナフ、削毛目、指輪圧痕	ナフ、削毛目、指輪圧痕	外: 重複褐色 内: 淡黃褐色		
734 4-95	渋谷	SK142	弥生土器	甕	III?	14.4	ナフ?、削毛目、指輪圧痕	ナフ?、削毛目	にぶい黄褐色	黒化	

通号	標本番号	写真番号	出土位置	種別	形状	計測値(cm)	文様・網目		色調	備考		
							内面	外面				
735	4-95		28区 SK105	弥生土器	甕	II ~ III?	5.8	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	刷毛目	赤黃褐色	風化	
736	4-95		28区 SK107	弥生土器	甕	II	23.0	ミガキ?、ナデ、刷毛目	ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕、4条の凹線	にぶい黄褐色 外:にぶい黄褐色 内:赤褐色	内外スズ付着	
737	4-95	因版 91	28区 SK107	弥生土器	甕	II	17.0	6.8	26.9	ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕、クシ状工具による平行凹線3條	内外スズ付着
738	4-95		28区 SK107	弥生土器	甕	III		ナデ、刷毛目	ナデ、口縁部に刮目	赤褐色	風化	
739	4-96		28区 SK108	弥生土器	甕	II	24.0	7.4	26.3	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ?、ナデ、刷毛目、7.4cmの凹線、4条の凹線、余刷毛、口縁部に刮目	内外スズ付着
740	4-96	因版 91	28区 SK108	弥生土器	甕	II	26.0		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、4条のヘラ状凹線	にぶい黄褐色	風化
741	4-96	因版 92	28区 SK108	弥生土器	甕	II	23.0		ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕	内外スズ付着	
742	4-96	因版 92	28区 SK108	弥生土器	甕	II	13.0		ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕	内外スズ付着	
743	4-96	因版 92	28区 SK108	弥生土器	甕	II	24.0		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	口縁部に刮目	
744	4-96	因版 92	28区 SK108	弥生土器	甕	II	22.6		ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕	内外スズ付着	
745	4-96		28区 SK111	弥生土器	甕				ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、4条のヘラ状凹線	にぶい黄褐色	風化
746	4-96		28区 SK109	弥生土器	甕	V - 2	17.8		ヘラケズリ?、ナデ、刷毛目	ヘラケズリ?、ナデ、刷毛目、平行凹線	深青褐色	風化
747	4-96		28区 SK109	弥生土器	甕	III			ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	2ヶ所の孔あり	
748	4-96		28区 SK109	弥生土器	甕			5.6	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	
749	4-96		28区 SK109	弥生土器	甕			7.8	ナデ	ナデ、刷毛目		
750	4-97		28区 SK116	弥生土器	甕		24.4		ミガキ?、ナデ、刷毛目?	ミガキ?、ナデ、刷毛目?	赤褐色 内:にぶい黄褐色	風化
751	4-97		28区 SK116	弥生土器	甕		19.4		ナデ、指輪圧痕	ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕	にぶい黄褐色	風化
752	4-97		28区 SK116	弥生土器	甕	III	18.6		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	赤褐色	風化
753	4-97		28区 SK116	弥生土器	甕		17.2		ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	内外スズ付着
754	4-97		28区 SK116	弥生土器	甕		17.0		ミガキ?、ナデ、指輪圧痕	ミガキ?、ナデ、指輪圧痕	内外スズ付着	
755	4-97		28区 SK116	弥生土器	甕	I or II			ミガキ?、ナデ、指輪圧痕	ミガキ?、ナデ、指輪圧痕	透葉模様	
756	4-97		28区 SK116	弥生土器	甕	III			ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕	にぶい黄褐色	
757	4-97		28区 SK116	弥生土器	甕		20.0		ミガキ?	ヘラケズリ?、クシ状工具による凹線	にぶい黄褐色	内外スズ付着
758	4-97		28区 SK116	弥生土器	甕		6.2		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	内外スズ付着	
759	4-97		28区 SK116	弥生土器	甕		6.4		ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目	赤褐色	
760	4-100		28区 SD16	弥生土器	甕	II	18.0		ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕	にぶい黄褐色	
761	4-100		28区 SD16	弥生土器	甕				ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、12条の辺縁	にぶい褐色	
762	4-100		28区 SD16	弥生土器	甕	II			ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、クシ状工具による12条の辺縁	にぶい褐色	
763	4-100		28区 SD16	弥生土器	甕	II			ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、12条の辺縁	赤褐色	
764	4-100		28区 SD16	弥生土器	甕	I ~ II	20.0		ナデ	ナデ、刷毛目、クシ状工具による辺縁	内外スズ付着	
765	4-100		28区 SD16	弥生土器	甕	I			刷毛目	ナデ、刷毛目7.6条の辺縁	にぶい黄褐色	内外スズ付着
766	4-100		28区 SD16	弥生土器	甕	I ~ ?			ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、クシ状工具による辺縁	赤褐色	内外スズ付着
767	4-100		28区 SD16	弥生土器	甕	II			ミガキ?、ナデ	ナデ、刷毛目、クシ状工具による辺縁	赤褐色	内外スズ付着
768	4-101		28区 SD16	弥生土器	甕	II	33.0		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、クシ状工具による多邊形	にぶい黄褐色	内外スズ付着
769	4-101		28区 SD16	弥生土器	甕	II	23.6		ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	にぶい黄褐色	内外スズ付着
770	4-101		28区 SD16	弥生土器	甕	II ~ ?	16.0		刷毛目?ミガキ? + ナデ	ミガキ?、ナデ、刷毛目、クシ状工具による6条の辺縁	にぶい黄褐色	内外スズ付着
771	4-101		28区 SD16	弥生土器	甕	III	24.0		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	赤褐色	
772	4-101		28区 SD16	弥生土器	甕		24.0		ナデ、刷毛目	ミガキ?、ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	内外スズ付着
773	4-101		28区 SD16	弥生土器	甕		21.0		刷毛後ナメ、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	にぶい黄褐色	内外スズ付着
774	4-101		28区 SD16	弥生土器	甕	II ~ ?	19.0		ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕	外:赤褐色 内:赤褐色	内外スズ付着
775	4-101		28区 SD16	弥生土器	甕		18.0		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	にぶい褐色	内外スズ付着
776	4-101		28区 SD16	弥生土器	甕		29.0		ミガキ?、ナデ、刷毛目	ミガキ?、ナデ、刷毛目	にぶい褐色	内外スズ付着
777	4-102		28区 SD16	弥生土器	甕	II ~ ?	24.0		ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ナデ、刷毛目、指輪圧痕、クシ状工具による6条の辺縁	にぶい黄褐色	内外スズ付着
778	4-102		28区 SD16	弥生土器	甕		26.0		ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、突起	にぶい褐色	
779	4-102	因版 29	28区 SD16	弥生土器	甕		9.2		ナデ、刷毛目	ミガキ?、ナデ、刷毛目	にぶい黄褐色	内外スズ付着
780	4-102		28区 SD16	弥生土器	甕		6.4		ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ?、ナデ、刷毛目	内:赤褐色	
781	4-102		28区 SD16	弥生土器	甕		6.4		ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ?、ナデ、刷毛目	にぶい褐色	風化
782	4-102		28区 SD16	弥生土器	甕		6.4		ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ?、ナデ、刷毛目	外:にぶい黄褐色 内:灰褐色	内外スズ付着
783	4-102		28区 SD16	弥生土器	甕		7.0		ミガキ?、ナデ、刷毛目、指輪圧痕	ミガキ?、ナデ、刷毛目	外:にぶい黄褐色 内:灰褐色	内外スズ付着

遺物 番号	銘文	写真図版	出土台所	種別	基準	型式 時期	計測値 (cm)		文様・縫隙		色調	備考
							口径	底径	高さ	内面	外側	
784 4-102	渕区	SD16	弥生土器	甕			6.4		三ガキ、指ナデ、指頭圧痕	ミガキ、ナデ、削毛目	外：にぶい黄褐色 内：褐色	
785 4-102	渕区	SD16	弥生土器	甕			8.4		ナデ、削毛目、指頭圧痕	ミガキ、ナデ、削毛目	外：にぶい黄褐色 内：褐色	外側スリ付着
786 4-103	沢区	SD11	弥生土器	甕	II		32.0		ナデ	ナデ	浅黄褐色	
787 4-103	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		31.4		ミガキ、ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目	外：灰白色 内：褐色	風化
788 4-103	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		30.0		ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外：灰白色 内：褐色	
789 4-103	沢区	SD11	弥生土器	甕	II		22.0		ナデ、削毛目?	ナデ、削毛目?	褐色	
790 4-103	沢区	SD11	弥生土器	甕	新?		20.0		ナデ	ナデ、無乾羽状文	外：にぶい褐色 内：灰白色	
791 4-103	沢区	SD11	弥生土器	甕	III?		18.0		ナデ	ナデ、突唇文		
792 4-104	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		24.7		ミガキ、ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目	外：にぶい褐色 内面スリ付着	
793 4-104	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		30.0		ナデ	ナデ、削毛目、指頭圧痕、クシ状工具による無機質状文	にぶい褐色	風化
794 4-104	沢区	SD11	弥生土器	甕	新?		28.0		ナデ?、削毛目	ミガキ?、ナデ、クシ状工具による無機質状文	浅黄褐色	
795 4-104	沢区	SD11	弥生土器	甕			14.0		ミガキ、ナデ	ナデ、連續削目	外：にぶい褐色 内：褐色	風化
796 4-104	沢区	SD11	弥生土器	甕	III				ナデ、削毛目	ナデ、削毛目、クシ状工具による無機質状文	深褐色	
797 4-104	沢区	SD11	弥生土器	甕	III				ナデ、指頭圧痕	ナデ、貝殻摩擦による縦筋、断面文様で埋める	にぶい褐色	
798 4-104 固版 92	沢区	SD11	弥生土器	甕	新?		21.5		ナデ、削毛目	削毛目ナデ	浅黄褐色	風化
799 4-104 固版 92	沢区	SD11	弥生土器	甕	新?		22.0		削毛目ナデ	ナデ、凹縫?	浅黄褐色	
800 4-104 固版 92	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		20.0		ナデ	ナデ、凹縫?	浅黄褐色	風化
801 4-105 固版 92	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		24.0		ナデ、削毛目	ナデ、削毛目	外：にぶい褐色 内：灰白色	
802 4-104 固版 92	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		20.0		ナデ、削毛目、指頭圧痕	ナデ、削毛目	褐色	風化
803 4-104 固版 92	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		16.0		ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目?	浅黄褐色	風化
804 4-104	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		16.0		ナデ?	ナデ、削毛目?	外：にぶい褐色 内：灰白色	外側スリ付着
805 4-104	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		14.4		ナデ?、クシツリ?、ナデ、削毛目	ナデ、削毛目?、凹縫?	にぶい褐色	風化
806 4-104	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		13.0		ナデ	ナデ、削毛目	外：灰黄色 内：にぶい褐色	外側スリ付着
807 4-105	沢区	SD11	弥生土器	甕	新?		30.0		ナデ	ナデ	浅黄褐色	
808 4-105	沢区	SD11	弥生土器	甕	新?		28.0		ナデ、削毛目	ナデ	浅黄褐色	風化
809 4-105	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		19.4		ナデ?、削毛目	ナデ、削毛目	にぶい黃褐色	
810 4-105	沢区	SD11	弥生土器	甕			22.0		ヘラケズリ?、削毛目ナデ	ナデ、削毛目	外：にぶい褐色 内：にぶい褐色	外側スリ付着
811 4-105	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		24.0		ヘラケズリ?、ナデ、削毛目、凹縫?	ナデ、削毛目、凹縫?	浅黄褐色	外側スリ付着
812 4-105	沢区	SD11	弥生土器	甕			20.0		ヘラケズリ?、ナデ、削毛目?	ナデ、削毛目	灰白色	
813 4-105	沢区	SD11	弥生土器	甕			24.0		ナデ、削毛目	ミガキ?、ナデ、指頭圧痕	外：褐色 内：灰白色	
814 4-105	沢区	SD11	弥生土器	甕			11.0		ヘラケズリ?のちミガキ?、ナデ	ミガキ、ナデ、削毛目	褐色	入歎なつくり
815 4-105	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		20.0		ナデ	ナデ、凹縫?	淡黄褐色	外側スリ付着
816 4-105	沢区	SD11	弥生土器	甕	新?		18.0		ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	風化
817 4-105	沢区	SD11	弥生土器	甕	III?		16.0		ナデ	ナデ、連續削目	にぶい褐色	
818 4-105	沢区	SD11	弥生土器	甕			17.0		ナデ、指頭圧痕?	ナデ、削毛目		
819 4-105	沢区	SD11	弥生土器	甕	IV		18.0		ヘラケズリ?、ナデ	ナデ、凹縫、連續削突文	にぶい褐色	外側スリ付着
820 4-105	沢区	SD11	弥生土器	甕			21.0		ヘラケズリ?、ナデ	ナデ、削毛目	灰白色	風化
821 4-105 固版 93	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		24.6		ミガキ?、ナデ	ミガキ、ナデ	褐色	
822 4-106 固版 93	沢区	SD11	弥生土器	甕	III				ナデ、削毛目、指頭圧痕	ミガキ?、ナデ、削毛目	外：灰白色 内：浅黄褐色	外側スリ付着
823 4-106	沢区	SD11	弥生土器	甕	III				ナデ	ミガキ、ナデ、突唇文	外：灰白色 内：浅黄褐色	
824 4-106	沢区	SD11	弥生土器	甕	III				ナデ	ミガキ、ナデ、削毛目、新月形の突起	灰白色	
825 4-106 固版 93	沢区	SD11	弥生土器	甕	新?				ナデ、指頭圧痕	ミガキ、ナデ、削毛目、新月形の突起	にぶい褐色	風化
826 4-106	沢区	SD11	弥生土器	甕	III				ナデ、削毛目	ナデ、突唇	外：灰白色 内：浅黄褐色	
827 4-106	沢区	SD11	弥生土器	甕					ナデ?	ナデ、突唇	にぶい褐色	
828 4-106 固版 93	沢区	SD11	弥生土器	甕	II				ナデ、削毛目	削毛目、クシ状工具による 指頭・底穴文	灰褐色	
829 4-106	沢区	SD11	弥生土器	甕					ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、突唇	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	
830 4-106 固版 93	沢区	SD11	弥生土器	甕	IV				ナデ、削毛目?	ナデ	外：にぶい黄褐色 内：浅黄褐色	町田系
831 4-106	沢区	SD11	弥生土器	甕	III		10.0		指ナデ?、削毛目、指頭圧痕	ミガキ、ナデ、指頭圧痕	外：にぶい褐色 内：灰白色	
832 4-106	沢区	SD11	弥生土器	甕			9.8		ミガキ、ナデ、削毛目	ミガキ、ナデ、削毛目?	にぶい褐色	

植物	種名	写真図版番号	出土位置	種別	器形	型式	計測値(cm)	文様・調整		色調	備考
								内面	外面		
833 4-106	X区	SD11	弥生土器	立			8.0	ミガキ、指彌庄底	ミガキ、刷毛目?	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	
834 4-107	X区	SD11	弥生土器	直			6.7	ミガキ、ナデ、指彌庄底	ミガキ、ナデ、刷毛目?	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	
835 4-107	X区	SD11	弥生土器	鑿			6.4	ヘラケズノリ、ナデ、刷毛目?	ナデ、刷毛目?	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	
836 4-107	X区	SD11	弥生土器	圓	斜?		7.0	ミガキ、ヘラケズノリ、ナデ、刷毛目?	ナデ、刷毛目、指彌庄底	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	
837 4-107	X区	SD11	弥生土器	寶			6.4	ヘラケズノリ、ナデ、指彌庄底	ナデ、刷毛目	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	底部外表面化
838 4-107	X区	SD11	弥生土器	直			6.4	ヘラケズノリ、ナデ、刷毛目?	ナデ、刷毛目?	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	外曲黒化
839 4-107	圓底 97	X区	SD11	弥生土器	鑿		6.0	刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目?	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	
840 4-107	圓底 98	X区	SD11	弥生土器	圓	III?	6.0	ミガキ、ナデ、指彌庄底	ミガキ?、ナデ、刷毛目、指彌庄底	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	風化
841 4-107	圓底 98	X区	SD11	弥生土器	直		5.2	ミガキ、ナデ、指彌庄底	ナデ、刷毛目、指彌庄底	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	風化
842 4-107	圓底 98	X区	SD11	弥生土器	鑿	II	5.2	ナデ、指彌庄底	ナデ、刷毛目、指彌庄底	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	風化
843 4-107	圓底 98	X区	SD11	弥生土器	鑿		5.5	ナデ、刷毛目、指彌庄底	ミガキ?、ナデ、刷毛目	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	風化
844 4-107	X区	SD11	弥生土器	直	III		5.8	ナデ、刷毛目、指彌庄底	ナデ、刷毛目?	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	風化
845 4-107	X区	SD11	弥生土器	直			8.0	ミガキ?、ナデ、指彌庄底	ナデ、刷毛目?	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	外曲黒化
846 4-107	圓底 98	X区	SD11	弥生土器	鑿		6.6	ナデ、指彌庄底	ナデ、刷毛目?	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	底部外表面化
847 4-107	X区	SD11	弥生土器	鑿			6.2	ナデ?、指彌庄底	ナデ、刷毛目	外: 淡い褐色	
848 4-107	X区	SD11	弥生土器	鑿			6.4	ナデ、指彌庄底	ナデ、指彌庄底?	外: 淡い褐色	
849 4-107	圓底 98	X区	SD11	弥生土器	鑿		6.2	ナデ?、指彌庄底	ナデ、刷毛目	外: 淡い褐色	底部外表面化
850 4-107	X区	SD11	弥生土器	鑿			8.0	ミガキ?、ナデ、指彌庄底	ナデ、刷毛目?	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	外曲スリ付着
851 4-107	圓底 98	X区	SD11	弥生土器	鑿	III?	5.0	ミガキ?、ナデ、刷毛目、指彌庄底	ナデ、指彌庄底	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	風化
852 4-107	圓底 98	X区	SD11	弥生土器	鑿		6.8	ヘラケズノリ?、ナデ、刷毛目、指彌庄底	刷毛目	淡褐色	
853 4-107	圓底 98	X区	SD11	弥生土器	窓	III?		ナデ?、クボリ彫りあり	ミガキ?、ナデ、刷毛目	外: 淡い褐色	
854 4-108	X区	SD12	弥生土器	直	III		32.0	ナデ、刷毛目?、指彌庄底の突起	ナデ、刷毛目?、新面三角形の突起	外: 淡い褐色 内: 淡い褐色	風化
855 4-108	圓底 93	X区	SD12	弥生土器	直	III	36.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	灰白色	
856 4-108	X区	SD12	弥生土器	直			22.0	ミガキ?、ナデ	ミガキ?、ナデ	外: 淡い褐色 内: 淡黃褐色	風化
857 4-108	X区	SD12	弥生土器	直			17.0	ナデ	ミガキ?、ナデ	灰白色	
858 4-109	X区	SD12	弥生土器	直			29.0	刷毛目ナデ	ナデ、刷毛目	淡黃褐色	風化
859 4-109	X区	SD12	弥生土器	直	II		23.0	ナデ	ナデ	淡黃褐色	風化
860 4-109	X区	SD12	弥生土器	鑿			21.0	ナデ、刷毛目、指彌庄底	ナデ、刷毛目	外: 淡い褐色	風化
861 4-109	圓底 93	X区	SD12	弥生土器	鑿		27.0	ナデ、刷毛目、指彌庄底	ナデ、刷毛目、指彌庄底	外: 淡褐色 内: 淡黃褐色	底部外表面化
862 4-109	X区	SD12	弥生土器	鑿			23.0	ナデ、指彌庄底	ナデ	外: 淡い褐色	風化
863 4-109	圓底 93	X区	SD12	弥生土器	鑿		20.8	ヘラケズノリ?、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外: 淡い褐色 内: 淡褐色	外曲スリ付着
864 4-109	圓底 93	X区	SD12	弥生土器	鑿		19.0	ミガキ?、ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外: 淡い褐色	風化
865 4-109	X区	SD12	弥生土器	鑿			14.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	褐色	外曲スリ付着
866 4-109	圓底 93	X区	SD12	弥生土器	合	I		ナデ、6箇所以上の平行凹線、貝物痕跡による羽状文	ナデ	外: 淡い褐色	
867 4-109	X区	SD12	弥生土器	直			7.2	ナデ、指彌庄底	ナデ、刷毛目	外: 淡い褐色	
868 4-109	圓底 93	X区	SD12	弥生土器	直		5.0	指ナデ、指彌庄底	ナデ、刷毛目?	外: 淡い褐色 内: 淡褐色	
869 4-109	X区	SD12	弥生土器	鑿			7.0	指ナデ、刷毛目、指彌庄底	ナデ、刷毛目、指彌庄底	外: 淡い褐色 内: 淡黃褐色	
870 4-109	X区	SD12	弥生土器	鑿			8.0	ナデ、刷毛目	ミガキ?、ナデ、刷毛目	外: 淡い褐色 内: 淡褐色	
871 4-110	圓底 93	X区	SD12	弥生土器	鑿		7.0	ナデ、指彌庄底	ナデ、刷毛目	外: 淡黃褐色 内: 灰白色	
872 4-110	X区	SD12	弥生土器	直			6.4	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外: 淡い褐色 内: 灰白色	
873 4-110	X区	SD12	弥生土器	鑿			5.0	刷毛目ナデ、指彌庄底	ナデ、刷毛目	外: 淡褐色 内: 淡黃褐色	
874 4-110	X区	SD12	弥生土器	直			6.0	ナデ、指彌庄底	ナデ、刷毛目?、指彌庄底	外: 淡い褐色 内: 淡褐色	内曲スリ付着
875 4-110	X区	SK10	弥生土器	直	凹凸		17.2	ミガキ?、ナデ、刷毛目	ミガキ?、ナデ、刷毛目	明眞褐色	やや風化
876 4-110	X区	SK10	弥生土器	直	III		16.0	ナデ、刷毛目、指彌庄底	ミガキ?、ナデ、刷毛目	外: 淡い黄褐色 内: 淡褐色	内外スリ付着
877 4-110	X区	SK10	弥生土器	直	II		14.0	ミガキ?、ナデ、刷毛目、指彌庄底	ミガキ?、ナデ、刷毛目	外: 淡い黄褐色 内: 淡褐色	内外スリ付着
878 4-110	X区	SK10	弥生土器	直			14.0	ミガキ?、ナデ、刷毛目、指彌庄底	ミガキ?、ナデ、刷毛目、指彌庄底	外: 淡い黄褐色 内: 淡褐色	外曲スリ付着
879 4-110	X区	SK10	弥生土器	直	III?		6.6	ナデ、指彌庄底	ナデ、刷毛目	外: 淡い黄褐色 内: 淡褐色	外曲スリ付着
880 4-111	X区	SK11	弥生土器	合	Ⅳ		23.0	ミガキ?、刷毛目	ナデ、刷毛目、クシ状工具による格子文	外: 淡い黄褐色	
881 4-111	X区	SK11	弥生土器	直	III		20.4	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、指彌庄底	外: 淡い黄褐色 内: 淡褐色	内外スリ付着

遺物	器物 名号	実測高さ	出土位置	種類	断面	式形	計測値(cm)	文様・網目		色調	備考		
								口径	底径	側面	内面		
862	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	集	新	20.0	ナデ、刷毛目、指捺压痕	ナデ、刷毛目	外：明黄色 内：灰白色	内外スス付着	
863	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	要	II	14.0	三ヵキ、ナデ、刷毛目、指捺	ミガキ、ナデ、刷毛目	灰黄色	内外スス付着	
864	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	杏	II~III?	14.8	三ヵキ、ナデ、刷毛目、指捺	ミガキ、ナデ、刷毛目	灰黄色	外：暗褐色 内：深褐色	
865	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	杏	新	16.4	三ヵキ、ナデ、刷毛目、指捺	ミガキ、ナデ、刷毛目	灰黄色	外：暗褐色 内：深褐色	
866	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	集		27.0	ナデ、指捺压痕	ナデ、刷毛目	外：明黄色 内：浅褐色	内外スス付着	
867	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	要	II~III?		ナデ	ナデ	灰白色		
868	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	要	II~III?		三ヵキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	灰黄色	化	
869	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	杏	相		三ヵキ、ナデ	ミガキ、ナデ	灰白色		
870	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	杏		12.0	ナデ、刷毛目、指捺压痕	ナデ、刷毛目	灰黄色		
871	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	要		7.2	ミガキ、ナデ、刷毛目	ミガキ、ナデ、刷毛目	灰白色	化	
872	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	杏	III	6.6	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、指捺压痕	灰白色	化	
873	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	集	相?	6.3	ヘラケズリ?、ナデ?	ミガキ?、ナデ?	外：灰褐色 内：深褐色	化	
874	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	杏		2.6	指捺压痕	ナデ、刷毛目、指捺压痕	灰白色	ミニチュア	
875	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	杏		5.2	ナデ、刷毛目、指捺压痕	ミガキ、ナデ、刷毛目、指捺压痕	外：明黄色 内：深褐色	内外スス付着	
876	4-111	一	区区	SK11	弥生土器	要	III	6.8	ナデ、刷毛目、指捺压痕	ナデ、刷毛目	灰白色	化	
877	4-112	一	区区	P297	須磨器	串の舟	9C	13.0	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白色		
878	4-112	一	区区	P297	須磨器	串	9C 前半	14.4	3.4	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白色	
879	4-112	一	区区	SK117	須磨器	片舟	9C	15.0	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰色		
880	4-112	一	区区	F297	須磨器	舟	9C	14.0	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白色		
881	4-112	一	区区	P339	須磨器	舟	9C?	14.0	4.9	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰色	
882	4-112	一	区区	SK105	須磨器	舟	9C?	9.0	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白色		
883	4-112	一	区区	PS21	須磨器	舟	9C	16.0	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白色		
884	4-112	一	区区	SK128	須磨器	舟	9C~平 安	14.0	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白色		
885	4-112	一	区区	P305	須磨器	舟	9C?		圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰色		
886	4-112	一	区区	P305	須磨器	舟	中型前半	34.0	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰色		
887	4-113	一	区区	SK100	須磨器	舟	I~4		ミガキ	ナデ、刷毛目、口縁溝部に 有り羽状文	初色		
888	4-113	一	区区	SK100	須磨器	舟	II~IV or 平 安	12.3	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、口縁溝部に 有り羽状文	外：にぶい褐色 内：灰褐色		
889	4-113	一	区区	SK100	須磨器	舟	III	32.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	青灰色、にぶい青 褐色		
890	4-113	一	区区	SK100	須磨器	舟	III	32.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、クシゴ工芸 による有り羽状文	外：深褐色 内：褐色		
891	4-113	一	区区	SK100	須磨器	舟	III	24.0	ミガキ?、ナデ、刷毛目	ミガキ?、ナデ、刷毛目、舟形?	外：深褐色 内：深褐色		
892	4-113	一	区区	SK100	須磨器	舟	III	34.0	ミガキ?、ナデ、刷毛目	ミガキ?、ナデ、指捺压痕	外：にぶい褐色 内：深褐色		
893	4-113	一	区区	SK100	須磨器	舟	III	36.0	刷毛目ナデ	ナデ	外：深褐色 内：灰白色		
894	4-114	一	区区	SK100	須磨器	舟	II	15.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目、指捺压痕	灰白色		
895	4-114	一	区区	SK100	須磨器	舟	II	13.0	刷毛目	刷毛目	2条の空巻		
896	4-114	一	区区	SK100	須磨器	舟	II		刷毛目	刷毛目	2条の空巻		
897	4-114	一	区区	SK100	須磨器	舟	II		刷毛目	刷毛目	2条の空巻		
898	4-114	一	区区	SK100	須磨器	舟	II	10.8	ヘラケズリ?、ナデ、指捺压痕	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	浅黄褐色	
899	4-114	一	区区	SK100	須磨器	舟	I~4 or -1	46.0	ミガキ?、ナデ、指捺压痕	ナデ、刷毛目、5条のヘラ ケズリ			
900	4-114	一	区区	SK100	須磨器	舟	III	16.4	ナデ、刷毛目、指捺压痕	ナデ、刷毛目		外面スス付着	
901	4-114	一	区区	SK100	須磨器	舟	III (吉?)	16.2	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外：にぶい褐色 内：深褐色		
902	4-114	一	区区	SK100	須磨器	舟	III	24.6	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	外：深褐色 内：灰白色		
903	4-114	一	区区	SK100	須磨器	舟	III	18.8				内外風化	
904	4-115	一	区区	SK100	須磨器	舟	III	30.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	浅黄褐色		
905	4-115	一	区区	SK100	須磨器	舟	III	19.0	ナデ、刷毛目	ナデ、刷毛目	浅黄褐色		
906	4-115	一	区区	SK100	須磨器	舟	V~-3	13.2	ナデ、刷毛目、指捺压痕	ナデ、刷毛目	浅黄褐色		
907	4-115	一	区区	SK100	須磨器	舟	V~-3	27.0	ミガキ?、ナデ、舟形?、頭部 以下ヘラケズリ	ミガキ?、ナデ、舟形?、頭部 以下ヘラケズリ	外：深褐色 内：灰白色		
908	4-115	一	区区	SK100	須磨器	舟	V~-3	19.0	ナデ	ナデ	ナデ、刷毛目、クシゴ工芸 による波状文		
909	4-115	一	区区	SK100	須磨器	舟	V~-4	26.0	ナデ、舟形?以下ヘラケズリ	ナデ、舟形?以下ヘラケズリ	ナデ、刷毛目、クシゴ工芸 による波状文		
910	4-115	一	区区	SK100	須磨器	舟	V~-4	17.0	ナデ	ナデ	ナデ、舟形?、表面著しく 風化		
911	4-115	一	区区	SK100	須磨器	舟	V~-4						

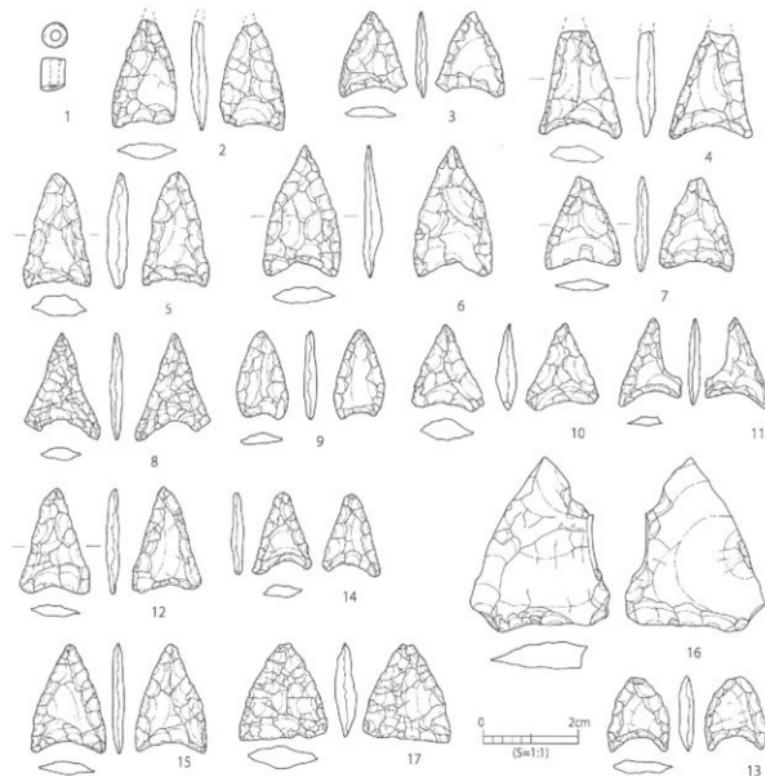
植物番号	学名	日本固有	出土地点	種別	被種	集式	計測値(cm)	文様・質地		色調	備考	
								二段	三段			
931 4-115		X区	G級	野生土被	葉	B	7.2	ナメ、指輪状痕	ナメ、高毛目			
932 4-116		Z区		泥炭層	茎		12.6		凹輪ナメ	灰白色		
933 4-116		Z区	E5・6	泥炭層	葉			凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色		
934 4-116		Z区		泥炭層	葉			凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色		
935 4-116		Z区	B3	泥炭層	茎			凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色		
936 4-116		Z区	B4	泥炭器	茎			凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色		
937 4-116				泥炭器	茎		8.0	2.7	凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色	
938 4-116				泥炭器	茎		18.0	3.1	凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色	
939 4-116		Z区	B3	泥炭器	葉		16.8		凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色	
940 4-116		Z区	B4	泥炭器	葉			凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰色		
941 4-116		Z区	B3	泥炭器	葉		15.2	2.2	凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色	
942 4-116		Z区		泥炭器			10.0		凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色	
943 4-116		Z区	C6	泥炭器	坏		15.4	9.8	凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色	
944 4-116		Z区		泥炭器	坏		16.0		凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色	
945 4-116		Z区	C4	泥炭器	坏		13.8		凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色	
946 4-116		Z区		泥炭器	坏		12.0	3.0	4.1	凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色
947 4-116		Z区	B3	泥炭器	坏		16.8		凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰色	
948 4-116		Z区	B5	泥炭器			14.0		凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰色	
949 4-116		Z区	B4	泥炭器	坏		10.2		ナメ	ナメ	灰色	
950 4-116		Z区	B3	泥炭器	坏		8.2		凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色	
951 4-116		Z区	C4	泥炭器			9.0		凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色	
952 4-116		Z区	B4	泥炭器	坏		7.8		凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色	
953 4-116		Z区	C4	泥炭器	坏		8.8		凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰色	
954 4-116		Z区	C5	泥炭器	坏		6.8		凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色	
955 4-116		Z区	E5・6	泥炭器	坏		11.0	8.0	2.95	凹輪ナメ	灰白色	
956 4-116		Z区	E6	泥炭器	坏		11.2	8.6	3.1	凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色
957 4-117		Z区	G6	泥炭器	坏		22.6		凹輪ナメ	凹輪ナメ	灰白色	
958 4-117		Z区	F5	泥炭器	葉		26.0		ナメ、ヘラケズリ	ナメ	灰白色	
959 4-117		Z区		泥炭器	坏			6.2	ナメ	ナメ	灰白色	
960 4-117		Z区	C4	泥炭器	坏			10.2	ナメ	ナメ	灰白色	
961 4-117		Z区	B4	泥炭器	坏?		16.2		ナメ	ナメ	灰白色	
962 4-117		Z区		泥炭器	葉?			10.8	ナメ	ナメ	灰白色	
963 4-117		Z区	B3	泥炭	株		23.8		ナメ	ナメ	灰色	
964 4-117		Z区	B3	泥炭器	坏				ナメ	ナメ	灰色	
965 4-117		Z区	F6	泥炭器				7.6	ナメ	ナメ	灰白色	
966 4-117		Z区	B4	泥炭器	坏		5.8		ナメ	ナメ	灰白色	
967 4-117		Z区	B3	白磁	瓶		17.4		ナメ	ナメ	白色	
968 4-117		Z区	F6	白磁	瓶			7.0	ナメ	ナメ	淡白色	
969 4-117		Z区		白磁	瓶			18.0	ナメ	ナメ	淡白色	
970 4-117		Z区	F5	青磁	瓶		16.8		ナメ	ナメ	オリーブ灰色	
971 4-117		Z区	F6	青磁	瓶		13.8		ナメ	ナメ	オリーブ灰色	
972 4-117				青磁	瓶		6.2		ナメ	ナメ	灰白色	
973 4-117		Z区	B3	青磁	瓶		14.6		ナメ	ナメ	オリーブ灰色	
974 4-117		Z区		青磁	瓶			6.0	ナメ	ナメ	オリーブ灰色	
975 4-117		Z区	B3	青白磁	合子		7.4		ナメ	ナメ	明オリーブ灰色	
976 4-117		Z区	F6	青白磁	瓶			6.2	ナメ	ナメ	オリーブ灰色	
977 4-117		Z区	B3	青花	瓶		14.2		ナメ	ナメ	灰白色	
978 4-117		Z区		青花	瓶		7.0		ナメ	ナメ	淡綠灰色	

第4節 安富羽場遺跡出土の石器・石製品

(1) 安富羽場遺跡出土石器・石製品の概観

安富羽場遺跡からは、包含層及び遺構の覆土内から石器・石製品が出土している。本来であれば、出土層位・遺構ごとに出土遺物を述べるべきであろうが、報告書作成の都合上、石器・石製品を本章でまとめて記述する。

石器は石錐以外は、基本的に遺構から出土したものを図化して掲載している。その種類は、碧玉製管玉、石錐、磨製石斧およびその未製品、石包丁状の石器、楔形石器、スクレイパー類、剥片、石核などである。石材としては石錐は安山岩、石包丁およびその類は黒色堆積岩（頁岩か）、太形蛤刃石斧は淡緑色・硬質で斑紋のはいる石材（片岩系か）と黒色で細粒の石材（玄武岩か）、扁平片刃石斧・柱状片刃石斧は平行縞の入る岩石、その他の打製石器類は安山岩と瑪瑙・玉髓類を主体的に用いている。安山岩は、肉眼で次の3種に分けることができる。



第4-118図 安富羽場遺跡出土石器・石製品実測図(1)

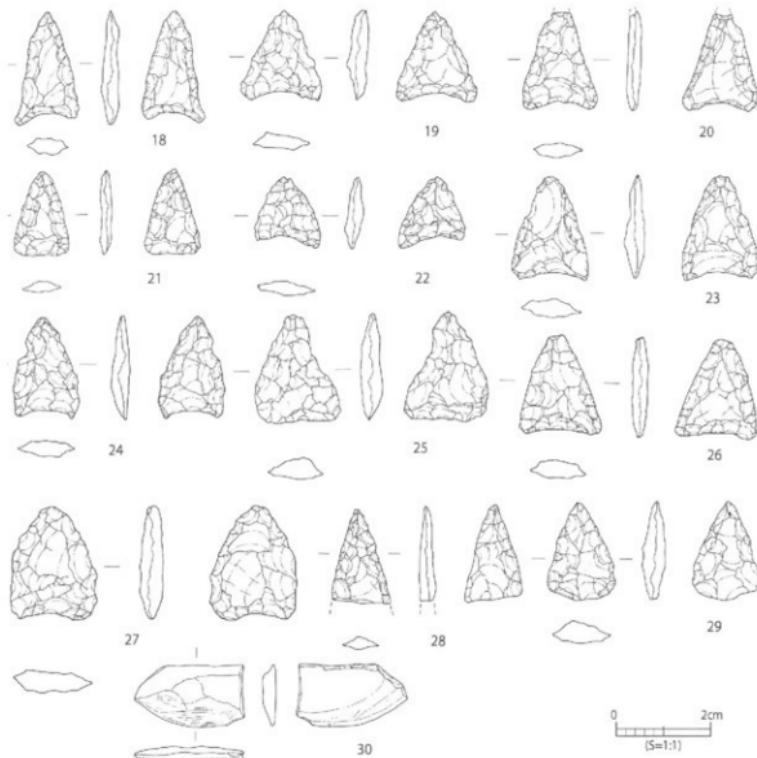
安山岩A：黒色を呈し、概してきめが粗い。微小な棒状の鉱物結晶を多く含むのが特徴
安山岩B：Aに比べてきめが細かく、風化面はやや白っぽくなるが、わずかに棒状鉱物が見られる。
安山岩C：きめが細かく、棒状鉱物が見られない。

(2) 管玉（挿図4-118図1）

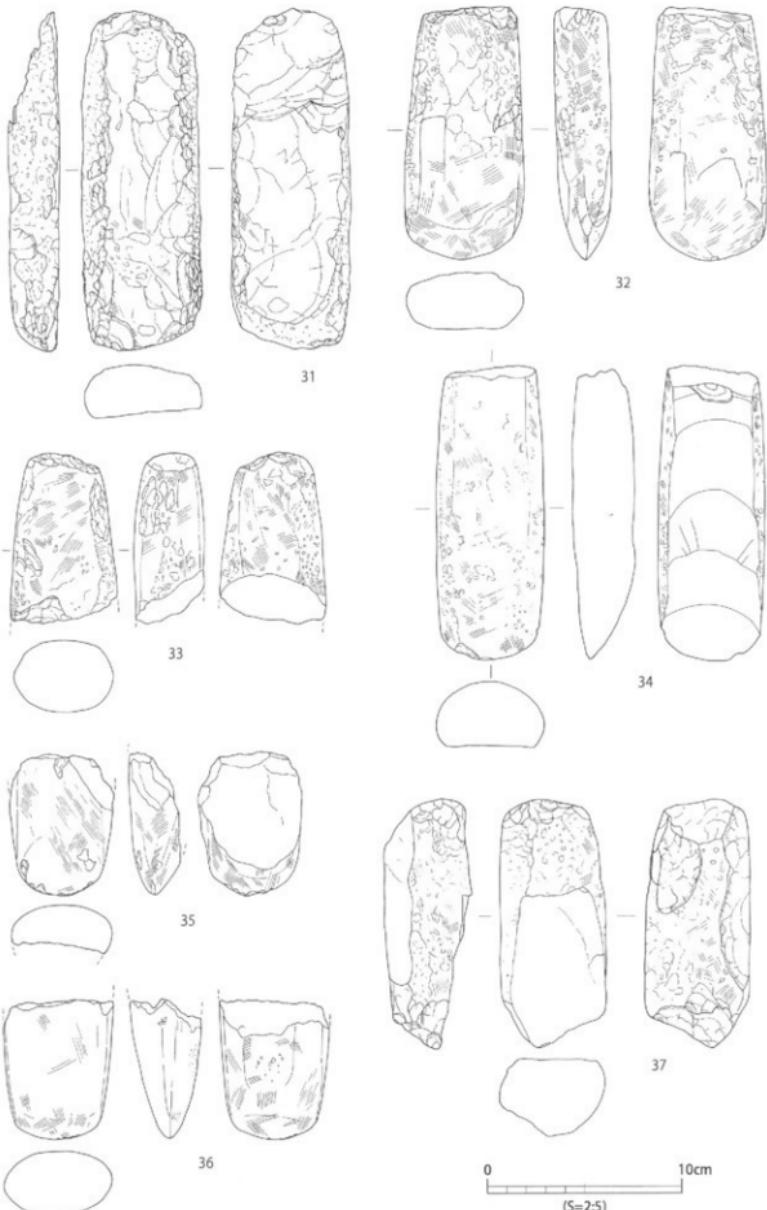
SK75から出土した、やや淡い緑色の碧玉を用いた管玉である。片面穿孔で、よく研磨されているが、小口面の片側は凹凸があり、素材面が取り去りきれていない。製作途上で折れたものを、さらに研磨した結果かもしれない。長さ0.65cm、直径0.5cmである。

(3) 石鏃（挿図4-118図2～挿図4-119図29）

石鏃は、1～17が土坑などの遺構から、18～29は包含層から出土している。石材は安山岩が多く、A、B、Cいずれの種類も認められるが、他の打製石器類に比べて、質の良い安山岩Cが目立っている。黒曜石製（10）と瑪瑙製（17）が1点含まれる。形態は圓基、平基式が多いが、凸基気味のものも見られる（29）。



第4-119図 安富羽場遺跡出土石器実測図（2）



第4-120図 安富羽場遺跡出土石器実測図(3)



第4-121図 安富羽場遺跡出土石器実測図(4)

(4) 太形蛤刃石斧およびその木製品（挿図4-120図31～挿図4-121図43）

31～43は磨製石斧、およびその木製品である。いわゆる太形蛤刃石斧の類で、石材は淡緑色・硬質で斑紋のはいる石材（片岩系か）と黒色で細粒の石材（玄武岩か）を主に用いている。31は、この種の石器では唯一、頁岩系の石材を用いている。両側面を敲打により整形しているが、片面が大きく剥離して全体が薄くなっている。本来薄く剥げやすい石材で、製作途上に破損した木製品とみたほうがよいだろう。32は、玄武岩系石材を用いた石斧で、側面を中心に敲打痕が残るが、完成品とみてよいだろう。33は玄武岩系石材の磨製石斧の基部である。34は玄武岩系石材の石斧の破損品で、刃部から片面が大きく破損、基部も破損している。35、36は淡緑色・硬質で斑紋のはいる石材の石斧刃部の破損品で、35は刃部は使用により潰れが見られる。37は淡緑色・硬質で斑紋のはいる石材の自然縫に、粗い剥離や敲打痕が見られるもので、石斧の木製品と見られる。

38は頁岩系石材の石斧の破損品である。39は片岩系石材を使った石斧破損品もしくは木製品である。広い範囲で敲打痕が残るが、研磨も進んでる。基部が執拗に敲打されていることから、くさび的使用による欠損とも見られるが、刃部付近の形状がやや不自然で木製品の可能性も捨てきれない。40は片岩系石材の石斧破損品である。41は石斧の基部片である。42は片岩系石材の石斧木製品と見られる。

44と45は円錐の中央に敲打等により孔をあけた石器で、縁辺は縦面のまま刃部を設けていないので環状石器ともいるべきものである。47もその種の石器の木製品の可能性が高いが、48は周囲が敲打を受けていることからハンマーや台石の可能性がある。

(5) 扁平片刃石斧・柱状片刃石斧およびその木製品（挿図4-122図48～50）

48は淡灰色で縱方向に平行に縞模様の入る石材を用いた扁平片刃石斧である。基部には縦方向の剥離痕が見られ、使用中に敲打された可能性がある。

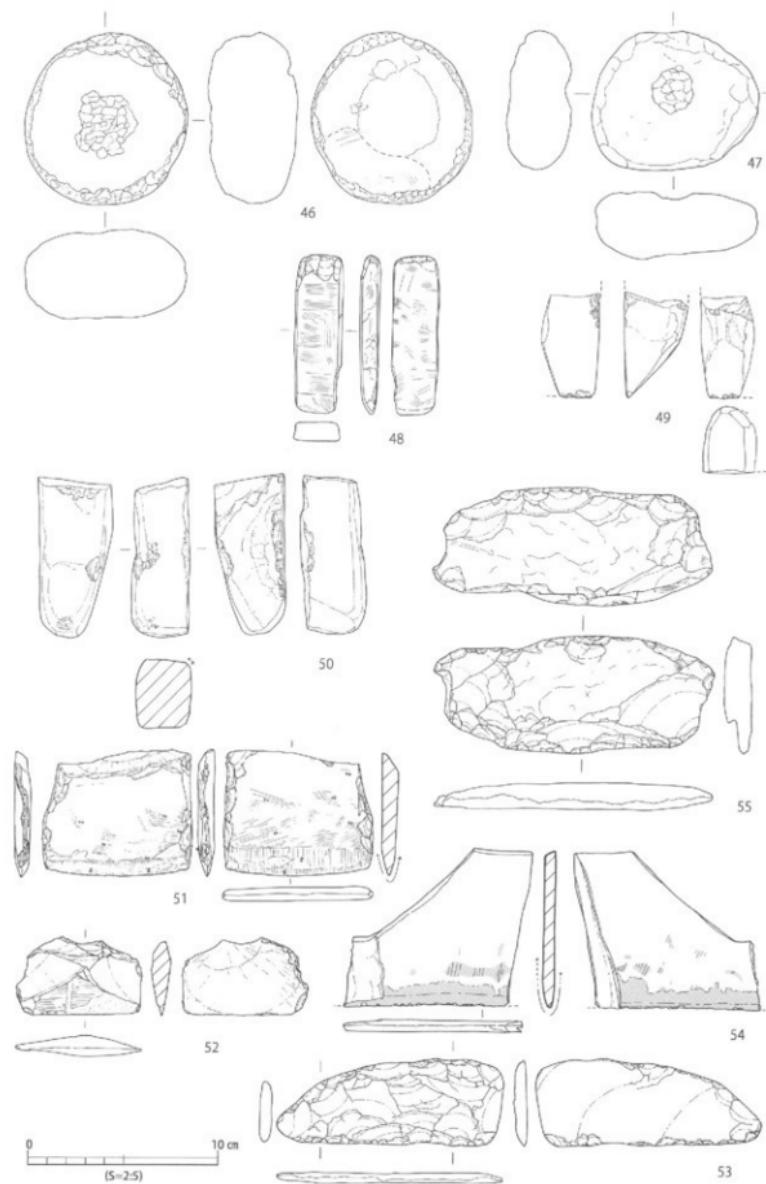
49は、淡灰色地に縱に白色の縞がはいる石材を用いた柱状片刃石斧である。縦横に破損しているため、全体形は不明だが、片面はほぼ平面に整形し、反対面は緩やかな角度で片刃を形成している。上面は横断が馬ノ背状に湾曲している状況が観察できるため、現状3.53cmの幅からさほど大きはないものと考えられる。

50は、色調がやや薄いながらも49と同様の石材を用いた、柱状片刃石斧の木製品と考えられる。丸みを帯びた角縁の数か所に敲打痕が見られるが、特に縦に破断している剥離面の上下の合意対応する箇所に集中した敲打痕が認められる。その敲打痕の片側の、幅のある底を打点にして破断面の剥離が広がっており、ある程度くぼませた敲打痕を「足がかり」に一定の長さに割れるようコントロールしたものと推測される。その他の敲打は、自然の膨らみや厚みを除去するため行われた可能性が高い。

(6) 石包丁およびそれに類する石器とその木製品（挿図4-122図51～挿図4-123図58）

黒色の細粒石材（頁岩か？）を石材に、石包丁ならびにそれに類する石器を製作している。51は半磨製の石包丁と考えられる。板状の素材を長方形に加工し、刃部と表裏のかなりの部分、ならびに両側縁も磨いて面を作っている。側面からはさらに剥離が表裏に見られ、あるいは紐掛けたりを意識した加工かもしれない。背面は切断面のまま未加工である。

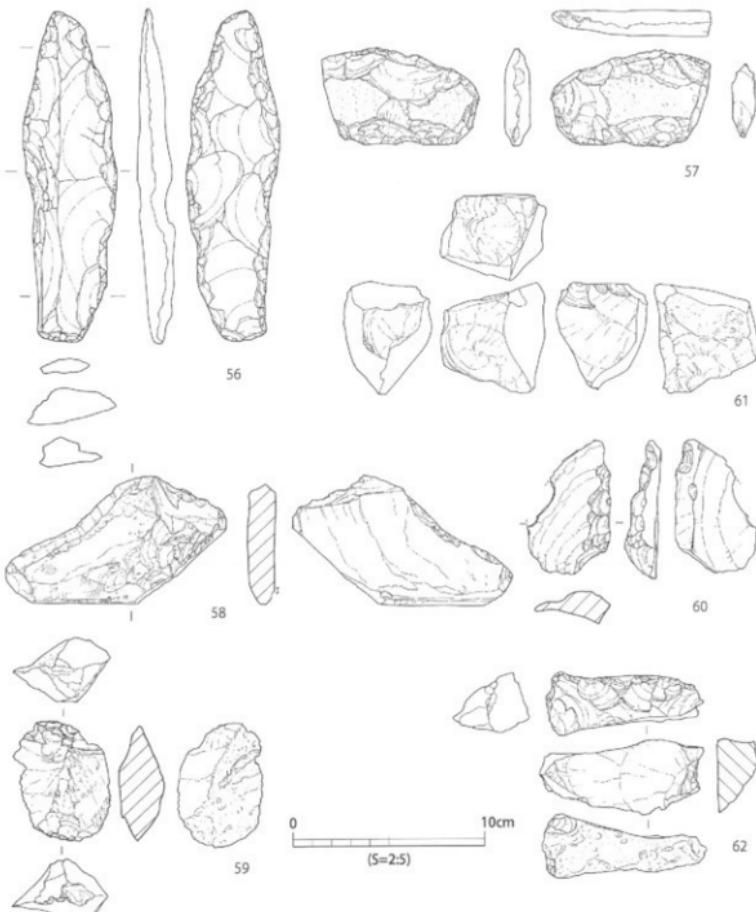
52は51と同様の黒色石材の剥片を素材に、刃部側の片面に研磨を加えて石包丁状の石器としたものである。略長方形で、刃部はほぼ直線状を呈し、主要剥離面側は未加工である。側縁の片



第4-122図 安富羽場遺跡出土石器実測図(5)

側には抉りを入れており、紐掛かりの可能性がある。53は板状の素材の片面を中心に加工を加え、鎌状の形態としたものである。54は、大形の石包丁状石器である。節理に沿って薄く割れた板状の石材を素材に、その直線状の一辺を研磨して鋭い刃部を形成したものである。刃部には、細かな刃こぼれ状の剥離痕が認められる。研磨は刃部を中心としているが、表裏の節理剥離面の凸面にも及んでいる。全形は不明だが、上下の辺は平行している。55はやや大型の打製石包丁であろうか。下縁にやや湾曲した刃部を設け、両側にはわずかながら抉りを作り出している。

56は黒色の頁岩系石材を素材に、両面を加工して細長くし、先端をとがり気味に加工したもので、スクレイバーかと考えられるが、柄を意識したようなわずかな抉りが見られ、打製石剣の



第4-123図 安富羽場遺跡出土石器実測図(6)



第4-124図 安富羽場遺跡出土石器実測図(7)

未製品の可能性もある。57はやや大型の楔形石器といえるものである。厚めの板状の自然石を素材に、上下両極から打撃が加えられており、その結果片側が裁断されている。これ自身を石器とみることもできるが、石包丁やスクレイパーの製作途上品と考えたほうが良いかもしれない。58は、節理に沿って剥がれたやや厚めの板状石材を素材とし、直線的な一縁に研磨加工を加え



第4-125図 安富羽場遺跡出土石器実測図(8)

た石器である。研磨が行われた辺は刃部として形成されておらず、面が残されており、どのような石器が作られようとされていたか不明である。あるいは、さらに節理に沿った割れを施し、厚みを減ずることを想定した途上品の可能性もある。仮にそうした過程を経ると、52のような石包丁状石器の素材が形成されることになる。

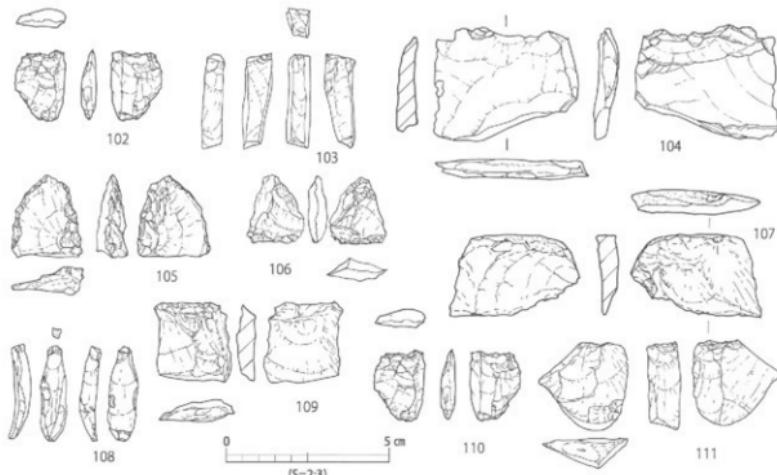
(7) 玉髓・瑪瑙製石器（挿図4-124図63～88）

主にSK25を中心、小型の玉髓・瑪瑙系石材を用いた石器が出土している。灰色地に黒色の縞や斑紋が見られる石英質の石材で、透明度を持つ場合も多い。石材としては透明感のあるものを瑪瑙、全く無いものを玉髓と分類しているが、本質的には同じ石材で厳密な分類ではない。

63～68は楔形石器と分類した。両極からしばしば階段状の剥離が見られ、側面が縦方向に裁断されているものもある（65～67）。64や67、68は下縁が小さなノッチ状になっている。また、やや厚みのある65～67などは、石核となる可能性もある。

69は、一つの縁辺に細かな2次加工が両面から施されており、小型のスクレイパーとしている。70は厚手の剥片の三方が折られたものと考えられる。71～76、80は二次加工のある剥片である。いずれも小型の剥片の縁辺に、二次的な加工が施されており、剥片を臨機的に何らかの目的で使用するための加工と推測される。77～79は、剥片の縁辺に微細な剥離痕が観察される石器で、使用痕のある剥片としている。81は剥片である。

82～88は石核である。82は剥片を素材に、小型剥片を剥ぎ取ったものと考えられる。83は打面を転移しながら小型剥片を取った、さいころ形の石核と考えられる。84～88は、いわゆる両極打法によって剥片を剥ぎ取った石核と考えた。比較的大きめの剥離痕が観察できるもので、楔形石器と厳密な区別は難しい。ただ、上述の剥片に、両極技法により生じたと考えられるものが少なからず認められることから、それに対応する石核を想定している。



第4-126図 安富羽場遺跡出土石器実測図(9)

(8) 安山岩製石器（挿図4-123図59～62、挿図4-125図89～101、挿図4-126図102～111）

安山岩Aを石材とする石器（挿図4-123図59～62、挿図4-125図89～101） 黒色を呈し、概してきめが粗く、微小な棒状の鉱物結晶を多く含む安山岩を安山岩Aとしている。89はやや縦に長い剥片の側縁に、連続的に、両面から連続的な二次加工を加えているものでスクレイパーとしている。90は剥片の周縁に二次加工を加えて台形状をしているもので、スクレイパーもしくは石鏃の未製品の可能性もある。

91～95は楔形石器としている。上下両端から、深いリングが形成される剥離痕が認められ、側面が裁断された痕跡を残すものもある（91、92、95）。92は厚みがあり、両極打法による石核とも考えられる。96はわずかに縦に長い剥片の末端に、細かな二次加工を加えた石器である。97は、楔形の石核の合い対向する二線に、二次加工を加えたものである。両極からの剥片剥離で破断後に、再び剥片を剥離した痕も観察される。98は椭円形の剥片を素材に、周縁に加工を加えたもので、楔形石器としても使用している可能性がある。101は両極打法により剥がされた剥片を素材に、わずかに二次加工を加えた石器である。

59、60、62は石核である。59は拳大程度の礫を素材に、両極打法によって剥片を剥離したもので、表裏両面に礫面が残されており、素材礫の状況を読み取れる資料である。60は剥片を素材にして、その一縁辺から小型の剥片を剥ぎ取ったものである。62は両極打法によって剥がれた厚手大型の剥片を素材に、その縁辺から小型の剥片を剥ぎ取っている。片面には大きく礫面が残り、その礫面を打面として剥片剥離が行われている。61は、剥離面の縁辺に打点が観察できない不規則な剥離面で用まれた資料である。高熱を受けて破碎した可能性がある。

99は腹面が剥離面中心の不純物を起点に、リングが生じている剥片で、破裂によって破碎した剥片の可能性がある。背面には礫面が残されている。100は、背面の大部分が礫面で構成される剥片である。打面が残されず、背面側にも小さな同一打点の剥離面が認められることから、両極打法によって剥ぎ取られた剥片の可能性がある。

安山岩Bを石材とする石器（挿図4-126図102～108、110、111） 安山岩Bは安山岩Aに比べてきめが細かく、風化面はやや白っぽくなり、わずかに棒状鉱物が見られる石材である。102～104は楔形石器である。102は上下両端から剥離が行われ、一侧縁が裁断されている。103は両側が裁断された結果、柱状を呈している。上下両端に面があることから、楔形の石核とみたほうが良いかもしれないが、生じた剥片は狭小である。105と106は二次加工のある剥片である。105は略三角形を呈しており、石鏃の未製品の可能性がある。

110、111は両極打法による石核と考えられる。一定の大きさの剥片が取れないと判断し、石核と分類しているが、楔形石器と明確に分けることは難しい。110は自然礫面を打面として剥がされた剥片である。礫面は湾曲しており、素材は円礫であったことがわかる。111は両極打法により生じた剥片と考えられる。

安山岩Cを石材とする石器（挿図4-126図109） 安山岩Cは、きめが細かく、棒状鉱物が見られない石材である。ただ、本例には棒状鉱物は認められないものの、たまたま表面に表れていないだけの安山岩Bである可能性は否定できない。109は打面稜線部分を打点として剥離された剥片である。端部は折れしており、やや縦長の剥片であったと考えられる。

（丹羽野 裕）

第4-2表 安富羽場遺跡出土石器一覧表

NO.	実測	地区	遺構	層	器種	石材	長さ	幅	厚さ	備考
1	N57	2A区C 4	SK75	1層	碧玉	碧玉	0.65	0.5	0.5	孔径 1.8mm~2.1mm
2	S1	2A区B2	SK152		石器	安山岩C	2.25	1.35	0.35	
3	S2	2B区D5	SK126	1層	石器	安山岩C	1.71	1.45	0.25	
4	S3	2A区C5	SX2		石器	安山岩C	2.35	1.75	0.42	
5	S5	2A区B5	SX2		石器	安山岩A	2.4	1.45	0.48	
6	S9	2A区B5	SK96	5層	石器	安山岩C	2.77	1.68	0.41	
7	S6	2A区C5	SD2		石器	安山岩C	1.92	1.62	0.24	
8	S10	2A区B3	SK98	柱下層	石器	黑曜石	2.25	1.6	0.25	
9	S11	2A区B 6	SK99		石器	安山岩B	1.82	1.05	0.27	
10	S12	2A区B5	SK103	4層	石器	安山岩B	1.88	1.54	0.49	
11	S13	2A区C4	SK72		石器	安山岩C	1.88	1.35	0.23	破損
12	S14	2A区B3	SK84		石器	安山岩C	2.22	1.48	0.29	
13	S16	2A区C4	SK72		石器	安山岩C	1.51	1.35	0.31	
14	S17	2A区C4	SK78	1層	石器	安山岩B	1.71	1.3	0.3	
15	S21		SK01	P.54	石器	安山岩C	2.27	1.58	0.26	
16	S15	2A区C4	SK71	下端	二次加工のある剝片	安山岩B	3.64	2.93	1.64	石器未製品の可能性
17	S22	2A区C4	SK79		石器	黑曜石	2.01	1.86	0.4	
18	I7	2B区E5		3層	石器	安山岩B	2.4	1.3	0.35	
19	I2	2A区B5		3層	石器	安山岩A	1.9	1.7	0.35	灰褐色土
20	I8	2A区C5		4層	石器	安山岩C	2.1	1.1	0.3	上端欠損
21	I10	2A区			石器	安山岩C	1.8	1.2	0.25	
22	I6	2A区C4		4層	石器	安山岩C	1.5	1.4	0.35	
23	I9	2C区G6		5層	石器	安山岩B	2.2	1.6	0.4	
24	I5	2A区C3		4層	石器	安山岩B	2.1	1.4	0.4	
25	I11	2A区C6		4層	石器	安山岩C	2.3	1.8	0.5	
26	I4	2A区C4		4層	石器	安山岩B	2.05	1.69	0.41	上端欠損
27	I3	2A区C4		3層	石器	安山岩A	2.4	1.8	0.5	
28	I11	2A区B 4	東壁	4層	石器	安山岩A	2.0	1.2	0.25	基部欠損
29	I12	2A区B 4		4層	石器	安山岩C	2.1	1.5	0.5	
30	I13	2B 2C合軸		2層	石包丁か?	黒色頁岩か	1.3	2.3	0.3	欠損で小片
31	S40	2A区	SK82	Po.42	磨製石斧未製品か破	黒色頁岩か	17.55	6.05	2.62	品
32	S30	2A区B 5	SX8	井内	磨製石斧	玄武岩系か	13.03	6.12	2.94	
33	S28	2A区	SK35	Po.2	蛤刃石斧破損品	玄武岩系か	8.72	5.52	3.69	
34	S32	2A区	SX5	Po.121	蛤刃石斧破損品	玄武岩系か	15.22	5.49	3.33	
35	S24	2B	SK130		蛤刃石斧破損品	片岩系か	7.17	5.33	2.58	
36	S25	2A区	SD2	Po.49	蛤刃石斧破損品	片岩系か	7.14	5.66	3.7	
37	S37	2A区	SX9	Po.65	蛤刃石斧破損品か未	片岩系か	12.72	4.42	5.46	製品
38	S38	2A区C4	SK104		磨製石斧未製品か破	黒色頁岩か	6.88	5.74	1.74	品
39	S36		SK36	Po.121	蛤刃石斧	片岩系か	14.83	6.37	4.59	蛤刃石斧折後再加工
40	S29	2B区E5	SK137	1層	蛤刃石斧破損品	片岩系か	3.55	3.42	2.11	
41	S26	2A区B3	SK141	14層	石斧破損品	玄武岩系か	5.27	3.98	2.8	
42	S39	2A区B5	SX2	Po.254	蛤刃石斧未製品	片岩系か	16.3	6.17	9.05	
43	s44	1A区G9	落ち込み下層		磨製石斧	玄武岩系か	14.74	5.61	3.9	蛤刃石斧折後再加工
44	S35	2B区F5	SK137	2.3層	磨製石斧破損品	不明	9.49	5.33	3.41	
45	S34	2B区南端	SD12		圓状石器	不明	6.7	5.79	2.26	
46	S31	2A区	SX2	Po.245	台形片刃ハンマー	花崗岩系	9.13	8.45	4.58	圓状石器未製品の可能性
47	s47	1区G9		5層	圓状片刃石斧	花崗岩系	8.27	2.38	1.05	
48	S33	2A区	SX2	Po.284	台形片刃ハンマー	花崗岩系	3.0	7.4	9.0	圓状石器未製品の可能性
49	N56	2B区D5	SK12,133		片状片刃石斧	片状片刃石斧	5.36	3.53	2.77	破損
50	N60		SX4	Po.7	片状片刃石斧未製品		8.05	3.86	3.03	礫素材
51	N11	2A区B5	SD8 (SK92内)		石包丁	黒色頁岩か	7.83	6.59	0.75	月刃、一部磨製
52	N2	2B区E5~F5	SD16	28層	石包丁	黒色頁岩か	6.51	4.19	1.07	片刃、一部磨製
53	s55	1区G9		4~5層	圓状石器	黒色頁岩か	11.61	4.58	0.65	
54	N3	2C区F5	SD12		石包丁	黒色頁岩か	9.55	8.35	0.57	月刃、一部磨製、破損
55	s52	1区G9	落ち込み下層		打製石劍状器	黒色頁岩か	14.84	6.21	1.47	
56	s53	1区G9	SK01周辺	南側	打製石劍状器	黒色頁岩か	17.4	4.65	1.91	
57	N59	2C区C6	SX11	1	スクリーパー未製品	黒色頁岩か	8.23	5.01	1.25	
58	N58	2A区B 4	P314	10層	磨製石器未製品	黒色頁岩か	11.64	6.69	1.4	
59	N19		SX3	Po.79	石核	安山岩A	6.66	4.53	3.37	撲面残る
60	N20	2C区G6	SX11	3層	石核	安山岩A	7.25	4.38	1.67	
61	N18	2A区B3	SK152	8層	鈍破砕器?	安山岩A	5.01	5.72	4.32	
62	N21		SK66	Po.61	石核	安山岩A	8.48	3.28	3.3	撲面残る
63	N26	2A区C5	SK25		楔形石器	瑪瑙	2.54	1.97	0.99	
64	N27	2A区C5	SK25		楔形石器	瑪瑙	2.35	1.81	0.32	
65	N39	2A区C5	SK25		楔形石器	瑪瑙・玉髓	2.66	1.57	0.8	

NO.	実測	地区	通稱	別	器種	石材	長さ	幅	厚さ	備考
66	N36	2A区C5	SK25		瑪瑙	瑪瑙	2.64	2.07	1.02	
67	N34	2A区C5	SK25		楔形石器	瑪瑙	2.83	2.34	0.8	
68	N31	2A区C5	SK25		楔形石器	瑪瑙	2.56	2.03	0.65	
69	N22	2A区C5	SK25		スクレイパー	瑪瑙	1.82	1.71	0.45	
70	N35	2A区C5	SK25		切削削片	瑪瑙・玉髓	3.11	1.93	0.91	
71	N25	2A区C5	SK25		一次加工のある削片	瑪瑙・玉髓	2.74	2.4	0.75	
72	N28	2A区C5	SK25		二次加工のある削片	瑪瑙	2.45	2.1	0.85	
73	N29	2A区C5	SK25		一次加工のある削片	瑪瑙・玉髓	2.44	2.44	0.52	
74	N37	2A区C5	SK25		二次加工のある削片	瑪瑙	2.63	1.5	0.65	
75	N44	2A区C5	SK25		二次加工のある削片	瑪瑙	2.58	0.95	0.43	
76	N45	2A区C5	SK25		二次加工のある削片	瑪瑙	1.97	1.91	0.54	
77	N30	2A区C5	SK25		使用前の削片	瑪瑙	2.46	1.36	0.69	
78	N41	2A区C5	SK25		使用前の削片	瑪瑙	3.13	2.19	0.54	
79	N42	2A区C5	SK25		使用前の削片	瑪瑙	2.37	2.04	0.58	
80	N23	2A区C5	SK25		二次加工のある削片	瑪瑙	2.55	2.1	0.93	
81	N46	2A区C5	SK25		削片	瑪瑙	2.2	2.0	0.62	
82	N47	2A区C5	SK25		石核	瑪瑙・玉髓	2.63	2.23	0.93	
83	N24	2A区C5	SK25		石核	瑪瑙	2.01	0.93	1.2	
84	N40	2A区C5	SK25		石核	瑪瑙・玉髓	3.24	2.68	1.1	
85	N33	2A区C5	SK25		石核	瑪瑙	2.71	2.0	0.83	
86	N38	2A区C5	SK25		石核(二次加工)	瑪瑙	3.08	2.27	0.76	
87	N32	2A区C5	SK25		石核	瑪瑙	2.87	1.72	0.91	
88	N43	2A区C5	SK25		石核	瑪瑙・玉髓	3.45	2.49	0.82	
89	N9	2A区C4	SK77	2 削片	スクレイパー	安山岩 A	3.44	2.28	0.49	
90	N13	2B区E5	SK110	12層	スクレイパー or 石核 未製品	安山岩 A	2.94	3.13	0.73	
91	N7	2A区B4.C4	SD7		楔形石器	安山岩 A	3.35	1.28	0.74	
92	N10		SK98	Po.14	楔形石器	安山岩 A	4.1	2.5	1.29	
93	N4	2A区B5	SK93		楔形石器	安山岩 A	2.52	2.49	0.66	片面彎曲する
94	N12	2A区B3	SD5		楔形石器	安山岩 A	3.3	2.08	0.77	
95	N17	2A区C4	SK75	3層	楔形石器	安山岩 A	2.41	2.47	0.64	下端欠損
96	N6	2A区E5	SK120		一次加工のある削片	安山岩 A	4.04	3.29	1.19	
97	N8	2A区B4	SK51		一次加工のある削片	安山岩 A	5.76	3.32	1.74	
98	N16	2A区C4	SK3		一次加工のある削片	安山岩 A	5.41	5.25	1.14	
99	N5	2A区B3	SK98		削片	安山岩 A	3.0	2.45	0.63	片面彎曲する
100	N14	2A区B4.C4	SD7		削片	安山岩 A	3.83	5.0	0.67	背面彫刻
101	N15	2A区B3	SK98		一次加工のある削片	安山岩 A	3.98	3.2	0.71	
102	N50	2A区B5	SK7		楔形石器	安山岩 B	2.14	1.57	0.54	
103	N54	2A区B4	SK96	1層	楔形石器	安山岩 B	2.9	0.89	0.72	
104	N11	2A区B4	SK102		楔形石器 or 石核	安山岩 B	4.61	3.56	0.5	
105	N48	2A区C3	SK87		石器未製品か	安山岩 B	2.52	2.2	0.96	
106	N49	2A区B4.C4	SD7		二次加工のある削片	安山岩 B	2.08	1.79	0.72	楔形石器が素材か
107	N52	2C区F5.F6	SD11	1層	削片	安山岩 B	3.97	2.55	0.71	片面あり
108	N55	2A区B5	Sk92		削片	安山岩 B	2.92	0.86	0.49	
109	N51	2B区E5	SK109	8層	削片	安山岩 C	2.45	2.3	0.75	
110	N50-2		SR83	Po.142	石核	安山岩 B	4.61	2.28	1.41	
111	N53	2A区C4	SK71・72		石核	安山岩 B	2.7	2.75	1.01	

益田市安富羽場遺跡出土の弥生時代の石器について

丹羽野 裕

はじめに

安富羽場遺跡からは、おおむね弥生時代中期中葉を中心とする石器、石製品が出土している。土坑などの遺構から出土しているものも多いが、厳密な遺構との同時性を議論することは難しいので、同時期の一括資料という取り扱いではなく、大づかみに弥生時代中期中葉を中心とする時期という枠組みの石器群として、評価を行ってみたい。

1. 石材と石器について

石材の使い分け 出土石器の石材については、報告書作成の制約上、地質学の専門家の同定を受けていないため、正確な岩石呼称ではないことをあらかじめお断りしておく。安富羽場遺跡出土の石器の石材は、大きく分けると安山岩、玉髓系石材、黒色緻密堆積岩（以下、頁岩系石材と呼ぶ。）、淡緑色・硬質で斑紋のはいる石材（片岩系か）、黒色で細粒の石材（玄武岩か）、白色縞灰色石材が利用されている。石材は目的とする石器の種類と対応しており、安山岩は石鏃やスクレイバー、不定形の二次加工石器に利用されている。玉髓系石材は、石包丁状の石器に主に利用され、縞の入る灰色石材や淡緑色・硬質で斑紋のはいる石材（片岩系か）、黒色で細粒の石材（玄武岩か）は磨製石斧に利用されている。

石包丁状石器 こうした石材の使い分けは、石器の形態や機能と石材の特性を勘案して行われていたものと考えられる。たとえば石包丁状の石器は、薄い板状を呈することが形態上のひとつの条件だったと考えられることから、微細な鉱物が薄く層状に堆積して、板状に割れやすい頁岩系石材が選択されたものと推測される。磨製に適していることも条件のひとつであったろう。益田市では、同様の石材選択が中小路遺跡や草ノ上遺跡でも認められ、弥生時代を通じてこの地域の石材利用の在り方であった可能性がある。

磨製石斧 太形蛤刃石斧は淡緑色・硬質で斑紋のはいる石材（片岩系か）、黒色で細粒の石材（玄武岩か）が主に利用され、そのうち片岩系としている石材の石斧は当遺跡で生産されていた。

柱状片刃石斧は、その木製品の存在から、角の丸まつた縄が素材として利用されていることが分かる。石斧として岡さと粘りを持つ石材であることが第一条件であろうが、大きさや形態が、目的物に近いものが採集できる石材であることが重要であったものと推測できる。また、白色の縞が石器の主軸に対して縦に入るのも特徴で、同様の在り方は、島根県東部の弥生時代の磨製石斧類にも見られる特徴である。少ない資料のなかであるが、こうした視覚的な石材の特徴も、選択基準のひとつであった可能性もある。

安山岩・玉髓系石材の石器 銳い割れ面が有効な石器には、安山岩や玉髓が用いられている。ただ石鏃以外には定型的な石器は認められず、石鏃もすべて包含層出土のため、縄文時代のものが含まれている可能性もある。安山岩は本文中にも示したように、肉眼で見る限り3種類の石材が認められる。重複するが、3種の石材は以下のとおりである。

安山岩A：黒色を呈し、概してきめが粗い。微小な棒状の鉱物結晶を多く含むのが特徴

安山岩B：Aに比べてきめが細かく、風化面はやや白っぽくなるが、わずかに棒状鉱物が見られる。

安山岩C：きめが細かく、棒状鉱物が見られない。

棒状の鉱物を含む安山岩は、益田市久城町の久城西Ⅰ遺跡や若葉台遺跡で、小礫状のものを筆者は確認しており、安山岩Aは地元で産出する石材の可能性が高いと考える。安山岩Bは、Aよりも良質ではあるが同様の鉱物が認められることからすると、やはり地元産出の可能性を考慮する必要がある。安山岩Cは石墨以外は少量であり、たまたま表面で棒状鉱物が見えない可能性も含め、例外的石材のように見受けられる。

一方で玉髓系石材は、上坑（SK25）から集中的に出土している。経常的に使われた石材というよりは、何らかの状況のなかで臨機的に使われた石材と考えたほうが良いかもしない。大部分が2~3cm内外に収まる小型のものであることから、原石自体が小型の礫状のものであった可能性が高い。定型的な石鏃1点のみで、利用状況は不明だが、石英質で黒い斑紋があり透明感も見られる石材で、その見た目のきれしさが選択理由であった可能性もある。現状では、益田市周辺で唯一の事例なので、今後の類例の増加を待つ必要がある。

安山岩は、厳密な判断は自然科学的な分析を待たなければならぬが、地元産出のものが多いと考えられる。玉髓も、小型の礫が原石として用いられていると考えられ、産出地は地元周辺の可能性が高い。いずれにしても、遠隔地石材は多くは用いられなかつたものと推測され、弥生時代中期の石見地方西部の石材利用を考える上で一つの材料となるだろう。

2. 石器製作技術について

全体量が少ない中ではあるが、垣間見える石器の製作技術について検討してみたい。

磨製柱状片刃石斧の製作技術 柱状片刃石斧は破損した製品と未製品それぞれ1点だけの出土であるが、その中から大かたの製作技術をうかがうことができる。未製品（挿図4-122図50）は礫に若干の加工痕を残したもので、礫の形状自体が角の丸い直方体の一端が三角形状に角度を持つ、柱状片刃石斧の形状に近い形のものである。礫は縦に分割されたことがうかがえ、そのための剥離にあたっては、目標とする分割面の上・下に敲打による溝状のくぼみを設け、その一つを打削のための「足がかり」としていると考えられる。その工程は、たがね状の何らかの間接ハンマーの存在が前提となり、実際に剥離面には1点に収束しないリングを観察することができる。そのほか、不規則な膨らみが見られる部分に敲打痕が観察される。なお、縦素材であることは製品（15）においても、刃部形成面の背部が丸みを帯びていることからもうかがうことができる。

以上の状況から、柱状片刃石斧について、次のような工程を想定することができる。

①完成品と近い形態、大きさの礫の採取→②目指す大きさにしていくため、分割する部分への敲打による溝状のくぼみの形成→③何らかの間接ハンマーを用いて打ち割り、分割する。→④膨らみを除去するための部分的敲打→⑤全体の敲打による成形→⑥研磨による整形と仕上げ

⑤と⑥の工程は資料の中から直接は見いだせないが、想定される工程である。ただし上記の復元はあくまでも2点の資料から想定された工程であり、この地域の弥生時代の一般的な製作技術を表わすとは限らない。

安山岩・玉髓系石材の剥片剥離技術 安山岩の剥片剥離技術は難駁にいえば2種類が認められる。ひとつは平坦打面から、小型剥片を剥離するもので、挿図4-123図の60、62がこれに対応する。もう一つが、いわゆる両極打法によるものである。59や110、111をこの種の石核と考えたが、楔形石器と分類したもののなかにも石核だったものがある可能性が高い。剥片からも、両極打法を読み取れるものが多く、この種のいうなれば簡便な剥片剥離が主体を占めていたものと考えられる。

半鍍系石材の場合も、2種類の剥片剥離技術が見られる。ひとつは小型剝片を素材に、小剝片を剥ぎ取ったり（82）、打面を転移せながら小型剝片を取って最終的に小型サイコロ状の石核（83）が残るものである。もう一つは安山岩と同様の、両極打法によるもので、やはりこの種の剥離が主体であったものと考えられる。

頁岩系石材による石器の製作技術 黒色を呈す頁岩系石材を使った石器の代表的なものは、薄い板状の素材の一辺に、研磨で仕上げた直線的な刃部を持つ石包丁状の石器である。完形の1点（17）は、両側を研磨し刃部の背は切断して長方形に仕上げている。こうした石器の製作技術を直接知る資料はないが、薄く層状に剥げる石材の特徴を利用して、板状の素材を作り、それを切断して大まかな形を作ったものと想定される。一邊を研磨していくながら、あえて刃部形成をしていない資料（58）があることから、あるいは薄く分割する工程の前に研磨作業が行われていた可能性もある。簡便な片刃調整の石器（52）は、研磨作業が先行した方が効果的であるかもしれない。

頁岩系石材で異種なのが、大形の楔形石器状を呈する資料である（57）。この形態自体が石器であったり、あるいは楔形石核の可能性もあるが、両極打法を用いて一定の大きさ・形に整え、スクレイパーや石包丁とする途上品である可能性もある。

3. 安富羽場遺跡における石器生産

上記のように、安富羽場遺跡においては、弥生時代中期中葉を中心とする時期に、太形蛤刃石斧、柱状片刃石斧や石包丁状石器、打製石器などが製作されたことは間違いない。こうした石器生産が行われたことは、安富羽場遺跡の性格を考える上で、重要な事実である。益田周辺において、石斧や石包丁などの石器が拠点的な大規模集落で生産され、周辺の集落に供給されたような状況があるとすれば、石器生産は羽場遺跡を拠点集落として評価するひとつの根拠となると思われる。

ただ、益田周辺で実態の明らかとなった弥生時代集落跡が少なく、また石器生産の様相も明らかとなっていない現状では、早急な結論を出すのははばかれるところである。この地域における弥生時代のそれぞれの石器の在り方と、生産・流通の在り方を明らかにするためには、近隣の中小路遺跡とともに、羽場遺跡の全体像の究明が望まれるとともに、集落遺跡調査例の増加と、石器の全体像が分かる資料の提示が望まれる。

本報告は、限られた調査区内で出土した限られた資料のみをもとにしたものである。よって、益田周辺の弥生時代の石器の在り方の一面を提示したにすぎない。ただ、益田市に限らず不明瞭な点の多い石見地方の弥生時代を考える上で、石器やその生産の在り方を明らかにすることは極めて重要なことと認識している。この報告が、その足掛かりになれば幸いであり、新たな資料による批判が行われることを期待するものである。

最後になったが、安富羽場遺跡の石器の整理と報告の執筆について便宜を図っていただいた田中義昭先生、益田市教育委員会の木原光氏、長澤和幸氏、大野芳典氏に感謝したい。

参考文献

- 島根県教育委員会 2011『堂ノ上遺跡一般国道9号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7-』
- 島根県教育委員会 2011『堂ノ上遺跡 一般県道久城インター-線久城T区区域活力基盤創造交付金（改良）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 益田市教育委員会 2008『家下遺跡・中小路遺跡』

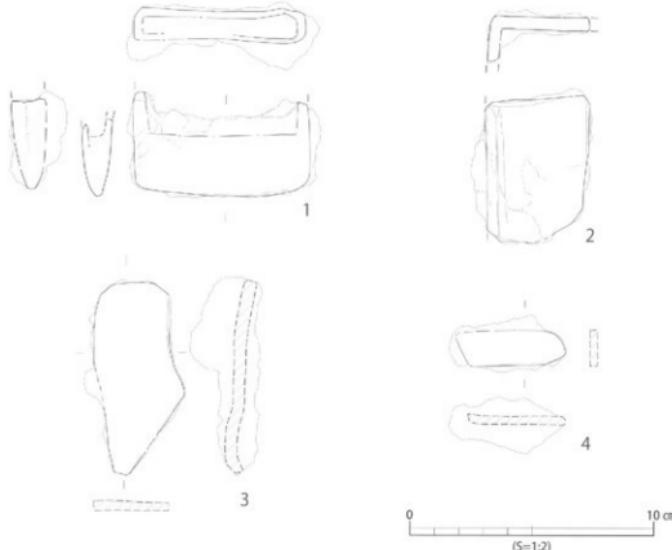
第5節 安富羽場遺跡出土の鉄器 鉄器（第4-127図）

1は19年度調査区1区G9グリッドのSK01から出土した鋳造鉄斧片である。遺存状況は比較的良好である。軟X線写真では顕著なクラックは観察されないが、縦状の痕跡が観察されることから鋳造品起源の鉄器と判断される。現存長4.3cm、刃部幅7.2cm、厚さ1.2cm、器壁の厚みは側面で4mm前後、正面で3.5～4mm前後を測る。刃部はわずかに弧状を呈しており、刃部縦断面はわずかに偏刃状をなす。軟X線写真ではソケットである袋部底面が明瞭に観察され、これに基づくと刃部先端部から袋部下端部までの長さは2.5cmを測る。袋部底面ラインは刃部とほぼ平行し直線状を呈している。

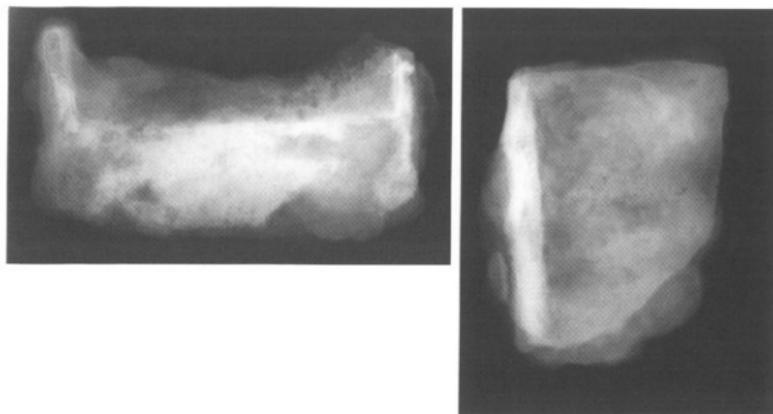
袋部断面は偏平な長方形状を呈し、側面には鋳型合わせ目の鉄バリ痕跡が明瞭に観察されることから、双合范により製作されたものと考えられる。刃部付近の側辺はほぼ平行で、刃部は鍔状に張り出さない。なお、刃部の研ぎ直しなどの再利用の痕跡は確認できない。

2は20年度調査区2A区B4グリッドのSX4から出土した断面L字状の鉄器片である。地金肌の様子はAによく似ている。肉眼観察上においては遺存状況は良好であるが、X線観察では上辺部付近を中心に中小のクラックが数多く観察される。また縦状の痕跡も認められることから、鋳造鉄斧の破片と断定される。

当資料は鋳造鉄斧の側面から正面にまたがる破片資料と考えられ、現存長6.0cm、幅4.3cm、厚さ2.0cmを測る。器壁の厚みは、側面で5mm前後を測り、側面がやや厚い。袋部断面はほぼ直角に折れ曲がることから袋部断面は六角形状ではなく長方形状を呈していたものと推察される。側辺部には鋳型合わせ目の痕跡は認められない。また、肉眼観察及びX線写真観察においては突



第4-127図 安富羽場遺跡出土鉄器実測図 S=1/2



安富羽場遺跡出土鉄器X写真 左：SK01出土鉄器、右：SX4出土鉄器

帶は認められない。また1と同様に、刃部研ぎ出しなどの再利用の痕跡も認められない。

3はSK83から出土した鉄器片で、現存長8.0cm、3.6cmを測る。土壤が付着して錫膨れが著しく、正確な厚さは不明であるが、破断面からみて5mm前後と推定される。両側辺は比較的直線状を呈しているが、本来の鉄器の形状を反映しているラインとは断定できない。継断面は錫膨れのため不明瞭ながら凹凸が顕著であり、何らかの外的衝撃により変形したものと推定される。地肌の雰囲気は1や2とよく似るが、軟X線写真ではクラック又は鬆は明瞭には観察されず、現段階では鋳鉄起源のものとは判断はできない。

4も3同じくSK83から出土した鉄器片であり、外見上の特徴は3とよく似ていることから本来同一個体であった可能性がある。3と同様に土壤付着による錫膨れが著しく、本来の形状をとどめていないが、軟X線写真の観察から、幅4.5cm、長さ1.4cm、厚さ3mm程度の平行四辺形状の鉄片であったと推定される。軟X線写真上ではクラックや鬆は観察できない。

なお、これ以外にSK01覆土中より板状の鉄片が出土しているが、後世の混入品の可能性が高いことから固化していない。

小結

出土鉄器の概要 羽場遺跡の調査ではSK01及びSX4から2点の鋳造鉄器片が出土した。また、SK83から出土した2点の鉄器片も外見上の特徴は前者の2点とよく似ており、鋳造起源のものである可能性がある。

島根県内においては、今回の羽場遺跡の2例を含めると鋳造鉄器及びその破片資料は計8点となった。これまでの事例はいずれも単独出土例であり、同一遺跡からの複数出土の事例は県内では当遺跡が初めての事例となる。

鋳造鉄斧の型式学的特徴 SK01出土の鋳造鉄斧片は破片資料であり、型式学的な詳細な検討は

困難であるが、主な特徴を列挙すると、①袋部の横断面が長方形状を呈する、②平面形態は刃端部が鍔形に張り出さず側辺幅がほぼ平行となる、③袋部底面ラインが刃部と平行し直線状をなし、袋部側面の器壁がほぼ均一の厚さを呈する、④器壁は4mm前後と比較的薄い、といった特徴を指摘しうる。

鋳造鉄斧については、これまで多くの先駆的研究の蓄積があり、その変遷が概ね明らかにされている（川越1980・村上1988・野島2011など）。上記の特徴を村上恭通氏の分類に照らし合わせれば、氏のⅠ式に属するものとしてまず問題ない（村上1988）。SX4出土の2についても小片のため詳細な型式の特定は困難だが、L字状の横断面形を呈する点や器壁の厚みを鑑みれば、1と同様にⅠ式に属する蓋然性が極めて高い。

SK01及びSX4から出土している土器は、概ね第Ⅳ様式までは降らず第Ⅲ様式新段階まで収まるものと考えられ、これまでの村上分類Ⅰ式の年代観とも整合する。

当資料の位置づけとその評価 山陰における鋳造鉄斧の流入状況については、かつてその概略を述べたことがある。要約すると、山陰における鋳造鉄斧の流入時期のピークは中期後葉にあり、中期前葉に盛行する北部九州の盛行期とは明らかにズレが認められる点、弥生時代中期段階では破片再利用が多く認められるのに対し、後期では破片の再利用の痕跡は殆ど認められない点などを指摘し、前者については、北部九州における鋳造鉄器生産の活発化により不要となった鋳造鉄斧破片が関門海峡以東へ流出するような事態が生じたものと想定した（池淵2005）。

今回の羽場遺跡の出土事例についても、おおむね上述の指摘事項と一致するものであるが、複数点数が出土している点、県内では最古の事例の一つとして位置づけられる点が特筆される。ただ、これが山陰東地域に対して北部九州との距離が近いといった、単純な地理的優位性に起因するものであるとは判断が難しい。青谷上寺地遺跡から出土した鋳造鉄斧関連資料を再検討結果では、中期前葉から鋳造鉄斧片の流入が開始され、中期中葉段階（第Ⅲ様式）においては、既に一定量の鋳造鉄斧片が流通していた状況が明らかにされている（野島2011）。さらに東の丹後地方においても、奈具遺跡や口吉ヶ丘遺跡など第Ⅲ様式に所属する鋳造鉄斧片が幾つか知られており（野島2008）、むしろ当該期における齊一的な拡散現象であった可能性が高い。旧稿で指摘した、山陰においては北部九州より鋳造鉄斧片の流入時期のピークが遅れる点については、現時点においても大きく変更する必要はないと思われるが、その開始期についてはやや遡って考える必要があると思われる。いずれにせよ現時点においてはなお類例が乏しく、今後の出土例の増加を待ちたい。

（池淵俊一）

引用・参考文献

- 池淵俊一 2005 「安来市越峰遺跡出土鋳造鉄斧片をめぐる諸問題」『季刊文化財』第110号
川越忻志 1980 「弥生時代の鋳造鉄斧をめぐって」『考古学雑誌』第65巻第4号
野島 永 2008 「弥生時代の初期鉄器」『弥生時代における初期鉄器の船載時期とその流通構造の解明』平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書
野島 永 2001 「弥生時代鋳造鉄斧の形態変化と破片利用」『青谷上寺地遺跡出土品研究報告6 金属器』鳥取県埋蔵文化財センター
村上恭通 1988 「東アジアの二種の鋳造鉄斧をめぐって」『たら研究』第29号

第6節 まとめ

1 立地地形の特徴

羽場遺跡は安富遺跡群の東外れに位置している。地形的には平野に面し、山丘の裾部に形成された低位段丘面に相当する。平坦部は東西を山丘から流れ出る小流によって区切られ、推定規模は半径約200m程度の広がりを示す。遺跡の北側は、平成19年度に行われた調査によって明らかにされているが、緩斜面をなして低湿地に移行すると考えられる。この低湿地は、高津川の後背地に続いているが、おそらく弥生時代以降に水田化されて今日に至っているものと推定される。

2 遺跡の規模と時期

羽場遺跡は、早く1989（平成元）年の発掘調査が行われ、弥生時代中期の長大な塹や多数の土坑群、弥生土器・土師器・須恵器の他中世の貿易陶磁器（龍泉窯系青磁碗）等が検出された。今回の調査では、この塹の西端部を確認することができた。その結果、当該塹は平坦部の中央をほぼ東西に延びて集落の内部を区切る遺構で、同時に生活水等の排水機能を兼ねていたことが想定される。

今回の調査区は1989年調査区の西側に続く区域で遺跡の全体からすると北西部に相当する。塹の他に検出された遺構は弥生時代の墓坑・土器等の廐棄土坑・柱穴状のピット群である。また、出土遺物は大量の弥生土器、石器、須恵器、中世貿易陶磁器、土師器等である。須恵器・貿易陶磁器等の数量は少ない。

これらの検出遺構・出土遺物からすると羽場遺跡は弥生・古墳時代、古代・中世に亘る集落跡であるといえる。各時代の集落範囲は未調査の部分が多く確かなことはいえないが、大略次のように想定することができるであろう。すなわち、集落の東限は、東側の小流によって開削された谷地形の存在からその辺りに求めることができよう。西限も同じく南北方向の谷地形によって想定しうる。この谷が中小路遺跡南東部と羽場遺跡北西部の間に介在することは先述の通りである。

のことから遺跡の北側は、北西部斜面で確認されたように、緩斜面をなして沖積低地に移行するものと考えられる。遺跡の南限は国道9号線が走る山ぎわに求めることができよう。四至をこのように限定することができるとすれば羽場遺跡の広がりはおよそ東西150m、南北約200m程度と推定される。立体的には北側に緩く傾斜する薄い凸レンズ状もしくは鯨の背状の平坦面をなしたと考えられよう。各時代の集落については次のように想定しておきたい。

弥生時代の集落は1ha前後の範囲に一単位の単目的集落が形成されるケースが多い。このことによると羽場遺跡には1～2単位の単自集落（「単位集団」）の存在を推定できる。今回の調査ではその集落の北西城を検出したことになる。次に古墳時代の集落については確実な遺構が見られないため不明とせざるをえないものであるが、古代に至り大型建物群が平坦部の一角に建てられたことはほぼ間違いない、また中世期にも国道9号線よりに集落が営まれたことが想定されるところである。

3 弥生時代の遺構について

(1) 土坑状遺構の構造と性格

今次調査区からは大小合わせて約160基の土坑が検出された。それらは平面形からすれば、およそ長方形土坑、円形土坑に大別されるが、不定形の土坑も相当数見られた。また、その多くが複雑に重複し合い、密集状態をなしていたので本来の構造を正確には把握した例はそう多くはない。以下では、長方形土坑を中心にその構造と特徴をうかがい、羽場遺跡理解の一ステップとしたい。

i) 大型長方形土坑：平面形が長

方形（隅円形・胴張形等を含む）と確認できる土坑は第4-3表に示すように約30基以上ある。これらは長軸が3.0m以上の大型土坑、2.5m前後の中型土坑、1.5m前後の小型土坑に分類できる（調査時には比較的大型のものにはSX、小型のものにはSKの記号を付したが、複雑な重複関係の整理からSKとした土坑にも大型のものの存在することが判明し、このネーミングが適切でないことが明らかになった。しかし、すでに、中途の名称変更是遺物収録等で混乱を生む危険性があったので記載上は調査中のネーミングをそのまま使用している）。以下では、まず大型の土坑について構造・遺物の出土状態を確認し、その性格を検討しよう。対象としては考察が比較的容易な単体存在の土坑を取り上げ、次いで重複状態で考察可能な土坑を診ることにする。

大型長方形土坑中、単体で形状を把握できる例としては2A区北部でSX3、2A区北東部でSK146、2B区でSK125等をあげができる。

SX3は構造全体がある程度把握可能な土坑である。SD4等の遺

第4-3表 羽場遺跡検出の大型土坑一覧

遺構名	規模		時期
	長軸(m)	短軸(m)	
SX1	2.76	1.64	前期後半
SX3	3.77	2.18	中期中葉頃
SX5	2.95	2.07	中期中葉頃
SX9	1.7以上	1.59	中期初頭～中葉？
SK66	1.99	1.44	中期中葉？
SK81	2	0.87	中期中葉古樹
SK83	1.25	1.33	中期中葉頃
SK84	1.32	1.29	中期中葉頃
SK85	0.44以上	0.78	中期中葉頃
SK87	2.49	0.77	中期前葉～中葉頃
SK96-1	2.32	0.46以上	中期中葉頃
SK96-2	2.3	1.1	中期中葉頃
SK98	1.38	1.18	中期中葉頃
SK102	0.72以上	0.72	中期中葉頃
SK110	1.99	1.3	中期前葉
SK124	1.43以上	1.2	中期中葉頃
SK125	3.04	1.59	中期初頭
SK126	2.41	1.14	中期中葉頃
SK128	2.41以上	1.22	中期中葉頃
SK132	2.22	0.94	中期中葉？
SK136	2.31	1.86	中期初頭
SK146(SX2)	3.86	2.4	前期中～中期中葉頃
SK147	1.37以上	1.9	中期前葉～中葉古樹
SK148	2.6	1.52	中期中葉頃
SK149	1.88	0.86	中期中葉頃
SD16	2.53以上	1.29	中期中葉頃

構と重複しているが、これはいずれもSX3の覆土中に掘り込まれており、SX3の構造とは無関係である。長軸の方向は北東東—南西西を指す。平面形は隅円長台形で上面の規模は長辺2.0m、短辺1.5m～2.0m、深さ0.25m。長軸・短軸比率は1.7になる。壁は北側の長辺壁が急角度をなすのに対して南側長辺壁と西側短辺壁は緩やかに立ち上がっている。坑底は浅い皿状に埋んでいる。

堆土はおおむねレンズ状に堆積し、下部では焼上・焼土塊・炭化物の堆積が確認されている。坑の中央から西北・西側にかけて大量の上器片と石器等が検出されている。土坑の時期決定に関わる下層の弥生土器は中期中葉頃の壺式的特徴をもっているが、出土土器群には中期前葉かそれ以前に遡るもののが含まれている。

以上のような記載的観察からするとSX3は廃棄用土坑として構築され、機能したと考えざるえない。

2A区北東部で検出したSK146は当初SX2（墓坑）として認識し、記録を進めた遺構である。その後、坑の形状や土器等の出土状態から廃棄用土坑と訂正して記載した。主軸方向はSX3同様北東東—南西西を示す。形状と規模は不整長方形で長軸3.94m、短軸2.4m、深さ0.5mを測る。長軸・短軸比は1.6になる。坑底には浅い埋み2箇所がみられ、SK146として捉えた土坑に先行する遺構の存在したことが想定される。全体的には舟状に掘り込まれた坑で埋土の上層部は水平に、下層部はレンズ状に堆積していた。

出土した遺物は弥生土器・石器等でその数量は700余点になる。埋土の層序との関連でいえば、下層部に前期後半代の壺式の上器が、上層部に中期中葉頃の型式がそれぞれ包含されていた。このことからすると、SK146は前期後半頃に廃棄用土坑として掘られ、中期中葉頃まで一貫して廃棄用の機能を果たしていたことになる。さらに、上層部の水平堆積層はSK146の包含層を再度掘り込んで造成された廃棄用土坑の可能性が高く、これをもってSX2（廃棄用坑）として復活させてもよい。

要するに、SK146は先行遺構やSX2とも合わせて廃棄用土坑として掘られ、使用されたとすることができる。東側に重複しながら連続するSK147～SK149がいずれも廃棄用土坑と考えられることも上記の判断を助ける。

2B区で検出されたSK125は平面形と規模の点からみて大型長方形土坑の一つとしてよい。形状は胴張気味の整然とした長方形で主軸は北東東—南西西方向を示す。規模は長軸3.04m、短軸1.6m、深さ0.2m～0.4m。長軸・短軸比率は1.8とある。浅い凹凸のみられる坑底は東側から西側へ向けて傾斜し、西壁付近が深くなっている。四壁とも急角度で立ち上がり、底面との境は明瞭である。埋土は、長軸断面図で観察すると東から西に傾斜する薄い土層が重なり合い、全体に壁際が厚くなっている。

出土した弥生土器と石器の総点数は約120点になる。土器の型式は前期末から中期初頭に属し、時期幅は短い。短期間に形成された廃棄用土坑ということになろう。

SX5は、SK83・SK84・SK85等と重複していて本来の形状を明瞭に把握することは困難である。しかし、一長辺が明瞭に残っているのである程度の復元的観察は可能であり、また、長軸方向が先述の4土坑と異なって北北西—南南東向きになっていることも注目されることである。形状は不整梢円形ないし胴張隅丸長方形で規模は長軸2.95m、短軸2.0m程と推定される。長軸・短軸

比率は1.5になる。

これらの他に東西道路下に広がる土坑群にも大量の土器が出土したSX9やSK96等のような廃棄用として機能した坑がいくつか存在すると推定される。

ii) 中型長方形土坑：次に長軸が2.0m前後の中型長方形土坑について検討する。

まず、SX1を取り上げて坑の構造と遺物の検出状態を検討する。この土坑は北東—南西方向に主軸があり、平面形の大きさは上面で長軸2.76m、短軸1.64m、深さ0.2m、長短比率=1.7である。ただし、北東隅付近がわずかに変形し、底面も長方形形状に歪んでいて先行する小型の長方形土坑の存在が考えられるが、SX1としての構造はほぼ完全に保たれている。四壁の立ち上がり方は 45° ～ 60° 位で傾斜する。底面には低い凹凸が認められる。四壁と底面の変換部はシャープでこの土坑が長方形の形状を意識して掘られたことを示している。埋土は整然とした堆積状態とはいえない。最上部面から底面に達する十層（4層等）もあって掘削当初の機能が失われ、埋土が形成される過程で不整合状態を生み出すような行為があったと考えられる。

出土した土器片は130点に達し、型式的には前期後葉から中期中葉頃までのものが含まれている。包含層（埋土）が薄いので出土土器の層位的な把握は難しい。よって、SX1は土器片等の廃棄施設として使用された長方形土坑と結論付けられる。

次に2A区の中央西寄りで検出されたSK87をみよう。平面形はやや不整な長方形を呈し、西短辺が他の遺構と重複してわずかに変形しているが、東側の知辺は本来の形状を保っていると考えられる。規模は長軸2.45m、短軸は0.77m、深さ0.18mである。長軸の方向は北東東—南西西でSX3等と同一である。長軸・短軸比は3.4で狭長性が特徴といえる。坑底には 1.3×0.7 mの長方形面があり、長辺壁は急角度で立ち上がる。短辺壁は緩い立ち上がりを示す。

埋土は四壁側から坑中央部に向かって皿状に堆積している。最上部は黄褐色土層が覆っていた。出土土器としては西壁よりの最下層から数点の弥生土器（中期中葉古相）がえられたに過ぎない。

以上のような諸様相からSK87は箱形墓坑として掘られ、使用されたと考えておきたい。とすれば、中型長方形土坑には廃棄用と墓用の2種が存在することになる。両者の構造上の相異は長軸・短軸比率に表示される可能性もある。

中型の廃棄用土坑例としては2A区南西部のSK81、2B区のSK110・SK126・SK128等が見出される。SK81は胴張隅丸長方形（長軸2.02m、短軸0.94m、深さ0.42m、北東東—南西西方向、長短比率2.1）で四壁は急傾斜をなしている。坑底は中央が浅く窪む。埋土はレンズ状に堆積している。坑底付近から上層部にかけて大量の弥生土器と割石が出土した。SK110は不整長方形（長軸2.0m、短軸1.3m、深さ0.62m、北西—南東方向、長短比率1.6）である。四壁は急角度で立ち上がる。大量の弥生土器（前期末葉から中期前葉・中葉の古相）・砾石・割石が出土している。

SK126は不整隅丸長方形（長軸2.44m、短軸1.15m、深さ0.46m、北北西—南南東方向、長短比率2.1）である。坑底には浅い凹凸が見られた。40余点の弥生土器（中期中葉頃が多い）や石礫等が出土している。SK128は隅丸長方形（長軸約2.5m、短軸1.2m、深さ0.8m、北東東—南西西方向、長短比率2.0）である。坑底はほぼ平坦で側壁は急角度で立ち上がる。東壁は緩やかに傾斜している。埋土下部の層から出土した弥生土器片（中期中葉古相）は40点余を数える。

「SD16」とした遺構も長方形土坑（長軸約2.1m、短軸1.5m、深さ0.5m、長軸は東西方向よりわずかに北に振れる。長短比率1.4）である。

こうしてみると、SK87のような墓坑と思しき土坑はほとんど見当たらない。SX1の坑内北東部に痕跡的に捉えられた長方形土坑（長軸約2.0m、短軸0.9m、長短比率2.2）等の存在が懸念材料ではあるが、性格は不明である。

iii) 小型長方形土坑：長軸が1.5m前後の小型土坑について検討する。単体で検出された土坑としては2B区のSK123があげられる。平面形は隅丸長方形（長軸1.2m、短軸0.72m、深さ0.24m、北東東一南西西方向、長短比率1.6）である。坑底は不整縁円状になる。埋土から10数点の赤土器（前期後葉）が出土している。墓坑とする積極的な徴証はない。

重複状態にある土坑に小型のものが存在する可能性はある。例えば、2A区北西部のSK98、SK103等であるが、墓坑か廐棄用坑かの区別は付け難い。

iv) 円形（隅丸方形状小土坑を含む）土坑：平面形が円形（隅丸方形状）を呈し、直径が1.0m前後の土坑が存在する。2A区の北西端で検出されたSK152（直径もしくは一边1.1m）は坑底部が浅く窪み壁は急角度で立ち上がっている。埋土から中期中葉頃の七器や石鏡が出土した。同じく2A区南側のSK25も注目される。軸長1.2m前後の隅丸方形を呈し、深さは0.35mを測る。この小坑から80余点の遺物が出土しているが、興味深いのは20点以上に上る瑪瑙の剥片・石核・楔形石器等が含まれていたことである。廐棄の意味と坑の関連性をうかがわせる事例であろう。なお、19年度調査のSK1等も同類の土坑と考えられる。この土坑からは鋳造鉄斧が検出されている。

以上、円形土坑とした坑に類するものは他にもいくつか見受けられるが、重複状態が複雑なことから明確な摘出はできない。ここでは類型として存在する可能性があることを指摘するに止めたい。

(2) 溝状遺構の構造と性格

① SD11について：2B区と2C区の境ではSD11が検出された。断面逆台形状を呈し、上幅は最大1.6m、深さ0.5mになる。中途で分岐しており、南側の分岐溝=SD12は上幅0.8mを測る。主溝とは断面「W」字状を示し、調査区内では平行しつつ、東西向きからやや南西側に方向を変えている。埋土はレンズ状に堆積し、底近くの層は粘質であった。

SD11・12は平成元年調査の折に検出された「環濠」と一休の壕であることは疑いなく、今回はその北西延長部を確認したことになる。同時に二股状に分岐することが明らかになった。壕としてどのように機能したかについては防禦施設とする見方や集落域を画する標識的な意味合いを強調する意見もある。ここで確定的なことを提示する余裕はないが、その規模からしてすくなくともSD11・12に防禦的機能を求ることは困難であろう。

平成元年検出の「環濠」は2B・2C区から蛇行気味に南西一北東方向に延びている。国道9号線に沿うかのような線を描く。羽場遺跡を乗せる低丘陵が北に張り出すとすればこの壕は低丘陵平坦部を横断するような形で掘削されたことが考えられよう。そして、1区・2A区・2B区と平成元年調査区の遺構群は壕の北側に、2C区は南側に展開したことになり、壕は集落内を区分け施設として機能したことが想定されてくる。

② その他の溝状遺構：2A区からはSD1～SD15とした溝状遺構が検出されている。これらは

SD7のように長さ7.2m、幅0.3～0.4m、深さ0.15～0.18mといった長大な例もあれば、SD2のように不定形で幅広の浅い例もある。前者の場合はSK66に繋がる「尻尾」状の溝状遺構で他の集落跡に類似がある。機能については諸説あり明確ではないが、いわれるような「除湿」用とするためにはSK66の性格を見極める必要がある。SD2については形状や遺物の出土状態から廐棄用長方形上坑が連続的に構築された結果溝状遺構となつた可能性もある。SD1も同様の様相を示す。

SD7は形状から判断する限り何らかの溝的機能を果たしていた可能性はあるが、他の溝状遺構はいずれも幅広の長く浅い伸びで多くの例において多量の遺物が出土するという特徴が見られる。SD1、SD2等は廐棄用の掘り込みが数珠繋ぎになつたようにも見受けられる。廐棄用土坑と重複していることも考慮すべきであろう。

(3) SK66と周辺のSK群について

既述のように2A区中央部のSK66はSD7を作つ不整長楕円形土坑（長軸2.0m、短軸1.5m、深さ0.5m。中期中葉頃）である。壁は緩く傾斜し、底部は皿状に窪んでいる。埋土は下部が黒色ない黒褐色の薄い層の互層状をなし、上部は焼土や炭化物を含む黒褐色土層で覆われる。この上部層には大量の遺物が含まれていた。SD7との繋がり具合はSK66の北東部隅から漏斗状に連続しているので両者が一体の遺構であることは疑いない。いわゆる「尻尾」状遺構としたことを再確認する。

とすれば、SK66は住居跡の中央ピットとする可能性が浮かんでくる。坑埋土下部の堆積状態もそのような判断と矛盾しない。大量の遺物が検出され上部層は廐棄用上坑として再利用されたと考えることもできる。

仮にSK66を住居跡の中央ピットとすれば周辺に柱穴が存在することになる。SK66の中心から半径8mの線上にはSK1・78・75・63・62・64・104・136もしくは102群がほぼ等間隔で並んでいる。各SKは長楕円形で長軸がSK66の中心方向を指している。これらSKのサークルの外側には頗る著しい坑はほとんど見られない。ただし、壁帶溝のような遺構は検出されていないので円形住居跡と認定するにはなお問題があろう。それに想定される住居跡が直径10m前後となれば、規模的には特大クラスにもなる。周間に住居跡が未検出の状況から集落構造を把握する手立てを欠いているので決定的なことはいえない。

4 古代・中世の遺構と遺物

弥生時代以降の遺構・遺物としては奈良時代から平安時代初頭の方形柱穴群と古代須恵器・土師器、中世貿易陶磁器・土師器等が検出され、出土している。遺物量は少ない。遺構面としては弥生時代の遺構群を覆う遺物包含層（4層）の上面が相当するが、耕作土（床土含む）層の除去の際に十分分離できず、古代・中世の遺構を広く検出することはできなかた。ただ、2C区では上述のように方形柱穴群を検出した。この一帯は基盤層がやや高くなっていることが早いとしたといえる。この柱穴群の分布からは複数の大型掘立柱建物跡の存在することが予測される。

中世の遺構は検出されていない。

5 羽場遺跡の意義

羽場遺跡の発見は平成元年に遡る。当時、石見地方での弥生時代の「環濠」をともなう集落跡は未発見であり、大いに注目された。また中世の青磁碗等の出土も顕著な事実として関心が寄せられた。今回の発掘調査は「環濠」の延長部を確認したことはもとより廃棄用土坑群の集中域を検出・確認したことなど得られた成果は小さくない。以下、諸成果と遺跡の構造的特徴や性格並びに意義を要約的に記して結びとする。

確認した遺構は上坑・溝状遺構・ピット等である。土坑は長方形・円形があるが、前者が圧倒的基数を占め、形状ほとんど長方形を呈する。大・中・小の3類型が見られるが、いずれも廃棄用土坑として認められた。墓坑の可能性を指摘したのは1基のみである。しかし、密度度が高く、複雑に重複する上坑群中に墓坑が存在しないとは断言できない。問題は、そうした焼土・炭化物・土器等・石器等の廃棄と死者の埋葬箇所が同時代に存在するのか、存在するとすればその意味合いはどうか、ということであろう。また、廃棄物を長方形に整えた土坑に投棄（収める）するという行為ないし營為をどう理解するかについても問われてくる。こうした問題の解決は、羽場遺跡のより広範囲な調査研究と類似遺跡との比較研究に俟つ他はない。ここでは、大規模な集落経営に関わる廃棄物の投棄場所が遺跡の北西域に塹で分け隔てて設定され、長期間にわたり使用されていたことを特記することになる。同時に廃棄行為に一定の約束事（宗教的な意味も含めて）が存在したことを見定しておくことも無駄ではなかろう。

さて、出土遺物で目立つのは弥生土器である。型式的には前期後半から後期末までの型式が含まれ、量的には前期末から中期中葉頃までのものが圧倒的に多い。前期末から中期前葉の型式は多条の平行沈線を施すことで知られ、沈線の施文具がヘラからクシ状工具に転換することをもって前期と中期を限るのが一般的である。しかし、今次出土のこの時期の土器群には両者が混在し、施文具の変化による区分に一義的な決定要素を与えることが難しいように思われる。つまり土器様式上のⅠ期からⅡ期への移行については地域性を考慮する必要があることを指摘しておきたい。

いま一つの问题是Ⅲ期=中期中葉の土器型式に関する事柄である。この時期を特徴付ける要素は壺形・甕上器の口縁部・体部の形様にある。壺形土器では口縁端部を肥厚させて下方に折り曲げるよう仕上げる「下垂口縁」や小さく斜め上方に引き出すように仕上げる手法、頸部・体部に断面三角形の突帯を付加する手法にそれぞれ特徴がある。北部九州の須玖式土器に系譜をもつ鋤先状口縁壺も數例存在する。甕形土器では頸部を「く」字状に屈曲・屈折させ、口縁端部を斜目内側に小さく引き出す例が圧倒的に多い。

こうした諸特徴は山口盆地から徳佐盆地の土器に顕著に認められ、島根県との県境に近い宮ヶ久保遺跡（山口市阿東町）出土土器等はその典型例といえる。こうした土器群は中期中葉をピークに展開したと想定されるが、なお、中期後葉への移行状態に不明な部分を残している。今後、山陰地方中西部のⅢ～Ⅳ期土器と上記山口側の中期土器との対応関係を詳細に検討していく必要があろう。くわえて羽場遺跡出土の中期土器に関していえば、これが山口・徳佐盆地の同時期土器群と強い関連性を有していることを確認しておきたい。そして、補足的であるが、中国山間部の塩町系統の土器片が検出されたことを記しておく。この種の土器の分布圏が大きく西方に延びたことの実証である。

今次調査で多数の石器やその製作に関わる石材・加工関連品がえられたことも重要視される。

石見地方においては、これまで弥生時代石器の生産と分頃に関する知見は皆無であったが、羽場遺跡で各種石器類の出土したことによりこうした状況を打破する道が拓かれた意義は大きい。加えて、複数の鋳造鉄斧片が検出されたことも特筆に値しよう。こうした諸事実は、羽場遺跡が弥生時代の生産と生活の拠点として安富平野一帯の集落群中に堅牢な位置を占めていたことの何よりの証である。長期継続型の典型的な弥生集落の姿相がそこに示されているのであり、その性格は、2C区の方形柱穴群や中世貿易陶磁器類の出土が物語るように、各々の時代的な変異を被りながらも古代・中世にまで継承されたといえるのではないだろうか。

参考文献

- P126の参考文献の他、下記の文献を参考にした。
- 正岡睦夫・松本岩雄 編 1992 『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社
山口県教育委員会 1998 『宮ヶ久保遺跡』山口県阿東町埋蔵文化財調査報告 第1集
山口市教育委員会 2001 『上東遺跡 弥生時代遺物編』
木原 光 1992 「益田市・羽場遺跡出土の陶磁器」『松江考古』第8号 松江考古学講話会

第5章 自然科学分析

第1節 中小路遺跡・羽場遺跡発掘調査に伴う自然科学分析

文化財調査コンサルタント（株）

渡辺正巳

1. はじめに

中小路遺跡、羽場遺跡は島根県西端の益田市安富町に位置し、西中国山地に源流を持つ高津川下流域の東岸に広がる、 $1 \times 3\text{ km}$ ほどの谷底平野上に立地する。

本報は、益田市（益田市教育委員会文化財課）が、中小路遺跡周辺の古環境及び住居跡などの埋積環境の推定、出土柱材の樹種同定の目的で、文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した複数業務の報告書を再編したものである。また本報では、堆積物の軟X線写真観察、木質遺物（柱）の樹種同定及び花粉分析について報告する。

2. 分析試料について

図1に示した平面図上の各地点において試料を採取、あるいは採取された試料の提供を受けた。花粉分析、軟X線写真観察試料については、別途詳細を示す。

3. 分析方法及び分析結果

1) 軟X線写真観察

(1) 試料採取・撮影・記載方法

$25\text{ cm} \times 10\text{ cm} \times 1\text{ cm}$ の透明アクリルケースを用いて試料採取を行い、現試験室内にて試料調整を行った。軟X線撮影は、増感紙を挟んだ印画紙に $40 \sim 45\text{ kVp} \cdot 30\text{ mA}$ の電流で 50秒～1分20秒の間、軟X線を照射した（観察した軟X線写真は、ネガ画像である。）。記載は、「土壤記載薄片ハンドブック（久馬・八木：訳監修、1989）」に準じて行い、併せて分析試料を分取した。



図1 試料採取地点

左：中小路遺跡（6区） 中：中小路遺跡（3区） 右：羽場遺跡（20区）

(2) 観察結果

図2に、実視写真、軟X線写真、解析結果を示す。また、以下に層ごとの記載を行う。

i) ⑦層

実視写真の色調の差から3層に細分できた。全体に褐色を帯びるのは、酸化鉄が検出しているためである。上部は黒色のマンガン斑（あるいは炭片）が顕著であり、下位に向かってマンガン斑（あるいは炭片）が少なくなる。このため、上部で暗い色調が下部に向かい徐々に明るくなる。これらの現象は、⑦層より上位の乾出が影響している可能性がある。

軟X線写真では中部が明るく、上部が暗い。一方下部は、上部と中部の中間的な明るさを示す。軟X線写真的明暗は、堆積物の粒度に影響される事が多く、色調が暗いほど粒度が細かい傾向にある。また、孔隙部や乱れた部分、木や根は暗い色調を示す。一方、酸化物が検出された部分や礫は明るい色調になる。⑦層中部から下部への明から暗への色調の変化は、マンガン斑（酸化マンガン）の検出度合いに起因すると考えられる。またマンガン斑の検出が顕著な上部が暗色を示すのは、試料整形時の乱れ、あるいはマンガン斑の検出が激しかった為（ため）に堆積物が乱れた可能性がある。根跡と考えられる直線的なチャンネル（孔隙の一形態）が地層境界付近から始まる傾向にある。それぞれの層の上面付近で堆積休止期があり、植生で覆われた可能性がある。

ii) ⑧層

実視写真的色調は⑧層から⑨層へと徐々に明るくなるが、⑧層、⑨層境界部での色調差がやや激しい。このことは、⑧層では⑨層に比べ酸化鉄、酸化マンガンの検出が激しいことによる。また、両層ともに色調の差から更に細分が可能であり、⑧層は上下に2分できた。上部ではマンガン斑、酸化鉄の検出が顕著であり、下部ではマンガン斑、酸化鉄共にさほど顕著に認められなかった。一方、下部では酸化鉄の検出が顕著であった。

軟X線写真では、更に上部層でも上下方向の色調変化が顕著である。上部層上部ではマンガン斑、酸化鉄の検出が顕著であり、このために色調がやや明るいと考えられる。また下部ほどマンガン斑、酸化鉄が薄くなり色調が暗くなっていく。下部層では酸化鉄の検出が顕著であり、このために色調がやや明るくなると考えられる。根跡と考えられる直線的なチャンネル（孔隙の一形態）がやはり地層境界付近から始まる傾向にある。それぞれの層の上面付近で堆積休止期があり、植生で覆われた可能性がある。

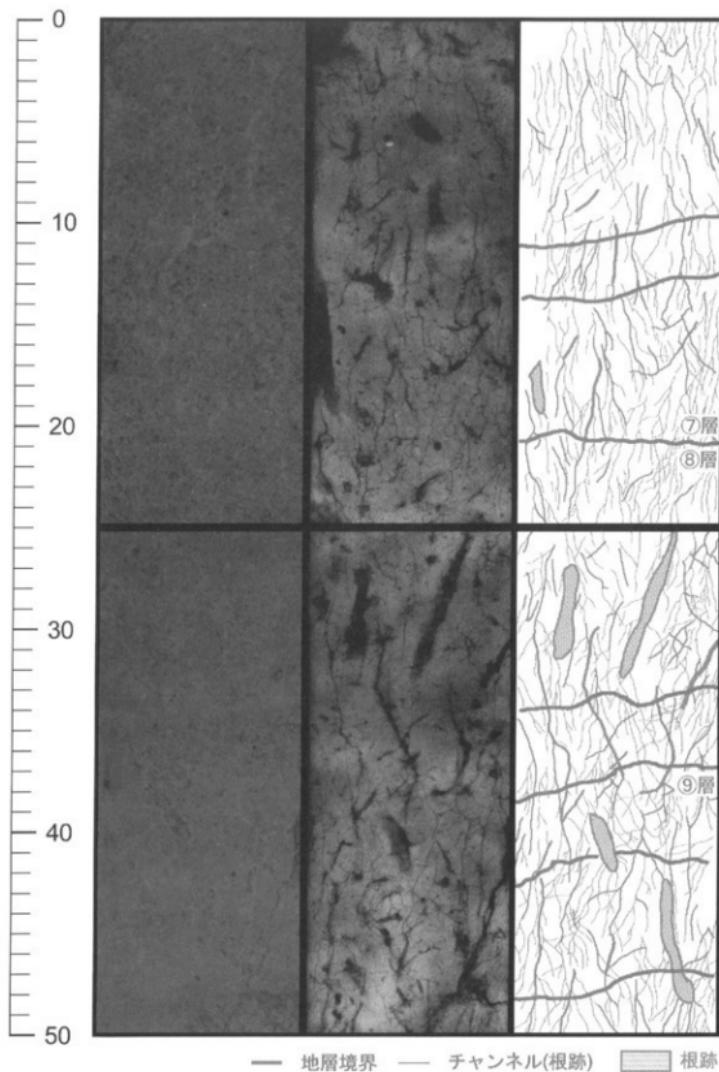


図2 軟X線写真観察結果

実視写真、軟X写真、解析結果

iii) ⑨層

実視写真で⑨層は3分され、中部が最も明るい色調を示す。上部、下部では中部に比べ酸化鉄の検出が顕著なことが原因と考えられる。

軟X線写真では、中部層の色調がやや明るく、上部層、下部層の色調がやや暗い。このことは、酸化鉄の検出傾向と矛盾する。一方、根跡と考えられるチャンネル（孔隙の一形態）の分布密度は上部、下部で高く、中部ではやや低い。したがって、根による擾乱の影響で、上部層、下部層の色調が暗かったと考えられる。また、根跡と考えられる直線的なチャンネル（孔隙の一形態）がやはり地層境界付近から始まる傾向にある。それぞれの層の上面付近で堆積休止期があり、植生で覆われた可能性がある。

2) 樹種同定

(1) 分析方法

かみそりによって切片を採取し、渡辺（2010a）にしたがって顕微鏡観察用永久プレパラートを作成した。作成したプレパラートについて、光学顕微鏡下4～600倍の倍率で観察し、同定・記載・写真撮影を行った。

(2) 樹種同定結果

分類ごとに特徴的な試料（下線試料）の記載を行い、顕微鏡写真を示した。また、表1に同定結果をまとめた。

i) カヤ *Torreya nucifera*

試料 No.2 (W09020607)

記載：構成細胞は仮道管、放射柔細胞からなる。樹脂細胞、放射仮道管及び樹脂道は存在しない。年輪幅は狭く、早材から晩材への移行は緩やかである。晩材幅は非常に狭い。仮道管にらせん肥厚が明らかに存在し、2本のらせんが対になる傾向がある。放射組織は大部分が20細胞高以下である。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に2～4個存在する。以上の組織上の特徴からカヤと同定した。

ii) ヒノキ属 *Chamaecyparis* sp.

試料 No.1 (W09020606)、3 (W09020608)

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。放射仮道管、らせん肥厚及び樹脂道は存在しない。早材から晩材への移行は緩やかである。晩材幅は非常に狭い。樹脂細胞は早・晩材の移行部から晩材にかけて多く分布し、接線方向に配列する傾向がある。放射組織は単列で、ほとんど10細胞高以下で低い。分野壁孔はヒノキ型を示し、1分野に通常2個存在する。以上の組織上の特徴から、ヒノキ属と同定した。

表1 樹種同定結果一覧表

試料No.	整理番号	樹種名	出土地点(地区、遺構、層位、P. No.)	時代
1	W09020606	ヒノキ属	中小路遺跡 北3区 SK05 ①	奈良～平安
2	W09020607	カヤ	中小路遺跡 北3区 SK06 ②	奈良～平安
3	W09020608	ヒノキ属	羽場遺跡 P407 P0.1	奈良～平安

3) 微化石概査

(1) 分析方法

花粉分析用プレパラート、及び花粉分析処理残渣を用いて、花粉、植物珪酸体以外の微化石ほかの含有状況を概観した。植物片、炭は花粉分析用プレパラートを観察した。珪藻、火山ガラス、植物珪酸体は、花粉分析処理の残渣を観察した。

(2) 分析結果

観察結果を表2に示す。

4) 花粉分析

(1) 分析方法

渡辺(2010a)に従って分析処理を実施した。プレパラートの観察・同定には光学顕微鏡を使用し、通常400倍で、必要に応じて600倍、あるいは1000倍の倍率で観察した。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また、イネ科花粉を中村(1974)に従い、イネを含む可能性が高い大型のイネ科(40ミクロン以上)と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科(40ミクロン未満)に細分している。

表2 微化石概査結果

試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	アラント・ガルニル
1	◎	△	△	△	◎	◎
2	△	○	△	△×	○	◎
3	△	○	○	△	○	◎
4	△×	○	△×	△	◎	◎
5	△×	○	△×	△×	◎	◎

凡例 ◎：十分な数量が検出できる ○：少ないが検出できる

△：非常に少ない △×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

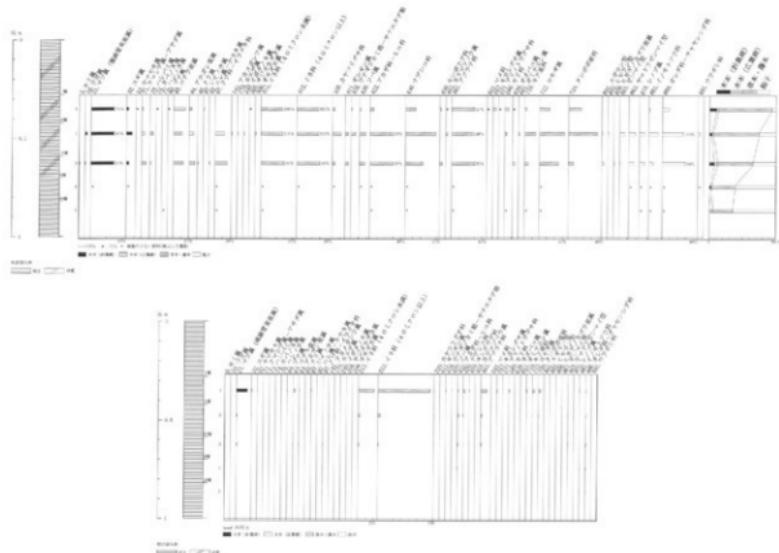


図 3 花粉ダイアグラム

上：百分率 下：含有量

(2) 分析結果

花粉分析結果を図3に示した。百分率グラフでは、計数した木本花粉を基數にし、各々の木本花粉、草本花粉などと、一部の胞子について百分率を算出してスペクトルで表した。また右端に、木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本・藤本花粉、胞子の総数を加えたものを基數として、分類群ごとに累積百分率として示した花粉総合ダイアグラムを示している。含有量グラフでは、分類群ごとの含有量（粒数/g）を算出してスペクトルで表した。

4. 柱の用材について

当社用材データベース（全1027点）には、現在299点の柱材が登録されている。このうちヒノキ属（あるいはヒノキ属類似）が17点、カヤ（カヤ属）が8点含まれる（最も多い樹種はクリで、217点）。

益田市内ではヒノキ属の製品は木棺が4点、井戸枠が1点、用途不明の板材が1点報告されている（いずれも沖手遺跡）が、ヒノキ属の柱は初めての報告である。また、カヤは沖手遺跡において中世の柱材として報告されている。このほか、奈良時代の杭材として1点、やはり沖手遺跡で報告されている。

平城宮ではヒノキ属、コウヤマキ属が柱材として多用されていたが（島地ほか、1988）、「宮」という特別な建物であったためと考えられる。ただし、島根県内では、公の建物である「出雲国府」の報告例でも1棟全ての柱がヒノキ属という例はなく、1棟に1点しか使われていない。

建物にヒノキ属が用いられたことは偶然であった可能性もあるが、特別な意味を持った建物であった可能性も指摘できる。

5. 花粉分帯及び周辺地域との比較

1) 花粉分帯

花粉分析の解析では、花粉化石群集の変化を基に局地花粉帯を設定する（花粉分帯を行う）。今回得られた花粉化石群集中に、顕著な変化が認められなかつたことから、花粉分帯を行わなかった。

2) 周辺地域との比較

益田半野内ではボーリングコアなどを用いた花粉分析が行われており、同地域における縄文時代前期頃以降の花粉化石群集の変遷が明らかになりつつある（渡辺、2006など）。また、中小路遺跡内でも花粉分析が実施されているが、堆積中に花粉化石が破損したと考えられ、ほとんど検出できていない（文化財調査コンサルタント株式会社、2005）。

今回得られた花粉化石群集は、マツ属（複維管束亞属）が卓越しコナラ亞属を伴うなど、益田市高津に位置する浜寄・地方遺跡でのI带b亞帶（渡辺、2006）と類似する。また、I带b亞帶は近世の植生を反映していると考えられている（渡辺、2006）。

6. 花粉化石含有量について

1) 花粉化石含有量の少なかった原因について

花粉化石の含有量の少ない原因について、通常は以下のような事が考えられている。

- ①堆積速度が速いために、堆積物中に花粉化石が含まれない。
- ②堆積物の特性（粒度・比重）と花粉化石の平均的な粒径、比重が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。
- ③土壤生成作用に伴う堆積物で、堆積速度が極めて遅く、堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。
- ④花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。
- ⑤有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く、処理の過程で花粉

化石が回収できなかった。

今回分析した試料の多くは褐色を帯び、酸化環境にあったことが分かる。一方、最下位の試料No.5層準はグライト化を受け還元環境にあったことが分かる。また、微化石概査結果（表2）に示したようにプラント・オパールの含有量が多く、顕微鏡レベルで観察できる「微粒炭」も含まれる。また、ほとんどの水成堆積物に含まれる珪藻化石が全く認められなかった。これらのことから、上記の④が関連したと考えられる。花粉化石を始め、植物片、珪藻までも堆積後の化学変化で消滅したものと考えられる。

2) 花粉化石の由来について

図3に示したように、花粉化石の含有量が下位に向かって急激に減少する。このことは、上位の6層から下位方向に花粉粒が移動したことを示唆する。一方、下位層準では上位の6層で認められなかった種類の花粉が認められる。これらの花粉粒には、本来各層に含まれていたものが化学変化に耐え残存した可能性がある。

7. 古環境復元

1) 堆積環境

軟X線観察試料を採取した地点は、弥生時代の堅穴住居跡検出面より上位であった。また、堅穴住居跡壁面の残存する高さから、弥生時代以降の時期に、この遺構検出面まで掘削された可能性が示唆されていた。

軟X線写真観察で⑨層から⑦層の堆積相を観察し、各層境界及び層内にも堆積休止期が何度もあり、植生で覆われた期間が存在する可能性が示唆された。調査地が高津川の氾濫原と考えられることから、恐らく高津川の氾濫に伴い数cm～10cmずつ、段階的に堆積していったものと考えられる。花粉化石の含有が少なく、炭片、プラント・オパールの含有が多いことから、氾濫と氾濫の間に調査地点を植生が覆い、ここから花粉、炭片やプラント・オパールが供給されたと考えられる。ただし、化学変化に弱い花粉粒は、次第に劣化、消滅したと考えられる。また、氾濫と氾濫の間の時期には調査地点が人間の生活の場となった可能性もある。

2) 古植生

花粉分析結果を基に、古植生について述べる。

(1) ⑩層以深

試料No.1と試料No.2、3を比べると、木本でクワ科・イラクサ科、草本でギシギシ属、アカザ科・ヒユ科が試料No.2、3での出現率が高く、含有量も多い。こ

これらのほとんどは現在では畠雜草、あるいは水田雜草とされているが、いずれも食用となり、かつては栽培されていた種を含む。これらの草本あるいは木本が調査地近辺（高津川の氾濫原）に雜草として繁茂していたか、あるいは畠作物として栽培されていた可能性が指摘できる。

(2) ⑥層

イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率を示すほか、サジオモダカやフサモ（アリノトウグサ科）、セリなどの水田雜草に由来すると考えられる花粉が検出される。恐らくこの時期には、調査地から周辺には水田が広がっていたと考えられる。

木本花粉化石群集ではマツ属（複維管束亜属）が卓越し、コナラ亜属を伴う。このことから遺跡周辺の丘陵は、コナラ類を混淆するアカマツ林、あるいはコナラ林や多くのアカマツ林などの「里山」が分布していたと考えられる。一方、調査地周辺の現存植生はアカマツ林、コナラ林などの「里山」が多く、スギ植林が点在する。スギ植林は主に太平洋戦争後に行われており、スギ植林前の様相を示していると考えられる。このことは前述の浜寄・地方遺跡における花粉化石群集の比較結果とも一致する。

8. まとめ

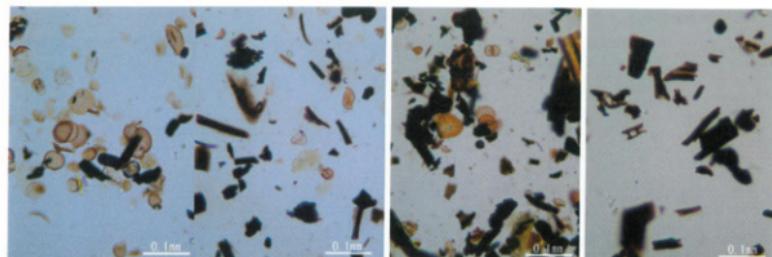
中小路遺跡において堆積物の軟X線写真観察、木質遺物（柱）の樹種同定及び花粉分析を実施し、以下の事柄を考察した。

- (1) 樹種同定の結果、柱根はヒノキ属とカヤと同定できた。ヒノキ属は平城宮で多量に検出されるなど、特殊な建物に使われる傾向にあり、今回の建物にも特殊な用途があった可能性が指摘できる。
- (2) 軟X線写真観察では、現地で観察できた各層が更に細分できた。このことから、弥生時代の住居跡は削平を受けた後、繰り返す高津川の氾濫によって埋まっていたと考えられる。
- (3) 周辺地域（浜寄・地方遺跡）の分析結果との比較を行った。この結果、今回得られた花粉化石群集は、近世の植生を示していると考えられる浜寄・地方遺跡でのI带b亜帯に対比できた。
- (4) 調査地点近辺の古植生についての主な内容は以下の事柄である。
 - ① ⑩層より下位（近世以前）では花粉化石の含有量が少なく、多くは上位からの混入と考えられた。一方で、幾つかの種類は本質的なものと考えられ、畠作物、あるいは「雜草」として近辺で生育していたと考えられた。
 - ② ⑩層より上位（近世以降）では花粉化石の含有量も多く、イネの他水田雜草に由来すると考

えられる種類が多数検出できた。のことから、⑥層が水田耕作土であったと考えられる。またこの時期に周囲の丘陵部では、現在普通に認められるスギ植林はまだ行われておらず、アカマツ林やコナラ林あるいはこれらの混淆する「里山」が広がっていたと考えられる。

引用文献

- 久馬一剛・八木久義訳監修（1989）土壤薄片記載ハンドブック. p.176. 博友社.
- 中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として. 第四紀研究, 13, 187-197.
- 文化財調査コンサルタント株式会社（2005）中小路遺跡発掘調査に係る花粉分析業務報告書. P18. (内部資料)
- 渡辺正巳（2006）第3節浜寄・地方遺跡発掘調査に伴う花粉分析及びプロアント・オハーレ分析. 浜寄・地方遺跡－一般国道9号建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2－, 131-173. 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会.
- 渡辺正巳（2010a）花粉分析法. 必携 考古資料の自然科学調査法, 174-177. ニュー・サイエンス社
- 渡辺正巳（2010b）木質遺物（埋没樹木）樹種同定. 考古調査ハンドブック2 必携考古資料の自然科学調査法, 194-197. ニュー・サイエンス社.



試料No.1

試料No.2

試料No.3

試料No.5



マツ属（複雜管束亞属）

アカガシ亜属

コナラ亜属

ニレ属 - ケヤキ属

アカザ科 - ヒュウ科

カヤツリグサ科

セリ科

イネ科 (40ミクロン未満)

ソバ属

ナデシコ科

アブラナ科

ヨモギ属

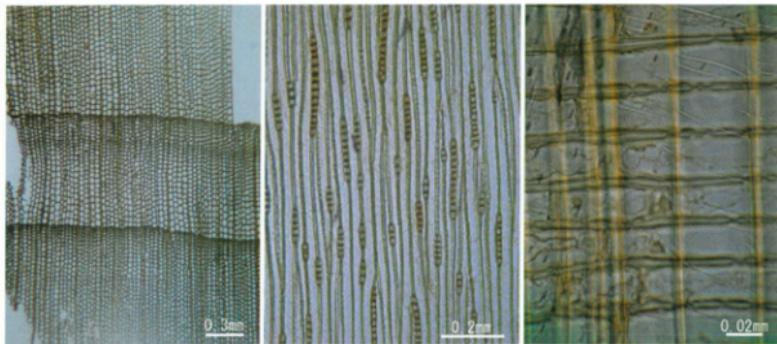
オオバコ属

イノモトソウ科

スケールバーはすべて0.01mm

カヤ *Torreya nucifera* (Linn.) Sieb. et Zucc..

試料No.2 (W09020607)



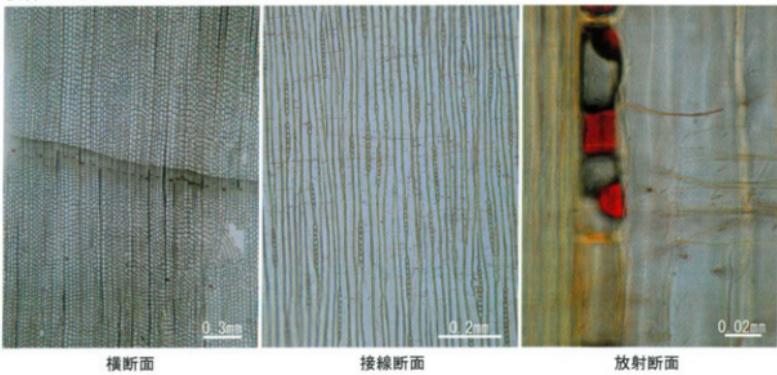
横断面

接線断面

放射断面

ヒノキ属 *Chamaecyparis* sp.

試料 No. 1 (W09020606)



横断面

接線断面

放射断面

第2節 安富平野の地形と遺跡の立地

島根県立三瓶自然館

中村唯史

1. 安富平野について

中小路遺跡、羽場遺跡が位置する安富平野（横田盆地）は、高津川下流域に発達する平坦地形である。下流側（北側）では河口域に発達する益田平野に連続するが、須子町と飯田町の境部分で尾根が河岸に迫り、平野を隔てている。

安富平野は高津川の曲流に伴って形成された地形である。高津川は、石見横田駅の北側で本流と匹敵する規模を有する支流の匹見川と合流した後、須子町付近にかけて大きく S 字を描くように流れ、その曲流の内側に平坦地を構成している。平坦地の形成は、曲流部では流れの外側に向かって浸食が進み、内側では土砂の堆積を生じながら河道が移動することで生じる。

平野を形成する高津川は急峻な西中国山地を源流とする急流である。80kmを超える河川延長に対し、安富平野は河口まで約10kmの下流域にあたるが、流れは早く中流的な要素が強い。

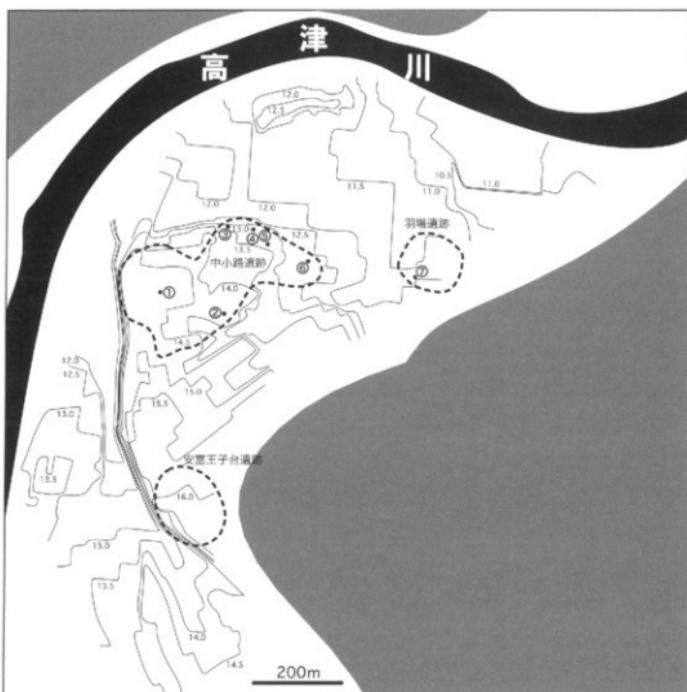
2. 周辺の地形と地質

安富平野の周囲は、標高100～200mの丘陵地が広がる。この丘陵地は谷の開削が進んでいるが尾根高度はほぼ一定で、巨視的には日本海に向けて緩く傾斜する台地状の地形である。丘陵地には第四紀更新世の堆積岩類（都野津層群）、新第三系の堆積岩類（石見層群）、中生代三疊紀の変成岩類（周防変成岩類）などが分布している。高津川の中～上流域には中生代ジュラ紀の堆積岩類（鹿足層群）、中生代白亜紀の火山岩類（匹見層群）などが広く分布している。白亜紀の火山岩類は硬質で、西中国山地の急峻な地形の骨格をなしている。

3. 遺跡の立地

中小路遺跡、羽場遺跡が立地する部分は、現河床に対して5m程度高い河岸段丘である。段丘面は、中小路遺跡の西側で低位の面に対し、比高約3mの明瞭な小崖で接している。河岸段丘とは、過去の河道が形成した堆積面、浸食平坦面が、河道高度の相対的な低下によって取り残された地形面である。

河岸段丘は原始から現代に至るまで、居住地としてよく利用される地形のひとつである。川に近い利便性と氾濫の影響を受けにくい高さが、河岸段丘が居住地として選ばれる条件といえる。同一の段丘面内にも若干の地形の高低があり、中小路遺跡の範囲は周囲よりわずかに高い微高地になっている。微高地帯の形状が河道の曲流に沿うことから、自然堤防帶の名残とみられる。羽場遺跡は丘陵際に位置し、平野内では相対的に高い場所である。遺構の分布や性格が、当時の地形をある程度反映していることがうかがわれる。



<主な遺構>

① 奈良～平安時代の建物跡 ② 大溝 ③ 渠跡 ④ 土器棺墓群 ⑤ 窪穴住居群 ⑥ 窪穴住居群 ⑦ 環濠

図1 安富平野北部の微地形と遺跡範囲

「県営担い手育成基盤整備事業」による地形図の標高データを元に作成した微地形図に遺跡範囲と主な遺構を重ねたもの。等高線に付した数字は標高。

写 真 図 版



昭和 22 年米極東空軍撮影空中写真

写真図版 2 中小路遺跡



調査前（1～4区 南西から）



調査前（6区 南西から）



中小路 1 ~ 4 区空撮写真



1区完掘状況
(南西から)



2区完掘状況
(北東から)

写真図版 5 中小路遺跡 1～4 区



3区完掘状況
(南西から)



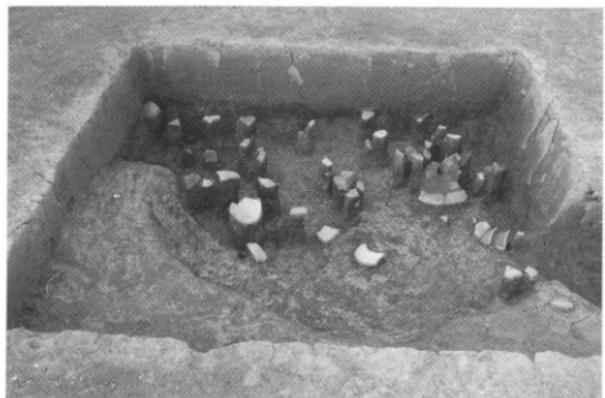
4区完掘状況
(南西から)



1区ピット群
(南西から)



2区 大溝
(南西から)



2区
SK1 遺物出土状況
(南から)

写真図版7 中小路遺跡 1～4区



3区 SB1
(北東から)



3区 SB2
(南西から)

3 区 SB3
(北東から)



3 区 SB4
(南西から)



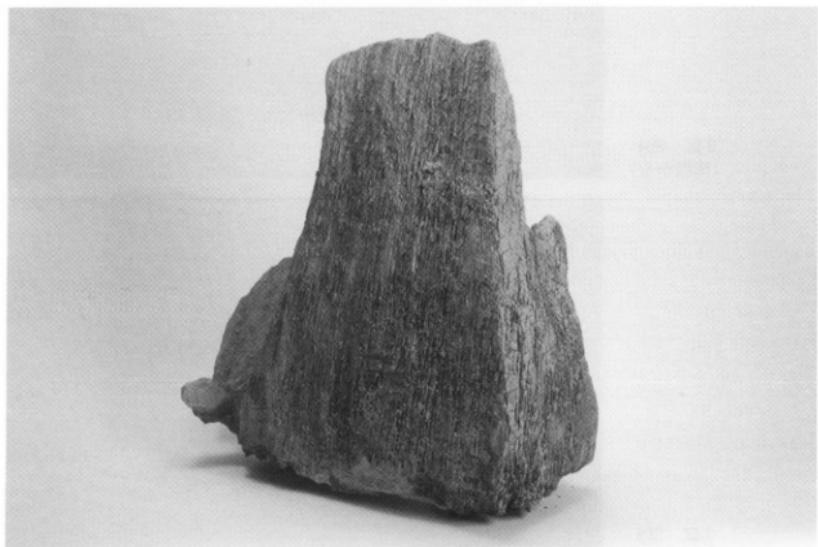
3 区 SK5
柱根検出
(北西から)



写真図版 9 中小路遺跡 1～4 区



SK5 出土の柱根

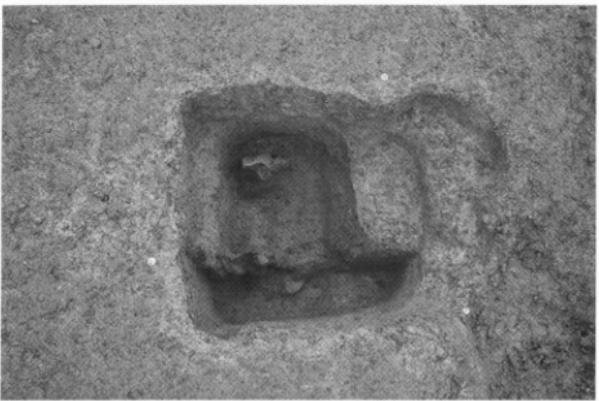


SK6 出土の柱根

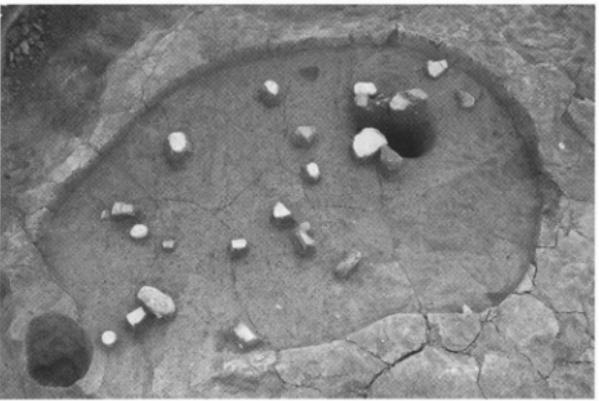
3 区 SK6
柱根検出
(西から)



3 区 SK7
柱根検出
(北東から)



3 区 SK4
(北から)



写真図版 11 中小路遺跡 1 ~ 4 区



3区 SK2、SK3
(南から)



3区 SD1
(南東から)

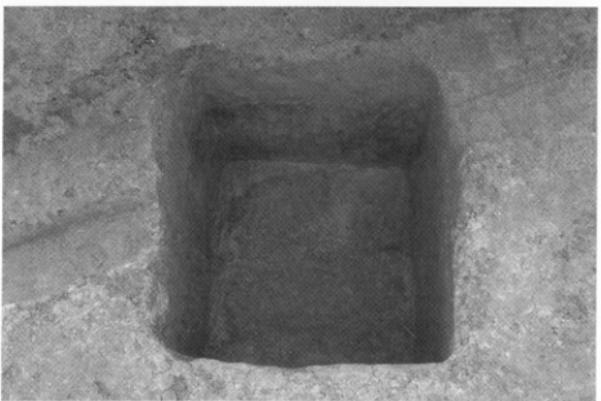


3区 SD2
(南東から)

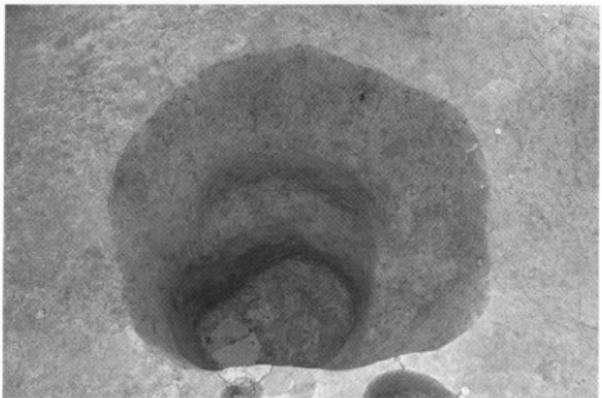
4 区 SE1
縄面検出
(北から)



4 区 SE1
完堀
(北から)



4 区 SE2
完掘
(東から)



图版 13 中小路遗物 1 ~ 4 区



遗构出土遗物



91



95

遺構出土遺物

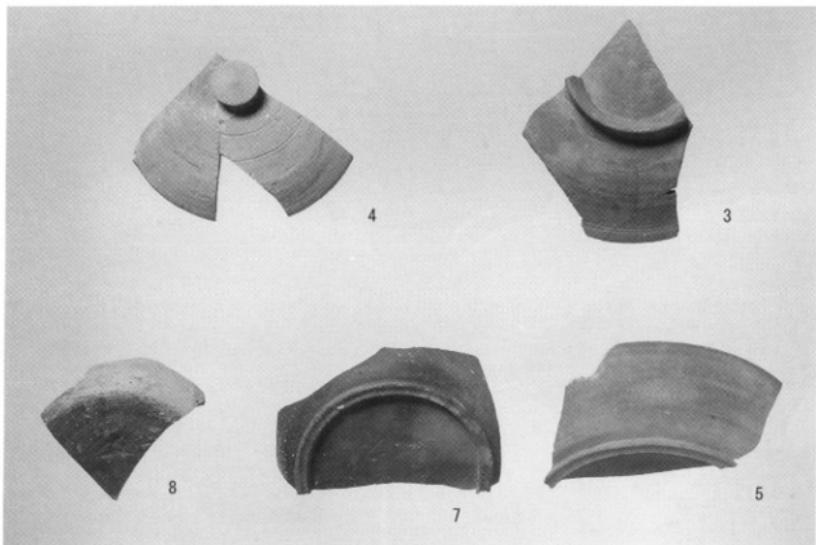


117



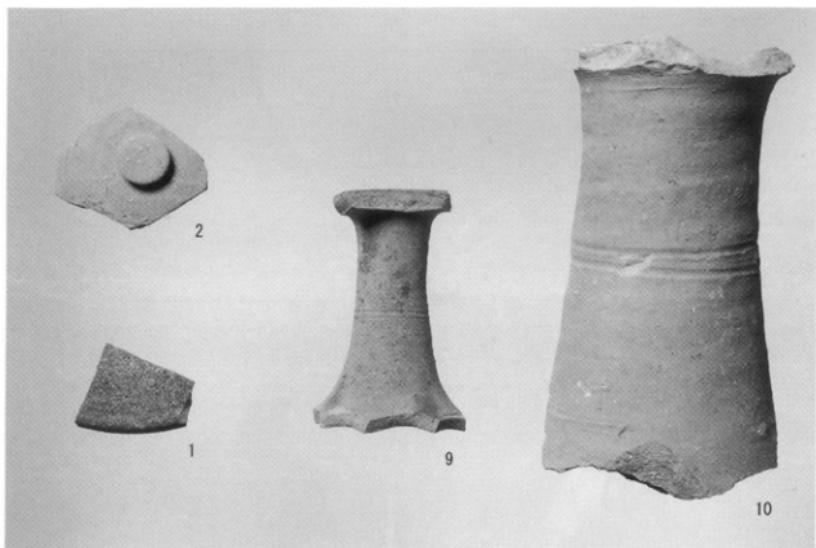
127

遺構外出土遺物

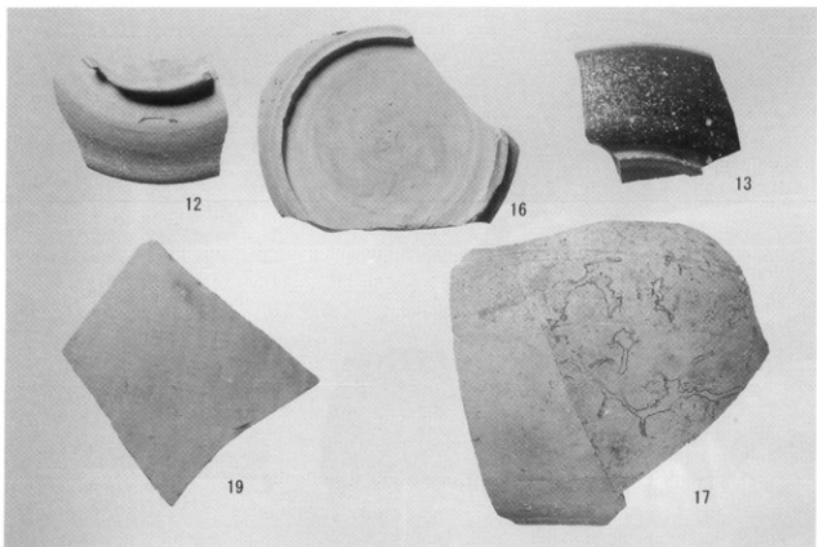


井戸内出土遺物

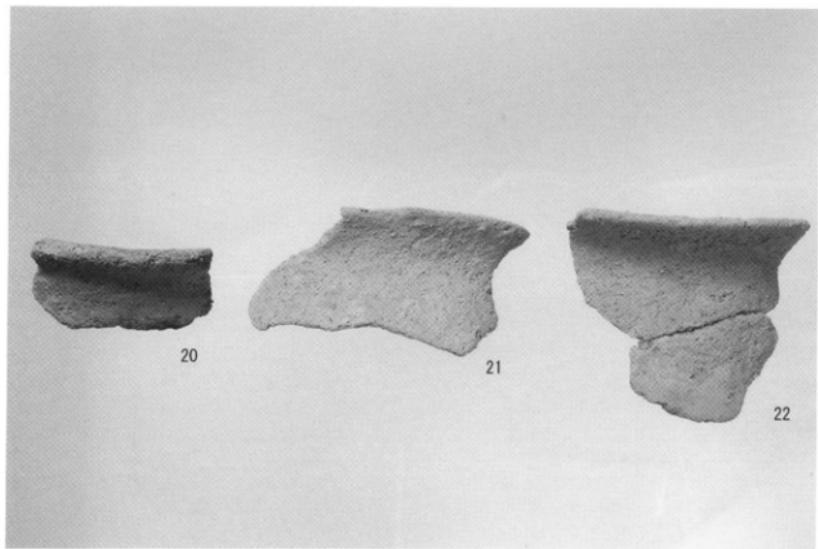
図版 15 中小路遺跡 1 ~ 4 区



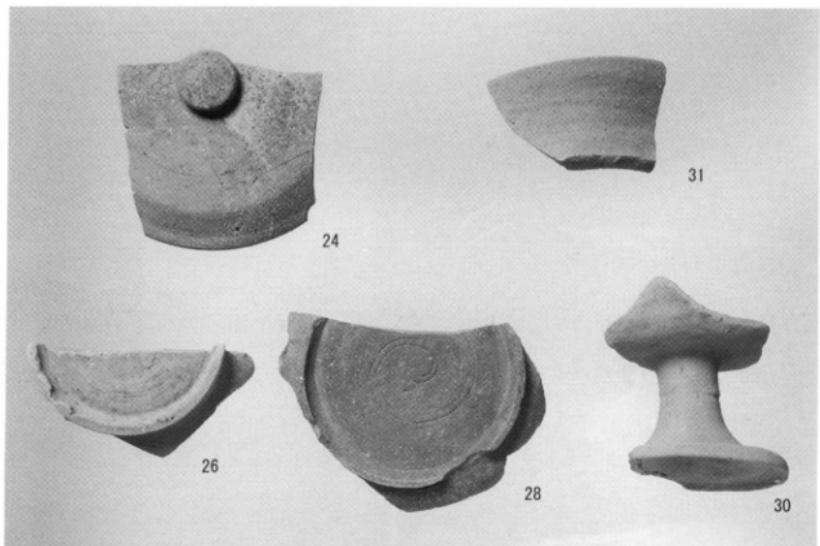
井戸内・大型柱穴内出土遺物



SK1 出土遺物①

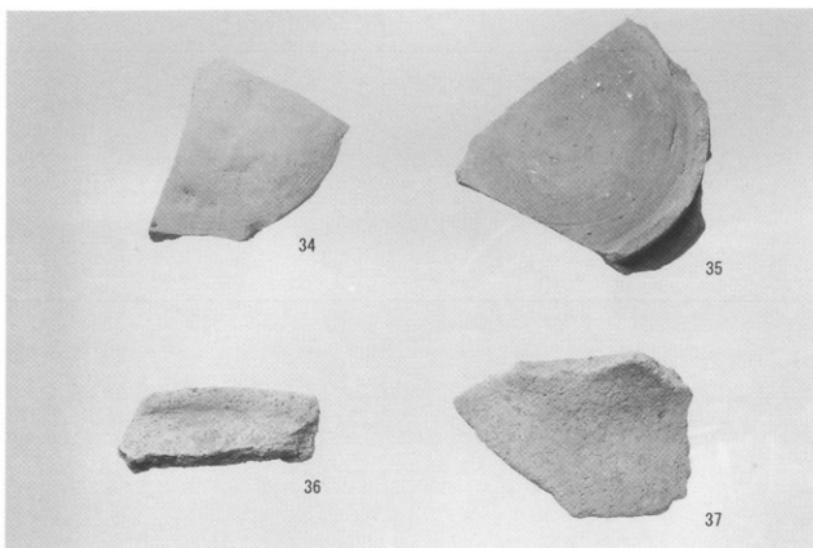


SK1 出土遺物②

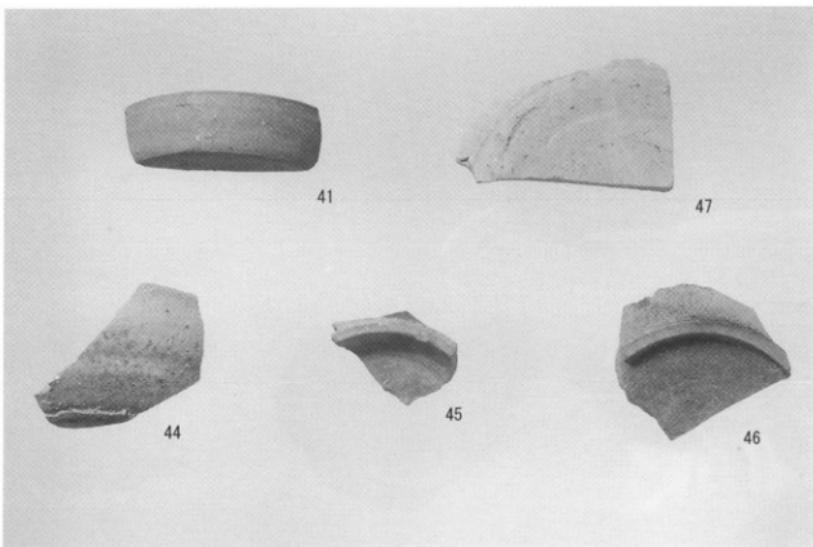


SK2 出土遺物

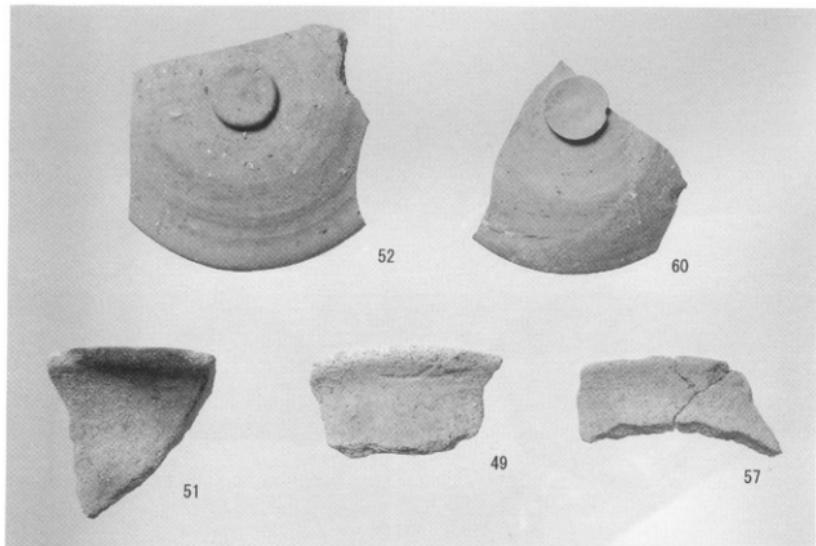
図版 17 中小路遺跡 1 ~ 4 区



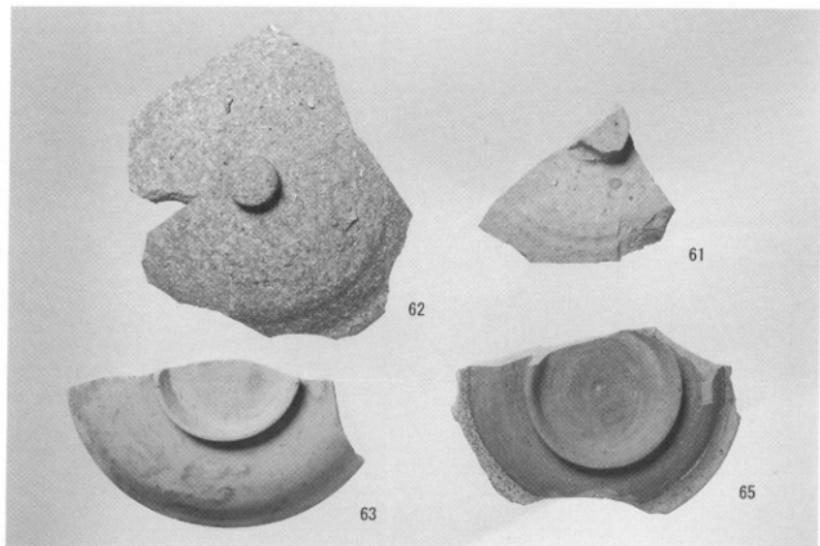
SK3 出土遺物



ピット内出土遺物

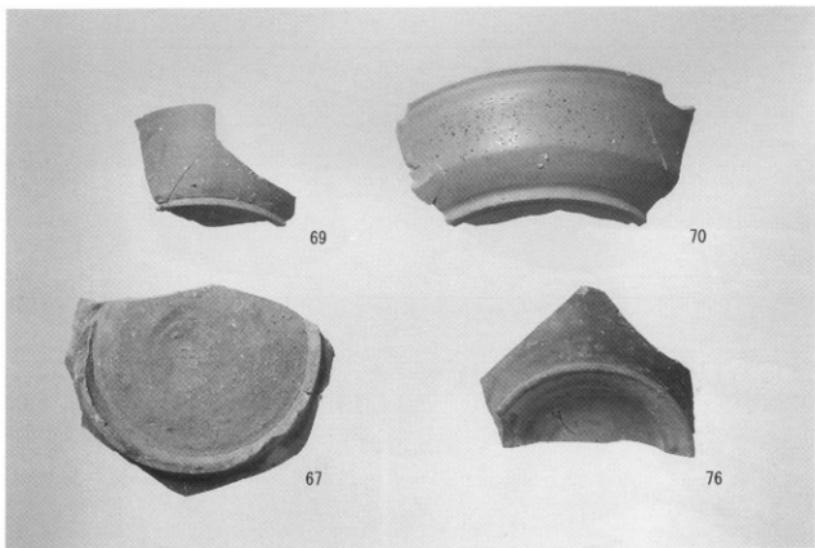


SD1・SD2 出土遺物

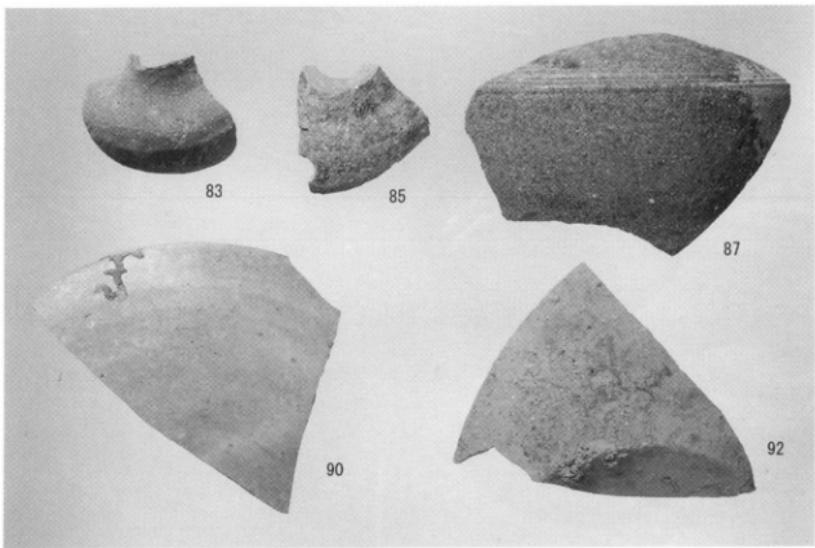


大溝出土遺物①

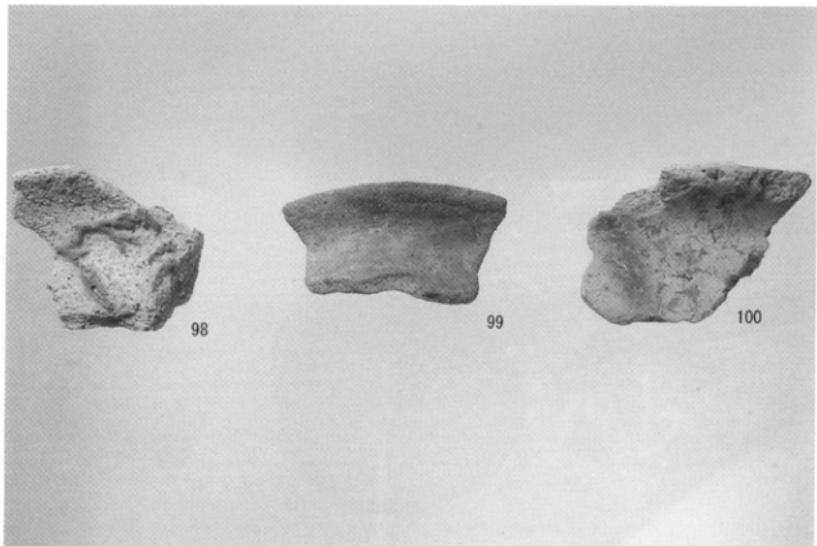
図版 19 中小路遺跡 1 ~ 4 区



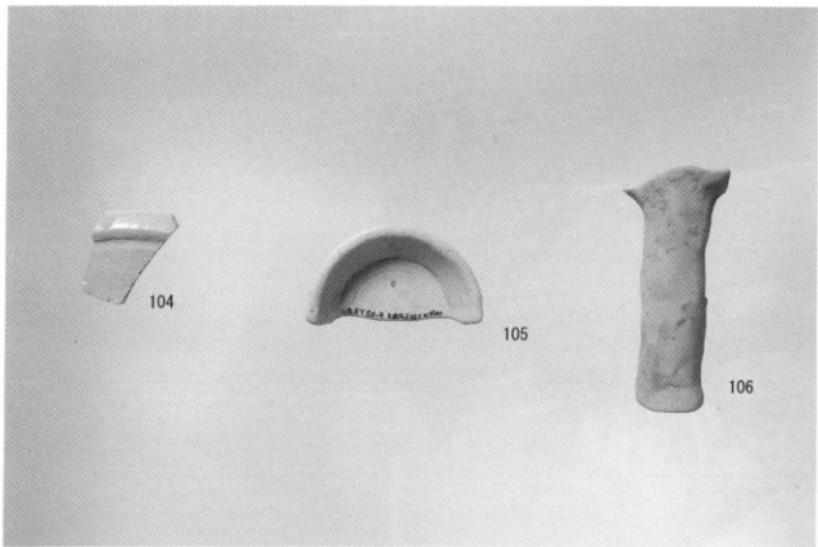
大溝出土遺物②



大溝出土遺物③

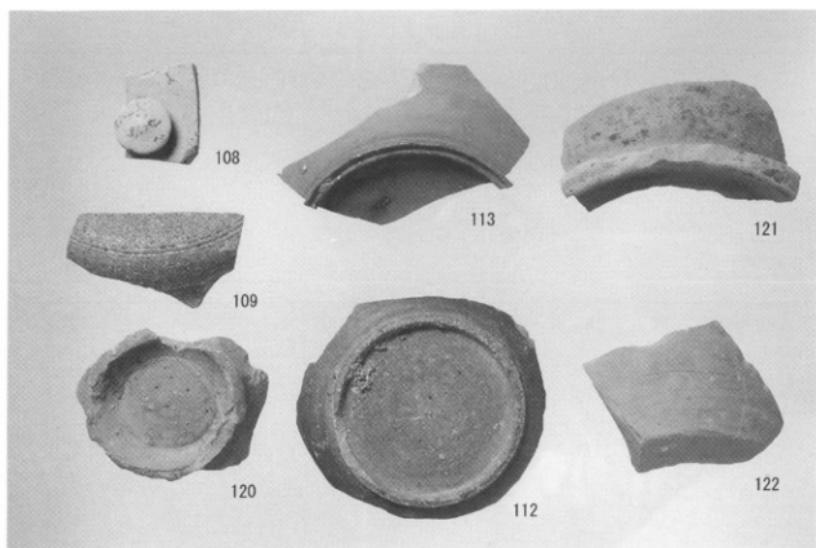


大溝出土遺物④

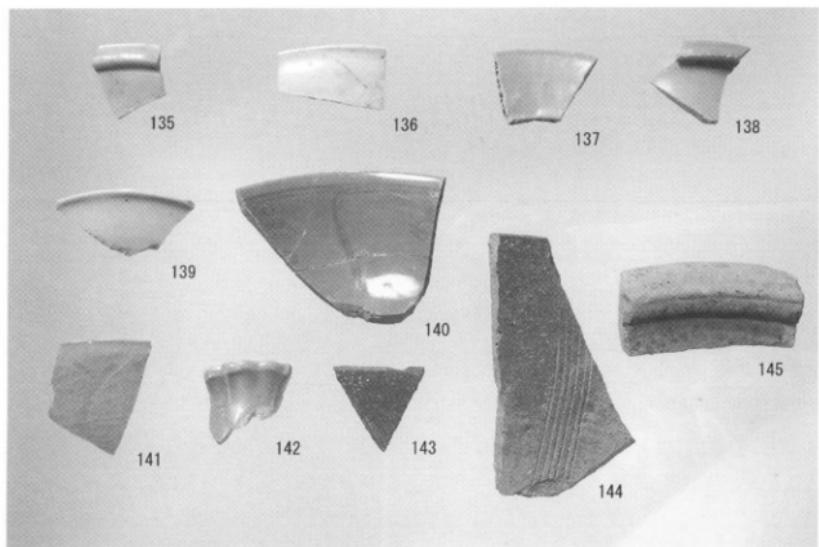


大溝出土遺物⑤

図版 21 中小路遺跡 1 ~ 4 区



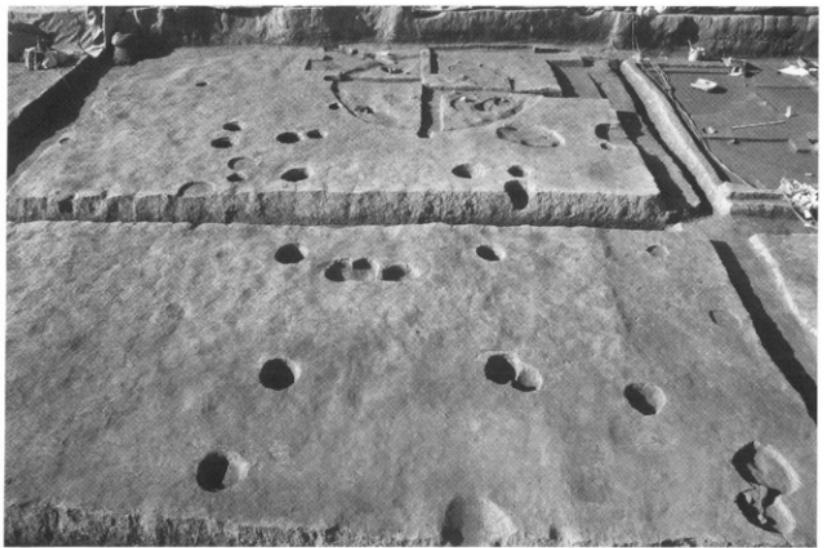
遺構外出土遺物①



遺構外出土遺物②



S101 遺物検出状況



SB03 完掘状況

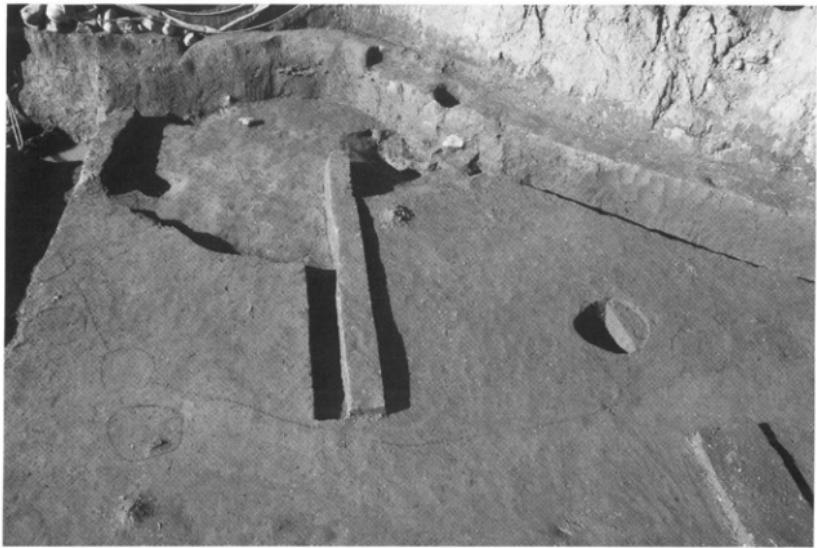
写真図版 23 中小路遺跡 6 区



S102 遺物出土状況



S102 完掘状況



SI03 検出状況

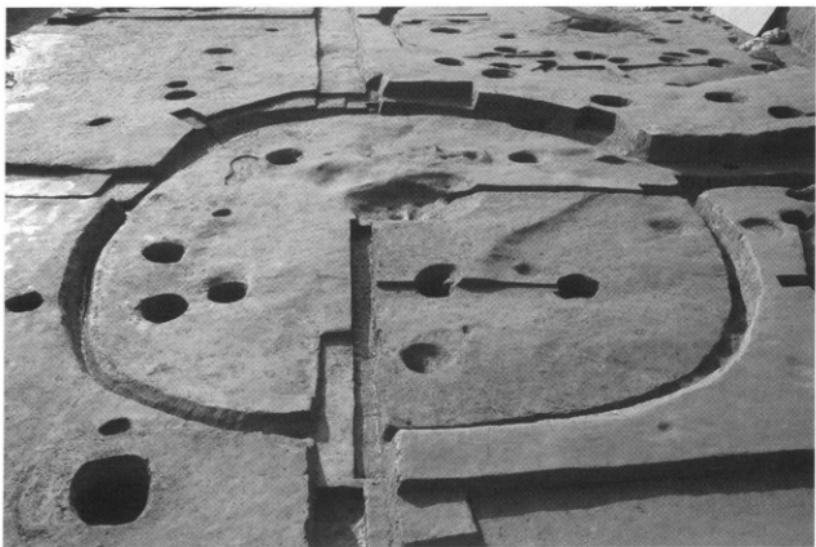


SI03 完掘状況

写真図版 25 中小路遺跡 6 区



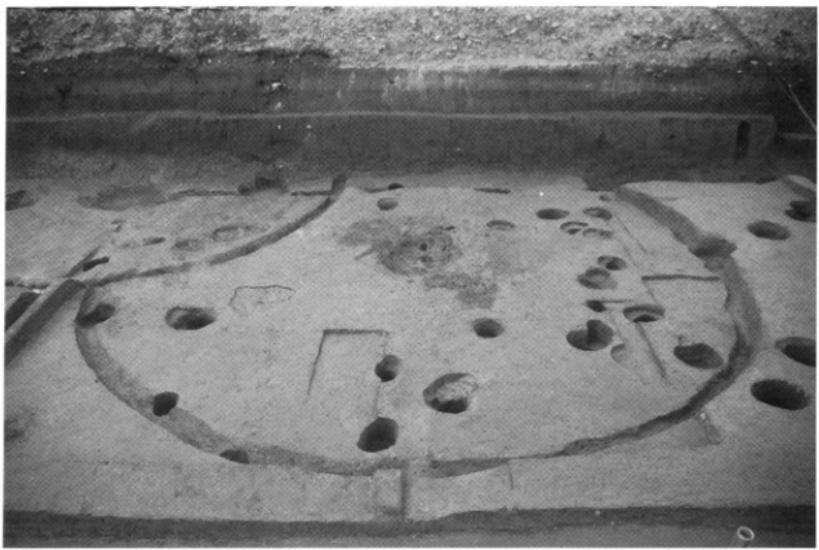
S104 遺物検出状況



S104 完掘状況

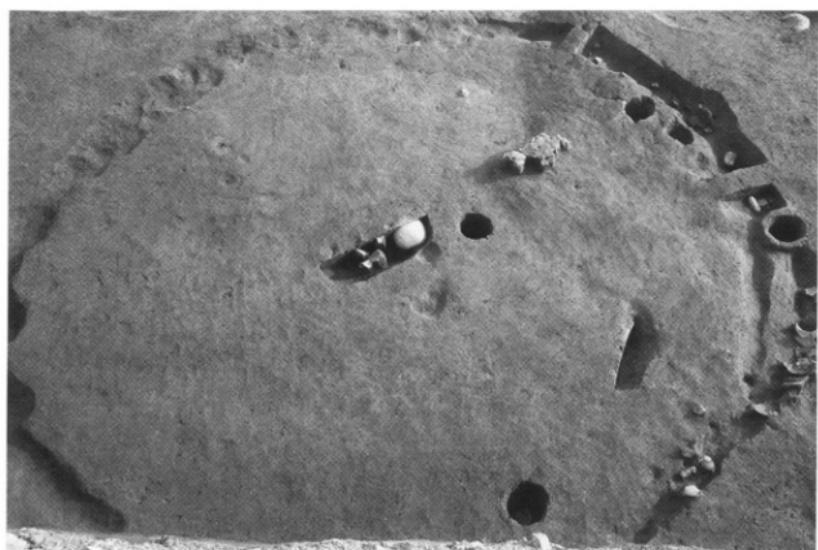


S105 遺物検出状況



S105 完整状況

写真図版 27 中小路遺跡 6 区



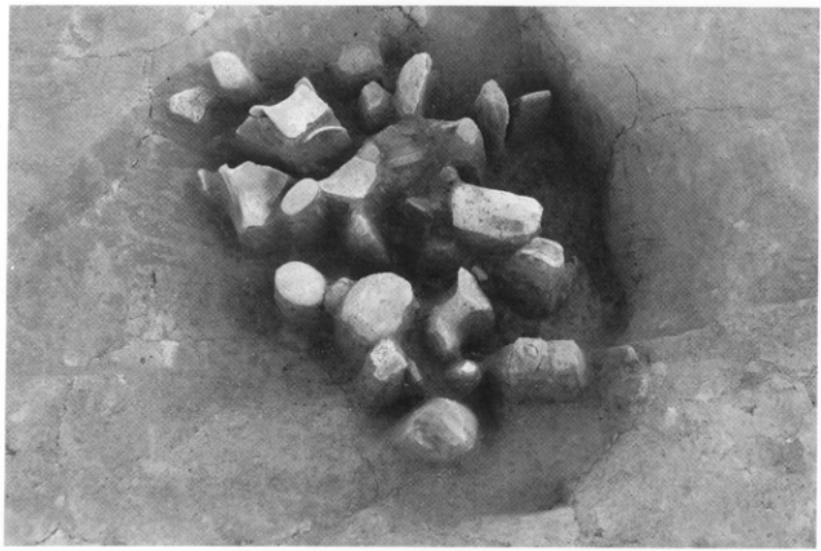
S106 遺物検出状況



S106 完掘状況

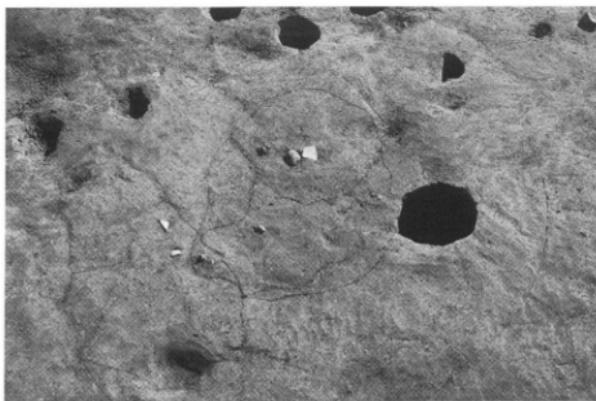


SB01 完掘状況



廐棄土坑

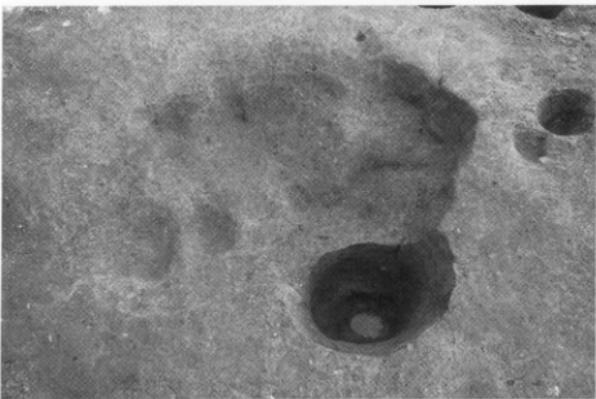
写真図版 29 中小路遺跡 6 区



SK02 遺構検出状況



SK02 遺物検出状況



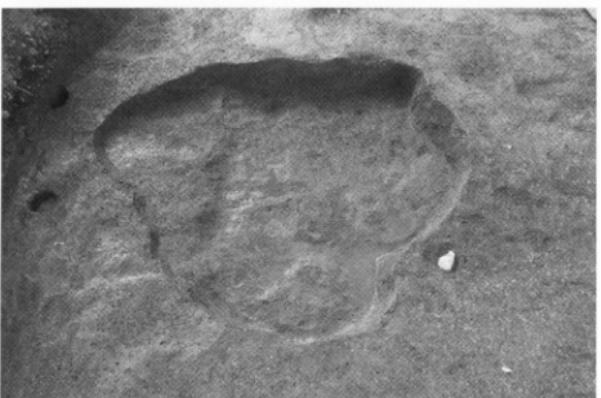
SK02 完掘状況



SX02 遺構検出状況



SX02 遺物検出状況

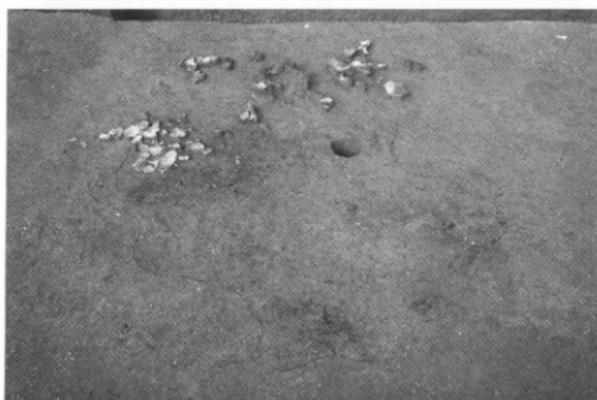


SX02 完掘状況

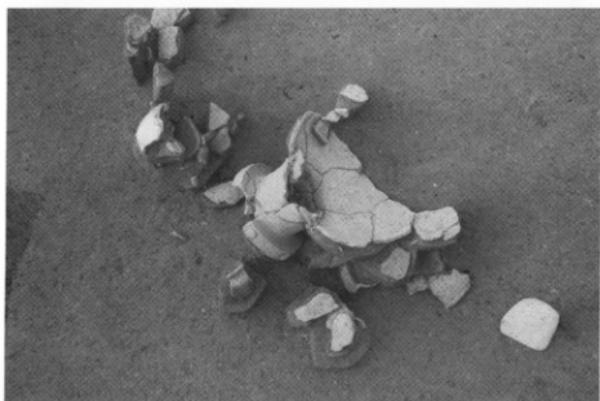
写真図版 31 中小路遺跡 6 区



SD04 完掘状況

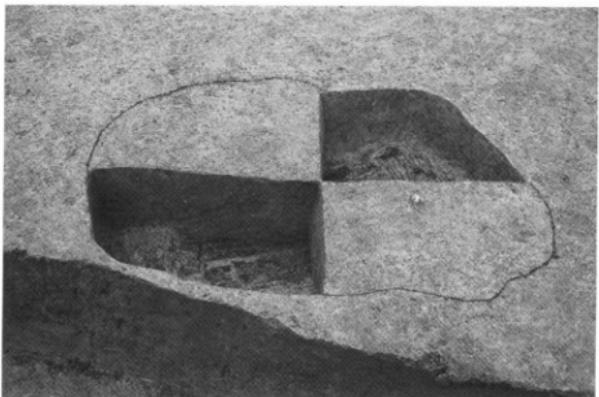


焼土検出状況



SK05 遺物出土状況

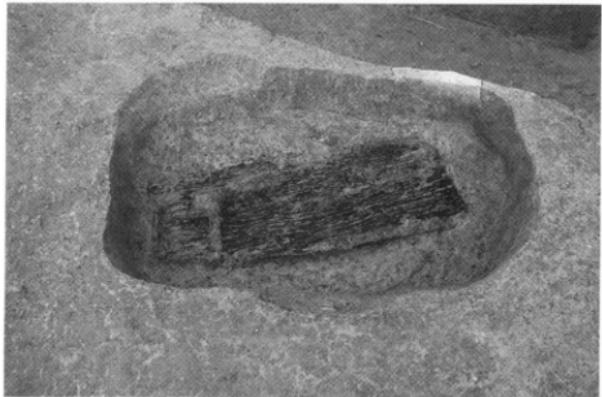
SK09
検出状況



SK09
木棺検出状況



SK09
木棺内遺物検出状況



写真図版 33 中小路遺跡 6 区



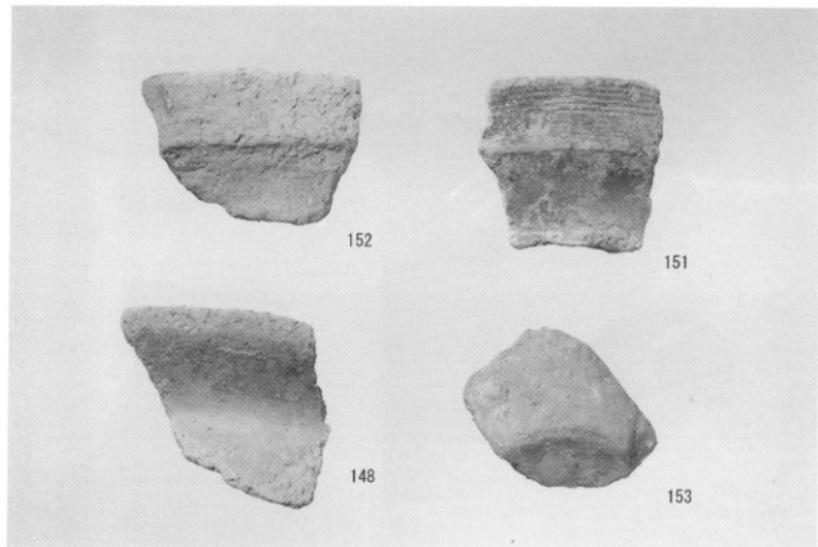
体験学習



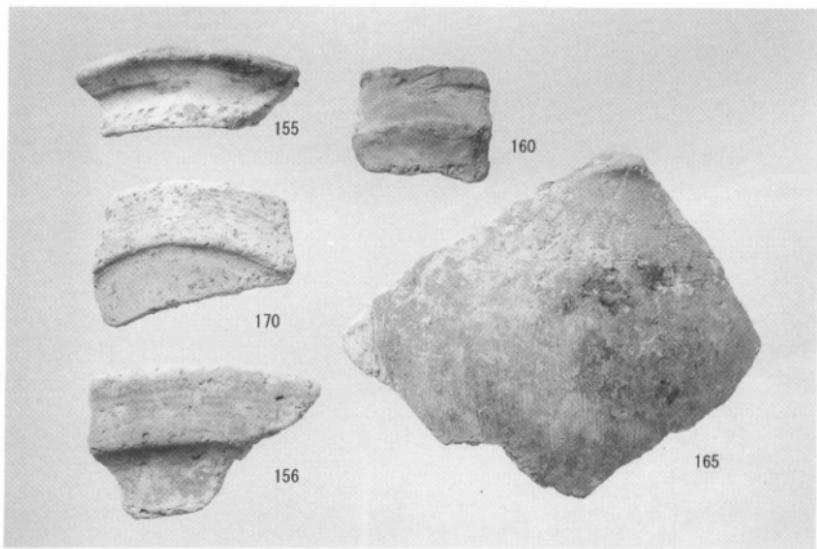
田中義昭氏指導



作業状況

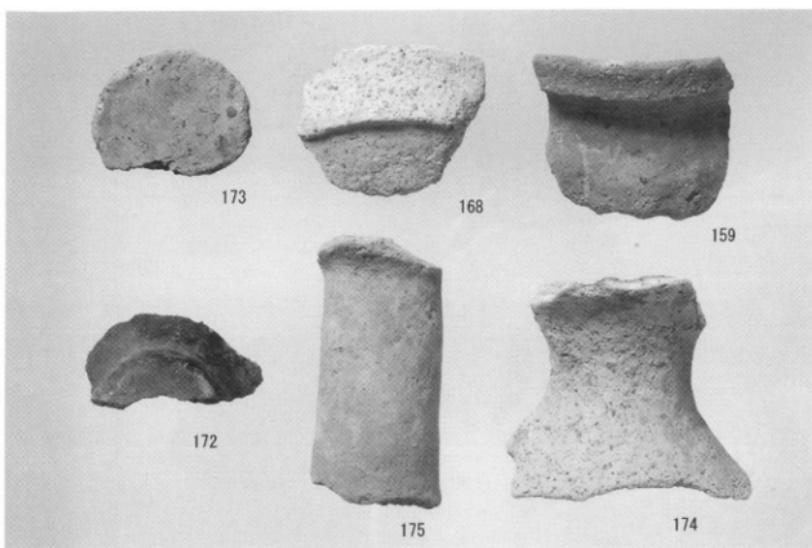


SI01 出土遺物

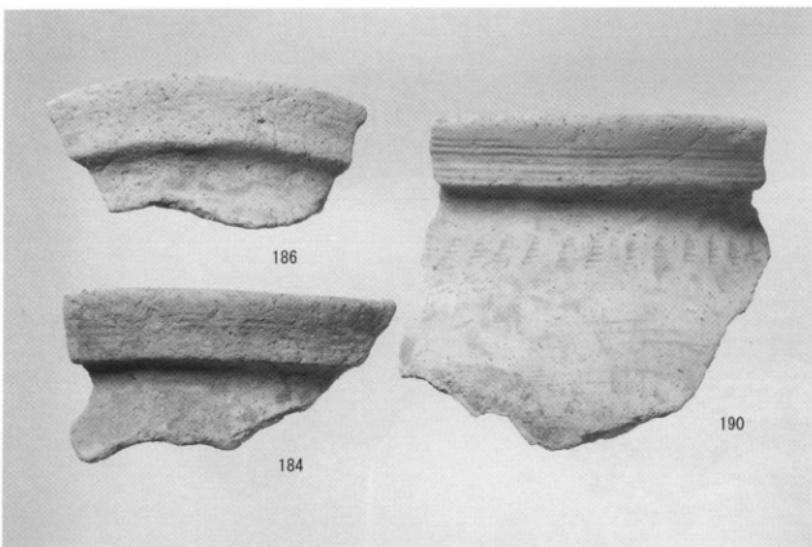


SI02 出土遺物

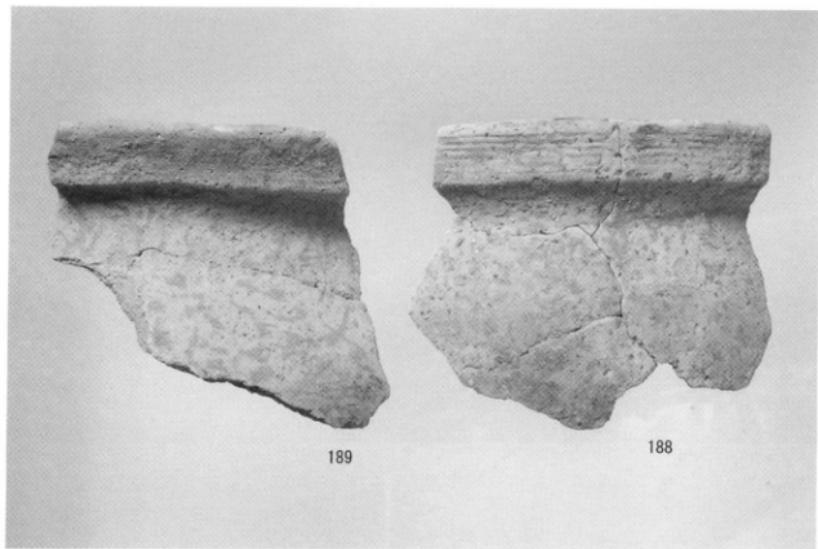
图版 35 中小路遗迹 6 区



S102 出土遗物



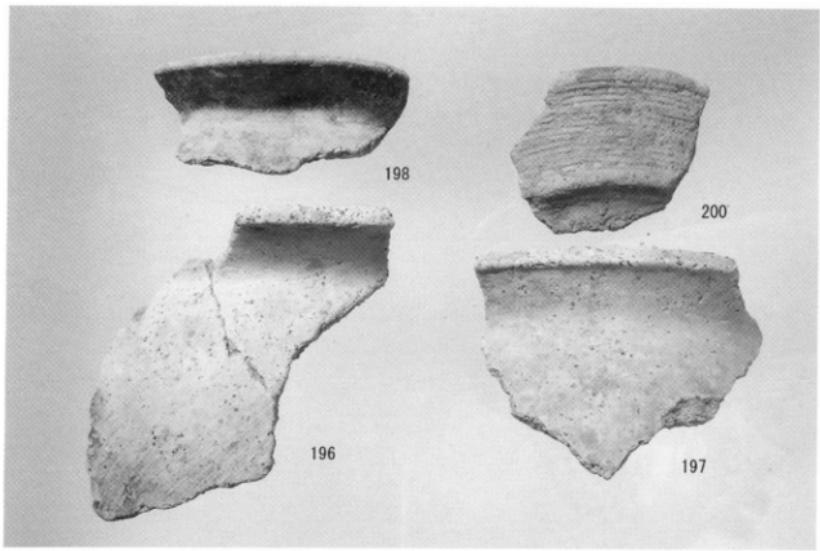
S103 出土遗物



189

188

SI03 出土遺物



196

197

198

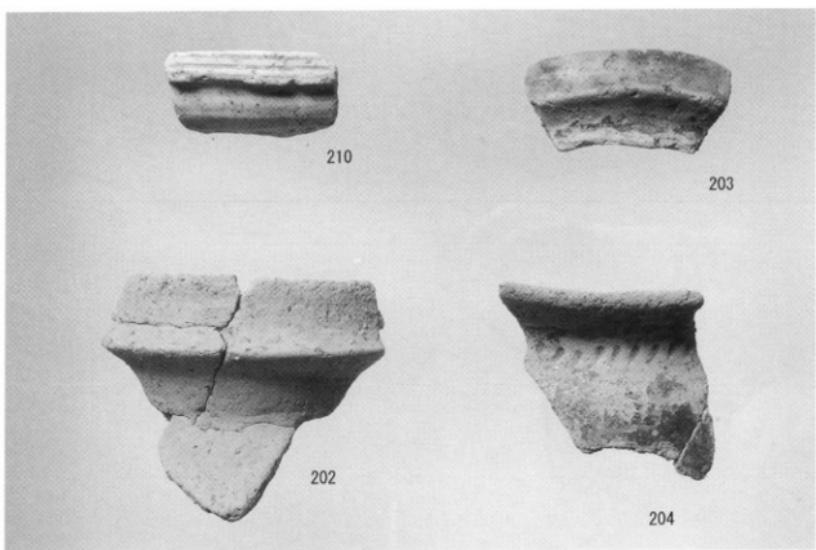
200

SI03 出土遺物

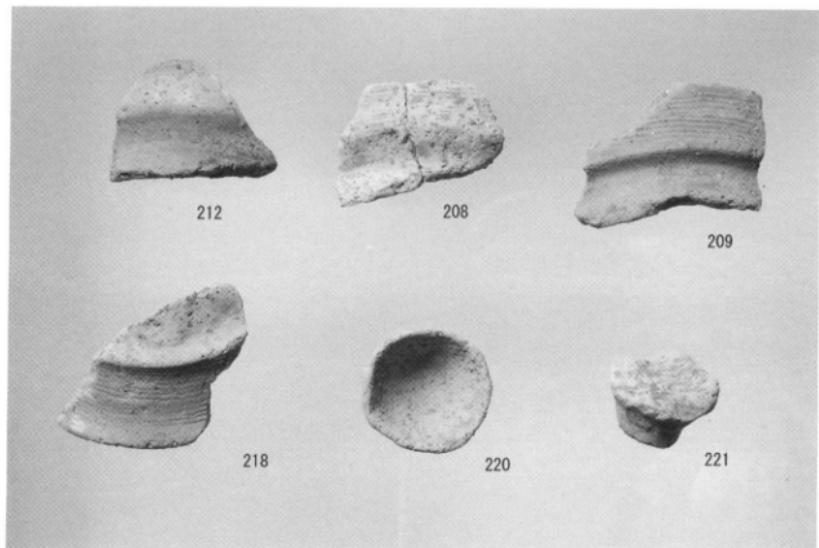
图版 37 中小路遗踪 6 区



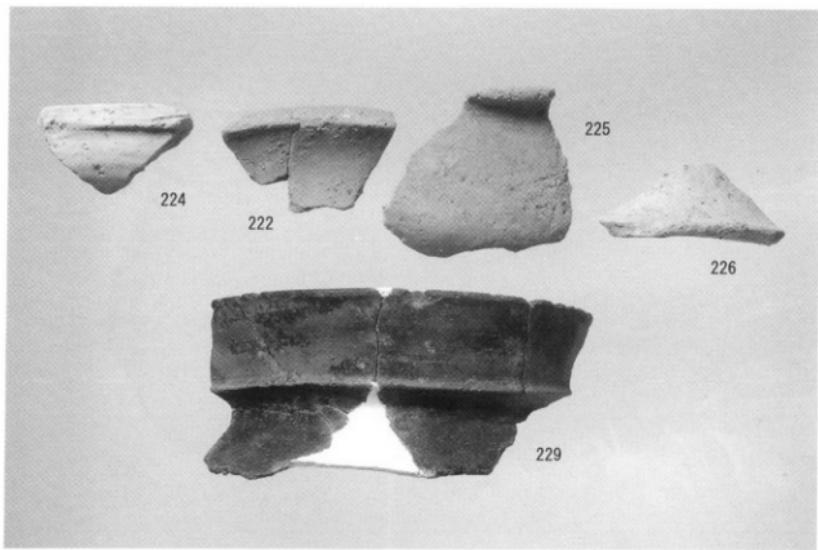
S103 出土遗物



S104 出土遗物

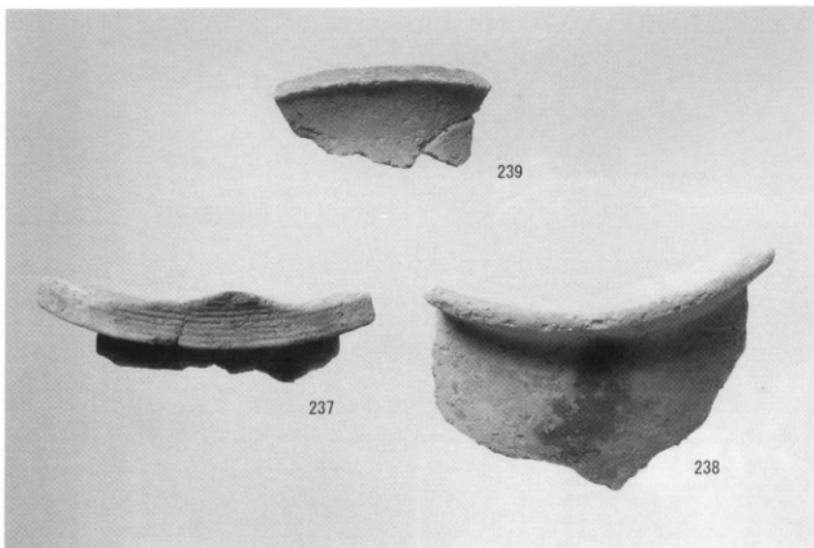


SI04 出土遺物

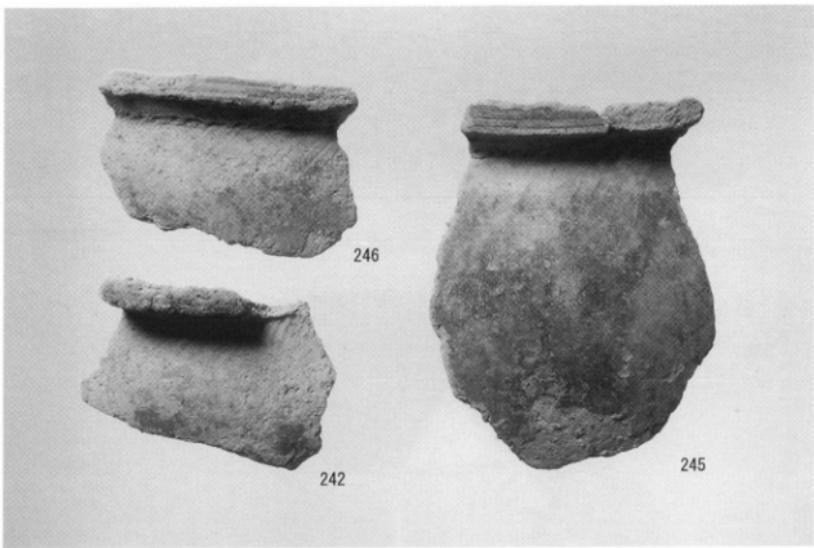


SI05・SI06 出土遺物

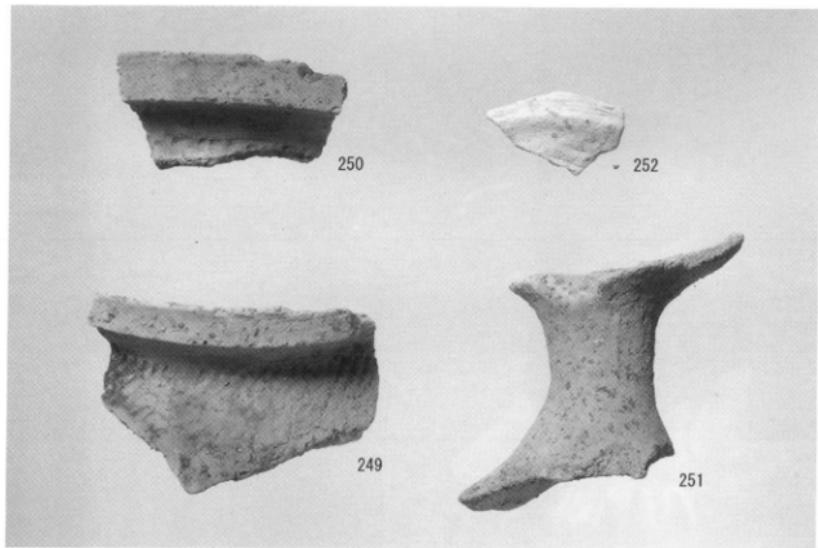
図版 39 中小路遺跡 6 区



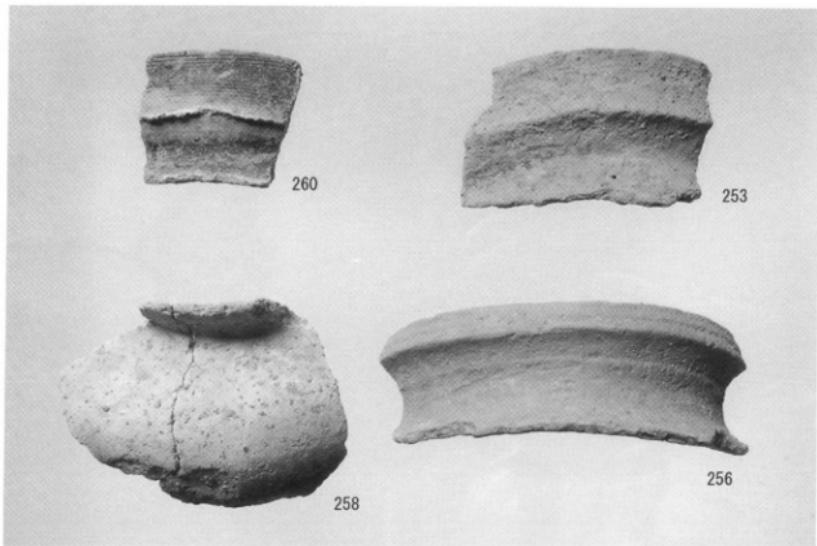
S102 出土遺物



土坑出土遺物

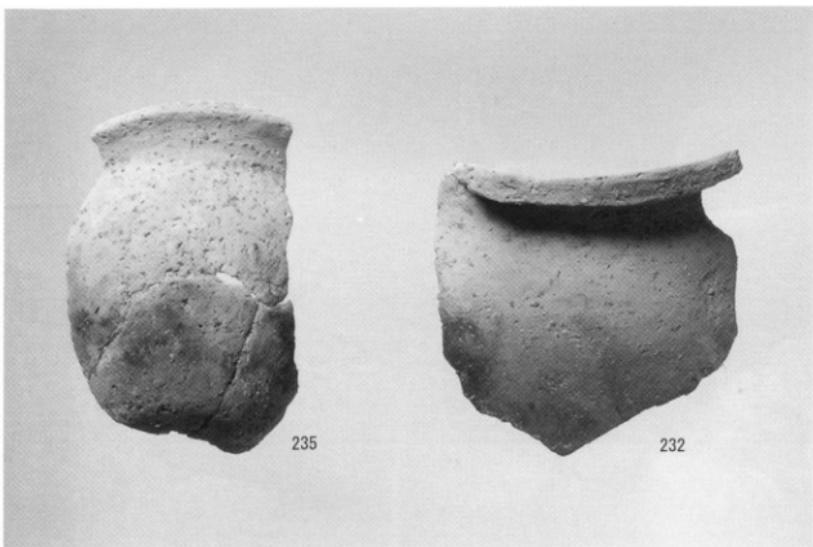


土坑出土遺物

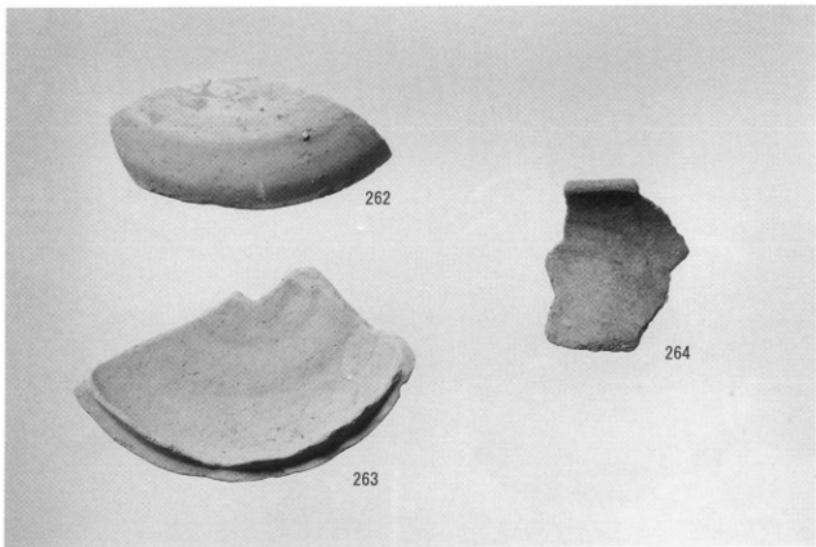


土坑出土遺物

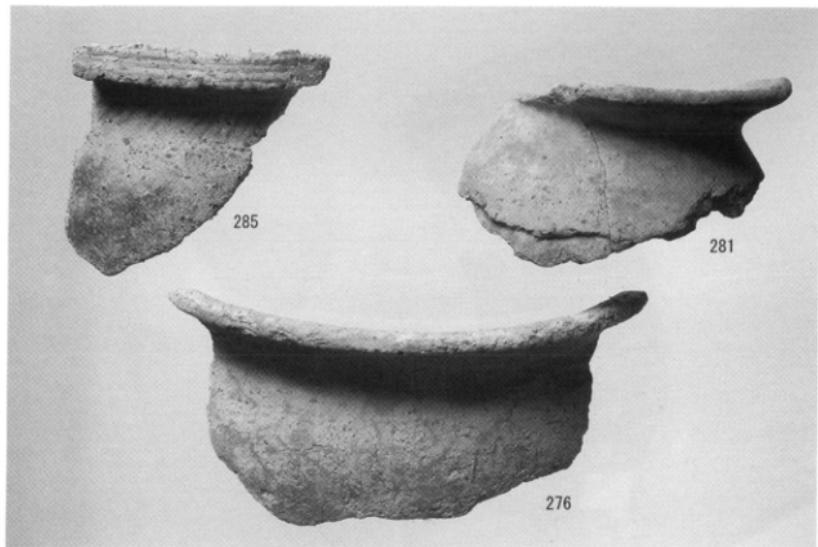
图版 41 中小路遗迹 6 区



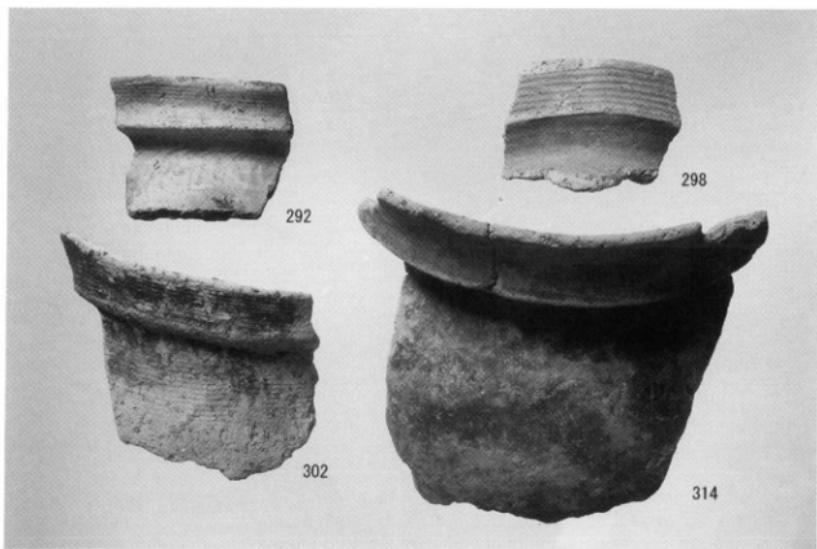
土坑出土遗物



土坑出土遗物

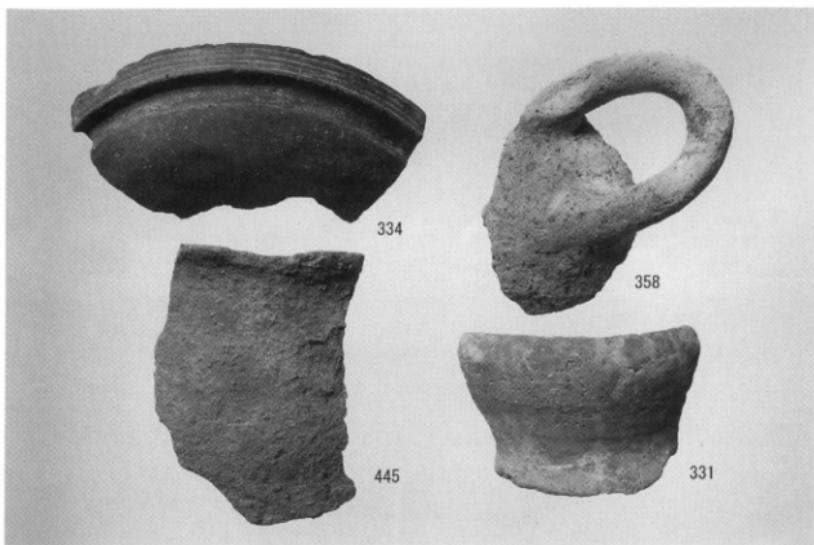


包含層出土遺物（弥生土器）

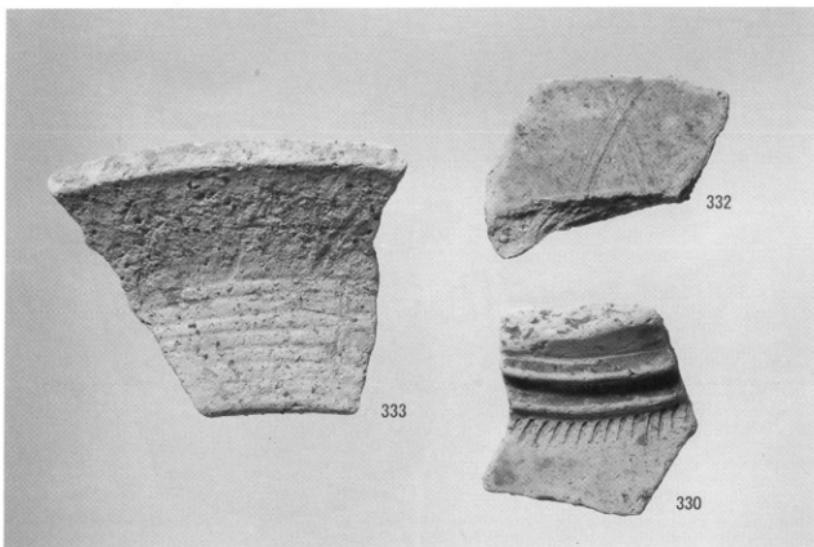


包含層出土遺物（弥生土器）

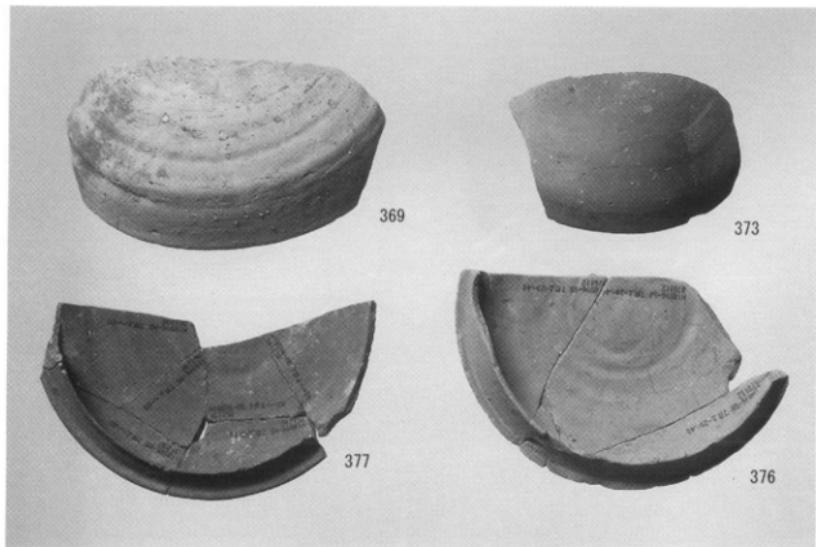
图版 43 中小路遗跡 6 区



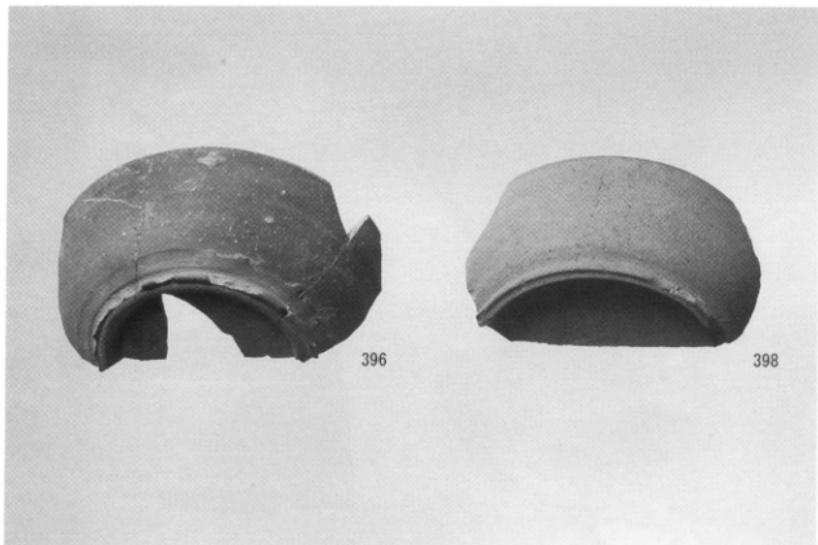
包含層出土遺物（弥生土器）



包含層出土遺物（弥生土器）

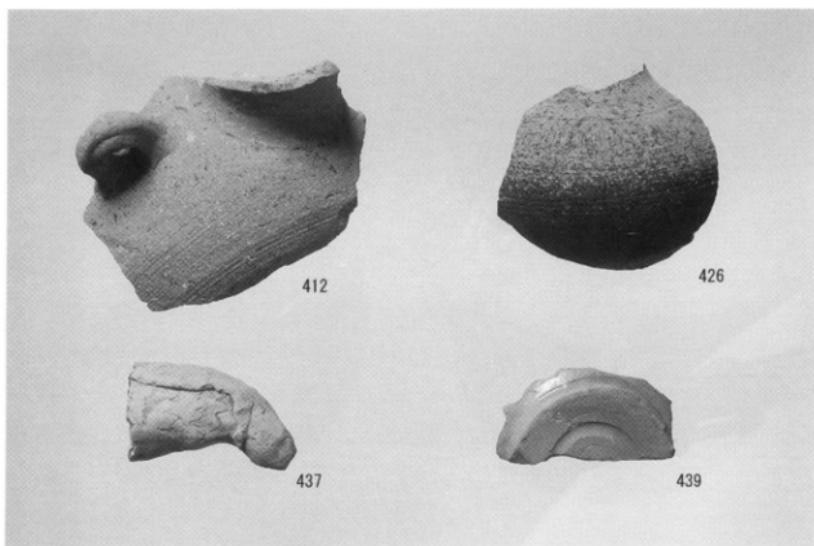


包含層出土遺物（須恵器）

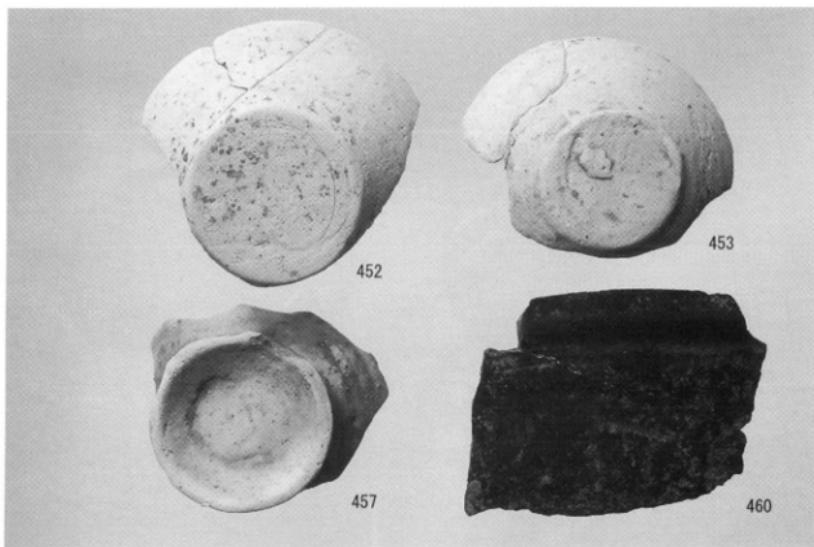


包含層出土遺物（須恵器）

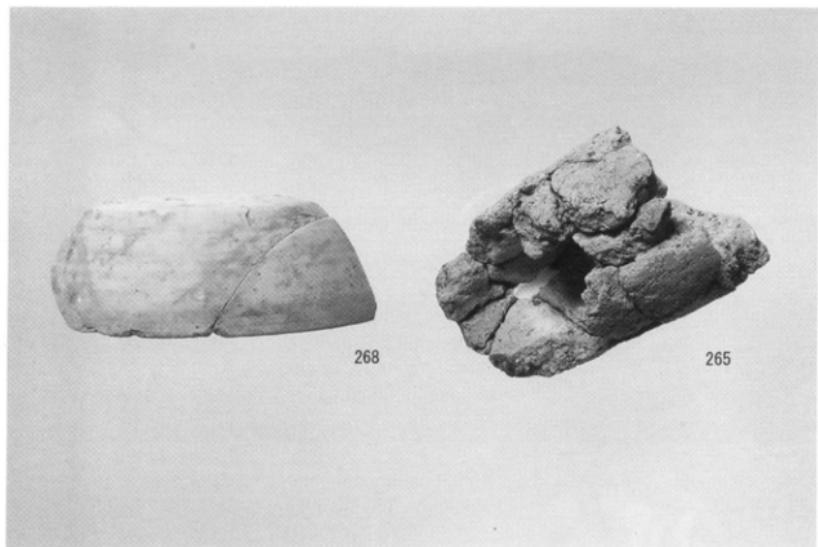
図版 45 中小路遺跡 6 区



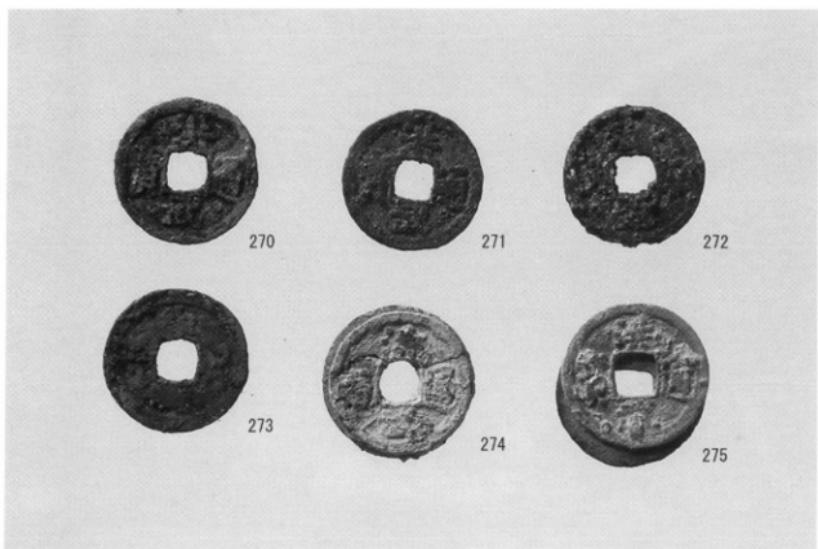
包含層出土遺物（須恵器）



包含層出土遺物（土師器等）



SK02 出土遺物



SK09 出土遺物

図版 47 羽場遺跡 1 区



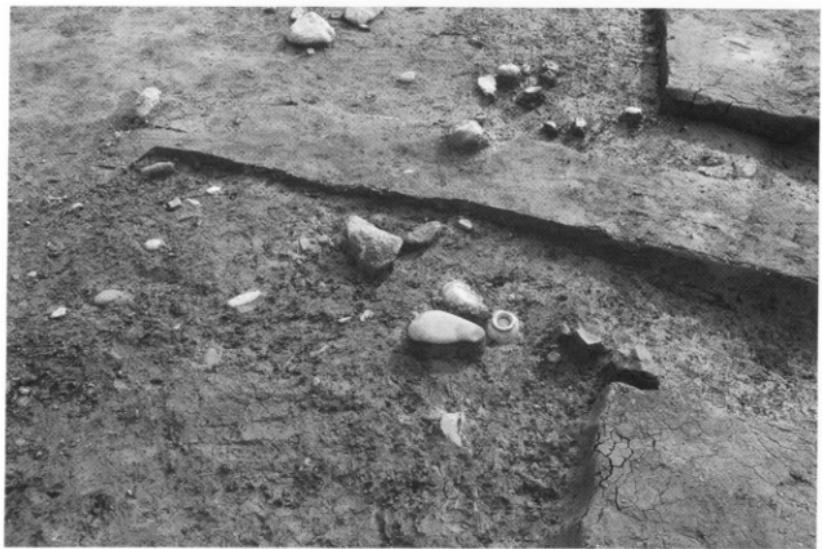
1 区全景（東から）



1 区全景（南から）



SK01 遺物検出状況（北から）



石列遺物検出状況（北から）

図版 49 羽場遺跡 1 区



1 区土層堆積状況
(南から)



SK01 完掘状況
(北から)



SK04 土層堆積状況
(東から)

SK04 完掘状況
(東から)



落込み土層堆積状況
(西から)



落込み遺物出土状況
(西から)



図版 51 羽場遺跡 1 区



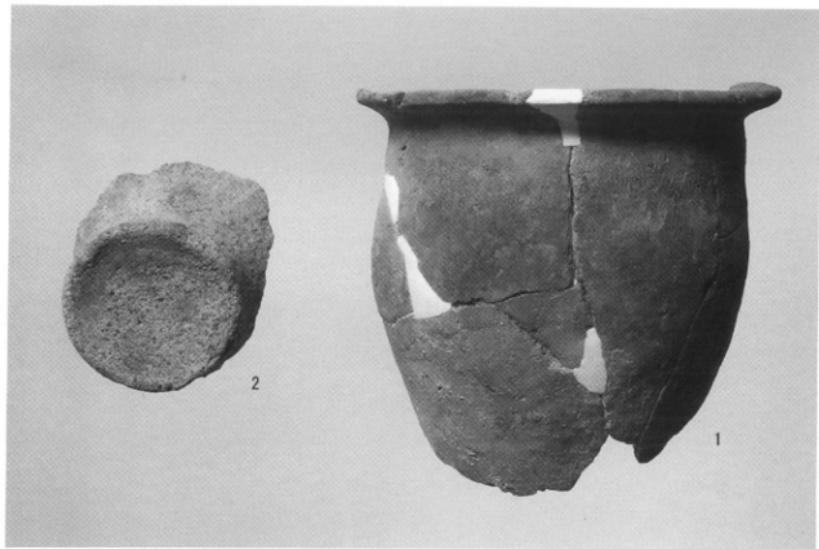
石列検出状況
(西から)



石列遺物出土状況
(西から)



落込み検出状況
(南から)



SK01 出土遺物

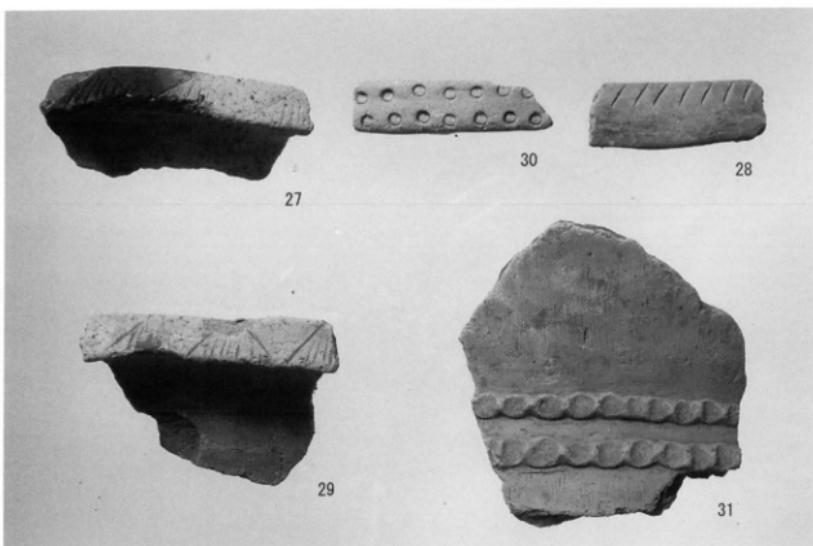


SK01 出土遺物

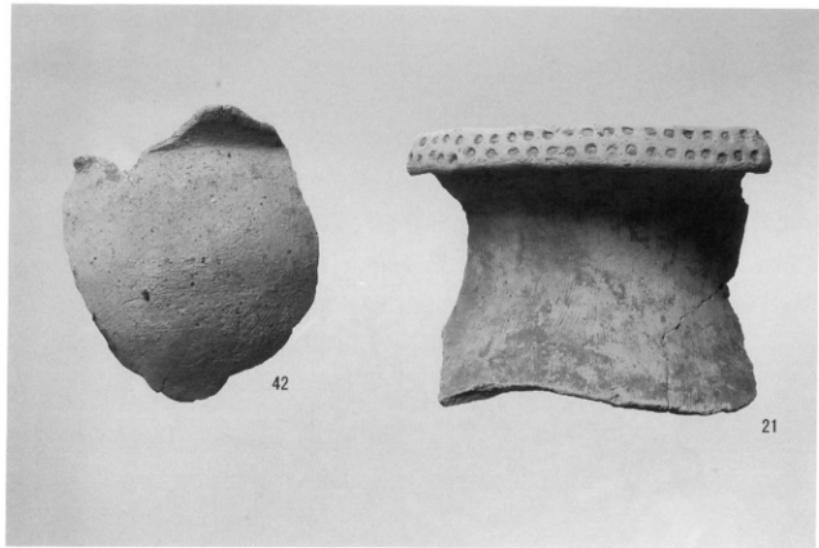
図版 53 羽場遺跡 1 区



SK04 出土遺物



包含層出土遺物（弥生土器）



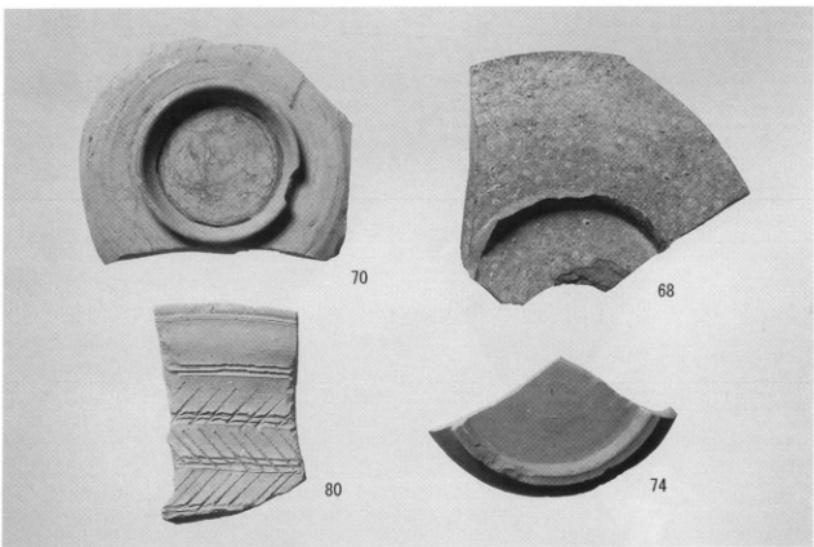
包含層出土遺物（弥生土器）



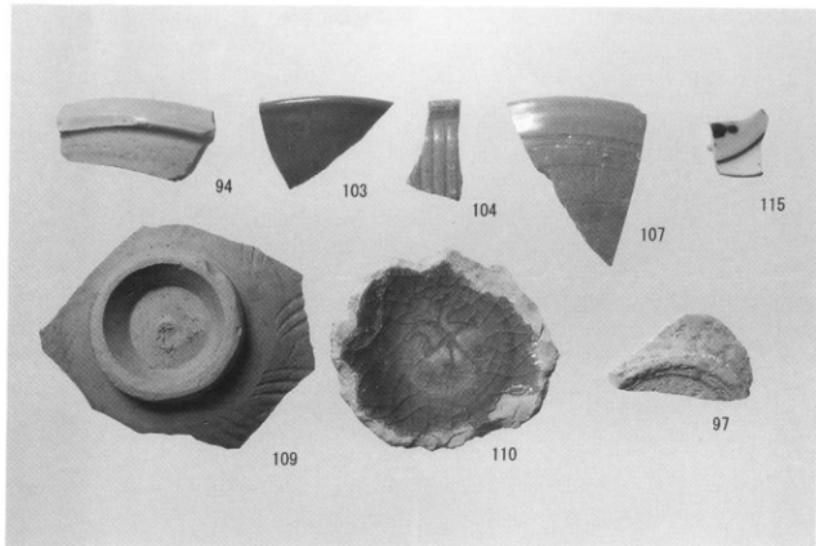
包含層出土遺物（弥生土器）



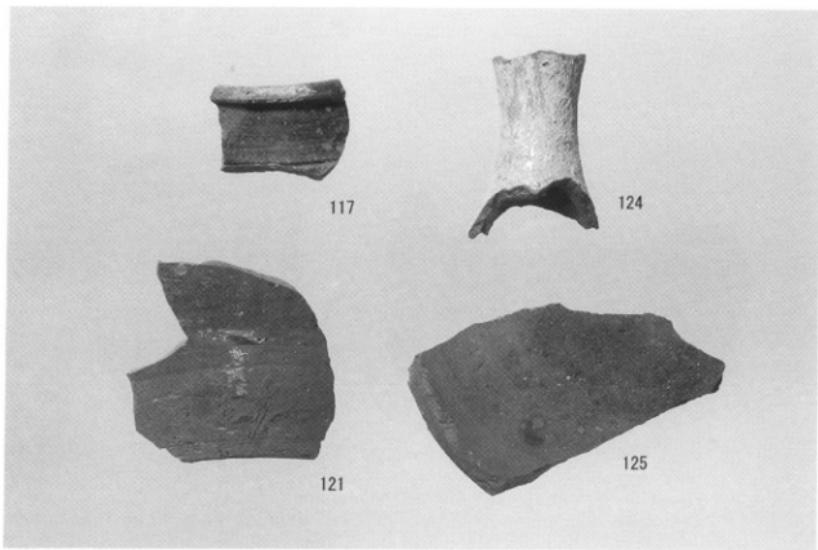
包含層出土遺物（須恵器 壺）



包含層出土遺物（須恵器）

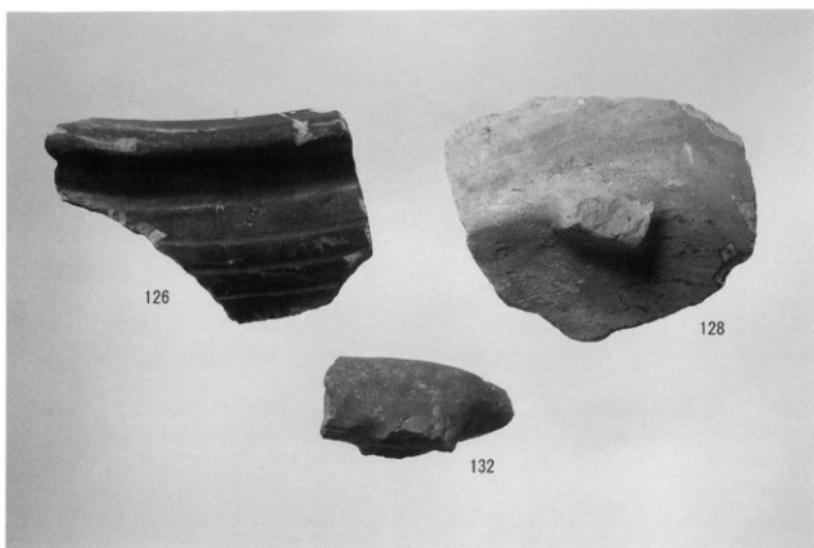


包含層出土遺物（陶磁器）

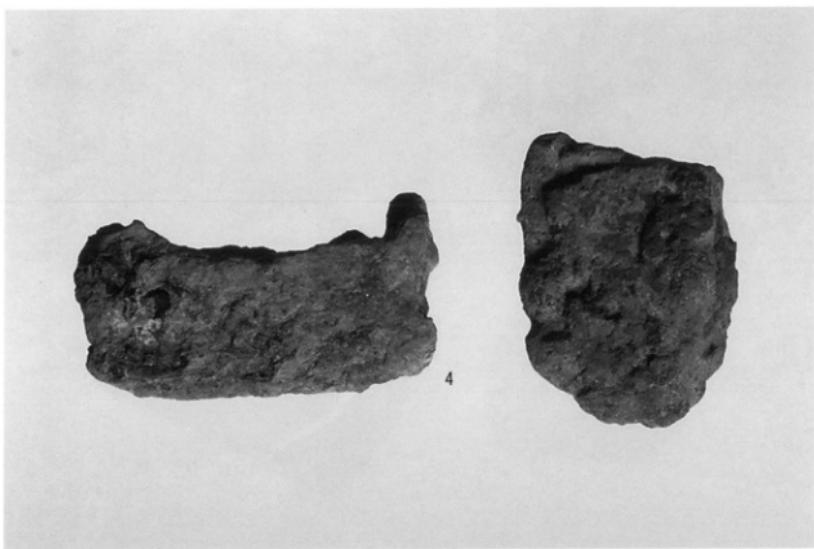


包含層出土遺物（陶磁器）

図版 57 羽場遺跡 1 区



包含層出土遺物（火鉢・土馬）



鑄造鉄斧



2A 区全景（北西から）



2A 区遺構完掘状況（東から）

写真図版 59 羽場遺跡 2A 区



2A 区北壁土層堆積状況



SX1 遺物出土状況



SX1 完掘状況

SX2
遺物出土状況



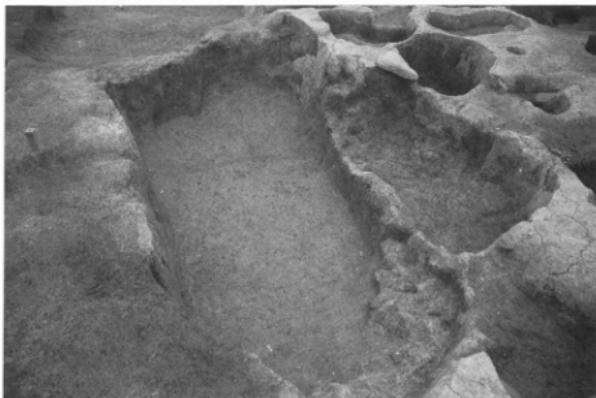
SK147 ~ 148
遺物出土状況



SK147
遺物出土状況



写真図版 61 羽場遺跡 2A 区



SK147 ~ 149 完掘状況



SK147 土層堆積状況



SK148 土層堆積状況



SX3 土層堆積狀況



SX3 完掘状況



SX4 完掘状況

写真図版 63 羽場遺跡 2A 区



SX5・SK83～SK85
完掘状況①



SX5・SK83～SK85
完掘状況②



SD2 遺物出土状況



SD2 完掘状況



SD5 完掘状況



SD4・SD6 完掘状況

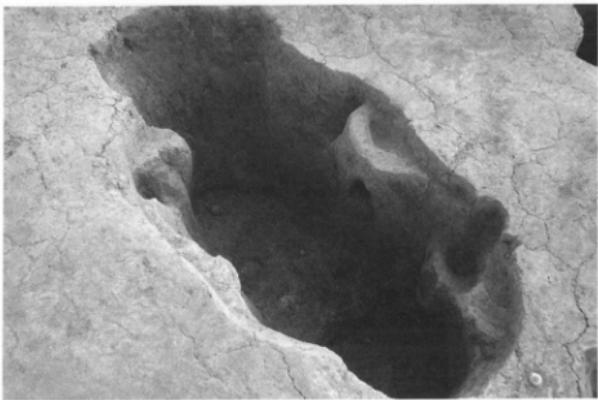
写真図版 65 羽場遺跡 2A 区



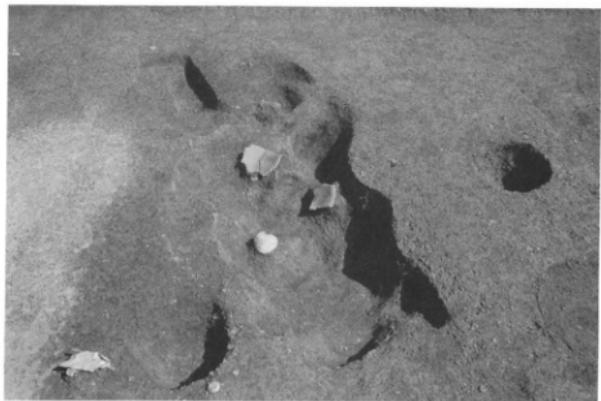
SD15 遺物出土状況



SD15 完掘状況



SK1 完掘状況



SK17・SK18 完掘状況



SK19 完掘状況



SK23・SK24 完掘状況

写真図版 67 羽場遺跡 2A 区



SK25 遺物出土状況



SK33 遺物出土状況



SK33 完掘状況



SK45 完掘状況

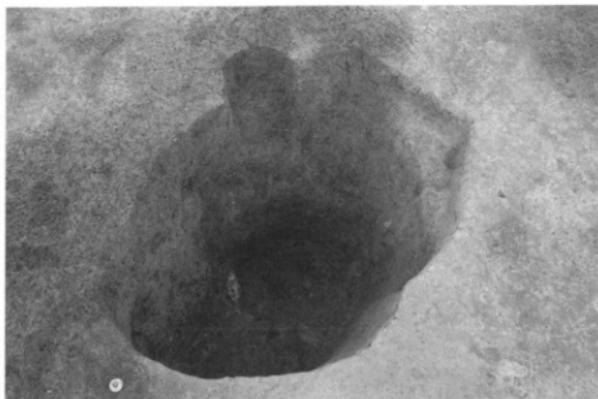


SK51・SK52 完掘状況



SK66 完掘状況

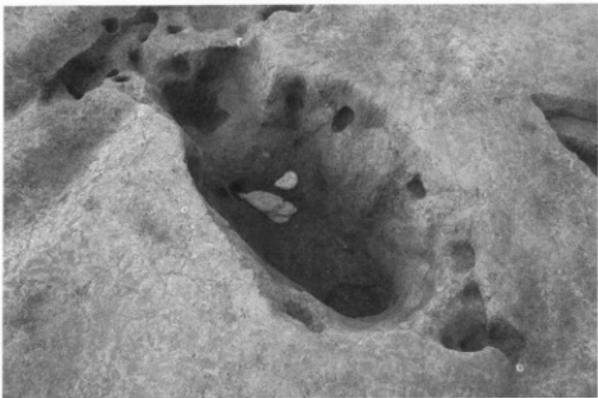
写真図版 69 羽場遺跡 2A 区



SK75 完掘状況



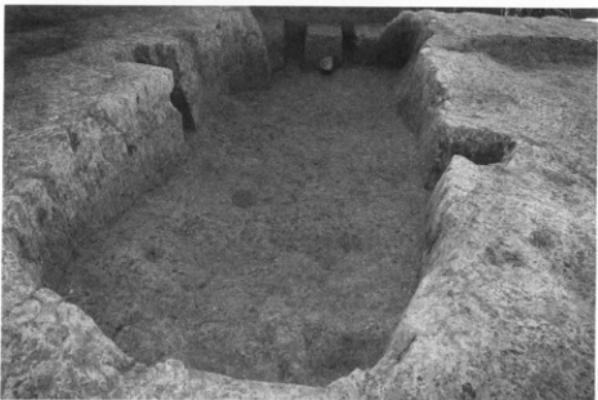
SK76 完掘状況



SK78 完掘状況



SK79 完掘状況



SK81 完掘状況



SK81 土層堆積状況

写真図版 71 羽場遺跡 2A 区



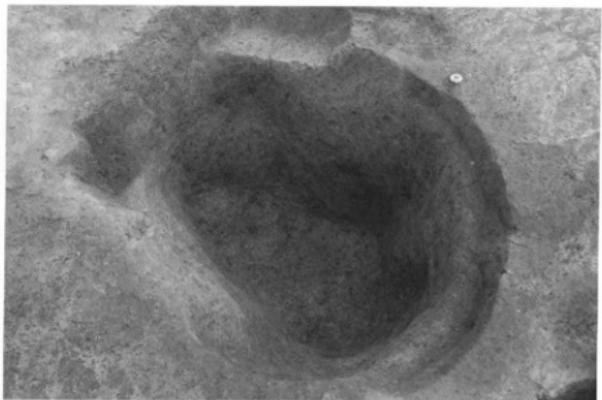
SK87 完掘状況



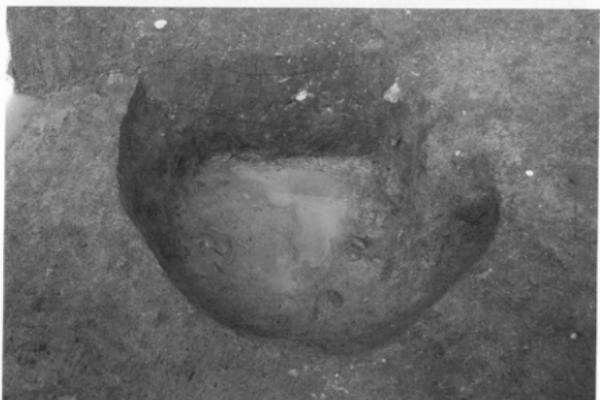
SK87 土層堆積状況



SK96 土層堆積状況



SK104 完掘状況



SK152 完掘状況



SK156 遺物出土状況

写真図版 73 羽場遺跡 2B 区



2B 区全景（北から）



2B 区南半遺構完掘状況（東から）



2B 区西壁土層堆積状況



SK108 完掘状況



SK110 遺物出土状況

写真図版 75 羽場遺跡 2B 区



SK125 遺物出土状況



SK125 土層堆積状況



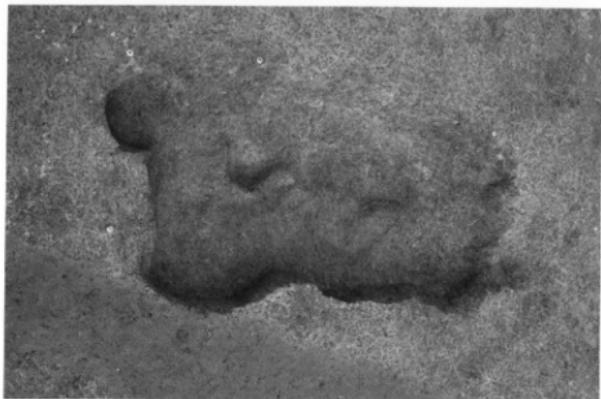
SK126 遺物出土状況



SK128 完掘状況



SK132 遺物出土状況



SK132 完掘状況

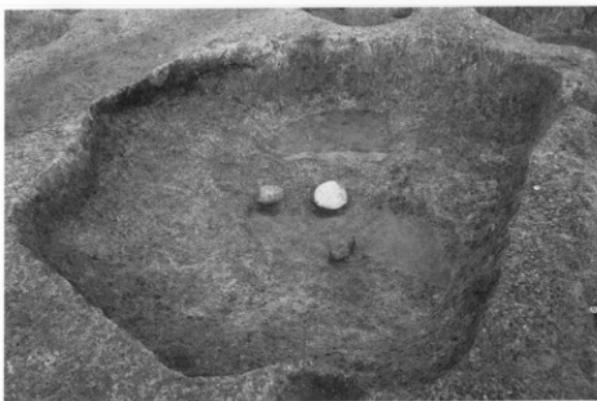
写真図版 77 羽場遺跡 2B 区



SK136 遺物出土状況



SK136 土層堆積状況



SK136 完掘状況



2C 区第1遺構面（奈良～平安）完掘状況（北西から）



2C 区第1遺構面（奈良～平安）完掘（西から）



2C 区第 2 遺構面（弥生）完掘状況（北から）



2C 区第 2 遺構面（弥生）完掘状況（南から）



SD11・SD12
遺物出土状況



SD11・SD12 完掘状況(東から)

写真図版 81 羽場遺跡 2C 区



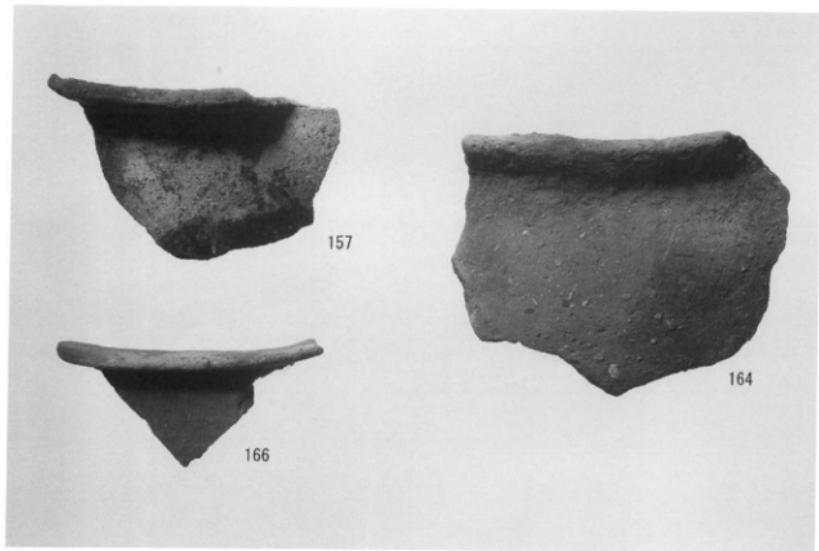
SD11・SD12 完掘状況
(西から)



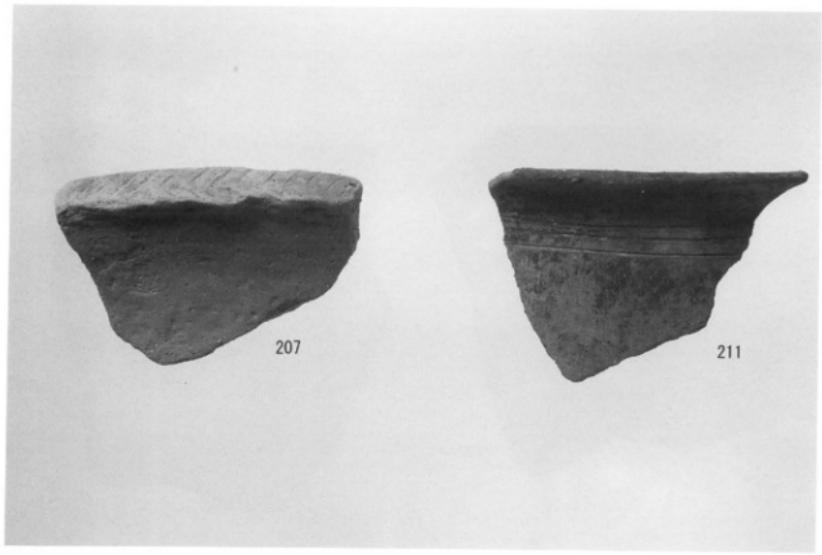
SD16 完掘状況



SX10 完掘状況



SK98・SK102 出土遺物

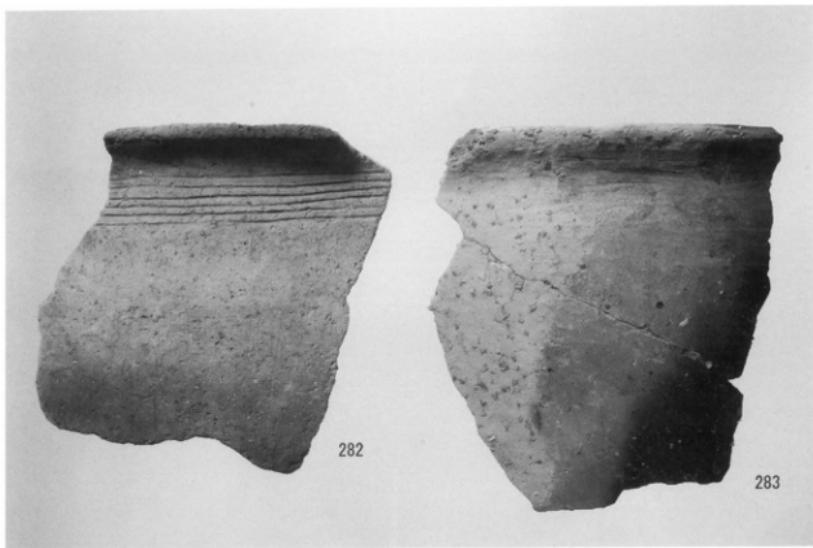


SX3 出土遺物

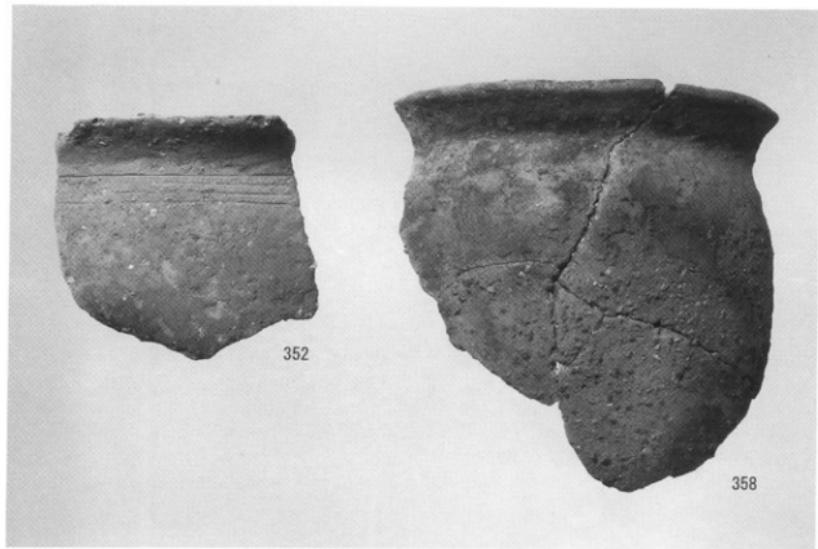
図版 83 羽場遺跡 2 区



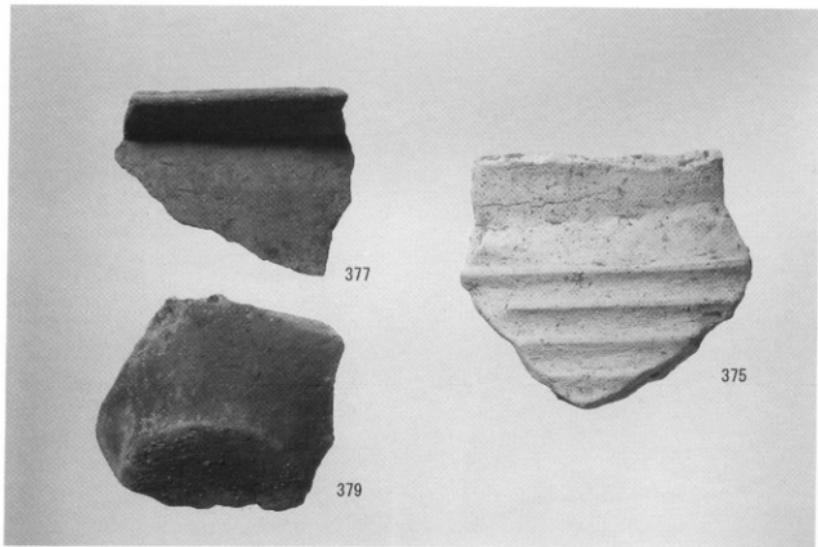
SX4・SD6 出土遺物



SK96 出土遺物

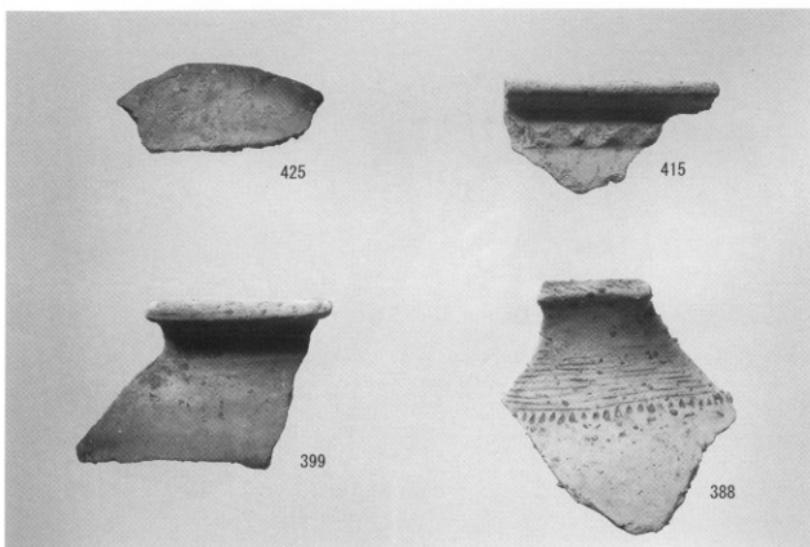


SD2 出土遺物

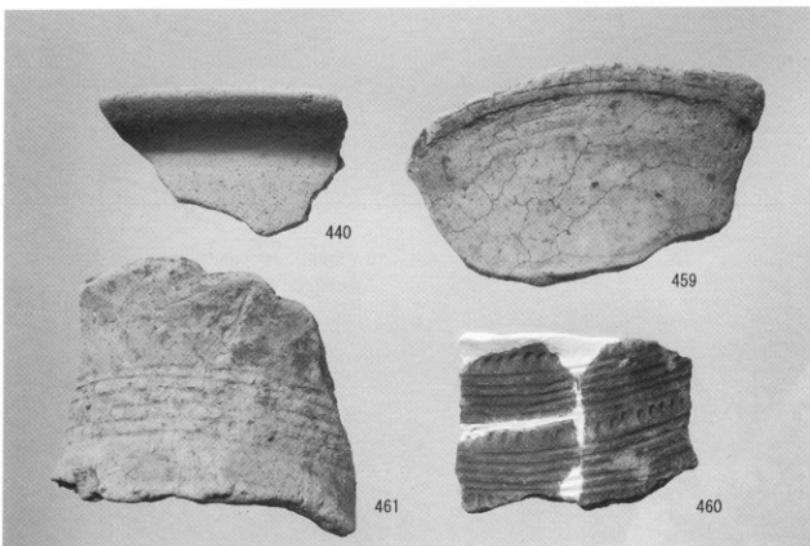


SK25 出土遺物

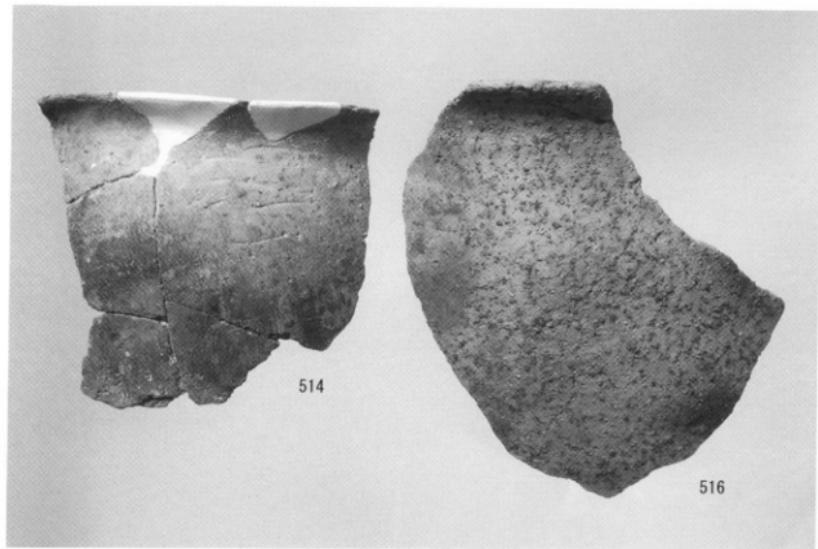
图版 85 羽场遗迹 2 区



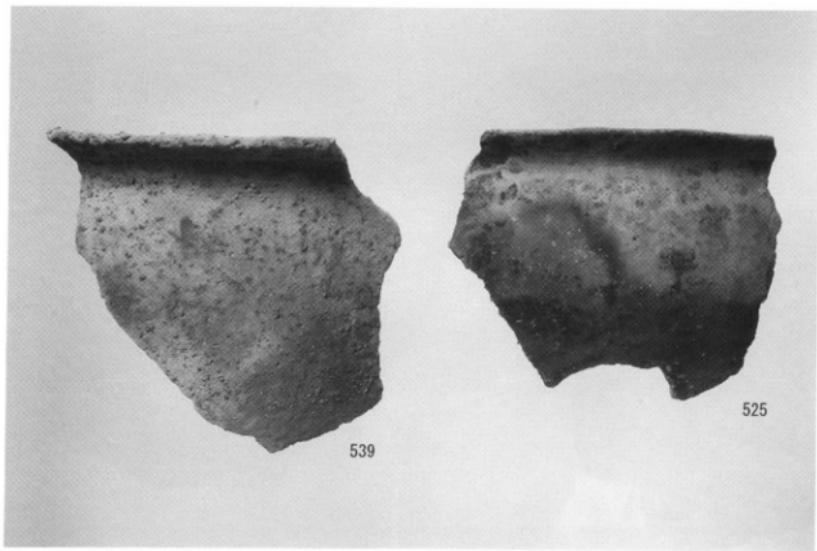
SK146 出土遺物①



SK146 出土遺物②

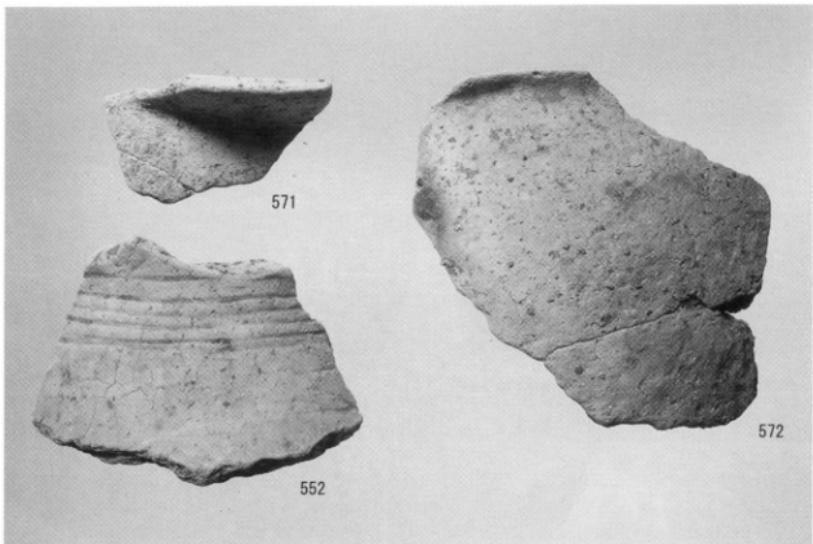


SK147 出土遺物①

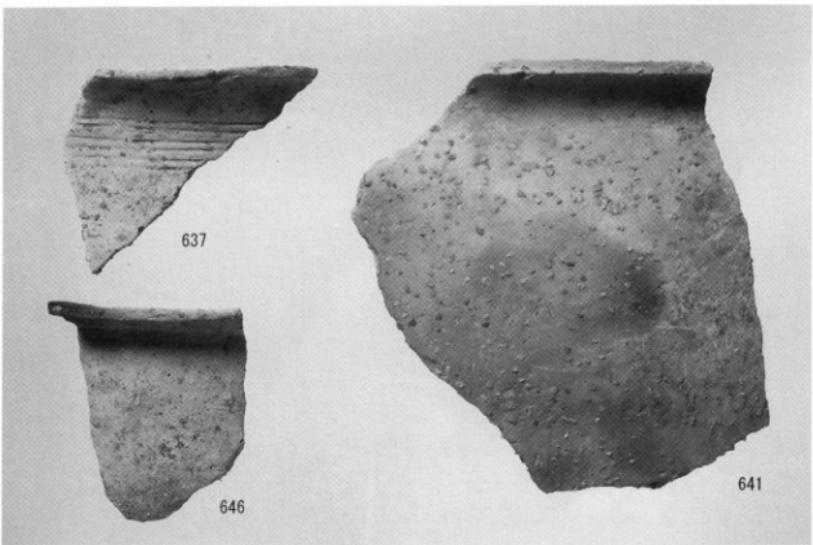


SK147 出土遺物②

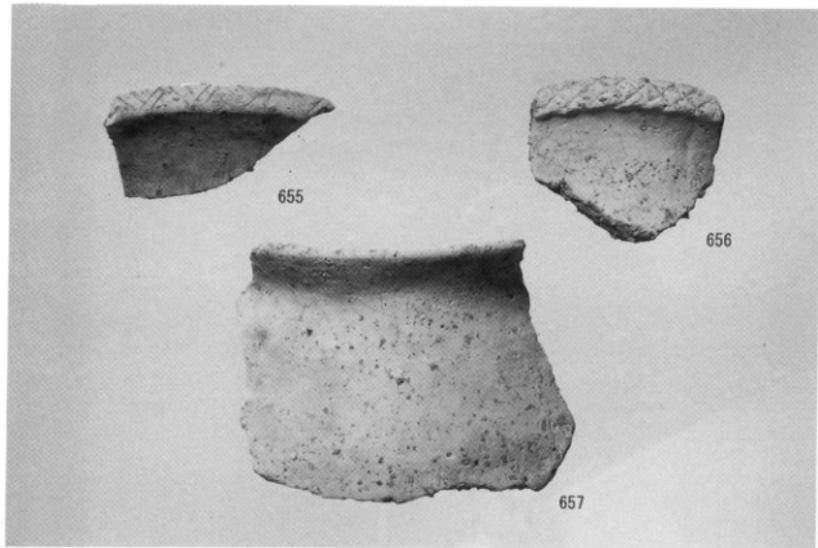
图版 87 羽场遗迹 2 区



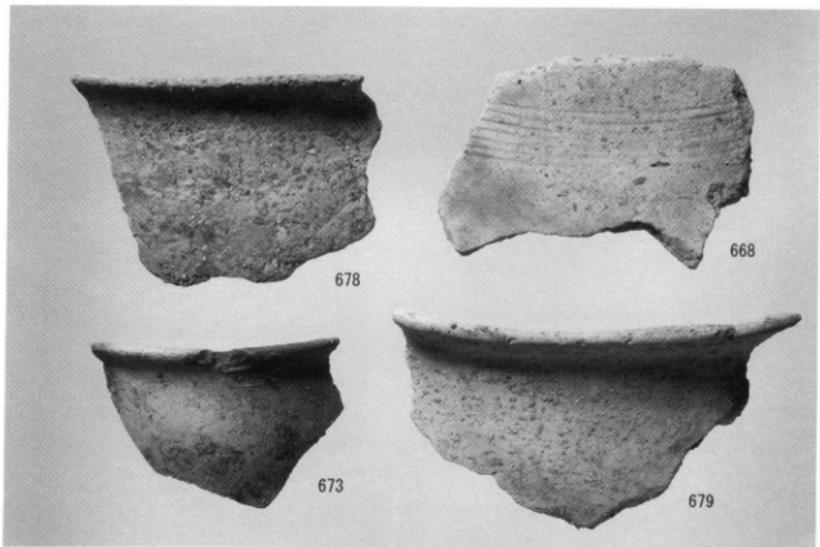
SK148 · SD1 出土遺物



SK137 · SK127 出土遺物

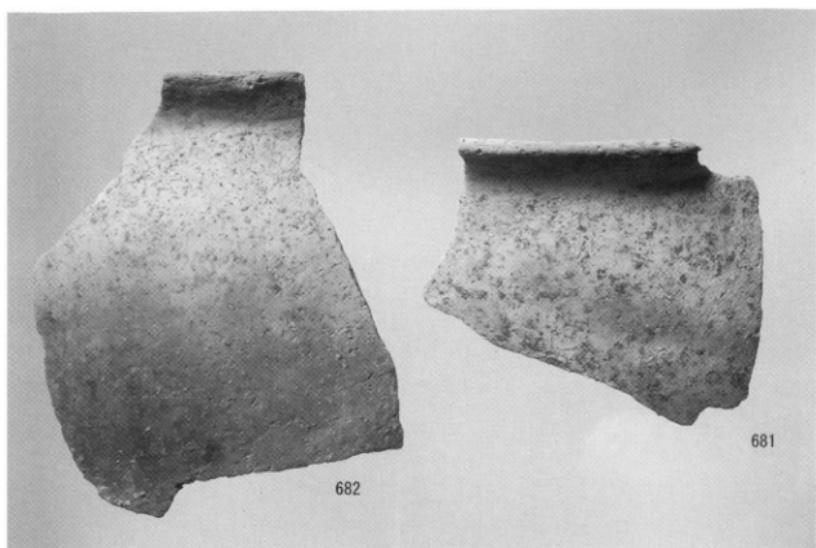


SK124 出土遺物

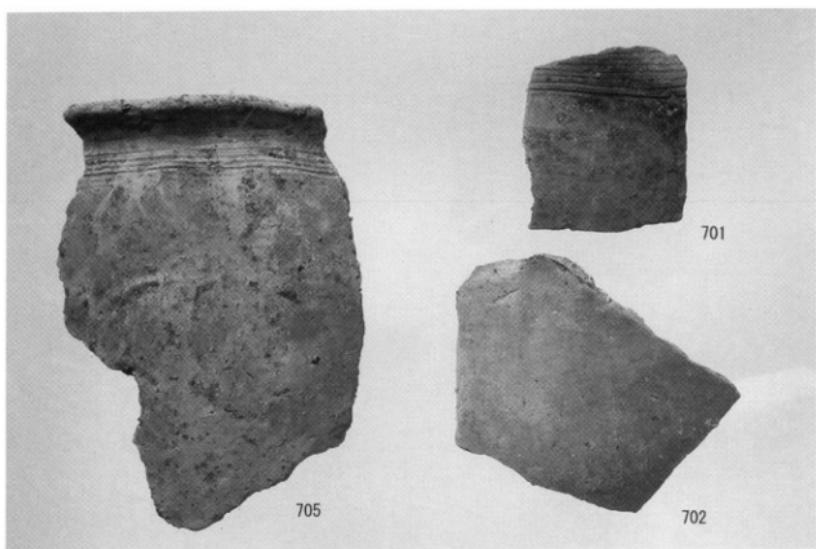


SK125 出土遺物①

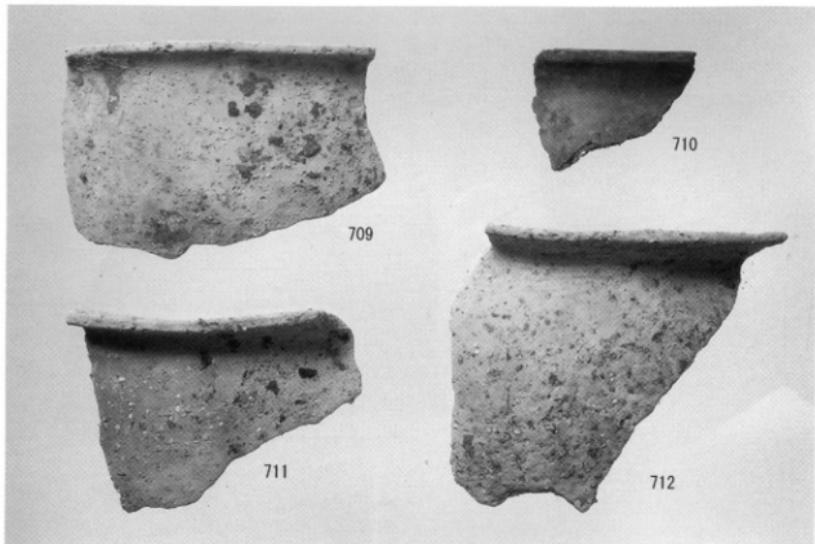
図版 89 羽場遺跡 2 区



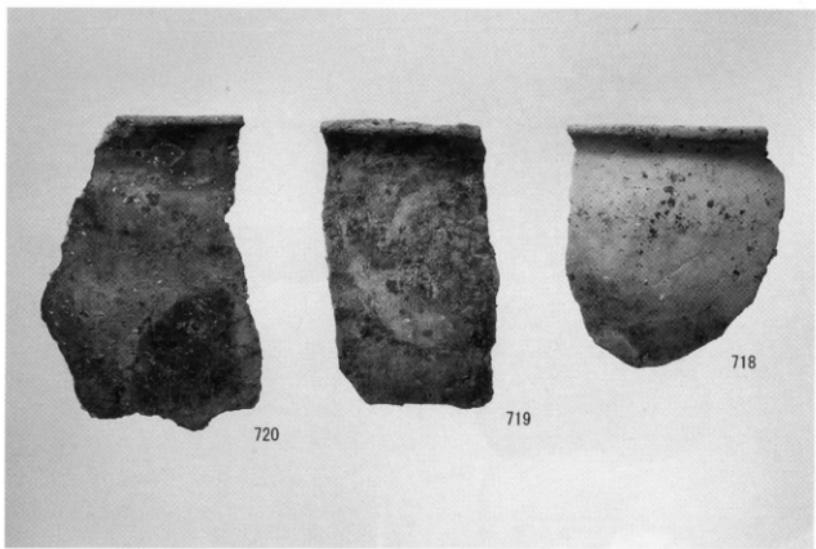
SK125 出土遺物②



SK136 出土遺物①

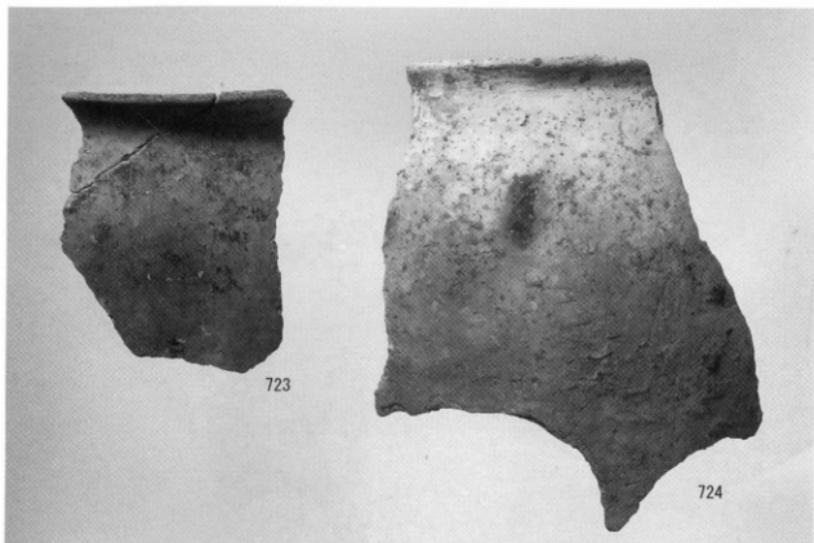


SK136 出土遺物②

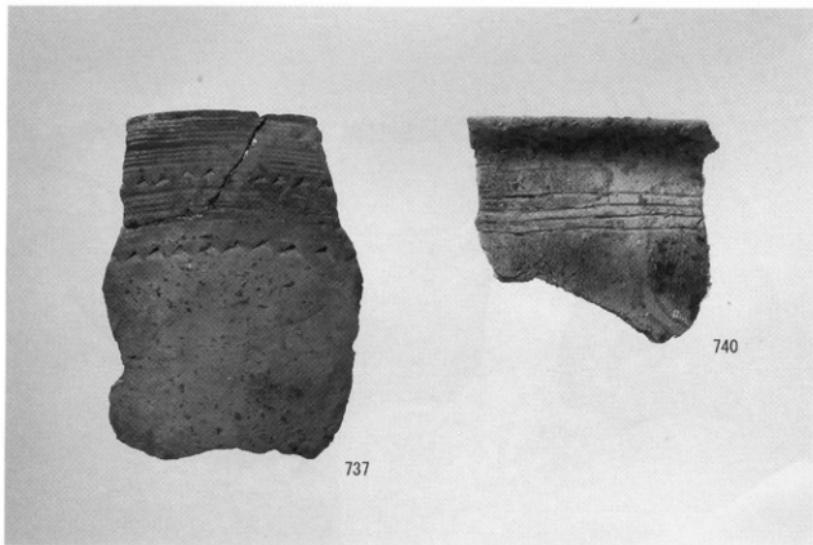


SK110 出土遺物①

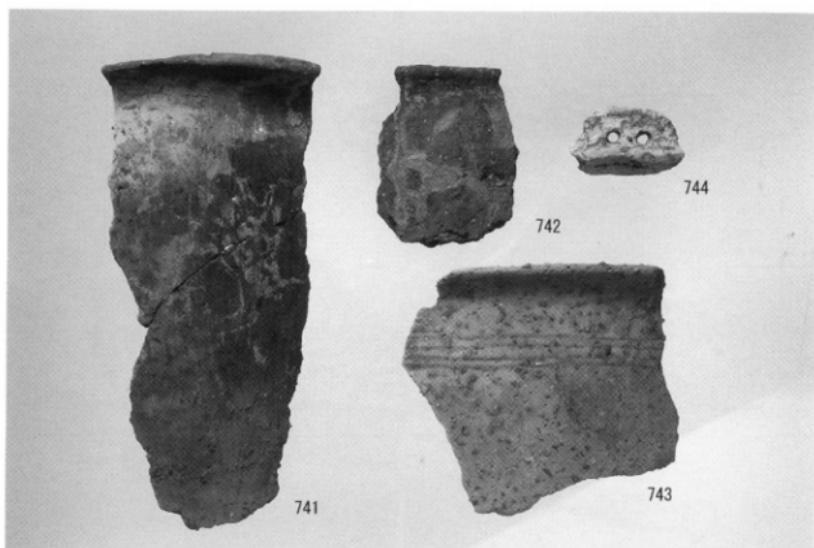
図版 91 羽場遺跡 2 区



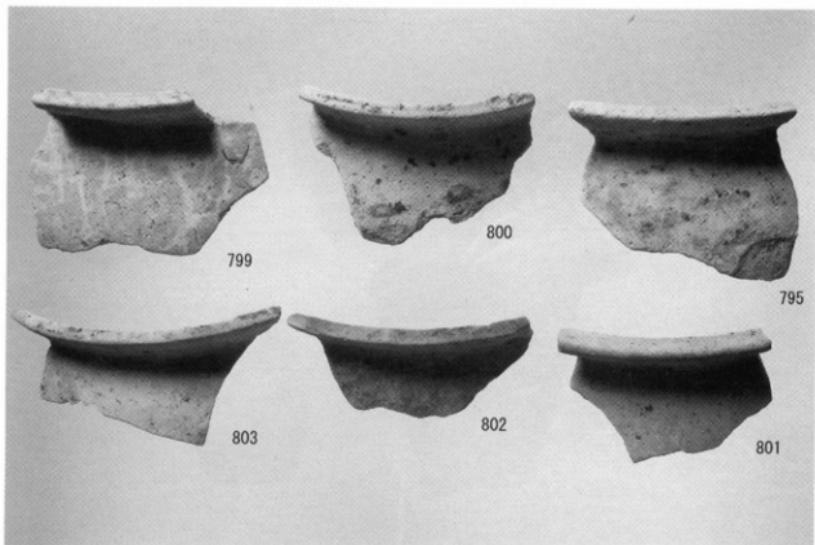
SK110 出土遺物②



SK107・SK108 出土遺物

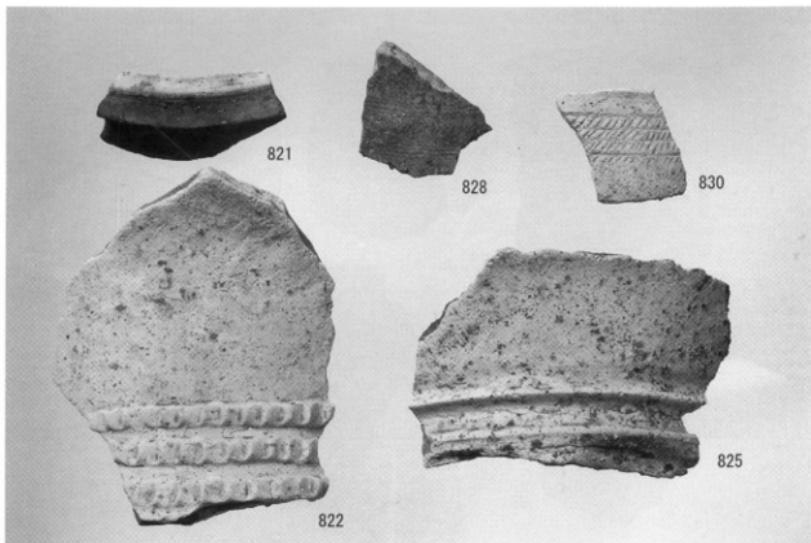


SK108 出土遺物

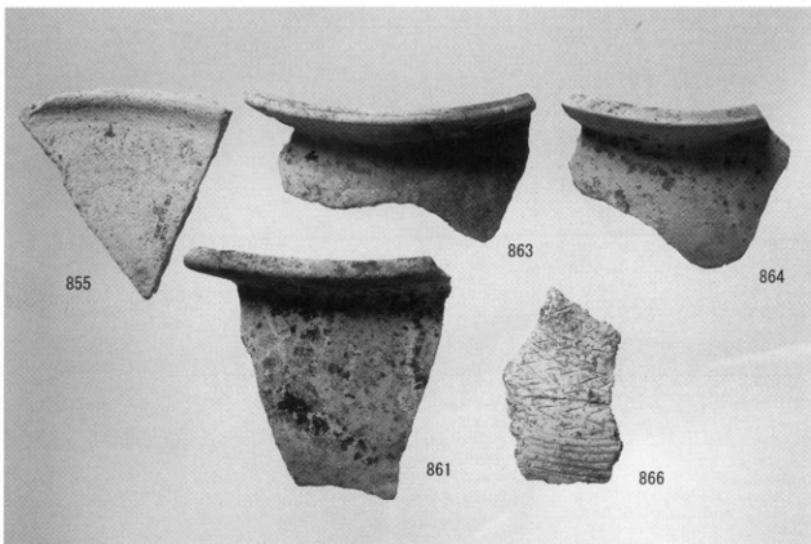


SD11 出土遺物①

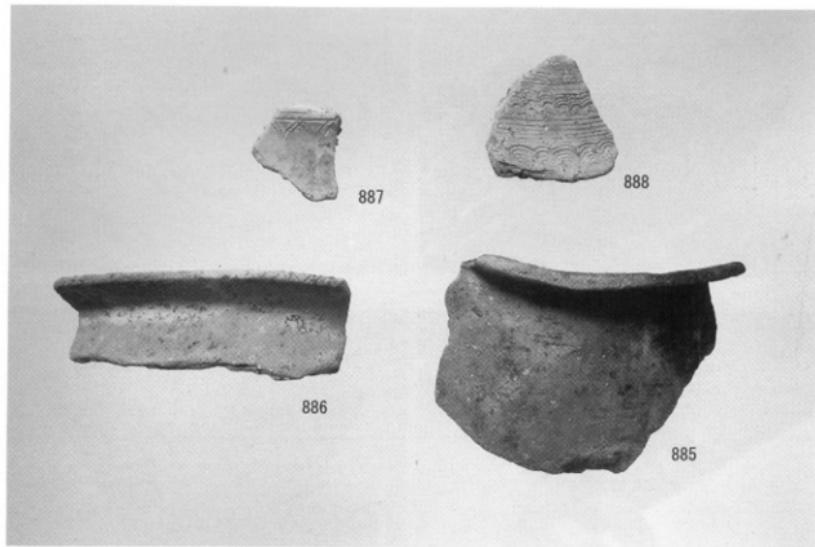
図版 93 羽場遺跡 2 区



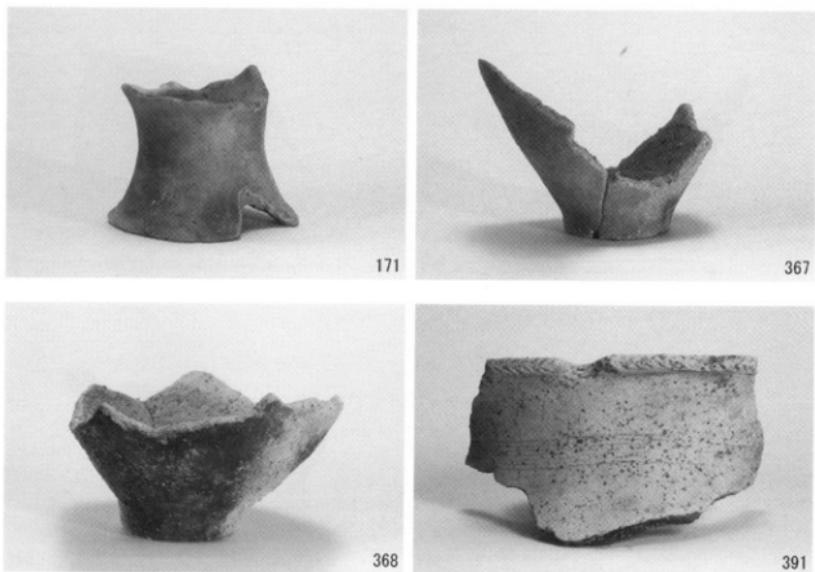
SD11 出土遺物②



SD12 出土遺物



SX11 出土遺物



遺構出土遺物

図版 95 羽場遺跡 2 区



480



485



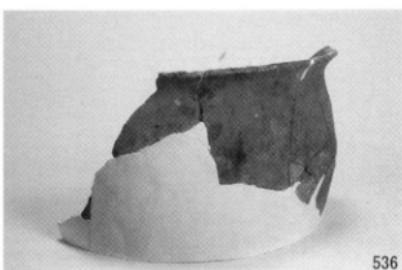
492



533



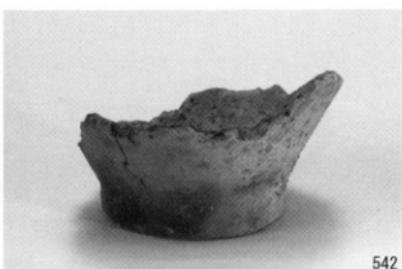
535



536



541



542

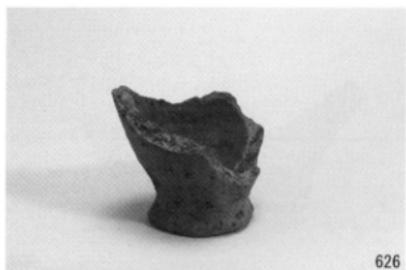
遺構出土遺物



543



623



626



645



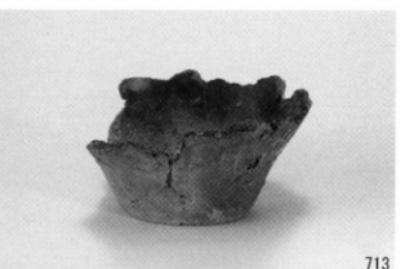
693



694



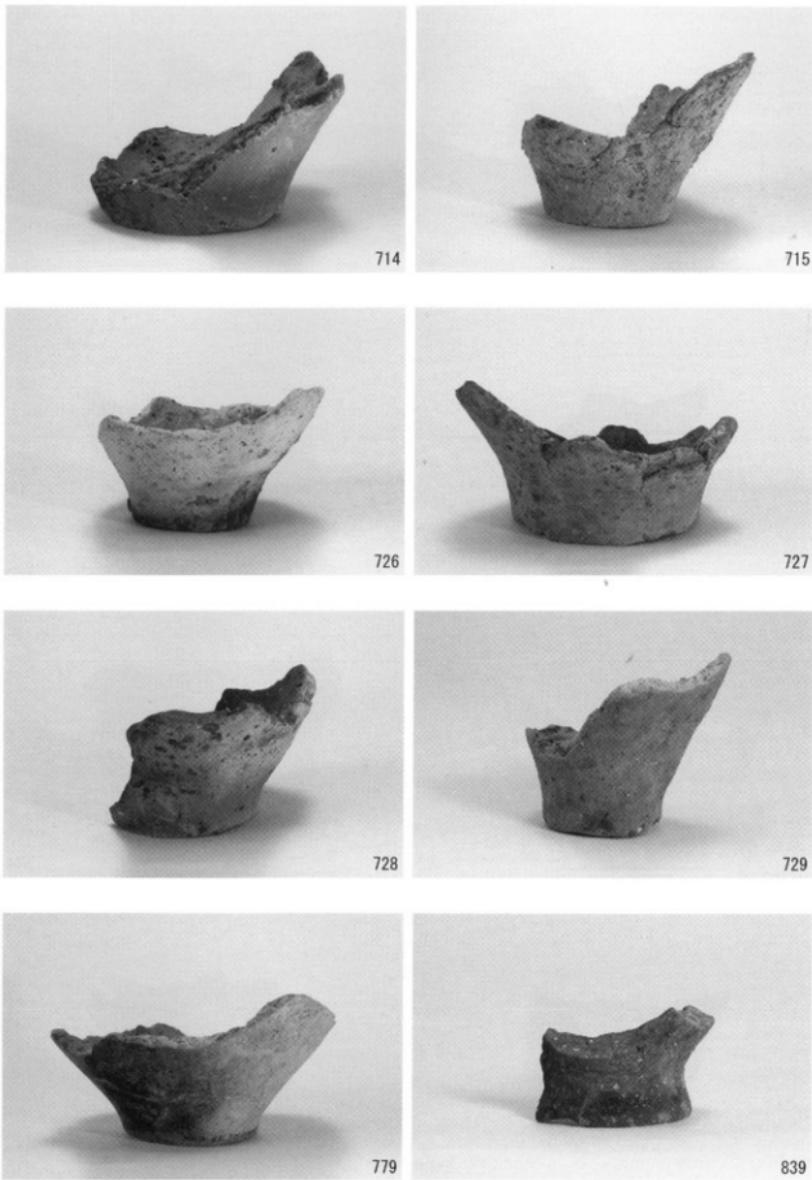
696



713

遺構出土遺物

図版 97 羽場遺跡 2 区



遺構出土遺物



840



841



842



843



846



849



851

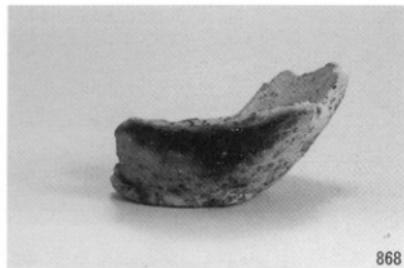


852

図版 99 羽場遺跡 2 区



853



868



871



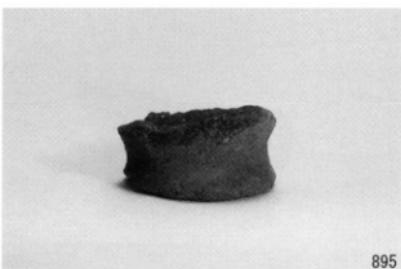
884



891



892

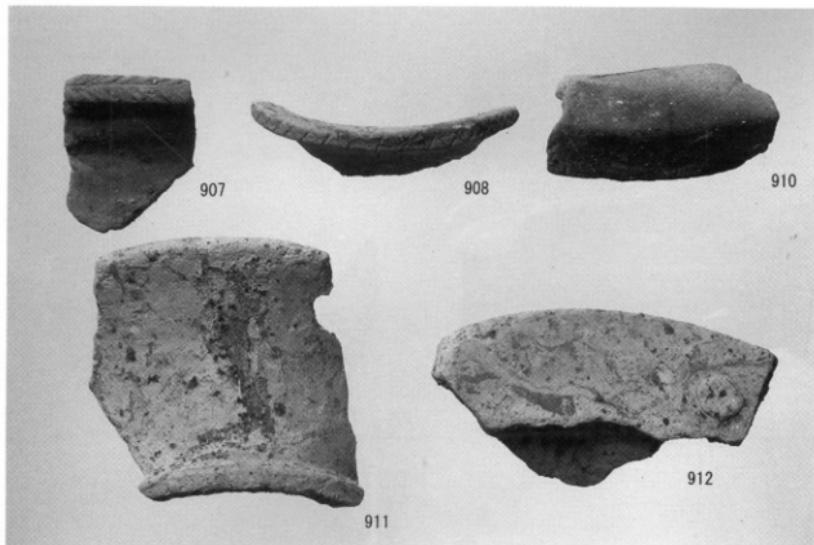


895

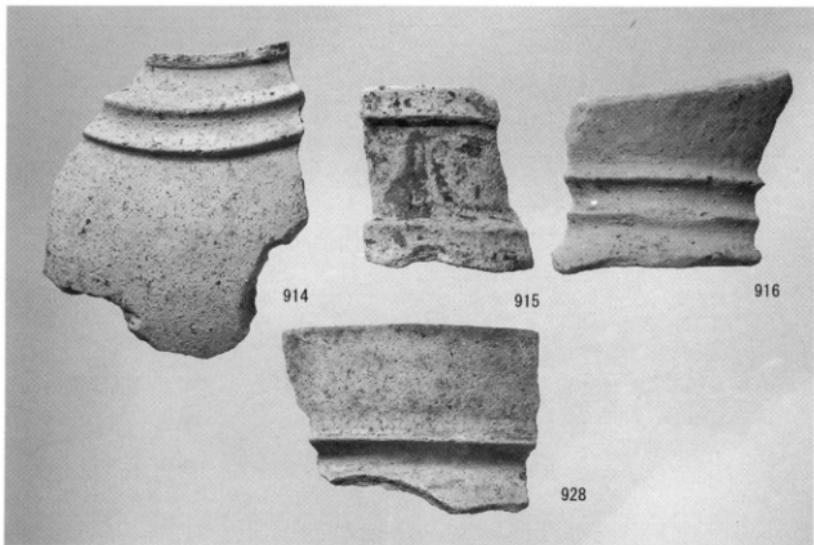


896

遺構出土遺物

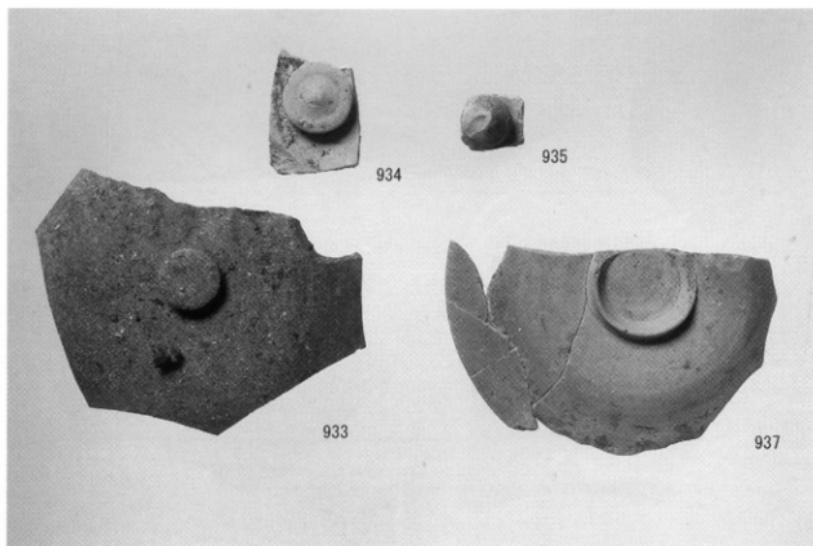


遺構外出土遺物（弥生土器）

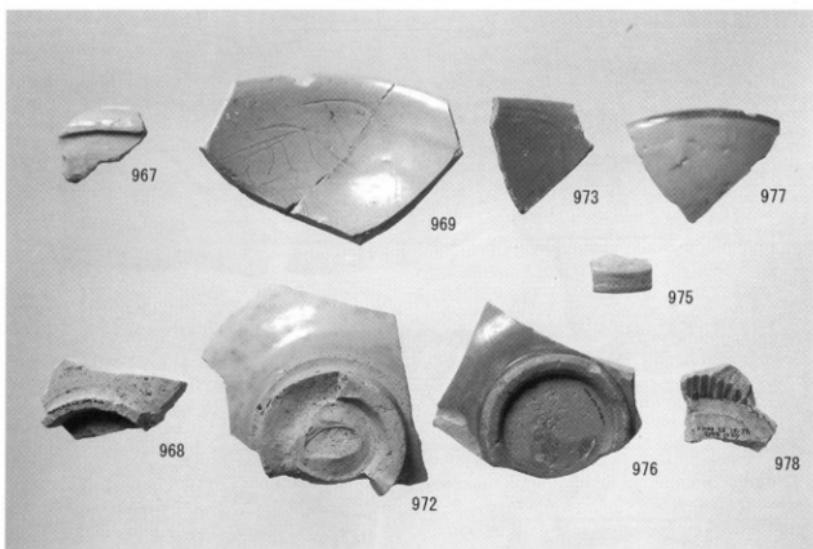


遺構外出土遺物（弥生土器）

図版 101 羽場遺跡 2 区



遺構外出土遺物（須恵器）



遺構外出土遺物（陶磁器）

報告書抄録

ふりがな	なかしょうじいせき・はばいせき							
書名	中小路遺跡・羽場遺跡							
副書名	一般県道白上横田線改良工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	長澤和幸、松本美樹、宇津栄一、大野芳典、丹羽野裕、池澤俊一、渡邊正巳、中村唯史							
編集機関	益田市教育委員会							
所在地	〒698-8650 島根県益田市常盤町1番1号 Tel.0856-31-0623							
発行年月日	2012年3月22日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中小路遺跡	島根県 益田市 安富町	32204	Q 347	34° 38' 29"	131° 47' 50"	20050913～ 20080115	4,786	記録 保存 調査
羽場遺跡	島根県 益田市 安富町	32204	Q 150	34° 38' 33"	131° 48' 12"	20070611～ 20081207	1,137	記録 保存 調査
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
中小路遺跡	集落跡	弥生・ 奈良～ 平安・ 中世	竪穴建物跡、 掘立柱建物跡、木棺墓、 土坑、 ピット群、溝状遺構、 井戸跡		弥生土器 石器 須恵器 上師器 陶磁器			
羽場遺跡	集落跡	弥生・ 奈良～ 平安・ 中世	溝状遺構、 掘立柱建物跡、石列、 大型土坑		弥生土器 石器 須恵器 土師器 陶磁器			

中小路遺跡・羽場遺跡

—一般県道白上横田線改良工事
に伴う発掘調査報告書—

平成 24 年 3 月発行

編集・発行 益田市教育委員会
島根県益田市常盤町1番1号

印 刷 富士印刷株式会社
島根県益田市あけぼの東町8-13
